

武士見ゆ。今の厚東村の持世寺建武三年文書に厚東郡字信郷とあり、大内家聖書には厚東・厚狭二郡の外に吉田郡も見ゆ。近世に至り寛文中厚狭郡に復す。

コト—洪東面

朝鮮忠清南道洪城郡の東部。南は長谷面に、西は龜項面・洪州面に、北は金馬面に隣接し、東は禮山郡に接す。東部・中部・西部に何れも南北に走る低山性の丘陵ありて、其間低地を成す。西方の低地よりは推橋川發源して北に流れ、灌漑の便を得て耕地拓く。三等道路通ずるのみなるも、朝鮮京南鐵道西隣洪城面を走るを以て交通不便ならず。

コト—紅頭嶼

臺灣臺東廳臺東支廳に屬する島。臺灣の東南方の海上、即ち臺東の南南東四四度の海上にあり。紅頭嶼と小紅頭嶼の二島よりなる。紅頭嶼は、紅頭嶼は東經一二一度三〇分〇八秒より一二一度三六分二二秒まで、北緯二二度〇〇分〇六秒より二二度〇五分七秒まで、小紅頭嶼は東經一二一度三六分一八秒より一二一度三七分一四秒まで、北緯二二度五六分二四秒より二二度五七分三〇秒まで。面積は紅頭嶼は瀟湖時四五・七方軒にて周圍三八・四軒、小紅頭嶼は瀟湖瀟湖時一・五七方軒、周圍四・九四軒。地勢は山多く全島殆んど山地にて平地は甚だ少し。西北部寄にある紅頭山(五四七米)を最高とし、東南部の大森山(四四〇米)これに次ぎ、海岸は珊瑚礁

多く、港灣少く、海岸線は變化少く、特に西北岸は斷崖海岸に突入して甚だ峻峻なり。亞熱帯の地域にあるため、温度高きも、七月の平均温度二九・一、一月の平均温度二・五にてその差甚だ少し。雨量多く湿度高きも、洋上の風のため比較的涼き易し。夏は南風、冬期は東北・西風の調はゆる季節風強く海は寛る。植物地理學上より見れば臺灣區中にも特殊なる一小區をなし、小島の割合に植物種類は極めて豊富にて、現在半南植物以上顯化植物まで百三十科約七百餘種と算せらる。是等の要素は主として本島と共通種にて、次に交趾支那・中南支那・比律賓・琉球の順とす(佐々木一氏説)。従て紅頭嶼は臺灣一小區としては南支・南洋地方の熱帯原種を多分に含む特殊區域と認めらる。紅頭嶼特産としてはコウトウゴモウ・コウトウアミガサノキ・コウトウラウ・コウトウツツミヤブチ・ウラジロイハガネ・コウトウウヅリハ・ソハダヤシ、コテフラン等の如き臺灣にても珍奇に屬する植物も多し。動物に關する研究は目下未だ充分とは云はれざるが、紅頭嶼の下に限定して産するものは極めて少く、臺灣・琉球等と共通なもの、及びフィリピンとの共通種混在するものと見てよし。動物の種類により著しくその種の數に豊富なるものと貧弱なるものとあり。例へば哺乳類は、野性のもの僅かに三種

(白鼻心、エゾブトネズミ、タイワンクダラカウモリ)にして餘は二三の家畜あるのみ、又淡水魚の種類も殆ど無く、宇鹹水魚、二種(其中一種は臺灣にて老體と稱する大鱸なり)のみ報告せられたれど、鳥の類は頗る豊富にして六〇種以上もあり、又甲蟲類は一〇〇種、蝶類は四〇種以上に及べり。島内の交通は海岸に沿つて僅かに歩行し得る小路あるのみ、殆ど全部山地にして道路なし。山路としてはイワギヤ社と、イモウル社を連絡せる小路あるのみ。港灣なきため船は季節風を防ぐ南面せるイモウル社に碇泊し月二回高埠及び東臺よりの大坂商船會社の船の寄航あるのみ。南風強き時は船はイワギヤに着き山路よりイモウルと連絡す。港をなきため何れも遙か沖より鮮にて連絡をなすの他なし。周圍の陸路も一周するに途中一泊を要し、西北端の不知帆は風波荒きときには交通不能となる。住民は駐在の警察官吏を除きては全部高砂族なるヤミ族なり。ヤミ族の住地として紅頭嶼は有名なが少くこれにつきて述べん。そこは七つの部落より成し、何れも海岸近くの地の緩き傾斜地を多く利用せり。イモウル社は南岸にありて中心をなす所にして、近接してイラタイ社あり、イワタス・ヤムノ二社は西に、イラライ社は北岸に、イラノミル・イワギヤの兩者は東北海岸にあり。イモウル社には警察官吏駐在所、教育

音律にして、特有の楽器はなく、鐘は女子達の最も好む所に於て多くの種類を有し、特に月明の夜には謡ひて一夜を明す事多し。彼等の間には抜毛の風あり、男女共に鬚・鬘毛・陰毛等は除去するを常とす。紅頭嶼の名は既に清朝の康熙末年の黃叔瓚著、臺灣使捷錄の中にも表はれたれど、これより先、西紀一七二六年のゲアラントインのにも見ゆ。西洋にては本島はボトル・トペコの名を以て呼ばれたれり。

コト—高頭

朝鮮慶天嶺山脈の一峯。咸鏡北道茂山郡・吉州郡と咸鏡南道甲山郡との境界に聳立す。標高約二〇〇〇米。南東麓は南雲嶺を経て頭流山(二二〇九米)に續き、北西方は冠頭峯(二二二六米)・阿武山(一八〇三米)に連る。北流する豆滿江支流西頭水、西流する鴨綠江支流雲龍川の分水嶺たり。

コト—港東里

臺灣高雄州の舊里名。現在の潮州郡及び東港郡の一部にして下淡水溪以東の地を含み、これを上・中・下三里に分つ。上里は潮州街・萬壽庄・新園庄の一部。中里は潮州郡新埠庄・東港郡林邊庄・佳冬庄の一部と東港街の地にして、下里は潮州郡枋寮庄の一區なり。下淡水溪以西地區の港西里と同じく明末鄭氏時より引續き、清領初期の康熙年間早くも福建・廣東兩省の移民は此地方の平埔帯と約して開拓に努め、東臺灣の臺東方面との聯絡は、南路に於

ては本里を以て據點と爲す。我が國領を以後も里制を用ひたるが、大正九年これを廢す。

コト—孔道面

朝鮮京畿道安城郡の西南部。東より南は大徳面・薇陽面に、北は陽城面・元谷面に夫々隣接し、西は振威郡に接し、南は忠清南道天安郡に界す。地は即ち安城平野の一部に位し、面内地低平にして安城川東境より南境に沿ひて西流し、灌漑に便し耕地よく拓く。主産業は農にして米・豆・粟・麥・棉・莞草等を主産す。三等道路面の中を東西に走る。

コト—光道面

朝鮮慶尙南道統營郡の西北部。西は道山面に、東南の一部は統營邑に隣り、北は固城郡瓦流面に接し、東及び西南は海に面す。西北部は一部に低山性丘陵を成し林野多きも、東南沿岸はやや低平にして耕地拓け米・麥・大豆・小豆・綠豆及び大麻・棉等を産す。二等道路、南方統營邑より來り、南部を過ぎりて西北方に走り、また等外道路これより分岐して北方に通じ交通不便ならず。いま龍湖・竹林・善山・片洞・徳浦・安井・黃の七里より成る。

コト—向道村

山口縣周防國都波郡の西部にある山村。長穂・加見兩村の西北、須金村の西、鷹野村の南、富田村の北方に位し、之を大向、大道理の二字に分ち、村役場は大道理に存す。本村はもと大道理村と大向村とを合

併したるものにして、大道理村は大内時代に富田荘に属し、當時交通の要衝に當り、人馬の往來繁く、因つて之を大道理と呼び、後代轉訛して大道理と稱せられしものといふ。大内村は錦川を隔てて存し、往昔は大内・二侯の二郷を形成せり。明治五年兩村を合せて戸長役場を置きしが、同十二年分離し、同十七年再び相合し、同二十二年四月一日町村制施行と共に、全く兩村合併せられて、向道村と稱せらるゝに至る。産業は農産・林産及び畜産に富み、米及びその他の農産の外、木材・木炭を出すこと多く、畜産には牛を有名とし、かの郡農肥牛は實に本村を其の本場とす。(二侯神社) 大字大内に向。郡社。祭神、大物主命・八千支神。創建年代詳かならざるも延喜式内社にて、天安二年既に官社に預る。社記によれば大物主命・八千支神は雄略天皇八年九月に大内なる黒瀨瀨邊へ降臨ありと云ふ。この瀨を手洗川と云ひ新瀨に効驗ありと傳ふ。のち豊原秀吉の朝鮮征伐の際に祈願ありて富田清水親手一町四段の地を寄す。貞觀九年正五位下を受けらる。明治七年郡社に列し同四十年に同村の河内・楠本の二神社と齋宮境内の降臨神社等を合祀せり。例祭、四月二十五日。(龍聖寺) 大道理にあり。山號は萬年山といひ、曹洞宗に屬し、本尊は釋迦如來、文應元年の創建にして、開山は藤文六位、善明親王といふ。開山後守弘義

の妻益田氏、法名龍聖院山妙竹の善徳所にして、墓は寺外の畑中にあり。

コトク 高道面 朝鮮忠清南道洪城郡の西北部。東は龜項面に、南は結城面に隣接し、北は瑞山郡及び龜山郡に接し、西は淺水灣に臨む。北境一帯は低山性の丘陵起伏するも他は概ね低平にして耕地拓く。二等道路東方洪城面より來り北方に走り、面の中部にて分岐せる三等道路は南方に走る。

コトク 猴洞 臺灣高雄州恒春郡恒春庄の恒春城内に在る小丘陵。住時此地方を根據とせしパイワン族が酋長をせし首級を收藏せし所と稱す。丘に存する洞窟は即ち之なり。

コトク 猴洞 宜蘭縣の一郡(大正九年設置)。臺灣臺北州基隆郡瑞芳庄にあり。

コトク 香東川 香川縣香川郡に在り。木田郡豊郷村大字奥山に發源し、香川郡に入り、麗江村に發源する桃川・安原上西村の内湯川を始め、安原村の土佐川・安田川・西谷川等の水を合はせて北流し、川東村・由佐村の境を流れ、大野村・四座村・一宮村・豐田村を経て打村の境内に石滑尾山の麓を流し、高松市に入境して瀬戸内海に注ぐ。流域三、六千餘、綾歌郡の土器川(約三七軒)に次いで縣内の長流なり。一に郷東川に作り、又瀬川とも呼ぶ。此川は讃岐に於ける他の河川と同じく急流をなし、移

見る急勾配を呈す。平常水浅く砂礫河をなす。流域の變遷少からず、一時は一宮村邊より東北流高松市の地域を貫流せしが、高松築城の際、今の流路にかへたりと傳ふ、又此川の西側に之と殆ど並行せる古川あり、香川郡由佐村より北西流同郡龍紙村半田にて木津川に合す、香東川の分流にて、香東川の地質時代に於ける氾濫地城西端の殘迹と見るべきものにして、由佐村の沖積低地と洪積臺地との境を北西流し、小田池・奈良須池に水を供給し、香川平野を灌溉す。近時安原上西村の内湯の谷を堰止め、一大溜池を築造して、香東川の水源となす計あり、川東・由佐・川岡・佛生山・圓座・豐田・香西等流域地にては此計畫既成同盟會を組織、之が實現を期しつつあり。春日川・新川と共に高松平野を灌溉し、地味肥沃、農業發達、殊に縣下第一の小麥地帯を形成す。此地方は位置阪神に近く、水陸交通便にして、流域には名勝史蹟少なからず、附近の丘陵には原史時代の遺蹟も多く、條里制の跡も美しく見られ、式内社一宮神社の鎮座あり、圓座・櫻紙等古き産業を思はしめ、現今は高松市その河口に發達し本縣の中心、四國に對する支那をなす所あり。

コトク 公德面 朝鮮平安南道平原郡の東部。南は東岩面に、西は永柔面に、北は東松面・雷川面に夫々隣接し、東は順川面に接す。北部に隆龍山

林西に、西南は富安面に夫々隣接し、北は扶安郡井邑郡に接し、西北の一部は海に面す。南部は一一二〇〇米程度の丘陵起伏するも北部は低平にて、且つ東境を北流する東津江の上流これ等低地を灌溉し耕地よく拓く。主産業は農にして米・麥・豆類・棉等を主産す。三等道路三方に走るも交通未だ便ならず。

コトク 合徳面 朝鮮忠清南道唐津郡の東南部。柳川川の西岸に沿ふ。北は泛川面・順城面に、西は河川面に隣接し、南は龜山郡に接す。西部面境にはやや丘陵起伏するも、他は概ね低平にして米・麥・豆・棉等を産す。三等道路北隣泛川面より來り一は西方に、一は南方に走る。また柳川川により水運の便よし。いま石洞・道谷・素素・雲山・新・大興・大合徳・城東・新石・玉琴・合徳・島・鮎元・新興の十里よりなる。

コトク 孔德里 龍山縣の一郡(昭和四年設置)。朝鮮京畿道京城里府孔德里にあり。

コトク 江内面 朝鮮忠清北道清州郡の西部。東より南は江内面・南二面に、北は玉山高に、西は江外面に各隣接し、西南は忠清南道燕岐郡に接す。東南部は一一〇〇米前後の丘陵地を成すも他は概ね低平にして、北面境を緩流する萊湖川の灌溉よるしきを得て、耕地ひろく拓く。主産業は農業にして米・麥・豆類・粟等を主産す。前者に鐵道忠北線及

(四四六米)ありて其版商北境を西走し、また東南境にも、丘陵連互するも中部は一般に低平にて地味肥沃耕地よく拓く。主産業は農にして米・麥・豆・粟等を主産す。また砂金を産する順安鎮山の一部分に屬す。道路は等外道路通するのみなるも、京義本線の漁波驛(明治四十一年設置)を置き交通便なり。大字法興里に著名なる互刹法興寺あり。現に本山の一にして高句麗時代の創建に係り、名僧の居せしところ。いま棟梁殿・眞影閣・大藏殿等傑構として存在し寺有の山林田畝多く佛具經典等頗るべきもの尠からず。

コトク 孔德里 朝鮮全羅北道金堤郡の北部。萬頃江の左岸に沿ふ。東は白鳩面・龍池面に、南は白山面に、西は青嶺面に夫々隣接し、北は益山郡に接す。面内殆ど低平にして、萬頃江の灌溉頗るよろしく、地味肥沃にして耕地よく拓く。主産業は農にして米・麥・豆類・棉・桑・繭等を主産す。三等道路の東部を南北に走るのみにて交通は未だ便ならず。

コトク 光徳村 鳥取縣伯耆國西伯郡の東北部。日本海に面する所にあり、東は邊坂村、西は名和村と界す。大山火山の北麓の緩かなる裾野の一部と、其の前方に弓狀に張り出された海岸平野の一部とよりなり、村は山地を頂點とする三角形の扇狀をなす。平地は水田をなし、また大山西

風・二十世紀梨・甘藷等を産し又繭も出し、南部の山地は好牧場をなす。海岸に沿つて山陰街道が、その南側を省線山陰本線共に東西に走り、西に御家庭驛(明治三十五年設置)を設く。この地は和名抄、汗入郡奈和郷の内なるべく、のち名和莊に屬せしといふ。村内に古墳多く、住時朝鮮民族の日本に渡來せし折この地に着きて住せしものならんといふ。町村制施行以前は村全體の名稱なく、各部落名を以て呼びたりしが、明治二十三年町村制施行に當り光徳村と名づく。

コトク 高德線 省線の一四國地方の東北端高松市と徳島市とを結ぶ。高德本線・銀治屋原線・撫養線を含む。「高德本線」省線高德線の一。豫讃本線の高松驛(高松市)より志度町・引田町・板西町・板東町を経て、徳島市の徳島本線佐古驛に至る。全長七三・一軒。板西驛(徳島縣板野郡板西町)にて銀治屋原線に、池谷驛(同板西町)にて撫養線に各接続す。豫讃本線・徳島線等と連絡し

コトク コーナ

四國循環鐵道の一部をなすもの。

コトク 康徳 成鏡本線の一郡(大正十一年設置)。朝鮮咸鏡北道鏡城郡龍徳面にあり。

コトク 廣徳 朝鮮咸鏡南道定平郡の中部。東は宜徳面に、南は春柳面に、西は長原面・高山面に、北は府内面に相隣接し、東北部の一部は海に面す。西北部は五、六〇〇米の山地を成すも、他は西南部に一一二〇〇米程度の丘陵あるのみにて、概ね低平地帯よく拓く。且つ小流これを灌溉し農業よく行はる。主産物は米・粟・大豆・大麥等。成鏡本線及び一等道路東部をほぼ並行し前者に宮坪驛(大正八年設置)を設く。

コトク 興徳面 朝鮮全羅北道高敞郡の北部。東は星内面に、南は新

林西に、西南は富安面に夫々隣接し、北は扶安郡井邑郡に接し、西北の一部は海に面す。南部は一一二〇〇米程度の丘陵起伏するも北部は低平にて、且つ東境を北流する東津江の上流これ等低地を灌溉し耕地よく拓く。主産業は農にして米・麥・豆類・棉等を主産す。三等道路三方に走るも交通未だ便ならず。

コトク 合徳面 朝鮮忠清南道唐津郡の東南部。柳川川の西岸に沿ふ。北は泛川面・順城面に、西は河川面に隣接し、南は龜山郡に接す。西部面境にはやや丘陵起伏するも、他は概ね低平にして米・麥・豆・棉等を産す。三等道路北隣泛川面より來り一は西方に、一は南方に走る。また柳川川により水運の便よし。いま石洞・道谷・素素・雲山・新・大興・大合徳・城東・新石・玉琴・合徳・島・鮎元・新興の十里よりなる。

コトク 孔德里 龍山縣の一郡(昭和四年設置)。朝鮮京畿道京城里府孔德里にあり。

コトク 江内面 朝鮮忠清北道清州郡の西部。東より南は江内面・南二面に、北は玉山高に、西は江外面に各隣接し、西南は忠清南道燕岐郡に接す。東南部は一一〇〇米前後の丘陵地を成すも他は概ね低平にして、北面境を緩流する萊湖川の灌溉よるしきを得て、耕地ひろく拓く。主産業は農業にして米・麥・豆類・粟等を主産す。前者に鐵道忠北線及

コトク コーナ

び二等道路面の北部を東西に走り、月谷・丁峰(共に大正十年設置)の二驛を置く。

コトク 郷内村 岡山縣備前國兒島郡の西部。北東は壽崎村に、東南は原浦町に、西南は兒島町に、西は福田村に、北は粒江村・藤戸町に界す。村は兒島半島の丘陵の西北部を占め、東北より西南にかけて蟻峰山(二二二米)・等原(二二〇米)・塚山・高尾山・福南山(二八四米)・城山等があり、北及び中央部は開けて低地をなし、福南山麓の二つの湖より出て北流する河川によりて灌溉便利なる爲、水田拓け備前米の産地なり。又蘭草を栽培し繭表・花冠をつくる。また最近は綿織物も産す。岡山市と南方下津井町をつなぐ下津井鐵道の通過に當り林・福田の二驛(共に大正二年設置)を設く。又東北の岡山市と西北の倉敷市、南の味野・下津井の兩町と東南の日比町・宇野港をつなぐ四國街道及び其他の街道が、林町の北に於て交叉し、バスを通す。和抄名に兒島郡兒島郷あり。蓋し本村邊を稱せしものならん。中世林庄と稱す。國志に大字林に兒島備後三郎の宅地ありといふも今詳かならず。村内に冷泉宮頼仁親王の御墓、櫻井宮覺仁法親王の御墓あり。本村は明治三十九年福岡村・彦崎村・木見村の各々一部を以て建てしもの。いま林・串田・會原・福江・植松・尾原・木見の七大字より成り

林に役場を置く。(熊野神社) 大字林に... 熊野本宮の神輿を奉じ四國九州を漂泊す...

光院と法談す。住時は廟宇ありしも今は... 大日本史・九六・列傳二三・皇子の一に「親仁親王承久四...

【江南】 近江國を大體愛知川によつて南... 【江南村】 鳥根縣出雲國蘇我郡の西部...

【厚南村】 山口縣長門國厚狭郡の南部にある農村。周圍は宇部... 【厚南】 厚南村の南部にある農村...

北部に佛陀山(六〇八米)聳え、その支脈... 道坡州郡の東南部。京城府の北約一八軒...

海岸より市街發達す。郡の特色にして... 【合渡面】 朝鮮黄海道金川郡の中部...

て本斗郡面積の四七%に相當す。村内... 【厚南村】 山口縣長門國厚狭郡の南部にある農村...

【甲奴郡】 廣島縣備後國の中央にあり、... 【甲奴】 甲奴郡の南部にある農村...

川の上流をなす、其の流域に僅に低地をもち耕作はれ米を産す。附近の山地は廣範囲に誇りて牧場をなし、牧牛の産多し。郡内は上下町外八ヶ村を含み、上下町は中央部低地にありて中心地をなす。

南方福山市・尾道市より来る街道は郡の南部にて合して一となり、上下町を通り西北方の上市の部落を経て、比婆郡庄原・雙三郡三次の兩町に通ず。又三次町より上下町まで福鹽北線通じ、南方福山市より府中町まで敷設されし福鹽南線とはその連絡完成近きにあるべし。本郡は續日本紀・和銅二年の後に備後國造田部甲努村の地に郡家を置きて甲努郡を建つと見え、延喜式・拾芥抄・伊呂波字類抄は甲奴に作り、和名抄は加布乃と訓じ矢野・甲奴・田總の三郷を置く。正保圖・元祿圖は甲努に作り、いま甲奴と書く。

【甲奴村】 廣島縣安藝國甲奴郡の西部。東南に上下町あり、南は矢野村に、東は吉野村に界し、北は領家村・上川村に隣す。東境の弘法山(五八五米)を第一とし周圍に五〇〇米前後の山岳連立し村の中央に十字形に谷をつくる。東西に互る各には上下川流る。各谷には耕地拓け米・麥を産す。主邑本郷は四方に通ずる十字路の中心にあり、最近東南方の上下町と西北方の吉舎町・三次町(雙三郡)とを連絡する福鹽北線開通して村を通過し、甲奴郡(昭和十年設置)を設く。和名抄に甲奴郡甲奴郷と見えは廣し本村及び上川

村の地とす。甲奴の名は古く續紀にも見ゆ。明治二十八年福田村・梶田村・西野村・本郷村を合併して本村を建つ。
【甲努】 備中國(岡山縣)の古地名。和名抄、小田郡に甲努郷あり、加布乃と訓ず。その地いまの小田郡北川村・新山村・吉田村の邊なるべし、一に中川村もその郷域なりしともいふ。北川村の大字甲努は郷の遺稱なるべし。
【河沼】 尾張國(愛知縣)の古地名。和名抄、葉栗郡に河沼郷あり、その地いまの岐阜縣羽島郡笠松町以東の地なるべし。中世の地に水害ありしを以て舊城評かならず。川島神社はいま八劍村の大字徳田にあり、延喜神名式に尾張國葉栗郡川島神社とあるはこれにして、尾張國神名帳に從三位川島天神と見ゆる官社なるべし。仙臺萬葉抄所引尾張國風土記、葉栗郡川島社奈良宮御宇聖武天皇時、凡海部忍人申、此神化爲白鹿時々出現、有詔奉齋鳥天社。
【神野山】 笠置山脈の高峰。奈良市の南東方一五軒前後、奈良縣活上郡東山村と山邊郡豐原村との境界に峙つ。標高六一九米。西麓を笠置街道南北に走り、更に西方には布目川北流して、木津川に合す。山頂よりは廣嶺なる展望を恣にする。山中に神野寺あり、神龜年中僧行基の草創と傳ふ。この山、俗に大和富士と云ふ。
【鴻沼村】 新潟縣越後

國北浦原郡の中部。新田町の北に接し加治川左岸の平野にあり。加治川及新田川(鵜飼)に灌漑されて、水田よく開け米の産あり。省線羽越本線及村上・下圃に通ずる縣道、村の東南部を横斷し、新田川に最も近く交通便なり。「鴻沼」洪水氾濫を以て鳴る加治川の左岸にありて、大堤を以て水害を防ぐも歲時決潰の憂あり。安政四年五月、明治二十九年七月の土堤決潰は特に甚しかりしといふ。村名は新田城北の沼澤たる鴻沼より由来すといふ。明治三十四年舊中井・鳥塚の二村を合併して本村を建つ。(小川弘)大字鳥塚に生る。世々郷長たり。字は遺甫・心齋また北野野史と號す。少より丹波思亭に學ぶ。のち安積良齋に弟子の禮を執る。風に濟世の村あり。藩主溝口侯に三郷社請と爲し、弘を以て専ら民俗の矯弊を行はしむ。尋で加治河の水害を除きて良田を得、藩廳より功を旌せらる。明治元年會米二藩より同盟を迫るや、弘堅く大義を守り藩議を以て之を却く。既にして海路官軍の上陸に依り、民兵を募りて之に應ず。東北軍退くに及び藩主悦びて二人口を加賜す。のち民政大屬となり、年五十五。大正四年從五位を賜らる。筆に巧なり。明治三年七月十四日歿す。

【神根村】 岡山縣備前國和氣郡の東部。三石村の西北に隣り、西

南は英保村に、西は鹿野村に、北は三國村に接し、東は兵庫縣赤穂郡船坂村に界す。西半は約三—四〇〇米程度の山地をなし、東境に連る三〇〇米ほど西方へ緩く傾斜する山地との間に南方へ開けたる谷をつくり、東北境より源流する蘆田川支流此谷を調し、南境に出で西南方へ流れて約九軒先に本流と合す。川に沿ふ低地には耕地拓け米・麥を産すれど、耕地面積少く人口密度僅に四五人なり。山地多き爲森林廣く薪炭を産す。交通概して便ならざれど、南隣三石村・英保村には山陽本線東西に走り南方約五軒に吉永驛(在英保村)あり。當村より川の谷に沿ひて、村道ここに通ず。古くは三國村と共に神根村と稱す。池田家世々の墳墓あるを以て知らる。いま神根本・今崎・高田・和意谷の四大字より成り神根本に役場を置く。「神根神社」大字神根本に鎮座。神、木花咲耶那命。仲哀天皇・應神天皇・神功皇后(相殿)。神名帳考證には祭神を神石別命とし、古傳温故錄も亦この説を支持せるも暫く社傳に從ふ。その創建年代詳かならざるも延喜の制に式内小社に列し、貞觀七年神位從五位下を授けらる。寛文十年池田光政社殿を修補し、祭料二石九斗及び祭田三段歩を寄進す。明治六年郷社に列す。例祭十月二十三日。(池田家の墳墓)大字和意谷字教士山に在り。寛水の昔、池田新太郎少將光政この國に封ぜられ、備前に

來たるや、先づその領内に於いて墳墓地を定めんと欲し、郡區をして種々探査せしめし結果、この地を以て適地となし、靈元天皇の寛文七年、津田左源太水忠に命じ、その祖父池田源政、その父池田利政の兩遺骸を京都なる妙心寺境の墓地より移して、以て改葬せしめ、以來池田家歴代の墳墓となれり。然れども中世より岡山城に近き處に佛刹を置き、以て之に墳墓を作り葬りたるも亦多し。故にこの墳墓を葬りし所の岡山の城主としては光政と源政及び茂政の三人に過ぎず。

【コーネジマ 高根島村】 廣島縣安藝國豊田郡の南部。瀬戸内海々上に存ぶ神根島の一島一村。面積五・七平方新開約十一軒の小島。北は海を隔てて田野浦・須波の兩村に、東は佐木島に南は生口島及びその西北端の瀬戸田町に、西は愛媛縣大三島に對す。島の中央部を南北に約三〇〇米の山崎連立し東西に急斜面をなして海に迫る。低地は東南山麓に僅にあり高根島の村落をつくる。主産業は農業にて米を産し、林産・水産これに次ぐ。北端に船通船信塔・潮流信塔(何れも明治四十三年設置)あり。東北方糸崎港より西北方忠海町、南方大三島及び愛媛縣の北條・高濱港へ通ずる航路はこの信塔塔の下を通る。古くは知るに山なきも中世は生口島の生口氏の領に屬し、のち毛利氏の有たり。舊幕時代は淺野氏の封内に入る。

【交野村】 大阪府河内國北河内郡の東北端。古の交野原の一部にて、西は淀川東岸の枚方町との間に川越村を隔て、北は津田村と界し、東は米室村、南は磐船村に接す。面積九・一二平方軒、人口密度一方軒四七四人。東境には生駒山脈北部の三四〇米程度の丘陵ありて西方に緩く傾き、その西の大半は概して平坦面をなす。耕地廣く開け河内米を産す。生駒山麓の丘陵地には果樹園發達し桃・蜜柑の特産あり。また大阪市に遠からず各種の工業次第に發達す。交通路よく開け、東高野街道北方京都府八幡町方面より來りて西北部を掠め南方富田村方面に至る。西北部枚方町より起る清瀨街道は西部を東南方に通り途中之と交又す。また省線片町線中央を南北に走り北隣津田村に津田驛あり、また清瀨街道に並行して枚方町より東南へ延びる信貴生駒電線ありて交野・郡津の二驛(昭和四年開業)を置き交通便利なり。村は私部・郡津・倉治の大字よりなり、私部に役場を置く。交野は古くは交野原と呼ぶ原野にて、片野・肩野に作る。河内國交野郡の地にて桓武天皇延暦二年、この地に遊獵し給ひしより世々皇室の特獵地たり。故に禁野また御野・御狩場の稱あり鳥立野・百重原・清原原といふも此邊なり。太平記東下りの條に「交野の春の櫻狩り嵐の山の秋のくれ」と歌はれし所に於て古へ近郊の賞遊遊獵の名區たり。新

古今「か野」ととち(鳥立)の原をありつつ交野の野邊に今日もくらしし忠通、藤原、藤原王「散りし花の山風の鶴殿の蘆の野わけて放衣、禁野の雪をたどりゆくは、ぬるとも花の陰に宿らん云々」以て當年の狀を想ふべし。地は凡そ本村及び山田村・川越村・枚方町・殿山町にもわたれるもの如し。降つて郷里の制定まるや、本村は和名抄、交野郡三宅郷に屬せるものと思はる。私部はキサイナにて皇后の御名代なるも、此地は何朝の名代か定かならず。往昔此に靈岩あり。永祿年中安見直政、高山高政を授けて此に據れり。元龜年中、三好松永黨の據れる交野城も、此に同じかるべしと。大字郡津は交野郡の郷家のありし處ならん。大字倉治は倉地の謂にて美田屯倉と云ふは此地に置かれしものか。交野山の山中に源氏瀧あり、古くより名勝として著はる。「源氏瀧」元寺瀧成は倉治瀧ともいふ。交野山中石奇にして苔深き所、約三〇米の飛泉瀧を劈いて下る。遠望恰も源氏の白旗に似たり。瀧流に滑ひ大巖あり、不動石といふ。山中古樹多し山麓又桃樹盛し、落紅碧潭に瀾るの候風態最も佳し。貞觀年中惟喬親王の遊覽あり、在原業平・紀有常息從親親王の御詠を傳ふ、また河北山中の一勝たり。

【河野】 石川縣能登郡にありし村。明治

四十年八月本村及び別宮村・吉原村を廢し新たに鳥越村を置く。
【河野村】 福井縣越前國南條郡の西部。敦賀灣に臨みて北は坂口村に、東は王子保・南蒲山・湯尾の各村に、南は鹿野村及び敦賀郡東浦村に界し、西北隅は丹生郡城崎・白山兩村に接す。越前平野の西邊をなせる海岸山脈が敦賀灣の東岸に並行し、花崗岩斷層海岸をなせる爲、全村山地にして東境にはホケケ山(七三七米)・足谷山(五八九米)・矢良尾岳(四七三米)等連る。海岸近くには水田・桑畑ありて米・繭・木炭を産しまた水産行はる。武生町より敦賀町に至る縣道に沿へり。この地は和名抄、敦賀郡神戶郷の内なるべし。天正三年、朝倉の殘黨覺起して河野・龍門・板取・木目等の諸城に據る。織田信長敦賀に乘じ海上より舟にて此地を襲ひ、新城を攻落し更に諸城を攻略すといふ。大字甲樂城浦はまた舊木に作る。昔山伏慶福坊此地にて法力神通を顯はせし事宇治拾遺に見ゆ。延元元年の冬、畷將足利高綱、金ヶ崎及び柳山に備へんとし北隣四ヶ國の兵三千餘騎を率ゐて此地より越前の國府(武生町)に歸れり。また金ヶ崎落城の時、氣比宮司大郎齊晴、東宮恒良親王を小舟に移し奉り、此浦に上陸して親王を土人に託し奉れり。(動き岩)宇抄山の部落を距る東北約四〇〇米の谷川の中に在る石にし

て、一名を天から落ちた岩とも云ひ、眼病の神として遠近より崇拝せらるるもの。縦三・六米、横一・六米の平かなる岩石の二つ重なり合ひたるものにして、下積の石の頂面には弘法大師の作と云はるる高さ〇・五四米、幅〇・〇六米の同師の立像彫刻せらる。〔乳の神様〕宇杉山の部落を離る西へ約二二〇米の路傍に岩ありて、面に高さ三六米、幅二一〇米の坐像彫刻せらる。乳の乏しき婦人これを祈願せば靈應あらたかりと。像は弘法大師の作と傳へらる。〔雄池雄池〕古く宇杉山より神土に至る道の邊にありし池。共に昔時は水を湛へ、四邊は草木生ひ茂り物恐しき場所なりしと傳ふるも、今はその面影なく、道路の改修と排水よるしきを待たため水を湛へず、僅かに雄池の跡に約〇・〇七アル(約二坪)の池を残すに過ぎず。地名に雄池雄池の稱存す。降雨激しき時は附近一帯浸水することあり。昔杉山に位禱の甚しき子あり、母はその禱を憐れんものと泣く子を連れて雄池のほとりの樹木に下げ、程程で連れ歸らんとせし時は、既に子は池の大蛇に取り拉られ安んじ。母は狂亂の如くなり金杓子にて池水を汲み上げ、大蛇は遂に隠れおぼせず池の中より姿を現はし、雄池へ行かうか雄池へ行かうか元は大良の池の窟とのたうち廻りて濱邊に下り、大岩(現在平岩と呼ぶ)を取り持ち、頂の平らなるまで尻尾もて岩を叩

きて後、蛇池の方に失せしといふ傳説あり。〔太郎右衛門島〕大字雄池に在り。往年、切支丹信者の犠牲者太郎右衛門を現在の雄池小学校の後方、川を隔てたる所に葬りて以來、里人こゝを太郎右衛門島と稱す。太郎右衛門は死に際し、己が靈魂の永く此の地に留まる願しに不思議を現はすことを遺言す。以後、夜毎に太郎右衛門島は鳴動し、今なほ夜の十時に至ればゴーツと音を發すといふ。〔題目岩〕大字今泉より坂口村へ至る里道の左側にある岩。大字今泉に屬す。面に南無妙法蓮華經と刻まれたるに依りこの名あり。昔この附近に柳橋行し人々危害に悩みにより、今泉の常柄寺の開山日映の、之を對せんとして題目を刻みしものなりと傳ふ。〔蛇祭〕大字大良の高臺一面は昔は雜草が一面に生ひ茂り、中に潜める池に雄雄の大蛇むつまじく棲みしに、或る村人の手に纏り雄の大蛇殺さる。因りて雄の大蛇を慰めんとす。毎年七月十六日大良にて行ひ祭を蛇祭と稱す。〔觀音岩〕大字大谷の海岸にある高さ九米餘の岩。昔この岩の割目の中に、高さ約六割の金の觀音御坐し給ひ、夜な夜な立石御の方に金色の大なる光を放ち給ひしと傳へられ、大谷にてはこの岩を觀音岩と稱す。金色の觀音像は立石御に住む漁師が或る夜密かに海上三〇軒の船路を越えて持ち歸りし以來、靈應を恐れ立石の御寺の御堂深く納めらる。〔河野村〕

河野村(長野縣下伊那郡) 河野村(長野縣下伊那郡)の北部。北は正岡村に、南は栗井村五明村に、東は湯山村に界し、西は瀬戸内海の香灘に面す。東西約十一軒南北三軒の矩形の村。北境の中央に火山の高嶺山(九八六米)、南境の中央に大月山(九五四米)等聳えて分水嶺をなし、東半は急傾斜をなし下り石手川の溪谷をつくる。西は割合に緩傾斜をなし麓に香灘の沖積海岸平野をつくり、水田拓く。また西斜面は階段耕地をなし伊豫蜜柑をつくる。主産業は農業にして米・麥を主産物とし、副業に養蠶行はる。集落は西半に多く陸に海岸に沿ふ柳原は首邑をなす。北の北條町と南方の松山市へ通ずる縣道は南北に通じ東側に省線伊豫本線を通ず。此地は即ち和名抄、風早郡河野郷の地にして、中世以降河野氏の據れる處。河野氏は敏智姓の盛衰にして中世以降越智の諸侯を統率して全州の首領たり。蓋し通信を中興の宗とす。治水の初め州の豪族河野通清高麗城(一に河野城、神途城とも稱す)に據り平氏を拒みて殺さる。子通信源頼朝に従ひ守護に補す。承久の役官軍に屬して封邑を失ひその少子通久僅に久米郡石井郷を領す。蒙古の役、通久の孫通有戦功ありて舊邑を復し對馬守に任ぜらる。元弘の初め、通有の子通盛北條氏に附し收封せらる。その族傳能通嗣・土居通時官軍に應じ、長門の探題北條時直を撃ちて

之を破る。足利尊氏の反するや、通盛これに屬して湯月城に據る。興國元年、藤原義助詔を奉じて來りて南海の軍務を督す。俄にして卒し、尊氏の將細川頼春來たり侵し、世田城を陥れ、得能藤氏みな離散す。正平六年、尊氏終に通盛を以て守護となす。同十九年通盛の子通亮嗣して細川頼朝と戦ひ敗死す。その子通亮筑前に奔り征西將軍長親王に從ひその役を乞うて故府を復す。天授中通亮戦死し、その子通能再び足利氏に降り、因つて守護に補す。應仁の亂通能の孫通直西軍に應ず。その再從弟通泰湯山(和氣郡三津濱)に據り東軍に屬す。これに於て河野氏二派となる。永正中、通直の子通宜、通春の子通篤を逐ひ悉くその地を併す。天正中、土佐の長宗我部元親來たり侵し、通宜の曾孫通直を下し、全州を略有す。〔高麗城〕高麗山中楢井谷に城址あり。一に河野城また神途城と云ふ。州豪河野氏の祖、伊豫皇子以來、此處に住す。天慶年間伊豫掾藤原純友また此處に據りしと云ふ。養和年中、河野通直、源氏に當し平氏のために攻めらる。南朝の時、河野通直またこの城に據る。正平十八年四月、足利氏の將細川頼朝と戦ひて利あらず、城遂に陥り、通直九州に奔る。〔高麗神社〕大字宮内に鎮座。縣社。祭神、高麗神・大山積神・雷神。創建年代詳かならざるも、社傳によれば、推古天皇七年越智蘇我朝をして社壇を山頂

に得ましめ、勸願に依りて之を社壇之制とし且つ河野氏の祖廟と定めしが、大寶二年故ありて河野新宮と改稱すると云ふ。貞觀五年從五位下を授けらる。保延二年河野親清は宮居を新たに求めて現社地に之を遷し社殿を造營す。當時は僧坊十二を有し安莊を極めしも、慶長五年松前城主中島氏の虜虜に遭ひて社宇悉く灰燼に歸し、同十二年郡民相謀りて之を再興す。もと三島明神と云ひしも安永六年高麗三島神社と改め、明治三年更に現社殿に改稱す。例祭、十月一日。〔善應寺〕大字善應寺にあり。臨濟宗東禪寺派。好成山と號す。建武二年河野對馬守通治京の東福寺に模して創建、顯正和尚を請じて開山とす。七堂伽藍完備し壯觀を極む、中興開山は默翁士敏和尚たり。境内に通治の墓あり。

山は牧牛盛んに營まる。三次・吉田町よりの街道は可愛川に沿うて北東部より中央部に來り、大字入江市の街村を通り西に通じ、隣村より西南の方向をとり可部町・廣島市の方へ行く。此地は刈田村・根野村とともに和名抄高麗郡刈田郷の地とす。昭和四年高麗村大字下入江を編入す。いま桂・上入江・下入江・長尾・高野の五大字より成り桂に役場を置く。〔高麗〕 弘農面(高麗) 朝鮮全羅南道靈光郡の北部。東北は全羅北道高敞郡に接する外は全部海に臨む。西に五段起伏するも、低きため耕地よく拓け畑作行はる。また水産業盛なり。海岸線は比較的出入に富むも良港といふべきものなし。いま可谷・觀徳・新石・城山・七谷・桂馬・月岩・丹徳・上下の九里よりなる。

北に緩かな斜面をむけて麓に水田を拓き備前米の産地をなす。村落は海岸に沿うてならび備前・宮浦・北浦は主邑をなし是等をつらねて道路は海岸を走り八廣町と小串村を連絡す。此地は和名抄、兒島郡三家郷の内とす。舊郡家の所在地にして村名は那の浦の義なりと。大字備前あり。備前佐々木氏の一族、胤奉ここに住し始めて備前氏を稱す。太平記に見えり佐々木備前三郎左衛門尉胤胤は胤奉の後裔とす。備前軍記に據れば元弘・建武の頃、同じく佐々木の餘流なる備前三郎左衛門尉胤胤・加地源太左衛門・加地氣前守・加地備前守時秀など居りしが、天文二十二年の頃備前・加地の兩家争論起りて合戦に及び、終に加地敗れて舟により京都に走る。備前氏獨りありしが、のち備前上宗登に屬し、更に宇喜多氏に仕へて備前美作と稱し四千石餘の地を領せりといふ。〔高麗宮城〕 大字宮浦にありといふ。此地は神武天皇東征の途、駐師のとき行宮を置かせられし址と推定せらる。日本書紀には神武天皇吉備國に入らせ給ふや高麗宮なる行宮を營ませられ戦備を整へさせられしことを記し、また古事記にも高麗宮にいまし給ふこと八年とあり。而してその吉備國にありしことは明かなれど、その地點につき或は備前兒島郡高島(また竹島)とし、或は備中小田郡の神島外浦南方の高島とし、諸説一定せず。後説になる者はその島にいま王

酒とよぶ地名あるを以てその根據となし、この説述かに否定すべからざるも、兒島郡の高島は兒島水道東西兩大川の口の間なる淺水中にありて、當時瀬戸の航路に通じ、船艦は兒島灣を經由して東征し給ひしものと想定せられ、地勢上この説を妥當とするが如し。但しこの高島は周圍僅に一軒餘に過ぎず、行宮を營ませられし地はその對岸宮浦の地なるべしとせらる。神武紀・十年三月「後入吉備國三行宮」以居之、是日高麗宮二城三二年間、營舟楫、著兵食、許飲、以一舉而平天下也(「高麗」甲浦村の屬島。周圍僅かに二軒九三二米にして兒島郡下津井町大字田之浦の東南海上に在り。天慶の亂に當り、藤原純友伊豫國の目振島に據りて叛旗を翻せしも、伊豫守紀淡人の攻伐に會して戦ひ敗れ、逃れてこの島に來たり、城營を構へて之に據る。是に於て備前守藤原千高播磨介藤原兼時と相謀り、兵を遣して之を討つ。却つて大いに純友のために敗らる。その翌年朝廷、追討使左衛門佐藤原倫實を遣はし再び討ちしが、また敗れた。その戦蹟として高島の名世に知らる。

コーノウラ 甲浦村(備前國兒島郡兒島半島の東北部及び北方海上の兒島灣にある高島及び附近の小島よりなり、東は小串村に、南は創立村・岡上村・山田村に、西は八瀬町に隣りす。南方に金甲山(四〇三米)・東光寺山(二八三米)を背負ひ又中央部に高山(二〇八米)・龜山(二七七米)あり、それらの山脚

コーノウラ 神浦村(備前國北松浦郡宇久島の南部。五島列島の北部を占める宇久島の南部にあり。小値賀島との間に相瀬を隔つ。北は平村と接す。最近人口年々減少の傾向あり。北部は北境にある城島の山地にして南方に

傾斜し海岸に平地多し。海岸東部に三ヶ崎、中央に永手崎、西部に小島崎あり。北部山地は新炭を産し南部平野からは大豆・薩摩芋・柑橘等出し又養蠶も行はる。海岸は水産盛にて小鯛・鯛・鱈・鱈等取れ、西南海岸にある主色飯良は其中心なり。村道北隣平村との間に通じ海岸は水運の便もあり。本村は神功皇后三尊御征服の歸途立寄らせ給ひし地といふ。また中古、平家盛京都より落ち來り此の島を征服し、七代の間の島にあり、のち下五島を征服して福江島に城を構へ居す。これ五島家なり。近世五島家の分家、富江藩に屬す。

コーノウラ 郡浦村

肥後國宇土郡宇土半島の西部。牛島西端の三角町の東に隣り、北西の一部は島原海に面し南は八代海に臨む。北に綱田村東に大嶽村あり。東北隅に大嶽火山(四七八米)聳えて西南方に傾斜の山脚を廣く延ばし、西部は一二〇〇米程度の山地をなす。南部海岸に低き丘陵連なりて岩石海岸をなし、西南部の海岸平地其丘陵の北に延ぶ。ここに耕地開け米・粟を産す。縣道南部を東西に通じて東は松橋町、西は三角町に至り路上バスを通ず。此地は往昔阿蘇神領田所の地一たりしが、天正八年薩州勢亂入の時、數百艘にて此地に上陸し矢崎城を攻め阿蘇の家人中村惟冬を殺し、是れより神領沒收せらる。明治三十二年郡浦村、中村を合

し新たに本村を建つ。(金桁鎮泉)背後に小丘陵ありて、水田を隔てて八代海を望む。泉質は多量の炭酸瓦斯を有する含鐵炭酸鹽類泉にして、飲用すれば胃腸病に特效ありといはれ、鎮泉サイダー・鎮泉ラムネとして販賣せらる。常用には加熱し胃腸病・婦人病・皮膚病・火傷・神經痛に效くといふ。(郡浦神社)郡社。祭神、浦比咩神・健甕龍神・速瀧玉神、神武天皇、郡浦大明神社・三宮大明神社とも稱せられ、阿蘇神社の別宮にして阿蘇四鎮神社の一たり。天養年中、近衛帝の勅に依り阿蘇大宮司友孝は健甕龍命以下二神を配祀せりと云ふ。もと神領三百五十町、綱田八十町を有せしも、天正八年薩州勢の矢崎城攻略の時に遂に開所となる。其後、明暦二年八月再興せられ、之より上下の嶽を築め社運舊態に復す。明治八年郡社に列し同年三月阿蘇神社と併せなる。例祭、十月九日。

コーノウラ 香之浦

村(福岡縣鞍手郡) ↓西川村(福岡縣鞍手郡) ↓武生水町(長崎縣)

コーノウラ 郷浦

町(長崎縣) ↓武生水町(長崎縣)

コーノウラ 河江村

熊本縣肥後國下益城郡の西南部。八代平野の北部を占め小川の西北に隣る。北は豊前村に接し東に小野部田村あり。東半は廣く西半は北境線が南の境界線に迫り細長くなりて西北隣豊前川村と東南隣八代郡和鹿村との間に突入り西方八代海に及ぶ。全

村八代平野北部の廣き沖積原の一部を占め西部海岸に新開拓地あり。之は八代平野西部の廣き新開拓地の一部をなす。砂川東半の南部を西流し西半北境を流れて八代海に注ぐ。東部及南部に水田拓く。鹿兒島街道は北方熊本方面より村の東部を南に走り八代町方面に出づ。省線鹿兒島線この西を南北に通じ小川驛あり。往昔の事は以て残すべきものなし。いま南新田・江頭・新田・川尻・河江・新田出・北新田・住吉の八大字よりなり南新田に役場を置く。(船繋ぎ橋)大字河江の藤江氏庭内にある。幹圍約八米。今を距ること凡そ八百八十年前後冷泉天皇の御宇藤井家の祖免高橋宗顯國家保護の爲め勅許を得て京師の男山八幡宮を祀役守山莊(小野部田村南部田)に勧請し、神興に尾従して來りしとき、勅使として御堂岡白下向し、永承六年十月上旬到着せり。(男山八幡宮舊記)當時の船守は藤井屋敷内に祭る地神にして、御船を繋ぎしは庭内にある楠なりといふ。是れ即ち船繋ぎ橋の名ある所以なり。

コーノウラ 郷之口

村(京都府)

コーノシマウチ 神島内村

岡山縣備前國小田郡の南方海上にある神島の北部及び島の片島を含む。面積八・五九方軒の小村。南境は三〇二米を最高とする丘陵を背負ひその北斜面と海岸の傾斜の平地よりなる。米・蘭草を栽培

す。瀬戸・神島内浦・網瀧・高村・寺間見崎等の村落は海岸に沿りてあり、村の東は本土の港口郡大島村に、北は笠岡町に西は遠く海を隔てて廣島縣瀬戸郡山口市と對す。神島内浦附近は風光明媚をもつて名あり。村内の玉柏は神武天皇駐軍の行在所なりと傳ふ。白石島の弘法漢・神ノ白石島等の名所あり。神島内浦・横島・入江新田の三大字よりなり、神島内浦に役場を置く。神島(安養院)大字神島内浦にあり。古義眞言宗。神吉山と號し俗に甲山寺薬師の名を以て著る。大覺寺末たり。草創沿革不詳なるも、文安元年安禪の中興を傳ふ。明治三十九年現在の堂宇を再建す。同村自性院との共同所管に係る胡本着色佛涅槃圖一幅(五幅一鋪、中央に涅槃、左右に涅槃後の八相を畫く)は鎌倉時代の作にして國寶たり。(自性院) 大字神島内浦にあり。古義眞言宗。青島山と號し、俗に善通寺薬師の名を以て著聞し大覺寺末たり。住持陶山義高空岡古城山に取職し重恩に報るや、その治癒を千手觀音に祈念せしに靈驗著し。仍りて報賽の爲め本寺を創建すと云ふ。のち災厄に遭ひ青島に轉じ次第で現地に三轉し現在に及ぶ。寺寶胡本着色佛涅槃圖一幅は同村安養院との共同所管に屬し國寶たり。

コーノシマウチ 神島外村

岡山縣備前國小田郡の南方海上にある神島の南部及び高島・白石島と附近の數個

の小島よりなり面積一〇・六方軒。北は神島内村に、南は北木島に東は水島遊に西は海を遠く隔てて瀬田川河口及び廣島縣瀬戸町に對す。村の中心は神島にありその北境には三〇二米を最高として東西に丘陵連なり、その南斜面の海に臨む所に神島外浦ありて主色をなし、附近に少許の耕地あり。又高島の北部に村落あり又白石島の北部にも村落あり何れも漁村をなす。いま神島外浦・白石島・高島・飛鳥の四大字よりなり神島外浦に役場を置く。白石島・高島・飛鳥は瀬戸内海國立公園の内に屬し、また神島外浦の海水浴場・日光寺梅林共に知らる。神島(高島)神島外浦の屬島にして、神島の南海岸を距る南方約一八五二米の地に位し、周圍六二七〇米、民家約四〇戸の一漁村なり。島の東端一角に王泊と號する所あり。これ我が國建國の創始に當り、神武天皇御東征の途次、軍旅を盡へさせ給ひし行宮の址と稱す。(日光寺) 神島外浦にあり。古義眞言宗。月照山と號し俗に五臺山文殊の名を以て著る。大覺寺末たり。創建年代不詳なれど、天文三年慶覺の中興なりといふ。備後福山藩主水野氏の所領所たり。寺寶多き中に、胡本着色地蔵十五像は支那若くは高麗の作にして國寶たり。境内の外浦公園は梅林の名勝を以て聞え、眺望亦絶佳を以て著る。

コーノシヨ 古布庄

鳥取縣伯耆國東伯耆郡の西部。北は下郷村に、

西は上郷村に、西南は以津村に、南は高城村に東は榮村に界す。面積二八・六一方軒。村は大山火山の東北の緩斜面を加勢蛇川西南方から東北方に流れ、山脚を削つて細長き谷を造る所にあり南境は約五〇〇米の高所を造り、北は二〇〇米以下の地に互り全村傾斜する細長き谷をなす。河川流域は耕作行はれ米・麥・甘藷を産す。又周囲の臺地は牧場に利用さる。人口は一方軒に六六人の少数を算するに過ぎず。此地は和名抄、八幡郡古布庄の内に屬す。延喜式に古布庄と見えりも蓋し此地とす。古布は中世庄名に呼ばれ、村名は蓋し其遺跡なり。明治三十三年古布庄村及び三本杉村を合して本村を建つ。いま古長・法萬・杉地・八反田宮場・矢下・別宮・三本杉・中津原・野井倉の十大字よりなり古長に役場を置く。(伯耆ノ大権) 指定天然記念物。大字宮場の春日神社境内にあり。唯一株斷崖上に立ち根元周圍約九米大枝條長く崖下に延び壯觀を呈す。椎の巨樹として有数のものなり。

コーノス 高州山

鳥取縣伯耆國東伯耆郡の東南方五軒。同郡鶴巢村にあり標高五六七米。火山岩より成る。南東横は鉢伏山(五四四米)あり。北麓は洋々たる日本海の波浪に洗はれ、沖合に七ツ島・鶴巢島、青螺の如く浮ぶ。

コーノス 鶴巢村

石川縣能登

國風至部の北海岸。輪島町の東に隣接す。面積二四・二四方軒。全村山地にて南部最も高く、鉢伏山(五四四米)・高洲山(五六七米)・天川山(四七五米)等連なるも北都(次第に傾斜し、五十米前後の斷崖に於て海に接し、砂濱を見す。北部段丘状の傾斜地には多少平地あり、その他は森林繁茂す。海沿に輪島より飯田に至る縣道通ず。此地古くは隣村南志見村と共に和名抄、風至郡男心郷の内に屬せしものか。鶴巢はもと山名なりしをのち村名に轉ぜしもの。いま惣瀬・久手川・深田・稻舟・西大野・谷内の六大字よりなり惣瀬に役場を置く。

コーノス 鶴巢

↓新郷村(茨城縣猿島郡)

【鶴巢町】 埼玉縣武蔵國北足立郡の北部。西北は箕田村、西は田岡宮村、南は馬室村・中丸村・常光村、東北は北埼玉郡笠原村と隣す。關東平野の一部を占め全部平地なり。東北部に水田あり他は殆ど畑地にして米・麥・蕪の産多し、町の西部を中山道通りて人家は之に沿ひて多く又省線高崎線通じて鶴巢驛(明治十六年設置)を置く。此地は近世、足立郡鶴巢領に屬す。或は深井庄の内か。中山道の宿驛にして、桶川宿と熊谷宿との中間にあり、四・九の日に市が立ちしといふ。天文二十年北條氏康の命を受けて此地の住人、小池三大夫の先祖、長門守と稱せし人、此地に磐を築き住し原地を開き市宿

新田と名付く。慶長七年に至りて當所を宿驛となし市宿新田を改めて鶴巢町と呼べり。徳川氏關東入國以來は幕領となり、正保の頃は伊奈半十郎の支配地たり。寛永六年伊奈半十郎領地せり。それより引續き代官の支配地なる。里見八犬傳・九ノ四「既にして武蔵なる、熊谷と鶴巢の、間と豫傳聞く、豫野を國邊の新はや鴨昏になりけり」(鶴巢寺) 淨土宗。天照山長忠院と號し關東十八檀林の一なり。建長四年記主禪師開創す。慶長四年住持不殘、徳川家康の歸依を得、寺領三十石の朱印を寄せらる。同十一年、後陽成天皇不殘に紫衣の綸旨を賜ふ。明治二年更に勅願所の繪旨を拜受す。

コーノセ 神瀬村

熊本縣肥後國球磨郡の西部。球磨川の東岸。球磨川河口八代郡八代町と上流人吉町との中間にあり。南は一勝地村に界し東南は渡村に、東は山江村に隣り、北は八代郡上松求麻村に接し、西に豊北郡齊濟來村・吉尾村・大野村あり、九州山脈の高峻な山岳地にて中央東側に楢ノ鼻山(九二八米)聳え南方及西北方へ峯を連ね、東北境の約六一七〇米の連嶺との間に球磨川支流西北流す。一支脈は西南方へ延びて中央に觀原山(八三七米)・西南部に権現山(六九四米)を起し山地全體に西地を北流する球磨の谷へ傾斜す。楢ノ鼻山より東北方へ延びる一脈は、東隅に隣居する一〇〇二米の白石山へ峰を連ね、兩山地

間に南流する球磨川支流の小さな揚合谷を掘く。全村山地起伏し木村・竹村等を出し又農産物には芋類(里芋・甘藷)・米・糠穀を産すれど自給自足に十分ならず。人口密度一方軒につき僅に四九人なり。特産には松茸・蜜柑・鮎あり。縣道は西方佐敷町方面より西境の球磨川の谷に出でその西岸に沿ひ人吉町方面に至る。省線肥後線は八代町方面より同じく球磨川西岸に沿ひ上流人吉町方面に通ず。往古の事は以て傳す可きものなきも、再藩時代には庄屋が統治し、其下役に横目と奥長が居り、後見役に上目付を置きたり。部落には五人組ありて其中に組頭一人を置き、五組を合せて大組といひ、其中に組頭一人居り何事も處理し、組中は毎月集りて協議をなし組中にて取計難きものは役所に申出で其指令を受く。明治四年廢藩置縣と共に人吉縣置かれ、其年十一月八代縣となり、明治六年一月白川縣となり之に屬す。明治二十二年町村制施行の際神瀬村と稱す。而して古く切支丹宗門と一向宗の信仰を禁じ、また大勢の集會、小知下徒以下類の齋物、三間以上の樂作家、白壁天井張、長押作り、傘指下駄の如きものは禁ぜられたり。村内に神瀬石灰洞あり。洞門の高さ一四米、幅三六米中、奥行七六米、鐘乳石あまた垂下す。また龜洞石といふ珍らしき岩石あり。此石に置き傳説あり。昔球磨川中に龜石といふ大石ありて舟筏の下る防げを

なす。林蔭左衛門なる者これを割りて取除かんと苦心せしが容易に割れず、因却せしところに忽然として一匹の狐現はれたり。藤左衛門は不思議に思ひその狐に此龜石を割る術を教へよと云ひしに、狐は暫く藤左衛門の顔を見詰りしがそのまゝ山中に隠れたり。其夜藤左衛門の枕頭に稲荷現れ、龜石を割るには石の上にて大火を焚き、のち水をかけよと言ひ終るや稲荷の姿は忽ち消え失せたり。藤左衛門は大いに喜び夜の明くるに及び其教への如くせしに石は見事に割れて舟筏の下るに便となれり。これより此地を龜割と呼び今は球磨川中の名勝となる。

に和名抄、香川郡大野郷の内とす。南流志に大字加田に西城と稱する館址ありと見え、弘治二年本山長治の署名ある古書には加田城の名見ゆ。或は加田は堀田の訛にして土州古文書中に署名なる堀田小三郎佐伯頼貞・同又三郎國貞の故城にはあると云ふ。いま神谷・加田・小野・鹿敷・成山・中道の六大字より成り神谷に役場を置く。「貴船神社」大字神谷にあり。神社、祭神、高野神。創立年次不詳なれども、往古より當村の内、奈路・櫻谷・タレ石・新在家・馬木・小松原・藤部等の産土神にて、もと貴船大明神と稱せり。明治元年貴船神社と改め、同五年郷社に列す。社殿に本殿・拜殿・幣殿・御炊殿あり。例祭日を七月八日・十一月五日の兩日とす。「三上八幡宮」大字鹿敷にあり。神社、祭神天皇を祭祀す。創立年次不詳。神社記に、彼の宮東西に當て、ミヤヂと申すホノキ迄三町餘の馬場有之由、祭禮の道具有之、箭矢の根に似たる品三十三本有之、社床十代免許、中略、元禄時代代迄は燈明田、飯田、修正田として本六反四十七代餘有之、之由、檢地帖に有之、宮林一ヶ所山高平等四十間横平等二十間山方支配云々とあり。往古は附近七ヶ村の氏神たりき。明治五年郷社に列す。本殿・拜殿を有す。例祭日を七月二十八日、十一月五日の兩日とす。「安藝三郎左衛門墓」大字成山にあり。坊名堀之助、長じて三郎左

衛門と稱ふ。誰は家友、安藝三千貫の領主安藝國虎の二男、幼にして近康安藝左京之直の養子となる。永祿十二年安藝家没落の際一旦阿波に亂を避けて開居せしが、波川の城主波川清宗の妻、波川家滅亡後養子して養子と稱へ、土佐郡成山村に開居せしが、叔姪の關係を以て尼に招かれ土佐に遷りて成山村横敷に居る。偶々旅客彦兵衛なるもの三郎左衛門寓居に宿す。彦兵衛朱漆寺紙の製法に精しかりしため、養子尼と之を習す。或は伊豫の新之丞なるものより抄紙の方法を傳へしともいはる。ここに於て尼と共に製紙の業を創め、これを人々に傳し、遂に土佐に製紙業の隆盛なるに至らしむ。尼また染色に巧みなりし爲め、三郎左衛門之を製紙に應用、終に七種の色紙を抄出す。尼は晩年紀高野に登りてその終る所を知らず。慶長六年高野山内一豊土佐に入封せらるるや、三郎左衛門抄紙數品を獻呈し、一豊より國産を興起せるを賞せらる。七種の色紙は薄政時代汎く魚紙と稱へ、黄色・桃色・紺色・紫色・靑色・柿色・柿色及び朱漆等々なりき。一豊爾後年々之を將軍家へ献上品となし、三郎左衛門に御用紙方を命じ、土佐一圓抄紙の監督に任ず。又國産の膠を維持する爲め、粗製濫造を防ぐべく、抄紙業の取締役を擧りて子孫相傳ふ。三郎左衛門、御用紙役に備多郡代官役を三十四年勤務し、寛永十一年十月七十三歳にて歿す。

大正八年第五位を贈らる。(しるはせさんだん) 大字神谷小学校にあり。本館は、初め高野郡佐川町廣丸東光寺址に於て牧野博士に發見せられたる珍奇なるものにて、のち本校々庭に高野郡日下部村佐木越方道側にて見出さる。この校庭に存する最大のものは幹圍七尺、根元一丈五寸なるが、小なるものは幹圍五尺六寸、根元四尺四寸より、最小幹圍二尺七寸、根元三尺三寸のものまで、すべて五本あり。小なるものは幹圍も六尺以上地下に埋まれば居り。他に校前に幹圍二尺五寸、根元二尺五寸のものあり。

コーノハル 神原 省線日豊本線の一驛(大正九年設置)。大分縣南海部郡直見村にあり。

コーノマイ 鴻ノ舞 北海道的に別町(北海道)

コーノミナト 神湊町 福岡縣筑前國宗像郡の西北岸、玄海灘に面し釣川に跨る。西南部は海に面する勝浦村に接し南は田島村に界し東は海に臨む池野村に隣す。中央に釣川北流しその東半は低き臺地をなし西北部に草時突出し其先に懸崖あり。海岸は平直なる砂濱なり。全村森林廣く耕地少し。交通は海運による外概して振はざるも釣川に沿ひ道路延びて東南方赤間町方面に至り博多街道に連絡す。この街道とほぼ並行して省線鹿児島線通じ東南約七軒に赤間驛、南方約六軒に東郷驛あり。附近町村と共に

事案地帯に屬す。此地或は和名抄、宗像郡海部郷の内と稱せしものならん。熊風土記に據れば、町名は北方海上に存び官幣大社宗像神社の中津宮・奥津宮の所在地たる大島(大島村)に此地より舟の往來ありしを以て神湊と名付けしものならんといふ。また邊津宮はもと此地にありしもの如く、今その址存すと。明治三十九年行制を施し、いま神湊・江口の二大字よりなり神湊に役場を置く。

コーノミヤ 國府宮 下瀬澤町(愛知縣)

コーノヤマ 鴻野山 鳥山線の一驛(昭和九年設置)。栃木縣那須郡荒川村鴻ノ山にあり。

コーハ 黄城 關西線の一驛(昭和六年設置)。朝鮮咸鏡北道穩城郡美浦面にあり。

コーバイ 黄梅山 朝鮮慶尙南道にある山。伽耶山脈の一峯。山頂部・居昌郡・陝川郡との交界上に聳ゆ。標高一〇四米。

コーハラ 江原 長野縣信濃國東筑摩郡原村にありし善光寺街道の宿驛。

コーバラ 郷原村 廣島縣安藝國賀茂郡の西部。吳市からは東方約三軒の所にあり。北は下黒瀬村に、東は中黒瀬村に、東南は野路村に、南は廣村に西は安藝郡昭和村に界す。村内は一〇〇米以下、緩かな起伏をもつ丘陵よりな

東南部に九月峰(二一七米)ある外面には概ね低山性の丘陵起伏して山地をなし、ただ僅かに南部沿岸に小低地ありて耕地拓くのみ。主産業は水産業にして養殖これに次ぐ。西方熊川江に屬鳥島爲存ぶ。島の中部に一五五米の山地ありて島地また山地を成す。二等道路東北より来り面の中部を西南に走る。いま食餘・冷井・松山・石浦・月浜・磯崎・安樂・鳳岡・掛岩・登山・若岩・禮津の十二大字よりなる。

コービリョー 港尾寮 下六町(臺灣臺南州東市郡)

コービン 興濱 省線宗谷線の一部。北海道北緯郡北見國枝率郡オホツク海岸に通ず。北見線濱頓別驛(頓別村)より分れ海岸に沿うて枝幸村の北見枝幸驛に至る。全長三〇・四軒。昭和十一年の開通。この線は將來興濱南線に接続して名寄本線興濱驛に達すべきもの。

【興濱南線】 省線名寄線の一。北海道北見國枝率郡にあり。名寄本線の興濱驛(興濱村)より分れ海岸に沿うて北に進み雄武村の雄武驛に至る。全長一九・九軒。昭和十年の開通。將來北に延びて宗谷線の興濱北線と接続するもの。

コーフ 甲府 山梨縣甲府市を中心とする盆地。山梨縣の自然的な地理的單位の一なる東部の郡内山地に對する西中を占

む。盆地は美光寺平・松本平・諏訪湖盆地に續く一構造盆地にて北方を除く外、周囲は明瞭な断層崖により境さる。四周の山地より出る釜無川・信吹川其他の諸川は割れる岩石・砂礫を運搬堆積し次第に盆地床を埋め富士川となりて駿河湾に排水す。盆地の基底には不透水層の上に多分に八ヶ岳・茅ヶ岳方面より流下せるものと思はれる安山岩質の岩層が露出する。その上に礫層・砂層・粘土層が互層をなす。盆地の周囲には其他の丘陵が認め之等の堆積物による数多の扇状地が形成され、其が中央氾濫原と共に山梨縣の重要な生産地となり多くの聚落を立地せしむ。

盆列する丘陵列にて大塚山(三四二米)・米倉山(三八〇米)・坊ヶ峯(三九二米)等約四〇〇米の高度を示し、前方に急斜しその邊縁は散列に雁行し後方は緩斜して御坂断層崖に接しベンチ状を呈す。各丘陵は梨樹式河川によつて分たれ、各谷頭盆地を有す。右左口・藤谷等は其の代表的ものにして、之を貫ぬくと一通谷を生じ、之等の断層線上には温泉分布す。ローム層・砂礫・粘土よりなる洪積層なるも古扇状地とも稱され、また露出せる岩層より遙に盆地西北方の重崎・龍地・龍岡の各盆地と對應して之等と同時に大山噴出物の流出堆積せるものが断層運動によつて變動を蒙りしものと想定さる。二、市之瀬原・赤石山脈の南々山の城山高地の東麓に嘗て發達せし扇状地が曾根断層と同時に變動により断層を生じその断片が窪地として残りしものとされまた山崩れのため生ぜしものと説くものもある前者が正しきものならん。三、御坂複合扇状地・御坂・赤石兩山麓の古扇状地が新たな断層により破頭され、更に水蝕も之に加り丘陵又は窪地として殘片を留めしもの兩山麓に新扇状地が發達す。御坂山麓には信吹川の三支流金川・淺川・御手洗川の上流等の作りし扇状地が御坂丘陵の東部に横たはる。此うち金川の扇状地が急傾斜(六軒に二〇〇米の傾斜)をなすと、大ききに於て最も優れ、下部は三川による扇状地相互に接觸す。之等の河

川は何れも平時は水に乏しく且古來の氾濫により流路を何回となく變じ砂礫を放出す。御手洗川のみは特に扇状地を著しく西方に偏つて流る。四、赤石東麓複合扇状地赤石山地より東流する御動使川の扇状地は廣大な延長を持ち他の小扇状地を併呑し大規模な標式的扇状地を形成して釜無川を東方に曲ぐ。扇状地は六軒につき一五〇米の傾斜を示し洪積層の砂礫は御動使川によつて運搬堆積され水利に乏しく、平時は潤川にして水は谷口より地下に入り末端(中江原郡三惠・鏡中條・藤田村等)に至り湧出する。之等は鑽井・冷技・冷泉等の泉源として利用せられ、水田と畑地の位置が之等の水利に左右される事は頗る大なり。扇状地は天井川式用水路網の分岐に依存す。五、信吹川・重川及び日川複合扇状地・大善羅山麓の扇状地は信吹川・重川及び日川の扇状地の複合なり。信吹川は龍坂峠より、重川は御坂峠及び大善羅峠より、日川は被子峠より發し各谷は深き故その運搬量も僅少なからず。されど谷ノ口より盆地床へ長く延びて流るため勾配は金川・御動使川に比し甚だ大ならず。故に扇状地といふよりも山麓沖積原が適當ならんか。更に注目すべきは鹽山・山梨岡がこれ等沖積原のため埋没せしめられつつあることなり。六、荒川・相川の扇状地・北嶺山地より流下する荒川・相川は各扇状地を作るも規模は最も小なり。而して之等は

山麓沖積原といふも可にして甲府市はここに立地す。七、釜無川・濁川の沖積原・四河山麓の複合扇状地及び山麓沖積原は邊縁より次第に盆地の埋めたる程度の勾配と緩がりをもち盆地の中心に向ふ。釜無川は自己の流域を御動使川の扇状地に奪はれて東流す。濁川は梨樹式に中央の水を集めて信吹川・釜無川の會合點に向つて流れる御坂・赤石兩山麓の二大扇状地の著しき發達、日川・信吹川が北進し御動使川が東進する時の新な地立は此地域なるべし。(氣候) 甲府は標高二五〇米、四周山地を以て圍まれし盆地にして、殊に南方は御坂・富士・愛鷹の山地にて海洋と遮断されし地方ゆゑ、比較的大陸性の氣候の特色を示す。毎年の降水量の季節的變化は夏秋に多く冬期に少き表日本式の傾向を現すも、五月・六月・七月の梅雨の後の降水量の少なきを異にす。要するに海洋性の無霜季節は甲府に於ては一七七日、晩霜は十一月二日、初霜は四月二十七日にして亞大陸性氣候のため比較的短し。降水量は最少一三〇〇mm以下の地域は盆地平原の東部甲府一日下部間であり、その南部及び西部は一三〇〇—一五〇〇mm、その西南部の市川大門—飯沼は一五〇〇—二〇〇〇mm、その南は更に増加し鹽合に至れば二五〇〇mm以上となる。また雷雨地帯としては我國にても有数な所にして夏は毎日雷雨するといふ。沼津と大陸性の松本との中間に

して亞大陸性氣候を示し甲府とは比較的氣候點を持つ。盆地内の一月・八月と全年との等温線圖によれば次の各地域に分類さる。一、平原帯(低地帯)と南漸移帯盆地の中央低地全部と、夫より富士川の谷に長く延びる一帯、にて最高温地帯をなす。富士川の谷は山梨縣内中、最も温暖にして亞大陸性の甲府盆地と海洋性の駿河海岸との漸移地帯とす。二、高地帯(山腹斜面地帯)と北漸移帯。盆地の四周山地の内側下部斜面の地域にて低地帯よりも冷涼なり。また西北へ釜無川上流の谷へ侵入して信濃高原に連る。三、山地帯(山頂山地帯) 西の赤石山地、南の御坂富士山地、東の大善羅山地、北の境界山地の地域にして標高高く一般に低温なり。更に低地と高地との氣温の差は一月にては全年及び八月よりも小。また中央低地(平原帯)より山腹斜面地(高地帯)・山頂山地(山地帯)と順次標高の増すに従ひ、三帯に同心圓狀に氣温低下し、富士川峡谷より盆地・富士見(釜無川)峡谷と順次南より北するに従ひ、三帯に氣温低下す。(農業) 産業は農業の他見るべきもの少く僅に甲府市を始め小笠原・鹽山・鹹澤・市川大門・勝沼・重崎等の地方が邑に生糸を製するに過ぎず。従つて農業を主とし米・麥類(大麥・小麥・裸麥)・大豆・粟・稗・玉蜀黍・蕎麥・甘藷・馬鈴薯・蔬菜類(蘿蔔・葱・漬菜・甘藍)を産出する他、甲州葡萄酒として世に知られ

たる葡萄の産あり、養蠶も盛に行はる。盆地床は比較的平坦なるを以て米作に適し自給す。田の分布を見れば釜無川の氾濫原なる中央氾濫原に一大集團あり。外に御動使川及び金川・淺川・御手洗川の複合扇状地の末端、御坂断層崖下及び赤石断層崖下の複合扇状地の頭部、大小河川の兩岸低地、平林谷頭盆地、開原高地に於ける矢川・小室・仙洞田(南巨摩郡穂積村)の諸谷頭盆地と、曾根丘陵の後次低地、茅ヶ岳・八ヶ岳の裾野以上の所分布す。従つて米の産額は田の分布の示すが如く、中(甲府市)・西山梨郡及び中巨摩郡の東半、地方はその核心地域をなし、峡北(北巨摩郡)・峡東(東山梨郡・東八代二郡)これに次ぎ、峡南(富士川の兩岸南巨摩・西八代二郡)は最も少し。畑の分布は御動使川の扇状地に最も顯著にして金川・淺川・御手洗川の扇状地、曾根丘陵の後背斜面、第三紀新層の高地即ち城山高地の南部と、御坂山脈の西端なる低山性山頂及び山腹、日下部の西方高地及び見川を隔てし天狗山の南斜面の裾野、中央氾濫原に於ける古砂洲地等の地域にて畑の總面積の二倍に當る。麥は米と異り畑は勿論、田の耕作も可なるを以て田と畑との分布のみにては直に判明せざるも、大麥にて田に多く産する地域は峡北(北巨摩郡)・峡中(甲府市・西山梨郡及び中巨摩郡の東半)・峡西(中

巨摩郡の西半)・峡東(東山梨郡)・畑に多く産する地域は峡南(南巨摩・西八代二郡)・峡東(東八代郡)なり。小麥の總額は大麥ほど多からず。峡東・峡北地方に多く畑南に少し。裸麥は峡南(南巨摩郡)最も多く、峡東(東山梨郡)これに次ぎ他は殆ど見ず。田畑を通じたる米・麥の總額より見れば峡北・峡中・峡南等に多く峡東に少し。峡東の少きは桑畑・葡萄の多きによる。葡萄の産地は峡東に最も多く、峡中これに次ぎ他は殆ど見ず。葡萄栽培の起原は山梨縣によれば文治二年八代郡上岩崎村(今の東八代郡那須)の人、兩宮御前山なるもの同地に植ふしに始り、のち隣村勝沼村(東山梨郡)に移植すと。盆地に於ける夏季の亞大陸性高温・葡萄の成育を助成し、また熱風も生育・成熟を助くるもの如し。御手洗川の扇状地(観村を含む)及び大善羅西麓の扇状地は、古生層の風化土壌より成るを以て栽培に好適なるべし。養蠶業は米麥作と共に該盆地の居住民にとり重要な収入となり、中部・關東地方に互る養蠶地帯の一部をなす。養蠶地帯は峡東と峡西が二大群をなし峡北これに次ぎ、また東西兩扇状地に最も盛にて、北方の火山の裾野これに次ぐ。舊の産額は峡東(東八代・東山梨郡)最多にて峡西・峡北の順なり。然し局部的には峡西の御動使川の扇状地に集積す。(交通) 盆地と隣接地域との交通は各鞍部・谷・峠を通じ、

甲州街道は種子峠(一〇九六米)・日川・飯川の各、善極街道は大善羅峠(一八九七米)・御坂峠(一四七六米)・重川・多摩川の各、秩父街道は龍坂峠(二〇八二米)・信吹川・荒川の各、依久街道は國界分水界・鹽川・千曲川の各、及び八ヶ岳の東裾野、信州街道は富士見鞍部(約九五二米)・釜無川・宮川の各、駿信街道は御動使川扇状地、駿州街道は富士川の谷、駿州中道街道は、柏尾坂(御坂坂八五三米)・女坂(二二〇〇米)・富士の西裾野、沼津街道・鎌倉街道・駿州東街道は、御坂峠(二五二五米)・龍坂峠(一一一五米)・富士の東裾野等を經由す。省線中央本線は盆地の北邊を甲州街道・信州街道に沿うて走り、この甲府驛より、富士川に沿ふ路線、富士身延鐵道を分岐す。最後に人口分布を見れば、甲府市附近・御動使川扇状地・鹽山・日下部・勝沼附近の信吹川・重川・日川複合扇状地等が密にして、その他は盆地床・溪谷・山地と順次漸減して地域性に適應す。人口密度は中央低原の米作本位の地域よりも、御動使川扇状地の潤はゆる原七郷の養蠶・果樹本位地域に大なり。【甲府市】 山梨縣の行政・産業及び交通の中心都市。甲府盆地中部の北邊に位置し、東北半は帶那山(一四二三米)の南麓及び棚山等の山地にして、南西半部は甲府盆地の平野に連る。即ち東北に東山梨郡の八幡・平等・春日居の三村、東南に

西山梨部の甲部・玉諸・住吉の三村、西
南に中瓦摩部の大磯田・西條・龍玉・池
田の四村、西北に西山梨部の千塚・大宮・
千代田の三村を統らし、面積四二・四三
平方町を占む。産業には製糸工場多く生
糸は工産品中の第一位に居り、水晶・瑠
璃の加工品これに次ぎ、その他菓子・絹
織糸・絹酒・木製品・醤油・機械器具・
印刷細工品・葡萄酒等は市の工産品中の主
要品たり。また市の周囲部には農業盛に
行はれ米・蕎麥・桑葉等の産多し。市
の中央部を南北に通ずる御町・御町・御
町の西なる御町等は主要商店街をなし、
御町・相生町には米穀商、山田町には糸
織商多し。省線中央本線は市の中部を東
西に貫き、東部に酒折驛(大正十五年設
置)、中央部の橋町に甲府驛(明治三十六
年設置)を置く。社線富士身延線道と山
梨電氣線道は甲府驛に起り、前者は市の
東南部を迂回して富士川の谷に向ひ、市
内に金手・善光寺・甲府南口の驛を設
け、後者は御町・泉町を経て西南方御
町に向ひ、また道路四方に派出して近郊
の諸邑を繋ぎ、何れもバスの往來あり、
市は交通の一大中心をなす。かく中央線
の電化・富士身延線の連絡・國道八號線の
改修等による交通の便益は、從來に比し
著く増進せしめ、城下町の繼承者として
の政治的・軍事的の使命に立つ本市の價
値は、今なほ消費的都市の面影を留む。
更に最近には富士五湖地帯・其嶺地帯、

八ヶ岳地帯・南アルプス地帯・下野身延
地帯・大善園地帯等の景勝地を控へ、市
内には温泉の湧出多く之等景勝地の基點
都市たらんとし、近年温泉の開發により
益々温泉の増加を見る。本市は古く甲斐
國府の地なり。もと府中と呼ばれ、今の市
の北部古府中(舊相川村の中部)にあり、
戦國時代武田信虎・晴信(信玄)・勝頼三
代の居城たり。天正十年武田氏滅亡後、
織田・徳川・豊臣の三氏相次いで之を領
し、文祿三年に至り淺野長政、豊臣氏に
よりて此處に封ぜらるるや、舊一條道場
(一蓮寺)を稲門に移しその地に城地を修
め、府の民戸を移す、是れ即ち今の甲府
城にて實に本市の濫觴なり。慶長五年徳
川氏は淺野氏を和歌山に移封してこれを
直轄す。寶永二年御澤吉保ここに封を受
け、更に城池を修理し市域を擴張し規模
を改む。享保九年御澤氏大和國郡山に移
封の後再び天領となり、勤王支配二人を
置き番士・與力・同心を設けしめ、城下を
守り國政を専らしめて明治維新に及ぶ。
明治元年御澤府を置き、次いで甲斐府と
し、同二年更に甲府縣と改め、同四年ま
た山梨縣と改稱す。同十一年郡區編成法
の實施により西山梨部の所管となり御町
外三十六ヶ町といひしが、同二十二年市
町村制施行せらるるや、上府中二町・稻
門・飯沼の兩村を合併して市制を布く。
開米次第に繁榮し、縣の商工業の中心と
なる。同三十六年中央鐵道東線(今の中

出し海州・盛岡温泉に利用され、或は今
日甲府城を中心とする附近一帯にボーリ
ングにより温泉を掘鑿せるが如き、この
地形地質に依存關係を有するものなり。
城郭の構造は中央に内城あり、内郭之を
抱擁し、外郭更之を重圍す。内城は本
丸・二ノ丸及び東・西・南の五郭より成
り、天主閣は本丸の東に立ちてその基盤
は附近の低地面を抜くこと三五米、甲府
盆地を一畔にをさめ得るなり。内郭は内
城を圍繞し、南北二部に分る。南郭は東
西二百間・南北三百間、内に追手小路・
西小路・中小路・土手小路等ありたり。
今日の櫻町通・相生町北側等は明治初年
内郭の城濠を埋めて出来せる町なり。北
郭は矩形にて東西三百五十間、南北五百
間、先手小路・新先手小路・裏先手小路・
馬場先小路・山ノ手門前・裏下小路・橋
小路・橋小路等ありたり。南北兩内郭は
總て土塼を以て圍み、塼濠をその外脚に
廻らせり。土塼の濠溝は今も上府中に残
り、濠も一部を除きてはこれを追跡する
を得。もと規模雄大なりしが、今は内城
の石塼・南側の内濠を存するのみ。内郭
と外郭とは十五ヶ所の見付によりて通じ
たり。内郭は武家の邸を始として、倉庫・
厩舎・燈籠館・訓練場・花園・藥園等設
けらる。城下町に特有の武家屋敷はこれ
なり。外郭は南北二郭より成り、北郭は
上府中にて、淺野氏が武田氏の城下町を
改造し、南北五條・東西三條を劃し、古

城屋以下の八町を郭内に置き、東麓以下
の町を郭外に置けり。南郭は古府の市街
を模倣して郭内を東西六條・南北四條と
し、拂以下の十一町を置き、郭外に川尻
町は東は善光寺より、西は豊川、南は一
蓮寺、北は御澤寺に及び、街衢端正なる
大都市となりたるなり。城址は大部分公
園となり、御嶽公園と呼ばる。
〔御澤寺〕 舊相川村大字古府中にあ
り。武田氏三代之の居館。古府中とは勝頼
の新府城(北瓦摩郡中田村)に對する稱呼
にて、當時は相川村一帯の地の汎稱。永正
四年信玄の父信成甲斐の國主となり、同
十六年此地に御澤寺を建つ。天正九年
信玄の子勝頼、新府城を營みてこれに移
る。此間六十三年。天正十年武田氏亡び、
織田氏の將河尻貞吉此地に居る。徳川氏
本州を領するや、此地を治所とし、羽柴
秀勝・加藤光泰・淺野長政等來り治す。
文祿三年甲府一條の甲府城成るに及びて
廢す。いま其址に信玄を祀る縣社武田神
社あり、往時の土塼・塼濠・石垣を存す。
〔甲府八幡〕 縣社。祭神、大菩薩・應神
天皇・神功皇后。承久年中、石和五郎信
光が八幡神を勧請せるに創まるといふ。
武田氏代々の守護神。舊稱國衙八幡・國
府八幡。例祭陰曆三月十五日・十月十五
日。神事申八月十五日の流鏑馬神事は最
も盛儀を極む。〔武田神社〕 御澤寺に
隣座。縣社。祭神武田信玄。大正八年創

建。例祭四月十二日。例祭當日神輿は甲
府市へ渡り。武田の二十四將に假裝せる
騎馬行列を行ふ。社殿の三條實美寄道太
刀一口は國寶。〔穴切大神〕 穴切町に鎮
座。祭神、大己貴命・天照皇大神。
創立年代は詳らかならざれども古傳を有
す。即ち村上天皇の御代大湖なりし頃、
國司此神に祈誓し湖水を決して遂に良田
を得たり。故に穴切明神と尊稱せりと云
ふ。例祭、四月十九日・十月十五日。本
殿は一間社流造、屋根檜皮葺にて構造様
式よせば桃山時代に屬す。一間社流造
の小建築なるも、本殿に支輪を有する出
組を用ひ、雄健古朴なる葺成木鼻拳鼻等
を應用せり。〔甲斐宗廟社〕 工町に鎮座。
祭神、句々理比賣神。木花開耶姫命(相
殿)。創建年代詳かならず。延喜の制に名
神小社に列す。もと甲斐宗廟の頂上に鎮
座ありしが、永正年中武田信虎は藏田村
に奉遷し、のち之を西郡筋結澤村長藏寺
山の南麓に遷し白山権現と云ふ。後、淺
野彈正長政の甲府城を築くや、曲輪に奉
遷す。此時に東青沼村なる淺間神社を合
祀せり。いま相殿の木花開耶姫神が之な
り。明治六年總社に列す。例祭、陰曆四
月十五日・六月十五日。〔稻積神社〕 大
田町に鎮座。祭神、宇氣母智神。
初め古の城地丸山に祀る。中昔、甲斐源
氏一條氏に館するや、鎮守として崇敬せ
り。例祭、五月二日・三日・四日、十一月
三日。〔一蓮寺〕 大田町にあり。時宗、

あり。臨濟宗妙心寺派。瑞巖山と號す。甲府五山の第一。逸見清光の草創なり。説三和尙を開山とす。本尊は釋迦牟尼佛。他に刀八思沙門・摩訶地蔵の二體あり。また武田信玄夫人を奉る。「花光院」大工町にあり。新義眞言宗智山派にして眞如山と號す。本尊覺神立像。大永年中の創建。開基は武田信虎。開山は弘法法印たり。古昔は覺神堂と稱し寺領若干を附せられしと傳ふ。「教安寺」金手町にあり。淨土宗にして甲府五山の第一。本尊阿彌陀如來。永正元年の創建。開山は教蓮社使譽提持上人たり。曾つて徳川家康の祖父信忠住居し、安福院と號せしことあり。古昔は寮舎十六、末寺十四箇寺を有せし大寺院なりしと傳ふ。「玄法院」久保町にあり。眞言宗醍醐派。法性山と號す。建久年間逸見清光(新羅三郎義光孫)の庶子清祐の創建たり。室町末期國主武田信虎之に歸依し再興す。武田家滅亡後久しく寺運衰頹せしが、明治十二年前舊の時、諸堂を建立改修し縣下の燭頂となす。「眞因寺」曹洞宗。増福山と號す。新羅三郎義光嫡男佐竹義業の開基に傳り。のち拈笑守英これを再興す。爾來、當宗五派の一拈笑派に屬す。徳川家康朱印地を寄す。享保十八年官裁に依り一派三百六十餘箇寺の總本寺職となる。いま一派百餘箇寺あり。「甲府別院」三吉町にあり。眞宗大谷派。化國山光澤寺と稱す。はじめて甲府縣會にありしも、天文年

中、住持實了北條氏康と争ひ過れて甲斐に入る。武田信玄、孫に寺地寺領を寄せて再興せしむ。天正十年織田氏の兵火に罹り、堂宇廢頹せしにより、二世嗣了、本尊を奉じて信州大洞村に遷居す。徳川氏甲斐を領すに及び、嗣了此地に來り堂宇を再興す。のち寺運再び傾けるに及び、慶長十八年幕府に請ひて本山を掛所とす。安政三年炎上、文化三年眞木堂成り、大正元年本堂竣工す。「信立寺」若松町にあり。日蓮宗。廣教山と號す。大永二年武田信虎の創建に傳り、身延山主十三世寶珠院日傳を開山とす。文祿三年徳川家康これを再興せしむ。のち數度の災厄に遭ひ久しく廢頹せしを、明治十五年四世日覺の入山によりて漸く本堂成る。爾來諸堂宇の改修相續き一山の景観整ふ。當寺は古來身延隱居所、或は身延別院と稱せられ、當宗屈指の名刹たり。境内に武田信虎、佛入嵐外日儀の各墓碑等所在す。「瑞泉寺」市工町にあり。淨土宗にして青龍山と號す。本尊阿彌陀如來。甲府淨土五箇寺の一たり。明應七年善源社吳譽蓮公上人、鎌倉の瑞泉寺を祖として創建す。維新前は末寺十五箇寺を有せしといふ。「清淨寺」白木町にあり。日蓮宗。妙清山と號す。天文年中の創建。開山は自得院日實上人たり。寺寶に日蓮上人木像二軀あり、一は永祿七年領主小室相の寄贈、一は鎌倉妙本寺の日法上人の手刻を授けしもの。「善光寺」淨土

宗。定頼山と號す。齊明天皇の御宇國司大仁本大善光親の創建にて、代々皇室・武門の歸信篤し。永祿元年武田信玄、正親町天皇の勅を奉じて信州善光寺如來を遷して開基す。普濟奉行は山本勘介、同八年落慶し三月大供養を執行す。開山を信州善光寺三十七世大本願觀世上人となす。本尊は三國傳來圓存檀越の阿彌陀如來なりしが、慶長二年豊太閤の靈夢により五百の夫人、二百三十六頭の傳馬にて京都の大佛殿に遷せしが、後に信州に歸坐せり。因りて當山無住四十年に及ぶ。後山に遊れば中八勢を雙眸に收む。「四方」村落の中を善光寺。嵐外阿彌陀如來及び兩脇侍像三軀・阿彌陀如來及び兩脇侍像三軀(木造)は、何れも國寶、藤原末期の作。「積翠寺」臨濟宗妙心寺派。萬松山と號す。開創は行基菩薩・中興開山は竺摩和尙なり。境内に大岩ありて泉流これに激して瀑布をなせしよりも石水寺と云へり。「尊徳寺」金手町にあり。淨土宗。功徳山深草院と號す。大永年間信虎の創建に傳り、忠直社辨譽を開山とす。天文二年奉請に依りて勸額を賜ふ。徳川家康慶長當寺を召拜に充て祈禱を命じたり。舊寺領七十餘、末寺十九坊を有せりと。「大泉寺」曹洞宗。大永年間信玄の開山にして、開基は武田信虎なり。もと甲斐國曹洞一派八百餘寺の録司を勤め、寺領として三十六石を有す。五世甲斐の代災厄に遭ひ、永祿十

年殿堂再建せらる。文祿二年淺野長政當國府中に封ぜらるる當寺を以てその菩提寺とせり。信虎の五輪塔の墓あり、高さ一五米。この廟所の境内に相川の八房梅ありて、一花に三十八の雄蕊を持ち、果實多きは八個に及ぶ。故に八房梅の名あり。武田信虎像一幅(國寶)額本著色は、武田信玄の父たる信虎の像にして、信虎の没後程なき天正二年端午、武田家の祈願所たる長壽寺二世春國和尙の著贊せりあり、それによれば此圖は長壽寺の信虎夫人像とともに、信虎の子、清盛軒信廉の筆と知らる。「武田信玄墓」驛の東北三軒の田圃中にあり。石玉垣を廻らしうちに「法性院大僧正觀山信玄墓」と題する高さ約三米の碑石あり、安永八年の建立に成れり。「長壽寺」愛宕町にあり。臨濟宗妙心寺派。瑞雲山長壽國禪寺と號し、甲府五派の一に屬す。開山は夢窓國師と傳へ、初め互摩郡結淨にありしを武田信玄現地に移す。仍りて當時の住僧岐秀を準開山と稱す。信玄の歸依厚かりき。天正年間、兵亂に廢滅し住僧高山職田氏の兵に害さる。慶長年間開基之を中興せしより法燈連絶として今日に至る。寺城宏麗、風光絶佳なり。所藏の寺寶多數に上る。武田信玄夫人像(國寶)額本著色、比丘尼姿、像の上方に梵および歌あり。贊によればこの畫は信虎の子武田道高斬信廉の筆と。なほ贊に天文廿二年五月(六月)とあり、同年五月七日夫人の歿

後に供養の爲めに賣かれしもの。信使夫人の墓あり。「東光寺」臨濟宗妙心寺派。法蓋山と號し甲府五山の第一。文中大覺禪師の創建。禪師名は道隆、西蜀蘭溪に生れしに依り蘭溪と號す。寛元四年歸化、鎌倉に互西山建長寺を建てしが、流官に遭ひ甲斐に來り東光寺を開く。中興開基は武田信玄の二子太郎義信。本尊は釋迦如來。當山の西に稻穂國母地藏堂あり。往古は金剛山日輪法成寺と號せしが、今は本寺の所轄たり。此堂は養老二年行基菩薩の草創に傳り、初め藤原朝にありしが、のち三轉して現地に移る。本尊は地藏菩薩(長さ三寸二分)、行基菩薩感得して杖の頭に刻みしといふ。堂宇中本堂・藥師堂は室町中期の様式を示し現に圖實たり。「法泉寺」和田にあり。臨濟宗妙心寺派。金剛禪壽山と稱す。甲府五山の第一。元徳の頃、武田信武、月舟周動禪師と共に草創す。夢窓國師を開山とし、二世を月舟和尙とす。藤原父子の墓あり。快岳和尙は中興の開山たり。境内に武田信武の九輪石塔あり。「法輪寺」泉町にあり。臨濟宗妙心寺派。本尊藥師如來。武田兵衛尉有義、京極總祿の法輪寺に撰して横澤村に創建、因りて有義を開基とす。のち開山月舟周動和尙の時本宗に改む。天正十年兵變に罹り堂宇灰燼に歸せしも、文祿年中白源和尙現地に移して中興す。附近に有義の墓あり、地蔵尊一體を建てて標とす。里俗將軍地

道・カンカン地蔵と稱す。「法華寺」細工町にあり。日蓮宗。龍光山と號す。本尊日蓮上人像(日法上人作)。近かに日蓮上人作大黒天像を安置す。天平年中勸願によりて州毎に法華寺を置かる、本寺はその一たり。のち廢滅に歸せしが古蹟に據りて寺號を定めしといふ。「滿福院」大工町にあり。新義眞言宗智山派。清水山と號す。大永二年國主武田信虎、靈夢によりて千手觀音像を建立し、清水寺と名づく。天正十八年國內眞言の新所尼沙堅堂を併合して現寺院に改む。「妙達寺」野田にあり。日蓮宗。佛壽山と號す。開山は本妙院日實上人(元龜四年歿)。もと元龜町にありしが元和三年いまの地に移す。代々小幡氏の菩提寺にてその墳墓あり、また小幡山城守の女にて大黒彌前(妻たる小幡相の墓あり)。「積翠寺(興泉)要害山の麓に湧出。泉質飲性熱湯泉。加熱浴用。療養向にてリウマチス・脚氣・神經衰弱症・胃弱等に効ありと。要害山に登れば、甲斐の盆地を俯瞰し眺望佳なり。又附近は名所舊蹟多し。「舞鶴公園」城址内に在り。城内にオベリスク型謝恩塔・公會堂・機山館・武徳殿・圖書館等あり。謝恩塔は山梨縣の治山・治水のため三十萬町歩の常葉林野を下賜せられたる聖恩に奉謝のため、大正十二年建設されしもの。總高三〇米。園内櫻樹多く、花時大に賑はふ。

更級郡の北部。藤ノ井町の西方にて原川の東岸にあり。東より南は信里村・信田村、西は牧野村及び上水内郡水内村、北は同郡養村、七二會村と隣す。村の大部分は山地にて森林多く、南境に虚空藏山(八七三米)あり。北部も亦約七〇〇米の山地をなす。何れも西境を北流する原川の岸に向ひて傾斜し、北部は河岸に低地殆どなく、少しの桑畑あるのみ。南部は狭き低地ありて水田をなす。縣道藤ノ井町に通ず(約八折)。此地は牧野村と共に和名抄更科郡清水郷の地にして、本村の大宇三水は郷の訛なるべし。吉原村・三水村・山平林村・安庭村の舊四箇村を合併して置けるもの。長壽寺の仁王尊・岩倉山・久米路橋等の名所あり。村内の清水神社は延喜神名帳の更科郡清水神社なるべしといふ。また三水山長壽寺は、新義眞言宗の古刹にて應永年中、土家大日方氏の開基に傳り、近世朱印地十二石高を給せられたり。「眞龍寺」大宇安庭にあり。曹洞宗。大洞山と號す。本尊釋迦如來、脇士文殊・普賢兩菩薩。應永七年の創建。開山は天國和尙たり。のち荒廢に墮せしが郡司布下野守忠直堂宇を再建し、一鶴和尙を請じて住職とす。故に忠直を開基とす。天正年中桑原村龍洞院繼務和尙堂宇を再建し、山號を大洞山と定む。正徳六年火災に罹り、のち再建せしも享保・享和の再度火災に罹り、更に弘化四年大震に遇ひて堂宇倒潰す。現堂は

高永三年の再建に傳る。「長壽寺」大宇三水にあり。新義眞言宗靈山派。秀岳山蓮臺院と號す。本尊藥師如來、脇士日天子・月天子。應永年中土家大日方某、伽藍を督督しその香華院とす。故にこれを開基と稱す。永祿年中その末業大日坊勤助、埴科郡坂城葛尾城主村上氏の近衛を領するや、堂宇を再建し寺領十二石・境内・山林を附し、秀岳法印を請じて中興開山とす。慶安二年徳川家光寺田十二石の朱印を賜ふ。爾後火災に罹ること數度、殊に弘化四年の大震災には堂宇總失す。現堂は安政年中の再建に傳る。境内に仁王門あり、弘法大師作力士寄進を奉安す。桁行三間、梁間二間あり。永享二年の再建。明治二十六年内務省より保存企を下賜せられ、のち特別保護建造物に編入せらる。「觀音寺」曹洞宗。本堂安堂の木造十一面觀音立像一幅は國寶たり。「甲武鐵道」甲府・東京間にありし私設鐵道。明治二十年企業され、甲武線とも稱し、飯田町より新井・八王子を経て甲府に到るもの。國有となりてより、久しくこの名稱を用ひしが今は名古屋まで延長して中央線と稱す。「講武村」鳥根縣出雲國八東郡の北部。鳥根中島の中央部にあり、北は御津村を経て日本海に至る。東北は大蔵村に、東は持田村に、南は生野村に、西は佐陀河を隔てて佐太村に界す。村の北・南・東には二〇〇米前後の丘陵あり

西及び西南に廣き平地ありて耕作行はる。米・麥・雜穀・製茶等の業を營む。最近西南境の穴道湖と日本海を繋ぐ爲め、依陀川の谷を利用して運河を開き日本海岸の江橋港と湖畔の大郡松江市を連絡す。此結果、村内産業は著しく盛となり産物の運搬は便利となる。村落は主として丘陵の麓にありて上・北・南の講武及び尾坂等は主邑をなす。此地は和名抄、島根郡多気郷の地とす。然し多気郷の名風土記に見えざるより考ふれば、蓋し生馬郷の分地ならん。源平盛衰記一谷城構の條に、出雲國多気七郎といへる人見ゆ。蓋し在名を負ひしものならん。莊園時代は圓福寺村と稱し、寛文年間藩主松平綱隆公猪狩をするに及びて講武村と稱す。いま北講武・南講武・上講武・名分の四大字より成り、北講武に役場を置く。(佐太講武屋具)指定史蹟。大字名分の佐太講武と呼ぶ地より佐太村大字佐陀宮内タツ川・御子垣・山崎等に互り、天明年間に開墾せし依陀川の兩岸に跨りて存す。地等約〇・三米乃至九米の餘所に畑生式土器・石器・骨器・鹿骨・鹿角その他の遺物具層中に包含せられて發見し、日本海沿岸地方の具象として著明なり。發掘品は附近の佐太神社に所藏せらる。

遺瓦川支流葛麻川の左岸。飯塚市の北約三軒にして間に二瀬川を隔つ。北部は鞍手郡宮田町に接す。面積一三・〇六方軒。西北隅に四二五米の笠置山聳え、西南境の標高二〇〇米の山地とともに東及び東北に傾斜し、北境にある二一三〇〇米の山地、及び東部北半に起伏する約五一六〇米の小丘陵との間に西北より東南に谷を作り、東部は北流する葛麻川の沖積地の一部を占む。低地には耕地拓け筑前米を産するも、人口密度多く(七六九人)餘額なし。裏作には蓮根・種實等の栽培行はる。この町は筑豊炭田の一部を占め、町内に炭坑多し。東部は葛麻川の左岸に沿ひ、縣道北方直方市方面より南方飯塚市方面に通じ、西北方一六軒の赤間町方面より来る道路は、町の西北部より谷沿ひに町を貫き、東南部に之と合す。省線筑豊線東北部を掠め、之より分るる運炭線の省線幸袋線東部を南方に走り東南部に幸袋線あり。此地或は和名抄磯浪郷堅勢郷の内に屬せしものか。大正七年一月、大谷村を幸袋町と改稱す。いま中・幸袋・且尾・柳橋・吉北・津島・庄司の七大字よりなり、中に役場を置く。(古河日尾)本郡重要炭山の一。大字日尾の北部にあり。古河石炭鐵業株式會社の經營に屬し、昭和十年の産額三〇・七七一噸、二二三一萬圓に達す。(本誓寺)庄司にあり。淨土宗。信白山白旗院と號す。筑前三方丈の一。天平年中の創

建といふ。建久二年辨長之を再興。往古より代々國主・徳川氏・黒田氏の歸依厚く諸堂宇整備せしが、明治二十三年災上す。同二十九年再建。現に末院十五僧寺及び近傍に十二坊を有す。本尊阿彌陀如来は惠心何郷の作なりと稱す。【幸袋線】省線筑豊線の一部。福岡縣嘉穂郡にあり。筑豊本線小竹驛(鞍手郡小竹町)より幸袋驛(幸袋町)を経て二瀬町の二瀬驛に至る。全長七・六軒の小竹・二瀬間を本線とし、幸袋・高嶺間、幸袋・伊岐須間、二瀬・枝國間の貨物支線を分つ。即ち幸袋驛にて幸袋町大字中に至る幸袋・高嶺間、二瀬町大字横田に至る幸袋・伊岐須間を分ち、二瀬驛より穂波村大字枝國に至る二瀬・國枝間を分岐す。本線は専ら筑豊炭田の運搬に用ひらる。【コーフン】興文里(興文里)臺灣高雄州板橋郡の舊里名。現在の車城庄の海岸地。この地は明末鄭氏時代開屯の地に屬し、車城は其上陸地として開け、清領臺後、康熙の末年以來、閩の漳泉人の根柢となり、次いで北方なる田中央開け、雍正の初年粵人は保力を開拓せり。興文里は光緒元年鄭政大阮沈霖植の奉議に基き開設される板橋縣下十三里中の一にして、我領臺後、大正九年十月の地方制度改正前までこの名稱は採用され、阿板縣下の管下にあり。其下に車城・新街・田中央・海口・保力の五庄を置きしも、改正後上記五庄は、同じく徳和里の社寮庄及び成

昌里の四重溪庄と合して車城庄となり其下に、改正前の庄を改めて大字として、高雄州板橋縣下三庄中の一庄となる。【コーフン】部分村(廣島縣備後國沼隈郡の東北隅。南は山手村に、東は瀨田川を隔てて福山市・中津原村に、北は同じく瀨田川に、西は瀨田郡の宜山村に接し、面積五・四四方軒の小村。北西より東に流る瀨田川は急に河路を南方に變更する三角點を頂點として、村はほぼ正三角をなす。前藩をうけし備後家地の東端、高さ三〇〇米前後の山地の一部を占め盛に牧牛を行ふ。また東境瀨田川流域には耕地あり、米・蘭草を栽培す。丘陵には桑畑あり養蠶を營む。山陽街道は東北隅より來り仁淀川に沿うて東境を南下し、山手村を経て尾道市へ連絡す。石原・草木は街村なり。此地は和名抄、沼隈郡津守郷の内なるべく、近世、瀨田藩の領内なりしが、廢藩置縣後に廣島縣沼隈郡に屬し、明治二十二年より山手町と共に組合町村をなし、役場を山手村に置く。

【コーフ】伊賀國(三重縣)伊賀郡の古地名。神宮寺事記によれば、通仁天皇の御代倭姫命、皇大神宮を奉じて駐まり給ひし處にして、此時伊賀國造の奉りし神田御ち是ならんといふ。故にカンベと訓むを可とす。和名抄にも地名見ゆ。いま名賀郡神戶村をその遺域とすべし。※神戶村

【神戶市】六大都市の一。大阪灣に臨み我國最大の外國貿易港たる神戶港を控へ我國第一の海港都市。また兵庫縣廳の所在地にて政治の中心地なり。【城域】市は東經一三五度五分乃至一三五度一五分、北緯三四度三三分乃至三四度四五分の間にあり。兵庫縣下攝津國の西南端に位す。市の北境は六甲山脈によりて限られ山田村に接し、東は石屋川を以て武庫郡御影町に連り、その東に住吉村・魚崎町あり、西は須磨の臨路を以て明石郡垂水町より明石市に通じ、南方は大阪灣に臨む。神戶市の起源は治水・ニッ茶屋・神戶の三村に發し、慶應三年兵庫開港の名に於て、ここに神戶港發達の基礎を置かれ、明治元年三村を合して神戶と稱す。同十二年隣接の兵庫を合して神戸區となり、同二十二年市制を布き、隣接の八部郡田村・東原郡野合村を併合し、同二十九年今の海區・林田區及び池田村を合せ、これが久しく神戸市の市域なりき。然るに大正九年西部の須磨町を合せ、更に昭和四年東部の西灘村・六甲村・西郷町の三ヶ町村を合併す。これ今日の神戸市域なり。昭和六年行政区を改設して現在は灘區・葦合區・神戶區・海東區・海區・兵庫區・林田區・須磨區の八區に分たる。市域の最長東西線は一四・四七軒、最長南北線は一三・五〇軒にして、地面積八三・〇六平方軒に及び、内約六割は山地部にして、平地部の面積約三十

四平方軒なり。【地勢・地質】狹義の神戸港は舊生田川と舊濤川の三角洲によつて抱かれ、兵庫港は舊濤川の三角洲と和岬岬とによりて圍まれたる部分なり。今日所謂神戸港とはこの兩者を包括せし名稱にして、神戸港を一に扇港と稱するは兩者を併せたるその形状に基き、神戸の微草(一方にはカキの頭文字を圖案化し、他方その港灣の形を象徴せしものなり。而してこの港灣を含む東西に連る海岸は元來比較的平滑なりしが、之に注ぐ河川の三角洲により凹凸を生じ、海岸を屈曲せしめ今日の地形を作り、斯くて神戸市の海岸線の全延長は二〇・七軒に達す。神戸市の西部を限る須磨浦の長汀は古來風光明媚なるを以て著れ、有名な保養遊覽地をなし、東部に連る灘區の海岸は工業地帯となり神戸港の狭隘となるにつれ築港施設漸く行はれんとす。市街地は平地に乏しく、北方は急に聳起し六甲山脈となる。海岸に沿うて東西に展がる狭長なる沖積層の低地は六甲山地を流下する諸河川の堆積せる三角洲又は人工埋立地にて、その稍著しきものは前記の舊生田川尻の小野濱と舊濤川尻の川崎造船所所在地附近の海に突出せる部分即ち川崎濱及び沖積作用の加はりて生ぜる和岬岬なり。此等沖積地は神戸市の經濟活動の主體を形成する工業區・商業區・交通區を成立せしめたるものなり。この狭小なる

海岸低地より急に六甲山脈に移る所、所謂六甲斷層崖下には所々に舊扇狀地が東西に並行して發達するを見る。六甲山脈より流下する河川に大なるものなしと雖も、その流域は花崗岩より成るを以て、風化旺盛にて河川概れ天井川をなす。扇狀地はこれ等河川の六甲山脈の急斜面より海岸の平地に出づる所に發達し、千森川・妙法寺川・天井川・徳川・生田川、西郷川・都賀川の舊扇狀地これにして或は相連絡して集合扇を形成し、或は開折して扇狀地間に扇谷を形成す。而して此等扇狀地間には大倉山・宇治野山・會下山・長田山臺地の如き新古更新層の丘陵地をなす所あり。また斷層崖に接近せる處には各所に崖線をなし花崗岩の崩壊物堆積して扇狀地を被覆し、之より稍急なる一帶の傾斜地を形成せる所からず。上述の扇狀地・丘陵地・崩積層地帯は何れも四度乃至八度の勾配をもち、急に高度を増す時はゆるい山手地帯にして、市内を東西に横斷する省線鐵路より以北に在り、鐵路以南の比較的低位地帯なる海岸通り相對す。この山手地帯の山本通・中山手通を中心に東西に連る高臺地は、一時よく大阪灣を俯瞰して風光美に惠まれ又土地高燥、氣候温暖なる健康地帯なるを以て南北に通ずる街路は皆坂道なる不便を忍び諸官舎・學校・神社佛閣・住宅を以て滿され、住宅區・學校區・官區を現出せり。斯くて住宅其の他の建築物

は階狀地に港より漸次山腹に高まり神戸市特有の景觀を構成す。斯く傾斜地を利用するも住宅過地の南北の境界はメリケン波止場より諏訪山麓まで僅かに一軒半に過ぎざるが如き状態なるを以て、神戸市の東西に細長く影射するは蓋し當然の趨勢にして、今日神戸市が西の須磨より東の西灘までの街路、東西實に一九軒に互る狭長なる都市を作れるは實に之が爲めなり。この南北に傾斜あり狭隘なるは此地をして直ちに深澤に接し眞原地を作りし原因なると共に、又以て眞原地を敗の一因をなせしものなり。市街地の北に盡くる所急に崛起せる地形をなせるは即ち花崗岩の六甲斷層崖(諏訪山斷層及び布引斷層等)にして、この線に沿ひ、或は布引の崖(形成されたる後浸蝕によつて原位置より後退)が生成され、或は西郷川上流の鏡泉、青谷・布引の鏡泉、諏訪山鏡泉、濤川上流の湊山天王鏡泉の湧出を見る。この線より南方に大倉山・宇治野山の丘陵列が同一方向に並ぶも斷層地形の然らしむる所なり。諏訪山を中心とする背後の斷層崖地形は、標式的なるものにて見事なる三角末端の例を示せり。また西方高取山の北に連る丸山に於ては六甲山脈の概形を造りし漸上斷層の好露出、即ち花崗岩が第三紀層砂岩・褐炭・頁岩の新成層岩上に二五度乃至五〇度の傾斜を以て新上せるを觀る。市の背後に聳ゆる六甲山脈は、播磨國豊後

濱に端を發し北東に走り、橋津國生湖に没する延長凡そ五〇軒の斷層山脈にして、その西半の南斜面が神戸市に屬し、この山地の主なる峯を南西より北東に連ぬる線を以て市の境界とせり。この山地が市の約半ばを占む。その高峯を東方より順次に擧ぐれば、西六甲山（八〇三米）・摩耶山（六九九米）・再度山（四六八米）・鍋蓋山（四八五米）・鐵拐山（二三七米）・鉢伏山（二四六米）等なり。別に市内西部には高取山（三二九米）・横尾山（三二二米）等の諸峯あり。西六甲山ヨルフロンテ附近には地形學上、前段餘餘の準平原遺物と想定さるる小起伏の平坦面存す。市域内の山地は主として各種花崗岩より構成され、北西部には第三紀層存在し、局部的には角閃岩を見る。南西部には洪積層發達す。市内に於ける著名なる山の地質を見るに、六甲山遊園地近傍並に摩耶山・再度山は黒雲母花崗岩より成り、六甲ロープウェイ登り口附近は角閃岩、高峯山には角閃花崗岩あらはれ、布引貯水池附近・蔵山・諏訪山・鳥原貯水池附近は含角閃石雲母花崗岩にして、高取山・鐵拐山・鉢伏山は黒雲母花崗岩より成る。神戸市内を貫流する河川には大なるものなく、又扇狀地河川の特色を示し水量に乏し。水源は水道用水に利用せられて貯水池に誘導さるるを以て、平時は殆んど水を流へずといふも過言に非ず。而して此等の河川は地形

の變化と相俟ちその走路を變化し、或は人工によつてその位置を變化せられしもの甚だ多し。例へば濠川は最古の河道は暫く措き、今日の謂ゆる濠川は天井川として濠河道全く干上り、濠川公園・新聞地等の歡樂地帯と河口に川崎濱の工業地帯とを構成す。而して濠川の西を流るる今日の新濠川は明治卅四年上流に於て人工を以て河道を變更し、濠川に合流せしめたるものなり。また嘗ては水鳥を浮べし生田川も漸次干上り、明治四年其東に新生田川造られ、舊生田川河床は今日布引通り加納町となり、その末端は小野濱として今日の大塚港の中心をなす。而して新生田川も布引灘が神戸市水道の水源となりし爲、殆ど流出する水量なく今日にて之を埋めて暗渠となし、その上に新生田公園作られたり。その他の諸河川も都市計畫の發展に伴ひ、殆んど濠川を呈するものなく、舊時の川、例へば宇治川・鯉川の如きも今日僅かに小溝渠となりて存するのみ。

〔氣候〕本市は背後に六甲山脈を負ひ、前は茅渚の海に臨むを以て、氣候温和適順、本邦有数の健康地たり。市街地にある神戸港候所の明治三十年以降昭和十年に至る期間の平均に就て見るに、氣温は年平均一五度にして東京の一四度、京都の一三・八度より高く、盛夏の候、時に三五度乃至三六度に達することあるも、八月の平均氣温は二四・三度なり。また盛夏には稀に最低零下四度乃至五度に下ることあるも、街上に雪を見る事極めて少し。降水量は年平均一三四三毫米にて、我國にては霖雨地帯に屬し、瀬戸内式氣候の特色を示す。年平均風速は二・七秒米、最大風速二三・七秒米にして、暴風は東京の風に多し。併し一年の最多風位は北なり。天氣日数は快晴三七日、雨一四二日を數ふ。尙ほ六甲山・摩耶山等は氣温低きを以て、市民の好避暑地となり、スケート・スキー等行はる。

〔港灣〕神戸港は兵庫・神戸の二部より成り、兵庫部は濠川以西を呼び、神戸部は同以東を指す。港界は大正十二年内務省告示により重要港灣として指定せられたるものによれば、港域は妙法寺川日東岸突端より正東に引ける一線と、夙川右岸端より南方に引きたる一線とに圍まれたる區域なり。然れども今日神戸港の實際港灣として利用せられたるものは正十二年勅令を以て決定せられたるものにして、武庫郡御影町新在家の東角、南一五度西に引きたる一線と、和田岬より北八四度西三分東に引きたる他の一線との内に含まれたる區域を占め、この港界内の包圍總水面積は一八・七七六平方軒なり。現在の神戸港を形成せし築港第二期工事計畫に依る新防波堤線内の總水面積は約九・九八四平方軒を算し、港内海岸線の延長約一・五・六軒に及ぶ。最近港内突堤を告げ、防波堤を外側に移し水

節又は暴風の大潮季にて、最低となるは冬季沈寒季なり。神戸港内の潮流の激足なる觀測の未だ行はれしを聞かざるも、由來神戸港沿岸の潮流は紀淡海峽を通じて和泉灘に出入する潮の渦流並に明石海峡を通ずる潮流の渦流に過ぎざるを以て潮勢強からず、港内は大潮時と雖も平均秒速〇・四六米を過ぎざるべく、其方向は概して漲潮時に稍西南、落潮時に東北なるもの多し。されど和田岬近傍及び小野濱前部の海岸は明石海峡を經る下げ潮及紀淡海峽よりする上げ潮の影響を蒙ること比較的著しく、和田岬附近の流速大潮時最大秒速〇・六一七米なり。海底地質は上層約一米は軟泥にて、重量物沈没すれば容易に埋滅するも、其れ以下は砂礫混入の堅層に漸次硬度を高むるを以て船舶の投錨に適す。一般に兵庫沿岸に上層軟泥厚くして、神戸港沿岸に於て薄く、投錨に好適なり。風向に就いて觀るに本港は北に六甲山脈を負ひ西に和田岬突出して北風及び西風を防護し得て大なる利便ありと雖も、東北東より西南に至る間は天然の地形上何等の障礙なきを以て、從來風浪の害を受けたり。即ち夏季より秋季にかけて暴風季節に襲來する風波は、紀淡海峽を通じて直接外洋の高浪を傳ふるものなるが故に波浪甚だ大にして港内船舶に對し最も大なる被害を及ぼし荷役を不能ならしむる事あり。されどこの南方より來る風浪は其の回数少く、其

の變化と相俟ちその走路を變化し、或は人工によつてその位置を變化せられしもの甚だ多し。例へば濠川は最古の河道は暫く措き、今日の謂ゆる濠川は天井川として濠河道全く干上り、濠川公園・新聞地等の歡樂地帯と河口に川崎濱の工業地帯とを構成す。而して濠川の西を流るる今日の新濠川は明治卅四年上流に於て人工を以て河道を變更し、濠川に合流せしめたるものなり。また嘗ては水鳥を浮べし生田川も漸次干上り、明治四年其東に新生田川造られ、舊生田川河床は今日布引通り加納町となり、その末端は小野濱として今日の大塚港の中心をなす。而して新生田川も布引灘が神戸市水道の水源となりし爲、殆ど流出する水量なく今日にて之を埋めて暗渠となし、その上に新生田公園作られたり。その他の諸河川も都市計畫の發展に伴ひ、殆んど濠川を呈するものなく、舊時の川、例へば宇治川・鯉川の如きも今日僅かに小溝渠となりて存するのみ。

〔氣候〕本市は背後に六甲山脈を負ひ、前は茅渚の海に臨むを以て、氣候温和適順、本邦有数の健康地たり。市街地にある神戸港候所の明治三十年以降昭和十年に至る期間の平均に就て見るに、氣温は年平均一五度にして東京の一四度、京都の一三・八度より高く、盛夏の候、時に三五度乃至三六度に達することあるも、八月の平均氣温は二四・三度なり。また盛夏には稀に最低零下四度乃至五度に下ることあるも、街上に雪を見る事極めて少し。降水量は年平均一三四三毫米にて、我國にては霖雨地帯に屬し、瀬戸内式氣候の特色を示す。年平均風速は二・七秒米、最大風速二三・七秒米にして、暴風は東京の風に多し。併し一年の最多風位は北なり。天氣日数は快晴三七日、雨一四二日を數ふ。尙ほ六甲山・摩耶山等は氣温低きを以て、市民の好避暑地となり、スケート・スキー等行はる。

〔港灣〕神戸港は兵庫・神戸の二部より成り、兵庫部は濠川以西を呼び、神戸部は同以東を指す。港界は大正十二年内務省告示により重要港灣として指定せられたるものによれば、港域は妙法寺川日東岸突端より正東に引ける一線と、夙川右岸端より南方に引きたる一線とに圍まれたる區域なり。然れども今日神戸港の實際港灣として利用せられたるものは正十二年勅令を以て決定せられたるものにして、武庫郡御影町新在家の東角、南一五度西に引きたる一線と、和田岬より北八四度西三分東に引きたる他の一線との内に含まれたる區域を占め、この港界内の包圍總水面積は一八・七七六平方軒なり。現在の神戸港を形成せし築港第二期工事計畫に依る新防波堤線内の總水面積は約九・九八四平方軒を算し、港内海岸線の延長約一・五・六軒に及ぶ。最近港内突堤を告げ、防波堤を外側に移し水

名	稱	全長	幅員	岸壁延長	水深
第一突堤		二〇・六	一〇・八	八・三	九
第二突堤		二〇・六	一〇・八	八・三	九

第三突堤	二〇・六	一〇・八	八・三	九
第四突堤	二〇・六	一〇・八	八・三	九
第五突堤	二〇・六	一〇・八	八・三	九
第六突堤	二〇・六	一〇・八	八・三	九

未だ工事中なる第六突堤には其中間に幅五四・五米、延長四〇九米、水深三・六米の幹渠を設くる豫定なり。此等の突堤に屬する上層は廿二棟、延八五三九方米を有し、その防火設備の完全なる他港にその比を見ず、殊に第四突堤のQの二上層は設備外観共に我國第一と稱稱せらる。前者は三階建、後者は二階建の雄大なものなり。而して第一乃至第四突堤根元間には水深各二・七米を有する第一乃至第三の物揚場延長五四五米及び第一・第二の物揚場延長一七八米あり。以上官設の外國貿易水陸連絡施設の外、私設のものとして三菱倉庫會社の高嶺岸壁・和田棧橋（延長合計八一五米）、東神倉庫會社の東神岸壁・東神棧橋（延長合計四五三米）あり。水深七米乃至十米、中型船八隻を維繫し得。而して本港には是等岸壁・棧橋の外、神懸船も甚だ多きを以て、繫船浮標は官設のもの神戸沖に一一、兵庫沖に一〇、防波堤外に二あり別に川崎・三菱兩造船所の設けたる私設浮標合して一〇を算す。次に物揚場の設備を總觀するに、官設有效延長約三五五〇米、私設約一四六〇米に及び、上層倉庫

等の建物は官設にては新港上屋等十三ヶ所、總面積一二五七八二平方米、私設にては三菱倉庫・東神倉庫等十五ヶ所、總面積は二五五四二六平方米に及ぶ。これ等税關内の東神・三菱・住友・川西の四大倉庫は規模宏壯、施設完備し、特に生糸荷役保管の設備は完璧に近く、又川西倉庫冷蔵設備は斯界の幹を集めしものにて、神戸港埠頭の一大偉觀をなす。神戸港の内國貿易設備は外國貿易設備に比すれば甚だ貧弱なり。從來の國產波止場は夫々延長五四・五米、幅員三六・三米を有する二箇の小突堤より成り、水深三米、その物揚場延長三八九米に過ぎず甚だ狹隘なりしを以て、大正八年内務省は國產波止場の東方に、延長六五・一米、幅員九・一米の中突堤を築造し、其の東中は外國貿易に西中は内國貿易に充てたり。現時大阪商船・近海郵船等の臺灣航路船繋留せる。この外、内務省の施設に係る兵庫突堤なるもの二あり、延長各四三・六・三米、幅員各一二・七・二米を有す。繋船岸壁の水深七・二米乃至九米、延長二二・一八米に及び、船席十九を數ふ。物揚場は水深二・七米乃至三・六米、延長一七〇〇米あり。上屋は一〇棟、二〇一五二平方米を有す。其他、縣營港灣として東神戸に鈴木・森合の二あり、物揚場延長前者は二七〇米、後者三八〇米、水深は例れも二・四米なり。上記兵庫突堤は背後に鐵道をもて連絡せるも従前の運河も亦見

透すべからず、運河は四あり、即ち兵庫新川・兵庫・新湊川・菊澤島運河なり。兵庫新川は兵庫突堤の根元に牛身形を描ける運河にて、明治九年開鑿されしが長く故置されしを、昭和八年市によりて改修工事の施されたもの。延長一三一・一米、水深一・八米乃至三米を有す。兵庫運河は新川と一箇相連してY字形をなし、明治廿二年兵庫運河株式會社によりて開鑿され、大正八年末、市に買収せる。延長一八四六米、水深一・八米乃至二・四米にして、その途中より分岐して省線兵庫驛に至る支運河あり。延長七二七米、水深一・八米を有す。新湊川は明治三十二年に開鑿され、昭和六年河口より六三六米の間を上流部一・八米、下流部三・六米の水深に浚深されしもの。菊澤島運河は昭和五年菊澤島と本陸との間幅六〇米、延長一〇七三米を水深三・六米に開鑿されしものにして、何れも市の管理に屬す。此等四運河の總水面積約三二五〇〇〇平方米に達し、沿岸工業の發達を大いに助長せり。更に眼を轉じ神戸港の外壁をなす防波堤を觀るに、その最も主要なるは左の五つなり。第一防波堤即ち南防波堤（一一一九米）、第二防波堤即ち東防波堤（一一五二米）及び東防波堤（一一四九米）、第三防波堤即ち東防波堤（一一三三米）第四防波堤即ち東防波堤（一一六一米）にして、總延長約五四四六六米に及ぶ。神戸港を西より南にかけ東に

至る築造物にて、主として内務省の所管にかかる。此等の防波堤により當港の最大容積たる東南の風浪も完全に防ぎ得るを以て、荷役能率の増進されし事甚だ大なり。されど近時船舶の出入増加につれ防波堤内水面積狭小を告ぐるに至り、昭和十二年以後繼續事業として防波堤の變更を企て、中央に在る防波堤の一部を沖合に移動し水面積約八四七萬平方米の擴張行はるる豫定なり。神戸港の航路標識中燈臺は兵庫和田岬、波成各防波堤の兩端にあり。其他、揚燈浮標・燈竿等の設備あり。信號用橋は神戸税關第一突堤信號所及び和田岬檢疫所構内見張所にあり、又神戸税關港務部屋上には暴風雨警報及び氣壓信號器を掲揚する信號柱及び正午を報する報時球あり。船車連絡に關しては、税關構内に近き小野濱が東海鐵道東灘驛との連絡に當り、支線を延長して、一は新港税關岸壁上屋に、一は海岸に沿うて湊川驛に達す。その他、西部にも臨港線あり、和田岬・新川・神戸市場兵・東港等の小驛設かる。港内の通船は専ら民間の經營に委ねられ、その中旅客及び其携帶品の運送に従事する通船數二百五十餘隻に上り、港内五ヶ所にその發着所を設けて水陸連絡に便す。別に純貨物の輸送に従事する船隻は二千數百隻を算す。檢疫事務は和田岬の海港檢疫所（旅客）、及び新湊川尻の家畜檢疫所あり。輸出品の検査所としては港内に生絲

検査所を設く。神戸港灣の西部に當り偉觀を呈するものは川崎・三菱の兩造船所の船渠にて、川崎造船所には船臺六ありカントリークレーンその上を覆ふ、船臺の長さ一四〇米乃至二三九米、幅員六四米乃至二五・六米にて、建造し得る船舶の總噸數は六千噸乃至三萬五千噸に及ぶ。三菱造船所の船臺は概して小にして、建造し得る最大船は重量噸一萬噸なり。別に七千噸・一萬三千噸・一萬六千噸の浮船渠ありて水上に互體を横へつあり。〔都市計畫〕神戸市に市區改正委員會の成立せしは明治四十五年にして、爾來鋭意調査研究を行ひ、その一部が既に實行せられんとせし際、大正七年東京市區改正條例の準用されしに續き、同八年都市計畫法の適用せらるるあり、依つて之に基き都市計畫兵庫地方委員會議設され、都市計畫に關する事業は凡てその決議を経ることとなり。大正十一年都市計畫區域を神戸市及び武庫郡御影町・魚崎町・本庄村・本山村・住吉村・山田村大字谷上字中、一里山・西郷町・六甲村・西灘村（西郷町以下は昭和四年神戸市に編入され、今日の灘區となる）の一〇地方と指定せり。斯くて同十二年市街地建築物法により、特に重要な地區には防火構造を規定し、本市の中核部一帯には燃焼性建築物の營造を禁じ、之と同時に指定道路に沿ふ建築物の高度も決定せり。大正十三年には地方的條件と其地方の要

求とに従ひ、機能による地域の決定をなせり。即ち山手方面の高地は土地高燥、風物快適なるを以て住宅地域に、神戸港を中心とする下町一帯は土地平坦、交通至便、市街發達せるの現状よりして商業地域に指定せられたり。而して工業地域は水陸運輸の便を有する西方和田岬・妙法寺川間・東川崎・東出町海岸及び臨濱町の集合港に面する一帯と三地方とし、尙ほ東方本庄村湊江附近の海岸低地をも之に加へたり。其外將來の都市の實情に適應せしむべく未指定地域を列せり。東部海岸地方の謂ゆる灘五郷の釀造地、住吉川・都賀川上流等の指定を保留せる地域の如きは是なり。之による各種地域の面積と百分比とを見るに、全面積一一三・一・八二ヘクタールの中、住宅地域は九〇七六・二八ヘクタール（八〇・〇％）、商業地域は七四〇・四九ヘクタール（六・五％）、工業地域は一一〇八・四四ヘクタール（九・七％）、未指定地域は四〇六・六一ヘクタール（三・八％）なり。斯く地域の決定成るや、地勢・交通・水利等に鑑み、區域全般に亘りて道路網計畫を樹立し、一方市街地建築法施行に備へ、他方郊外地の土地區劃整理の基準ならしめたり。蓋し本都市計畫區域は東西に狭長なるを以て、道路は區域全般に亘りて、東西幹線として山手線・中央線・海岸線の三大幹線を配設し、之を二二米以上の大路とし、更に補助幹線を設け、この東

西幹線を三〇餘の南北線を以て連絡するの豫定なり。昭和二年決定の計畫道路網の總延長は一三八九三三米を算し、その中、市部に屬するもの八六三二〇米、之が實現に要する工費は、概算一五七百萬圓の巨額に達す。之より先、既に大正八年、市街の發展に應ずべく、市區改正事業として電車線を敷設すべき道路を計畫し、同九年着工、同十四年竣工せり。これ山手・上津及び中ノ島・東尾池間の三電車線なり。次で第二期工事として須磨及び高松方面に市電の敷設と街路の建設とが計畫され、大正十一年着工、昭和三年工を終へたり。その後狭長なる市街を擴張して交通を阻害する事甚大なりし省線の高架改裝工事の進捗するに及んで、第三期工事として、國道線・臨港國道線・生田川遊歩道・兵庫臨港線・板宿線・夢野平野線等、總延長約八七〇〇米の道路開設計畫され、昭和三年着工、同八年國道線以下、兵庫臨港線を竣せたり。第三期工事中の幾工事は所謂第三期後期分工事として、昭和十三年迄の繼續事業に改められ、その中、板宿線は同十二年竣工せり。尙ほ町道は狹隘を告ぐるに至りしを以て、その南側に並行せる海岸道を幅員二七米に擴張し、電車路を此處に移し之を更に省線神戸驛側へ延長し、以て西方の島上線に接続せしむべき道路を新設して市電を通せんとの計畫を樹立せり。之は昭和十年より四ヶ年繼續事業と

して着工中なり。その道路總延長は二五八〇米に達す。次に上下水道施設に就いて見るに、本市は由來水に乏しき惡疫流行するを以て、夙に上下水道設計畫ありしと議論漸まらざるを以て布引・鳥原の兩溪流を水源に充てて工事に着手し、同廿八年竣工をみたり。爾來人口の増加に伴ひ、水道の大擴張計畫を企て同四年第一期擴張工事を起し、新水源を有馬郡道場村なる武庫川の支流千苜溪流に求めて一大貯水池を新設し、既設貯水池に新に天王・再度兩溪流を合して擴張する事とし大正十年竣工せり。されど幾もなくして更に擴張の必要に迫られ同十二年五ヶ年計畫を以て第二期擴張工事に着手せるも、工事中昭和四年灘區の編入を見、この方面の要求に應ずべく、一ヶ年延長して六ヶ年繼續事業とし、既設水道の給水戸數一〇萬戸なるを一六萬餘戸に増加し、一戸一日の平均給水量二五立方尺（約〇・七立方米）を二七・五立方尺（約〇・七七立方米）とし、昭和七年竣工せり。是れ今日の本市上水道設備なり。現在の貯水池は三ヶ所にして、總容量一三八一立方米、千苜（一一六・二立方米）最も大きく、鳥原（一四三・九立方米）之に次ぎ、布引（七六〇立方米）最も小なり。沈澱池は四、濾過池は三九、淨水池は二五を有す。されど本水道源は水量に乏しき缺點あり、市域

の擴張・人口増加・産業の發達等による使用量増加に追隨し得ず、夏季旱魃時には時間給水の已むなきに至る現状なれば、既に昭和七年、第三期擴張計畫を樹てたり。然るに偶々縣に於て阪神間市町村に對し別箇の水道設計畫ありしを以て、本市も之に合同し阪神地方上水道計畫案成立せり。之は水源を従来の千苜貯水池の外、新に武庫川支流黒川・青野川合流點附近に黒川貯水池（有效水量一六八〇立方米）を設け、また武庫川水源潤涸に備へて浚川よりの取水設備をも築造するものなり。昭和十一年神戸市を中心として西宮・尼崎等、阪神間一六市町村は阪神上水道市町村組合を組織し翌十二年よりその事業の開始を見るに至れり。下水道は未だ組織的なる施設を見ず、下水道と稱せらるるものは唯從來の溝渠の一部改造し或は蓋を施したるものに過ぎず。されどその施設の必要に迫られ、現在調査計畫された下水道並に處理場の大要を見るに、全市排水面積は約三三〇〇ヘクタールにして、計畫人口は一五萬人とし、汚水處理場を四ヶ所と豫定したるものにて、第一期工事として市の中央部六二三ヘクタールの工事に着手せんとす。〔人口〕神戸市の人口は昭和十年の國勢調査によれば、世帯は一九八〇一八、人口は九一・二七九（内男四六・七九四、女四四・四八四）にして、一世帯平均四・六一人なり。過去に於ける人口増加の趨

勢を顧るに、合併せし隣接町村の人口を...

Table with 3 columns: 区名, 世帯, 人口. Rows include 須磨, 林田, 兵庫, 神戶, etc.

昭和十年に於ける本市の人口密度は一方...

勢は既に各區の性質を示すものにて兵...

地形上より観れば商業交通上の利便ある...

業種別工場数及職工数

Table with 3 columns: 業種別, 工場数, 職工数. Rows include 金属工業, 機械器具工業, etc.

即ち、現在に於て神戸市の最も重要な...

Table with 3 columns: 業種, 工場数, 職工数. Rows include 化学工業, 食品工業, etc.

り、かくして産港を兼ねて東西の商港に...

前より上に、居留地の外國商館は漸次...

すも僅々一〇〇萬圓内外なりしが、大...

Table with 3 columns: 品名, 価格, 対全国比率. Rows include 糖, 小麦, etc.

三〇千圓の巨額に上れり。かく神戸港の外國貿易は近時大に躍進したりと雖も、本港背城の消長を觀るに、元來本港は北に近く六甲山脈迫り、貿易上の背城甚だ狭小の觀あるも、その東西は海岸に沿ひ平地展開し、之に鐵道通じて交通運輸至便にして、また水路により直に近畿・中國・四國・九州の海岸に通ずるを以て本港の背城は必ずしも小なりと謂ふべからず。されど今や背城の廣大なる大阪港は修築改善せられ神戸の主要性を減じ、また清水・名古屋・四日市等諸港漸く興るに及び、背城の大部は是等の諸港に割讓せられ、神戸港の港灣としての機能は半減せられたりと謂ふも過言にあらず。神戸港が過去十數年來或は自由港設置を提唱し、港灣諸施設の完成促進を迫り、工業地帯の造成を策し、或は阪神河内問題、或は阪神港設置問題に、或は港内諸料金を引下問題提起せるは皆神戸港の振興を策するにありき。唯最近神戸に種々の大工業の勃興するあり、支那事變による船舶の往來頻繁にして、此狀勢を以てすれば、神戸の衰微を受ふるは寧ろ謂はゆる杞人の憂と云ふべきか。

〔交通運輸〕天界の良港たる神戸港は、近代的港灣施設の整備せりと共に交通上の發展めざましく、今や我國第一の港市として世界に雄飛するに至り、船舶の輻輳繁く、航路は世界各地に通ぜり。神戸港出入船舶は昭和十年に於て總噸數一〇五

六四二隻、その中内航汽船一〇千隻、外航汽船四一八隻、總噸數五二、三五九、九八〇噸、その中内航汽船二四五六萬噸、外航汽船二七八〇萬噸にして、外航汽船にありては本邦主要港灣中噸數・噸數共に首位にあり、昭和十一年には噸數三四五一四千噸に達し、噸數の二四六七千噸、大阪の二一七四二千噸を遙かに凌駕せり。その入港外航汽船の國籍を見るに、日本船最も多く、英國船これに次ぎ、その他米國・獨逸・諸國の船舶を主要なるものとす。昭和十年中、本港乗降客數は一〇六八二六五人にして乗客・降客略々匹敵す。同年外人船客總數は一九九八八人にして、一日平均五四・七六六人に當り、その船客の中最も多きは中華民國人の八六四四人にして、英吉利人・北米合衆國人・滿洲國人これに次ぐ。神戸港を中心とする昭和十年現在の主なる定期航路に就いて見ると、外國航路の中、歐羅巴航路は日本郵船の横濱・倫敦線を始めとして、同社の漢堡線・李浦線・國際汽船の歐洲線ありて之に従事し、その使用船二六隻なり。外國船にてはヒトイ・汽船・エムエム汽船・ハンブルグ・アメリカ汽船・アルフレッド・ホルト・汽船・イタマクスライン・オランダ・イストエシヤ・ライオン・北獨逸汽船・イストエシヤ・チツク汽船・ロイド・トリエステ・ノルディン・ライオン・ヘルムセン・ライオン・ペンタライオン・グレンライオン等の汽船を算し、その使用船

凡そ一五〇隻の多きに達す。北米航路の中太平洋方面の航路は、日本郵船の北米航路・山手汽船の北米線・大同海運の北米線・三井物産の北太平洋線等にして、その配船數は二四隻なり。太平洋より更に大西洋沿岸に至る航路としては、日本郵船・國際汽船・川崎汽船・三井物産の船の航路四線、大阪商船の航路三線、三井物産の北米線等にして、その配船數五一隻に上る。外國船にてはハンブルグ・アメリカ汽船・エムエム汽船・パンダライン・スエズライン・カナダ太平洋線・アルフレッド・ホルト汽船・ステーツ汽船・アメリカライオン・マートン・スライオン・パーバライオン・キヤツス・スライオン等の船舶之に従事し、之が配船九三隻なり。中南米航路としては日本郵船の中南米線・南米西岸線、大阪商船の南米東岸線、川崎汽船の中南米線あり、二〇隻の汽船之にあたる。阿弗利加方面に於ける航路は、大阪商船の阿弗利加航路東岸線、國際汽船・川崎汽船・山下汽船の阿弗利加航路三線あり、約一〇隻の配船を見つゝあり。澳洲方面の航路には日本郵船の澳洲線、大阪商船・川崎汽船・山下汽船の澳洲線三線、約十五隻の汽船之に配船せられ、外國船にてはB.A.汽船の船舶三隻之に當る。印度航路としては日本郵船・大阪商船共に甲

谷院・孟買の二線を經營し、なほ大阪商船は西貢・盤谷線、川崎汽船は孟買線、三井物産は印度・盤谷・イランの三線、山下汽船は波斯線を經營し、その船舶合計約七〇隻に達す。外國船にてはヒトイ・汽船・ビーアイ汽船・インド・チャイナ汽船の船舶一四隻この方面の運輸にあたる。南洋方面に對しては日本郵船經營の南洋線・南洋西線・南洋東線の三線、大阪商船・三井物産・中村汽船夫・經營の比洋線三線、川崎汽船のマニラ線、南洋海運の南洋線あり、其使用船三〇隻なり。外國船にてはサヤガ・チャイナ・ヤパン汽船あり、四隻之に従事す。滿洲・關東州・支那方面に對しては日本郵船經營の日華連絡線・橫濱上海・阪神上海・大阪大連の二線、近海郵船の橫濱營口・橫濱天津・神戸天津の三線、三井物産及川崎汽船の大連線二線、原田汽船の青島線、大連汽船の大連營口線、同時汽船の天津線等あり、之が配船數合計約五〇隻にして、外國船の主要なるものは皆日新汽船、大連汽船和商會發船の兩者計八隻内外の船舶なり。次に内國航路に就いて見ると、淡路に對しては播磨商船の洲本・由良・徳の三線、淡陽汽船の淡陽あり、中國地方に對しては尼崎汽船の中國線、大阪商船の山陽線あり、四國・九州に對しては大阪商船の新居線・別府・大分・若松・鹿兒島・那覇の六線、阿波共同の小

松島線、大正運船・播磨商船阿波共同共營の徳島線二線、播磨商船の高松線、鹿兒島郵船の沖繩線、尼崎汽船の多度津・若松・大川三線、住友別子鐵山の新居線・宇和島運船の四國及日向二線、土佐商船の高知直航及び土佐・阿波・大阪の二線ありて合計一九線の多きに達す。其他の地方に對しては大阪商船の勝浦・基隆二線、近海郵船の基隆線・小樽線・北日本汽船の留萌・惠須取の二線、大阪發船機船の名古屋線等あり。上述の如き定期船の外不定期船の出入も亦多く交通運輸に資する所甚大なり。神戸市に於ける鐵道は神戸驛に於て接續する東海・山陽兩本線及び東灘驛に於て東海道線より分岐して神戸港に至る臨港線と、兵庫驛に於て分岐して和田驛に至る和田線との二支線となり、東海・山陽兩本線は東西に細長き本市を縱斷せるを以て數十の踏切を有し、南北の交通を阻害する事甚大なり。然るを昭和六年海・陸取兩驛間の高架線完成してこの障害は除かれ、同九年には吹田(大阪市外)・須磨間の電化開通し、まもなく明石まで延長され、同時に市内にては元町・六甲兩驛の増設行はれ、更に同十二年には京都まで電化延長されるに及び、神戸より大阪へ二八分、京都へ六六分の短時間を以て達し、本市交通上資する所甚大となれり。その本市に屬する旅客驛は東より六甲道・灘・三宮・元町・神戸・兵庫・豊取・須磨の

八驛にして、その一年の乗降客總數四六〇七六千人に上り、最も多きは元町の八六六〇千人にて短距離通勤客を主とし、神戸(八六一〇千人)・三宮(八〇二六千人)之につぐ。市内に於ける貨物取扱總たる東灘・兵庫・豊取・須磨・磯前・小野瀬・湊川・神戸港・和田驛・新川・神戸市場・兵庫港の一三驛に於ける取扱貨物合計二二九〇噸に達し、其の中小野瀬驛以下の臨港驛の取扱貨物合計一七五九噸にして總貨物の七七%を占む。本市乗入の郊外電車は六線あり。東部に阪神電線本線及び同社國道線、阪神急行電線の三線ありて大阪市と結ぶ。阪神電線本線は最も海岸に近接して走り、沿線に尻崎・甲子園球場・神宮・蘆屋・御影等阪神間の中核部をなす人口集中地帯を持ち、昭和五年御影の高架線を完成し、同八年には市内の岩屋・三宮間を地下線とし、更に同十一年には新に之を元町二丁目まで延長せり。同社國道線は市の東部臨港より阪神國道上を走り、大阪市内野田に至つて本線に接續す。阪急電線は最も山麓に接して通じ、沿線都市の人口集中に於て阪神電線に劣ると雖も、健康に過せる住宅地に富み寶塚・西宮球場等の遊覽地を控へ、昭和十一年には神戸驛點たりし上筒井に至る途中、西灘より分岐して神戸の心臓部三宮まで高架線を乗入れ、上筒井に至るを支線とせり。西部には山陽電線ありて省線兵庫驛附近より起り、

明石・姫路市に至る。中央部には神有電線あり、湊川公園を起點とし地下線を以て市外に出で有馬・三田に通ず。なほ昭和十二年新開通の三木電線と連絡して三木にも通ずるに至れり。特殊電線として摩耶鋼索鐵道は大正十四年、六甲登山架索鐵道は昭和六年、六甲越有馬鐵道鋼索線は同七年各開通し、摩耶・六甲兩山登山者に便せり。郊外及特殊電線の乗客數は昭和九年一八九三〇千人と稱せられ、貨物取扱を行へるは阪急・山陽・神有の三電線なれども、トラックの發達によりその活動範圍を著しく狭められたり。市内電線は大正六年市營に移り、現在の線線長約三二・六軒にして、昭和十年年度の運轉車輛九五・一〇一、乗客人員八八八二四千人に達す。バスにては市内に市營バスありて、その運轉に當り、昭和五年開業、同十年度營業路線約七〇軒、運轉車輛六八二八三、乗客人員一五〇〇二千人に及び、別に神戸バスあり。遊覽バスとして市營のものは市内の名所舊蹟及び近代的大施設の遊覽はもとより須磨・舞子の海岸を經て明石公園に至り、外に六甲山上の遊覽バスあり。郊外バスとして明石へ神明バス、姫路へ神姫バス、大阪へ阪神國道バス等を算す。〔財政〕昭和十一年度に於ける豫算總額は、六〇八一七千圓にして、これを細別すれば普通經濟二五七二七千圓、公企業經濟二九六三八千圓(中に電氣事業費・電

氣事業用品資金・水道事業費等あり)及びその他の經濟に屬する諸費五四五二一圓(中に都市計畫事業費・中央卸賣市場費・市民病院費・救護費・公設質屋費等あり)なり。市税は普通市税・都市計畫税の二種に分れ、前者は國稅附加税及び特別税にして國稅附加税は地租割及び營業收益税割とを云ひ、特別税は家屋税・特別地稅・營業稅・揮發稅を含む。昭和十一年度豫算による神戸市民の租稅負擔額を見るに、國稅五九三六千圓、地方稅一〇九八九千圓、合計一六九二五圓にして一人當り一八・五五圓に當る。これに六大都市の市民一人當り負擔額に比較するに、最高は横濱市の二二・七八圓、最低は名古屋の一八・四〇圓にして、神戸は第五位にあり。

〔學校・官廳〕昭和十一年四月に於ける全市の小學校は校數六六六校、児童數一一六千人にして、これ等小學校卒業生の爲めに設けられたる清はゆる實業補習學校は本市に於て夙に發達し、現在にては市・私立の青年學校としてその數四三三校、一七千人に及ぶ。別に私立の清はゆる各種學校あり、校數四〇校、生徒數九千人なり。中等學校は市内にある縣・市・私立を併せて三三校、生徒二五千人餘人を數ふ。大學及び專門學校としては、昭和四年從來の官立神戸高等商業學校の昇格せる官立神戸商業大學は灘區にあり。別に新設の兵庫縣立神戸商業高等學校は市の西區垂水町

に置かる。須磨区には大正十一年に創立せられたし官立神戸高等工業学校あり。又東郊の本庄村には官立の神戸高等商業学校あり。その他久しく神戸市内の私立学校として著名なりし西学院と神戸女学院とは共に東郊に移り、前者は仁川に、後者は西宮市にあり。また市の東郊の本山村に甲南高等学校・女子養正専門学院あり、共に私立の高等教育機関なり。なほ本市には国際海港都市の特色として見らるべき外人子弟の教育を目的とするもの、或は外人経営の語学学校からず、市内の特種教育機関として特筆に値す。官廳の種類および其数は自らその都市の性質を語るものあり。昭和十一年本現在の官制を挙ぐるに、先づ行政關係にては兵隊監獄あり、これに附隨して聯合講事堂・産業會館・度量衡検査所・海外渡航検査所・動物検査所・輸出農産物検査所工業試験所・衛生試験所等を有し、司法關係において、神戸地方裁判所、同検事局、神戸區裁判所、同検事局、同區裁判所兵隊出張所、神戸快速車役場、神戸供託局、遺・葬令・三宮・相生橋・湊川・兵庫・林田・須磨・菊水橋・神戸水上の

一〇警察署、兵庫監査支隊、神戸判務所、同通支所、東消防署、同葬令出張所、西消防署、同湊川公園前及須磨の二出張所等なり。陸海軍關係にては神戸警備司令部・神戸憲兵分隊・陸軍運糧部神戸出張所・神戸海軍監督官事務所あり。貿易港關係としては神戸税關・同和田岬検査所・同家畜検査所・神戸生絲検査所・神戸輸出品検査所・商工省花菱検査所・神戸移住検査所・内務省神戸七木出張所・大藏省警備隊財局神戸出張所等を挙げ得る。次に通信關係にては大阪通信局海軍部神戸出張所、同神戸電信電話技術官駐在所、大阪野分局神戸支局、神戸中央電信局、神戸中央・神戸鐵道・三宮・兵庫・須磨・須磨・林田・六甲山の九郵便局・神戸中央電話局及其の葬令・三宮・元町・湊川・兵庫・須磨の六分局あり、市内の三等郵便局は七二に達する。鐵道關係に於ては鐵道省神戸改良事務所・大阪鐵道局豊取工場・同神戸事務所あり、其他の官制としては海洋氣象臺・神戸測候所・神戸警備隊兵庫支署・神戸及兵庫の二稅務署・大藏省預金部神戸出張所・大阪地方專賣局神戸出張所・同葬令專賣出張所・臺灣總督府專賣局神戸出張所・農林省食糧局神戸出張所・神戸警務署等を挙げ得る。國際都市・海港都市として外國領事館は昭和十一年末三四國の多きに達す。總領事館を開設せるものは伯利西爾・中華民國・ドミニカ・獨・伊・パラグアイ・ソヴィエトの七國、領事館を設けるものは亞爾然丁・白耳義・ボイグイア・智利・チエコスロヴァキア・政瑪・丁林・埃及・英・佛・フィンランド・グアテマラ・希・美・スイチ・ハンガリー・墨西哥・和

蘭・諾威・パナマ・秘魯・南米・暹羅・西班牙・瑞典・ウレグライ・米・ペキエラの二七國にして、加泰院は貿易事務館を設く。是等諸外國人はその商業の伸張に努力すべく大阪神戸外國人商業會議所を組織し、事務所を神戸商工會議所内に設け、獨逸人は特に獨逸人商業會議所を増進すべく神戸獨逸委員あり。多大の貢獻を爲し來れり。〔社會施設〕 社會事業の發達も亦比較的新しく、世界大戰以後に屬する。昭和十一年九月現在に於ける各種社會事業施設は市費三七其他五一なり。兒童保護施設としては巡回産業・保育所・兒童相談所・育兒所等一四あり。經濟保護施設には公設住宅・有料及無料宿泊所・公設食堂・公設洗濯場等一九、警察保護施設は凡そ一六にて一般施設には市立市民病院・済生會兵庫縣病院あり、其の特殊施設として肺結核に市立屯田療養所・國立健康相談所、傳染病に市立東山病院、トラホームに市立トラホーム治療所等あり。失業保護は本市社會事業施設として最も努力し、全国的に顯著なる實績を挙げつつあるところ、市費の職業紹介所・労働紹介所及授産所を始め公私聯合計一六一を算し、社會教化事業に従ふもの一六あり、釋放者保護・不良少年少女保護及種和事業等に分る。救災事業は救護法に依るものにして、本市には方面委員の兼ねる救護委

員四八八人を置き、施設として市立救護院本院及分院・私立神戸養老院あり。其他施設として九あり。傷痍軍人・盲人・移民・苦學生・不具者等の各保護施設、市費無料法醫相談所等を挙げ得る。尙ほ三十年前より當市民、城女史によつて企てられし、須磨浦入水者に對する保護事業は「一寸持て」の標柱と共に名勝地に於ける特異の存在として、之を挙ぐるに値せん。〔沿革〕 現今の神戸市は舊美原郡と舊八郡郡との地域にして、上代舊古の一地方なりしが如し。舊古とは當時蘇波の津より津波の海を隔てし對岸一帯の總稱と解すべく、又舊古の水門は恐くは西宮附近の津門なるべしと考へらるるも、或は和田岬の東海岸即ち今日の兵庫を之に擬すべきか。舊古の水門は神功皇后新羅征伐より御氣旋の磯、御上陸遊ばれしに始まり、應神天皇の朝には諸國の貢船五百艘此處に集まり、又三韓の使節多し此地へ來航せしものにして、當時既に海上交通の要津たりき。中古に於て舊古水門の名隠れ、大輪田泊又は和の泊の名あらはれたり。これは疑なく今の兵庫の地に於て、大輪田は「大海」又は「大波」と考へられ、轉じて浪りの發着點たる津泊の義に用ゐられ、湊川河口の津泊最も著しきを以て、固有名詞として使用せられるに至りしなるべし。天平年間、僧行基が攝播沿岸一圓の航程を測つて五泊の制を建

てして、大輪田の泊もその一泊として經營せられ、平安朝に入りて都が京都に遷り、西國と京都との交通の難波を經ずして行はるゝに至るや、近畿以西の物資は大輪田の泊によりて集散せられたため大に繁榮せり。弘仁三年、造大輪田船瀬使を置き修築せしめ、爾來平清盛の大修築に至る迄大輪田泊を利用する船舶は一種の關稅として修築の材料を納め、大破小損の修理に當てたりしも、風浪のため破壊せられたる事多く完全なるを得ざりき。平安朝の末期、仁安年間及び、平清盛はこの地の海陸交通の要衝にして西國來朝の要地に當り、且つ風光絶佳なるを深く愛し、酒都の地を此處に相し、福原に別業を設くるに及び、大規模の港河修築を計畫し、豐崎山の土砂を崩して大輪田泊の沿岸三十餘町歩の汀濱を埋立て、前面に島を築きて統治の安全を固れり。現今の島上町は當時の築島即ち防波堤なり。起工より三年にして承安三年之を完成せり。次で治承四年六月清盛は專斷を以て福原の莊に安徳天皇を奉りて遷都し天下に號令せんと企てしが、新京遷在僅に六ヶ月にして同年十一月、又遷都の已むなきに至り、京洛に御歸還せり。この謂はゆる福原京は帝都として地域狹隘に過ぎず、京城の經營困難なりし上に、當時人心漸く動搖、諸將の舉兵もあり、公卿百官又舊都に戀々たりしに由るなり。その後壽永三年附近一帯の地即ち東は生田の

森より西は一ノ谷に到る、現在の神戸市を蔽ふ廣地帯は源平二軍戰亂の甚と化せり。義經丹波を征討して間道を通り、不意に一ノ谷の處を衝く奇襲動を奏し、平氏の陣潰れ、一門の大將公達相繼いで戦死し、殘る者は遠く屋島・櫛ノ浦に逃れて滅亡したり、此等の戦亂のため大輪田地方は忽ち衰退に赴き、清盛畢生の努力による防波堤も風浪の破壊する所となり、荒廢に歸したり。然るに偶々東大寺の俊乗坊重源の力により建久七年再び修理行はれ、港内又面目を一新し、鎌倉時代に於ける外國との交通は主として此港に依れり。兵庫なる名稱は中世までなく之が世に稱せられしは、鎌倉初期以後にして名稱は庄名より出でしもの如し。鎌倉時代の末葉、世は亂れ、元弘・建武の戦を経て海川の戦を知るかや、兵庫の地は再び擾亂の巻を展開せり。建元元年五月足利尊氏西國の兵を率ゐ、水陸相應じて東上せるに對し、新田義貞は和田岬より生田川に至る海岸線に防禦陣地を布き、楠木正成は海川を背後に會下山・頼田山より長田に亘る一帯にて之を遮撃せしが、官軍利あらず、正成は敗れて戦死し、義貞は京都に退けり。斯くて兵庫の地は一帯にして焦土と化せしも、水陸の要港として依然として其價值を減する事なく、國內交通の要地たりしは勿論、吉野朝廷時代より室町時代に至り、明及び朝鮮との貿易の盛に行はるゝや、兵庫は

その船舶の出入繁く、海外貿易の主要津として重きをなしたり。然るに應仁・文明の内亂は兵庫の津の貿易に大打撃を與へたり。即ち此地は西國に大内氏政廳するあり、瀬戸内海の交通國體となり、幕府は兵庫を避けて和泉堺より證明船を出すに至り、堺港の繁榮するに伴ひ、兵庫は貿易港たるの地位を奪はれ、僅かに國內商業地としての命脈を保つに過ぎざりき。更に織田・豊臣時代に幾度か戰場となり、甚しく其の發達を阻害されたる外、慶長元年の震災には殆ど全滅に類し兵庫の港は一時大に衰頹したり。元和偃武以後戸田・青山・松平の三氏相次いで尾崎藩主として兵庫を領せしが、明和六年徳川幕府の直轄地となり、其町方は大阪町奉行所、地方は代官所の支配を受ける事となれり。寛永銀國以後、國內商業の時代となり、その發達に伴ひ、諸國物産の兵庫の津に集るもの、漸次多きを加へ、諸侯は大阪に領米を賣揚し、此等の餘産船は多く兵庫に寄港し、且つ寛永の頃より北國及び出羽の物資は下關を迂迴して、海路江戸又は大阪に回漕せらるるに及び、之が渡海は兵庫に於て支配し、其物資の増加に伴ひ、遂に諸侯の藏米以外に兵庫に賣揚するもの多し、爲に大船互輪輪船せり。一方には參勤交代の制確立するに及んで、西國の諸侯は概れ海路を利用して此地を上陸地點とし、之が爲諸侯はここに本陣・本陣の外、

自家用の謂はゆる旗本陣を設けらるゝに至り、また慶長以降の朝鮮使及唐人の參府も亦兵庫の津を經由し、更に商人の問屋筋には明和年間幕府より後仲間許さるるありてその數一二に達し、兵庫の發展著しきものありき。市街も年々海岸に沿うて次第に半圓形に發達し、元禄頃は長崎と略大ききを同じくせり。明和年間の頃兵庫は北濱・南濱・同方の三に分れ、前二者は海岸にあり、十一町と六町とを有し、同方は兩濱の背後海に面せざる地を云ひ二十八町に及び、三方合計四十五町に分れたり。此頃神戸の神戸・二ツ茶屋兩村にても、船舶酒業を業とするもの多し、又問屋を營めるものもありき。江戸時代の末期安政五年、米國を初めその他の國と條約締結し、謂はゆる五港の開港は約されたり。其條約により、兵庫も安政五年三月より五十六ヶ月の後即ち文久二年十二月を以て開港する筈なりしも、當時國內には攘夷の徒後り、殊に兵庫は京都に近き要衝の地なる故を以て、反對もまた頗る多く、勅許を得る事甚だ困難なる状態なりき。されば時の大老井伊直弼、獨斷を以て安政五年六月、謂はゆる安政假條約を調印せしが、國論震々、勤王攘夷の徒各地に蜂起せしため、幕府は文久元年使節を歐諸國に派して五ヶ年間の開港延期を交渉し、海關稅率の低減を許して其同意を得るに至れり。されど國內には攘夷論益々熾烈を加へ、

攝海防備の聲請候の間に大に興れり。依つて時の將軍家茂兵衛を視察し、文久三年時安房守をして實地に調査の上、和田岬と海川の二箇所に砲臺を設け、生田川尻小野濱に神戸海軍操練所を置き、遂に元治元年この操練所にて鎮港の談判を開けり。されど慶應元年五月英・米・蘭・佛の四國公使聯合艦隊を率ゐて兵庫に入港して開港を迫りし爲、將軍慶喜は兵庫開港を倫敦覺書に定めたる期限内になすべしと回答せるを以て艦隊は引揚げたり。されど當時なほ兵庫開港に關し國論沸騰、事懸紛糾を告ぐるに至りしかば、慶應三年三月慶喜參内して遂に勅許を得、兵庫開港の事は決せられ、開港期日は慶應三年十二月七日と定められたり。故に兵庫と稱するはその實神戸の事にして、當時の邦人の排外思想を考慮したると、兵庫は土地狭く居留地に適する土地を缺き且つ水深も淺く、港市として適せざる關係上、嘗て神奈川の代りに横濱を開きし例に倣ひ、慶應元年入港の際パークスの良港として發見せし神戸を兵庫開港の名の下に開きたり。故に於て幕府は居留地域の設定、運上所の舊海軍操練所跡への建設、倉庫、波止場の築造等開港の準備を着々實行、慶應三年十月王政復古を見しが、兵庫開港の事は幕府専らこれに當り、同年十二月七日開港を迎へ、對外貿易の第一歩は踏み出されたり。斯くて之まで中國街道に沿ふ家村にして

神戸・定水・二ツ茶屋の三村合して戸數一千に滿たざりしが港の中心となり、今日神戸港繁榮の端緒に就きたり。明治元年十一月神戸・二ツ茶屋・定水の三村を合して神戸町と稱し、港を神戸港と公稱するに至り、港勢は伸張したれども當時の神戸港は往々砂礫の堆積するのみならず、風浪の兇暴を蒙ること屢々にして荷役に大なる困難を伴ふこと屢々ならず。依つてその後生田川の附帯を行ひて居留地に於ける生田川の氾濫を防ぎ、兵庫新川を開鑿して兵庫に入る小舟に和田岬の險所を避けしめ、小野濱船溜の開鑿、辨天濱の埋築等、幾多港灣の改良を行つて、神戸港の面目を一新せしめ、便宜は昔日に倍加し、貨物の集散益々多きを加へたり。而して明治七年には阪神間鐵道開通し、同十年二月には京都まで延長せらるるに及び、此地の繁榮に一時期を劃し、明治十二年には神戸・兵庫及び坂本村(今の楠町)を合して神戸區と稱し、同十五年には早くも人口六萬二千餘を算せり。明治二十一年山陽鐵道兵庫より姫路まで開通、翌年東海鐵道の神戸と連絡するに至つて陸上の交通は至便となり、同二十二年市制の發布さるるを、舊兵庫郡葦合村・舊八郡部野田村を合併して神戸市を稱するに至り、戸數三四〇〇〇、人口一三四七〇〇に達せり。同年東海鐵道全通するに及び陸上交通益々便を加へ、同二十五年には神戸海界を擴張して神戸

兵庫の兩港灣は全く神戸港の名稱の下に包括され、次で同二十九年に舊八郡部の林田・湊兩村及び須磨村の池田を市に編入し、戸數四六〇〇〇、人口一八四〇〇〇人となれり。日清日露兩戰役の間に本市の發展に伴ふ諸種の土木事業行はれ、港勢益々として進みしかば、明治三十八年には本市と大阪を結ぶ阪神電氣鐵道の開通を見たり。而して神戸市の生命たる大築港計畫も、この頃より實施せられたり。また大正三年勃發せし世界大戦は我國海運の一大飛躍となり、神戸港は益々發展し、大正八年には阪神急行電車の敷設せらるるあり。大正九年には武庫郡須磨町全部を併合し、同十一年には神戸市の都市計畫區域を、東は廣屋川、西は攝津國境に至る地域と定め、着々諸種の施設行はれ、更に昭和四年市東郊の發展に伴ひ、西灘・六甲の兩村並に西郷町を合併し、同六年以來區制を布きたり。最近は大工業の發達日覺しく、工業都市としての色彩顯著となれり。かくて開港以來七十年にして今や本邦第一の貿易港たるのみならず、世界有数の良港灣として國際通商上重きをなすに至れり。一谷鐵軍記・三ヶ摩耶のお山をみてに見て、行く道筋も直ならぬ、臨の濱邊や磯傳ひ、神戸も勝に海川、流る水の流ならば、愛も細橋かけ渡す、舟守りの神垣や、森もしげみで置く露の、垂水の早過ぎて、行けばほどなく上野山、一谷にぞ着きける

が、
〔武庫驛宮〕 須磨區月見山にあり。天井川の上流高丘一帯の松樹鬱蒼たる地を占め、もと西本願寺別荘の存せし所に、のち皇室御上の光榮に當り、明治四十年驛宮の造營に着手、大正三年竣功せり。二十六棟の御建物は總て白木造の御寶素なるものなり。大正年間には天皇、皇后、皇太子行幸啓あらせられたり。
〔花隈城址〕 神戸區北長狭通りに在り。舊花隈村と稱し一邑を成せし地なり。永祿十一年荒木又右衛門村重の城を築きし所なり。この附近今は狹斜の巷と化し昔日の傳を知るに由なし。
〔和田岬砲臺〕 兵庫區和田岬町和田岬の尖端三邊造營所構内にあり。形狀白は似たるを以て俗に白砲臺と稱す。外部は花崗岩より成り、内部は木造二階、砲門十二箇を備ふ。時安房の建築により文久三年竣工、元治元年竣功せり。當時西宮・今津・神戸・川崎の各所に之と同じものを築造せしが、今日残れるは和田岬と西宮のもののみなり。
〔須磨開屋址〕 源後昌の「淡路島かよふ千鳥」の古歌に名高き開屋址は、神明國道と千森川との交叉せる地點の附近なるべし。
〔榮町通〕 海岸通の北にありて東西に通じ、明治六年開設せられ、幅員僅か八間(一五米弱)に過ぎざりしが、當時世人その廣闊なるに驚嘆せし道路なり。現在は

兩側に銀行・會社の大建築並比して本市の金融の中心をなす。
〔海岸通〕 神戸港海岸に沿うて彎曲をなしつつ東西に達り、日本郵船・大阪商船會社を始め海運關係會社・運送店・倉庫・旅館軒を並ぶ。東部京橋近くには商工會議所・水上警察・日伯協會等あり。海岸には税關第二・第三・國庫・第四波止場・中央堤・萬國波止場を有し、船舶の往來繁し。萬國波止場は舊米利堅波止場にして、アメリカ合衆國領事館(今の郵船ビル)の南なりしかば、その名を得たり。
〔三宮〕 生田神社の南一帯の地を三宮町と稱す。此の地に三宮神社あり、生田の第三の斎神ありければこの名あり。現今この附近に省線・阪神電鐵・阪急電鐵の三線設けられ、また阪神國道・臨港國道の完成あり、四通八達、大阪及び神戸港への交通至便にして、今や神戸市の交通の中樞となり、市の發展の核心を形成するに至れり。なほ阪神三宮驛には十合百貨店、西方省線元町驛近くに大丸百貨店あり、阪急三宮驛には阪急會館建設せられ、此處に映畫館・劇場・食堂等の經營せらるるあり、商業街・娛樂街として發展しつつあり。
〔トリアロード〕 大丸百貨店の東側を南北に通ずる道路にして、異國的色彩濃厚なり。北は山手方面の外人居住地に達り山近くトリアホテルあり、南は元居留地

に入りて、海岸近くにオリエントホテルあり、兩者共に設備整へる高級ホテルとして有名なり。
〔福原〕 海東區福原町にあり、湊川新開地の東に接す。現今は神戸唯一の遊樂地なり。平安末期平清盛此處に福原荘を營み、治承四年六月安徳天皇を奉じて此處に遷都ありしも、早くも同年十一月には車駕舊京に還御し給へり。のち海水二年平氏の源氏に追はれて、西に逃がれんとするや、此處に寄りて舊館を悉く焼拂へり。明治六年令を以て此地を廓に定め、當時市内に散在せし妓樓を集む。此れ今日の遊樂地なり。因みに昔時の福原はその區域頗る廣かりしならんも、現今は單に此の廓の地方のみの稱呼となれり。
〔元居留地〕 舊生田川下流の海岸にあり。慶應三年兵庫開港の際に居留地と指定されし場所にして、翌明治元年ドイツ人の商館三戸先づ建築され、爾來相次で商館の建設を見しが、明治三十二年改正條約の實施に伴ひ居留地の名目亡び、元居留地と稱するに至れり。世界大戦以來外國商館多く日本人の手に歸し、舊觀を改めつゝあるも、今なほ古色蒼然たる舊式の洋館が近代的大建築の間に取残され、時に元の居留地の香號石を見る等、昔日の名残を留む。
〔元町通〕 榮町通の北にありて東西に通じ、現在小賣商店街として最も賑賑を極め、往時の西國街道にして、明治二十年

代に擴張して、現在の九米の幅員となれり。アスファルトを以て舗裝され、鈴蘭燈の情趣亦一入なり。東西六〇米、大小の商店軒を連ねて、外人向の商店も多し。その南端東に大丸、西に三越の二百貨店あり。東部に於て榮町通との間に南京町あり、支那人の商人多し。
〔合下山遊園地〕 兵庫區合下山町にあり。海拔八六米の丘陵合下山を開きし所にして、眺望極めてよし。此の地は楠正成陣營の址として名高く、山上には東郷元帥の筆になる「大楠公海川津の遺跡」と題せる碑あり。なほ同元帥の筆になる海難犠牲者の靈をまつる海員萬靈塔あり、改修後の新海川は、隣道を以てこの丘陵下を通過す。
〔大倉山公園〕 海東區楠町にあり。大倉山は一名安養寺山、又は廣嚴寺山ともいふ。もと大倉喜八郎氏の所有なりしが、明治四十三年に寄附し、その一部を公園とせしもの、海拔四四米に過ぎざれども、神戸港を一望に収め得る景勝の地なり。山上に伊藤博文の銅像あり。明治の初年伊藤公始めて兵庫縣列事(現今の知事)となりて、説書神戸市發展に盡力されし功を記念し、造營せられしものなり。
〔市民運動場〕 林田區蓮池町にあり。舊蓮池埋立地約五〇〇アールの地にして、野球場・陸上競技場・庭球場。水泳場等を有する綜合運動場なり。昭和三年御大

典記念事業として神戸市が計畫着工、昭和七年開場せり。
〔須磨浦海水浴場〕 省線須磨驛の南一帯の海岸は謂ばゆる須磨浦にして、之より西方舞子・明石にかけて白砂青松明麗なる海濱風景を展開し、海水浴場は驛を中心として東に天神濱、西に境濱あり。此附近は又氣候良好ため、病氣療養の好適地として知らる。
〔鉢伏山〕 市の西境に聳ゆる陵にして、海拔二四六米、市經營の遊園地あり。須磨・舞子・明石の海濱より淡路島等を一望の裡に収め得る景勝の地にして、東北嶺つづきに鐵樹山に至る。山上には航空燈臺あり。
〔諏訪山公園〕 神戸區にあり。諏訪山を拓きて公園とせしものにして、海拔一六〇米の小丘陵なるも、市街・港灣俯瞰の最適の場所なり。全山瀟瀟少からず、丘の頂上平地に海軍營陣及び金星測量標あり。海軍營陣はもと小野濱にありしを大正四年移建せしものにして、これは文久三年時安房小野濱にて、將軍家茂に攝海防備の説明をなせし際、之を記念する爲建設せし碑なり。金星測量標は明治七年十二月九日佛人のジャンサンが金星の太陽面通過を觀測せし記念碑なり。公園内東側の山腹に諏訪山動物園あり。猛獸其の他百數十種の動物を收容せり。山の南麓に武徳殿あり、斷崖下の諏訪山噴泉には炭酸冷泉湧出す。

〔東邊岡地〕 舊生田川の西、元居留地の東に接してあり。面積狭小、設備不完全なれども、園内に外人俱樂部、運動場を有し、在留外人の来り遊ぶ者多し。

〔湯川公園〕 舊湯川の埋立地であり。明治四十四年に市營の公園となりしものなり。舊河畔にありし松亭々として繁え、舊湯川の面影をとゞむ。園内に音楽堂、水族館、勸業館、神戸タワー等あり。

〔湯川新開地〕 舊湯川埋立地の一部にして、湯川公園の南隣一帯を云ひ、劇場、映画館・アイススケート場・レストラン・カフェー等各種の娯樂機關を備へ、市内隨一の賑わを極むる遊樂場たり。

〔海洋氣象臺〕 神戸區中山手通七丁目宇治野山にあり、大正十三年四月の開設にして、(一)海洋氣象及び地球磁力の觀測及び調査並に之に必要な天體現象の觀測、(二)海流・潮汐・其他海洋に於ける物理的現象の觀測及び調査、(三)天候圖及び磁力偏角圖の發行、(四)氣象機械及び地質儀・時計・磁針盤其他の航海測器の研究調整及び檢定、(五)洋上船舶に對する暴風雨警戒等を掌る。海洋の調査には專屬の觀測船春風丸を備へたり。

〔神戸商業大學〕 灘區高羽の舊赤松城址にあり、昭和九年の建設にして規模宏壯なり。

〔國立移住教養所〕 神戸區本通三丁目にあり、もと神戸國立移民收容所と呼ばれ昭和三年二月設立されしが、同七年十一月に至り現在の名に改められたり。主として伯利西留に移住の目的を以て原籍地若しくは寄留地官廳の渡航許可を受け、乗船のため神戸に集合せる移住者にして身檢検査に合格せる者を一週間内外、國費を以て收容し、移住者として必要なる教養を與ふる所なり。

〔川崎造船所〕 海東區舊湯川尻にあり。徳川時代既に川崎濱には船大工設けられ幕末、外國汽船の出入繁きを加ふるに及び、小規模なれども造船所出現せり。政府之を買収して經營に當りしも、意の如くならず、明治二十二年川崎正藏に轉下げたり。これ川崎造船所の前身なり。今や舊湯川尻の大部分を占據して我が造船界に重きをなし、海軍省監督の下に川崎造船所・綜合製鐵工場・川崎車輛工場を經營し、船體の建造・製鐵・汽車・飛行機等の製作に當れり。構内には六基の造船臺を有し、その第四船臺にはガントリークレーン設けられ、神戸港頭に一異彩を添ふ。

〔三菱神戸造船所〕 兵庫區和田町時町にあり。明治三十八年三菱合資會社の所屬として營業開始、大正六年三菱造船會社の所屬となれり。今や和田町の一部を占據して日本工業界に活躍し、船體の建造、修理、船舶機關、陸用諸機械の製造に當り、特にアイセルマンの製作に名譽を博せり。構内海上には二個の防波堤を築き、造船臺四基を備へ、其他の諸施設

〔生田川〕 摩耶山の北麓に發し、凡そ六軒半にして布引灘に懸り、南流する事約一軒半にして海に注ぐ。灘の下流に於ける流路は明治四年現在の新川に附け替へられ、舊河道は埋立てられて同八年市街地となれり。加納町・灘道・築港道路これなり。その海に注ぎありし一帶の地が小野濱にして今日の神戸の中心をなせり。現流路は布引灘の直ぐ下より暗渠を以て海に注ぎ、河道上は小公園を中央に有する大街路となれり。

〔湯川〕 再度山の北に發し、湯山南麓より東南に流れ、川崎の鼻にて海に注ぎありしが、土砂の運搬多く、河床に年々高まりて天井用をなし、河水氾濫して被害甚だ大なりしを以て、明治三十年より四ヶ年を費して、河道の附替工事を行ひ、會下山に六〇〇米の隧道を開鑿して西方の舊湯川に導き、以て新湯川を造れり。而して舊河道は埋立てられ、此處に湯川公園・新開地の如き歡樂地帯出現し、舊川尻には川崎・東出町の工業地帯成立す。昔時は此の舊河道を以て神戸と兵庫の境とせり。又此の地方一帯は楠公奮戦の地として著名なり。新湯川は大正十五年より五ヶ年を費して改修工事行はれ、昭和五年完成せり。河岸の所々に小公園設けられ、此處に見事なる遊歩道の出現を見たり。

〔布引灘〕 神戸區布引一丁目にあり。古來著名なる灘にして、生田川の上流、六

よく整ひ、川崎造船所と相並びて神戸港の偉觀を呈せり。

〔鐘山・市章山〕 再度山の前方、諏訪山の後方にあり。港外灘がより望見し得る鐘と神戸市章の大植樹を有す。鐘山は明治三十六年の觀艦式に際し、市の小學生此山上に鐘形整列して奉祝せしを以て、之を記念すべく鐘形に松樹を植みてその名とせり。其の東方の市章山は明治四十年神戸築港起工式を記念して植樹せしものなり。山頂に昭和四年在郷軍人山手分會の手になる巨大なる國旗掲揚塔あり。

〔一の谷〕 綴粉・鉢伏の山嶺の須磨濱に迫らんとする所の淺溪にして、西に二谷・三谷並べり。源平の古戦場としても名高く、谷の上方に安徳天皇御原内裏跡あり。方四米許りなり。※一谷。

〔高取山〕 市の西北部にある標高三二九米の低山なれども、獨り屹立して人目を惹き、市民のよきハイキングの目的地たり。頂上に高取明神を祀れり。傳説に曰く、神功皇后三韓より凱旋の途次、此地の石に座して石上を撫で給ひしに、その石忽ち富山となりしと、故に一名神撫山と稱す。

〔鶴巻〕 源平の戦に有名なれども、その指定地二箇所あり、何れなるや斷定し難し。一は市内夢野より西北武庫郡山田村を経て播磨の三木町に至る山程なりとして、他は山田村小河より一の谷に出ずる間道なりといふ。

〔再度山〕 神戸區の背後に聳え、海拔四六八米にして山上に大龍寺あり。古義眞言宗。神護景雲二年和氣清衡の創建に成る。本尊菩薩像(國寶)は寺傳に如意輪觀音といふも、彫刻音價に近く、一木造、乾漆を多少用ひ相好豊麗なる等身像にして、奈良朝にまで溯るかと思はるる古像なり。臺座また其時代の様式を示し注目すべきものとす。當寺は後年、兵火に遇ひ、正平六年赤松氏再修せしがまた變革あり、今の堂宇は元禄八年の再建なり。

坂町八町には町石あり。大龍寺附近一帯には見事なるスタヂオの地林あり、樹幹には多数のメメグタ着生す。近時この附近は再度公園として知られ、諏訪山々麓より垣々たる觀光遊路通じたり。

〔摩耶山〕 市の東北部に屹立し、海拔六九八米、老樹鬱蒼として之を蔽ひ、山上は展望よく、初利天寺・ホテル・遊園地・城址等あり。初利天寺は眞言宗の瓦刹にして佛母山と號し、大化二年の開基と傳ふ。寺傳に聖武帝、女人の難産を憐み、佛母摩耶夫人の影像を造り功徳を修す、空海入唐の際之を傳へ歸朝して此處に佛母堂を建つといふ。參詣の便にヶアブルあり。殊に八月八・九兩日の四萬六千九百法會には稀有の參詣者を見る。山中には正慶年中赤松則村が護良親王の命旨を奉じて集兵せる城址あり。風光明媚、夏季は氣候冷涼なるを以て市民の好遊地たり。

〔長田神社〕 林田區長田町三丁目に鎮座。官幣中社。祭神、事代主命。神功皇后凱旋の際、廣田・生田兩社とともに勧誘せられたる式内名神大社なり。社殿は大正十三年炎上、昭和三年再建せらる。開運の神として信仰せられ、祈願報賽に勇を神庭に放ち、或は馬の騎馬を奉納する習あり。例祭は十月十八日・十九日にして、毎月一日・十五日にも參詣者多く雑音を極む。二月部分會の追儀式は古典的にして情趣豊かなるを以て著名なり。

〔湯川神社〕 海東區多聞通三丁目に鎮座。別格官幣社。祭神、楠木正成。元治元年の島津久光、慶應三年の徳川慶勝、明治元年の東久世通禧等の大楠公を國神として奉祀せんとする上言を朝廷におかせられて御探帳遊ばされ、正成に神號追諡、楠社造營を仰出されたり。時に明治元年四月にて同三年六月朝廷におかせられては工事を兵庫縣に托し、同五年五月功を竣へ、社殿を湯川神社と賜はりたり。現在の社殿は昭和九年の改築に係る。境内京南隅には楠公墓あり。元禄五年八月徳川光圀の建立するところにして、有名な

甲斷層崖に生じ、のち浸蝕により退きしものにて、花崗岩の溪谷に懸り、雄淵と雄淵とあり、前者は高さ約二一米、幅四米、後者は前者より上方約五〇〇米にありて高さ凡そ四五米、幅四米なり。なほ兩淵の間に夫婦滝及び鼓滝あり。近年上流に布引貯水池築造せしを以て、水勢往時の如く強大ならざれども、今なほ開運の勝景たるを失はず。布引貯水池の上流は俗に二十歩トウエイトロスと稱して絶景なり、雄淵の下手には布引鐵泉あり、炭酸冷泉を湧出す。

〔青苔温泉〕 灘區青苔町にあり。土地高燥にして炭酸冷泉を湧出す。

〔天王温泉〕 湯島山町にあり。地は湯川の上流、天王谷にあり、湯山を負へるより湯山温泉ともいふ。炭酸冷泉にして加熱して常用とす。

〔高羽の樟〕 灘區高羽字西高の路傍にあり。巨大なる樟樹にして指定天然記念物たり。高さ二〇米、根廻り一九米餘、地上約一米半の高さより、幹は東西北に三本の太き枝分れ、幹の内部は一大空洞をなす。

〔生田神社〕 神戸區下山手通一丁目に鎮座。官幣中社。祭神、稚日女神。神功皇后新羅征伐より凱旋の途、廣田・長田兩社と共に創始され給ひし古社にして延喜式内の名神大社なり。今の社殿は元文四年の造營に係る。例祭は四月十五日・十六日(春祭)、九月十五日以降五日間(秋祭)。

〔布引灘〕 神戸區布引一丁目にあり。古來著名なる灘にして、生田川の上流、六

よく整ひ、川崎造船所と相並びて神戸港の偉觀を呈せり。

〔鐘山・市章山〕 再度山の前方、諏訪山の後方にあり。港外灘がより望見し得る鐘と神戸市章の大植樹を有す。鐘山は明治三十六年の觀艦式に際し、市の小學生此山上に鐘形整列して奉祝せしを以て、之を記念すべく鐘形に松樹を植みてその名とせり。其の東方の市章山は明治四十年神戸築港起工式を記念して植樹せしものなり。山頂に昭和四年在郷軍人山手分會の手になる巨大なる國旗掲揚塔あり。

〔一の谷〕 綴粉・鉢伏の山嶺の須磨濱に迫らんとする所の淺溪にして、西に二谷・三谷並べり。源平の古戦場としても名高く、谷の上方に安徳天皇御原内裏跡あり。方四米許りなり。※一谷。

〔高取山〕 市の西北部にある標高三二九米の低山なれども、獨り屹立して人目を惹き、市民のよきハイキングの目的地たり。頂上に高取明神を祀れり。傳説に曰く、神功皇后三韓より凱旋の途次、此地の石に座して石上を撫で給ひしに、その石忽ち富山となりしと、故に一名神撫山と稱す。

〔鶴巻〕 源平の戦に有名なれども、その指定地二箇所あり、何れなるや斷定し難し。一は市内夢野より西北武庫郡山田村を経て播磨の三木町に至る山程なりとして、他は山田村小河より一の谷に出ずる間道なりといふ。

る神文「嗚呼忠臣楠子之墓」は光原の筆になり、その神文は明國の義臣未弁水の撰、京都の畫家岡村元春の書寫なりといふ。攝社甘南備神社は明治三十八年大楠公夫人殿子を祀れるものなり。正成戦死の日なる五月二十五日には春季大祭行はれ、豪華なる御神幸式は船越町に及び大いに賑ふ。例祭は七月十二日なり。数多き寶物は取めて寶物殿にあり。就中段成殿と法華經典書とは有名にして、前者は正成の着用せるもの、後者は正成の自筆なり。共に國寶に指定さる。昭和十年大楠公六百年祭を記念する爲、境内に一棟を新築して七生館と命名し、國民精神作興の一大道場となせり。

〔七宮神社〕 兵庫區北宮内町に鎮座。蘇社。祭神、大己貴命。平清盛、經々鳥造の際、工事進捗をばかり勸請せるものと傳へらる。社寶に兵庫繪巻、其他、近世の兵庫を語る貴重資料を蔵す。例祭五月八日・九日。

〔波島神社〕 灘區波島に鎮座。蘇社。祭神、天照大神・素戔鳴尊にして式内社なり。もと能勢郡波島山(現今の大坂府豊能郡神山三尊山)に鎮座せしを神功皇后征韓の途次、奉遷されたりと傳ふ。

〔和田神社〕 林田區和田宮通三丁目に鎮座。蘇社。祭神、天御中主神。萬治年中武庫郡式内四田神社の御輿流出し來れるを奇蹟として創建すと傳ふ。もと現在の新川の左岸にありしを、明治三十四年三

のなり。南方後園の古墳にして、もと三所ありしも今は本市の東明と味泥とに二個存せり。

〔神戸〕 攝津國(兵庫縣)八郡郡の古地名。和名抄に郷名見ゆ。名稱は生田神社の神戸より起りしものならん。太平記には郡領とあり。此の地の海濱をいふ。その地今神戸市の中心をなす神戸區の中に當る。〔神戸市〕 省線山陽本線の貨物驛(昭和七年設置)。神戸市兵庫區新在家町にあり。

〔神戸港〕 省線東海道本線の一驛(大正十三年設置)。神戸市神戸區新港町にあり。

〔神戸有馬電氣鐵道〕 私設鐵道。兵庫縣にあり。神戸市兵庫區の海用驛より起り武庫郡山田村を過ぎて有馬郡有馬町の有馬温泉驛に通ずるを主線とし、有馬郡有野村の唐櫃驛より同郡三田町の省線福知山線及び有馬線の三田驛に通ずる支線あり。主線の全長二・五軒、支線は一・二軒。哈爾濱驛(武庫郡山田村)にて社線三水電氣鐵道に接続す。軌間一・〇六七米、省線と連絡運輸。

〔公平村〕 千葉縣上總國山武郡の中部。成東町(東北隅)と東金町(南隅)との間に挟まる。面積一四・九六平方軒。村の西半は五〇米餘の丘陵地をなして森林あり。東部は九十九里濱沿岸一帯の平地の一部をなし、水田多く

合下山北峯寺に祀られしが、光孝天皇仁和二年勅願により開闢上人此の地に遷し七堂伽藍宏壯なりしといふ。中頃一時衰微し、源賴朝・豐臣秀頼等再興せしが、又維新後いたく頽廢せり。然るを明治二十年頃より鋭意復興につとめて今日に至り。境内は開放されて遊園地となり動物園等設けらる。背後の山頂には三〇〇萬燭光の航空燈臺あり。附近は源平の史蹟と風光の明媚とを以て著れ、境内には護國神社の松・教皇首洗池・神農軍用鐘・敬感受玩の青葉笛・若木の櫻の制札と稱するもの等あり。本堂及び本所彩色香貫十羅刹女像(鎌倉時代作)は國寶に指定せらる。

〔神昌寺〕 須磨區神昌寺町にあり。臨濟宗。延元年開、正統神宗光の開基にかり、紅葉に名高く一名楓寺ともいふ。

〔大龍寺〕 下野度山。

〔德照寺〕 神戸區下山手通八丁目にあり。真宗。國寶の銅鐘あるを以て名あり。その高さ一・三米、徑四〇・七五米、その體格によれば、大治四年、多治比氏之を鑄造し、のち長寛二年七月改鑄せられしものなり。蓋し平安末期の傑作なり。

〔德興寺(兵庫大佛)] 兵庫區北遊瀬川町にあり。天台宗。寶積山と號し、俗に福原寺とも、岡の樂師ともいふ。最澄の開基にして、本尊藥師如來はその作と傳ふ。寺寶の十一面觀音立像(木造)は高さ一・二米、平安初期のものにして、古朴

なる中に棟建の刀法を示せり。境内の青銅の毘盧舍那佛は兵庫大佛として知らる。兵庫の祇園南條莊兵衛の明治二十四年建立せしものにして、その高さ一一・五米餘の露坐佛なり。

〔福嚴寺〕 兵庫區門町にあり。臨濟宗南禪寺派。五藏山と號す。正安二年の創建、佛體國師の開基といふ。元弘三年五月後醍醐天皇、隱岐より御還幸の途次、當寺に御駐蹕あり、偶々手兵を率ゐて山門に迎謁せる楠木正成を召されて嘉賞されたり。

〔妙法寺〕 須磨區妙法寺にあり。眞言宗。行基の創建なりといふ。聖武天皇の勅願寺として七堂伽藍三十七坊に及びしが大破せり。福原遷都の際、内裏の乾に當るが故に、皇城護護の靈場として「新鞍馬山」との勅説ありしといふ。道徳式は長田神社と又異なる趣ありて有名なり。

〔藥師寺〕 兵庫區南遊瀬川町にあり。舊天台宗。現時宗。天平十八年行基の開基といふ。本堂は市内寺院中最古のもの、寺寶の楠木彩色施餓鬼圖(國寶)は同様頗る異様にして、岡の下方に明萬曆十七年の年紀ある供養文あり。

〔來迎寺(榮島寺)] 兵庫區島上町にあり。淨土宗。一に榮島山と號し、應保元年、平治盛榮島の記念に建立せしものと稱さる。俗説にいふ所の清盛榮島に際し人柱とせし松王の標石あり。

〔外人墓池〕 飛騨新港第四突堤に通ずる

本の様多し。また遺蹟も行はる。東國に成東町より隣村豊成村を経て南方正氣村に續く沼田の一部をなす。省線東金線は東金町より來り、村の東端を通りて成東町に通じ、村内に求名驛(明治四十四年設置)を置く。驛道は丘陵地の麓を通り、同じく成東町に通ず。この地は和名抄、山邊郡管谷郷(一に管谷郷に作るは誤なるべし)の地にして大字求名は近世武射郡に屬し、道徳・松之郷・家之子は山邊郡に屬せり。大字求名は明治十二年武射郡より山邊郡に併合され維新前は旗下の江原・三宅・酒井・村上諸氏の采地たり。大字道徳は天文年間道徳村と稱し、文祿三年の木版には東金領、堂庭之郷とあり、のち道徳と改む。維新前、水野氏の領地及び旗下、藥師寺氏の采地たり。大字松之郷は維新前に代官の支配地及び旗下の小野・高月・石谷等の諸氏及び租與力の采地たり。この地に久我妻城址・黒熊屋敷・北條長時以下の墓あり。大字家之子は維新前、水野氏の領地にして此地に家子前地あり。大字榮島は往古日西島と稱し、のち護良親王の御宮は故ありて大字家ノ子に館を造り御所と稱し之に居る、正平十二年病により薨じ此の地に葬る。而して榮島はもと大字家ノ子に屬し御所湯休の地たり、故に字榮島と稱し後に分れて榮島村と稱するに至れり。(久我妻城) 大字松之郷の字久我妻にあり、高丘に位し三面斷崖たり。里傳によれば

建長元年、北條長時、房總三國の守護となり、この地及び下總國東葛飾郡岩瀬村に妻城し二城を管す。その子孫三年、守時等職を繼ぎ、之を管し、元弘三年、新田義貞鎌倉を攻め北條氏等の族の滅ぶる時に守時また政死し城廢す。「家子前地」 大字家之子字尼御所にあり。里人家子御所と稱す。今礎に塚塚の地を存す。傳へいふ、建武年中護良親王鎌倉に幽せらるるや、その本州に配せられ此に住す、故に御所の名稱ありと。北に接して大字榮島あり。其地初め紀の住せし所、また字榮島臺に古墳及び石祠あり、御師大明神と稱し紀を葬る所と云ふ。また紀の從者あり、共に此に居り紀尼となり星草尼と稱す。其辭世の歌に「清果車露の命の說所何處邊邊の草葉奈留良車」とあり。また從者主計と云ひしもの尼を追弔するの歌に「晴多留月乃南爾星草尼の佛名乎唱得留折爾、字良屋萬志心能聞毛晴奴良無蒼廻御山爾照留月乎見社」とあり、而して尼及び主計の墓は榮島村法藏寺にありしが酒井定隆、領内を日蓮宗に改むるとき、法藏寺は松尾村に移る。

〔黒熊屋敷〕 大字松之郷字町如にあり、地平坦にして東南漸く高し。里傳に云ふ永祿中、黒熊大膽突、居を之に占む。のち長柄那本納村に移る。故に黒熊屋敷・町如の地名を存すと、今山林となる。(北條長時以下墓) 願成就寺門外にあり。碑三基を存す。其大なるもの三層にして丈

〔求女塚〕 萬葉集に榮屋處女塚とあるも

五尺許、二基は之に次ぐ。一説に之を千葉介常胤・上總介廣常・三浦介義澄の墓標とし、故に里俗三介の墓と稱す。然れども寺傳・里傳等にいふ、建長元年北條長時武藏守、房總三國の守護となり、宇久我臺及び下總國東葛飾郡岩槻村に築き之に居る。久時守護職を興げ弘安三年五月久時堂宇を建立し以て菩提寺となす。當時にありては大伽藍なり。而して之に居ること八十餘年、元弘三年没すと。今之に因りて一考すれば長時以下三世の墓標にして、蓋し三介三世の説傳ならんか。〔本松寺〕大字松之郷にあり。顯本法華宗。松岸山と號す。明應元年の創建、開基山は日哲上人たり。舊時は本山輪香上總十箇寺の一刹たり。慶安二年徳川家光十一石の朱印を賜ふ。(妙空寺) 大字家之子にあり。日蓮宗。華嚴山と號す。往昔眞言宗の梵刹なりしが、應永二十八年日蓮上人改宗開基す。建武中、大塔宮護良親王譴を被りて相州鎌倉に幽閉せらるるや、皇紀亦配せられて此地に到る。今も當寺山上に尼御所と稱する處あり、恐らくその居館の地ならん。寺號は皇紀の誤に因む。

【廣坪面】 朝鮮平安北道義州郡の東北部。鴨綠江の左岸に沿ふ。西は加山面に、南は玉尙面に夫々隣接し、東は朔州郡に、西北は鴨綠江を隔てて滿洲國安東省に界す。東境には五十八里の遼東道界し、また西境を三

【後壁庄】 臺灣臺南州新營郡の庄名。北西は東石郡に、東は白河庄、南は新營街、香社庄に接す。面積約七・二八平方町、人口一八八三二。西北境を流る八栗溪と東南邊を貫流する白水溪・六重溪の合流せる急水溪によつて圍繞せらるる地區にして、農産地なり。庄内は本協、烏橋林、安溪寮、善寮、崩埤、長短樹、竹園後、新港東、下茄寮、上茄寮、土溝、白沙屯の十二大字に分たれ、鐵貫鐵道は下茄寮字後壁の後壁驛と水上・新營驛間を結ぶ。管内の交通は右の外、新營の鹽水港製糖社とこの間を連絡する道路により物資の運搬極めて便利なり。農産の大なるものは米(約六一・五萬圓)・甘蔗(約二七・六萬圓)・甘薯(約一五・五萬圓)・其他、蔬菜・豆類・胡麻・黃麻等。水産は養魚による約五千圓。工業は製糖(約百萬圓)・精米(約二〇萬圓)・醬油(約六萬圓)等にして相當額に達す。小學校一、公學校三にして本島人子弟の就學率は三三・八六にしてその他國語講習所五箇所を以て一般本島人の教化を行ふ。庄役場は下茄寮に置く。本庄

は清康熙六十年代に設けられし下茄寮堡の地に屬し、雍正十二年南北二堡に分たれるや凡そその範圍は北堡の大部分と南堡の一部及び白嶺公渡堡の白沙屯庄を含めり。明末鄭氏時代に於て既に漢人開拓の歩は進められ、その中にて下茄寮は最も發達せる一區にして本協はその經營を設けられたる地とす。雍正初年福建省漳州の范姓の者は竹園後・長短樹を拓き、次で李・趙姓の者も竹園後・泉州人をして小作を行はしむ。(安溪寮御令營所) 明治二十八年十月十八日北白川宮能久親王殿下は安溪寮字頂寮に在る道士王大高の住宅に御會見せらる。御使用の正廳約五坪の土間と主屋及び左側の抽屜現存し、當時殿下には朝來の御熱三十八度四分にてマウリヤと稱せられたるも僅に卓一葉、椅子一脚にその傍に積少重ね置を敷きたる戸板の假床を以て寢臺とせられ御静臥せられたる。昭和十年總督府史蹟名勝天然紀念物調査會により史蹟に指定せられ、現地主王華より建物及敷地を庄及び有志の努力によつて買収して御遺蹟の保存を講ぜり。

【公埔】 臺灣鐵道臺東線の一驛(大正十五年設置)。花蓮港廳花蓮郡宮里庄にあり。

【廣浦江】 朝鮮咸鏡南道咸州郡にある河。咸州・定平の郡境にある白雲山(一〇八七米)の中腹に發源し、流路を東にして南に於て南に轉じ、下流は定平郡を流れ咸興灣に注ぐ。全流域四五軒、舟楫の便なきも咸興沃野の重要灌溉水なり。

【黃寶】 朝鮮忠清南道洪城郡にある鎮山。鎮山は廣川面・長谷面に跨る。金・銀を産す。新築坑三〇米、三香坑水平坑二五〇米を掘進せしに、堅坑は一三〇米掘下げ優良鐵體を發見し、三香坑に於ても南及び北押共に富鐵部に達し、かくして鎮山の鐵量を確知したる

【後崩山】 朝鮮平安北道義州郡の東北部。鴨綠江の左岸に沿ふ。西は加山面に、南は玉尙面に夫々隣接し、東は朔州郡に、西北は鴨綠江を隔てて滿洲國安東省に界す。東境には五十八里の遼東道界し、また西境を三

【公北面】 朝鮮平安北道義州郡の東北部。鴨綠江の左岸に沿ふ。西は加山面に、南は玉尙面に夫々隣接し、東は朔州郡に、西北は鴨綠江を隔てて滿洲國安東省に界す。東境には五十八里の遼東道界し、また西境を三

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

【江北】 佐賀縣肥前國杵島郡の東北部。和七年東京市城築製の際、千住町・西新井町・傍島町・綾瀬村・舎人村・東澁江村・花畑村・澁江村・伊興村と共に足立區を立つ。

るが本村産地は關東平野に於ける其分布を示す點に於て著しきものなり。(牛馬の産)指定天然記念物。大字牛馬の繁華園にあり。根本の總周圍一〇米、主幹の基部周圍四米、樹冠は東南側延長三五米、西北側一七米、樹の全面より花穂垂下し、その長さ二米七に及ぶ。

トニーモ 光明

【光明村】 靜岡縣遠江國勢田郡の中部。天龍川の左岸に沿ふ。北は龍川村、西は下阿多古村、西南は二俣町、南は敷地村、東及び東北は周智郡天方・二倉の二村及び大居町に界す。面積四一・五方軒、全村山勢にして、周智郡との境に光明山(五四〇米)・本宮山(五四九米)あり、次第に中部へ傾斜して、天龍川の一支流を發し、更に東境の一部は天龍川の谷に臨み、多少の平地もあり。交通は峠を越えて近隣に通ずる細き道路によるのみ。天正三年武田氏竊かに村内周智宗光明寺内に兵を聚め徳川氏を潰散に與はんとせしが、時の住僧高橋、密使を遣せて急を告げしを以て、家康直ちに攻め寄せてこれを破れりといふ。高橋は搦手を獻じてその戰勝を祝せしに、家康喜びて之を高名勝粟と呼べり。寺内に大黒杉あり、周圍一三米餘、高さ四〇米、樹齡千年と稱す。また稚兒池及び附近に光明城址等あり。【光明寺】 山東にあり。曹洞宗。光明山と號す。養老元年僧行基の開創に傳り、本尊に智滿・龍滿の三尊虚空藏菩薩

を安置す。天平九年聖武帝勅して勸願寺となす。奥ノ院の摩利支天に醍醐天皇の崇信厚く勸願所となし紺紙金泥の大乗妙典を納め給ふ。天正四年小豆坂の戰役に、徳川家康、富山奥ノ院に陣す。時に住僧高橋和尚家康の爲めに力を盡し、搦粟を獲して戰勝を慰す。家康之を徳とし、兜中の摩利支天像・陣刀二口・二俣郡一圓の朱印を與へ、爾後徳川家累代の祈願所となす。佛聖芭蕉亦當寺に遊び「汗の香や衣をふるふ行者堂」の句を遺す。

トニーモ 赤石山脈

【光明山】 赤石山脈南西方餘脈の一峯。濱松市の北東方二七軒前後に當り、靜岡縣勢田郡光明村と靜岡村に跨りて聳え、東斜面は周智郡大居町に延ぶ。標高五四〇米。西麓は天龍川南流し、川を隔てて觀音山(五三〇米)と對峙す。北麓は南西流して天龍川に落つる氣田川に阻まれ、川の彼岸に秋葉神社の鎮座する秋葉山時つ。山中に光明寺あり。虚空藏菩薩を安置す。戰國時代に武田方、天正三年この山の徳川氏と對せしが、この山に陣しり。この戰に光明寺の住僧功ありしより徳川氏その後寺領を下せり。【光明山】 奈良市の北方十二軒前後に當り、京都府和歌山郡御倉村にある山。昔時光明寺と稱する眞言宗の寺ありき。坊百二十ありて盛んなりしが後衰亡せり。此山また史實に見え、盛衰記の中に義經伊賀路より京都に攻め上る時この山嶽を越

きて宇治に至れりとあり、又治承四年高倉宮仁王、光明山の鳥居の前にて薨じ給ふとも見ゆ。

トニーモ 光明寺

【光明】 東海中郡嶺の一驛(大正十一年設け)。朝鮮慶尙北道慶州府慶州面にあり。

トニーモ 光明寺

【光明寺】 愛知縣栗原郡にありし村。明治三十九年本村は大田島村・佐千原村と共に廢せられ栗原村を置けり。【光明寺】 五峰山(兵庫縣)の別名。トニーモ 神目村 岡山縣美作國久米郡の南部。東及び北は龍川村に、西北は龍山村に、西は龍渡村に界し、南は赤磐郡布都美・竹枝兩村に隣す。旭川の上支流、北西部に於て東北より西南に流れ之に沿ふ所の高低地にして耕地拓く。他は三〇〇米前後の山地にて森林地と牧場をなし牧牛を營む。村の西北部を社線中園鐵道通津山山市へ通ずる街道は溪流に沿ひその西側を通る。此地、或は和名抄久米郡が削れた内とす。もと神目と稱せしが、のち上神目・中神目・下神目の三村に分れ、下神目は龍渡町に編入し、上神目・中神目の二村を以て舊稱を復し神目村と稱す。

トニーモ 神馬

【トニーモ 神馬】 大分縣北高部郡にありし村。明治四十年七月本村及大志生木村を合し新たに神馬村を建つ。

トニーモ 紅毛

【紅毛】 臺灣新竹州新竹郡七庄中の一。本郡の西北隅、海岸地帯に依り、地の内、福興・青埔仔(仔を子に改む)、後湖、炭頭・中崙・新庄仔(仔を子に改む)、紅毛港(紅毛と改稱)、員山・坑仔口(仔を子に改む)の九庄を割きて九大字に改め、かくて之を一括して紅毛庄と稱し、新竹州新竹郡の管轄にして、庄役場を大字新庄子に置く。【紅毛港】 臺灣新竹州新竹郡紅毛庄中、海岸線の略々中央部に在り。明治四十三年に成りし新竹廳志に「紅毛港は紅毛溪口に在り、古昔は周智の港灣にして和蘭人・鄭氏等の時、船寄泊せる口岸あり。然れども今に於ては港口土砂を以て塞がれ、水淺渚して製糖の用を爲さず」と記し、往時は内外船舶の往來最盛を極め、樟腦・米・茶等を輸出し、肥料・穀物・陶器類・木材・炭竹を輸入せり。同書は更に港名の由つて起りし所に就き、紅毛港に於ける口岸左の如し。(一)昔時紅毛の船港外に播成し船人岸に登り岸を構へたりしが、後年鄭氏の驅逐に逃うて滬尾地方に遷竄せり。(二)昔時生番數人小屋を作りて風暴尾に栖む者あり。頭髮の紅なる爲めに紅毛と呼ぶ。因て港を紅毛港と稱す。(三)嘉慶年間より英吉利人來り樟腦を製し此の港より運出せり。因て紅毛港の名あり。(四)順治三年の頃に英人下樹林・崙仔脚・外湖・大庄・埤仔頭・頂樹林等の間に住居し鄭成功渡臺の時一時寄港して英人を驅逐したるが爲めに紅毛の名あり」と記せり。かくの如く紅毛

なり。地方唯一の金融機關として、紅毛信用販賣買利用組合(海運出資金三萬餘圓)設置せらる。交通は比較的便利にして、新庄子(庄役場並に信用組合所在地)を中心として、庄内諸部落間並びに庄外主要地との間に、部落道路・産業道路四通八達し、新庄子・員山の二大字間には、乗合自動車を行す。本庄開拓の跡を見るに、明治四十年に成りし新竹廳志に曰く「西曆一千六百四十六年和蘭人の紅毛港に破船して上陸する者あり、紅毛港附近の大庄・外湖庄・埤仔頭庄・頂樹林庄・新庄仔庄等より風山時溪に接近せる下樹林庄・崙仔脚庄等に至るの地は其の足跡の及びし所にして、仍ほ南東の斗崙庄内に紅毛田の名稱を留めたり。且つ紅毛田の北東石觀音庄より東北一帯の海濱に紅毛港の名稱を留めたるを觀れば西部海濱の地は南北一帯悉く和蘭東印度會社の統治に歸したるを知るべし」と。然れども當時主として手を南部臺灣の經營に伸せし和蘭人が、果してこの地方までを統治圈内に入れしやば疑問にして、今日徴すべき史料なし。而して地名及び土地の口碑を綜合してみるに、和蘭人が破船し、紅毛港に上陸せしは、蓋し事實なるべし。されどその上陸せし者は、長期間に亘り滞在せしのみにて、別に政治的意味を含まざるには非ざるか。とまれ、紅毛人により當地が開拓せられしとは信じ難きも、布教の着手を計畫

トニーモ——トニーモ

せしは、事實なるもの如し。而して當地の開拓せられしは、清領時代にして、漢人の手に依れり。當地は當初、竹塹社番人(平埔番族)の所管にかかりしが、雍正五年、廣東の惠州陸豊の人、徐輝壽、黃君泰及び福建の泉州同安の人、曾國誌は、南方竹塹(今の新竹)方面より進み、風山時溪(今の各々溪)を越えて、員山庄・崙仔庄(現在各々大字となる)、附近を開き、八年惠州海豊の人郭青山は、紅毛港溪を越えて福興庄(今の大字福興)を開き、泉州同安の人、李尙は後湖庄(今の大字後湖)を開き十二年廣東の嘉應州鎮平の人、車廷政は青埔仔庄(今の大字青埔子)を開き、之と同時に和蘭人、汪洪楚は、紅毛港庄(今の大字紅毛)を開き、斯くて、乾隆初年までに、管内一帯は廣東・福建兩省民に依りて開かれたり。帝國領臺前には臺北府新竹縣に屬し、竹北二堡に包含せられたり。帝國領臺後、堡は依然存置し、明治二十八年總督府假官制に依り、臺北縣新竹支廳に屬し、三十年新竹縣の新設と共に、同縣新竹郡管轄の管轄となり、翌年新竹縣廢せらるるや、臺北縣新竹郡管轄の管轄に屬し、翌年新竹郡管轄の下に、新埔支署を設けられ、本庄これに屬せり。三十四年廳縣廢置の結果、新竹廳を新設せられ、その下に新埔支廳を置くに及んで、本庄は該支廳の管轄する所となれり。大正九年地方制度の大變革に依り廢は置せられ、本庄は竹北二堡

の内の福興・青埔仔(仔を子に改む)、後湖、炭頭・中崙・新庄仔(仔を子に改む)、紅毛港(紅毛と改稱)、員山・坑仔口(仔を子に改む)の九庄を割きて九大字に改め、かくて之を一括して紅毛庄と稱し、新竹州新竹郡の管轄にして、庄役場を大字新庄子に置く。【紅毛港】 臺灣新竹州新竹郡紅毛庄中、海岸線の略々中央部に在り。明治四十三年に成りし新竹廳志に「紅毛港は紅毛溪口に在り、古昔は周智の港灣にして和蘭人・鄭氏等の時、船寄泊せる口岸あり。然れども今に於ては港口土砂を以て塞がれ、水淺渚して製糖の用を爲さず」と記し、往時は内外船舶の往來最盛を極め、樟腦・米・茶等を輸出し、肥料・穀物・陶器類・木材・炭竹を輸入せり。同書は更に港名の由つて起りし所に就き、紅毛港に於ける口岸左の如し。(一)昔時紅毛の船港外に播成し船人岸に登り岸を構へたりしが、後年鄭氏の驅逐に逃うて滬尾地方に遷竄せり。(二)昔時生番數人小屋を作りて風暴尾に栖む者あり。頭髮の紅なる爲めに紅毛と呼ぶ。因て港を紅毛港と稱す。(三)嘉慶年間より英吉利人來り樟腦を製し此の港より運出せり。因て紅毛港の名あり。(四)順治三年の頃に英人下樹林・崙仔脚・外湖・大庄・埤仔頭・頂樹林等の間に住居し鄭成功渡臺の時一時寄港して英人を驅逐したるが爲めに紅毛の名あり」と記せり。かくの如く紅毛

なる港名の由来に關する口岸區々にして何れを妥當なりと推斷することを許さざるも、蘭・英何れかの國人と何等かの係り合ひあること疑ひを拂ひ餘地なきが如し。現在在港としての面影なく、僅かに漁船の出入に依り昔を偲ぶのみ。【紅毛】 臺灣總督府鐵道敷設員の一驛(明治三十年設置)。臺灣新竹州新竹郡青港庄豆字埔にあり。トニーモ 鹿本 東京府南葛飾郡にありし村。昭和七年東京市城郭擴張に際し、小松川町・松江町・葛西村・小岩町・瑞江村・鎌崎村と共に江戸川區をなし、鹿本村大字は多く江戸川區の町名となる。トニーモ 河守 京都府丹波國加佐郡の西部。由良川の左岸。東は有路上村に、北は河守上村に、西は河西村に、南は河東村に界す。東北境及西北境に三〇〇米程度の山地ありて中央及南部に傾斜し南半は由良川の沖積地ありて耕地拓く。糊織物・生糸の工業を主とし米産これに次ぐ。宮津街道、山笠を東西に通じ粟落之に沿ふ。途中より分岐する府道、北方一八軒の宮津町に至り社線北丹鐵道は福知山市方面より來り、西南部に勢野河守驛(大正十二年設置)を置く。府立河守工業學校・町立女子技藝學校あり。町名は和名抄、加佐郡河守郷の遺稱。古への川守郷は河守町・河東村・河西村及び河守上村の地を

も含めるもの如し。用守の名義評かならず。應神紀に海部及び山守部を定むる事あり、古事記元天皇の條に、河部を定むる記事あり、海部は魚鹽のことを掌り、山守部は一に山部と稱し山林の事を掌る、これに據りて考ふるに河部もまた河守部を稱し川澤の事を掌りしものか、而してこの地はその部曲の居りし處か、一に用守は神社・神守の意にて、河守上村に元伊勢皇大神社ありより起りし名稱とも考へらる。正應田數目録に加佐郡河守莊田六十五町二段三百五歩、康正二年段錢引付に丹波國用寺郡地頭大和備九郎とあり、用守は川守の誤なるべし。舊藩時代は細川家の所領たり。本町の地はもと河守下村と云ひしが明治二十三年町制を布き現名に改む。いま河守・關・金谷・波美・上野の大字よりなり、河守に役場を置く。關はもと宮津街道の驛次にして關所のありし處。

コーモリカミ 河守上村

【河守】河守上村(京都府加佐郡) 郡府丹波國加佐郡の西北隅。河守町の北に隣る。東に岡田上村・有路下村あり。北は與郡郡上宮津村、與郡村に界す。面積三三・七二方町。大江山(八三三米)西に隔て橋居し東北に峰を連れて北境を限り南へ延びる一脈は西境を限る。全體に山地東方へ傾斜して東境にある三三四〇〇米程度の山地との間に谷を造り由良川支流南流し、東南隅にて南境の山地(四

【五〇〇米程度】の北を東流する小河を併せて、南境河守町を流れて本流に合す。全村山地廣く、河の流域に僅に耕地を見らる。人口密度僅に六九人なり。河守町より北方宮津町に至る府道東部の川の谷に沿ひて北に貫き東南部にて之より分岐する府道西に通じ西北方加佐町方面及西方出石方面に至る。南境河守町に就線北丹波道河守驛あり。村に二俣・北原・備住寺・毛原・内宮・天田内・橋谷の大字よりなり、二俣に役場を置く。和名抄、加佐郡神戶郡の地にして、一部は河守郡に屬せしもの如し。神代の頃天孫瓊杵尊降臨の際、天照大神はこの地に豐受大神の御靈を副降し鎮座せしめられしと傳ふ。これ即ち丹波吉佐宮にての伊勢山田に遷座、その舊蹟を元伊勢皇大神社と呼ぶ。外宮・内宮共に景勝の由を占め樹木鬱蒼森茂の氣深き。外宮は山良川の上支流宮川に沿うて南北に横はる風形の小山、船岡山に鎮座、船岡山の麓には石の高徳燈と大鳥居があり、石段を登り詰め山の背を北に鳥居をなくれば石の玉垣の中に拜殿以下境内社等四一棟、寶藏・神樂所・拜見所・御供所・手水舎二棟、鳥居三基・注連繩柱・石燈籠・社殿柱等整然と並ぶ。中央なる本社の本殿の構造は神明造、千木の先端は垂直に切られ、騎男木は奇數にて伊勢外宮に近似す。内宮のある處は大字内宮宮山と云ひ、參道の途中に用明天皇の御代に皇子麻呂子

親王が國威征討の時滅みられしと傳ふ老杉二株天を突き穿て聳ゆ。内宮と外宮を併せて内外宮の稱あり、世に元伊勢といひ、村内には伊勢の如く、天岩戸を始め、川に宮川・五十鈴川、橋に宇治橋等の名ありありて古へを思はしむ。古くより世人の崇敬厚く、京都・大阪地方を始め諸國より參拜するもの多く、社線北丹波道に實にこの元伊勢參詣者の爲めに設けられしもの。また本社鎮座の船岡山が南北に横はる前方後圓壇なること、此山を去る約四百米西北の地點に船岡山を繋ぐ傳説のある神聖なる立石が、三面人工を施せるものにて、或は石室の一部かと考へられ、更に西方二百米に圓壇の如きものあり、又船岡山に近く陸塚墳と覺しき小塚ありて近時刀子と太刀を發掘し、ほど近き他の小塚よりこれと神土器の出土を見たり。これ等のことは神社と直接關係付くること能はざるも、此地方が古くより開發せられしことを證する恰好の資料たるを失はざらば、もと神戶郡と云へるはこの地が此の社の神戶なりしより起る。河守の名儀は詳ならずも、神社或は神守の意にて古く既に神社又は神聖なる樹林のありしことを物語るものに非ずや。また本村及び與郡郡界の間に大江山あり、俗に源賴光が後一條天皇の勅を奉じて酒吞童子を退治すとの傳説を傳へ、(※大江山)村内またその遺蹟と稱するもの數多し。【河守嶺山】本邦重要嶺山の一。河守上村

コーモン 港門島

【港門島】朝鮮全羅南道安島郡にある島。所安面に屬す。北東は所安島に對し北西は甫吉島を望み所安港外口の中央に位す。島の南東及北東の兩角は斷崖にして此附近激瀾あり其他は陸界多く陸嶺少し。島の最高峯餅岩山は南方端にあり、尖頭にて高さ一七一米。此島は安島諸島の南方附近を航する船舶に最良の目標にして、最南端に者貝島燈臺(明治四十二年設置)あり。燈質は四白光、光達距離二五哩。霧笛は四〇秒を隔て四秒吹鳴す。六七度より七三度迄は副燈不動紅光を以て二五〇度取距離約四五哩にある出雲龍を示す。豫備霧笛は備へ、船舶の霧中信號を聞きたる時に一分時約十回、尙ほ必要と認むるときは引續き打鐘す。無線電信を併置し、船舶通報に關する事務を取扱ふ(但し夜間は之を取扱はず)。

コーヤ 高野

【高野村】福島縣岩代國北會津郡の北部。南は若松市との間に町北村を隔て、西は神指村に、北は河沼郡安用村・堂島村に、東は同郡日橋村に各隣接す。會津盆地の中央部に位し土地低平、東部を日橋川の一支椋川(葉川ともいふ)、西境を椋川流れて地形に變化を興ふ。灌漑の便多く地味肥え水田よく拓げ米・麥を主産し養蠶も行はる。省線磐梯西線東部を控め若松驛(若松市)に出づるに便よく、若松市に至る縣道之に沿うて走り、またこの縣道に並行し中部を南北に貫通する街道若松市に達しバスの便あり。此地は藩政の頃高久組に屬す。明治二十六年水田村を置し同村大字上高野・椋川・界澤・中沼・木流(今ともに本村大字)を以て本村を置く。

【高野】其輪村(福島縣石城郡) 【高野村】茨城縣下總國北相馬郡の西部。利根川の北岸にて取手町の上流約七軒に位す。北は守谷町、西は大野村、東は楢戸井村と隣す。面積六・二九平方町の小村。北部は稍丘陵地性なるも中部より南部にかけては利根川流域の低地をなし、水田・沼田・荒地・畑地をなす。主生業は農業にして米・麥を主なる作物とす。社線常磐鐵道(取手町より下館町に通ず)取手町より來り、北隣守谷町を通り、守谷驛(大正二年設置)を置く。村名高野は荒野の義なりと。相馬日記に據れ

コーヤ—コーヤ

は村内の臨濟宗海禪寺に平菩提、高野山の觀を模して先祖の墓を作りしところ此寺をまた新皇堂といふは將門の靈を祀りしより起りしもの、國玉明神とも稱す。【高野町】和歌山縣紀伊國伊都郡の南部。高野山上にあり。北は九度山町を隔てと紀ノ川の谷なり。西に天野村、南に花園村あり。東南は大和國吉野郡迫川村に接す。面積一〇二・六七方町。人口密度一方町八〇人。東南の大和國境に水々峯・陣ヶ峯等の一一〇〇—一二〇〇米の連嶺聳立し、東北境には椋柳山(一〇〇九米)を中心し九一〇〇〇米の連峰連り、西南境に天狗山(九六八米)あり。中央北部には高野山(九八五米)ありて四周より約一キロの諸山峯、八葉連峰に圍み、其中央は東西五六軒餘、南北二軒餘の間約九〇〇米の極めて平坦な高原をなす。こゝに山岳宗教の金剛峯寺を初め智坊百餘箇寺の高野山町あり。河川は中央の高野山より四周へ流出し、東南部を西南流する有田川支流の御殿川、東北部を北流する紀ノ川支流丹生川、西北部を北流する丹生川の支流、西部に西南流する紀ノ川支流貴志川等あり。全境山岳にて高野國有林及社寺領より用材伐出され、また高野豆腐・山菜漬・木薯を出す。高野七日の登山口は四圍の峰を越え中央高野山町に連華狀に集り、北方紀ノ川谷より九度山町を経て神天嶽の東の不動坂を越えて來る高野街道、紀ノ川に沿ふ笠

田町方面より西尾梨子ノ木峠を過ぎて來る西高野街道を初め、南部の笠松峠を経て來るもの(有田川に沿ふ道に續く)、東南部の薄峠を入り來るもの(東南方奈良縣の伯母子方面に續く)、東部より櫻峠を越えて來るもの等あり。高野山電氣鐵道は北方の九度山町・橋本町方面より通じ神天嶽中腹に至る。昭和三年町制施行。【高野山】紀伊山脈の一支、長峰山脈の東部、椋柳山(一〇〇九米・陣ヶ峯(一一〇六米)・神天岳(九八五米)等に圍まれる九〇〇米に近き山上の平坦地を總稱して高野山と呼び、またその略は中央に聳立する古生層の丘陵(九〇〇米)もまた高野山の名にて呼ばる。高野山は現在にては高野町の一大字にして伊都郡に屬し、縣の東北に位す。此地に弘法大師の開かれし眞言宗の總本山あり。高野山は内外の十六峰(内八峰)・御社山・遍照岡・傳法院山・勝蓮花院山・獅子ヶ岳・神鹿ヶ岡・葉ヶ峯・劍ヶ峯。外八峰(今來時・寶珠峰・覆鉢山・神天嶽・姑射山・轉輪山・椋柳山・摩尼山)よりなり、自ら四佛四菩薩乃至十六大菩薩の國土を表す。然して之等の山峰に圍まれし内部に平均高度九〇〇米内外、廣袤約八軒の平坦面を有す。有田川は山の中央を東に貫流し玉川と合して、大瀧の瀑布を懸げ、野上川は西に流れまた丹生川は摩尼山より東北に流れ、細川は北流する等無數の溪水は

こゝに源を發し、山内の川を供するのみならず四方に流れて多くの田野を灌漑す。氣候は近畿地方に於ても他の阪神地方と異り、一年中の平均温度はかなり低く、冬は屢々降雪あり、零下十四五度以下なることも珍らしからず。十一月末より翌年の三月迄は寒冷期をなす。夏は室内にても八十度には昇らず、朝夕は六十度位の涼しきなれば蚊蠅火を用ふことを知らず。時鳥の聲は絶えず聞え、また佛法僧鳥(三寶鳥)も鳴けば、近年夏季には京阪神地方の人達の登山するもの少なからず。また春は梅・櫻花の美、秋の紅葉等は殊によく、各寺に於ける法會の多く行はるるもこの季節なり。高野山の森林は・空海の入山以來保護せられたため、鬱蒼たる美林をなし、樹木は松杉科に屬するもの多し。特に楡・榎・杉・樺・樺・樺・樺は六木と稱され山内堂塔の建築用備林となると共に、現今は國有林に屬し、一部は高野村として自然風致を害さぬことに留意しつゞ伐木も行はれ、木竹材と並稱される良材を出す。また廟の奥に一種の苔なる萬年草は世に著はる。かかる環境内に百二十有餘の寺院、その他これら寺院に依存する商家等の發達あり。昭和三年高野山を中心として町制を布き、山内には宗立高野山大學を始めとし圖書館・中學校・小學校・郵便局・警察署・銀行等あらゆる施設に缺くる所なき近代文化を藏す。殊に大學附屬圖書

館にある密教に關する幾多の遺書及び靈寶に陳列せられる開創以來秘藏の寶輪・論旨・院宣を始め弘法大師遺蹟の標燈・青葉・名臣英傑の墨蹟乃至佛像・佛器等に貴重なる逸品のみなり。かかる所に靈場を開きし空海の深意は今更年長敬の念禁じ難はず。抑々高野山は僧叡海の靈場にして空海弘仁七年五月諸國を跋渉して發見せし靈場にして、嵯峨天皇よりこの地を賜り密教の根本道場を此處に創立す。これ金剛華寺なり。最初に講堂(後の金堂)が出来、次いでその東に根本大塔を建つ。この外、御影堂・經堂・東塔・西塔・灌頂堂・御社堂等の殿舎あり。この附近は壇場と稱し山内の靈域の一なりしが、空海この地を拓きて二十年、承和二年三月二十一日この地に入定し、奥の院の廟所に納む。其後、高野山には幾多の盛衰ありしが、平安時代の終り頃、覺羅上人が、この地に大傳法院を建立して鳥羽上皇の御幸を仰ぎしことなどありしが、これがため本山たる金剛華寺との間に内訌を生じ、遂に大傳法院は根本に移りて、眞言宗新義派ここに生れることとなり。此頃、雷火がかかりて大塔・金堂その他の諸堂焼けしが平清盛の全盛時代なりしため、清盛の力によりてこれ等の堂塔は建築され舊態に復す。平家の西海に滅びし頃より、有爲轉變の世相を觀じ、世を捨てて靈染の衣を着るもの少なきが、無常眞實・混日入道・平維盛の如く、

は即ちその一例にて、法然や親鸞などの高野入りをもこの頃なり。鎌倉時代は高野山に名僧智識輩出し隆盛を極む。奥の院に至る兩側の墓碑を見ればこの時代の人のものも少からず。吉野時代より室町時代にかけて、上皇皇室を始めとし將軍家の歸依は依然として變らず、御願文なども相次ぎて至るといふ有様なり。かくして應仁以來國內の一般民衆の隆も高野山その繁榮を維持し、後柏原天皇の大永元年の大火にも屈せず、堂塔が再興されるに至る。織田信長天下統一の事業を開始せし際、比叡山の佛徒等、淺井淺倉を輔け、その事業を妨害するや、信長討せらる時、その鋒先は高野にも向ひ、天正十年高野攻の命を下す。然るに信長は六月、本能寺に先秀の爲執されし故、高野山に幸にその厄を免る。羽柴秀吉、信長の遺志を嗣ぎ、高野攻の軍を起さんとせし時、香僧の應其秀吉と折衝し高野山を救ふ。應其は高野を其の滅亡より救ひしのみならず、後には厚く秀吉の歸依を得、遂に今日の金剛華寺たる青巖寺を始め諸寺の建立・再建をなし、大火の大火以來焼跡たりし大塔・金堂の再興もなして、高野山今日の盛況を呈するの基を開く。徳川の時代となりてより將軍一家一門の歸依を得、その保護の下に高野山は一層盛んとなり、相次ぎて堂塔伽藍の建築されしもの少なからず。殊に元和

儀武以後天下の三百諸侯、種々の豫故を求め高野山御院に關係を結び、延いては高野山の繁盛を助けしことは、奥の院參道の兩側に並ぶ大小幾千の石塔よくこれを物語る。降つて明治維新に際しては、慶應三年十二月には、かの菅尾侍從陸奥相が、志士數十名を率ゐて登山され、使者を以て一山の向背を尋ねらる。當時、勤王僧雲の如く多かりし高野山にては左右なく勤王を誓ひ、爲に侍從は金光院、即ち今の西室院を本陣として近藩に歸順の沙汰を下せり。その軍資の如きは悉く高野山より進めしものといふ。かくて、王政は遂に古に復り、朝廷よりは篤く勤勞を慰めらるることあり。次で、明治四年七月には廢藩置縣のことあり、一山また寺領二萬一千三百石を奉還し、翌五年三月には大政官布告によりて境内婦女の參詣を許す。次で又六年、山林土地の命下り、ために高野一山は、俄に全く寶庫を失ふこととなり。これがため寺院は多く廢合せられ、現在寺院の残りしもの百廿、中にて坊坊として一般參詣者の便を計るものは六十七箇院に過ぎず。然しながら、一般大衆の信仰は年と共に篤きを加へ、奥の院・壇場の伽藍は、今も昔のままに法燈いよいよ輝き、香華の勤め・梵唄の聲絶ゆることなく、年々の賽者數十萬と注せらる。去る大正四年には、盛大なる開創一千百年記念大法會を營み、大師の恩徳を四海に宣布せしが、

更に昭和九年に、弘法大師一千百年記念大法會を營み、先に表上せし金堂及び大塔の建立をなし、山内諸殿の整理を斷行せし結果完備せる靈域となれり。
〔登山道〕 高野山に登るには、昔より高野七日といひ、登山に七つあり。即ち大門口・不動坂口・龍神口・大瀧口・相ノ浦口・大峯口・墨河口とす。そのうち最も名高きは、西の方和歌山・輪河方面よりする大門口、大阪・奈良方面よりする北日の不動坂口なり。不動坂口の方は交通難關發達せるを以て多くの參詣者はこのルートによる。不動坂口はまた女人堂のルートにもよる。不動坂口はまた女人堂口、或は京口とも云ひ、昔は主に女の登山し裏道なりしも、今に昔の表參道大門口は賑はず、登山者の大半はこの道による。即ち、南海鐵道の高野行電車によるものば、紀ノ川沿岸にある和歌山線の橋本驛を経て高野山に分け入り、終點高野下(推出)停車場に着く。ここにて高野山下(推出)停車場に降り、更に三十分程にて電車に乗り換ふれば、更に三十分程にて極樂橋停車場に着く。和歌山線の高野口よりするものは九度山を経てここに降り不動坂を登る。極樂橋より〇・八軒の長さのケーブル・カーに乗れば、約五分にて高野山驛に着く。ここは海拔約八六〇米で、ここより平地を約一軒進めば、不動坂よりする途に合して女人堂に到る。その間自動車の便あり。併しこの間は道路平坦なれば、老人子供にあらざる限り歩するを可とす。或はまた全く乗物を捨

てて昔の不動坂を徒歩若くは馬車にて登るよしし、途中に萬丈ヶ嶽・外不動・見が瀧などの舊蹟あり、その間二軒餘なり。別に橋本より舊道を徒歩にて古跡を訪れつつ約一五軒を女人堂に至るのも興あるルートにして、途中には橋本の應其寺・學文路の菊堂堂・觀音茶屋・四寸岩などあり。いづれにするも女人堂より所縁坊案内所までは降り坂にて、そこより再び平垣なる大道となりて東南に進み、南院前を廻りて千手橋に至る。女人堂より千手橋を廻りて約一軒中、千手橋より道は東西に岐れ、西は金剛華寺本坊・金堂前を経て大門まで一軒中、東は一ノ橋を渡りて墓地に入り、中ノ橋を経て奥ノ院御廟まで二軒中なり。次に大門口は和歌山口ともいひ、今に普通町石道と呼び、元參詣本道として開かれしものなり。所謂一足三禮の行幸路にて、この道によるには高野山口にて汽車を捨て、九度山まで約一軒を乗合自動車、それより徒歩又は人力車にて女人高野の慈覺院に參詣し、南へ山路を進み、天野の丹生都比賣神社を経て矢立辻に至り、東に折れて大門を入り、尙も一路東進、金剛華寺前を通ぎ、商店街を通り、弘法大師靈廟の奥ノ院に達す。この間一町毎に町石建ち、慈覺院より金堂(大塔)まで百八十本、金堂より奥ノ院まで三十七本、合計二百十七基、即ち六里(二四軒)あり。この間に古椿・老杉鬱葱として繁り、千古の舊蹟數多く存在

す。いまこれ等の舊蹟を後章上五十番順を以て左に掲ぐ。(安養院) 千手橋の東にあり。古義眞言宗、金剛華寺支院にして準別格本山なり。開創年代不詳。覺佛之を中興す、第二中興は顯賢意教なり。第十六勢尊德望一世に高く當院と毛利家との權契此時に始まる。元治元年、明治二十一年の兩度災上せしも、再建成りて殆ど舊觀に復す。寺寶本造大日如來坐像一體は藤原末期の製作に係り國寶たり。境内に毛利家の墓あり。(一切經藏) 御廟の東側に南面して立ち、三方間單層・屋根寶形造・楡皮葺、慶長四年三月石田三成總督菩提のため建立せしものにて、堂内八角の輪縁に高麗板の一切經六千五百餘卷を藏す。本尊文殊菩薩を安置せるため文殊堂とも稱す。堂は構造様式、内部の裝飾等よく桃山時代の特色を發揮し精巧華麗の一傑作なり。現に國寶たり。堂に東接して移の老樹あり、經堂杉と呼び樹齡約五百年、山中第一の老杉なり。(圓通寺(眞別所)) 眞言眞言宗、靈岳山律藏院と稱し、金剛華寺支院にて別格本山なり。弘仁年間智泉の開基に係る。文治年間後乘房重源之を中興す。當時源空・熊谷蓮生房此處に來りて重源と好誼を結べりと傳ふ。慶長十八年山日修理流入道重政、徳川家康の勅氣に觸れて制受し名を宗恩と改め此處に隱棲し大いに再興に努む。(櫻池院) 寶龜院の北隣にあ

り。古義眞言宗、金剛華寺支院にして準別格本山なり。覺法親王の開基に係り、もと養智院と號す。正高二年後醍醐上皇當寺に御幸ありて油時の櫻花を賞覽あらせられし由り改めて現寺號を稱すと。足利將軍家の宿坊として由緒深し。寺寶に絹本着色藥師十二神佛像一幅・同紅顏梨色阿彌陀像一幅あり、前者は藤原末期の傑作、後者は鎌倉期の作、何れも國寶。(奥の院) 一ノ橋より摩尼山に至る二軒餘の間を總稱して奥の院といひ、沿道には貴賤道俗の墓碑・供養塔、處狭きまで立並ぶ。中ノ橋までの間にある顯著なる墓碑を舉ぐれば、左側に、立花家墓・曾我兄弟墓・藤道念佛宗中祖法明上人墓・毛利家墓・有馬家墓・佐竹家墓・前田家墓・南部家墓・上杉家墓・同謙信廟・松浦家墓・浮田家墓・小早川隆登墓・井伊家墓・同勝部頭墓・柴田勝家墓・初代市川團十郎墓等あり。右側の橋際には弘法大師行狀圖繪あり、次で熊谷及び教盛墓・圓東大震災死者記念塔・大奉教流行人中興の模造碑・ゴルドン夫人墓あり。ゴルドン夫人は英國人にして、空海の密教と基督教とが一脈相通するものあるを信じ、大正七年この景教碑を建つ。次に觀覽上人墓・九條關白兼實(月輪圓證公)墓・大同越前守墓・多田滿仲墓(長徳三年建立の銘あり、山中最古といふ)、徳川組宣墓・武田信玄・同時頼石塔あり、信玄・時頼の塔は共に五輪塔にして、前者

は高さ約二米半、後者は高さ約二米、それぞれ天正癸酉四月十二日、天正十年三月十一日逝去の銘あり。次で徳川吉宗墓・酒井勝樂頭墓・伊達家墓・島津家墓(四番塔)、石田三成墓・明智光秀墓等あり。古宗墓に近く大師の遺ひといふ懸掛石あり、その奥に御の古木が蟠蛇の如き狀を呈する蛇樹あり、昔この邊は刑場なりしといふ。中ノ橋を渡れば左に棺懸橋あり、昔嵯峨天皇崩御ありし時御棺を嵯峨野の標に掛けられしに似る南方より五色の雲起りて八軒神現はれ、御棺を迎へて空中に去り、やがてその御棺の標に懸りしと傳ふ。次で汗かき地蔵・妻見井あり。井はまた藥井ともいひ、延喜中平推助登山してこの井水により惡瘡を治せしといひ、またこの井水に影を映して影の見えざる者は三年の内に生命危しと傳傳す。更に高麗陣敵味方死者追弔碑あり、高さ約三米半、慶長四年島津義弘の建立にして、側に英文解説碑並立つ。開院宮御寶塔所に次で文政十二年三月江戸大火に焼死せし四千餘人の靈を祀る江戸燒死者碑、山内第一の古塔(約八米、五輪堂)たる崇源院夫人(秀忠)後井氏墓、父母のしきりにこひし雄子の塚と稱りし芭蕉句碑等あり。句碑より約百本にして圓光大師墓(淨土宗開祖、源空)あり。次に佛殿板碑は高さ約一米半、康永三年(興國五年)阿波國府住人沙彌覺佛の建立にかかり、集古十種に載せ、關西に

於ける板碑として珍しきものにて、爲自身願天柱生並亡息追善也 奉 二親三十三廻 南無阿彌陀佛 恩徳阿州國 康永元年甲申暮春中旬沙彌覺傳敬白の 銘文を存す。約百米にして徳川秀康屋敷あり、慶長十二年の建立にて石造、入母屋造、内外の柱・扉等に彫刻及び銘文を有し、内部に寶篋印塔五基を安置し、中央を淨光院殿秀康の塔となす。傍の生母長壽院殿室屋と共に手法典雅、その技巧見るべきものあり。次に豊臣家墓・筒井順慶墓・道興大師墓あり。道興大師は空海の一の弟子實慧にして、東寺の長老となり、嵯峨上皇に灌頂を授け奉り、嵯峨・淳和二帝の宸信厚く、河内の觀心寺、横尾山の法華寺等を創め、空海の遺言に、吾が滅度の後は實慧を以て依師とすべしといひし高徳とす。遺を引返して中ノ橋より右側を探れば、やや高所に密嚴堂あり。また覺鑿堂といひ、新義眞言宗の派祖興教大師の修行せし堂なり。次で二香塔(高さ七米)淺野家墓・酒井家墓・黒田家墓・大津藩城戦死者追悼碑(高さ一米半、關ヶ原役)京極高次が戦死せし近区二十二人の追福のため建立せる剣先札形の石塔(前田利長墓(三香塔、高さ七米)、伏見宮家御寶塔あり。更に進めば淺野内匠頭供養塔あり、高さ約二米、位牌形にして、元祿十四年大石良雄が主君追福の爲に建て、傍に近年有志の建立にかゝる良雄及び四十七士追福の石塔あり。供養

塔の前に其角の碑あり、即塔の鳥居やげにも神無月 其角の二句を彫る。これにおくの院 永機の二句を彫る。これに隣りて興山上人廟あり、上人は即ち木食庵其上人にして、天正十三年豊臣秀吉の高野寺領を除かんとせし時、秀吉を説きてその事を止めしめ、却て秀吉をして高野山の大檀越たらしめ、金堂・大塔・奥院・御影堂、その他を再興し、興山・青巖二寺を建立したる外、京都其他に於て僧房を創建すること八十四字、廢したるを起すもの八十一字に及びしといひ、關ヶ原役には大阪側に宿禰して善恩を報せしが、戦後、近江街道等に退き七十二歳にて世を辭す。この廟にはその遺骨を納む。御供所に近く契沖阿彌陀佛あり、契沖承應より寛文に互り富山東宝院に居りて佛典及び梵書を研究し、元祿十四年正月六十二歳を以て大阪生玉園珠庵に寂す。なほ城内に有栖川宮御墓あり。(動物學) 寶篋館の西北にあり。建久年間源頼朝勸學の法會を施設したるに基き、弘安四年北條時宗の創立にかかり、のち後宇多法皇の御祈願所となる。勸學會、即ち衆徒が眞言の教義を研鑽論議する法式をここに修行す。院の西方に勸學門あり。昔は勸學山として勸學會を總稱せりといふ。院内の寶庫に古文書・什器を多く藏む。大日如來坐像は木造、高さ三尺、藤原時代末期の作にして國寶なり。(北室院) 寶篋門院の北にあり。古義眞言宗、

金剛峰寺支院にして準別格本山なり。弘仁二年中興の間に傳り、東海富山に造れる東西南北四室の一なりといふ。檢校良禪の中興にして、徳川氏治世には院領高三十石を配せられ、尙ほ大檀主仙臺太守伊達氏より永代三百石の寺産を附せらる。本尊紺本着色五大力菩薩像一幅は、國寶なり。高野山にては天長三年以來、東寺の例に倣ひて仁王會を修し、その際の本尊として、空海自ら描くところといふ。初め山下の慈尊院に於て行ひしが、寛治五年以來は山上の金堂にて修することとなせり。現在の書像は鎌倉時代の作にして、恐らく舊圖を模寫したるものなるべし。(眞言宗) 清淨心院の向側にあり。眞言宗高野派。一に開光大師堂といふ。持寶院と號す。高麗親王の御願により創建、開基は眞隆阿闍梨なり。壽永年中無谷次郎直實佛門に入り、登山して本寺に錫を留め、自己及び教感の石碑を建て。建仁元年鎌倉將軍家の發願にて源平西海の合戦に戦死したるもの十七回忌を富山に營む。時に開光・見眞の兩大師本寺に留錫して各石碑を建て木像を彫刻す。のち寶篋より現神像を賜ふ。その後三十五年の再建。什寶に無谷蓮生坊自作像及び遺物數點あり。(光臺院) 五之室谷、南院の東方にあり。古義眞言宗。金剛峰寺支院にして別格本山なり。大治二年自河上皇第四皇子覺法親王の御創建な

り。承久三年後鳥羽上皇第二皇子道助親王宮院に兵亂を避け給ひ、よりに光臺院しかば之を院の後丘に葬り奉る。古來皇族の參籠屢次にして、皇室より賜はりたる所領亦頗る多かりし。寺寶中木造阿彌陀如來兩脇侍像三軀・紺本着色毘沙門天像一幅は國寶なり。葛城に豊臣秀次・鐵田秀信(駿卓中納言)の墓及び足利將軍代々の墓あり。(高野派) 高野山に於て開版せられたる古板本の稱。鎌倉時代の始め南都に於て佛敎經典の開版せらるるや、之に刺戟せられ、高野山及びその門流の寺院に於ても鎌倉中期より密教及び悉曇に關する書籍相次いで版行せられ、之を高野版といひ、多くは鳥ノ子の如き厚紙の表裏に印刷す。而して此出版に當り最も力を致ししは快賢・實賢・賢定・興實・覺能・理俊・法華・惠深・眞辨・信壽・能海・慶賢等にして、これを授けしは秋田城介泰盛なりとす。現在のうち最古のもの建長六年正月快賢の開版せし三教指歸三卷・秘藏寶鑰三卷、同六月快賢出版の秘密曼荼羅十住心論十卷等なり。以上山上に於て開版せられし典籍は、室町より江戸時代まで莫大にして、從つて高野の講學頗る盛なるものありき。鎌倉以來室町までに成りし版本は、模範と稱する倉庫に夥しく藏せしが、永正十八年二月、西院より發せし火のためにも多塔塔舎と共に一切焼失せり。(高

野山院(別門院) 宿坊不動院の東隣にあり。鳥羽天皇皇后御子の御陵。陵形小圓墳狀。初め鳥羽天皇皇后の御爲に安樂寺院に多寶塔を營み山陵に擬し給ひしが、皇后はまた竊かに高野山に一堂を營み給ひ、永曆元年十一月二十二日崩御し給ふや遺命に従ひて高野山の御堂に藏め奉る。山陵は中世その所在を失ふに至りしが、明治八年八月現所に御治定、同二十七年七月御陵を定めて高野山陵と稱し奉る。因に陵域内に靈元天皇皇子第二十九世産主清深親王の御分骨塔あり。(御所) 御廟の前、玉簾の内を御所といふ。城内に堀河天皇御寶塔・後村上天皇御寶塔・護良親王御寶塔・十弟子塔・興山上人石塔・御饗曉天皇御寶塔・丹生・高野・兩明神社等あり。(五大院) 本院に隣りてあり。古義眞言宗。金剛峰寺支院にして準別格本山なり。中國の草創に係り、延久年間行秀中興す。木造藥師如來坐像一幅は國寶にして藤原初期の作なり。(御廟) 總進堂の背後一段高き所にあり。三間三廂寶形造、周圍に瑞垣あり。延長八十六間餘、弘法大師空海入定の所なり。承和二年三月二十一日中院に於て五十日を經て定身をこの地に安置し五輪寶塔を築き、上に廟宇を建立す。御廟の後に樹齡約八百年を閱する大杉あり。ありがたやたか野のおくの岩かげに大師はいまだおはしますなる 火窟正靈圖(五坊寂靜院) 高野山にあり。金剛峰寺

支院にして準別格本山なり。行書の開創に係り、院前に心字池ある故に、また一心院と稱す。二世貞徳は源頼朝の三男にして行勝に師事す。承久元年實朝被せらるるや二位尼政子、貞徳を還俗せしめ、將軍職を繼がしめんとせしが固辭して受けず、禪尼更に請ひしに、遂に一眼を決して復た用ふべからざるを示す。のち大いに富院の興隆に努む。後伏見天皇勅額を賜ふ。壽永格上通院高三十五石を配せらる。寺寶中木造阿彌陀佛如來及び兩脇侍像三軀・紺本着色不動明王二童子像一幅は共に國寶なり。(護摩堂(護摩所)) 御供所の南にあり。本尊不動明王坐像は木造にて、頼朝の三男貞徳法印が寛喜元年に造る所と傳へ、鎌倉末期の風を有し國寶たり。その左側に弘法大師四十二歳の折の自作と稱する危除大師像を安置す。堂の南に隣る鎮徳殿は參詣者の休息所なり。(金剛三昧院) 小田原谷にあり。古義眞言宗。金剛峰寺支院にして別格本山たり。建勝元年鎌倉二位禪尼政子頼朝遺福のため創建せし所に於て榮西を開山とす。禪尼命じて大いに講堂を營ましむ。爾來北條氏及び源氏有縁の武族より莊園を寄進し、其盛時には十萬石の多きに達し、學徒亦三千を數へしといふ。嘉元二年證道本寺に入るや其風歇一世に高く後二條・後花園・後醍醐各天皇御祈願所の輪旨を下し莊園を賜ふ。足利氏亦之に歸し善提所となす。徳川氏の治世、寺格上

通中の最たる古跡名室と定められ高野山朱印地より院領高三十五石を配せらる。寺地山内小田原谷に位す。講堂中、多寶塔及び經藏は國寶なり。多寶塔は貞應二年の建立にして石造の塔蓋と共に現存最古の多寶塔なり。寺寶中國寶に指定せられしもの、木造五智如來坐像五軀・同十一面千手觀音立像一幅・同不動明王立像一幅・銅鑪一口等をばじめ數點あり。(金剛峰寺) 古義眞言宗總本山。高野山略して野山、又其位置に因りて南山ともいふ。弘法大師空海初開の靈地、眞言宗の根本道場たり。弘仁七年空海、饗曉天皇に奏請してこの地を賜はるや草庵を結び、八年法成結果し伽藍の基礎を固め、これを金剛峰寺と稱す。同十年金堂を建立、更に鎮守明神を勧請し十二王子百二十社等を崇祀し、漸次大塔經營に努む。大師入寂するやこれを典院に葬りて廟塔を造る。以後弟子諸僧大いに講堂を造營す。寛平元年眞然の弟子壽長初めて勸宣ありて高野山座主第一世に補せらる。寛平六年無常律師代りて其職に就きし。東寺の觀賢と争ひ寺を去りてより一山寛廣せり。のち漸次復興し、白河・鳥羽兩上皇等の御崇敬を受け數度の御幸あり。爾來歷代上下の尊崇を受け寺運隆盛を極めし。安土桃山時代、一山の衆徒時、の武權に抗せしため信長、秀吉の激怒を買ひ、爲に一山の運命將に危殆に瀕せし

も、應其上人の力に依りて僅に難を免れたり。應其之を機に秀吉の歸依を得、爲に一山の宗勢大いに振ふ。江戸時代に入り寺領二萬一千石、其他各寺院の所領甚だ多かりき。明治維新に際し土地の事あり、加ふるに明治廿一年災禍に罹り昔日の觀を失ふ。金剛峰寺の名は初め一山の總稱なりしも、山内子院次第に其數を増せしに依り之等を分離し準大本山・別格本山等の寺格を與へて之に屬せしむ。往古は山内七千七百餘坊を數へしが、今尙百二十箇寺を擁し依然として世界密敎の最大道場たり。寺城海拔三千尺、東摩尼峰より西製炭坪に至り、南相の浦より北雪生の嶺に至る方約二里半の地にて、有田・野上・丹生の諸川の源流此處に發し、山中飛瀑あり、深泉あり、金山千古不滅の老樹鬱葱として比類稀なる聖淨の地たり。主なる堂塔は、本堂・大門・金堂・根本大塔・御影堂・不動堂・奥ノ院・藥師堂・位牌堂・大會堂等なり。主殿の大廣間には狩野探幽筆と傳ふる金地に群鶴を描ける襖繪あり、次の梅の間には狩野南筆と傳ふる襖繪あり、梅の間には豊臣秀次切腹の間と傳ふ。奥ノ院經藏・藥師堂・位牌堂・不動堂等は國寶建造物たり。其他寺寶中國寶に指定せられしもの紺本着色佛涅槃圖一幅・同善女龍玉像・木造孔雀明王像一幅・同大日如來坐像一幅等を始め數十の多數を算し、その殆ど總ては寶篋館に保管せらる。(金藏院)

小田原谷にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして、準別格本山たり。道興の開基にての、新親中興す。木造愛染明王坐像一軀は鎌倉時代の作にて國寶たり。

近年内部改修組を以て復興す。(山王院) 御社の拜殿にして、前面に建つ。神事・法事・祈禱等をこの殿内にて執行す。古來内亂外寇あるとき、南院の改切不動尊をここに迎へて祈禱を行ふを例とせり。

して、光背及び縁杖とも當初のものに屬す。(釋迦文院) 大聖院の下にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして準別格本山たり。新親の開基に係る。元治元年炎上し現堂宇は其後の再建に係る。寺寶中木造大日如來坐像一軀は藤原末期の好尚を表出せる一佳作にして、大日如來として最も優美なるものの一たり。現に國寶(常喜院) 金剛峯寺、六時鐘の前にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして空海の弟子道興の開創に係るといふ。中世衰頹せしか佛心佛心覺之を中興す。初め住持にありしが明治三年三轉して現地に移り、東山・三宮の兩院を併合す。

點は國寶たり。殊に不動明王像は當山明王院の赤不動と並稱せらるべき赤不動形像。(成福院) 持明院の上にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして準別格本山なり。大永三年炎上の際書記を失ひ草創沿革不詳。のち重源房亮榮之を中興す。徳川治世寺格と通に列し院領高三十五石を配せらる。寺寶中、相本若色阿彌陀如來像一軀は國寶。(成蓮院) 山内南谷にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院。草創年次並に沿革詳ならず。寺寶中木造地藏菩薩立像一軀は寺傳に小野基作といふ。(親王院) 總本山金剛峯寺の西にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして準別格本山たり。平城天皇三皇子高岳唐如法親王の開基に係る。親王、後に渡唐あり、更に渡天の遺蹟に覺し給ひしは周知の事實なり。永正十八年大層屋の火災に罹るを始めて、其の後數度の災厄に遇ふも再建せらる。寺寶中、傳智大師作木造不動明王坐像一軀・洞造阿彌陀如來立像一軀・木造兜跋毘沙門天立像一軀に、いづれも國寶。(西南院) 境場より大門に至る途中にあり。金剛峯寺支院にして準別格本山たり。空海の土足眞然の開基に係り、鳥羽天皇の御宇勅願所に列せらる。後鳥羽法皇中宮及び藤原兼實の菩提寺たり。寺寶中、相本若色大元帥明王像一軀・同五大虚空藏像一軀は國寶たり。(全光院) 古義眞言宗。金剛峯寺支院なり。圓通の開基に係り、もと正法院又は

佛昌院と號す。慶長年中焼失し、爾後そのまゝになりしが、寛永年間、周防宮國海主吉川廣家菩提のため、其眞正之を再建して現寺號に改む。寺寶中吉川廣正寄進の刺繍高麗國軍旗一旗は國寶たり。(善集院) 大門の東にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして準別格本山。草創沿革不詳。相本若色八宗論大日如來像一軀は國寶にして、空海、諸宗の體と宗論をなせし時現れし、大日の姿を掲げるものと傳へ藤原末期の遺品たり。院の後山に宥快法印の墓あり。宥快は無量壽院の長覺と共に應永の大學匠にして法性院に住し、高祖先徳の抄疏を抄寫して、高野山に於ける眞言密教の實義を集大成す。その著五百餘卷、山内有教の碩學として知られ四方の學徒風を望みて雲集すといふ。應永二十三年七月善集院に入寂す。(奉雲院) 古義眞言宗。金剛峯寺支院。延長年間延敷の開創と傳ふ。元仁元年頼賢之を中興す。鎌倉二位藤原、頼賢に深く歸依して七堂伽藍を建立し、寺領を附す。建久年間、佐々木高綱富院に寓し、楠正成も亦富院に歸依して武器等を寄附せしむ。天正・享保の二度の災上に什寶の大年を焼失せり。寺城は山内千手院谷にあり。寺寶の中、木造龍猛菩薩立像一軀は藤原初期の作にして現に國寶たり。

淨は俗稱を善壽時頼といひ、世に瀧日入遺として著明なり。もと一の橋の近くにありしと近時災厄に遭ひて現地に移る。(大會堂) 愛染堂に東隣す。方七間半。本尊阿彌陀如來、觀音・勢至の兩脇侍を有す。堂は永安・安元の交、五辻齋院領子内親王の御願によりて御父鳥羽法皇御遺願の爲建立し給ふところ。もと蓮華乘院といひ、東別所上乘院内にありしが、治承中ここに移して長日談の會場とせらる。天保罹災後、弘化四年の再興。安慶の大日如來及び兩脇侍の阿彌陀如來・釋迦如來の三軀の坐像は、もと谷上大日堂(美禰門院)建立の本尊にして、いづれも木造法華、木造天蓋を附屬し、三軀とも藤原時代末期の作にして現に國寶に指定せらる。別に國寶の木造阿彌陀如來坐像一軀あり、もと北谷院内堂の本尊なりしものにして、藤原時代末期の作たり。(高家院) 千手橋の東にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして準別格本山。左中將有房の子觀想房海の開基と傳へ、初め智恵門院と號す。天正十八年北條氏直没落し、當山に來りて普居す。後に豊臣秀吉より召還せられ河内に一萬石を領知せしが是より同宗との構契厚し。此地を小田原谷と稱するもこれに基因す。徳川氏の治世寺格と通に列し、院領高三十五石を配せらる。明治二十一年災上せしも再建せらる。寺寶中、木造愛染明王坐像一軀は藤原時代の佳作にして現に國寶たり。

(多聞院) 西室院の先にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして準別格本山。治承二年多聞房親覺の開基にして、初め谷上にあり、徳川氏治世には寺格と通にして院領高三十石を配せらる。寺城山内一心谷にあり、寺寶中木造毘沙門天立像一軀は藤原末期の作に係り現に國寶たり。(町石) 一にチヨトキといひ、或は町車都婆ともいふ。山下の九度山町車院より境場を経て山上の御廟所に至る道の傍に立ち、二百七十七あり。高さ約三米、上部は五輪形、下部は方柱をなし、梵字並に施主の氏名・年月日を彫刻す。弘法大師高野山開創の後、參詣登山者の爲、木製車都婆を造りて道筋に立てしを遺蹟とす。其後、遍照光院覺上人の發願にて東西に勧進し、上は後醍醐天皇を初め奉り、鎌倉北條家其他諸大名以下の寄進を得て十餘年を閱し、文永年間遂に功を竣へしが、この供養願文は弘安八年十月廿一日の奥書あり、國寶に指定せられたるものにして、金剛峯寺に所藏せらる。この町石はただに町敷を示しのみならず、施主名・法名の外に、尙ほ金剛界及び胎藏界の佛願子の梵字を刻せり。(天徳院) 南谷、高野山大學前にあり。眞言宗高野派。覺地檢校の開創たり。初め西光院と號せしが、元和八年加賀藤中・天徳院夫人の遺骸を納め、その法號に因みて天徳院と改む。境内に本堂・坊舎・庫裡等あり。寺寶、不動明王像(智證大師

作)・竹鶴圓(探雪像)等あり。(天徳院庭園) 指定名勝。江戸初期に築造せられたるものにて、小堀政一の作なりと傳へらる。池を設け鶴龜に鳥の中島を置き、石橋を架けて之を繋ぐ。庭園の後中は自然の傾斜地を利用して築山となし、山麓に立石を用ひて空濤を現はす。池汀に庭石を積み、庭樹としては馬酔木・石楠等多く、流石に風趣に富み、多少荒廢の跡を見るも猶能く築造當時の形態を存す。(波切不動堂) 南院の一堂。本尊、不動明王立像にして高さ二尺八寸、國寶に指定せらる。空海歸朝の際その師長安青龍寺僧慧果より鐵木を得て自ら刻するところ、歸航の途中風波起りし際波を切り禦めしとの傳説を有する靈像にして、首を傾げて劍を按じ磐座に立つ、毒座ともに一木造、刀法頗る強く面貌雄勁、空海自作とするに稍疑ふべきも藤原初期を下るまじく、本邦立像不動中最古の一例として美術史上に重要な地位を占む。初め神護寺にあり、後に醍醐寺・熱田神宮にあり、延久二年當山に移さる。古來秘佛なりしため破損無く完存し、後三條天皇の親旨によりて作られし右手の竹劍も當初のものも遺存す。蒙古襲來の際には南院の檢校賢隆この像を奉じて筑前鹿島に至り、大壇を嚴淨して祈願し、筑に元兵殲滅せりと云ふ。その他にもなほ鎮護國家の靈驗あらたかなるものありしといふ。(南院) 女人堂の東南約半軒にあり。古義

眞言宗。金剛峯寺支院にして別格本山たり。永觀年中東大寺南院眞興の開創に係り、第四世維純これを中興す。徳川の治世院領高三十五石を配せらる。南院後方の山は霞峯山にして、外八峰の一たり。〔南院〕高野山大學の上あり。もと雲山院と號す。眞言宗高野派にして本尊は不動明王なり。西行法師曾て此處に住して靜寂に浸り、住むことは所からそといひながらたか野はものあはれなるへき。ちる花の庵の上をふくならば風入るましくめててかこはんの遺詠あり。〔西院〕鎌倉三代葛。一心院谷、蓮華院院の下隣あり。眞言宗高野派。弘仁年中弘法大師當山開創の時、東西南北の四室を構ふ。當院は其一たり。因りて大師を開基とす。中興は善賢僧都なり。正暦五年大塔に落雷し壇場諸堂二十一字を燒盡す。因轉太守池田家・志摩島羽城主稻垣家・近江膳所城主本多家等の相掇厚し。徳川治世には院領高三十五石、高野朱印地より配知せらる。境内に本堂・位牌堂・護摩堂・坊舎・方丈等あり、寺内に行勝上人廟及び源頼朝・頼家・實朝の墓あり。行勝上人は波切不動尊前の五坊寂靜院を初め、壇場にある不動堂を造營し、その他、經藏・安樂園・護摩堂・阿彌陀堂・念佛院等を起し、なほ兩所明神に氣比・殿島二明神を勧請する等、一山の興隆に力む。また今日金剛峯寺に屬する東院一切經に上人が守覺親王の命を承

け、降雨を止めし法險によりて賜ふところと傳ふ。明神社傍の若宮は、上人示寂の建保五年、村民その靈を祀りたる宮とす。源頼朝以下の鎌倉三代葛は、もと實朝の臣葛山五郎景倫(後に顯性)の貞曉法印と共に建立せしところ。これより先、景倫、實朝の命によりて宋に渡るべく、所領紀伊山良庄に歸りてあり、側實朝鶴岡に於ける内變を聞き、高野に入りて剃髮す。時に承久元年。同時に實朝の遺骨を奉じて登山せる和泉入道隆司(覺蓮)共に實朝の菩提を弔ひ、後に二位顯尼これを開き、五郎入道顯性を山良地頭職に補し、且つ住山の資料たらしむ。因に顯尼、貞曉をして將軍職を繼かしめんとせしが、貞曉遂に之を容れず、一服を拂りてその決意を示せりといふ。(如意輪寺)高野山にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして別格本山たり。治承由緒詳かならず。寺城山内小田原谷にあり、本尊は木造如意輪觀世音坐像一軀は鎌倉初期の作にて而も作現に國寶たり。(女人堂)古來高野山に絶對女人禁制の場所にて、女子は女人堂より高野を遊拜して歸るを當とし、明治五年三月、この禁を解くもと各登山口に女人堂あり、今この一のみ残る。此處より内を謂はゆる金剛峯寺境内となす。堂内に標高二千八百三十三尺の標を立て。堂内に大日如來を安んじ、堂前に地藏尊あり。この地藏尊は、延享年間江戸の横山某女、兩親の菩提を祈ら

んがために他家に下婢となりて建つるところといふ。女人堂より坂を下ること僅にして左側に等身大の觀音像あり、嘉永七年松前藩士齋藤氏の建立にかかるとも。更に下ること二百米にして所縁坊案内所に至る。(美福門院)高野山院。古義眞言宗。金剛峯寺支院なり。力乘の開基に係り、行藏房良通の中興に係る。大治年間御室登法親王御登山、普賢像を御寄附安置せられしにより現寺號を稱す。天正年中山中鹿之助當院に潜居して堂宇を修せりと元祿・明治の兩度火災に罹りしも、明治二十五年再建せる。その寺城は山内千手院谷にあり。寺寶中木造毘沙門天立像一軀は藤原時代の作に現に國寶たり。(不動院)北院院の上あり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして別格本山たり。延喜七年高野高野の開基に係る。高野より先西谷に十二箇院を創立し總じて菩提心院と號す。本院は其一にして、今日悉く當院に合併せり。因りに高野高野郡勸修寺の出て、爾後勸修寺第八世兼實・第九世成實等之中興し、第二十九世二品清深法親王亦當院に住せし等勸修寺との由緒淺からざるを知るべし。近くは山階宮亮親王(もと勸修寺三十六世)再度の御成ありて山階別院の稱を賜り、現に同家高野山御菩提所たり。寺寶中湖邊阿彌陀如來及び兩脇侍立像三軀に國寶たり。(不動堂)御影堂より東行せる一段低き

處にあり、もと一心谷にありたり、八修女院の御願、建久九年行勝の開創に係り、古建築悉く亡びたる當山にありては、最古の遺構にして、明治四十一年今の地に移して大修理を加ふ。國寶建造物たり。五間四面、單層にして屋根入母屋造、檜皮葺、斗拱三斗、木割細く、形態優雅、内部は内外陣に分れ、その外観、隨所に精細なものを造り、間取・外観ともに自由暢達な趣あり。本尊不動明王一軀は國寶たり、八大童子像八軀と共に運慶作と傳へられ、鎌倉時代の傑作なりとす。(善門院)千手橋の北にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして別格本山たり。兜海草庵を結びて修行せし所に善門院の名を附せしに始る。明治廿年災厄に遭ひしも現堂宇の再建を見る。庭園に小堀遠州の築く所なりと云ひ、寺寶中、木造釋迦如來及び諸尊像一基、勸修僧都像一軀は國寶なり。(善門院庭園)指定名勝。江戸中期の作なりと云ふ。山腹に設けられ前中に池と中島とを置き、後半に傾斜面を利用せる築山あり。園路は中島を經て對岸に渡り、山上の亭及び經堂に達す。築山の中部に空濤を作り、砂利敷の溪流は池に注ぐの趣を成す。處々に線形・雪見形等の石燈籠と石造多寶塔とを配し、又多數の対馬物あり。すべて互りに意匠を凝らせし。江戸時代に於ける寺院の書院庭園として観るべきものとす。(照光院)郵局前を東進して左側にあ

り。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして別格本山たり。兜海入定後、その高足眞濟ここに止住し、のち寛意その舊庵を中興す。所藏の書畫多きうち、大雅堂筆畫畫及び直庵筆六曲屏風はともに名高く、國寶に指定せられ、舊盛岡藩主南部氏、寺地を寄せてその菩提所となす。木造多聞天・持國天立像二軀もまた國寶に列す。(顯明院)熊谷寺の東にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして、別格本山たり。眞如法親王の開創に係り、親王の別號顯明をとりて院號とす。徳川氏の治世寺格上通に列し、院領高三十石を配せらる。元治元年災上せしも慶應元年に現堂宇の再建せる。寺寶多く、うち厨子入文殊菩薩及び持者像一基は共に國寶たり。(寶藏院)壇場伽藍の南にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして別格本山たり。延喜二十一年弘法大師説法宣下の砌、觀賢勸賜の御衣を奉じて登山し大師の定身に之を加へ、而して當院を建立す。爾來大師の御衣を製して毎年典の院に調進するの故を以て御衣寺ともいふ。舊寺格上通、院領高三十五石を配せられ、且つ御衣塔八十石を有したり。近時、新西國三十三所第六番札所となる。寺城、山内西院谷にあり。寺寶中、木造十一面觀音立像一軀・曾我直庵筆紙本着色鷗園六曲屏風一雙は何れも國寶に指定せらる。(寶藏院)正智院の西にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして準大本山たり。大正

二年、もとの無量壽院と寶性院を合併して改稱せし宿坊にして、代々門主寺たり。禪林寺深覺の開創に係る。應永年間智本房長覺之中興す。往時一山の棟梁として山上の政務をもとより、一宗の現非裁定をなし、江戸參勤の如きも十萬石の大名格たりといふ。天保十年災上翌年、現堂宇の再建せる。寺寶中、絹本着色傳海筆海雲文殊菩薩像一軀・同七智文殊像一軀・同結願地蔵菩薩像一軀・傳覺親所持金剛三結作一箇・黃紙墨書文會詞林一卷は、いとも何れも國寶に指定せらる。(伽藍)伽藍の南を過ぎ道の左方、稍離れ、玉川の流れの彼方にあり。靈元・中御門・櫻町・純國・御櫻町・後純國・光格・仁孝・孝明の九天皇御寶塔あり、これを御寶瓜塔と稱し奉る。伽藍と相對して道の右側には明治三十九年、九條道孝の奉建にかゝる英照皇太后御寶塔あり。(明王院)壇場伽藍の北方、親王院の西北隣にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして別格本山たり。弘仁七年兜海當山創建に際し、其鬼門鎮護の爲め五大明王の像を刻みて此地に安置せしに始る。舊寺格は當山二十箇院の隨一たる古跡名室と定められ、上通にして院領高三十五石を配せらる。寺寶中、木像天弓愛染明王坐像一軀・板彫兩界曼荼羅二面・絹本着色不動明王像一軀は共に國寶たり。殊に不動明王像は一に赤不動とも稱せられ、青蓮院の青不動、三井寺の黄不動とともに

不動の三結として傳傳せらる。(明惠上人墓)宿坊案内所の後山にあり。上人は貞觀法印(祖廟の三男)の指きによりて安貞二年夏登山し、阿字觀を修す。紀伊有田郡の人にして、當時、京都郊外の母尾にありて、その徳一世に高かりき。(藥師堂・位牌堂)南院の後方、霞峯山にあり。いづれも國寶建造物たり。金剛峯寺に屬するも、東照權現の名を以て呼ばれ、もと此處にありし東照宮の附屬建物なり。向つて右は藥師堂、左は位牌堂にして、前者はもと徳川家康の靈廟にして、家康の念持佛堂如來を安んじ、後者は秀忠の靈廟にしてその位牌を安置す。ともに方三間、單層、屋根寶形造、棟脊に於て、いづれも寛永二十年徳川家光の建立にかかり、規模小なれど、構造裝飾は精美整麗にして、工巧の精華を盡せり。(里石)町石と同形にして三十六町毎に總數五基あり。一里石は百四十四町石の側、二里石は百八町石の側、三里石は七十二町石の側、四里石は三十六町石の側に建ち、三十六町を一里とする里制既に當時行はれしことを物語る好資料なり。(龍光院(中院御坊))親王院の西隣にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして別格本山たり。兜海の開創に係り、もと中院又は北の僧坊と稱すといふ。代々高徳爰に住し、のち明算之中興し中院號の一派を樹立す。徳川氏治世寺格上通の最

たる古跡名室と定められ院領高四十石を配せらる。寺地は山内の中院谷にあり。寺寶中、木造屏風本尊六面・同興成毘沙門天像一軀・厨子入俱利伽藍龍圖一日等を始め、その他十一點の國寶を所藏す。(蓮花院)千手橋の西にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして、別格本山たり。弘仁八年、兜海の開創にかかるといふ。第十八世快仙の時、源義經これに歸依して師檀の契盟をなす。降りて徳川家康の歸依厚く、坊舎を修營し、姓の一字に加ふるに、大師の大字を取りて大徳院と改稱せしむ。のち現寺號に改む。現寺城は山内小田原谷にあり。寺寶中、湖邊の誓一面は國寶なり。(蓮華三昧院)高野山にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして別格本山たり。佐々木高綱の創建に係るといふ。寺城は山内の蓮華谷にあり。寺寶多く、そのうち絹本着色阿彌陀三尊像一軀は國寶に指定せられ、一に信好成實彌陀と稱す。(蓮華定院)宿坊案内所を出でて左側にあり。古義眞言宗。金剛峯寺支院にして別格本山たり。建久年間行勝之を創建し念佛院と號す。眞田家の香華所として佛供料百石を

附せらる。舊寺格上通にして院高三十石を配せらる。寺寶中、興山上人寄進にかか

【高野山電氣鐵道】和歌山縣下の南海鐵道高野線の高野下驛より高野山までの地方鐵道。延長一・一〇一。省線とは高野山下—橋本間一〇・三軒が旅客・手荷物・小荷物に限り運送運轉を取扱ふ。なほ橋本橋より高野山まで〇・八軒はケーブルカーとなり、最早徒歩登山の必要なきに至れり。この鐵道は電氣運轉にして、軌間一・〇六七米。本社は大阪府南區藤原町一丁目、出張所を和歌山縣伊都郡九度山町に置く。

【高野山電氣鐵道】和歌山縣下の南海鐵道高野線の高野下驛より高野山までの地方鐵道。延長一・一〇一。省線とは高野山下—橋本間一〇・三軒が旅客・手荷物・小荷物に限り運送運轉を取扱ふ。なほ橋本橋より高野山まで〇・八軒はケーブルカーとなり、最早徒歩登山の必要なきに至れり。この鐵道は電氣運轉にして、軌間一・〇六七米。本社は大阪府南區藤原町一丁目、出張所を和歌山縣伊都郡九度山町に置く。

て東北方に延び、東南方に傾斜し山地多し。東南部の小沢流の谷に小低地ありて僅に耕地拓く。阿武隈川の河床に宇大窪の邊にて急傾斜をなし水勢急落し、諸谷の邊に急傾斜をなし舟行の難所たり。諸谷の邊に急傾斜をなし舟行の難所たり。諸谷の邊に急傾斜をなし舟行の難所たり。諸谷の邊に急傾斜をなし舟行の難所たり。

【香焼村】長崎縣佐賀郡西彼杵郡に属する村。長崎港口外に分布する諸島中の最大島、香焼島を主要部とし、東北方に近き諸島、南方の岩礁島等を含む。東は香焼瀬戸を隔てて深堀村に對し、西は大中瀬戸を隔てて伊王島村をなす。中之島・伊王島に向ひ、南西方には高島を望む。山地多く海岸は小出入に富み、それらの間隙に部落發達す。漁業行はれまた香焼炭坑ありて石炭を産す。諸ノ尾島の北角に燈臺(明暗紅光、明三秒、暗二秒)のアルケレン五燈臺、光達距離一四二の設けあり。此地古く深淵太郎左衛門の設けあり。此地古く深淵太郎左衛門の設けあり。

【光陽郡】朝鮮全羅南道の東端。道管内二十一部の一。西北に求禮、西に順天の各部に、東は津津江を隔てて慶尚南道河東郡に、南は海を隔てて麗水半島に相對す。地勢は小白山脈の東端をうけて、郡の北部には白雲山(二一八八)聳え、漸次南方に低下し、海岸に近く四百餘町歩の耕地あり、城内を南北に流るる鏡津江及び北川・南川により潤澤に灌溉せらる。産物は米・麥・棉花等の農産及び海苔・牡蠣・食鹽等の水産を主要なるものとし、また蠶繭等を産す。交通は西方順天より東方河東を経て晉州に通ずる二等道路、郡の南部を東西に貫通し、この路線と、これより分岐して南部海岸の船所里・下浦に至る道路に夫々パスを通じ、北部を除くはほぼ交通便なり。また下浦は本部唯一の沿岸航路寄港地たり。行政上、光陽・竹若・津月・玉谷・津上・玉龍・鳳岡・多鴨の八面に分ち、郡廳を光陽面に置く。玉龍面雲坪里の中興山城に三層石塔あり、指定寶物とせられ世に著る。本部の創建は遠く百濟の朝に出で、當時馬老羅と稱し、新羅時代曠陽縣と改稱し、高麗朝に至り更に光陽縣と改め、開國五〇四年縣を廢して光陽郡となし、現今に至る。

【光陽郡】朝鮮全羅南道の東端。道管内二十一部の一。西北に求禮、西に順天の各部に、東は津津江を隔てて慶尚南道河東郡に、南は海を隔てて麗水半島に相對す。地勢は小白山脈の東端をうけて、郡の北部には白雲山(二一八八)聳え、漸次南方に低下し、海岸に近く四百餘町歩の耕地あり、城内を南北に流るる鏡津江及び北川・南川により潤澤に灌溉せらる。産物は米・麥・棉花等の農産及び海苔・牡蠣・食鹽等の水産を主要なるものとし、また蠶繭等を産す。交通は西方順天より東方河東を経て晉州に通ずる二等道路、郡の南部を東西に貫通し、この路線と、これより分岐して南部海岸の船所里・下浦に至る道路に夫々パスを通じ、北部を除くはほぼ交通便なり。また下浦は本部唯一の沿岸航路寄港地たり。行政上、光陽・竹若・津月・玉谷・津上・玉龍・鳳岡・多鴨の八面に分ち、郡廳を光陽面に置く。玉龍面雲坪里の中興山城に三層石塔あり、指定寶物とせられ世に著る。本部の創建は遠く百濟の朝に出で、當時馬老羅と稱し、新羅時代曠陽縣と改稱し、高麗朝に至り更に光陽縣と改め、開國五〇四年縣を廢して光陽郡となし、現今に至る。

【光陽郡】朝鮮全羅南道の東端。道管内二十一部の一。西北に求禮、西に順天の各部に、東は津津江を隔てて慶尚南道河東郡に、南は海を隔てて麗水半島に相對す。地勢は小白山脈の東端をうけて、郡の北部には白雲山(二一八八)聳え、漸次南方に低下し、海岸に近く四百餘町歩の耕地あり、城内を南北に流るる鏡津江及び北川・南川により潤澤に灌溉せらる。産物は米・麥・棉花等の農産及び海苔・牡蠣・食鹽等の水産を主要なるものとし、また蠶繭等を産す。交通は西方順天より東方河東を経て晉州に通ずる二等道路、郡の南部を東西に貫通し、この路線と、これより分岐して南部海岸の船所里・下浦に至る道路に夫々パスを通じ、北部を除くはほぼ交通便なり。また下浦は本部唯一の沿岸航路寄港地たり。行政上、光陽・竹若・津月・玉谷・津上・玉龍・鳳岡・多鴨の八面に分ち、郡廳を光陽面に置く。玉龍面雲坪里の中興山城に三層石塔あり、指定寶物とせられ世に著る。本部の創建は遠く百濟の朝に出で、當時馬老羅と稱し、新羅時代曠陽縣と改稱し、高麗朝に至り更に光陽縣と改め、開國五〇四年縣を廢して光陽郡となし、現今に至る。

【高野町】鹿兒島縣大隅郡肝屬郡の東部。大隅半島南部の東河有明湖に臨み肝屬川の右岸。西北は鹿原町に接し北に串良町・東串良町あり、西に始良村に隣り南は肝屬山脈により内之浦町に界す。南境を限る肝屬山脈は、西浦より東に延びて市與志嶺(九六八米)・南見山(八八七米)を起し北に西に傾斜し、西境の南中には西南兩山より北方に肝屬山脈の支脈延びて主脈との間に福合谷をなし西南山地より源流する肝屬川支流北流す、東北部の有明湖岸は肝屬川流域末直に海に迫りて懸崖をなす、西北部は火山灰より成る廣く低平なる肝屬平野を占め肝屬川北境を東流し、東北隅懸崖の下を有明湖に注ぐ。西北隅は笠野原の南部に當る。ここは氣候溫暖の爲、蘇鐵・龍眼・荔枝・ゴム・樟等の熱帯植物景觀をなし實に九州の南米ともいふべき所、また肝屬平野は多種の農業營まれ、大隅

【高野町】鹿兒島縣大隅郡肝屬郡の東部。大隅半島南部の東河有明湖に臨み肝屬川の右岸。西北は鹿原町に接し北に串良町・東串良町あり、西に始良村に隣り南は肝屬山脈により内之浦町に界す。南境を限る肝屬山脈は、西浦より東に延びて市與志嶺(九六八米)・南見山(八八七米)を起し北に西に傾斜し、西境の南中には西南兩山より北方に肝屬山脈の支脈延びて主脈との間に福合谷をなし西南山地より源流する肝屬川支流北流す、東北部の有明湖岸は肝屬川流域末直に海に迫りて懸崖をなす、西北部は火山灰より成る廣く低平なる肝屬平野を占め肝屬川北境を東流し、東北隅懸崖の下を有明湖に注ぐ。西北隅は笠野原の南部に當る。ここは氣候溫暖の爲、蘇鐵・龍眼・荔枝・ゴム・樟等の熱帯植物景觀をなし實に九州の南米ともいふべき所、また肝屬平野は多種の農業營まれ、大隅

【高野町】鹿兒島縣大隅郡肝屬郡の東部。大隅半島南部の東河有明湖に臨み肝屬川の右岸。西北は鹿原町に接し北に串良町・東串良町あり、西に始良村に隣り南は肝屬山脈により内之浦町に界す。南境を限る肝屬山脈は、西浦より東に延びて市與志嶺(九六八米)・南見山(八八七米)を起し北に西に傾斜し、西境の南中には西南兩山より北方に肝屬山脈の支脈延びて主脈との間に福合谷をなし西南山地より源流する肝屬川支流北流す、東北部の有明湖岸は肝屬川流域末直に海に迫りて懸崖をなす、西北部は火山灰より成る廣く低平なる肝屬平野を占め肝屬川北境を東流し、東北隅懸崖の下を有明湖に注ぐ。西北隅は笠野原の南部に當る。ここは氣候溫暖の爲、蘇鐵・龍眼・荔枝・ゴム・樟等の熱帯植物景觀をなし實に九州の南米ともいふべき所、また肝屬平野は多種の農業營まれ、大隅

【高野町】鹿兒島縣大隅郡肝屬郡の東部。大隅半島南部の東河有明湖に臨み肝屬川の右岸。西北は鹿原町に接し北に串良町・東串良町あり、西に始良村に隣り南は肝屬山脈により内之浦町に界す。南境を限る肝屬山脈は、西浦より東に延びて市與志嶺(九六八米)・南見山(八八七米)を起し北に西に傾斜し、西境の南中には西南兩山より北方に肝屬山脈の支脈延びて主脈との間に福合谷をなし西南山地より源流する肝屬川支流北流す、東北部の有明湖岸は肝屬川流域末直に海に迫りて懸崖をなす、西北部は火山灰より成る廣く低平なる肝屬平野を占め肝屬川北境を東流し、東北隅懸崖の下を有明湖に注ぐ。西北隅は笠野原の南部に當る。ここは氣候溫暖の爲、蘇鐵・龍眼・荔枝・ゴム・樟等の熱帯植物景觀をなし實に九州の南米ともいふべき所、また肝屬平野は多種の農業營まれ、大隅

【高野町】鹿兒島縣大隅郡肝屬郡の東部。大隅半島南部の東河有明湖に臨み肝屬川の右岸。西北は鹿原町に接し北に串良町・東串良町あり、西に始良村に隣り南は肝屬山脈により内之浦町に界す。南境を限る肝屬山脈は、西浦より東に延びて市與志嶺(九六八米)・南見山(八八七米)を起し北に西に傾斜し、西境の南中には西南兩山より北方に肝屬山脈の支脈延びて主脈との間に福合谷をなし西南山地より源流する肝屬川支流北流す、東北部の有明湖岸は肝屬川流域末直に海に迫りて懸崖をなす、西北部は火山灰より成る廣く低平なる肝屬平野を占め肝屬川北境を東流し、東北隅懸崖の下を有明湖に注ぐ。西北隅は笠野原の南部に當る。ここは氣候溫暖の爲、蘇鐵・龍眼・荔枝・ゴム・樟等の熱帯植物景觀をなし實に九州の南米ともいふべき所、また肝屬平野は多種の農業營まれ、大隅

【高野町】鹿兒島縣大隅郡肝屬郡の東部。大隅半島南部の東河有明湖に臨み肝屬川の右岸。西北は鹿原町に接し北に串良町・東串良町あり、西に始良村に隣り南は肝屬山脈により内之浦町に界す。南境を限る肝屬山脈は、西浦より東に延びて市與志嶺(九六八米)・南見山(八八七米)を起し北に西に傾斜し、西境の南中には西南兩山より北方に肝屬山脈の支脈延びて主脈との間に福合谷をなし西南山地より源流する肝屬川支流北流す、東北部の有明湖岸は肝屬川流域末直に海に迫りて懸崖をなす、西北部は火山灰より成る廣く低平なる肝屬平野を占め肝屬川北境を東流し、東北隅懸崖の下を有明湖に注ぐ。西北隅は笠野原の南部に當る。ここは氣候溫暖の爲、蘇鐵・龍眼・荔枝・ゴム・樟等の熱帯植物景觀をなし實に九州の南米ともいふべき所、また肝屬平野は多種の農業營まれ、大隅

【江陽郡】同門縣の一縣(昭和八年設置)。朝鮮咸鏡北道穩城郡柔浦面にあり。

【高陽郡】越後山脈守門火山群に属する一郡。若松市の西方約三〇軒に當り、東斜面は福島縣河沼郡下谷村・野澤町と大沼郡沼澤村に、西斜面は新潟縣東部原郡東川村との三郡境界に属す。標高九〇四米。山體第三紀層より成り、雄嶺繁茂す。

【高陽郡】越後山脈守門火山群に属する一郡。若松市の西方約三〇軒に當り、東斜面は福島縣河沼郡下谷村・野澤町と大沼郡沼澤村に、西斜面は新潟縣東部原郡東川村との三郡境界に属す。標高九〇四米。山體第三紀層より成り、雄嶺繁茂す。

日露戦争前には人口一萬二千にも足らず、白河町は勿論須賀川町にさへ及ばざりしが、大正に承り桑野村を併せて區域を増加し、福島・若松を凌ぎて縣下第一に位し、その産業的都市として發展の急激なること他府地方にその比を見ず。金融の中心また福島を去りて郡山に移らんとし、地方専賣局・鐵道工場等政府の事業もまた福島を置いて此處に置かる。市内の繁華區は柳川にて、大町通は商業の中心をなし、西南部の高臺、開成山・桃見臺等は住宅區となる。官公廳には市役所、地方専賣局・稅務署・區裁判所・農事試験場・警務署等あり、商工會議所・郡山商業銀行・安田銀行支店・秋田銀行支店・郡山合同銀行等設けらる。學校には縣立安積中學校・縣立安積高等女學校・市立郡山商業學校・市立郡山淑徳女學校・市立郡山調音學校等あり。

昭和九年 生産額	
農産	四六六、三四八圓
工業	一六、三一六、二七七圓
水産	四四、八九八圓
林産	九、七五〇圓
合計	一七、〇四二、〇二三圓

この地方古くは陸奥國と稱し古くは之を

に及び、期年ならずして往時の大規模は化して二百餘町歩の沃土となり、植うるに桑を以てし、名を桑名村と改む。蓋し蠶業を興さしめんとてなり。これより先、典事申候氏は拓殖の業に努むると共に専ら民のその大本を忘れんことを慮れ、祠官安藤氏と謀り祠を山上に設けて天祖を祭り、配するに神武天皇を以てせりと云ふ、これ當社建設の起源なり。明治九年十一月縣社に列す。境内一萬九千九百七十坪。例祭、十月十七日。(阿部河原神社 葦原塔婆) 郡山縣の北一・三軒、市内大重町にあり。種子・曼荼羅を刻せしものにて、拜殿の後方にあり。高さ約三米、幅約二米の瓦碑にして碑面の損傷甚だしきも、塔婆の形式及び書體等により、ほぼ鎌倉初期のものと考察せらる。碑の傍に俗に一町佛といふ石塔婆あり、阿彌陀三尊佛を牛内彫となす。神社は平忠道を祀り當地の總産土神として崇めらる。忠道は良文の嫡男にして、寛治二年清原武衡征討の折、副將として此地に來り、翌年歿すといふ。

蝦夷と稱せり。十三代成務天皇の朝、蝦夷地不定のために新たに國造を置かるるに及び、今の磐城近傍を九ヶ國に分ち阿尺・思・桑羽・浮田・伊久・信夫・白河・石背・石城となし、各國造を任ぜらる。阿尺國は乃ちこの地方にして、天湯津彦命十世孫比止國造をその國造とし給ふ。これこの地に官守を置かれたるの始めとす。聖武天皇の神龜元年陸奥國を置く。安積郡即ちその一部にして入野・佐戸・芳賀・小野・丸子・小川・葦原・安積の八郷とす。郷は聖武天皇の神龜元年に里と改められたるもの。後冷泉天皇の朝、源光前九年の役に從ひて功あり、仙道七郷を賜ひ、石川郡石川に居り。安積郡またその所領たり。文治五年八月源賴朝、藤原泰衡を征してその勳功ありし將士を奥州に分封し、安積藤九郎盛長に安積郡を賜ひて二本松城に居らしめ、伊東隆摩守前長には安積郡の一部を賜ひて片平に居らしむ。これ安積伊東の遠祖なりと云ふ。按ずるにこの地方は文治年間より伊東氏の所領にして、伊東氏は天正十三年伊達政宗に仕へたり。同十八年政宗領土を秀吉に致すに及び、伊東氏亦從つて仙臺に移り、次いで蒲生氏の領する所となる。寛永二十年加藤式部少輔明成その領地四十萬石を沒收せられ、同年七月丹羽左京大夫光重白河より移封せられ、二本松十萬石を賜はる。丹羽氏入國以來安積三萬石郡山組と大槻組・片平組と共に代

官所を郡山に置きたり。而して郡山を上町・下町に分ちて各々名主を置き、上町は貞享元年、今泉半之丞以後九代世襲、明治五年に至るまで勤務し、下町は元禄年間より天保三年に至るまで小針長大夫七代世襲し、以後上町の名主併せて勤務す。小原田村は之を上下に分ちて名主を置き、上名主は佐藤文平、下名主は佐藤長藏累代之を勤務し、横原村は郡山村名主今泉半之丞の分家今泉佐左衛門累世之を勤務す。古への芳賀郷にての郡山村といひ、文政七年町名に改め、天保三年郡山町と改め、明治二十二年町制實施と共に郡山町と改め、大正十三年九月郡山町・小原田村を合併して郡山市となし、翌年六月桑野村を編入し、今日に至る。

電にも使用せられ、山湯即ち取入口より熱海温泉の對岸までの間に、三箇所發電所設けられ、その電力は合計八六〇〇キロワットに近し。また第五分水は郡山市上水道に導き、飲料水に供せらる。安積疏水の事業は猪苗代湖の湧水を決壑疏導して安積郡の大部及び岩瀬郡の一部に灌溉して専ら殖産の振興を奨め、並に土族投資の方法として開墾移住の便に供し、兼て古田の旱害を除き遠いて地方の開拓を圖るの廟略に出て、専ら内務卿大久保利通侯の獻策に依り、時の勲業局長松方正義侯の轉旋によりて成る。内務卿は曩に聖旨を奉致し、廟略に基き、明治九年十二月尾南一郎平及高島千秋をして陸奥地方の諸原野を巡視せしむ。兩屬北は青森三本木より、南は野州郡須野原に至るまで、所在荒蕪たる荒野を調査し、安積郡野原以下下の諸原野は地味最も肥沃にして、且つ國道及阿武隈の大河に接し、其の西北には大瀧猪苗代湖あるを以て、水路を開墾し、灌溉の利便を供するを得べく、尙ほ西北方は僅か山脈を隔てて若松を經、新潟に通じ、北は米津を經て秋田に達すべく、其の拓殖地として至適なる旨を復命す。政府依て之を採用し、同十年再び南郷をして疏水工事の難易を視察せしめ、越えて十一年三月奈良原繁を之が總管に任じ、和蘭工師ドローンをして其の測量を了せしむ。偶々同年五月、大久保卿の難に遭うて薨去せらるる

或は社稷を奉祀する靈時を擇び、爰に阿岐の中に一字を挿入して阿賀岐山と名づけらる。即ち和久産巢日神・天湯津彦命を鎮祭し、以て民の嚮ふ所を知らしめ、山川に臨みて國界を劃し、榊蕪を拓きて耕耘を教へ接撫をならざる所なかりき。之によりて國造の子孫永く祭政を掌りて此地に鎮食す。國人その徳を稱し、天湯津彦命十世の孫比止國造と稱して仁惠を垂れ給ひしを以て、合祀して國造社と稱せりと云ふ。明治九年十一月郡社に列し同三十三年縣社に昇格す。境内社に伊勢大神宮・青麻・諏訪・菅原・阿賀岐その他十二神社あり。例祭、九月二十八日。祠前に鎮座安積長壽延生の神及び長壽徳文の八幡社あり。具書は二本松藩の儒官にして晩年昌平學教授となり、萬延元年七十一歳にて歿す。なほ境内に嘉元三年の落ある阿彌陀三尊の石塔婆あり。また明治十四年十月明治天皇東北御巡幸の際御泊ありし宗形彌兵衛宅の一字移建せらる。(開成山大神宮) 開成山に鎮座。縣社。祭神、天照大神・豐受大神・神靈伊波禮皇古命。明治九年九月十七日の創建。社地は丘陵上に位置し周圍は開成公園なり。明治六年安場保和氏の福島縣令となるや、古來この地の荒蕪なるを拓きて民力を活發するを旨とし、諭すに濟世利民を以てす。爰に里長阿部茂兵衛氏あり、富むれども奢らず、即ち二十五人の同志と組織し五萬圓を繰出して開墾の事

や、參議伊藤博文内務卿を以て其の電請を繼續し、上奏御裁可を得し同十二年十月松方前局長と共に實地を臨檢し、同月二十七日開成山大神宮前に於て起業式を舉行せらる。次で同十三年二月、松方伯内務卿に任ぜられ其の事業を管掌し、翌十四年農商務省の設置せらるるに及び之れが所轄となり、同年工事略に成る。是歲風駕東巡幸に際し、十月十四日左大臣織仁親王、御代理として現場を臨檢せらる。同十五年十月一日右大臣岩倉具親卿、勅を奉じて通水式を舉行せらる。同十六年六月豫定の分水工事を竣へ茲に事業の完成を告ぐ。工成るや同十七年内務省土木局の所管となり、之を福島縣に引繼がれ、同二十一年更に事業業務の全部を安積・岩瀬の兩郡に移さる。是より先同十八年、疏水關係町村に於て水利土功會を起し維持の方法を圖り、同二十四年法令の發布に従ひ、水利組合會を組織し、其の一切を經營す。前の安積郡郡山市外十五箇村岩瀬郡仁井田村普通水利組合會、今の安積疏水普通水利組合即ち是なり。疏水の泉口はこれを湖東山湯に發し、川路を開きて田子沼を渡り、沼上嶺を貫きて大瀧を懸け、水勢奔りて五百川に入り、茲に溝治を分派し、流れて安積及岩瀬郡仁井田村に注ぎ、流末豊田村牛庭原に至て止む。幹線實に十有五里、支線三十里に亘る。費を要する事まさに金四十有餘萬圓にして、後年郡の所屬に歸

するや、明治二十年改修費として内務及農商務の兩者より金三萬圓の補助を請け、同二十八年疏水充實の目的を以て堂尻及び賣の草なる二湖池を營築し、更に、宮内省より金三萬圓を拜託し、更に疏水未達の維持費充實の爲め、縣下那摩郡外三ヶ所に於て官有山林五百四十町歩の持下を得たり。疏水路は昭和五年度に於て一部改修を行ひたるが、昭和七年には非常時疫救事業として直營農業水利事業を企劃し、經費十六萬圓三ヶ年繼續事業を以て疏水の幹線改修工事を行ふ。尙組合は獨自の立場に於て組合費十八萬圓を以て分水路改修を二ヶ年繼續事業となし、其の完成を見、尙益々改修、擴張を加へつあり。(開成館) 明治六年開拓社事務所を建てしを遺館とし、同七年開成社及び郡内有志の寄附により木造洋風造り地坪百五十坪三層、今の建物を建て、もと區會所にて、次で縣開拓課を置き、のち郡役所廳舎となり、明治十五年その郡山町に移轉後には縣立農學校々舎とし、廢校後同二十七年來之を村役場に充つ。明治九年六月十五日明治天皇東北御巡幸の際本館を行在所に充てられ、駐蹕二日、のち同十四年十月五日東駕北巡の際、再び本館に御休憩あらせられ、久留米開墾地たる大瀧原に臨御あらせ給ふ。御座所の間は三階樓上、今なほ舊態の儘保存せられ史蹟に指定せられ、正しくは明治天皇桑野行在所と呼ぶ。(開成山公園及

が競馬場。櫻花と競馬を以て名あり、開成山大神宮境内一圓の地の地標。樹木鬱蒼として大神宮の後を蔽ひ、前面に大池あり五十餘畝と云ふ。此池は開成當初の貯水池なり。本縣産馬組合聯合會にて内産馬奨励のため、明治三十七年一月この地を下し池縁に競馬場を設け、春秋二回競馬會を催す。昭和元年十二月競馬場が郡山市に移管せらるるや、市は五萬餘圓を投じ競馬場改築に着手、今や東北有数の競馬場と稱せられ、開成毎に觀衆數萬に達し盛況なり。(開成山の櫻)指定名勝。天然記念物。郡山驛の西約三軒、市内桑野町、開成山公園内にあり。明治六年開成社がこの地一帯の開墾をなすに當り、開成沼・五十餘畝を新墾して灌漑用水に宛て、その池邊に櫻樹數千株を移植せしが始めにして、桑井吉野の最もよく成育せし花の名所として著名なり。櫻は開成沼北岸には彼岸櫻・白山櫻多し、五十餘畝の北岸には桑井吉野の並木あり。生育旺盛、地上・一米の幹圍二・七五米、枝張二〇米四方に及ぶものあり。四月二十日前後に花の盛りなるを見る。(開成山公園)郡山驛の西約一軒、市公會堂に接し、地標約三五アール。一に共榮園と云ふ。この地俗に辨天とよび、二本松藩主の遊覽地なりき。心字形の池あり、その中島に辨天を祀る。辨天池の稱之より起る。丘上に龍山神社を奉祀す。老松壽若として西側を繞り清泉松園風の間に懸る。明治

治三年六月下流水路を隔てて運動場を設く。もと二本松藩主の馬場跡にて、文政八年起工し翌九年竣工せりと。當時の普請金四百四十五兩餘にて町の有志に成る。尙藩侯の休憩所として茶亭一棟あり。(如實寺)堂前にあり。新義眞言宗。沿革詳かならず。本堂及び觀音堂は明治年間再建なり。寺域開成山に至る縣道に面し丘陵上にあり、眺望よし。境内に多くの古碑保存せらる。石造塔婆一基(國寶)は塔身に阿彌陀坐像を浮彫し、承元二年八月十一日の銘あり。奥羽地方には稀有なる遺例なり。板石塔婆一基(國寶)は阿彌陀種子曼荼羅を彫り、建治二年丙子三月六日の年紀あり、奥羽地方現存板石塔婆中最も完備せるものなり。その他、御堂堂の碑・耶穌教徒の墓碑あり。(圓壽寺の供養碑)市内小原町にあり、一町佛とも云ふ。上部は缺失し、殘存部も礎に二斷せらる。阿彌陀三尊佛の來迎圖と人家とを牛内彫にて現はせり。平安時代に流行せし來迎佛の様式を傳ふるも、恐らくは鎌倉時代のものならん。(阿部茂兵衛)岩代安積郡二本松藩領、本市の人。名に貞行、初め茂吉と稱す。祖先田村郡小野新町より出で商を營み小野屋と稱す。六世貞貞の三男なり。人と爲り才智略あり能く大義を辨す。維新の初め、仙臺藩兵郡山に玉師を拒ぐの時、藩命町民に下りて之を援けしむるも貞行首せず、既にして兵火に罹る。御堂堂跡

を海外に輸出して互利を得、商業を回復し藩主に金品を獻じ町民のために盡す所あり。明治六年同志二十五人と謀り開成社を起し、幾多の困難に打ち勝ち郡内不毛の荒地を開墾し桑野村の一部落を成せり。次で宿前代湖疏水工事を授けて功勞あり。平素公共心篤く教育運轉百般に盡せしこと頗る多し。明治十八年六月二十三日五十九にして病歿。大正十三年二月從五位を贈らる。(伊藤重信墓)郡山驛の北約中軒、省縣東北本線・勢越西線分岐處瀨川の南岸、老松の下に建つ。俗に仙臺佛と呼び高さ二米、幅約一米の碑にして、碑面に伊藤重信前傳贊碑と題し、碑首に仙臺藩主伊藤綱村の文を刻す。元祿五年の建立に係り、書は支那僧高泉の筆。伊藤重信は伊藤政宗の臣にして、天正十六年伊藤氏と佐竹氏との夜討川の戦ひに、奮闘力戦して政宗を救ひ、遂に討死す。往時仙臺侯の江戸参親の往復に必ず香華を供養せしにより仙臺佛と稱せらる。(鈴木信教墓)宇堂前、如實寺境内。墓は如實寺本堂東側の墓地にあり、凝灰岩を以て作れる五輪塔にして高さ約十尺一寸あり、傍に明治二十八年八月同千切撰文の碑あり。鈴木信教は東奥の一寒村に生れ僧侶たり。文久二年縣下東福寺住持時代より地方多年の喧嘩の弊風を矯正するの目的を以て貧兒養育事業に心を注ぎしが、維新後如實寺住職となるに及び、殊に貧兒の將來を顧慮して或は養子養女

として入籍せしめ、その生家に養育料を與へて之を哺育せしめ、或は單に哺乳の費を給して養育せしむ。かかる事業は明治二十五年、彼の嚆矢するまで繼續せらる。育兒の數實に二百餘名に及ぶ。此種社會事業の起て世に行はれざる時に率先この事に従ひたること賞すべし。(虎丸長者墓)神龜元年大和國宇多郡虎丸なるもの、備守府將軍兼按察使大野郡東人に從ひ當地に來たり、西の高嶽に居を構ひ。その子孫を虎丸長者といふ。鐘撞堂を設け、鐘を撞きて時を農民に報す。いま祖沼といふ溜池あり。これ長者が日常の食器を洗はせし所と傳ふ。時々布目瓦の破片を掘り出すことあり。又如實寺境内にある觀世音菩薩は長者の創建に係るものといふ。(郡山)攝津國の古驛名。西國街道の大驛たり。續日本紀に和銅四年、遷都平城、始設驛亭、攝津國鳥下郡麻村に設くとあり、後には宿久にして、その驛址は鳥下郡宿久郷の地たる今の三島郡春日村大字郡山に當るか。郡山は蓋し古へ鳥下郡家ありし處にして、驛傳のことを兼掌せしもの如し。江戸時代の郡山宿はその中心少しく離れ、いまの豊川村大字道祖本となり、ここに舊幕大小名が參預交代に際し指定旅館とせる謂ゆる椿の御本陣あり。今なほ完全に舊規を保つ。椿の御本陣と呼はるる所以は、表御門の内側に古い大なる一本の椿あり五色に咲き分けるき

上の條りに見事たるまに「郡山驛」とも「宿ヶ原」ともいふ本名を用ひずしていつしか、かく呼びなせるものなりと。この御本陣は街道に沿うて西側に在り、その南端に表門あり、邊子のある表通り部屋の北に通用門、勝手口あり、總建坪二百七十餘坪。舊幕時代には街道の向ひ側に馬つなぎ場あり、その左右に大小旅宿ありて十分以下ここに泊りしもの、また早業脚に應ずる人夫、馬匹の設備もありしが、今その影失せて普通の民家と化す。椿の本陣を南の表門を直直ぐに西に突當る表支圖の間に一段高く奥行のある三間の大床がしつらへてあり、大名は駕籠の儘こゝまで乗付けしもの。之より徒歩にて精の間を通り御家老御用人控への間、御繼の間の奥に設けられたる一段高き御殿の間に入る、これ八疊の間に二間の大床あり、徳川三百年間、上り下りの幾多の大小名が一夜の宿と定めしところ、また長くも明治大帝未だ東宮に在らず慶應元年七月十五日、西國お下りの御微行の途次、ここに御駐蹕遊ばさる。瀧つて文久三年八月廿五日には長州に落ちたまひし七朝が中食を召されてをり、また元祿十四年赤穂義舉を中心に宿帳(御大名様御泊帳)を繕くに淺野内匠頭が江戸詣となりて上り行く最後の道中として元祿十三年辰五月十六日、ここに宿泊せる等往時の資料頗る多し。

【郡山町】奈良縣大和國生駒郡の中部。治三年六月下流水路を隔てて運動場を設く。もと二本松藩主の馬場跡にて、文政八年起工し翌九年竣工せりと。當時の普請金四百四十五兩餘にて町の有志に成る。尙藩侯の休憩所として茶亭一棟あり。(如實寺)堂前にあり。新義眞言宗。沿革詳かならず。本堂及び觀音堂は明治年間再建なり。寺域開成山に至る縣道に面し丘陵上にあり、眺望よし。境内に多くの古碑保存せらる。石造塔婆一基(國寶)は塔身に阿彌陀坐像を浮彫し、承元二年八月十一日の銘あり。奥羽地方には稀有なる遺例なり。板石塔婆一基(國寶)は阿彌陀種子曼荼羅を彫り、建治二年丙子三月六日の年紀あり、奥羽地方現存板石塔婆中最も完備せるものなり。その他、御堂堂の碑・耶穌教徒の墓碑あり。(圓壽寺の供養碑)市内小原町にあり、一町佛とも云ふ。上部は缺失し、殘存部も礎に二斷せらる。阿彌陀三尊佛の來迎圖と人家とを牛内彫にて現はせり。平安時代に流行せし來迎佛の様式を傳ふるも、恐らくは鎌倉時代のものならん。(阿部茂兵衛)岩代安積郡二本松藩領、本市の人。名に貞行、初め茂吉と稱す。祖先田村郡小野新町より出で商を營み小野屋と稱す。六世貞貞の三男なり。人と爲り才智略あり能く大義を辨す。維新の初め、仙臺藩兵郡山に玉師を拒ぐの時、藩命町民に下りて之を援けしむるも貞行首せず、既にして兵火に罹る。御堂堂跡

あり、又續紀に「元仁天皇寶龜五年、行幸新羅宮」と見ゆ。又材木町には藥園八幡宮あり、これ即ち藥園宮址にして、續紀には「孝謙天皇、天平勝寶元年十一月、大嘗於南園新宮」と見え、又東大寺要錄にも「長徳四年注文、定諸莊田、藥園宮内田地十三町四段、在大和國添下郡」とあり。尙ほ續紀に天平二十一年孝謙天皇は河内國智識寺に行幸せられ大郡宮に還幸せらるると、天平勝寶二年には大郡宮に賜宴せられ、また藥園宮にて給饗せられ、二月天皇は大郡宮より御藥師寺宮に移られしと見ゆれば位置的關係より見て藥園宮と相接近せしものと思はる。郡山は柳澤氏十五萬石の舊城下町にして城は西ノ京丘陵の南端にあり。これは永祿年間、小田切春次の築きし所にして、天正八年織田信長は大和國の諸城をつぶし郡山城のみ残せり。次いで筒井順慶大和國の領主となり、豊臣秀吉は順慶の子定次を伊賀の上野に移し、弟大納言秀長と居らしむ。秀長は紀・泉・和三國の太守にして百餘萬石を領し郡山全盛時代たり。子秀俊が繼ぎ文祿四年にはお家隆絶となり、智田長盛入りて二十萬石を食む。大坂の役後は水野勝成入り、次いで松平清國之に代り、寛永十六年本多政勝來り子政長に傳へ、更に延寶七年本多忠泰之に代れり。享保九年には甲州より柳澤吉里轉封せられ明治維新に至る。今石壁と外濠を有し柳澤神社あり。秀長は櫻を多武

崎より移植し大和の櫻の名所となせり。人口一萬七千を數へ縣下第二の都邑にして、元生駒郡の郡衙のありし所、今警察署・中學校・女學校・國藝學校等あり。男色大藏・二・春も時雨あきたる雲の、生駒葛城に立重なり、今にも袖やゆれんと、郡山に道いそぎしに、里の木橋あやうき渡りて、萩の燒原に去年の蒔蕪、足をちぢめ行に、角落してきやうとき鹿の通ひ路、火ともし狐狼の風所、是にはおぢす、妹背山婦女庭訓・二・亭主は如才内政の、鹿をくろめて入る所へ、腰に帳面ぶらぶら爰に、郡山の鴉末屋、伊賀越道中雙六、四、國の初めのその昔、誰が名付けて郡山、御城下の見付筋、武家町人の別ちなく、引きも、さらわらわ八幡(郡山城)郡山驛の西一軒、市街の西にあり、犬伏城と呼び、天守閣その他の石壁及び深池も存す。始め小田切春次の築城にて天正十三年豊臣秀吉の弟大納言秀長修築せしが、その後江戸時代に五里水野、橋本、本多諸氏を経て、享保九年柳澤吉里入國以來、子孫世襲し維新に至り、明治初年に城毀たる。本丸址に柳澤吉保を祀る柳澤神社あり、その南の二の丸址は城の主要部にいま郡山中學校あり、その東南は三の丸址なり。城邊の石村には古寺址の礎石が多く利用さる。今城内には櫻樹多く花時は見事なり。城北、真山には豊臣秀長墓あり。(郡山藩)元和元年水野勝成此地に封ぜられ、同五年松平清國、寛

水十六年本多政勝、延寶七年松平信之を経て享保九年柳澤吉里これを領し、十五萬千餘石を食みて子孫相承け明治維新に至る。明治四年郡山縣となりしが久しからずしてこれを廢し奈良縣に入る。(洞泉寺)淨土宗。霞山と號し天正十三年郡山城主豊臣秀長の開創に係り寶譽を以て開山とす。本尊阿彌陀三尊は安阿彌快慶の作と云ひ鎌倉期傑作にして現に國寶たり。境内別室に光明皇后御願地蔵尊及び堀堀揚尊を安置す。(雲幻寺)茶町にあり。臨濟宗妙心寺派。本尊結華釋迦佛、脇土迦葉・阿難二尊。藩主本多下野守の創建、開山は大城和尚たり。初め天和元年下野守郡宮城に一字を創し、舊封奥州白川城主たりし時より歸依せる白川泉徳寺の大城和尚を請じて開山とす。下野守の師を法雲院、妹を幻心院と號す。二人の菩提のため雲幻の二字を採りて寺號とす。貞享二年宮城に轉封せらるるや大城和尚も共に移り當寺を建立し、本尊・位牌等皆これに移安し、寺領十五石を附せらる。元禄八年本多家隆經し、當寺亦無縁となりて衰微せり。境内に時雨塚あり、芭蕉の句を鎮す。(水慶寺)黄栗宗。龍華山と號す。寛永七年の創建、開基は甲斐國主柳澤吉保、開山は悅峰道章和尚たり。初め甲州山梨郡岩窪村に創建せしが、享保九年柳澤家郡山へ國替の際共に移る。(淨慶寺)洞泉寺にあり。眞宗本願寺派。本尊阿彌陀如来坐像一軀(水慶)は

ふ。後龍庄役場は後龍に在り。(後龍御合符所)後龍庄後龍傳世の宅は、明治二十八年八月十三日竹南庄中港を御進發苗栗方面賊徒討滅に向はせられし北白川宮能久親王殿下が廿一日までの八日間を御滞在あらせられし御遺蹟地にして、現に正廳及び家具を保存し、昭和十年十二月五日史蹟に指定せらる。(後龍庄遺跡具化石層)白沙屯驛と公司寮開闢の鐵貫鐵道海岸線に沿ひたる陸道の西側急斜面に貝塚あり、昭和十年十二月五日天然記念物に指定さる。(後龍港)新竹州竹南郡後龍庄後龍溪の河口たる公司寮の海岸に碇泊地を有する特別輸出入港にして、その開基は清康熙末期に閩人多く後龍地方を開拓し、現在の後龍庄發達の端緒を開き、當時支那大船を自由に後龍の街まで湖航せしめし後龍溪は船にして島内貿易の良港とせられ、雍正九年よりその業を開くに至れり。同治の初年まで八百石の支那船を收容し得たるを以て後龍街の名は乾隆二十九年編纂の續修臺灣府志に見え大に賑盛を極めたるが如し。然るに後龍溪は雨水甚しければ砂礫の流出激しく爲に河底漸く淺く、加之公司寮對岸の水尾子方面の海岸砂丘地に繁茂せる樹木が居民の耕地として濫伐せらるるに及んで飛砂の害甚しく遂に後龍港の繁盛は僅に河口の公司寮海岸に於て行はるるに至り、後龍街は船運商貨の集散地たる位置を喪失するに至れり。我國領臺後の明治

コリー

鎌倉初期の作に係り國寶たり。

【郡山村】鹿兒島縣薩摩國日置郡の東北隅、金峰山脈の西斜面に位し鹿兒島市より西北約一三軒にあり。西は下伊集院村に南は上伊集院村に接し東南及東は鹿兒島郡伊敷村・吉田村に界し北は始良郡蒲生町及薩摩郡入來村に隣る。金峰山脈の一峰花尾山(五四〇米)三重嶽(四八七米)等の連嶺連りて西に傾斜し甲突川の谷をなし、西北境に八重山(六七七米)蟠居して東南方に緩斜し甲突川支流ここに源流して東南に流れ東南隣伊敷村にて本流に合し鹿兒島市より鹿兒島灣に入る。西境の南部を流るる神元川西南流して中伊集院村・下伊集院村を過ぎて東支那海に注ぐ。全村山地の起伏多けれど川の谷には耕地折付樟・栗・松・茶等作られ百合根も産し甘藷と栗とは歴例的なり。又養蠶も行はる。鹿兒島街道南隣村を東西に通り鹿兒島に至る。途中より縣道北に駛れ中央を北に貫通して北塩土瀬戸峠の入口を過ぎて宮城町方面に至る。此地古くは滿家院と稱す。建久八年薩摩國同田坂に滿宮院百三十町地頭右衛門長衛尉と見ゆ。一に村名より郡家の所在地ならんといふも果して如何にや。戦國の際までは比志島城主比志島氏の支配下に屬せしが、のち島津義弘統一してその直轄領となる。明治二十二年村制施行の際郡山外五ヶ村を合して本村を建つ。いま郡山・西供・油頭木・東供・川田・厚地の六大字よりなり郡山に役場を設く。大字川田に川田城址あり。一に馬越城ともいふ。往古右衛門盛佐この地を領して川田氏と稱し、爾來世々ここに居城せり。

三十一年一月後龍を支那船に限り特別輸出入港に指定し現在に至る。
【後龍溪】臺灣新竹州大湖郡界の二本松附近鹿尾山に於て大安溪の上流と接しつつ、社寮角溪・汶水溪を合して西北に流れ、大湖郡を過ぎ苗栗郡公館庄の石圍塘附近において北流し二分され、苗栗街に入り再び合流して頭屋庄より後龍庄に向けて西流し後龍庄公司寮より海に注ぐ。謂はゆる後龍溪の名は二張犁附近より後龍庄の管内に入るを以てその名を生ぜるものにして、後龍附近に於ける川幅は三・六米、平時は流水極めて僅少なると、降雨と共に上流の社寮角溪その他の支流を合して水害甚しく、明治四十二年以來數次の治水工事を以て災害防止を講ず。後龍港の勢振はざるも亦此に原因を有し、砂礫を埋積して船舶の進出碇泊に便ならざるに因る。

コリー

【後龍庄】臺灣新竹州竹南郡後龍庄後龍溪の河口たる公司寮の海岸に碇泊地を有する特別輸出入港にして、その開基は清康熙末期に閩人多く後龍地方を開拓し、現在の後龍庄發達の端緒を開き、當時支那大船を自由に後龍の街まで湖航せしめし後龍溪は船にして島内貿易の良港とせられ、雍正九年よりその業を開くに至れり。同治の初年まで八百石の支那船を收容し得たるを以て後龍街の名は乾隆二十九年編纂の續修臺灣府志に見え大に賑盛を極めたるが如し。然るに後龍溪は雨水甚しければ砂礫の流出激しく爲に河底漸く淺く、加之公司寮對岸の水尾子方面の海岸砂丘地に繁茂せる樹木が居民の耕地として濫伐せらるるに及んで飛砂の害甚しく遂に後龍港の繁盛は僅に河口の公司寮海岸に於て行はるるに至り、後龍街は船運商貨の集散地たる位置を喪失するに至れり。我國領臺後の明治

字よりなり郡山に役場を設く。大字川田に川田城址あり。一に馬越城ともいふ。往古右衛門盛佐この地を領して川田氏と稱し、爾來世々ここに居城せり。
【コリー】交流島 關東州西北部の島。普蘭店民政支署管下の風鳴島會の一屬島。主島風鳴島の東北にあり、東は滿洲國奉天省復縣の西南岸に近く、東南に平島、西に鴨籠島あり。東西約四軒南北約三軒、中部東西に高さ三〇米臺の丘陵あるもその他は平地をなす。殊に北半は低平にして、一帯に鹽田開け、天日製鹽行はる。島の東南部なる東交流島屯に普蘭店警察支署、交流島警察官吏派出所あり。

あり、書院は始め宣祖大王己丑の年峻山里に建立せられしも丁曾の亂に灰燼に歸したるを以てのちに更に峻山の後方に當る龍峰の麓、即ち今の地に移築す。然るに時の顯宗大王より筆蹟書院と稱せざる御筆の扁額を賜はり且つ朝廷使を遣はし厚く祭典を行はしめたる後、正朝宣皇帝國祭を以て文集版を敬藏閣に藏せしめられたり。其後、年々ともに漸く院舎の頹廢せんとするに當り丁亥の年明治二十四年子孫及び儒生等の醜金を以てこれが修理をなせり。
【興隆】興隆 臺灣新竹州竹南郡(興隆里)臺灣高雄州岡山郡の舊里名。今の左營庄の大部分を占むる地にして、清領の當初興隆莊と稱せしを道光年間此を興隆里に改め、光緒十四年更に内外二里に分つ。内里は現在の桃子園・前峯尾・覆鼎金の三字、外里は架公・左營・蔴寮・竹子園・埤子頭の五字の地を含む。明末鄭氏時代より開け、左營はその鎮營の置かれし處にして、清領の後には於ても臺南以南の地即ち南路に於ける水陸兩路の要衝に位置するを以て鳳山縣城は此地に設けられ、左營庄及び高雄市の境界點たる埤子頭内の舊城はその縣治の置かれし地たるに因みし地名とす。大正九年を以て廢さる。
【コリー】口寮 臺灣新竹州北門郡

コリー

【興隆】興隆 臺灣新竹州竹南郡(興隆里)臺灣高雄州岡山郡の舊里名。今の左營庄の大部分を占むる地にして、清領の當初興隆莊と稱せしを道光年間此を興隆里に改め、光緒十四年更に内外二里に分つ。内里は現在の桃子園・前峯尾・覆鼎金の三字、外里は架公・左營・蔴寮・竹子園・埤子頭の五字の地を含む。明末鄭氏時代より開け、左營はその鎮營の置かれし處にして、清領の後には於ても臺南以南の地即ち南路に於ける水陸兩路の要衝に位置するを以て鳳山縣城は此地に設けられ、左營庄及び高雄市の境界點たる埤子頭内の舊城はその縣治の置かれし地たるに因みし地名とす。大正九年を以て廢さる。
【コリー】口寮 臺灣新竹州北門郡

千八百圓、落花生・西瓜の各五萬圓を合して百八萬七百二十四圓に達す。林産は蕎麥・竹材等にて九千八百四十九圓の少額にして、畜産は黄牛・水牛・豚・鶏等にて二十八萬九千三百十圓にして更に水産は鱈・鱈・鱈等にて二萬圓とす。鐵貫鐵道海岸線は竹南驛より後龍を経て臺中州大甲郡に至り、別に竹南驛より苗栗を経て臺中に至る山線は本庄の北勢驛に於て連絡するを得。その他本島鐵貫道路の海岸線鐵道に併行する他に後龍溪口の公司寮を始め苗栗・竹南・北勢に通ずる自動車道路、四十軒に及ぶ。庄内産業道路等ありて産業交通上の要衝をなし其位置は漸次向上しつつあり。公學校三、本島人子弟の就學せざる者に對しては國語講習所あり其數六、公民講習所三、青年團四を以て一般本島人の教化に資す。本庄は大正九年地方制度改正に至るまで苗栗一堡の地に屬し此地に占居せる平地蕃アワン社の名に因み後龍の名を宛てしが後に地を龍に改めたり。此地を最初に開拓せるは福建省泉州の杜姓の者にして清康熙の末年新竹郡舊港庄方面より移住せるものと云はる。雍正の初年には後龍港を擁して一街市を成し、本庄の郷祖廟は乾隆三十三年林進興の寄進せるものと云へばその盛事を偲ぶに足る。海岸地帯は昔樹木繁茂して飛砂の害甚かりしが、耕地の開拓と共に濫伐せられその害に耐へずして多く後龍溪南岸の地に移れりと云

【江陵郡】朝鮮江原道の東南部。道管内二十一部の一。東は日本海に面し、北は襄陽、西は平昌、南は旌善・三陟の各部にそれぞれ隣接す。地勢西境は大白山脈縱走して頭老峰(二四二二米)・東臺山(一四三四米)・仙子嶺(一四二二米)・東臺山(一四三四米)・仙子嶺(一四二二米)等々の峻嶺を連ね、東方に急斜して海に瀕するを以て、低地少なく、河川は悉く西境山地に發源し直下海に注ぎ河身短く、灌溉の便少なく、ただ南大川の中流以下に比較的廣大にして地味肥沃なる平野を拓くのみ。海岸線は凡そ六〇軒に達し、多くは斷崖をなし、侵入に乏しく、僅かに注文津・見召津・墨湖の三泊あるのみ。農産は米・大豆・麻等を主とし、その他藥草・蜂蜜・生牛等あり。海産物は鱈・鱈を主なるものとし、鐵産には金・鐵・亞鉛等あり。道路は江陵邑を中心として二等道路東岸の諸邑を連ねて縱走し、また西境大關嶺(八六五米)を超え平昌・原州方面に通じ、更に三等道路邱山より南方に走り、何れも定期乘合自動車の便あり、概して便ならず。注文津よりは釜山へ二三〇哩、元山へ一一九哩にして、朝鮮船會社の定期船寄港す。行政上、江陵邑及び新里・達谷・沙川・丁洞・城山・城徳・江東・邱井・旺山・玉溪・望祥の十一面に分つ。江陵邑は嶺東第一の繁華の地にして、郡廳置かる。邑の東に鏡浦臺・海雲亭等の勝景あり。本郡の地は往

コリー

【江陵郡】朝鮮江原道の東南部。道管内二十一部の一。東は日本海に面し、北は襄陽、西は平昌、南は旌善・三陟の各部にそれぞれ隣接す。地勢西境は大白山脈縱走して頭老峰(二四二二米)・東臺山(一四三四米)・仙子嶺(一四二二米)・東臺山(一四三四米)・仙子嶺(一四二二米)等々の峻嶺を連ね、東方に急斜して海に瀕するを以て、低地少なく、河川は悉く西境山地に發源し直下海に注ぎ河身短く、灌溉の便少なく、ただ南大川の中流以下に比較的廣大にして地味肥沃なる平野を拓くのみ。海岸線は凡そ六〇軒に達し、多くは斷崖をなし、侵入に乏しく、僅かに注文津・見召津・墨湖の三泊あるのみ。農産は米・大豆・麻等を主とし、その他藥草・蜂蜜・生牛等あり。海産物は鱈・鱈を主なるものとし、鐵産には金・鐵・亞鉛等あり。道路は江陵邑を中心として二等道路東岸の諸邑を連ねて縱走し、また西境大關嶺(八六五米)を超え平昌・原州方面に通じ、更に三等道路邱山より南方に走り、何れも定期乘合自動車の便あり、概して便ならず。注文津よりは釜山へ二三〇哩、元山へ一一九哩にして、朝鮮船會社の定期船寄港す。行政上、江陵邑及び新里・達谷・沙川・丁洞・城山・城徳・江東・邱井・旺山・玉溪・望祥の十一面に分つ。江陵邑は嶺東第一の繁華の地にして、郡廳置かる。邑の東に鏡浦臺・海雲亭等の勝景あり。本郡の地は往

古渡の據りし地にして、漢武帝の時...

【江陵邑】朝鮮江原道江陵郡の中郡...

年高麗忠宣王朝、按廉使朴淑始めて...

【江陵邑】朝鮮江原道江陵郡の中郡...

類約三萬圓にして、山地よりは茶の産...

宜蘭郡頭開庄に入る。その間隣道多く...

もと漢底區に屬したるを以て、漢底の海...

【江陵邑】朝鮮江原道江陵郡の中郡...

べきせられ、聖廟御遺蹟、頂雙溪に向...

【江陵邑】朝鮮江原道江陵郡の中郡...

嶺頂即ち金字碑より十二三町上方の地點...

【江陵邑】朝鮮江原道江陵郡の中郡...

地に近く、一面渺々たる白砂の海濱にし...

【江陵邑】朝鮮江原道江陵郡の中郡...

コリーヨ

コアイーコイ

陸軍は栗田白道堂六代の後裔少納言安隆の三男にして、法然上人の法弟となり、のち長樂寺流なる一派を樹立す。安貞年間隆興奥州に配流せられし時、當地領主毛利季光入道西阿これに歸し、本寺を開創す。のち徳川家光寺領十九石餘の朱印を寄す。〔弘徳寺〕大字飯山にあり。眞宗本願寺派。親縁山心光院と號し二十四聖の第五新提信樂の遺跡なり。親縁東國巡攝の碑、之に歸せし信樂房に本寺を創建して附す。中興岡山を愛西といふ。寺領二十九石を有す。〔長谷寺〕大字飯山にあり。古義眞言宗。飯上山如意輪院と號す。建久年間源頼朝の開創に係る。俗に飯山觀音堂と稱し坂東三十三所第六番札所にて現に高野山金剛峰寺本たり。御鉢歌、飯山寺たち初めしよりつきせぬば入相繼ぐ松風の音。

コアイヌ 小愛奴 大豊線の二驛(昭和九年設置)。樺太留多加留多加町にあり。

コアシロ 小網代灣 神奈川縣三浦郡にある灣。三浦半島西南部のリアス式海岸にも著しく灣入を示せるもの、三崎町大字小網代にあり。北角の丸山崎、南角の網代岬に據せられて東に灣入し、灣口約〇・五軒。網代岬の南に東京帝大の臨海實驗所にて知られし油壺灣あり。港口南岸は深く、中央には平低なる岩石斗出し水底に隠伏するを以て灣の北端に立橋ありて通船を便す。西風の外は船難

の好泊港となり漁船船集す。灣頭に小網代の聚落あり。

コアニ 小阿仁 秋田縣北秋田郡の小阿仁川の山谷を總稱し、大阿仁に對する名稱。いま落合村・下小阿仁村・上小阿仁村の三村に分つ。南北約五〇軒、東西約八軒の縱谷を占め木村の産多きを以て名あり。この地に杉田城(小阿仁城)あり、加成藩藩守・岡右兵衛尉等居りしといふ。應永五年の頃、攝津播磨守某の居りしといふもその所在詳かならず。

コアミ 小阿彌 青森縣陸奥國北津輕郡の南部。五所川原町の南方約八軒、弘前市の北方約一五軒、東は沿川村、西は六郷村・板柳町に隣り、南は津輕郡畑岡村に界す。津輕平野の中央部に位置し土地概ね平坦、洪積層より成る一部の丘陵地の外は悉く沖積層の平地にて、當村の開拓者佐藤小阿彌が淺瀬石川を導きし疏水(小阿彌堀)これを濬ぎ、農業盛にして米・林檎の産を主とし、美濃・美珠・美峰等行ける。藩政時代、佐藤小阿彌によつて開墾されしものなり。柏木組に屬せしが、明治二十二年町村制施行と共に柏木組・赤田組中の一部を合して村制の布かれしものなり。

コアマチチヨ 小網町 ちやま 東京市日本橋區にある町名。江戸時代天保年間開墾、この邊の川岸に引張りと稱する下

三七五

等なる狐掘出沒せり。その二丁目北横町を、俗に貝杓子店と稱へ、貝杓子問屋あり、また三丁目には著名の支店ありき。萬句合・天明五年「小網町數萬の蝸鳴いて居る」芝居では貝の背を併合せて、蝸の擬音とする故いふ)日本永代蔵・「其人の住所は武蔵江戸にして小網町のすみ、浦人の着し舟問屋して次第に家業へしをよろこびて」

コアラマ 小荒間 小泉村(山梨縣)

コアレ 小荒 筑前國(福岡縣)の古地名。和名抄、宗像郡に小荒郷あり、その地今詳かならざるも、大荒郷の對稱なれば、宗像郡津屋崎町・勝浦村の邊にあたるか。一に福岡市博多の邊なるべしといはる。

コアロン 社 臺灣臺東廳臺東郡の蕃社。蕃稱はKegedeh。大武溪の上流にあり、高砂族の蕃社なり。パイワン族の中にてバカロロの系統に屬す。戸數一八、人口四四(昭和十一年末)。

コイ 己斐 廣島縣佐伯郡にありし村。昭和四年廣島市に入りその町名となる。山陽本線の己斐驛(明治三十三年設置)あり。この地は往昔神功皇后西征の時御著船の地と傳へ、八幡宮鎮座す。

コイ 鯉山 吉備中山(岡山縣)の別名。

コイ 鯉 〔鯉ヶ浦〕 新潟縣(新潟縣)

コイ 鯉 國大安寺科、一萬二千東とあるに當らざるかといふも今詳かならず。(八幡橋見神社)大字布施組宮内に鎮座。郷社。祭神、譽田別命・食積魂命。創立年代詳ならず。例祭、十一月三日。

コイケ 小池村 新潟縣越後國西蒲原郡の南部。三枝市の西北凡そ四軒にして、信濃川の北岸。その本流と中ノ口川との分流點に當れり。全村殆んど水田にして米作盛なり。越後縣地蔵堂町と彌彦鎮三枝市及び燕町を結ぶ縣道の分岐點に當り、三枝市・燕町へは舟運の便もあり。往古の事は以て徴すべきものなし。いま柳山・杉名・杉柳・道金・八王寺・小池・小園・大園・藏園・大曲の諸大字より成り柳山に役場を置く。

コイサワ 小石和 富士見村(山梨縣)

コイサンケツ 五園三結堡 臺灣臺北州宜蘭郡の舊堡名。現在の宜蘭街宜蘭の地にして、往時の噶瑪蘭城所在地。五園とは宜蘭平野に漢人の移住せる最初の地は吳沙の率ゐる福建省泉州府の移民を以て攻略せる頭圍庄の地にして、此より第五の漢人集結地が宜蘭街に當るの意にして、三結は宜蘭城内の公署の在りし街名を採れるもの。光緒元年噶瑪蘭を宜蘭と改むると同時に、五園三結堡は本城堡と改まり、我國領臺以後引續き繼承せるが大正九年これを廢止す。

コイシ 小石 北海道北見國宗谷郡

【懸松原】 若狭國の和歌の名所。福井縣三方郡八村大字氣山の宇和四神社の東北の松原といふ。同國雜記「問はばやなたが世に誰をうらみさかづれなく残るこひの松原」

【懸濱】 兵庫縣飾磨郡白濱村の海濱をいふ。和歌の名所。懸松原ともいひ、八幡宮あり、松原八幡と稱す。懐中抄「人しれ守苦しきものとしりぬれば尙うらめしき懸の濱かな」

コイ 五井町 千葉縣上總國市原郡の北部。千葉市の南方約一軒。東京灣に臨み、養老川の下流に沿ふ。東北は八幡町、東は市原村、南は海山村、西は東海村・千種村と隣す。町内全部平地にて東半は大部分水田、一部沼田をなし、西半は畑地をなす。米・麥・蕎麥の産多し、また水産行はる。千葉市より來れる縣道は町の中央を貫貫し、街はこれに沿ふ。また省線房總西線通じ、五井驛(明治四十五年設置)を置く。五井驛はまた小湊鐵道線の起點にて、同線はこれより南方に走り、村内南部に上總村上驛(昭和二年設置)あり。この地は和名抄、市原郡海部郷の地なるべく、明治二十四年町制を布く。大字君塚は治承四年源頼朝が千葉介當を此所に見て大に喜ぶ、故に當時は喜風見塚に作り、また武松郷と稱し、のち君塚に改む。維新前旗本の采邑たり。大字五井はもと武松と稱す、また御井・後井・五位等の文字を混用せるも、のち之

を五井に改む。維新前、松平氏の領地及び大津氏の采地たり。この地に忠臣蔵・五井陣屋址・五井鼻等あり。忠臣蔵とは黒見氏の臣等の戦死せしものを忠臣蔵としたり。大字平田は維新前に旗本朝伊奈氏の采邑たり。大字岩野見はもと大字五井に屬せしが後に一村となる。維新前永井氏の采邑たり。大字村上は維新前に中野・曾根二氏の采地たり。また村上大藏大橋義芳の居りしといふ村上城址あり。大字出津はもと五井村の故地たり、初め養老川の崎嶇なるを以て出津と名づけ、のち出津と改む。維新前は代官の支配地たり。大字岩崎新田はもと五井村の屬地たり。享保十三年、江戸の人、下村清兵衛が始めて開墾す。享保十三年・同十七年・延享二年の検地帳には清兵衛新田とあり、享和元年の検地帳には既に岩崎新田とあれば延享年間より享和元年までに岩崎新田と改めしものなるべし。維新前は水野氏の領地たり。大字玉前新田は寶曆九年徳川氏の代官吉田源之助が初め附寄洲を開拓せしめ見立新田と稱し、のち玉前新田と改む。維新前は代官支配地及び旗本の領地たり。(五井陣屋址)大字五井字柳前にあり、平坦にして今は田圃となる。享保十一年有馬氏領の地に於て一萬石を領し陣屋を置く、天保十三年下野吹上に轉じ陣屋廢す。(光明山守永寺)字南上宿にあり。淨土宗。寺傳に、養老年中僧行基の開創に係り光

コイエーコイシ

明寺と號すといふ。天正十八年松平家忠の子家信此地を領し、其母卒するや本寺を香願所となし、法號に因みて理安寺と稱す。明暦三年神尾守永の邸焼失せし時寺宇を毀ちて江戸に運送し守永の家屋を造る。のち邸内に毎夜怪異あり、守永怖怯し之を占はしむるに、寺宇を毀せし祟りとす。此に於て守永堂宇を再建して守永寺と改號す。境内に碑二基あり。一は松平家信、一は其實母の菩提追福のために建立せしものなり。

コイエ 小宅里 小宅 國分寺村(東京府)

コイカクホ 戀ヶ窪 山縣梨甲斐國中巨摩郡の東南部。甲府市の西南方、釜無川下流の東岸にあり。北は常水村、東は三町村、南は花輪村、西は釜無川を隔て、鏡中村と隣す。甲府盆地内にあり、全村平地にて東南部は水田多し。米・麥を産し、西北部は畑地をなして一部に桑畑あり、繭桑を産す。甲府市より來る富士身延鐵道線は村の東端の一部を掠めて南走し、東隣三町村内に小井川驛あり。縣道は村の中部を通り南に向ふ。この地は近世、小井川庄と稱せられし地にして、小井河庄は後宇多院御領目録にもその名見ゆ。本村はもと花輪村・忍村と共に組合役場たりしが、町村制實施と共に分離して小井川村を組織す。また此地の大安寺は甲斐國志によれば延喜式に甲斐

等なる狐掘出沒せり。その二丁目北横町を、俗に貝杓子店と稱へ、貝杓子問屋あり、また三丁目には著名の支店ありき。萬句合・天明五年「小網町數萬の蝸鳴いて居る」芝居では貝の背を併合せて、蝸の擬音とする故いふ)日本永代蔵・「其人の住所は武蔵江戸にして小網町のすみ、浦人の着し舟問屋して次第に家業へしをよろこびて」

コアラマ 小荒間 小泉村(山梨縣)

コアレ 小荒 筑前國(福岡縣)の古地名。和名抄、宗像郡に小荒郷あり、その地今詳かならざるも、大荒郷の對稱なれば、宗像郡津屋崎町・勝浦村の邊にあたるか。一に福岡市博多の邊なるべしといはる。

コアロン 社 臺灣臺東廳臺東郡の蕃社。蕃稱はKegedeh。大武溪の上流にあり、高砂族の蕃社なり。パイワン族の中にてバカロロの系統に屬す。戸數一八、人口四四(昭和十一年末)。

コイ 己斐 廣島縣佐伯郡にありし村。昭和四年廣島市に入りその町名となる。山陽本線の己斐驛(明治三十三年設置)あり。この地は往昔神功皇后西征の時御著船の地と傳へ、八幡宮鎮座す。

三七五

【碓石村】 富山縣越中國米見郡の西北部。石川・富山の縣境をなす賣連山脈の東斜面にありて、米見町よりは西北凡そ七軒に位置す。西北より西にかけては、碓石ヶ峰(四六一米)を主峰とする山稜を境とし石川縣鹿島郡の久江・御祖村及び羽咋郡色知村に接し、東は余川村を隔て、米見の小平野に出づ。主産業は農業にして米を産し、林産これに次ぐ。交通は米見より稻積・余川村を経て村内に入り、更に原山峠を越えて七尾街道に通ずる縣道による。此地古くは和名抄、射水郡阿努郷の内に屬す。いま味川・上余川・一割・吉懸・懸札・寺尾の六大字より成り味川に役場を置く。

コイシカワ 小石川區 東京市の一區名。市の中央部。東は本郷區、北より西は豊島區・滝橋區、南は牛込區に接し、東南の一部は麹町・神田の兩區に隣る。小日向臺町・目白臺・本郷臺等の臺地によつて形成され、その間江戸川、

千川の二川に流す部分が即ち小石川に... 千川の二川に流す部分が即ち小石川に... 千川の二川に流す部分が即ち小石川に...

す。本區聯合は明治十一年十一月表町に... 本區聯合は明治十一年十一月表町に... 本區聯合は明治十一年十一月表町に...

川とに挟まれ土地平坦なり。生業は農に... 川とに挟まれ土地平坦なり。生業は農に... 川とに挟まれ土地平坦なり。生業は農に...

き東南方日田町方面より北地芝峠を越え... き東南方日田町方面より北地芝峠を越え... き東南方日田町方面より北地芝峠を越え...

折付登壇に行はる。省警署東部中部... 折付登壇に行はる。省警署東部中部... 折付登壇に行はる。省警署東部中部...

百米許にして、疊壇の形跡僅然として遺... 百米許にして、疊壇の形跡僅然として遺... 百米許にして、疊壇の形跡僅然として遺...

長考等、悉上請文上者、不可有御不審者... 長考等、悉上請文上者、不可有御不審者... 長考等、悉上請文上者、不可有御不審者...

野區諏訪郡本郷村大字乙事に通ずる間道... 野區諏訪郡本郷村大字乙事に通ずる間道... 野區諏訪郡本郷村大字乙事に通ずる間道...

製造も行はる。三島町・御殿場町を繋ぐ...

コイセ

くは沼田庄と稱し、土肥氏を地頭とせし...

コイリ

大字。大磯が東海道五十三次の一驛たり...

コイツカ

肥塚。埼玉縣大里郡にありし村...

【小泉村】 廣島縣安藝國豊田郡の南部...

【小泉村】

三原市より西南方八軒、忠海町の北に...

【小泉村】

一門の菩提所にして、大同忠右衛門忠勝...

コイテ

【小出村】 秋田縣羽後國由利郡の西部...

コイト

【小出村】 新潟縣越後國北魚沼郡の中部...

治二十二年町制實施と共に小出村と改...

【小出村】

【小出村】 神奈川縣相模國高座郡の南...

【小出村】

【小出村】 新潟縣越後國北魚沼郡の中部...

コイト

【小出村】 新潟縣越後國北魚沼郡の中部...

コイト

【小出村】 千葉縣上總國君津郡の中部...

コイト

【小出村】 千葉縣上總國君津郡の中部...

コイトーコイフ

作は維新前、旗下水田氏の采邑たり。大字塚原も亦維新前、水田氏の采邑たり。〔天南寺〕 大字鎌瀬字上の臺にあり。曹洞宗。神野山と號す。寺傳に、寛正元年...

コイトー五位堂村

後紀・三代實錄に之を載す。和國北葛城郡の中部。奈良市の東南二十軒。北は下田村・馬見村に、南は後西村...

コイノ

馬、天皇聞之、詔草野曰、朕聞、當麻蹶速者天下之力士也、若有比此人者、即一區逃言、區聞、出雲國有勇士、曰野見宿禰、試召之、人、欲當子蹶速、即日...

コイノ 小犬丸

伊都郡の東部。紀ノ川の南岸。高野町の東北に隣り、西に河根村・學文路村あり、北は紀ノ川を隔て、岡田村にして、東南...

コイフチ 鯉淵村

英城縣常陸國東茨城郡の西部。水戸市の西南方約一〇軒。北は下中妻村・中妻村・上中妻村、東は長岡村、南は川根村、西は西茨城郡...

コイヤーコウメ

宮戸町・北川根村に隣り、關東野内の一郡を占め、村内大部分は低地に、東端のみ約三〇米の丘段をなす。村内殆んど水田・畑地多く、米・麥の外木炭の産あり...

コイヤマ 五位山村

中國西瀛波郡の西北部。石動町の北方凡そ六軒にあり。西は石川・富山の縣境をなす、寶建山脈により、石川縣羽咋郡に、北は米見郡久目村に、東は石塊・赤丸...

コイワ 小岩

江戸時代の北に此處に關所を置き小岩御番所と呼べり。今徳武本線の小岩驛(明治三十二年設置)及び京成電氣鐵道驛の驛を置く。この地の善養寺の不動尊は名高し。懸栗毛・三下(それより此嶺(二川)を出てたどり行に、ばやくも大岩小岩を打過、岩穴の觀音をふしがみて)

コウメ 小海

面の一部を占め、千曲川の谷を隔てて八ヶ岳に相對す。村の北境に茂東山(一七八米)あり、村の中央に阿登久良山(二四四米)あり。何れも西南に向ひて傾斜す...

コイノ

古今泉實錄に元文元年十月二十日より武州小梅村にて錢を鑄せしめらる。その錢皆上に小の字ありと、これ此處にて鑄造せしものなるべし。この錢座はいづれの頃か廢されて西尾隱岐守の抱屋敷にづりしと。その他、牧野備前守の抱屋敷・津經右京大夫の抱屋敷・岡田源藏の抱屋敷・大井帶刀の抱屋敷・狩野祐清の抱屋敷・大久保今助の抱屋敷等ありしと。また此外、萬古地蔵ありしと。これは寶曆の頃、萬古館次郎なる陶器を製造するもの伊勢の桑名より來りて、この地に陶器を作れり。因て世人は萬古地蔵と稱せり。安永・天明の頃には最も著名となり、後院院殿(徳川家治)放鷹の時、館次郎を召してその製作を見られしと。里見八犬傳・九ノ三七(この朝二隊の兵一千四百五名を従へて、墨田河原に、造るべしとて、小梅三郎田の邊に來にける時、自胤池にこれを見て、他は必里見の奴們が、墨田河をうち渉して我城(石濱)を攻んとて來るならん)出世娘・三上(小梅村に長兵衛といふ知るものあり)春色鐘の梅・七(今ツから損の抱津津をささつて、お前と三人で小梅の汁粉へで住むか)

コイノ

義市の東北方に位し、西は大津庄・民樂庄に、南は竹崎庄に接し、東は善界に隣り、北は平六部に界す。東部は新高山系に屬する阿里山の山脚部にして末端は斷層崖をなして平地に臨む。西部は土地低

コウラ——コカ

平、廣大なる嘉義平野に置き地味肥え濃
表の利多く農耕に適す。農業はかく自然
的素因に恵まれ且つ比較的早期に開發さ
れし所なると地理的環境により農民文
化も概して高く現在の發達を示す。主要
農産物は米・甘蔗・甘藷等にしてその産
額農産の大部分を占む。この外、落花生、
烟草・龍眼・芍薬・鳳梨等あり。また本
庄種子林には南隣竹崎庄の養其湖に互る
炭礦あり。山中よりは木材を出す。社轄
大日本製糖廠の小梅・新巻間通じ、小梅
驛(大正二年設置)を置き、街道また之に
沿うて走り嘉義市に至る。いま小梅・通
山・双溪・大草埔・大半天寮・九芎坑・
頭頂・大坪・龍眼林・生毛樹・種子林の
大字よりなる。

コウラ 小浦

熊本縣八代郡にありし
村。大正十二年本村は南郷山村・北郷山
村と共に廢せられ、新に種山村を置く。

コウリ 古宇利島

沖縄縣國頭郡に
あり。いま歸仁村に屬す。運天港の北
一・五哩にあり。周圍約四軒。

コウシ 五雲峯

京都市嵯峨山の南東
約六軒、京都府宇治郡宇治村に峙つ。標
高三四七米。北東麓は醍醐山(四五〇米)
に連る。山頂附近に大池と稱する池あり。
山頂より四方脚下には瓦葺池を俯瞰し、
又宇治川とその支流木津川の合流點を望
む。北東麓は醍醐園有林にして檜・杉の
森林茂る。醍醐山への遊走は二時間行程
なり。

コエク 越來村

沖繩縣中頭郡の北
部。東は美里村、南は中城村、西は北谷
村に隣り、北の西部は國頭郡恩納村に界
す。土地南北に長く、面積二四・二九平
方軒あり。比謝川中部を西流し、附近は
平低、その他は多く丘陵性なるも概ね平
坦面をなして畑地多し。甘蔗・甘藷を主
産し、米の産も少からず。また黒糖の製
造行はる。道路は北谷・西原(美里村)及
び嘉手納(北谷村)等に通じ交通不便なら
ず。もとほ今の美里村を合せ二十ヶ村を
治むる大包たり。即ち越來間切はもと興
儀・比屋根・大里・胡屋・中宗根・南風
原(いま越來)・西原・上地・大工廻・知
花・油原・恩納・楚南・山城・伊瀬(いま
伊波)・賀手湖・石川・高原・宮里・
登川・赤崎の二十一村を含みしが、のち
西原・知花・油原・興儀・比屋根・大里・
恩納・楚南・山城・伊瀬・賀手湖・石川・
高原・宮里・登川の十五村を美里間切に
割き、諸見里を中城間切より、山内を北
谷間切より入れ、安慶田・照屋・宇久田
の三村を置き、赤崎を廢し、いま胡屋・
中宗根・越來・上地・大工廻・安慶田・
照屋・宇久田・諸見里・山内の十字を以
て越來村の所管とす。高原は檢地帳マダ
ハルと註し乾隆以後下高原を知る。尙實
王十九年高麗親方孝治此地地を知行しし
事あり。宇越來は古へ南風原村と稱す。
越來代官の主治にして中頭北半の惣管た
り。いま役場所在地なり。

コエトイ 聲問

北海道北見國
宗谷郡稚内町の大字。省線北見線の一驛
(大正十一年設置)あり。

コエナ 越名沼

栃木縣安蘇郡にあ
る沼。佐野町の東南約二軒、越名村の東
北隅にありて北方の大伏町との境界をな
す。東北に足尾山塊の末端、三龜山(二
二三米)を望み、南北約二軒、東西約〇・
八軒の南北に細長き形をなし、南方に梯
木目ありて渡浪瀬川に注ぐ。

ゴオーイン 牛王院山

關東
山脈秩父山塊の一峯。雲取山(二〇一八
米)の西約八軒餘に當る。南面は山梨
縣東山梨郡神倉村、北面は埼玉縣秩父郡
大滝村に屬す。標高二〇七〇米。山頂は
岩石累累として、西端の岩を御巖と稱
す。南東方將監神との鞍部を牛王院平と
稱し、落葉松・樺等點在し、美しき景観
を呈す。登山は西方笠取山方面より、東
方大朝山方面より、いづれも尾根傳ひに
至る。

コオイ 子負島

出雲風土記出
雲郡の條に見ゆる島。風土記に「宇禮保
浦、廣七十八歩、山崎、高廿九丈、周一
里二百五十歩、子負島」とあり、宇禮保
浦は今の島根縣飯浦郡日ノ御崎村の宇禮
浦なれば、子負島はこの海岸にある島な
るべし。

コオリ 小折

愛知縣丹羽郡にあ
りし村。明治二十七年布袋町と改稱。
コカ 孤下島 朝鮮全羅南道木浦府の

HPKII

前面にある小島。食糧を産す。本島は露
國の大に要望せし地にて、明治三十年九
月露國の官吏ここに來り、韓国外交部よ
りこの島を買収せりと稱し、官製の交付
を木浦居留の日本人早くも之を韓人より買
収せり、孤下島事件として日露兩國に係
争問題ありしといふべし。これなり。

コガ 久我

【久我國】今の山城(京都府)葛野・乙訓、
愛宕三郡を主とする山城平野の北部地方
に當る。釋日本紀引く處の山城風土記に
神武天皇大和御討伐の際、熊襲の任に當
りて功ありし八咫鳥即ち賀茂建角身命は
初め大和葛城山に鎮まりしが、後、山代國
の賀茂岡田に入り山代川(木津川)に沿ひ
て下り、更に葛野川(桂川)と賀茂川との
合流點に至り、遂に賀茂川を見渡し川は
狭きも石川の清き小川なりと云ひて、此
川を評りて久我國の北山麓に鎮座せる旨
を記せり。これ後の下鴨社の起因をなす
ものにて、此命が丹波の伊賀吉夜日賣を
娶りて王依日賣を生み、日賣は火雷神と
稱して別雷神を生む。別雷神は上賀茂に
祀らる。今の乙訓郡久我村に久我社あり。
建角身命等を祀るを見れば、久我國の範
圍を要闡たらしむるを得。

【久我村】京都府山城國乙訓郡の東部。
桂川の右岸にて東は川を界として京都市
伏見區に接し、南は羽東村、西は向日
町、北は久世村に隣る。面積僅に二・二七

平方軒の小村。山城盆地の中部に當り土
地一般に平坦にして田畑多く、米・麥・菜
類等の農産を主とし、蔬菜(漬菜)の産少
からず。京都市に近く交通便利なり。村
名は古への久我國の遺稱なるべし。地に
式内社久我神社あり、その社を久我社と
云ひ歌枕として名高し。(久我神社)村
社。祭神、別雷神・健甕身神・玉依比賣命。
式内社。俗に森明神と稱す。本社祭神を
久我直の祖神となす説及び貞觀八年從五
位下、同十六年從五位上を授けられたる
興我萬代祖神を本社に充つる説あり。

【久我國手・久我嶽】

京都府山城國乙訓
郡桂川の右岸にありし嶽。久我村に起り
西南に向ひて羽東村・新神足村を経て
大山崎村に至る略一直線なす延長約二
里に亘りしもの。今中部に一部中斷せし
箇所あるも大體其址を存す。往昔平安京
の朱雀大路の末なる遺道を南に下り賀茂
川・天神川・桂川を渡り、久我に出で大
山崎に至る西國街道ここに通りしものな
れば古來史上に其名著はる。元弘三年三
月、名越高家、赤松則村と此所に戦ひて
討たる。大永七年、三好勝時、足利義晴
の軍と戦ふ。天正十年六月山崎の戦に於
て秀吉の臣加藤清江守、此嶽を上りて明
智勢の彼方を隔たんとす。光秀の軍ため
に色めきて遂に敗走せり。これ等其著
名なるものにして、其他書に記載したる
事甚だ多し。

コカ——コカ

歌枕。風・葛・紅葉・里・夜等の名所た
り。古今六帖「打なれてこむは醫こか
のもり木々のもみちのまたちらぬまに」
のより。

【コガ 古河町】茨城縣下總國烏島郡の
西北隅。渡良瀬川・思川合流點の東岸に
あり。南は新郷村、東は勝鹿村、北は栃
木縣下都賀郡野木村、西は埼玉縣北埼玉
郡川邊村に隣す。關東平野内の一部を占
め、南隣新郷村を隔てて利根川の一部を占
町内全部平地にて畑地をなす。農産物は茶・
桐材等に製糸も盛なり。特筆すべきも
のに揚枝製業・柳行李・木産物(魚類)の
加工品・アメリカ人製作用等あり。又附
近の農産・野菜の集散をなす。陸羽街道
に沿ひ、又省線東北本線町の中央を南北
に通り古河驛(明治十八年設置)を置く。
古河はまた古我にも作り、萬葉卷十四に
「眞久良我の許我の渡のから梅の香高し
もな寝無へ見故に」また同卷に「逢はすし
て行かば惜しむ眞久良我の許我漕ぐ船
に君も逢はぬかもし」とあるより見れば、
元は渡津の名たりしを知るべし。のち何
時しか眞久良我の邑名は失はれ古河を以
てこれに代るに至る。江戸時代奥州街道
の一驛として頗る榮え、殊に曲亭馬琴の
里見八犬傳中犬飼現八と犬塚信乃との芳
流團上の血戦に據りて其名馳く天下に知
らる。また此地は明治九年奥羽御巡幸及
び明治十四年山形・秋田及び北海道行幸
に兩度明治天皇御小休遊ばさる。里見八
犬傳・四ノ一「憤むべし犬塚信乃は、親

の遺言、紀の名刀、心に古つ、身に傳つ、
艱苦の中に年を経て、得がたき時を得て
しかば、はるらん、許我へ齎して、名を揚
家を興すべかりし、その願は禍と、ふり
かばりたる村雨の、刃は善の物ならず、
わが身を劈く響とぞなりし、憾をこゝに
釋よしもなく、轉念にして意外にあり、
僅に富麗の尋を、難言やと思ふばかりに、
移の園を殺開きて、芳流團の屋の上に、
攀登れども左右に、脱去るべき道のなけ
れば、其處に必死を究めたる、心の中は
いかなりけん、想像るだにいと痛まし」
(古河城) その址は市街の西南にあり。
渡良瀬川に臨み、東に沼澤を控へ、謂ゆる
水城をなし自然の要害に富む。鎌倉幕府
の初め、頼朝の弓の師として聞えたる下
河邊行司平始めて城を築き、子孫代々
これに住し、北朝應安の頃、上杉憲榮城
主となりしが、多くは不在にして代官を
して之を守らしむ。永徳二年小山義政、
憲榮の代官下河邊行を破りてこれを陥
れ、時で鎌倉管領足利氏満、之を襲うて
占領しが、嘉吉元年足利氏に攻められて
城陥る。康正元年駿河の守護今川範忠、
將軍足利義政の命を奉じ、足利成氏を鎌
倉に撃ち、成氏敗れて古河城に入り、世
に古河公方と稱す。文明三年成氏、上杉
顯定の兵に破られ、下總に走りて千葉氏
に頼り、同十年成氏、上杉氏の内訌に乗
じて兵を用ひ、同年七月和議成りて再び

古河城に歸る。天文二十三年玄孫晴氏に
至り、北條氏康に攻められ、城陥り北條
氏のために關原に移され、古河城は北條
氏の有となれり。晴氏の子義氏に至り、永
祿元年北條氏と和して古河に歸る。この
後天正十八年北條氏の滅びて信康家康の
關東を治むるや、小笠原秀政、信濃松本
より古河に移りて治し、その後、慶長七
年松平康長、同十七年小笠原信之、元和五
年奥平忠昌、同八年永井直勝、寛永十年
松平信之、元祿七年松平信輝、正徳二年
本多忠良、寶曆九年松平康福等相ついで
この地に來たり治せしが、寶曆十二年土
井利用肥前唐津よりここに移りて以來子
孫相承け、明治維新に至る。明治四年古
河藩は廢されて縣となりしが、久しから
ずして印旛縣に入る。(舊神社) 古河に
鎮座。祭神、大己貴命・少彥名神・
事代主神。一に栃木縣河内郡宮村菅宮
神社を移祀せるものと稱すれども、祭
神同じからず。古來古河の總社にて古河
金町の氏神なり。弘治二年足利晴氏の妻
は御日女、元和九年領主松平康長の女は
六角劍燈籠を奉納す。慶安元年徳川氏朱
印十五石を寄進す。例祭、七月七日。(宗
願寺) 古河にあり。眞宗本願寺派。足立
山野田院と號す。觀音門徑二十四輩の第
七野田西念の遺跡なり。建曆二年の創建
にて、もと武藏國野田にあり、武州總道
場と稱せられしが康永元年現地に移る。

コカ——コカ

享保五年本願寺門跡堂所となり古河柳坊と稱す。弘化三年堂上、假建堂にて現存に在る。寺實に傳説上人作自像を藏す。...

コカ 古賀

【古賀村】長崎縣肥前國北高來郡の西南隅。長崎市の東北約一〇軒にて長崎市、諫早町間の略々中央に在り。北は西彼井郡...

コカ 五和

【五和】長野縣信濃國埴科郡の西南隅。天龍川の一支流阿知川に沿ひ、飯田市の西南約一四軒。謂ゆる伊那谷の西斜面、...

三六

林多し。村の東南隅に至りて大井川漸く流域低地を作り水田あり。生業は農林業これに次ぐ。南方金谷町より大井川に沿ひて村道あり北河下川根村に通ず。...

コカ 五箇村

【五箇村】福島縣岩代國西白河郡の中部。白河町の東約一軒、東は釜子村に、南は社村・古川村に隣接し、北は阿武隈川を距てて關平村・大沼村に相對...

コカ——コカ

の地部も石井丹波の館ありし地にして、天正の初めより、佐竹氏屋敷。白河を攻むるに當り、此の路により兵を出せりと。...

【五箇村】茨城縣下總國結城郡の東南部。小貝川下流の西岸にあり。西は三妻村を隔てて鬼怒川に近し。北は豊田村・石下町、南は大生村、東は筑波郡葛城村、...

【五箇】加賀國(石川縣)の古地名。中世の庄名にして、今の石川郡戸板村・米丸村(米丸村は昭和十年金澤市に併合さる)の地に當る。...

三六

も穴馬に通ず。西勝原にハシと云ふ所あり。一名魚留と云ひ、木曾峽の巖壁床以上の風景と稱せられ、一に北陸の郡馬渡の稱あり。また西勝原の發電所は大正十二年に開設され、最大出力は二萬キロワットにして九頭龍川を利用せるもの。また打波川の右岸には化石泉、俗に云ふ寒水石を出す。歸雁記に「又此邊に蘆あり其水に落ち流る物は徳て木の折枝草葉様の類までも其儘に固まりて是を寒水石と云ふ。水りたるものを見る様なれどいと重し、早月の末つかたまでも雪消やらぬ所なればかゝる事あり」と。石友華の蕨結として有名。同地ヶ瀬には食鹽性炭酸泉あり、郡下唯一の遊藝地として喧傳さる。風俗は打出作の者は二十日又は二十二十日を盆と稱し一年一回の取引を行ひ、小池にては笠踊をなし、櫻久保にては神戸踊とて太鼓を腰にする者五人扇を持つ者若干三拍子にて鼓聲に和し「おふもひ／＼かたおもひやれ、あはび具で、かたおもひ、あわびの貝がふたつにわれた、これから加賀の浪人やこれから加賀の浪人なれば、わきさしや、こしにたやすまひ、わきさしや、こしにたやすまひ、とゆうたが、さらわがものか、かりものや(三章の中最後の物)」と歌ふ。此歌詞に據れば加賀牛首よりの來住者と思はる。

【五箇村】 山梨縣甲斐國南巨摩郡の中郡。富士川の支流、早川下流の北岸にあり。東に櫻村、北に三井村、西に船尾村、南に磯島村・本建村に隣す、赤石山脈東斜面の一部を占め村の北方にある富士見山(六四〇米)の南斜面なり。そのため全村山地にて森林多く南境の早川沿岸にも平地なく谷川をなし、桑・栗の産あり。村の中央及び早川沿ひに村道あるのみにて交通不便なり。村内に富士川水系の早川を利用せる東京電燈早川第一發電所あり。本村は町村制實施の際、鹽ノ上・薬袋・千須和・笹走・樽坪等を合して成れるものにして役場を鹽ノ上に置く。甲斐國志によれば甲州金は武田家の時より盛に出でたり。其金山は南畑山・芳山(保村山)・鳥島山(黒根山)皆金を出す、山中に昔年鑿りたる坑口遺蹟に存せり、今も南畑村の者、耕業の際に、炭渣に押出せる砂金を淘法し、之を賣進す、藥袋の佐野氏、黒柱の望月氏の類、郷士にて住時より金鑿見を志したる趣見えて、天文、水鏡以前の印書を所藏するものありと見ゆ。即ち大字薬袋に佐野氏なるものありて附近の郷士なりしなるべし。

【五箇】 播磨國(兵庫縣)の古地名。中世の姓名にて、五箇莊に作り、東鑑文治二年の條に見ゆ。正治二年、小山朝政その地頭職となる。地は凡そ今の貫古郡天満村の邊なるべし。東鑑「文治四年六月四日、所地頭職沙汰之間事、注進條、今計帥中納言(經房)給之處、御返報今日到着、云云、播磨國當時知行所之事、云云、五箇莊事、開名、福田莊、西下郷、大部郷、任申狀可有御沙汰、松平義行所藏文書「下播磨國五箇莊住人、補任地頭職左衛門尉藤原朝政、右人可爲彼職、但於乃實已下課役者、不成於勤、可致其勤之狀如件、以下、正治二年正月廿五日」。

【五箇村】 島根縣隱岐國島後島の隱地郡の北部。東北に中村に、南に郡万村及び周吉郡の中津村に界し、西及び北は海に面す。面積五一・八六方軒の大村、島後島の二割を占む。概ね山地にて東北方に大峰山(五〇八米)、東に時晴山(五二二米)、南に横尾山(五七三米)聳え、何れも緩斜す。中央部を東西に谷とほりて時晴山の北西麓及び横尾山北麓より溪流出て、村の中心大字一宮附近にて一となり、谷を西流し重橋港にして海に注ぐ。流域には沖積平野ありて耕地をなし米・麥・甘藷を栽培す。又大峰山西麓を切りて西北方に溪流あり。山地よりは用材・木炭を産する外、各郷野は好牧場をなし生牛の産あり。海岸は沈降性海岸にて出入にのみ重橋港附近に特に狭長なる灣入をなし、投錨地として漁船の出入多し。附近の海に柔魚の好漁場なれば、水産業又盛にて鰐鰯を初め多くの水産物を出す。東南方の西郷町及び重橋港への村道は横尾山の東方の峠を越えて、屈曲したる道を一宮に下り溪流に沿うて西方重橋港にゆく、一宮南方・北方等は街村にて、北方には郵便局あり主邑をなす。北に久見、西南に福浦、長尾田の部落あり。國幣中社水若酢神

社は一宮の東南、時晴山の西麓に鎮座す。此地は和名抄、隱地郡武良郷及び同河内郷に夫々分屬せしもの如し。大字郡は古の郡家のありし地とす。また大字久見は的にも作り、觀應記に酌村は西北の海邊にて風波最もげし、故に石を疊みて塘とし潮を防ぎて村を置くと見ゆ。いま北方・南方・苗代田・那久路・郡・山田・代・久見・小路の十大字より成り北方に役場を置く。(水若酢神社) 大字郡に鎮座。國幣中社。祭神、水若酢神。中言神、鈴御前(配祀)。祭神に就き異説ありて、或ひは隱岐國造の祖神とも云ひ、又は稚産靈命を祀るとも云ふ。蓋し水源湧出の神靈を祀れるものなるべし。島後には水祖神・玉若酢神、和氣能酢神などありて、その名稱相似たり。創始年代は仁徳天皇の御宇とも云へど詳かならず。承和九年九月官社に預り延喜の制に名神大社に列す。明治五年九月十四日國幣中社に列す。社地は時晴山の西麓にて境内幽邃、社殿の清麗國內第一なり。例祭、五月三日。(伊勢命神社) 大字久見に鎮座。祭神、伊勢命。續日本後紀に、當社祭神屢々靈驗ありしに由りて嘉祥元年十一月明神に預かりしこと見ゆ。もと内宮大明神とも稱し延喜の制に名神大社に列す。明治五年十一月郷社に列格す。傳に據れば、往古現社地の南方凡そ五十間を隔てて約千五百坪の田畑あり、此處に夜々神火の燃ゆる事あり、村民これを以て神明の

出現となし、假に此處に小祠を建てしに、年を追うて盛になりしかば、神火の出現も止みぬ。然れども同地は暴風雨に吹き荒らるる憂ある故に現在地に遷座せりと云ふ。舊社地を今もほかりや(假屋の意か)といふと傳ふ。例祭、七月十六日。【五箇】 廣島縣甲斐郡にありし村。大正二年本村は上領家村・龜谷村・日黒村・領家村とともに廢せられ、新に領家村を置く。

【五箇村】 茨城縣下總國猿島郡の西部。利根川の南岸。村の東端は江戸川の分流點なり。北より東へかけ利根川を隔てて香取村・靜村・境町に隣し、東南は江戸川を隔てて千葉縣東葛飾郡調布町、南より西へかけ埼玉縣北葛飾郡吉田村・槻現堂川村・幸手町・豊田村に隣す。關東平野内の一部を占め、村内全部平地にて如地多く、東南の一部のみ水田をなす。主産物は米・麥・蕎麥。縣道村の中央を通りて西南隅幸手町に通ず。幸手町に東武日光線幸手驛を置く。此地は古く和名抄、猿島郡色登郷の内に屬せしものか。村名は古く此地を五箇村島といへるに據ると。大字元栗橋の地は慶長年中まで奥州驛路に當り武州・粕壁・岩槻より來るもの渡良瀬川を過ぎてこの地に至る。故に栗橋房川の渡とも稱せり。然るに慶長年中栗橋の驛家を埼玉縣北葛飾郡栗橋町に移せしより元栗橋と稱するに至る。此地に城址ありて深池の跡を遺し城山とい

【五箇村】 和歌山縣の古地名。中世の姓名にて、五箇莊に作り、東鑑文治二年の條に見ゆ。正治二年、小山朝政その地頭職となる。地は凡そ今の貫古郡天満村の邊なるべし。東鑑「文治四年六月四日、所地頭職沙汰之間事、注進條、今計帥中納言(經房)給之處、御返報今日到着、云云、播磨國當時知行所之事、云云、五箇莊事、開名、福田莊、西下郷、大部郷、任申狀可有御沙汰、松平義行所藏文書「下播磨國五箇莊住人、補任地頭職左衛門尉藤原朝政、右人可爲彼職、但於乃實已下課役者、不成於勤、可致其勤之狀如件、以下、正治二年正月廿五日」。

コカ—コカイ

く。南部山地に交通不便なり。本村は明治二十三年郡制實施と共に町村の分合改稱を行ひし際、豊井・草越・茂澤・廣戸・西勢を以て任賀村を置き、役場を豊井に置く。村内に内城ヶ池・突切・森泉・天池・ラジウム・鏡泉・馬越岩・熊の穴等の名所あり。

ゴカ

吾可面 朝鮮忠清南道禮山郡の中部。東部は禮山に、南は豊峰に、西は柳橋面に、北は新岩面に夫々隣接し、西南の一部は洪城郡に接す。中部に百米前後の丘陵地あるも、他は一部に低平にて且つ無用よくこれを灌漑するを以て耕地よく拓け、米・麥・大豆・小豆・粟・棉・大麻等の産多し。社稷朝鮮京南鐵道及び二等道路西南より東に走り、前者に吾可驛(大正十二年設置)を置く。

コカイ

子養 肥後國(熊本縣)の古地名。和名抄、菊池郡に子養郷あり、その地今詳かならざるも、菊池郡菊池村の邊に當るか。

コカイ

蠶養 福島縣北會津郡にありし村。明治二十四年一箕村と改稱す。

コカイ

蠶養 肥後國(熊本縣)の古地名。和名抄、菊池郡に蠶養郷あり、菊池郡に子養郷あり、ともに蠶養郷の居りし所なり。延喜長部省式に肥後國蠶養驛馬五疋とあれば、郷が驛を兼ねしものなり。その地今の熊本市の千反町・坪井町の邊なるべし。

コカイ

養蠶村 養蠶村(英城)

コガイ

小貝

【小貝村】 栃木縣下野郡芳賀郡の北部。小貝川の發源地。茂木町の西北約八軒。東に須藤村、南に市野村、西に藤井町、南高根澤村、北に那須郡荒川村・向田村に隣接す。八海山脈に續く山地の東端の一部を占め東境は二四九米、西境は一五九米の山地にて、何れも村内に向ひて傾斜せるため、平地は殆どなし。山地には森林多し。省線新網線は西南方眞岡町より來りて南隣市野村を横斷し茂木町に通じ、市野村に市場驛を置く。當村より同驛及び茂木町に鐵道通す。往古の事は記録の微すべきものを以て詳ならず。本村大字権谷、維新以前慶安元年太田原領分りて山内源七郎・柳原榮女・土屋三郎衛門の領分なり。大字田野邊は元禄十一年中分郷して岩瀬吉左衛門・千本左衛門・若野左門の領分なり。大字杉山は元禄十一年分郷して長田兵衛・大久保九郎左衛門・逸見小四郎・石野新左衛門の領分なり。大字大谷津は元禄中分郷して依田隼人・稻垣大隅守・佐合美庵・眞岡代官山内源七郎の領分となり、大字権谷及び大字羽佛は元禄元年以降徳川旗本野呂興助寄居の領地にて以降慶應四年まで同家八代目野呂宗之丞の領分なりき。大字別荘田は元禄年間分郷して養蠶喜六郎・杉

田又兵衛の領地たりしも、後天保年間に至り更に分郷して大久保佐渡守・眞岡代官山内源七郎・杉田又兵衛の領分なり。大字別荘田は元禄年中まで永作太夫の領分たりしも、以後岩瀬吉右衛門を経て野呂文右衛門の領地となれり。大字見上は天正年間菅野日向守・千本常陸守の領分たりしも寛文年間に至り佐合美庵の領地となる。大字竹内は島山城主大久保佐渡守の領分なり。各村の石高は五千九百九石五斗七合九勺七斗を有せり。以上は何れも明治元年に至り藩知事鍋島直正の支配となる。明治維新以降を案するに町村制實施以前に在りては各大字にて戸長役場を置きたる事あり、或は聯合制戸長役場を設けたることあるも敢て特筆すべきものなし。明治二十二年四月を以て町村制實施となり、舊十一ヶ村即ち権谷・文谷・田野邊・杉山・大谷津・須谷・刈生田・羽佛・鹽田・見上・竹内を合併して小貝村と改稱す。

【小貝川】 利根川の一支流。蠶養川・子飼川にも作る。栃木縣芳賀郡小貝村に發し、南西流して英城縣眞蠶郡に入り蠶養村の西南界にて、鹽谷郡阿久津村邊に出で南流して眞岡町・下館町を経て來る五行川を合し、更に南流して筑波郡と結城・北相馬郡との界をなし、北相馬郡相馬町に於て、牛久沼の餘水を受けて大風流し、小文間川の南東部にて、利根川に入る。長さ約一〇〇軒、その間灌溉の利少からず。

コカイ

五開村 山梨縣甲斐國南八

摩郡の東北。無澤町の西南隅にて富士川上流の西岸。西は西山村・三里村、南は大須成村・西島村、北は無澤町・藤原村及び中瓦摩郡平林村に接す。赤石山脈東斜面の一部を占め、西北隅に源氏山(一八二六米)、北隅に八町山(一五二二米)、西南隅に御殿山(一六七〇米)あり。村の西半は北等諸山の斜面を占む。東半は次第に低夷し、北境に六九七米の山地あり。富士川の谷に向ひて傾斜し、川に沿ひて一小部分のみ平地となり、田地を開くも大體は河骨まで山地迫る。全村森林多く、木炭は年産一九六〇〇圓位に達す。産業は農業主にして、養蠶業・林業を副とす。富士川に沿ひて甲府市より身延方面に至る鐵道通すも、他に交通頗る不便なり。

この地は和名抄、五摩郡川合郷の地にして、近世は西河内筋に屬す。俗にこの山中に新羅三郎龍光の城跡ありて甲斐源氏發祥の地なりとするは疑はし。明治初年に十谷村・柳川村・島屋村・箱原村・長知澤村の五村各々獨立し居りしが、明治八年この五村を合併し一村となし、五村より成りたるを以て五開村と名づけしものか。

コガイ

古開作 山口縣玖珂郡

にありし村。明治三十八年本村は柳井村・柳井津村とともに廢せられ、新に柳井町を置く。

ゴカイドー

五街道 江戸時

代、江戸日本橋を基點とせし、京都・日光・白河・甲斐に至る五つの主要交通路をいふ。日本橋より品川を経て京都に至るものを東海道、日本橋より板橋に出で草津に赴き京都に至るものを中山道、或は木曾街道、千住に出で奥州白河に至るものを奥州街道、同じく千住に出で宇都宮より分れて日光に赴くものを日光街道、内藤新宿に出で甲府に達するものを甲州街道といふ。東海道五十三次、中山道六十九次、奥州街道六十九次、日光街道二十四次、甲州街道三十四次にして、その間に於ける陸運・舟運は駄賃附及び船賃附なるものありていづれも一定せられるなり。

コガクラ

小ヶ倉村 長崎縣肥前國

西彼杵郡の南部。長崎市の南隣。西は長崎灣に面し、東は浦上川に臨む茂木町、南は土井首村に各隣接す。面積九・七八方軒。東境に戸町岳・熊ヶ崎ありて西方に傾斜し、海岸に小低地をつくりて海に臨み、西北境に大久保山あり。村内山地多けれど比較的耕地拓げ甘藷・粟を産す、海岸は水産業盛にして西南岸に主邑小ヶ倉村の聚落あり。鐵道西部を南より北に大久保山東麓を貫通して長崎市に至り、北約六軒に省線長崎終點長崎驛あり。海岸は水運便なり。當村は附近町村と共に要塞地帯なり。往古の事は以て微すべきもの無きも、明治四年廢藩置縣の際長

コカイ

コカシ

コカシ

五ヶ所

【五ヶ所村】 三重縣伊勢國度會郡の東南部。宇治山田市の南に隣り、南は五ヶ所灣に臨み、東南に隣れる神原村及び西に接する神原村と共に五ヶ所灣の北部を圍む。東・北・西の三方約三・四〇〇米の山嶺を繞らし西境に龍仙山(四〇二米)あり。山地三面より中央及び南方に傾き、海岸はリヤス式扇曲をなし數箇の岬突出して其間に深き五ヶ所灣の灣入りあり、中央西偏に兩岸屈曲多き中島延びて先端の天崎約三軒南方に突出す。海岸所々に僅に平地あり。暖温地なるため山地は黒潮の送る濕氣を吸ひて用材・薪炭を賣し、沿岸に甘藷・薯蕷を産すれど、海上の富多く内海と異り神漁業を營み且つ水温高ければ五ヶ所灣は我國第一の産球莖地の本據をなす。海岸に主邑五ヶ所浦・船越等あり。道路は南部を一部海岸に沿ひ東西に走り途中五ヶ所浦にて岐れて北に至るものは北境領時を越え宇治山田市の通す。また五ヶ所灣の内奥に指定港たる

五ヶ所港ありて鮮魚介等を移出し内地米等々移入す。村は五ヶ所浦・船越・中津濱浦・切原・飯滿の五大字より成り、役場を五ヶ所浦に置く。古くは和名抄、英城郡船越郷の内に於て、大字船越は地名の遺存なるべし。村内に古城址あり、中世愛洲氏の居館なりと傳ふ。愛洲氏は清和源氏武田南吉氏族より出づ。天正年中北畠國司の攻略するところなり。

コカシ

五ヶ所

【五ヶ所灣】 三重縣度會郡にある灣。西野濱沿岸のリヤス式海岸にて最も灣入の甚しきものの一。灣口の幅約二軒、北に灣入すること約七軒にして灣内更に多くの支灣あり。灣奥に五ヶ所村あり。灣内は波穏かして水清澄なるため眞珠貝の養殖に適す。元來眞珠貝の養殖は御木本寺古なる人、明治二十三年英虞灣に始めしものなるも、英虞灣は往々赤潮の襲來あり且つ水温は眞珠貝の生存不能なる攝氏七度以下に降る危険あるためこの灣に本據を移すに至れり。

コカシ

五ヶ所村

京都

府丹波國船井郡の東部。保津川支流田原川に跨る。國郡町の東北約一軒。南は世木村に隣り、西は胡麻郷村に接し、北は北桑田郡大野村・宮島村と界す。西北及び北境に佐々里山脈六一七〇〇米程度に達し、田原川と山良川支流大野川との谷を隔て南境には四一五〇〇米程の山地北へ彎曲して續き、其北に北部山地との間に田原川西流東に東流して馬蹄型の谷を

コカシ

五箇庄

山梨

作る。村内森林多きも、また耕地拓く。主産業は農業にて米を産し、林業これに次ぐ。中央に縣道、西南國郡町方面より東南周山(北桑田郡)方面へ谷に沿ひて通じ、中央より道路北方へ分岐し北境海老坂を越えて東部より分岐する縣道と共に宮島村に通ず。中世は五箇荘に作り、源頼政の家領なりしも、治承四年、没收せられて平宗盛これを知行せり。後また没官領となり、頼政の子頼兼に返付せらる。東鑑「文治二年三月八日、源藏人大夫頼兼忠申、丹波國五箇荘事、二品可令執事京都之由、及御沙汰、是入道源三位頼朝(頼政)家領也、治承四年、有寄之後、屋島前内府知行之、今度没官領内、被付頼兼、而可爲御領御領之由有御陳」。
【五箇庄】 山梨縣甲斐國南八摩郡の東北。無澤町の西南隅にて富士川上流の西岸。西は西山村・三里村、南は大須成村・西島村、北は無澤町・藤原村及び中瓦摩郡平林村に接す。赤石山脈東斜面の一部を占め、西北隅に源氏山(一八二六米)、北隅に八町山(一五二二米)、西南隅に御殿山(一六七〇米)あり。村の西半は北等諸山の斜面を占む。東半は次第に低夷し、北境に六九七米の山地あり。富士川の谷に向ひて傾斜し、川に沿ひて一小部分のみ平地となり、田地を開くも大體は河骨まで山地迫る。全村森林多く、木炭は年産一九六〇〇圓位に達す。産業は農業主にして、養蠶業・林業を副とす。富士川に沿ひて甲府市より身延方面に至る鐵道通すも、他に交通頗る不便なり。

コカイ

五箇村

山梨

甲斐國南八

摩郡の東北

無澤町の西南隅

にて富士川上流の西岸

西は西山村・三里村

南は大須成村・西島村

北は無澤町・藤原村

及び中瓦摩郡平林村に接す

赤石山脈東斜面の一部を占め

コカセ——コカタ

りしもの如し。今に南・北五箇荘の二村となる。北五箇荘・南五箇荘村【五箇荘】京都府山城國宇治郡宇治村の大字。俗に古へ此處に五つの荘ありし故にこの名ありと。一説に御家の庄の謂にして諸國にその名多く、必ずしも五箇の荘の意にあらずと。この五箇荘の中に岡屋の地あり、宇治川に臨む。近衛家の傳領地にしてその別業あり、その故を以て近衛兼經を岡屋岡白ともいふ。近衛家の墓所も亦此處にあり。

コカセ 五ヶ瀬川

宮崎縣第二の大川。阿蘇山の南麓、熊本縣阿蘇郡馬見原町附近に其源を發し、縣境を東北流して宮崎縣西臼杵郡に入る。これより方向を東南に轉じ天孫降臨の傳説の一たる高千穂町を過ぎてここに天下の奇蹟高千穂峽をつくり、大小幾多の溪流に委はれて大河となり、更に東南流して東臼杵郡に入り北方村南部の邊にて左折して東流し、延岡市の西部に大なる中洲を形成し、延岡市の中部を貫流して日向灘に注ぐ。全長一三四軒。下流約五〇軒は舟楫の便あり。また上流には既成の水力發電所跡がらざれども、今後の建設を待つ發電地點も甚だ多し。(五箇瀬川峽谷(高千穂峽)指定名勝天然記念物。高千穂町三井井を中心とし、東西數里、更に岩戸の溪流を加へたる五箇瀬川上流阿蘇嶺岩の浸蝕谷にて、其義には窓の淵以上約四軒の間を稱す。三井井の町を向山街道へ進めば是

Oditi

ち壯大なる谷に入り行く。瀾星雲を蔽ひ危巖崩れんとする所づくの字曲りに崖壁の間を縫ひて下れば展開する風物人をして驚異の眼を眩らしむ。壁下飛泉迸り横水池を湛ふる所は忍穂井にして、その瀧り落つる所は眞名井の淵なり。眞名井下流の深谷は向山臺地より俯瞰するが、下流岸に沿ひて崖壁を見上ぐるかにあるべく、丹崖綠壁そそり立つ所葛藤と綠葉とに被はれ、下流は怪奇遊流に激す。眞名井より川に沿ひて上れば奇巖怪石參差し、神橋附近岩壁相逼りて急瀧は雪と散り、深潭は藍を湛ふ。瀧の瀧は橋上數百米の所翠松峯に高く、紅楓谷に低く、四境幽邃、更に川岸の小徑を攀れば窓の瀧に至る。窓の瀧は今數俵の飛瀑をなすのみなるも、もと河水の岩腹を割出し窓の間を行くに似たるものあり、近時崩壊して奇景を失ふ。然も瀧兩岸の風光、老樹を湛へて花影の潤を彩り、松蔭高語太古の聲を聞く、眞に勝境たるを失はず。此地觀賞の好期は新緑と紅葉との季節なり。

コカタ 子方

【子方】常陸國(茨城縣)の古地名。和名抄、信太郡に子方郷あり、その地今の稻敷郡君原村に當り、大字大形は郷の遺稱なるべし。蓋し子と小と訓義相通じ、ををに改め、大となせるものなるべし。一に木原村・沼里村・奥野村もその郷域なるべしといふ。

コカタ 古鹿田

岡山縣御津郡にありし村。明治三十二年本村を廢し大字七日市全部と大字二日市の一部及び大字十日市の一部を岡山市へ、大字奥田の全部及び大字二日市の一部を福濱村へ、大字豊成・青江・十日市の一部を福濱村に編入す。鹿田村は大正十年、福濱村は昭和六年各廢せられ岡山市に編入せらる。

コカタニ 五ヶ谷村

三重縣伊勢國多氣郡の中部。棚田川中流の右岸。北は棚田川を隔てて飯沼大石村・柿野町に對し、南は高尾四一五〇米の丘陵を隔てて宮川左岸の川添村に接す。南境には池ノ木尾山連嶺東西に走り北方棚田川と南方宮川との分水嶺をなし、山腹は西境を北へ走りて西北境に鳥嶺(四五五米)を起し、全體に東方へ山脚を延ばして其間に東方へ開けし小數箇の谷を作る。北境に棚田川東流し東北境にて馬蹄型に南へ迂回す。北境の中央に僅に低地開け、此低地よりは米・麥を産すれども本村の需要を先すのみ、其他兼行はれ又家畜

日、傾斜を弱みて近く、年六十九。贈正五位。

コカタニ 五ヶ谷村

奈良縣大和國添上郡の南端。北は東市村、東は田原村及び山邊郡福住村、南は丹波市町、西は櫻本町・豊解村に接し、東市村を隔てて奈良市に至る。此地は笠置地盤の山の中に位し、西部は斷崖に接す。東部には城山(五二八米)、南部には高峯山(六三二米)あり、傾斜面を流下する谷には僅に未作營まゝ。此地は和名抄、添上郡大同郷の地と思はるるも不詳。清澄はもと清澄荘と呼びし地にて菩提山寺・虚空藏寺・興隆寺の古刹あり。清澄池は高橋にありて萬葉集に見ゆ。東大寺要録には添上郡清澄莊田二十七町とあり。(正勝寺)大字菩提山にあり、菩提山寺とも云ふ。眞言宗御室派。正勝三年九條關白兼家の子兼俊法印の開創。建保年中信圓法印中興す。本尊藥師如來倚像は金銅製、天平時代の作にして國寶たり。同じく國寶たる増資阿闍梨經第七の一巻は奈良帝國博物館へ、天平十九年二月の日附ある大安寺資財帳一巻は東京帝國博物館へ出陳せらる。境内廣大にして講堂みな存し、山間の瓦刹なり。(弘仁寺)大字虚空藏にあり。古義眞言宗。一に虚空藏寺と稱す。小野篁の創建に係り、空海之が開基たりといふ。醍醐の聖寶一時ここに住す。元龜三年兵火に罹りて炎上、今の堂宇は寶永六年の再建なり。現に金剛峯寺本寺た

コカタ——コカネ

り。本尊木造明尼菩薩立像は弘仁期の作に係り、現に國寶たり。

コカツ 小勝島

徳島縣那賀郡橋浦郷にある島。橋浦に屬す。南北約一・五軒の細長き島。島内には丘陵連互し樹木繁茂す。

コガナワテ 久我繩手・久我暇

【小金町】千葉縣下總國東葛飾郡の西部。江戸川を隔てて東京市の東方にあり。岡部松戸町の東方約五軒。北は八木村、西は馬橋村、南は高木村、東は土村・柏町と隣す。馬橋村を隔てて江戸川に近く、町内全部平地にて水田多く、西部は隣村馬橋より北方流山町に續く沼田の一部をなし米麥の産多し。陸前濱街道に沿ひ、省線常磐線通り北小金驛(明治四十四年設置)を置き、また社線流山鐵道村内西部を走り大谷口驛(大正五年設置)を置く。地は中世、千葉氏の族黨の居りし處にして、城館址は大谷大谷口臺にあり。勤王の志士、竹内哲次郎は本町の出身者たり。また明治十七年、明治天皇の女化原行幸の際にはこの地に小憩あらせられたり。(小金城)大谷口臺に其址あり。弘安・水仁の頃千葉親胤の創始と傳ふ。天正十八年、徳川氏の關東を領するや、武田信吉を此に封じ三萬石を與へしも三年にして佐倉に移り、爾來長く廢城す。城址は方五〇〇米餘、封壘の形状歴然た

コカネ 小倉

【小倉】有名なる虚空僧寺なりしが、其址今見るべき無し。もと金龍山と號し、武州法華寺(東京府西多摩郡青梅町)と共に關東虚空僧の兩本山たり。普化宗は唐僧普化禪師を始祖とする禪宗の一支流にて、建長六年入宋僧覺心の傳ふところなり。覺心の後を繼げる實伏の弟子に金先あり、諸國を行脚修行せしが此地に留りて一寺を建立し、金龍山一月寺の祖となる。この派を一月寺金先派と稱し、後大いに榮えたり。而して普化宗の徒は尺八を吹きて行脚するを例とし、之を虚空僧・虚空・暮露などと稱す。虚空とは一切の欲望を捨てて修造する意なり。露宿險難を厭はず諸方を遍歴し、到處樹下を庵とし石上を席とし露を履具となして満足するより露僧と云ふ。江戸時代には土人落魂者、道放せられし浪人等此寺に來りて尺八を學び、虚空僧となりて世を白眼視しつつ諸國を行脚せる者頗る多く、のち虚空僧の墮落甚しきものあり、延寶五年幕府は法に背く道放人の止宿を禁じ、明治四年普化宗は廢止せられ本寺も從つて廢絶に歸せり。(東漸寺)淨土宗。佛法山一乘院と號し淨土宗關東十八檀林の一。文明十三年行運社經警清運の創建に係る。幕府より寺領三十五石を受け、明治二年勸願所の繪巻を賜ふ。(本土寺)平賀にあり。日蓮宗。長谷山と號し、日蓮宗廿九箇の本山中第二位を占む。文化六年勝鹿の日代陰山土佐守日

三七一

蓮に歸依して法華堂を建立せしに起る。建治三年改めて一寺を創し日朗を請す、日朗弟子日傳を遣ししに、日傳、日朗を岡山として自らは第二世となる。爾來漸次寺運復興せしむ、日朗の唱へたる不受不施論の影響本寺に及ぶ幕府の壓迫を受けて頗る衰頹、明治維新に至り更に上地・排佛毀釋等のことありて大いに悲轉せしむ、近時漸く復興し、現に末寺八十七寺を統ふるに至る。諸堂宇整備し所藏の寺寶亦多し。(竹内哲次郎)少壯氣概あり、兄康太郎と同じく、漢學を芳野金陵に修め、武術を千葉道三郎に受く。元治元年、水戸藩士田丸・藤田の同志、常野に義舉を開き、兄弟共に應援應酬する所あり。已にして康太郎幕吏に捕はる。哲次郎逃れて鹿島に據る。九月六日、麻生藩兵の來り攻むるに會し、同志數十人と大船津に防ぎて勝たず、翌日復た青沼に戦ひて利あらず、輕舟に乗じて去る。時に敵兵追跡、衆多く死傷す、身亦免れざるを知り水に投じて死す、年二十四。贈從五位。

【小金ヶ原】

千葉縣東葛飾郡・千葉・印旛の諸郡に跨れる原野。もと葛飾野といふ。名稱は葛飾野の小金驛附近の小金ヶ原の稱呼が漸次全部に及びしものなるべし。江戸時代原中多く開墾せりと雖も猶ほ上中下の三牧を置き官馬を放飼し、世に小金牧と稱す。また屬々將軍の狩場ともなれり。明治の初め次第に開墾せられ

三七一

て今は昔日の面影無し。【小金森】能登國(石川縣)の歌枕。今の鹿島郡御前村にあり。同國雜記「小金森といふ所にて、しばらく休みて、みちのくの山に花さくこかれもり此里までも種やまきけむ」

コガネ 黄金

【黄金】北海道石狩支庁濱頓別郡にありし村。明治四十年濱頓別村と合併して新に濱頓別村を置く。

【黄金山】金華山(宮城縣)の別稱。

【黄金村】山形縣羽前町東田川郡の西部。鶴岡市の南に隣り、東及び南は山形村、西は西田川郡湯田川村に各隣接す。西境に越後山脈の末端の山峰なる母背山(七五一米)・金峰山(四五九米)の山嶺南北に連り、山脚東端に瀧泉湧出。西部は土地低平にして鶴岡平野に織り、赤川の分流青龍寺川この平地を潤して水田よく拓け米作を以て知らる。西部山地の東麓に沿うて街道通じ鶴岡市にパスの便あり。金華山に因縁岩より成れども鶴岡市方面より望めば相當急峻に見え山頂景頗る佳なり。縣社金華神社には大和金華山の祭神少彦名命を祭る御岳神社を有するも其創立年月は不詳。地誌提要によれば久安六年藤原秀衡の再建せし社殿は金色を帯びしにより金華山の名ありといふ。社領百四十三石五斗餘を領し、山腹の如意輪觀音堂下には南嶺院を領する僧坊数箇所あり、其首宗にして修驗堂なり

き。山には社堂頗る多く、夏は賽客の登山する者亦多し。青龍寺の名は金華の寺の名より出でしならんも詳細傳はらず。最上分限帳には金華領一二六石とあり。附近に高坂・赤坂・河内山等の地名は楠木正儀の播磨入道の遺れ來りしに由るといふも口傳に過ぎざるべし。天正年中小笠原左金吾高坂に居住せりといふ。羽前記「金華山には藏王權現御賣向奉施入銅鉢一口檀那僧覺佛教白。正和二年癸丑二月申旬」とある訓鉢、永正元年の高坏、慶長十年の棟札等あり。村内に新山瀧泉あり、泉質硫黄泉にして加熱常用なり。【金華神社】大字青龍寺に鎮座。縣社。祭神、少彦名命・大己貴命・安閑天皇。永正年中丹波守盛宗、和州吉野金華藏王權現を移し祭りしものなりと云ふ。風土略記には應引通青龍寺、金華藏王權現領高百四十三石、銅陀を本尊とす、山平より下に如意輪觀音堂あり、其下に僧坊数箇所あり、南嶺院を上首とす、眞言宗にして修驗堂帯す、此上に六所大權現といふあり、其外一山の内社堂多しと云へり。久安六年、藤原秀衡社殿を再建せし由なり。爾來、社殿の變換はあれども、金華山藏王權現と稱し來り、舊藩主酒井家三所領所として崇敬篤かり。明治三年十一月御統社と改稱、同十年三月廿四日現社に改む。例祭、六月十五日。(坂手神社)字佐手内に鎮座。郷社。祭神、高木大神。延喜式内社。且つ尾張國内神

コガネイ 小金井

【小金井】栃木縣下都賀郡國分寺村の大字。省縣東北本線の小金井驛(明治二十年設置)を置く。【小金井町】東京府武蔵國北多摩郡の中郡。東京市の西方約八軒。東は武蔵野町・三鷹村、南は多摩村・府中町、西は國分寺村、北は小平村と隣る。武蔵野臺地の一部を占めて畑地多く、米・麥・蕎麥の産あり。省縣中央本線、町の中央を横斷し、武蔵小金井驛(大正十五年設置)を置く。又、東隣武蔵野町、武蔵境驛より西武多摩驛(是政に至る)來りて町の東南部を通り、新小金井驛(大正六年設置)を置く。町は標高の所所なり。この地は近世、多摩郡府中領に屬し、天和以前までは小金井村と稱せしが、天和三年國領牛久保代官の時より小金井村を上下の二村に分ち、後これに貫井村及び少金井新田・梶野新田・國野新田・十ヶ新田を合して小金井村を置けり。大字上小金井は徳川氏關東入國の時より幕領にして代官もしばしば

者帳所載の「從三位坂手(原)天神」に充てらる。坂手をまたサヤとも訓む。また俗に八割明神とも稱し、一般の尊格厚し。【洞春院】高坂にあり。曹洞宗。應永年中楠能勝の開基に係り、菊水を教章となす。龍靜は正儀の孫正勝の男にして、建武三年楠正成、其子正行に與へしといふ古文書を蔵す。又、正成の木像及び一族の位牌を安置す。

コガネイ 小金井

【小金井】東京府武蔵國北多摩郡の中郡。東京市の西方約八軒。東は武蔵野町・三鷹村、南は多摩村・府中町、西は國分寺村、北は小平村と隣る。武蔵野臺地の一部を占めて畑地多く、米・麥・蕎麥の産あり。省縣中央本線、町の中央を横斷し、武蔵小金井驛(大正十五年設置)を置く。又、東隣武蔵野町、武蔵境驛より西武多摩驛(是政に至る)來りて町の東南部を通り、新小金井驛(大正六年設置)を置く。町は標高の所所なり。この地は近世、多摩郡府中領に屬し、天和以前までは小金井村と稱せしが、天和三年國領牛久保代官の時より小金井村を上下の二村に分ち、後これに貫井村及び少金井新田・梶野新田・國野新田・十ヶ新田を合して小金井村を置けり。大字上小金井は徳川氏關東入國の時より幕領にして代官もしばしば

交代あり、後は大岡源右衛門の支配地となる。延寶六年、中川八郎左衛門・野村彦太夫の檢地あり、小金井の起原に就きては新編武蔵風土記に、清水寺の東邊に僅か出づる泉あり、之を小金井と稱し、之より小金井の名起れりといふ。而して此邊、温井(今は貫井)村などと井を以て村名に呼ぶもの、皆井戸少き地にして、潤水、或は多摩川上水を汲みて朝夕の餐用に給せり、偶々井ある所によりて斯く呼べりといふ。大字下小金井は徳川氏關東入國の頃より幕領にして元和元年に守屋左太夫の檢地あり、この時に未だ上下小金井の別無く一村なりしかば上小金井にてもその傳なかるべからざるもその法無きは傳來を失へるものなるべし。下小金井は正儀の頃に野村彦太夫、後に大岡源右衛門の支配地となる。大字貫井は、或は温井に作り、徳川氏關東入國の頃より幕領にして正儀の頃より延寶中まで野村彦太夫支配地の、延寶六年に同人檢地せりと。のち大岡源右衛門の支配地となり。本村は小金井の標を以て知られ、明治十六年、明治天皇、小金井堤の標を天覽あらせらる。(小金井の標)武蔵小金井驛の北一軒。玉川水道の兩側、小川水壩所より壩水壩に至る約六軒に亘りて栽植せらる。承應年間徳川氏渠を穿ちて多摩川の水を東部に引く。其後郡官川崎定孝、大和吉野山・常陸櫻川より良種を擇びて移植せしに始る。後世多く枯朽せ

コガネイ 小金井

【五箇荘】熊本縣肥後國八代郡東部の汎稱。即ち川邊川上流の隈木・久遠子・椎原・粟木・仁田尾の五箇村の地なり。西は梅道村に隣り、南は球磨郡、北は下益城郡、東は宮崎縣西臼杵郡とそれぞれ界す。東境に岡見岳・五男山・鳥帽子岳、南境には水上越・石楠越、北境には京ノ丈・熊伏岳等、また城内諸處にも上編根山・茶臼山・大金峰・小金峰等の何れも一五〇〇米内外の諸山連立して深山幽谷を形成す。此等の山麓は例して深山幽谷を成し、川邊川、東北部に發源して中央の峽谷を西南流す。從つて産業には見ざるべきもの無く、住民は足腰を穿ちて稗・粟の類を植ふ、山腹は焼畑なるにより玉蜀黍等の耕作行はれ、又は銃を携へて野獸を獵する等の外全く米・麥の産を見ず、日用品は牛骨によりて造る宮原町及び原町等より移入するの已むなき状態なれども地勢上良質の木材を産す。この地に入るには西隣梅道村よりするものと、北方紙用町よりするものと、西南隣五木村よりするものとの三途あるも、何れも檢地にて、近年に至り漸く往來するに至りしものなり。太古跡といふ年申行事あり、一に古代跡といひ、年に三回即ち舊七月十四・五の二日間(盆踊)、舊八月一日(願節)、彼岸の終日(願ほどき)に行はる。獅子は皆男子にして太鼓を頭より綱に吊り、一人乃至二人の獅子を合す、頭

コカネ——コカネ

しにより元文頃武蔵野新田の世田役川崎平右衛門幕府の許可を得て新に移植す。此後の補植に成るもの多きも、尙當時の原野多敷に存す。樹種殆ど白山樺にて、その中大和の吉野山より移植せしもの大半を占め、他は常陸の櫻川より移植せしものなり。花の暗紅色を帯びたるものを櫻川よりの分とす。堤橋附近にあるは多く後の補植に係り、從つて幹の大なるもの少く、闊野橋・新小金井橋邊に大樹多し。殊に日の出橋・八日の櫻・三吉野樺は樹形壯大、花容亦優る。日の出橋は大本にして日通幹圍二米八に達し、純白なる花叢に濃紅の嫩葉を冠す。小金井橋は橋並木の略に中央に位し、橋の北詰附近に巨樹多く、樹下に川崎平右衛門植樹の碑あり。大正十二年の調査による樹樹の數、南岸に七百六十一本、北岸に七百十本、合計千四百七十一本を算す。花期は四月廿日前後にて、來遊する者階級として概えず。木葉は花美しく、遊に富士、秩父の連山を眺め、堤の中央部なる小金井橋附近殊に住園なり。(小金井小次郎)近世の俠客。本姓關。家は代々名主にして、九代目關右衛門の次男、十四歳の時博奕打を志願して勘當せられ、以後府中の蘆屋の萬吉の弟分となり、天保十一年三月廿五日の武州二聖明神前の大喧嘩にて賣出せしが手入となりしため、土地を賣り諸方に流れて俠名を轟ばる。間もなく召捕りとなり佃寄場に服役中、弘化

コカネ——コカネ

【五箇荘】熊本縣肥後國八代郡東部の汎稱。即ち川邊川上流の隈木・久遠子・椎原・粟木・仁田尾の五箇村の地なり。西は梅道村に隣り、南は球磨郡、北は下益城郡、東は宮崎縣西臼杵郡とそれぞれ界す。東境に岡見岳・五男山・鳥帽子岳、南境には水上越・石楠越、北境には京ノ丈・熊伏岳等、また城内諸處にも上編根山・茶臼山・大金峰・小金峰等の何れも一五〇〇米内外の諸山連立して深山幽谷を形成す。此等の山麓は例して深山幽谷を成し、川邊川、東北部に發源して中央の峽谷を西南流す。從つて産業には見ざるべきもの無く、住民は足腰を穿ちて稗・粟の類を植ふ、山腹は焼畑なるにより玉蜀黍等の耕作行はれ、又は銃を携へて野獸を獵する等の外全く米・麥の産を見ず、日用品は牛骨によりて造る宮原町及び原町等より移入するの已むなき状態なれども地勢上良質の木材を産す。この地に入るには西隣梅道村よりするものと、北方紙用町よりするものと、西南隣五木村よりするものとの三途あるも、何れも檢地にて、近年に至り漸く往來するに至りしものなり。太古跡といふ年申行事あり、一に古代跡といひ、年に三回即ち舊七月十四・五の二日間(盆踊)、舊八月一日(願節)、彼岸の終日(願ほどき)に行はる。獅子は皆男子にして太鼓を頭より綱に吊り、一人乃至二人の獅子を合す、頭

コカネ——コカネ

【五箇荘】熊本縣肥後國八代郡東部の汎稱。即ち川邊川上流の隈木・久遠子・椎原・粟木・仁田尾の五箇村の地なり。西は梅道村に隣り、南は球磨郡、北は下益城郡、東は宮崎縣西臼杵郡とそれぞれ界す。東境に岡見岳・五男山・鳥帽子岳、南境には水上越・石楠越、北境には京ノ丈・熊伏岳等、また城内諸處にも上編根山・茶臼山・大金峰・小金峰等の何れも一五〇〇米内外の諸山連立して深山幽谷を形成す。此等の山麓は例して深山幽谷を成し、川邊川、東北部に發源して中央の峽谷を西南流す。從つて産業には見ざるべきもの無く、住民は足腰を穿ちて稗・粟の類を植ふ、山腹は焼畑なるにより玉蜀黍等の耕作行はれ、又は銃を携へて野獸を獵する等の外全く米・麥の産を見ず、日用品は牛骨によりて造る宮原町及び原町等より移入するの已むなき状態なれども地勢上良質の木材を産す。この地に入るには西隣梅道村よりするものと、北方紙用町よりするものと、西南隣五木村よりするものとの三途あるも、何れも檢地にて、近年に至り漸く往來するに至りしものなり。太古跡といふ年申行事あり、一に古代跡といひ、年に三回即ち舊七月十四・五の二日間(盆踊)、舊八月一日(願節)、彼岸の終日(願ほどき)に行はる。獅子は皆男子にして太鼓を頭より綱に吊り、一人乃至二人の獅子を合す、頭

コカネ——コカネ

【五箇荘】熊本縣肥後國八代郡東部の汎稱。即ち川邊川上流の隈木・久遠子・椎原・粟木・仁田尾の五箇村の地なり。西は梅道村に隣り、南は球磨郡、北は下益城郡、東は宮崎縣西臼杵郡とそれぞれ界す。東境に岡見岳・五男山・鳥帽子岳、南境には水上越・石楠越、北境には京ノ丈・熊伏岳等、また城内諸處にも上編根山・茶臼山・大金峰・小金峰等の何れも一五〇〇米内外の諸山連立して深山幽谷を形成す。此等の山麓は例して深山幽谷を成し、川邊川、東北部に發源して中央の峽谷を西南流す。從つて産業には見ざるべきもの無く、住民は足腰を穿ちて稗・粟の類を植ふ、山腹は焼畑なるにより玉蜀黍等の耕作行はれ、又は銃を携へて野獸を獵する等の外全く米・麥の産を見ず、日用品は牛骨によりて造る宮原町及び原町等より移入するの已むなき状態なれども地勢上良質の木材を産す。この地に入るには西隣梅道村よりするものと、北方紙用町よりするものと、西南隣五木村よりするものとの三途あるも、何れも檢地にて、近年に至り漸く往來するに至りしものなり。太古跡といふ年申行事あり、一に古代跡といひ、年に三回即ち舊七月十四・五の二日間(盆踊)、舊八月一日(願節)、彼岸の終日(願ほどき)に行はる。獅子は皆男子にして太鼓を頭より綱に吊り、一人乃至二人の獅子を合す、頭

コカネ——コカネ

【五箇荘】熊本縣肥後國八代郡東部の汎稱。即ち川邊川上流の隈木・久遠子・椎原・粟木・仁田尾の五箇村の地なり。西は梅道村に隣り、南は球磨郡、北は下益城郡、東は宮崎縣西臼杵郡とそれぞれ界す。東境に岡見岳・五男山・鳥帽子岳、南境には水上越・石楠越、北境には京ノ丈・熊伏岳等、また城内諸處にも上編根山・茶臼山・大金峰・小金峰等の何れも一五〇〇米内外の諸山連立して深山幽谷を形成す。此等の山麓は例して深山幽谷を成し、川邊川、東北部に發源して中央の峽谷を西南流す。從つて産業には見ざるべきもの無く、住民は足腰を穿ちて稗・粟の類を植ふ、山腹は焼畑なるにより玉蜀黍等の耕作行はれ、又は銃を携へて野獸を獵する等の外全く米・麥の産を見ず、日用品は牛骨によりて造る宮原町及び原町等より移入するの已むなき状態なれども地勢上良質の木材を産す。この地に入るには西隣梅道村よりするものと、北方紙用町よりするものと、西南隣五木村よりするものとの三途あるも、何れも檢地にて、近年に至り漸く往來するに至りしものなり。太古跡といふ年申行事あり、一に古代跡といひ、年に三回即ち舊七月十四・五の二日間(盆踊)、舊八月一日(願節)、彼岸の終日(願ほどき)に行はる。獅子は皆男子にして太鼓を頭より綱に吊り、一人乃至二人の獅子を合す、頭

コカネ——コカネ

【五箇荘】熊本縣肥後國八代郡東部の汎稱。即ち川邊川上流の隈木・久遠子・椎原・粟木・仁田尾の五箇村の地なり。西は梅道村に隣り、南は球磨郡、北は下益城郡、東は宮崎縣西臼杵郡とそれぞれ界す。東境に岡見岳・五男山・鳥帽子岳、南境には水上越・石楠越、北境には京ノ丈・熊伏岳等、また城内諸處にも上編根山・茶臼山・大金峰・小金峰等の何れも一五〇〇米内外の諸山連立して深山幽谷を形成す。此等の山麓は例して深山幽谷を成し、川邊川、東北部に發源して中央の峽谷を西南流す。從つて産業には見ざるべきもの無く、住民は足腰を穿ちて稗・粟の類を植ふ、山腹は焼畑なるにより玉蜀黍等の耕作行はれ、又は銃を携へて野獸を獵する等の外全く米・麥の産を見ず、日用品は牛骨によりて造る宮原町及び原町等より移入するの已むなき状態なれども地勢上良質の木材を産す。この地に入るには西隣梅道村よりするものと、北方紙用町よりするものと、西南隣五木村よりするものとの三途あるも、何れも檢地にて、近年に至り漸く往來するに至りしものなり。太古跡といふ年申行事あり、一に古代跡といひ、年に三回即ち舊七月十四・五の二日間(盆踊)、舊八月一日(願節)、彼岸の終日(願ほどき)に行はる。獅子は皆男子にして太鼓を頭より綱に吊り、一人乃至二人の獅子を合す、頭

コカヤ

には鶴の羽にて飾れる笠を被り、白衣に袴といふ清浄なる扮装なり。この地は飛騨の白川・阿波の祖谷山等と共に附近と異りたる風俗・習慣を持つ村落として知らる。即ち、壽永四年、平家没落の際、平清盛等逃れ来り、此地に住み、子孫分れて五部落となりきといふ。また一に久徳子・権原の二村は菅家の裔にして、権原と呼べり。緒方は、平清盛、緒方實國の家に據り、實國の一女を娶りて清國を生み、實國の死後、清國陸奥に至らんとして途に山賊に要せられ、終に此地に留り子孫繁殖せしものとす。權原は菅家の裔にて建長二年筑前太宰府より此山に遷入りしものとす。數百年全く世と交を絶ちたる深山幽谷なれば、徳川氏の初世まで人の訪ふ者稀なりきと。されば風俗習慣全く他と異れり。往時は田畑無く山腹の傾斜地に粟・稗を植ふ之を常食とせしも今は著しく開け、昔日の風習また見るを得ず。明治六年以來殊に道路開け、翌年縣吏の巡視となり、學校を設け文明の餘光漸く及ぶに至れり。

コカヤ

五鹿屋村 富山縣(越中)東礪波郡の中部。出町の南隣にて、東に中野村・福田村、南は山野村、西は南野尻村・東野尻村に接す。面積四・四四平方軒の小村なるも富山平野の西南部に位置し、土地平坦肥沃にして村内殆ど田地を成し、米の産を主とし麥・蕎麦も出す。

コカヤ

出町・井波町間の縣道南北に通じてバス
の往來あり、また省線中越線(伏木・城端間)の高儀驛(東野尻村内)・出町驛にも近く交通便利なり。此地、或は和名抄、磯波郡關知郷に屬せしものか。中世は庄下庄の内とす。源平時代平氏の一族本郷五箇山中に遷入せしもの來り住せしもの如く、降りて戰國時代上杉氏越中攻入の際諸國より移住し來りしもの如し。村名は大字五郎丸・鹿屋の各より取れるもの。いま五郎丸・花鳥・鹿島・荻高屋の四大字より成り、五郎丸に役場を置く。
コカヤマ 五箇山 ↓南郷村(福岡縣筑前郡)
コカラシ 木枯森 靜岡縣安倍郡服部村養科川の南にある丘上八幡宮の森。和歌の場所。枕草紙(春はからしの森)新古今(一四)「さえわびぬうつるふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露」定家「續拾遺(六)秋の色をばらふと見づる風の杜の相に雪もたまらず 知家」
コカヤマイ 小輕米村 岩手縣陸奥國九戸郡の北部。輕米町の南隣にて東は大野村、南は山形村、西は伊保内・江刺家兩村に隣接し、面積一・二七・四平方軒あり。北上山地北部の中央に位置し、南境にある鶴岳(五六七米)を最高處とし、村内は高度三〇〇米内外の高原をなし、新井田川の上支雪谷川村内の諸水を併せて北隣輕米町に出で、その川筋に沿ひて田・畑拓くるも、他に多く山林・原野をなす。米・麥・稗・大豆等の農産、木材・薪炭等の林産を出し、また馬を産するも、概して生活資糧格かならず。樺太・北海道方面に出稼ぎする者少からず。二戸郡福岡町より東岸久慈町を繋ぐ九戸街道東北部を貫き、バスを通ずるも交通は往便利ならず。古くは史實の微すべきものなし。地に小輕米館址あり、中世九戸氏の族小輕米氏の居りし處。(熱田玉川渡山)大字玉川にある滿傳渡山。昭和九年度産額九九二石(二、三七七圓)。

コカワ

粉河 京都市の南北に通ずる大通りの一。西側院通と油小路通との間に位置す。上は寺之内通より下は錦小路通に至る。堀川の一分支この通の北部を流る。
【粉河町】和歌山縣紀伊郡那賀郡の北部東端。紀ノ川の北岸にして葛城山脈の南斜面を占む。東南は紀ノ川北岸の手町に接し、東は用原村、西は長田村と界す。東南は紀ノ川を隔てて龍門村、北は葛城山脈を境に大阪府泉南郡西葛城村・大土村に接す。北境には葛城山脈の連峰七八〇〇米の高きに連り山地起伏しつづ南方に傾斜し山麓緩く紀ノ川の谷に下り、南部は紀ノ川の沖積原の一部を占む。山地多く木炭を出し苦材・薪を産す。南部低地に耕種よく拓げ農産を出す。粉河蜜柑・高野豆腐の産あり。洪路街道・大和街道南部低地を東西に並行して走り、その中間を省線和歌山線東方笠田町・名

コカワ

手町方面より西方和歌山市へ通じ粉河郡(明治三十三年設置)あり。縣立粉河中學校・同粉河高等女學校あり。町は粉河・藤井・高垣・東毛・中山・中津川の大字より成り、粉河に役場を置く。明治二十七年町制施行。古くは藤垣と云ひ、いま藤垣行宮遺址あり、續日本紀に「天平神護元年冬十月甲戌、遷到紀伊國伊都郡、乙亥到那賀郡藤垣行宮、通夜雨霖、丙子天晴、遷到三津嶋」とあり、即ち稱徳天皇御駐蹕の遺址なりといふ。延喜式に紀伊國藤垣船九隻とあり、名所同會に藤垣船とは古く紀ノ川の通船なるべしと見ゆ。地は寶龜元年大伴孔子古の創建に係る名刹粉河寺の門前町として發達せしもの。花山法皇・白河法皇熊野御幸の際粉河寺に御參詣あらせられしことあり、近世迄、風聲を駐ませ給ひしといふ御所の芝と呼ぶ處ありしが、今は田畑となりて全く形跡を失ふ。御所の芝の北は祇王の舞田なりと、遺蹟として何等の微すべきものなけれど諸曲能祇王より推して、此地は祇王が父の敵を殺せんがために歌舞せし處なりといひ傳ふ、附近に宇の内・立間の數等の地名も残り。大字中山に大伴孔子古一族の墓と傳ふるものあり、小石塔築生基を留む。大字猪垣には木村長門守誕生井と稱するものあり、傳へ云ふ、昔、長門守の母當地にて俄に産氣付き、豪農鈴木家に立寄りて出産せしが、其時此水を産湯とせりと。(粉河寺)本

コカワ

稱、地香寺。西國三十三所第三香札所なり。寺傳に寶龜元年大伴孔子古の草創といふ。河内の土家佐大夫靈骨に依り、粉を混ぜたる如き白水の河を廻りて堂に至り、娘の病を祈りて癒ありきと傳ふ。後三條天皇御宇勅額を賜ふ。中古貴顯の信仰厚く寺勢隆昌を極む。中世戦亂相續ぎてより住僧また兵杖を執りて之に對せしが、粉河の大衆は高野・根來に次ぎて勢力を有し、寛正四年畠山政長の率ゐし軍勢を却けたりといふ。斯くて天正年間には七堂伽藍五百五十箇坊、東西一里、南北一里餘の廣漠たる境域を有し、寺領亦四萬餘石に及びしが、天正十三年豊臣秀吉の兵火に罹りて諸堂烏有に歸す。のち天英、藩主徳川頼宣の助力を得て之を再興し寺領七百餘石を受く。仍りて天英を中興の宗とす。其後災禍に遭ふ事再三なりしが、正徳・享保の頃、御油坊寂隱現堂字を建立し以て輪奐の美を蘇ふ。寺域風猛山麓を占めて眺望に富む登勝の地、諸堂宇規模宏壯にして輪奐の美を極む。寺寶中紙本着色粉河寺懸起一卷は國寶に指定せらる。御詠歌「父母の恵みも深き粉河寺佛のちかひ頼もしきかな」

コガワ

小川 岩手縣陸奥國下閉伊郡の西北部。東北は安家村、東は岩泉町に隣り、西南は大川村、西北は九戸郡江川村と界す。東北境に黒森山(一〇七米)・穴日ヶ岳(一六八米)、西北境に三里子岳(一

一八二米)、西南境に上明神山(一一八米)・権現山(九四三米)・熨山(一〇六九米)・高崎山(八八四米)等聳立して山岳重疊し、これらの山中に發する諸水合して小川となり中部を東南に流るるも、みな山地を深く刻みて峡谷を形成し平地に乏し。産物は木炭・薪・稗等を出し牛の飼養も盛なり。縣道小本街道は小本川の溪谷に沿うて通じ小本村にバスの便あり。本村はいま門村・穴澤村・雲綿村の三大字ありて役場を門村に置く。大字雲綿は往時北畠顯家の子顯房の地に來りて住し、雲綿御所といひ雲綿氏を稱して二十六世の久しきに及び、維新の後また北畠氏に復せりといふ。
【小川村】靜岡縣駿河國志太郡の東南部。駿河灣に臨み、焼津町の南隣にあり、西は豊田村・大宮村、南は和田村に接す。大井川下流域の平地の一部を占め、全村平地にて水田多し米の産あり、また茶を特産し、水産も行はる。海岸は砂浜をなす。北隣焼津町に省線東海道本線焼津驛を置き、當村より村道を通ず。此地は和田村及び大宮村と共に和名抄、益頭郡小河郷の地にして村名はその遺稱とす。延喜式に見ゆる小川驛馬十疋とあるも此地なるべく、西は遠江初倉より東は横田驛に通じ、また日本坂の險を厭ふものは海路よりせしもありしが如し。中世以降この驛廢せられて藤枝これに代る。蓋し大井川渡頭關係ならん。村の西北部に法

本長者の邸あり、法水は長谷川正宣にして彼の今川氏親母子をかまひし人なり。和田濱は本村の駿河灣に臨める所に於て、東北に富嶽を仰ぎ、灣を隔てて伊豆西岸と對す。空氣清新、氣候溫和、避暑避暑共に適す。(海藏寺)時宗。寶城山と號す。本尊延命地蔵菩薩。岡山遊行二世貞敷上人。元和年中紀大納言頼宣堂字を營み、安永九年中納言重倫之を修營す。もと天台宗安養寺と稱す。嘉永三年眞教上人諸國巡錫の碑、當寺の住持觀海律師、上人の徳風を慕ひ本宗に改む。本堂は海中出現の靈佛、寺號はこの地蔵尊の出現に因む。(信香院)大字小川にあり。曹洞宗。長谷山と號す。岡山は通山芳澤和尚、開基を長谷川紀伊守正長(元龜三年歿す)とす。
【小川村】和歌山縣紀伊國東牟婁郡の南部。古座川の支流小川上流の山村にて、東は色川村・高池町、南は明神村、西は七川、北は小口村に隣接す。南北に長く約一六軒、東西は狭く六軒内外、面積七一・三六平方軒あるも人口は一千八に満たず、一方軒の密度は僅に一四人なり。中部を南下する小川と、中央部の西より東する支流の谷に沿ひて葉落點在し、林産を主とする外に多少の米・蕎麦の産あり。交通は往便利ならず。村に長洞尾・大桑・西赤木・田川・小森川・宇崎井・猿川・山手の大字より成り、長洞尾に役場を置く。

【小川村】高知縣土佐國吾川郡の北部。東は上八川村、南は下八川村・明治村、西は富岡村と界し、北は土佐郡の本川村に隣る。高峻なる四國山脈に屬する山地の一部を占め、西北境には一二七二米の山、南境に五在所山の北麓を東西に、東に小式ヶ嶽(九五〇米)あり、何れも山勢急にして谷深く、僅に東南境を仁淀川の支流流れて峡谷を作るのみ。山地は潤葉樹林多く、三椏・楮も繁茂し、伐採運搬用のため林用軌道設けられ、小式ヶ嶽の西麓を走る。道路は地形を利用して巧に設けられ、五在所山の北麓を東西に通ずる街道及び南高岩村附近にて之に丁字形に通ずる街道等あり、一は東北方本山町、一は東南方伊野町、一は西南方越知町(高岡郡)と各連絡す。高岩には郵便局の設けあり、交通の中心にありて主色をなす。往古の事は以て微すべきもの無きも、中世盛屋義治伊豫より此地に入りて暫く身を隠し、後に土佐郡境村に去れりといふ傳説あり。村社新田神社は新田氏の一族を祀る。大字樺ノ木山の狹父古生層下部輝岩中に大理石を産し土佐大理石と呼ばる。極めて緻密にして層面に散見せし斑紋を有し良質なるも搬出に不便なるため多く採石を見ず。(八社川内神社)大字西津賀才に鎮座。尊神、大神、大物主神。創立年代詳かならざるも、八社川内大明神と稱し、近郷の産土神として村民の信仰篤し。例祭、七月廿八日・十一月

コカワ

コカン——コキヌ

十五日。(清川神社)大字松ノ木山に鎮座。...

コカン 古館面

朝鮮平安北道義州郡の南部。東は古亭洞、月華洞、南は...

コカン 後閑

群馬縣上野國碓氷郡の中部。安中町の西隣にあり。...

コクガ 國術

【國術】 兵軍師節部にありし村。明治四十五年本村は市町村の一部と合し...

コキ 小木

愛知縣西春日井郡にありし村。明治三十九年尾張・多氣・五條の三村と共に廢せられ北里村を置く。

コギ 近義

和泉國(大阪府)の古地名。和名抄、日根郡に近義郷あり、東鑑、...

コクキ 小久喜

埼玉縣南埼玉郡にありし村。明治二十八年本村は同泉・千秋野・實ヶ谷・彦兵衛・太田新井・上野田・下野田・瓜田ヶ谷の八箇村と共に合併され日勝村を置く。

コクキョー 黒橋面

朝鮮黄海道黃州郡の北部。平壤府の南約二六里。東南は天柱面に、西南は清水面・九聖面に...

コクコ 谷口

朝鮮總督府嶺南道統本線の一驛。昭和二年設置。朝鮮成鏡南道利原郡東河にあり。

コクサン 谷山

朝鮮黄海道の東北端。道管管十七郡中最大の郡なり。西は達安、南は新溪の兩郡に接し、西北は平安南道成川...

コキ 五畿

五畿内と、東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道とをいふ。明治維新に至るまでの國內の大區劃なりしが明治元年を根拠改めて北海道となすに及び五畿八道となる。宋史・日本傳「五畿・七道・三島」

コキシチド 五畿七道

五畿内と、東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道とをいふ。明治維新に至るまでの國內の大區劃なりしが明治元年を根拠改めて北海道となすに及び五畿八道となる。宋史・日本傳「五畿・七道・三島」

コキ 五畿

五畿内と、東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道とをいふ。明治維新に至るまでの國內の大區劃なりしが明治元年を根拠改めて北海道となすに及び五畿八道となる。宋史・日本傳「五畿・七道・三島」

コキ 御器所

愛知縣愛知郡にありし村。明治三十九年廣路村と共に廢せられその區域を以て新に御器所村を置きし。御器所村は大正十年名古屋市中に編入せらる。東鑑・文治六年四月の條に尾張國松枝保・御器所・長包庄とあり、また同書・建久三年十二月の條に尾張國高島庄・御器所松枝保とあるも同じく此地なり。

コキタヤマ 小北山

もと京都府葛野郡衣笠村の大字にして大北山の南を稱せし。今は京都市の上京區に入りてその名稱を失ふ。その地紙屋川の西崖に當り、官幣大社平野神社、二條天皇皇降寺あり。

コキナイ 五畿内

畿内の五箇國、即ち山城・大和・河内・和泉・攝津をいふ。初は大和・河内・攝津・山背の順位にして四畿内なりしが奈良時代に河内の三郡を割きて和泉を置きここに五箇國となる。延暦十三年平安京の成るに及びて山背を改めて山城とし且つこれを五畿の首位に置く。蓋し王城所在の河内を以てなり。誠曲道明寺「五畿内河内の國土師寺は云々」

コキヌ 小絹村

茨城縣下總國北相馬郡の西北部。鬼怒川下流の東岸にて小貝川との間に狹まる。南は守谷町・大井澤村、西は鬼怒川を隔てて内守谷村、北は坂手村、東は小貝川を隔てて筑波郡長持村に至る。關東平野内の一部を占め村に分ち、谷山面に郡廳を置く。谷山邑内の東北約二四軒、東村面に高連山(八六六米)あり、風景雄大にして小金剛を以て稱せられ、頂上に近く新羅景徳王の頃の創建に係る高連寺あり、境内に觀音鳥と稱する珍禽多く棲息し、遊覧客絶えず。寛文面文岩里にて紫霞潭の奇勝あり。北境段段山(一四八六米)は郡第一の高峰にして頂上に廣帯なる平坦地あり、李太祖潛龍の時驢馬術を練習せし處と傳へ、驢馬塚と稱し、山上には祭壇、山下には聖祖城の石城ありて何れも著る。本郡の地は高句麗朝に十谷城(谷城又は古谷城とも稱せり)たりしが、新羅景徳王の時鎮守と改め、のち永豐(平山)の領縣となし縣廳を以て治せしむ。高麗朝に至り谷州と改め、成宗の時防禦使を置き、顯宗さらに知州事を置く。李朝に至り太祖二年神德皇后の生誕たるを以て象山と改め陸して府を置く。太宗二年再び州知事に復し、のち郡とせしが、顯宗十年には再び府に陞し、のち郡と稱し今日に及ぶ。【谷山面】 朝鮮黄海道谷山郡の南部。東は雲中面に、南は桃花面に、西は西村面に、北は清溪面に夫々隣接す。西北方に聳ゆる大角山(二七七七米)ありて、其山脚面内を東南方に走り、概ね百米前後の高原状を成し、殊に西北部は高し。南江の小支流東境を北流し灌溉に便なるも、産業見るべきものなく、僅に黍・粟・大豆・小豆等の農産あるのみ。然し郡の主

コキヨ——コクサ

内全部平地にて、殆ど畑地をなす。水田耕作・陸稻・黍・豆・蔬菜・煙草の栽培をなし多角的經營なり。常陸鐵道(取手・下館間)村の中央を北走し、小絹驛(大正二年設置)を置く。大字信戸は中世桓武平氏相馬氏の族來り住して信戸氏を稱せし地とす。また天正年中城ありしこと常陸軍記に見ゆ。關東古戦録に天正十八年信戸外四十七ヶ所、何れも徳川氏に攻略せられたる由載す。いま新館・寺畑・細代・信戸・平沼・杉下の六大字より成り新館に役場を置く。村名の起原は詳かならざるも本村の北東を流る小貝川、西南を流る鬼怒川(相川)より起るものならんか。

コキョー 古鏡面

朝鮮慶尙北道水川郡の東部。北は臨津面に、西は水川面に、南西は北安面に夫々隣接し、東南は慶州郡に接す。西部の一部に低地を見る外は概ね三―四百米の丘陵地を成す。洛東江の上源琴湖江、面の東南部に發源して西流し西部低地を灌溉す。主生業は農にして米・黍・豆類等を主産し、殊に豆類の産多し。三等道路面の中部を東西に走りてバスの便あり。

コク 黒島

關東州中部東岸に近き小島。東西約一・五軒、南北一軒餘、中央部は高さ五〇米餘に達し、平地少く海岸は多く海崖をなす。黒島子の小島落あり。普蘭店民政支署管下の臥龍屯會に屬す。

コクサ—コクシ

色にして郡廳及び郵便局ありて、また二等道路東部を南北に貫き、三等道路は、これより分岐して西南に走り交通の要衝を占む。

コクサン 黒山

【黒山諸島】朝鮮全羅南道務安郡にある島嶼群。海南角の西方約六〇哩、即ち朝鮮南西端附近の諸島嶼の西方三〇哩内外に當り、南北約四六哩間に大黒山諸島・紅島(紅衣島一名梅加島)・三吉島(水路群島)・小中關群島(滿載島)・小黒山島(可居島一名黒山島)の五群島散在す、之を黒山諸島と總稱す。此諸島中小中關群島は珍島郡島嶼に其他は牛耳島及其東方、南方附近の諸島嶼と共に務安郡黒山面に屬し、牛耳島附近の島嶼を牛耳群島と總稱す。黒山諸島は概ね岩質にして地土之を蔽ふも耕稼の利少く大黒山島の南半、紅島及び小黒山島の外總て雜草の叢生するのみ、住民は漁業に従事し淳朴の風あり。諸島の海岸は多少の灣曲出入して小形船舶の碇地あれども、大形船舶は辛うじて大黒山島に泊し得るのみ。諸島各島の沿岸は概して陡界なれど、往々孤島隱微の隅在せるものあるを以て鶯天等に際し諸島に接近せんば強烈なる潮流を考慮し適當の警戒をなすを要す。漲潮流は一般に南方乃至東方より來り落潮流は之に反す。毎勿島・小中關群島の間は潮流の速度約二・三節なるを測定せし、諸島間の快水道若しくは岬角附近にあり

ては更に迅疾なり。大黒山諸島の東方沖合及び勿島の間方に於て諸島及び朝鮮半島間に電信の連絡なく郵便は普通電信の集配をなすのみ。物産の主なるものは乾魚・乾鮑・石花菜・和布・海苔・海蘆及び薪料とす、然れども海産物の收穫は日本人若くは濟州島漁夫の爲に其の大部を占めらる。淡水は諸島を通じ量少く水質亦純良なるもの少し。野菜類は僅に住民自家の用を稱するに過ぎず。夏季漁期にはトローヤ漁船・潜水漁船など大黒山島に集集し、嶺里港内に其の供給場を開くを以て此期間には雑用水・牛肉・魚類・野菜の少量を得る便宜あり、夏季赤痢の流行を見る外風土病あるを聞かず。

【黒山島】朝鮮全羅南道務安郡にあり。黒山諸島の一にして黒山面に屬す。小中關群島(滿載島)の西南西方約三四哩に位置し、朝鮮半島の最南西端に位し、北西一南東の長さ約六哩、幅約一・八哩の一高島にして、附近に數多の小岩嶼散在す。島頂は尖鋭ならず山勢稍も臺形をなし、島の四周は高懸崖にして島岸に崖溝入り少し、島の中腹以上は總て樹木に蔽はるるも、殊に北半部に於て樹木密生し到る處に細水流出す。島内に可居島里等の三村ありて實地其他の村を産す。なほ本島に黒山島燈臺(大正十年設置)あり、燈質速四白光、光達距離二三・五哩。五十秒を隔てて五秒吹鳴す警笛あり。

【小串村】岡山縣備前國兒島郡の東北隅。兒島半島の東北端に位し、西は甲浦村に、南は津立村に界し、北は兒島灣、日口の最狭部を隔てて上道郡の九輪・津田二村に、東は吉井川河口、水門灣を隔てにして、米・大豆・棉花・馬鈴薯、麻等の産多し、生牛も多く、副業として養蠶盛に行はれ、他に紙・扇子・陶磁器等を産す。鐵道全線は湖本線裡里驛より分岐して南走し、城内の東境を縱走して谷城(昭和八年設置)・庭谷(鳴鶴(共に昭和十一年設置)三驛を経て南海岸の羅水港に達する外、谷城及び西北部の玉果面を中心として道路網發達し何れもバスを通ずるを以て交通便利なり。行政上、谷城・古津・梧谷・玉果・石谷等の十一面に分ち、郡廳を谷城面に置く。本郡の地は百濟時代の欲方郡にして、新羅時代に谷城郡と改められ、大正三年郡廢合の際、もとの玉果郡の五箇面を合し、郡の面積を倍加するに至り。

【小串町】山口縣長門國豊浦郡の西部濱海の町。川棚村の北、宇賀村の南に位し、東・北・南の三面は山を以て圍まれ、西は豊浦に臨み、川棚村の厚島と相對して小串灣を形成す。交通は海路のほか、山陰本線當町を通り、現に小串驛(大正三年設置)の設けあり。大正年中、山陰本線の未だ全通せざりし以前には、下關・小串間先づ建設せられ、この間を小串線と呼稱せしことありき。驛附近一帶は地方的の小都市を形成す。産業は、當町の地域は丘陵多し、殊に砂礫土多き結果、肥沃なる耕地に乏しく、米・麥・蕎麥等を産出すれども、もつて町民を養ふに足らず。従つて農家は全町戸数の三分の一に過ぎず。これに反して漁業者はその數五百餘戸の多きに達し、水産物及び水産加

工品の産に富み、これ等は殆んど小串町經濟の生命たる地位を占む。尙ほ此の外に酒・醬油の醸造も行はれ、殊に酒造は頗る盛なり。當町は徳川幕府時代には長府毛利藩の所領に屬し、明治四年、廢藩の後、同六年大區・小區制の施行せらるるや、川棚村の一部と合して第十七大區第十小區となり、その後大小區制の廢止と共に、當町は川棚村全部と合して一行政區となり、小串川棚村戸長役場の下に管理せられ、その後なほ川棚村との聯合ありしも、明治二十二年四月一日、町村制實施の際、當町の地域は獨立の小串町と改められ、大正十四年更に小串町とされり。(大吼谷嶺)指定天然記念物。本洞は小串町の西北に當り、支界邊に突出せる切石と呼ぶ斷崖中央部にあり。大吼谷に西面せる岩窟にして、ゆびながかうもりを饒産す。洞内に小舟を造りて艇を一撃すれば無數の蝙蝠飛翔して壯麗なり。(小串町えびめあやめ自生南限地帯)指定天然記念物。本州の西端なる支界邊に臨める海岸の山地にあり。えびめあやめ自生南限地帯中、同植物の朝鮮との分布上の關係を表はせる點、學術上有益なり。

【小串町】香川縣大川郡にある町。鴨庄村に屬す。郡の西北に突出する半島を大串半島と云ひ、虎ヶ鼻・馬ヶ鼻・大串の鼻・小串崎の諸突出あり。小串崎はその最西端の突出地にて、志度灣(志度浦)の東角をなし、大串の鼻と共に鴨庄川口のキヤス式灣入を抱く、崎は一帶の山地(一〇五米)をなす。此地は阿波國境沿界の突岬より起り、吉野川溪谷に達し、讃岐山脈を横斷、大川郡當田より更に北に延びて大串半島に達する南北の走向構造線に屬す。半島を構成する小串崎などの突出はこの走向の數條並走する階層に依りて生ぜしものといふ。花崗岩質より成り森林繁茂し、先端は斷崖水深く、志度灣を隔てて五洲山の奇峰と相對し、幽邃なり。一二の民屋あり、所々開墾して畑作に利用す。地形狭小なる岬角なれど、早く住民の居住地となりしもの如く、古墳時代の遺跡を發見す。近海は漁場をなし、馬ヶ鼻附近より直島沖合に互り、吾智湖漁場をなす。鴨部浦には白方部落あり、漁村として發達す。

【谷城郡】朝鮮全羅南道谷城郡の北部。鑿津江の右岸に沿ひ、東は古津面に、南は梧谷面・三岐面に、西は掌面・立面に夫々隣接し、北は全羅北道南原郡に境す。西境に七三五米の峰ありて、その山脚東に緩斜し、東部一帶は低平にして鑿津江による灌溉の便を得て耕地よく拓げ米・麥・豆類等を産す。東面に郡の主邑にて郡廳及び郵便局等あり。二等道路及び三等道路通じ、交通の要衝たると共に地方物資の集散地を成す。

【コクセー】國姓庄(註) 臺灣省中州龍高郡一街一庄の中の一。舊地を除きたる本郡行政區域の北端に位し、大肚溪の上流たる烏溪の二分流、北港・南港兩溪の合流地點を中心とする一帶の山地にて、東北は八輪驛等に依りて蕃界に達し、東南には生蕃界・鹿角山・崑斗山等の山嶽起伏連綿し埔里街との境界をなす。西は火炎山(七三九米)・樟樹山を以て大屯郡霧峰庄及び南投郡草屯庄、北は大橋屏山を以て大屯郡太平庄と夫々境を接す。四圍の山岳丘陵重疊し管内を殆んど餘す所なからしめ、その間を北東蕃地より北港溪・南東埔里街より南港溪(その上流は即ち風光の閑え高き眉溪なり)夫々蜿蜒曲折して流れ來り、庄のほぼ中心點國姓に至り合流して烏溪となり、西南流して南投郡草屯庄に入る。管内面積二三一方軒に達する廣大なる區域を領するも、地勢上かかる状態にある爲め、部落及び農耕地は僅に河川の流域に點在するのみにて、人口稀薄約一萬人を算するに過ぎず、従つて農産物亦少く、米・バナナ・甘蔗・甘藷等を産するも、住民は一般に富裕ならず。されど氣候風土の關係上果樹の栽培に適し、將來發展の可能性あり、郡農業組合にては柑橘類・柿・梨等を奨励しつづあり。又氣温及び野桑の分布上養蠶の好適地と云はれ、未だ奨励の緒に就きたるのみなるも、これ亦將來に充分なる發展性を有す。地勢上半部風期に於ては殆

コクシ—コクセ

コクスリ 小藥

コクセー—コクチ

心ど無風地帯の観を呈し、土地高燥なるが故に夏季涼しくして盛夏の候と雖も、九十度を越えたることなく、冬季に比較的温暖なり。教育状況は、公學校二、同分教場一ありし、住民は教育の必要を痛感せざる環境にあり、従つて本島人兒童の就學歩合甚だ低く十二三%程度なり。交通の便悪く島溪・南港溪の沿岸に沿ひ埔里街より北山坑・龜子頭の二大字を経て、南投草屯庄に通ずる所謂裏南投道路及び北港沿岸に沿ひて東北方の界界に近き水長流・北港溪の二大字へ通ずる部落道路あるに過ぎず、且つ此等道路は峻険なるを免れざるも、前者は自動車を用いて約二時間にて臺中市に達するを得、臺中・埔里(龍高郡の主体)間に於ける重要交通路たり。此の道路の南港溪沿岸に在る部分は景勝に富み、游流あり、奔瀾あり、山勢交錯して風景佳し。途中北山坑に發電所あり。大字國姓は現行制度施行前内國性庄と稱せられ、更にその以前は國姓埔と稱すること東經紀略に載する埔里社紀略に見ゆれば、國姓より變ぜし近昔の轉訛にして(勝と性の字音甚だ相近似し、性と性の字音相同じ)、鄭氏の國姓と關係なきこと明かなり。本庄(特に西埔部)は古來より埔里社盆地に入る北路の要地に當り、清の嘉慶二十二年、埔里社(今の埔里街)に險越するの禁を布きし時、龜仔頭坪(龜常頭・内龜洋とも稱せられ、後に龜仔頭庄となり、現大字龜子

頭)に石の神碑を立てて之を示せり。咸豐年間漢人の禁を犯して埔里社に侵入する者あるに及び、此地方に既に棄落を見しが、光緒元年埔里社(埔里)の新設と共に本庄はその管轄となり、此の地亦北方の要路として開け、北山坑庄(埔里社に屬し現大字北山坑)を除き、北港溪庄と稱し、龜仔頭庄(現大字龜子頭、庄の西境近く(あり)の如き早く一庄を形成せり。光緒十二年には陸勇(番界警備の兵)の一營を配置せられ、之に依りて著しく此の地方の開発を促せり。帝國領臺後明治二十八年六月總督府假條例により、臺灣縣(臺中)埔里社支廳の管轄に屬し、後廢せられて軍政組織となり、該支廳は臺灣民政支廳(臺中)埔里社出張所となり、二十九年三月再び民政に復し、三十年臺灣縣は臺中縣と改稱。本庄は即ち臺中縣埔里社支廳の管下に屬す。三十一年地方制度改正に依り、埔里社支廳は臺中縣埔里社支廳と改稱、本社亦その管下たり、三十四年廢縣置廳の結果南投廳を新設せられ、埔里社支廳は再び埔里社支廳に改められその管轄に移り、本社は南投埔里社支廳の所轄となり。大正九年地方制度改正に及び、僅は撤廢せられ行政區劃に變更行はれて、本庄は北港溪全部、即ち内國性(國姓)と改稱(龜仔頭(仔を子に改む)、柑仔林(仔を子に改む)、水長流・北港溪の六庄及び埔里社支廳の内、北山坑の一庄計七庄と七

大字となし、之を一括して國姓庄と稱し、臺中州龍高郡役(所在地は埔里街)の所轄にして、庄役場を大字國姓に置く。【火炎山】本庄の西露峰庄(大屯郡)との庄界にありて古來奇觀を以て名あり。露峰朝霞と稱せられて彰化八景の一に算へらる。之に關する詳細は擧げて火炎山の項にあり。 【コクセー】 國聖港 臺灣臺南州北門郡七股庄の港。曾文溪の一分流三股溪の河口にあり、古の加老灣港の一部にて、もと國使港(臺灣地輿圖説)・各西港(日本水路誌)等の文字を宛てられたるが鄭氏上陸以來國聖港と稱し、港口に頂頂額油なる一大砂洲あり恰も島を形成し、之に依りて内灣と外港に分たれ、毎年遭遇する雨期に在りては、曾文溪の氾濫に依り港底の淤淺を來し良港といふを得ず、漸く或克船を容るるに足る程度なり。 【コクシー】 虛空藏 山(山形縣)の別稱。【虛空藏山】 長野縣東郡信田村・東府村の二村境界に跨る。標高八七三米。北麓を單川北東流し千曲川に入る。この山第三紀層より成り、弘化四年この地方の地震の際崩壞個所を生ず。山下に涌池あり。 【虛空藏山】 上田市中心街の北西方約四軒。長野縣埴科郡南條村と小縣郡鹽尻村に跨り、標高一〇七七米。北東麓は太郎山(一六四米)・東太郎山(一三〇

三六〇

一米)に連り、南西麓は千曲川に限らる。南・西麓を北國街道信越線及び千曲川南東より北西に鋭走す。 【虛空藏山】 黑澤山(岡山縣)の別名。 【虛空藏山】 高知縣高岡郡戸波村・吾桑村・平賀野村の三村境界に跨つ。標高六七五米。山麓秩父古生層より成る。北東麓に光明峠最高點あり、南西方に勝森(五四六米)對峙す。 【虛空藏山】 佐世保市の南東方約二十二軒。佐賀縣藤津郡藤野町と長崎縣東彼杵郡川棚町・彼杵村の三村境界に跨つ。標高六〇八米。 【コクチ】 小口 富山縣にある瀬戸。鹿島郡の東北端觀音崎・新崎と能登島との間の水道、日本海と七尾灣南灣を結ぶ。 【小口村】 和歌山縣紀伊國東牟婁郡の中郡。勝浦町の西北方約一八軒の山村。東北は三津ノ村、東南は高田村、南は色川・小川の二村、西南は七川村、西北は譜川村に隣接し、面積八三平方軒餘を占む。東部に大雲取山、北部に小雲取山、西に赤倉山・足野山等、高き八〇〇—一〇〇〇米の山脈によりて圍まれ、中央部にも大倉畑山(七七五米)ありて村を東南と西北の二地區に分つ。小口川は東南谷を、和田川は西北谷を共に北東流し、東北部に合し赤木川となり、三津ノ村に出で勝野川に合す。山地廣く森林に富み林産を主とし、外に多少の米・藁等を出す。

面積廣し人口は一七〇〇餘人にて、密度は一平方軒に僅に一六人に過ぎず。熊野街道中邊路東部を南北に通ずるも南に大雲取越、北に山雲取越の坂ありて交通なほ便利ならず。山家集に「雲取や志古の山路はさておきつ小口河原のさびしかりける」とある小口河原は此地にて、當時は人跡絶えたる僻幽の地なりしもの如し。いま上長井・東・西・大山・瀧本・鎌保・嶺洞・北ノ川の大字より成り、上長井に役場を置く。 【コクチヨ】 石町 現今日本橋區本石町といふ、神田區新石町に對する語。石町はその舊稱、昔時未穀商多かりしに起るといふ。往昔は石町三丁目北側の新道に時の鐘があり、また三丁目通に長崎屋と稱する異人宿ありて共に有名なりき。七個人・二下、表の方を被見えばうな石町の火屋が、相も變らぬ大めかしのチホン／＼で行を見付し柳柳・九、石町は橋に疎き鐘を撞き、同・二四、石町へ内裏を移す賑やかさ(十軒店を揃んで石町にも賑市が立ちたり) 【コクノ】 小久野島 廣島縣豊田郡にある島。忠海町の南約二軒、東に大久野島あり、南に大三島に對す。 【コクフ】 國府 王朝時代以來國府のありし所(其所在現在市町村別表の如し)。當時音便にて「コフ」といひしが、のちコクフと呼び、後世は府とも稱せり。今も諸國にその名を存す。

コクチ—コクフ

國名	國府所在現在市町村名
山城	初め葛野郡東條村(今京都市右京區)次に乙訓郡乙訓村(後同郡大山崎村大字大山崎)
大和	奈良縣高市郡高取町大字土佐
河内	大阪府南河内郡道明寺村大字
攝津	初め大坂市東區天神橋南(舊名渡邊)後大坂市東區玉造町
和泉	大阪府泉北郡和泉町字府中
伊賀	三重縣阿山郡府中(或云三田村大字三田)
伊勢	三重縣鈴鹿郡國府村大字國府
志摩	三重縣志摩郡國府村
尾張	愛知縣中島郡稻澤町大字國府宮
三河	愛知縣寶飯郡國府町大字國府
遠江	靜岡縣磐田郡中泉町大字中泉(府中)
駿河	靜岡縣靜岡市(舊名駿府)
甲斐	山梨縣東八代郡栗村大字國府
伊豆	靜岡縣田方郡三島町大字三島
相模	神奈川縣中郡國府村大字國府本郷
武藏	東京府北多摩郡府中町府中驛
安房	千葉縣安房郡國府村大字府中
上總	千葉縣市原郡市原村大字總社
下總	千葉縣市川市大字國府臺
常陸	茨城縣新治郡(舊天城郡)石岡町(舊名府中)
近江	滋賀縣栗太郡瀬田町大字橋本
美濃	岐阜縣不破郡府中村大字府中

縣	國府
信濃	岐阜縣古城郡國府村
上野	群馬縣松本市
下野	群馬縣下野郡國府村大字國府
陸奥	宮城縣宮城郡多賀城村大字市川(初め名取郡岩沼(武蔵))
出羽	山形縣東田川郡(舊出羽郡)廣野村大字廣野新田
若狹	福井縣津波郡今宮村大字府中
越前	福井縣越前郡武生町
加賀	石川縣能美郡國府村大字古府
能登	石川縣鹿島郡矢野村大字府中
越中	富山縣射水郡伏木町大字古府
越後	新潟縣中頸城郡直江津町大字鹽谷新田
佐渡	新潟縣佐渡郡直野村大字竹田
丹波	京都府南桑田郡龜岡町?
丹後	京都府與謝郡府中村
但馬	兵庫縣城崎郡國府村大字府市
因幡	鳥取縣岩美郡宇倍野村大字總
伯耆	鳥取縣東伯郡社村大字國府
出雲	鳥取縣八東郡出雲郡村大字出雲郡
石見	鳥取縣那賀郡下府村
隱岐	島根縣周布郡西郷町?
播磨	兵庫縣姫路市
美作	岡山縣津山市大字總社
備前	岡山縣上道郡高島村大字國府
備中	岡山縣吉備郡總社町大字總社
備後	廣島縣福品郡國府村大字府川

縣	國府
安藝	廣島縣安藝郡府中町
周防	山口縣防府市大字西佐渡令
長門	山口縣下關市大字登瀛
紀伊	和歌山縣海南郡紀伊村大字府中
淡路	兵庫縣三原郡代村字國府(或云市村大字市)
阿波	徳島縣名東郡國府町大字府中
讃岐	香川縣綾歌郡府中村大字府中
伊豫	愛媛縣越智郡櫻井町大字古國分
土佐	高知縣長岡郡國府村大字比江
筑前	福岡縣太宰府町
筑後	福岡縣三井郡井井町?
豊前	大分縣大分市大字古國府
豊後	大分縣佐賀郡春日村大字久池
肥前	佐賀縣佐賀郡春日村大字久池
肥後	熊本縣熊本
日向	宮崎縣宮崎郡佐土原町大字佐土原
大隅	鹿兒島縣給良郡國分町大字府中
薩摩	鹿兒島縣薩摩郡高城村大字薩摩
薩	長崎縣壱岐郡賀村大字國分?
對馬	長崎縣下縣郡原町大字國分町(舊原舊名府中)

三六一

【國府村】 群馬縣上野郡國府馬郡の東部。前橋市の西方約四・五軒。北は清里村、東は總社町・元總社村、南に鬼ヶ岡村、西は金古町と隣す。面積四・四七平方軒の

小村。標名山の東南麓を占め利根川上流城の低地内にあり。村内に桑畑多く米麥の産あり。縣道南橋市に通じ、又東隣總社町に省線と越前線馬越線あり。此地は總社町・金古町・元總社村と共に和名抄、群馬郡群馬郷の地とす。もと國分寺書きしも、いま國府といふ。蓋し國分寺の所在地なりしより名付けられたるものならん。名跡志に據れば國分村は土人コトカと稱へ、往昔國司の住居せし地なりといひ、鎌倉大草紙に上杉三郎は國分寺陣を取るとあるも此地なり。いま國分寺址及び國分尼寺址あり。(上野國分寺址)指定史蹟。大字東國分及び大字引間より元總社村大字元總社に跨る。國分寺は天平十三年聖武天皇の詔に依りて國毎に造立せられたるものにて、管尼の二寺あり、僧寺を金光明天王護國之寺、尼寺を法華滅罪之寺と云ひ、或は單に僧寺を國分寺、尼寺を國分尼寺とも云はる。上野國分寺は即ち聖武天皇の聖旨に依りて造營せられたるものにして、その頃米郡の石上郡諸部、勢多郡の上野是人の如きは、物を當寺に献じて朝廷より位を授けられしことありき。併し平安時代に入りては地方政治の弛廢と共に之れが修理十分ならず、諸國の國分寺と同様廢頽の運命に就かれしものと思はるるも、近年九條公實家より發見せられし古文書に依れば、萬治四年の頃には堂宇の腐朽、佛像の破損ありしと雖も尙ほ歷代の國司に依り

て多少の修理が試みられ、創建當時の規模を保ちし状態察せらる。尙ほ治承四年に平氏方に屬せる足利俊綱、此の地方に在住せる源氏方を攻めんが爲め、兵を出して之等を燒拂ひしことありたるも、その際國分寺も燒失に歸せしと傳へ、創建以來一千餘年の星霜を經たる上野國分寺は幾多の變遷に遭過し、今は一帶の耕地となり、僅に在りし名残を斷壁と遺瓦に止むるのみ、試みに其の跡に就て見るに、ほぼ中央に位置する土壇に十二箇の礎石を有するに金堂址と認むべく、之より西南に當れる宇石堂土壇に十七箇の礎石を存せしが、近年御嶽教の信者の爲め、土壇を整平せられ、且つ礎石の上に碑石を建設せしこととて、著しく遺跡の破壞を蒙りしと雖、幸に之れが位置を移動するに至らざりしにより其配置に依り明に塔址たることを示せり。また金堂址の南方に當りては中門及び南大門と認めらるる所に僅に一二個に過ぎざれど礎石あり。東門址と思はるる處にも礎石の地下に埋没せしこととて、これ等礎石の配置を見れば國分寺の規模は方二町程ありて、南面に僧まれ、金堂は略ぼ中央に存し、七重塔が其の西南に在りて共に土壇上に築かれありしを知り、四邊に悉く門を有せしものと思はれ、九條公實家の古文書に記せる所の規模と善く一致し居れり。尙ほまた正面の中央に存せる欄干の如きは當時の參道と認めらるるものにて、周圍

に廻廊または廻廊の名残りを止むる部分も認めらる。土壇の附近に勿論、地域内隨處に布瓦の破片散布す。花瓦あり、唐草瓦あり、その文様にも種々の様式を呈するものあれど、大體に於て奈良朝時代のものに屬せるが如く、往々人名また地名を記書せるもの發見せらるるも、こは悉く寄附者を表示せしものと思はる。(上野國分尼寺址) 國分寺址の東約四町、大字東國分字藥師道南の如中にある。周圍は道路や耕作道に依りて其の規模を減少せらるるも、國分寺に比して境域の減少が減少せらるるものあり。而して土壇の狀態を止めざるも、中央部と認めらるる箇所は幾かな勾配を保ちて高く爲り居り、其處に礎石六箇を殘せるは、悉く耕作の爲め土壇の形勢を失へるものなるべく、其附近に尙ほ多數の礎石を存せしも耕作の支障と爲るにより、近年に至りて或は粉砕せられ、或は礎石や碑等に使用せる爲めに持去られしと云はる。全體の規模、礎石配置の工合を仔細に觀察するに、國分寺と同じく南面せる一寺域たることを認められ、金堂を始めとして附屬の堂舎などありしを知り、南大門址と思はるる地點に礎石の崩り出されし儘なるも残り居れり。從來此の寺址に就て殆んど注意せられず、隨つて如何なる寺址なりやを考慮せらるるに至らず。ただ此の寺址に存する遺瓦が國分寺址發見のものと同く同一の文様を附せるを以て、國

分寺の境域を此地にまで押擴め非常に廣大なるものと考へられしこともありき。さりながら國分寺の境域は充程に廣大ならず、約二町四方なることは劃然たる遺跡の現状より察知せらるる所にして、九條公實家の古文書また之れを證するものある故に、諸國の國分寺の規模またほぼ同様なるにより、此の地點まで國分寺の境域を延長して考ふることは妥當にあらざる。時に兩者の地點に礎石や遺瓦存するに關らず、其の中間に挿まれる如地には礎石は勿論、遺瓦の散布するもの見受けられざるは、兩者に何ら聯絡なく、各々獨立せる規模たりしものと認めらる。果して然りとすれば、遺瓦に依りて國分寺と時代を同ふるものたりしを知ると共に、規模の國分寺に比して幾分狭少なるも、其位置國分寺に近接せることなどより推測すれば、從來殆んど顧みられざりしと雖、上野國分尼寺址たることは明白なり。

【國府村】 神奈川縣相模國中部の南部。相模灣に臨み、大磯町の西隣にて、北に土津村、西は二宮町と隣す。泰野盆地以南の丘陵地の南端を占め、村内北部に鷹取山(一九九米)あり。低地は海岸に沿ひて狭きものあるのみにて地味をなし、寺・甘藷・蕎麥の産あり、海岸は砂浜なり。東海道及び省線東海道本線は南端を西定し、村内に驛を設かず。この地は和名抄餘部郡餘部郷の地にして、近世は海城郡

二ノ宮庄に屬す。大字國府本郷は往昔國の國府を置かれしが故に此名あり。されど和名抄には、國府在二大住郡とあれど舊大住郡中にその遺蹟遺構に無く、本村の國府新宿に本州の總社六所明神あり、且つ國府の遺名存すればこの地に國府の存せしこと明なり。この地は往古、郡中に於て最も早く開け、多く村落をなせし故に郡の中心となり、これより郡名に及ぼし、また國府も此處に置かれしなるべし。鎌倉建長寺塔頭寶珠庵の永和五年の文書に、相模國御田郷新日吉(大字國府新宿にあり)とある御田郷は、この地にして六所明神を御田大神と稱せしも所在の地名に因れるものなり、東鑑・建久三年の條に總社御田とあれば、其の頃既にこの稱呼ありしものなるべし。治承四年十月に源賴朝は此地にて北條時政等二十五人の勳功賞を行ひ、大庭三郎景親は此處にて島首せられしことあり。小田原北條氏の頃は、北條時政に大形百貫四百三十文、國府癸卯檢地此外二十貫文とあれば大形某が采地と六所明神の社領たり。のち幕領たりしを延享二年酒井雅樂頭忠知に賜ひ、寛延二年に松平大和守直賢に替へ、文化八年に白頭甲斐守政隆に賜へり。天文十二年に檢地あり、寛文五年に成瀬五左衛門重治の檢地あり。また此地の東方に城山あり、長尾左衛門尉景春の檢官、越後五郎四郎なる者の城跡なりといふ。大字國府新宿は元祿の郷帳

には國府新宿村とあり、幕領と相十郎兵衛利和の知行所とが入交り、寛文五年に成瀬五左衛門重治の檢地ありし地。大字寺は北條氏割據の頃は役帳に幸田右馬助、廿三貫五百文、中郡寺とあれば、幸田右馬助なるもの知行所たりし地にして、のち大久保加賀守忠貞の領及び村越七郎左衛門・深谷謙吉等の知行所と入り交れり。寛文五年・同十三年に稻葉美濃守正則の檢地あり。大字生澤は、東鑑によれば、建久の頃は馬宮彦四郎宗延の知行せし地なりと、弘治年間に至り、伊波大助助・同修理亮等の知行所たり、永祿の頃は北條時政に伊波、五十貫文、中郡幾澤とあれば伊波氏の所領と、六所明神の社領と入り交れり、のち大久保加賀守忠貞の領及び山角綱三郎・村越七郎左衛門等の知行所たり。大久保氏の領地は稻葉美濃守正則が寛文十五年に檢地し村越氏の采地は延享四年に村越三十郎・大森信濃守頼直等の檢地ありし地。大字史蹟は寛文四年に木部藤左衛門直方に賜ひ、延享二年に幕領となり、寶曆六年に武田大膳大夫信典の采地となりし地にして、天正十九年に一回檢地あり、元祿十四年木部藤左衛門の檢地ありしと。大字黒岩は北條時政に大形、百貫四百三十文、國府癸卯檢地此外二十貫文、黒岩村御料所に屬成云とあれば、北條氏割據の頃は大形某の知行せし地にして、寛永十年に窪田主水・伏見勘解由の兩人賜は

り、寛文十一年窪田右衛門正俊の檢地あり。大字西窪はもと西ノ久保と稱せり。正保・元祿の國圖には西窪村とあり、西方の吾妻村大字一色村界に山あり、その西の窪地なれば西窪村と稱すと。往時は幕領なりしが明和五年小幡又十郎に賜はりし地なり。(六所神社) 大字國府本郷に鎮座。郷社。祭神、大國主命・素戔鳴命・稻田姫命・足押推命・手押推命。中世以降、明治六年現社號に改稱に至るまで總社六所大明神と稱す。また御田神社とも稱せり。建長四年宗尊親王鎌倉に下向し給ひ、將軍初めの例として幣帛並に神馬を奉納せらる。應永年中に社殿炎上す。天文十三年小田原北條氏社領六十五貫文を寄す。天正十九年徳川家康また先例に従ひ社領五十石を寄せ、元和三年に朱印地を寄せられしが、維新の際に上地す。明治六年七月村社に列し現社號を稱へ、同十五年十月郷社に昇格す。社實に六所大明神の掛帳・素帛等あり。例祭、六月二十一日。祭典は養老年間に創むと云ふ。(王福寺) 大字寺坂王福寺にあり。眞言宗東寺派。大高山と號す。岡崎村金剛頂寺末にして延命院と號す。天平年中行基菩薩之を坂本山上に創建し、鎌倉將軍の時、新願所となし堂宇を修造し寺田七十貫文を寄す。當時僧坊六宇あり。東鑑に、建久三年八月五日、頼朝の夫人政子の平産を祈り、十五寺に命じて誦經せしむる内、坂本王福寺とあるは即ち當寺なり。

り。永正年中兵火に罹り堂宇悉く焼亡。のち中興開山榮範法印之を麓に移して再建す。即ち現地なり。慶長・元和の頃再び廢廢し、寛永七年また炎上し、僅に本尊藥師及び金剛二力士を殘し、延享年中に至りて漸く再建成る。本尊藥師像は、木造、高さ四尺三寸(一・三米)全面黒ずみて唇のみ朱色を存し、面貌豐滿、偉風堂堂たる結跏趺坐の像なり。首部の相好著しく藤原時代の特徴を示すも、胸部その他曲線や軟かみを缺くは鎌倉初期の製作の故ならんか。蓋しこの地は鎌倉時代相模國府のありし所にて、此像、當時隆盛なりし王福寺の名残りを止む。

【國府村】 石川縣加賀國能美郡の北部。小松町の東方凡そ六軒にあり、北より東北にかけて山上村、東南は鳥越村、南は中海村、西は小松町・飯津村・寺井野町にそれぞれ界す。加賀山脈は手取川の谷によりて切られたる一支脈の北部山麓に位置し、全村殆んど低き山地にて、西部の一部に平野を見る。南境の觀音山(四〇二米)最も高し。山地は森林地多く、西部の平野には水田あり、西境をなせる梯川の支流により灌漑さる。又一部桑畑もありて米・蕎麥を産す。村の南部に遊泉寺山あり、小松町より鴨川遊泉寺間に社嶽小松電鐵の便あり。村内より碧玉の一種にて酸化鐵により紅色を呈せる赤玉を産す。此地古くは和名抄、能美郡野身郷の内に屬せしものが、或は此地國府の

所在地なりしものか、而して國分寺も此地にありしもの如きも今評かならず。明治四十年里川・古河・國造の三村を合併して本村を建つ。いま上八里・下八里・首谷・鹿泉寺・立明寺・鶴川・佛大寺・河田・古府・埴田・小野・和氣・寺島・館・金剛寺・坪野・鍋谷の各大字より成り上八里に役場を置く。(石部神社)大字古府に鎮座。郷社。祭神、櫻日方別命。式内社。俗稱舟見社。社地は國府の南に當るを以て府南社とも稱へし。後世府南を舟見と誤り、社地をも舟見山と誤り稱ふ。白山八社の一にして府南の地社なり。本折山王社は當社の攝社なれば其由縁にて山王社には古よりの慣例として、國府より神輿とて邑人二人駕輿を出すと云ふ。例祭、九月十七日。

【國府村】 岐阜縣飛騨國吉城郡の南端。北に古川町に、西北に小栗利村に接し、南に大野郡上枝村と境す。此地は飛騨高原を宮川の切る所、古川盆地の南部に位置し、後背には猪臥山(一五一九米)の山麓に在り。北部には大南見山(一三三六米)ありてその南斜面をも含む。東南より荒城川流れて古川町南部に於て宮川に合流す。盆地内は廣く水田分布し、林業も盛なり。和名抄荒城郡名張郷、荒城郷はこの地にして、村名の國府は往昔國府ありしによる。飛騨國府は初め大野郡大野郷にありて、いま高山市上岡本の地たり。孝德天皇の御代に國府を廣瀬に移すとい

へば、今の吉城郡國府村大字廣瀬にありしものか。後國府を七日町村に移されしとも云はれ、爲に國の總社を此地に置きたりと。一説に最初より廣瀬に置かれしとも稱せらる。八日町には梨内城址あり、これ高原郷の江馬氏の據る所に於て江馬城あり。元來江馬氏の本據は阿曾布村大字殿の諏訪城にて、天正十年江馬輝盛八日町に三木自綱等と戦ひ利あらずして廢る。廣瀬の櫻野用水を狭み宮川との間に櫻樹多く觀櫻の勝地たり。附近の畑中には前方後圓の石室あり。合葬の風見られ考古學上重要なり。かかる上代にこの山間僻地に天平文化の及びしは正に日本文化の偉大さを推察せらる。宮川の支流宇津江川の上流には四十八龍(内江瀧)の景勝あり。村の中央を越中街道北走し高山本線も通過し飛騨國府(昭和九年設置)あり。(荒城神社)大字宮地に鎮座。祭神、天之水命・水鏡式荒木郡五座の建年代詳ならずも延喜式荒木郡五座の一なり。往昔、大荒木命等の地に大なる水田を興し、宮地の忌垣内眞木立上其祖の天神明玉命・彌都波能賣神と上記の二祭神を祀り耕耘の業を里人に教へ給ふ。いま當社境内の東南なる荒城川の岸上に古墳あり、周圍凡そ三間餘、これ上古に大荒木命の遺骸を瘞せし舊蹟なりと傳ふ。斯くの如き由緒あるを以て古來朝野の尊崇厚く、大寶二年三月に奉幣あり、天平九年十一月に社殿の修造あり。

【國府村】 廣島縣備後國廣品郡の中。西に府中町、東に新市町あり。北は廣谷村・細引村に、南は栗生・有磨兩村に界す。面積四・一八方軒の小村、附近は二一三〇〇米の備後臺地にて、之を切りて西南より東北に流るる廣田川府中町にて急に流路をかへ、西北より東南に走る層層谷に沿ひ、流域に廣き洪濤平野をつくる。村はその平野を領し平野の南北の斷層崖を以て境界とす。全村耕作行はれ米及び藁草を栽培す。北境山麓の區道は府中町と新市町をつなぎ、また府中町より出で、南境の廣田川に沿ふ區道は南境の中央部に下り、松水町及び尾道市に通ず。また福山市より府中町に敷設されし福鹽南線はこの村を通る。この地は府中町等と共に和名抄、葦田郡葦田郷の地とす。舊幕時代には高木・府川・中須の三村なりしが、明治二十二年町制施行の際合併して國府村と稱し、前記三村は各々大字名に残る。大字牛文に茶臼山と呼はるる前方後圓墳あり。大正元年に發掘され、鏡・帶金具等優秀なる副葬品の出土せしことを以て知らる。

嘉祥二年正月、神位從五位上に加贈せらる。降りて安元二年二月と正治元年十一月とに社殿の再建・修理あり、更に元中七年六月當村安國寺の僧は天序經堂建立の際に當社祠殿を再建す、今の殿宇これなり。延寶六年三月、時の領主金森出雲守修理を加へ、爾後、正徳四年・寛保元年・寛政四年・天明三年・天保三年・弘化四年・慶應元年・明治十五年・同二十七年と數回に互り社殿の改築・修理・葺替等を施せりと云ふ。社殿中、本殿(三間社流造、屋根檜葺)は前記元中七年の建造の儘を傳へ現に國寶に指定せらる。例祭、九月十六・十七日。(安國寺)大字西門前にあり。臨濟宗妙心寺派。大平山と號す。正平十二年の創建と傳ふ。是より先解應年間、足利直義諸國に一國一寺を造營す。本寺亦其一なり。岡山は瑞巖にして南叟之を再興す。寶徳元年十刻位に上り朱印五百石を領す。堂宇中經藏は國寶建造物たり。桁行三間・梁間三間・重層・屋根入母屋造・檜葺・唐檼・素木造、明徳元年即ち元中七年に本尊佛龕完成せしといふ。

【國府村】 岡山縣備前國邑久郡の北部。岡山平野の東隅にあり、西隣行幸村を隔てて吉井川南流し、東は鶴山村を隔てて片上河あり。約五軒南方に至れば播磨灘天を祀る。また池邊の正等庵に池の縁起を藏す。(大御和神社)府中に鎮座。郷社。祭神、大己貴命。創祀年代不詳。阿波志に據れば、文武天皇大寶二年、國司始めて池を給す、因りて印徳大明神と稱せりと云へば、その創建の古きを推知し得べし。延喜の制に列せらる。降つて慶安二年社殿の造營あり。明治初年大御和神社と改稱せり。例祭、十月九日。【觀音寺】 觀音寺にあり。古義眞言宗。光嚴山千手院と號す。現に同宗御室寺末にして四國八十八所第十六番札所たり。草創年代不詳なれども、往昔は地方屈指の巨刹たりき。中頃漸く衰頹せしが萬治二年岩倉これ再興。本尊千手觀音は空海の作なりといふ。御詠歌「忘れずも尋きたまへ觀音寺西方世界彌陀の淨土へ」(國分寺) 矢野にあり。曹洞宗。藥王山金色院と號し、四國八十八所第十五番札所。天平年間、聖武天皇の勅願に依り諸國に建立せしめ給ひし金光明四天王護國之寺の一にして、天正年間兵火に罹りて燒亡せしも寛保年間再建し現在に及ぶ。御詠歌「うすくこくわけわけ色を染めれば流轉生死の秋のみみち葉」(常樂寺) 延命にあり。古義眞言宗。盛壽山と號し俗に矢野の延長といふ。現に同宗御室寺末にて四國八十八所第十四番札所。寺傳に據れば、弘仁二年東海の開創にして自刻の彌勒菩薩像を安置せしに蓋觸すといふ。のち衰頹久しかりしが萬治二年再興

成る。御詠歌「常樂の岸にはいつか到來し弘誓の船に乗りおくれずば」【國府村】 高知縣土佐國長岡郡の南部。東と南を圍む長岡村を隔てて東方は香美郡山田町、南方は後免町あり。西は同登村に、北は久禮田村に界す。面積二・五三方軒の小村。高知平野の北の一部を占め東及び南境を國分川流れ、また西境を細流走り、西南方に國分川に注ぐ、東北隅の小丘陵を除けば全村低平なる沖積地にて、水稲盛に行はれ土佐米の良産地なり。また麥・藁の産あり、和紙の製造も行はる。村の中央部を南北に區道走り後免町と連絡す。字國分は此區道に沿ふ街村にて、往昔國府のありし所。今その址及び國分寺址等存す。此地は蓋し和名抄長岡郡宗部郷の内とす。もと國分・比江・左右山の三村なりしも合して國比左村と稱し、更に明治廿年國府村と改稱す。いま國分・比江・左右山の三大字より成り國分に役場を置く。(比江山城) 其址は大字比江日吉山に在り。日比山掃部介親興之に居城す。親興は長曾我部親興の弟上野介の二子にて、元親の從弟に當り長曾我部家の棟梁たり。性剛直にして雄略あり、天正十六年、長曾我部家の繼嗣問題起るや、元親、久武・親信の議を容れ、將に盛親を立て嗣となさんとす。親興、吉良親實とその不倫を切諫せしかば、元親怒りて頗る不快の色あり、親信のまた諫するところありしかば、元親こ

【國府町】 徳島縣阿波國名東郡の西部。東は徳島市に、北は新居・南井上の二村に、南は上八万村に界し、西は名西郡の

入田村・石井町に隣す。面積七・一六方軒の小村。吉野川の沖積砂洲の一角を占め土地低平、南陽より東南境に沿うて駄喰川の荒川が廣き碛をつくりて流る。村内は水田拓げ阿波米の産地にて、また養蠶行はる。徳島市より省線徳島本線東り府中驛(明治三十二年設置)を設けて東西に走る、また伊豫街道もほぼ之と並行して其南部を通り、徳島市と本町の觀音寺を繋ぎ、更に隣村石井町に往く。もと阿波の國府のありしところ、今は大字觀音寺町が中心、町は年々人口の増加著し。この地は和名抄、名方東郡名方郷の地とす。阿波志に「國司總は府中村にあり其地田となる。又御所の池の址荒花々たるも村民敢て鋤草を加へず」また延喜式に「阿波國上國和名抄云阿波國國府、在名東郡、本是名方郡也、行程上九日、下五日海路十一日」と見え、蓋し此地は國司廳のありし地ならん。嘗て大字府中宇城ノ内御所ノ池にて建築物の礎石たりし煉石を發見すといふ。三好家記に矢野某伊澤某の妻子を、早瀬の城に取詰めし由見ゆ。早瀬は即ち大字早瀬の地にして、矢野及び伊澤兩氏に共に此地の郷士たりしものならん。明治四十一年町制を布く。【洗舌池】 大字觀音寺にあり。勝間池と稱す。元暦二年源延房、此處を過り馬に飲せしむ。水清河にて味また甘美。深さ約一・五米に過ぎざるも、大旱になほ平日の如し。灌溉に利用さる。池心に辨財

れを信じ、十四日、親實とともに死を賜ひ、大高坂城下に葬られしむ。その妻子連れて、新改村須江正福寺に遷れしを、元親に告ぐるものありて捕へられ、つひに新改村に於て殺害せらる。親興二子の墓並に祠堂は善善寺跡に現存す。〔日吉神社〕大字比江に鎮座。惣社。祭神、大山咋命。創立年代詳かならざるも、古老の口碑に據れば紀貫之、近江國比叡山より勸請したるものなりと云ふ。舊稱日吉權現。例祭、七月二十六日・十月三十日。〔土佐國府址〕國分寺の東北約一軒、村役場附近にして、いま田圃中に二基の記念碑を残存す。小なる碑は天明年間國學者尾池春水等相計りて藩主の允許を得て建てしもの、篆額に山内豊隆の筆に成る。大なる碑は大正十年村民先を得し松平定信の撰文を刻し、篆額に善善山内豊隆の筆なり。國府に紀貫之が隈嗣天皇延長八年土佐國主となり此地に來り、在國四年、承平五年任滿ちて歸國するまで滞在せし舊跡として、其名は土佐日記とともに著る。〔國分寺〕大字國分にある。新義真言宗智山派。摩尼山寶藏院と號す。四國八十八所第二十九番札所たり。天平年間勸助を奉じて僧行基の開創せし所に、當國國分寺なり。永祿元年長曾我部元親、余黨等を改造し寛永十年、承徳二年、明暦元年に真山内氏之を重修。寛文九年國府總社を寺内に移す。堂宇中金堂は桁行五間、梁間六間、單層、

屋根四注造、棟葺、軒は二重吹寄棟、組物和縁三斗を用ふ。永祿元年長曾我部元親の改造に係るものにて、其後、山内氏により度々重修せらるるといふも、その様式より見て大體永祿頃の建造なるものと推知せらる。寺寶中、木造藥師如來立像二軀に共に國寶にて、一は丈高三尺三寸七分、藤原期の作に係り、一は兩臂・兩足先・自毫等を失ふ。他は鎌倉期の作にして光背に應永二十三年修補の銘を存し、七重座上に立ち全身漆喰塗、船形光背は透彫の頭光と身光とより成る。御詠歌「國を分け賣をつみて立つ寺の末の世までも利益のこせり」〔土佐國分寺址〕指定史蹟。現寺の國分寺境内にあり。寺城の東南隅より東側に掛幅三米、高さ二米、長さ約三〇〇米の舊寺の土壘遺存し、自然石の礎石一箇本堂前に存す。〔比江院寺塔址〕指定史蹟。大字比江字土居屋敷にあり。國府址の東約三〇〇米の田中に存する大礎石にて、東西一・五米、南北二・五米、中央に徑七・八米、深さ一・二米の圓形の柱孔を有し、その中心に徑一・五米、深さ一・一〇米の舍利孔を穿つ。その大ききよりして、往時ここに營まされし塔の大規模なりしを想像するを得、恐らく國分寺草創以前に營まれし大寺院の塔址ならん。〔紀貫之遺蹟〕大字比江に在り。國分寺より東方約一軒。ここに國新の遺蹟あり。世々土佐國府のありし所に、紀貫之の遺蹟も亦ここに存す。延長

年中、紀貫之、土佐國司となりてこの國に來たり、在官四年の間ここに住居せし史實あり。その流風餘韻いかに傳はり、國人にて其遺徳を仰がざるものなし。天正中、長曾我部氏檢地帳に此村に題し、爾府中と云ひ、天明中、尾池春水の紀氏舊跡にこの村中の字に御門の前・内裏ぐろ等の名を記す。天明五年、日野大納言資枝卿の和歌を乞ひ、藩主山内豊隆の篆額を得て、碑をここに建てつ。昔は礎石古瓦あまた散在せしが、後世、川普請の時など取用ひて今みな失せぬと云へり。ただ東北二〇〇米の田畑中に一大礎石を存せり。縦約三米、横一・八の大小にて、柱穴、互り七八間、深さ九間許りあり。小穴、互り七八間、深さ九間許りあり。大正十年、村民相謀つて白河樂翁の碑文を得て、舊山内豊隆の篆額を添へ、更に一大碑を建て、且つ花木を植ふ、若石を配し遺蹟の風致を添ふ。是に於いて名流の遺蹟、千載不朽となれり。〔國府〕原本縣領出木村の大字なりしも原本出水町に入る。往昔國府のありし地といふも興廢の時期は詳かならず。〔國府村〕兵庫縣但馬國城崎郡の南部。城崎温泉より南方一軒に在り。北は奈佐村・五武村。豐岡町に、東は中筋村に、南は日高村・出石郡家原村に、西は八代村に隣る。中國山脈中において朝來川は南より北に貫流し氾濫原を作り、平地には米を産し朝來川の河岸に

は桑畑多く養蠶行はる。また朝來川(國山川)に結を産す。昔の山陰道及び山陰本線は何れもこの平地を通過し、豐岡方面に至る。出石鐵道は此地を走り上ノ郷驛(昭和四年設置)を置く。和名抄の氣多郡高田郷の地にして、府中邊は中世氣多郡または府中莊と稱せり。國府とは昔の但馬の國府跡にて大字府市場にあり。和名抄に、但馬國府、在氣多郡、行程上七日、下四日と見ゆ。大字上石に古城址あり。山名氏の臣西村丹後の居城にて、天正八年木下秀吉の爲に取らる。また本村は和名抄、氣多郡快沼郷にも跡りしものなりし。〔氣多神社〕惣社。祭神、大己貴命。式内社。總社大明神と稱す。例祭、十月二十三日。コクフ 國分

〔國分〕宮城縣陸前國の舊庄名。宮城野の一部の稱。いま仙臺市の町名にその名残る。蓋し名稱は陸奥國國分寺より出でしものならん。その址は仙臺市原町南目にある。〔國分村〕茨城縣常陸國多賀郡の南部。助川町の南方にあり。北は岡町との間に結川村を挟み、南は坂上村と、東の一部は河原子町と隣接し、その南北は太平洋に臨む。阿武隈山脈の南端、西境に遼東して、西北は三三五米あり。村の西半はその東斜面を占め、東半には低地ありて畑地をなす。主産物は黍類にて、特産物としては、胡瓜・南瓜・トマト・茄子

等の長成産菜あり。陸前道街道及び古河常磐線、村内を縦貫し東隣河原子町に下孫驛あり。此地は和名抄、久慈郡高月郷内とす。村名は此地、密月郷と助川郷との界に當るより起れるものか。新志に據れば、大字下孫に相馬家藩士の墓ありと。永祿五年八月相馬氏奥州を發し孫澤原に至り佐竹氏を襲はんとす。佐竹氏これを防ぎ奇策を用ひて、相馬氏の軍を破る。幕は即ち其時の相馬氏部將某の戦死するところなりといふ。大字大久保はまた大窪に作り、元龜天正の頃に郷士大窪伊賀及び同族河等の居りしこと古書に見ゆ。東鑑治承五年の條に源頼朝、鹿島社に大窪郷を寄進せる由見ゆ。其當時の地頭は詳かならざるも、のち宇佐美平太左衛門、地頭職に補せらる。宇佐美氏は建保元年五月和田義盛に黨して討死す。戸澤の山腹には俗に風穴と稱する石灰洞あり。入口は狭きも中は廣く、途中に斜に下る所あり。梯子と綱を用意せば、かなり奥深く進む事を得。(覺念寺)大字金澤にあり。眞宗高田派。徳地山蓮生院と號し、關東二十四輩第二十三唯信房の遺跡なり。唯信俗名を高谷信勝と云ひ、建保六年親鸞の弟子となり本寺を創建す。天正・天保の兩度に兵火に罹りて炎上、再建せられしも元治元年また兵火に罹りて炎上、明治十六年現堂宇の再建成る。〔國分〕千葉縣東葛飾郡の村なりしも昭和九年市川町・八幡町と合併して市川市

を建つ。下地の國分寺のありし所。今その址を國分山光明寺といふ。〔國分〕↓宮野村(千葉縣安房郡)〔國分〕↓海老名村(神奈川縣高座郡)〔國分〕↓徳田村(石川縣鹿島郡)〔國分〕↓一宮村(山梨縣東八代郡)〔國分〕↓神川村(長野縣小縣郡)〔國分〕↓愛知縣中島郡にありし村。明治三十九年本村は西島村・光郷村・片原一色村と共に廢せられ、その區域と井長谷村の大字儀長とを以て明治村を新設し、その名稱を失ふ。もと國分寺のありし所にして、いま、明治村大字失合にその址あり。〔國分〕↓河内村(三重縣河藝郡)〔國分〕↓千歲村(京都府南桑田郡)〔國分村〕大阪府河内國南河内郡の東北隅。大和川の南岸。金剛山脈の西北麓に在り。西は石川を隔てて古市町・道明寺村に隣り、南は駒ヶ谷村に界し、東は奈良縣北葛城郡二上村・志都美村に接し、北は大和川を隔てて中河内郡堅下村・堅上村に隣る。東及び南には二一三〇〇米の丘陵起伏し南境に寺山(二九四米)・鉢伏山(二二三米)あり。北境は大和川西流し、西境を北に流るる石川を併せ沿岸及び中央の北部に低地開け耕地あり。農産を主とし工業これに次ぐ。大和に至る奈良街道北部を通じ、途中分岐する縣道東南に延び奈良縣高田町方面に至る。古くは河内國分村のありし處。また松岳山古

墳あり、往昔重要な地たりしを知る。和名抄に安宿郡尾張郷とあり大字國分の邊を指し、資母郷とは國分の下なる玉手を云へるが如し。昭和六年、玉手村を合併し、いま國分・玉手・片山・圓明の大字よりなり國分に役場を置く。玉手は今古六帖に「河内路や片敷山の片岸に雪か花かと浪そよめく」と詠まれし地にて、山水明媚、古來歌枕の勝地たり。地に玉手遊園あり、園内の安福寺は僧行基の開基に係り彌佛を本尊とし、寛文中、淨土宗の傑僧阿達和尚來り中興し深く尾張大納言光友の歸信を得、規模を擴め境内一萬五千坪の廣きに及び、櫻楓並を挿み蓮華池邊に白く、雲容多し。堂後に檀越尾張侯光友の廟あり。圓は古人の謂はゆる圓見ヶ岡なり。石川の清流、帯の如く丘を環り滿山の翠松深緑の趣また幽雅なり。天高く靄むる日、丘上十州を見るべし。陽春三月滿山新緑の下、菜花十里の黄金を布き、安福寺の櫻・楓また云ふべからず。玉手・片山・圓明の諸部落は大坂の役、東軍の將伊達政宗の臣片倉登綱ここに西軍と激戦して勝ち、豪傑後藤基次・薄田半人の首を挙げし所にて土中に往々當年の武器を出す。(國分寺)聖武天皇の詔勅に依りて成りし寺。延喜式に國分寺科一千東と見ゆる國分寺はこれなり。かかる名刺たりしかども、のち何れの時にか廢絶し、明治維新の後までは、字機ヶ辻に觀音堂及び地藏の石像ありて

その址なりと傳へられたるも、明治六年に廢寺となり、その藥師佛並に地藏の石像は阿彌陀寺に保管せらる。河内志に國分寺の舊蹟に地藏の石像ありと記し、河内名所圖繪にも、國分寺の舊蹟に石像の地藏あり、いま觀音堂あり、弘法大師作の正觀音を安置すと記せるは、ともに圓所を指せるものなるべきも、圓所を國分寺のありし所とせば、徳川時代に國分寺の址を調査せるに際し、寺跡の明らかならざるを以て、東條・南條・北條及び南代と云へる字地の中央に當れる圓所を以て之に擬し、それより小堂を建てて國分寺の址と傳へしとの説あり、のみならずその地は芝山の下を穿てる長さ一八六米の田輪樋(開設年月不詳、庄屋東野權左衛門の造りしものと傳ふ)に依りて悪水の排除をなせる田圃中に在り、明治十八年・三十六年の洪水には、大和川の堤防決潰し、附近一帯に濁流氾濫すると云へば、堤防の修築全からざる往時において、その水害を蒙りしこと一層甚だしかりしものなるべし。依つて、圓所の國分寺所在ならざりしは明らかなり。故に國分寺の址は他に求めざるべからず。之に對して田邊の部落附近には堂山・鎮守・社堂・堂の本・明戸と云へる字地ありて、古瓦を出し、堂塔の礎石も亦残れるあり、且つその地は前記の如く道路四通の所なるを以て、國分寺の舊址にあらざるやとの説あり。然れども田邊は田邊

氏の舊地にして、異動なくその名を傳へ
來たれる所なれば、單にそのみにては
國分寺の地なりと斷じ難し。云ふ迄もな
く寺名は正しく地名を爲して本部落に殘
れば、寺は本部落の中にあるものと見
ざるべからざるも、前述の如く、本地は
その部落に變遷ありしものなるかの如く
に見ゆるを以て、寺址を求めんとするに
は、部落の變遷を討尋し、古書舊記を搜
査し、且つ地形及び古瓦・礎石にも顧み
るの要あらん。因みに國分尼寺址は、南
下村大字大舞に在り。同寺は天平年間
創建に係り、光明皇后、天然の智菩薩
正を開基となして營み給ひしものなる
が、明徳の變亂に焚して遂に廢絶せりと
傳ふ。大舞の西方耕地中の、東西一八・
八米、南北四八〇米の地をそれならんと
云ひ、今も里人地を穿ちて瓦石を得るこ
とあり。附近には國分東・國分上・國分池
等と稱する字地あり。(安福寺) 大字玉
手にあり。淨土宗。玉手山と號し觀音神
足弟子藤原西化益の遺跡にて、往昔行
基説法の古跡なりと傳ふ。建長の頃長
房信西聖跡の遺蹟を敷き之を興す。のち
太守安福宗正之を重建す。元龜元年兵火
に罹りて堂宇灰燼に歸す。其後百年僧西
日、山科國信寺の河津に勤めて堂宇を造
營せしむ。時に尾張の徳川光友什器を施
入し田圃二十町を寄す。寺寶中山水菩薩
觀音一尊・菩提樹菩薩香宮一尊・牡丹菩薩
觀音一尊・太刀一口(信長御作)等四點

はいづれも徳川光友の施入にして現に國
寶たり。(松岳山古墳) 指定史蹟。松岳
山(國分山)にあり。大和川の岸に沿ひ細
長き丘陵上に築き並び存する九基の圓形
古墳あり。そのうち略中央にある美山古
墳最も大形にて墳上に赤色の尙殘存せる
石棺の蓋石露出し、且つ棺の前後に支那
古代の懸碑に似たる圓孔を中央に穿ちし
板石一枚宛斜に立つ。蓋石の上に明治十
年發掘の際に建てられし圓柱の記念碑
あり。美山の西にある茶臼山古墳よりは
いま舊下の國分神社に藏する支那古鏡三
面を寛永六年出土せりと。また美山の東
に連る古墳の一より大形圓筒形石製品出
で、東北に續く芝山丘陵にある古墳より
も、曾て諸種の遺物出土す。更に古くこ
の丘上古墳の何れかよりの出土品に我が
國最古の銅製鍔の墓誌ありて早くより
考古小鐵に載せられ、いま男爵三井源右
衛門之を藏し表裏に左の銘文あり。惟船
氏故、王後首者足船氏中祖、王智仁首見
那海故首之子也生於乎安國治天下、天
皇之世奉仕於等由山國、治天下、天皇
朝至於阿須理宮治天下、天皇之末、天皇
見其子異仕有功勳、勅賜官位大仁品爲
第三亡亡於阿須理、天皇之末歲次丑十
二月三日庚寅故辰辰年十二月庚辰於松岳
山上共歸安理故能刀自同墓其大兄刀羅古
首之墓並作墓也即即爲安保萬代之墓基固
牢未劫之實地也。蓋し神祇天皇の朝に我
が國に歸化せし王仁の後裔にて、船氏の

祖となりし王辰爾の子王後首の墓誌なら
ん。以てこの丘上の古墳船氏累代の墳墓
なりと推定せらる。
【國分】 ↓南池田村(大阪府泉北郡)
【國分】 和歌山縣那賀郡の舊地名。いま
東西に分れ、東國分は池田村の大字にし
て國分僧寺のありし所。西國分は上岩出
村の大字にして國分尼寺のありし所とい
ふ。
【國分村】 島根縣石見國那賀郡の西北
部。日本海に臨む。西南石見村を隔てて
濱田町あり、南及び東は上府村、北は川
波村と界す。面積六・九七方軒の小村、
村内は五〇米前後の丘陵緩やかに起伏し
て西に延び西南端に迫り、海に臨む所に
赤鼻・桑浦・千疊敷等の出入に富む。沈
降海岸をなし、唐瀧浦の港をもつ。沿岸
の中央部より以北は隆起性海岸にして砂
濱廣く連る。村内田畑よく拓け米・麥・
甘藷・野菜等を作る。唐瀧浦は漁港にて
鰯・鰯・わかめ等の魚獲あり、鰯の産
も亦少からず。唐瀧浦國分を主邑とす。
省線山陰本線、東北より西に南かけて通
過するも便なし。此地に古く和名抄、那
賀郡伊甘郷の内に屬す。村名は國分寺あ
りしより起れるものにして、いま其址僅
に存す。いま國府・久代の二大字より成
り國府に役場を置く。久代に櫛毛天龍簡
彦神社鎮座、底筒男命・中筒男命・上筒
男命を祀る。式内の古社たり。(石見桑
浦) 指定天然記念物。大字國分の海岸

にあり。臺地性を帯びたる第三紀丘陵は
海に臨みて、高さ約二〇米の波瀾尾をな
し、崖下に千疊敷と稱する廣き三町歩に
餘る隆起海岸を存す。海岸の高きは一乃
至一・五米に過ぎずして其表面極めて平
滑なり。明治五年二月謂はゆる濱田地震
の際隆起し水面上に現はれしものにて、
有史後の隆起海岸として模範的のものな
り。崖及び床は共に此地方に分布せる第
三紀新層の砂岩・礫岩・頁岩の互層より
成り、此等の諸岩力水層層に相重なる状
態を呈し、砂岩に往々交層(礫層と
稱す)の發達したるあり。また淺海性の
貝化石及び鯨骨化石を有しその淺海成な
るを示す。殊に特色とすべきはその層中
多数存在せることにして、此等球塊は幾
多の層列をなして砂層中に介在し、風化
水蝕の兩作用に抵抗し海岸上及び崖側に
半球狀の凸出をなせるは頗る奇なり。第
三紀層中には又幾多の斷層交差發達し海
蝕作用に此斷層に備へて、或は湖濱(賽
の河原湖濱・龍穴等)を作り或は島嶼(大
島・鍋島・馬の背等)を分離せしめ、或
は海岸上に直線的裂溝を生ぜしめ、其裂
溝の左右兩側には石灰沈澱して岩質を
硬化せしめ以て異様の水蝕現象を呈し、
時として裂溝内に方解石の美晶を産する
等、各種の地質學的現象に富めるを見
る。千疊敷北部には粗粒玄武岩の岩脈が
第三紀の水成岩を買きて露出し、海蝕の

結果一條の溝渠を成せるあり。砂岩及び
砂岩中の球塊には穿孔具、無數の圓孔を
穿てり。殊に砂岩上に往々海蝕穴を存
するは特記を要す。大なるは徑五〇釐、
深さ六〇釐に至り、殆ど圓形をなし、穴
底に磨石として磨きたる石塊を存す。斯
る標式的海蝕穴は其例甚だ少しとす。
墨ヶ浦の如き局限せられたる一地域に斯
る學術上興味ある諸種の地質現象に富
るは極めて稀に見るところなり。(石見
國分寺址) 指定史蹟。松林にある金藏寺
境内にあり。本堂の下に舊時の金藏礎石
遺存し、また境内の一隅には塔址の土壇
あり、礎石の一部露出す。また古瓦境内
外より發見され、寺に舊寺發見の遺跡巴
瓦・唐草瓦・小塼佛・瓦等所藏せらる。本
國分寺は天平の始め通摩郡仁萬にありし
既設の寺を以て一時その代用寺と定め、
のち更に今の金藏寺地に建設せるものな
り。延喜式によれば、石見國分寺領二萬
東、文殊會料一千東の定めにて盛んなる
寺なりき。(石見國分尼寺) 今の曹洞宗
國分寺なるべしと。一時廢滅したるを永
祿年中福屋肥前守再興し、同十二年福屋
隆兼再興の時、此寺の新藏主撰文を持廻
りしを以て毛利家に因はれたるにより、
寺は再び廢滅せしを、嘉永年間再興せら
る。此寺の附近より金藏寺にかけて奈良
式の古瓦多く出づるを以て、此寺は古の
國分尼寺金堂の在りし地と推定せらる。
【國分】 香川縣被田郡國分村の大字。省

線讀本線の國分驛(明治三十年設置)を
置く。
【國分】 ↓櫻井村(愛媛縣越智郡)
【國分川】 高知縣長岡郡を流るる川。新
改・坂岩二村の山中に發源し、國分村の
東方にて會し香長平野の北邊を西南に流
れ、高知市の東方にて浦戸灣に注ぐ。流
程約一六軒。
【國分町】 福岡縣三井郡にありし村。大正
十三年十一月久留米市に編入す。此地よ
り政瓦等を出土するより見れば、古の國
分寺のありし地ならん。
【國分町】 鹿児島縣大隅國島嶼郡南部の
中央。西は華人町、東は清水村、南は東
國分村に接す。東部に清水村より續く丘
陵の東端部あり、その他の大部分は西
部を南流し鹿兒島灣に注ぐ新川下流流域
の平地にして田畑よく拓く。米・麥等を
出す外、古く國分煙草(陸軍煙草)産地の
中心をなす。また畜産・林産少からず。
縣立國分高等女學校その他の中等學校あ
り。華人町・霧島村間の縣道中部を略東
西に通じバスの往來あり、また省線日豊
本線これと略並行して走り、大字府中に
國分驛(昭和四年設置)を置き、交通便利
なり。和名抄に桑原郡桑原郷見ゆ。蓋し
桑原に桑原の誤にてこの地の附近を稱せ
しものか。而して古くは桑原・附於兩郡
に跨れるもの如し。建久八年大隅國島
田郡に國府郷を分ちて桑東・桑西とすと
見ゆ。のち國府は國分と改めらる。蓋し

此地に國分寺ありしよりならん。明治二
十二年町村制施行の際國分・東國分・西
國分の三村に分たれ、大正十五年國分村
は町制を布き、西國分村は華人町と改稱
す。(國分煙草) 國分煙草は品質の優秀
を以て知られ、産地の中、車田首位にて、
伊勢が屋敷・龍王・砂走・武元を合せて
五ヶ所と稱され、砂ヶ町・有下・常盤を
加へて八ヶ所と呼び、川崎・岡田・梅木・
天神坊を加へて十二ヶ所といふ。梅木は
慶長年間 服部左近衛門勤めて之を栽培
せしころにて、國分煙草の産地たり。
當時の煙草は柳葉と稱して長さ一五釐乃
五一釐、幅九釐乃至一二釐にて現時の
煙草とは其形狀甚だ異れり。(華人城)
大字上小川に址あり。曾於の石城とも言
はれ、火圍命の後裔たる大隅華人以來世
世傳襲の都城たり。景行天皇二十七年、
世傳襲の都城たり。景行天皇二十七年、
取石鹿父なるもの、此處に據りて敷し日
本武尊の爲に誅せらる。小川はいま拍子
川といひ、鹿申橋はもと拍子橋といふ。
川上船師酒宴の時手を拍ちて舞せしに由
りこの名ありといふ。島師の弟建見の殺
されしは此橋畔にして華人城址の東北十
町餘の所にあり。景行天皇二十七年秋熊
襲再び反して邊境を侵す。天皇、皇子小
碓に命じて之を討たしめ給ふ。皇子時に
御年十六。美濃國入彦彦公の弓を善くす
るを聞し召し、使を遣はして之を召させ
給ひ、弟彦公、乃ち石々占横立、及び尾
張田子の精靈、乳近の精靈を率ゐて大和

を發し、同年十二月熊襲の國に濱し給ふ。
先づ賊徒の情勢を探るに、熊襲の巨魁川
上島師、華人の城中にあり、一族を集め
て盛宴を張る。皇子聞きて喜ばせ給ひ、
「さらば手段をもて、討ち取らん」と髪
を解きて皇子の姿を装ひ、劍を袖裏に隠
し持ちて城中に紛れ入り給ふ。時に酒宴
今や正に酣。女装の皇子島師の宴室に入
りて女中の中に混りて坐し給ふや皇子の
氣品一座を歴す。島師其の容貌を見て之
を悦び其手を取りて席に延ぎ、杯を舉げ
て酒を酌む。更漸く聞けて衆漸く散じ左
右に人なし。島師尙も酒を被り、皇子獨
りこれに在す。皇子袖裏の劍執るより早
く島師の胸を刺し給ふ。島師驚きて「ヤ
レ待ち給ひ、申さんことあり」と呼ぶ。
皇子其手を緩め給へば、島師先づ「君は、
何人にて渡らせ給ふぞ」と問ふ。皇子辭
色愼然として「我れこそは、大足彦天皇
の子、倭童男と申すものなれ」と答へ給
へば、島師叩頭しつゝ「我は、國中の最
も強力なるものにこそ候へ、多く武力の
ものに遇へども、未だ君の如き御方を見
奉らず、驚しき身ながら、尊號を上つら
んとこそ、存じまつれ、あはれ、聽させ
給ひ」と申せしに、皇子「聽す」と告げ
給へば、島師「さらば、今より後、倭武
命と稱し給ふべし」と言ひ畢りて、息絶
えぬ。島師の弟建見此體を見るより駭き
て逃れ去る。皇子之を返りて橋畔に至り
劍を尻より刺し貫きて殺し給ひ、更に弟

彦公等に命じて餘額を誅せしめ給ふ。斯くて無難悉く西州の平定全く成る。〔華人塚〕指定史蹟。無雙の懸崖を慰むるため和銅元年建設すと傳ふ。現狀略方形の封土の上に石造多重塔三基と四天王像を置く。他に類例乏しき一種の供養塔なり。〔富原城〕大字住吉にあり。城郭平地にて諸所に石垣残りいま松林なり。島津義久築く所にして、文祿四年十月鹿兒島内城より富原に移る。嘗て近衛前關白信輔公陸軍に下り、同年七月京に歸り上らんとて、鹿兒島より此地に渡り一日此城にて歇の會ありけるに、信輔公「立歸る名残こそあれ松露は涼き秋の朝りと思へば」この城門の茅葺なるを侍臣諫めて、他國よりの使者等來らん時見苦しければ瓦葺にせばやといふに、義久、土庶の富強なるこそ願ふ所なれば、城門の茅葺なるは我が輩に非ずと答へしといふ。〔大隅國分寺址〕指定史蹟。本町向花にあり。舊寺城に共有墓地あり、土壇の一部残存し、墓石間に礎石一箇、石造の層塔、六觀音像、仁王像等存す。層塔は凝灰岩製にて高さ約四米、六重なるも、七重塔なりしを上層三重を失ひ、二重のみを後に補ひしものにて蓋石は軒の出少なく彫刻を以て二軒を表しをれり。第二層の石面に康治元年壬戌十一月六日と彫刻あり。六觀音石像は小形にて大願寺御安堵水縁五年壬戌申春校修云々の銘あり。また仁王石像は上段部、同願

部を缺くもの、下段部等は墓地内に存在し居れり。布目瓦を地中より出せることありともいふ。〔日富山温泉〕水房・延飾・明治の三温泉の總稱。新川左岸に湧出す。良質遊瀧泉。
コクフナンジ 國分寺 天平十三年聖武天皇の勅願國家護護のため諸國に命じて建立せしめられし寺。曾尼二寺あり。曾尼はこれを金光明天王護國之寺といひ、尼寺はこれを法華滅罪之寺といひ、動して堂塔を造營せしめらる。この兩寺を併せて一般に國分寺といひ、多くは國府の附近にあり。大和にては東大寺を以て總國分曾寺とせられ、法華寺を以て總國分尼寺とす。一に國分といふも國分寺の轉訛なり。いま諸國に國分寺・國分の名、地名として残れるもの多し。別表國分寺表参照。

Table with 2 columns: 山 城 (Mountain/City) and 大 和 (Great Yamato). It lists various locations and their historical significance related to the Kokufu temples.

Table with 2 columns: 河内 (Kawachi) and 畿内 (Kansai). It lists various locations and their historical significance related to the Kokufu temples.

Table with 2 columns: 出羽 (Iwate) and 關東 (Kanto). It lists various locations and their historical significance related to the Kokufu temples.

Table with 2 columns: 安 齋 (Aizawa) and 周 防 (Suou). It lists various locations and their historical significance related to the Kokufu temples.

國分寺と隣す。關東平野内の一部を占め、妻川流域と東部に水田多く、他に如地をなして所々林を交ふ。農業を主として米・麥を産し特産物に干鰯あり。陸羽街道及び省線東北本線は村の中央を北走し、小金井驛(明治廿六年設置)を設く。此地は國分寺址及び小金井一里塚あるを以て知らる。此地古に何郷に屬せしものか詳かならざるも、或は後世河内郡に入りし高栗郷の内や、または布田郷に屬せしものか。明治二十二年町村制實施と共に小金井宿・川中子村・國分村・箕輪村・笹原新田村・榮村の一宿五箇村を以て一村を組織し、この地に國分寺ありて其郷を國分村と稱せらるるに因みて國分寺村と稱す。村内に石器時代の石器を出土し、また前方後圓、丸塚等多數あり。大字小金井は明治九年、明治天皇が皇羽御遊幸の際この地に御小休あらせられ、御遊幸の際にも此地に御小休あらせられたり。同十四年に山形・秋田及び北海道行幸の際にも此地に御小休あらせられたり。(小金井一里塚) 指定史蹟。本村小金井にありて陸羽街道と並行せる舊奥州街道を挟み、左右二基の塚、東西の路傍に相對立す。二基共に直徑約一〇米、高二米中、舊街道はいま塚の間に村道として名残りを止むるに過ぎず。一里塚は慶長九年徳川幕府の定めにより東海・東山・北陸等の諸道の街道に築造されしものにて、その多くは既に破壊せられたるも、二の一里塚は左右二基ともよく舊態を存

し江戸時代の交通關係を示す。(下野國分寺址) 指定史蹟。本村大字國分にあり。寺址は櫻林の中にあつて東西三〇米、南北三五米、略長方形區域にして所々に土壇と土壘を遺存せり。講堂址及び食堂址の土壇は何れも長方形をなし、地表より七五釐乃至八五釐の高さありて、礎石は何れも地下に埋没し露はれず。塔址の土壇は高さ一米ありて五箇の礎石を存し、心礎は方形の礎石にて圓柱孔あり。國分寺址の東三〇米、釋迦堂と呼ぶ地上にも土壇を存し、奈良時代の古瓦發見せられたり。國分寺址の東北一軒、安養院に國分寺址發見の古瓦十數片を發し、同院釋迦堂に別國分寺の礎石が用ひられたり。〔國分寺村〕 東京府武蔵國北多摩郡の中郡。西に立川町、砂川村、北に小平村、東に小金井町、南に府中町・西府村・谷保村と隣す。面積一・四八平方町。武蔵野臺地の一部を占め全部畑地なり。未麥を産しまた養蠶盛に行はる。省線中央本線横斷し、國分寺驛(明治二十二年設置)あり。西武鐵道と接続す。また多摩湖鐵道の東國分寺驛(昭和八年設置)あり。この地は近世、多摩郡府中領に屬す。或は野方領に屬すともいふ。大字國分寺は延寶六年、野村彦太夫の檢地あり、徳川氏關東入國の頃より幕領にして寛永・正保の頃は野村彦太夫が代官となりて治め、のち大岡源右衛門の支配地たり。國分寺の前畑の地に片居塚あり、往昔その

傍に名倉等住居せしものかと稱せらる。大字國分寺は府中領に屬し、北越より鎌倉に到る街道の驛次にして遊女等居り賑はふる所なれば、これより懸ヶ崖の村名も生じたりといふ。徳川氏關東入國の頃より幕領にして代官は正保・延寶の頃は野村彦太夫、天和年中は中川中兵衛・野村彦太夫・成瀬五左衛門、元禄元年より細井九右衛門、のち大岡源右衛門の支配せし地なり。この地に石器時代の遺蹟のあるを以て名あり。江戸名所圖會「懸ヶ崖、同所坂より下の低き地をいふ。古へ東奥北越等の國々より京師及鎌倉等へ至るの驛路にて、その頃遊女の居るなどありていとにぎはかりしとなり。此地に牛頭天の遺蹟あり。竹林の中に圓なる地あるを、古の北國街道の舊址なりといへり」(阿彌陀坂) 懸ヶ崖を北に向ひ下る坂にて、その左の岡に阿彌陀堂あり。高山重忠、己に貞節ありて遊女の死を悼みて建立せしものといふ。江戸名所圖會「阿彌陀坂、富士見坂より十三町あまりを隔てて懸ヶ崖村の地北へ向ひて下る坂を云。此坂の左に傍はる岡に草庵あり、土人阿彌陀堂と稱す。木像の阿彌陀如來を本尊とす。延享四年鶴心と云僧、此僧庵の廢れたるを興す。土人云、古の本尊に御像にして、今府中六所宮の社地にあるものは是なりと相傳ふ。往古高山庄司大郎重忠、此地懸ヶ崖の驛舎にやどりし頃、寵愛せし遊女ありしが、重忠平家追討につ

きて西國へ出陣せらる。然るに其後、なこのものありて、重忠討死したる由いつはりすかしたりしを實とし、かの遊君歎きのあまり遂に自殺したりしを、のち重忠開てあはれみ、彼遊君が節操を感じ、菩提の爲めに此阿彌陀堂を建立し、鎮を以て彌陀如來の像を鑄て安置せしといふ。因にいふ、此地に道場畑と字する地あり。土人云、むかし此地に無量山道成寺と號する寺院ありし故に、しか唱ふるにぞ。しかるときは、此阿彌陀堂も其境内にありしものなるべきか。又云、今府中六所宮の社地にある所の、鎮像の彌陀佛は、重忠愛せし遊君の菩提の爲建立する所の佛體なりといへども、其佛像の銘文年號等を考へれば、重忠とは時世大いに違ひ誤りなる事明らかし。猶六所宮の鎮下をみるべし。〔國分寺〕大宇國分寺にあり。新義眞言宗豊山派。醫王山最勝院と號し聖武天皇の勅願に依りて諸國に造營せられし國分寺の一にして、金光明四天王護國之寺と號號を賜はり、施封五十戸、水田十町、僧二十員を置きたる互割たり。元弘年中新田義貞北條氏と交戦せし時兵火に罹り、本尊を除く外一山悉く灰燼に歸す。建武二年義貞恐懼して黄金三百兩、伽藍二百員を寄進して之を再建す。のち幾多の變遷あり、戰國の代を経て徳川時代に至り漸く衰頽せしが、寶曆年中賢盛之を再興す。堂宇に藥師堂・仁王門・本堂・鐘樓・客殿・樓門・庫裡等あり。行

基菩薩作と稱する本尊藥師如來は國寶たり。〔武藏國分寺〕指定史蹟。大宇國分寺にあり。寺址は丘陵及び低地に互り東西七〇〇米、南北五五〇米の地域を占め、金堂・講堂・塔婆等の址は現國分寺本堂の西南、宇八幡前とあり。金堂址のあり地は俗に古堂と呼び、土壇・礎石約二十箇遺存し、七間四間の建物の存せしと推知せらる。講堂址は金堂址の北方、僧房址は講堂址の西にありて何れも礎石遺存す。七重塔婆址は金堂址の東南一五〇米、宇前野の畑中において十個の礎石と圓柱孔ある礎礎遺存し、四間四間の建物のありしことを推知せらる。南大門址は金堂址の南二二〇米の地にありて遺瓦散在す。昔時國分寺と國府とを連絡せし大路の址は、金堂址より西南、門址を通じて府中に達する里程となりて遺存す。なほこの外講堂の北七〇米の丘上、仁王門及び藥師のある所に殘存せる礎石は北門址と推せられ、また金堂址の西四〇〇米の丘陵上に存する礎石・古瓦は西院址と推知され、なほ僧房址と講堂址との北に土壇遺存す。〔國分寺の碑〕大宇國分寺にあり。現國分寺藥師堂の前庭にある碑。寶曆年中國分寺再興の際建立せる碑にして、碑文は元應中央撰、書は河保壽。國分寺の由来を記す。

【國分寺】 ↓春日村(新潟縣中頸城郡) 【國分寺】 ↓眞野村(新潟縣佐渡郡) 【國分寺】 播磨國(兵庫縣)の古地名。大正十四年漸く起工の運びとなり、その後更に十餘年の歳月を費して、今や紫川以東に廣大なる埋立工事を完了し、その中央に新小倉港の出現を見るに至れり。新港は東北に開き、幅員三六四米、奥行約五八〇米、水深一〇米、その水面積は六一・四一六坪にしてその東西兩岸には計六五四・五米の繫船岸壁を設け、一萬噸級の船舶四隻を同時に接岸荷役し得る能力を有す。陸上設備は未だ完備するに至らざるも、大阪商船・尼崎汽船・播磨汽船・北九州商船等は何れも数年前より定期寄港を始め、海峽汽船會社は小倉・下關間の連絡渡船に従事し、外國貿易船のためには不問港寄港が特許せられ保税地城が特設されて門司税關の小倉派出所も昭和十年以來開港せらる。岸壁の大型重機(能力十噸)も同時に運轉を開始し、附近には既に鐵道省海底電線監視所を初め市營の各種市場・鐵工場・伸鐵工場・倉庫等が建ち立。一方下建設中の國鐵浜田・日田間の新線路の開通後には、賣球山炭及び煉炭の出貨發到すべく、他方關門鐵道の完成に於ては旅客の乗降増進すべく、近き將來には開港さへも期待せらる。舊港もまた前面の埋立と共に大いに修築を加へられ、水深三米を保つ一萬餘坪の船溜を有し、小型汽船及び船荷役にも便し得ることとなりて面目を一新せり。〔小倉港〕本市を原産地とする水産物。初め梅地及び帯地として有名なりし

は漢江に限られ、南斜面は洛東江の上支乃城川の水源地たり。 【コクモトリ】 小雲取山 紀伊中島南東部に在する連嶺を云ひ北端部に如法山(六一〇米)起る。東方斜面は和歌山縣東牟婁郡三津ノ村・小口村に、西方は勝川村に屬す。山體第三紀層より成り、主脈はほぼ南北に走る。南麓を和田川流びて北東流し、赤木川となりて熊野川に合ふ。和田川乃至赤木川の南方に大雲取山の連山ありて對峙す。西麓は熊野川支流大塔川に限らる。小雲取山の頂嶺を縫ふ尾根道あり、即ち小雲取越とす。 【コクテ】 小倉 〔小倉市〕 福岡縣の東北隅に在す。北は鹽灘を隔てて玄海に面し、東は門司市、西は八幡・戸畑の兩市に接し謂はゆる北九州五大都市の中央部を占む。文永の頃既に緒方氏の築城を見、その後毛利氏・細川氏等を経て寛永以來小笠原氏十五萬石の城下町なれど、關門海峡に近く水陸交通の要衝に當れば江戸時代に九州諸大名の參戰交代に際しその宿泊地となり、自ら港市としての重きをなし、市勢また隆盛を極めたり。明治四年には小倉縣を置かれてその首邑たりし。同十一年福岡縣に併合せらる。明治三十一年に第十二師團司令部を置かれてより軍事都市として繁榮を加へ、明治三十二年四月市制を施行せり。その後日露・歐州の兩戰役を経て工業都市に再興し、大正十四年に

は福岡の久留米轉移を見たりも、昭和八年十一月には陸軍造兵廠小倉工廠が本市に移轉開造し、工業都市の面目は着々發揮せられ、殊に本市は關門要塞地帯に屬し、昭和十二年八月には西部防衛司令部の開造を見て、市の重要性は愈々加へらる。これより先市勢の進展に伴ひ、大正十四年には金都板橋町を、昭和二年には岡部足立村を併せ、更に昭和十二年九月には岡部金敷町をも併合して、今や東西九・三軒、南北八軒、面積三二・六軒、人口一〇、三七八人の大都市となれり。市域はその東西兩端を丘陵にて劃され、唯南方のみ開けたれば市街は南北へ發展する傾向あり。市の中央を北へ貫流する紫川は本市發達の原動力とも云ふべく、その河口は舊小倉港にして、これに近くその左岸に小倉城址あり。その南隣には小倉工廠が廣く建ち、北隣には市役所・公會堂・憲兵隊等あり。近年八幡製鐵所發展の影響を蒙り、その重工業漸く本市にも普及して海岸平地の必要領に加はり、小倉港以東の海岸一帯は既に埋立を了し、二十六萬餘坪の新開地淺野町を見に至り、以西の海岸は目下埋立中に屬す。而してこの海岸附近には製鐵・製鋼等の諸工場が建ち、南部の鐵道沿線には鐵道・製紙・製陶、其他、大小の工場が築出し、工場数は約五十、職工數も八千人に近く、曾ての閑靜なる住宅街も一變して工場區域と化しつゝあり。紫川とその

分産津川の間に一帯に市の中部部を占めて商業區域を形成し、裁判所・稅務署、商工會議所等のほか會社・銀行・老舖等櫛比し、就中魚町・京町に繁華を極む。東部より南部を経て西部に至る外廓部には延命寺遺蹟・福聚寺・御祖神社・蘇社・寶馬場・蘇八幡神社(蘇社)・到津遊園地・放送局等の外に各種中等學校あり。鹿兒島本線は市の北部を東西に貫き東小倉・小倉の二驛を置き、九州電氣鐵道線またこれと並行して門司・折尾間を連絡し、市内大門驛に於いて戸畑支線を分つ。日豊本線は小倉驛より分岐して市の中央を南に貫き、小倉鐵道は東小倉驛より南して彦山口、小倉電氣鐵道は大阪町より歩兵第十四・野戰重砲兵第五・第六の三部隊の兵營地北方に至る。市の生産額五、三六一萬圓のうち九八%以上が工業製品にして、鋼材・鐵製品・洋紙・陶磁器・電球等の産多く、小倉城また名あり。〔小倉港〕小倉市の中央部を貫流する紫川の河口に在り、往時は本州との交通繁く、北九州唯一の要津たりし。その規模小にして水淺ければ、門司港の完成後はその繁榮を奪はれ、逐年衰微の一路を辿り、明治の末葉には港灣としての存在をさへ認められざりき。されば明治三十三年には既に築港計畫も樹立しながら、各種の事情によりて實現の運びに至らず、在昔歲月を經る間に歐州大戦の勃發に遇ひ、港灣の重要性また確認せられて

が、其後腹地としても大いに用ひられ初め、これらに岡山縣・廣島縣・大阪府・愛知縣・埼玉縣等に多く産出せられ、今はこれらの産地が主産地となり、小倉は寧ろ他の小倉鐵を産出する。腹地小倉は大量生産による輸出向輸出布にて滿洲國・支那・シベリヤ・南洋・オーストラリア等の各地に輸出せられ、内地にては學生服及び作業服とす。腹地小倉の品質、織造ひ等は産地・等級により一定せざるも、色合にて大別すれば白・無地及び露降とに分たる。學生服の小倉は平織のもの多く、白は晒せしものなり、無地物に茶・黒・紺・カーキ色・空無地等あり。露降小倉は、この摺摺の下縁の一方に白縁を使ひしものにして外觀露降となる。組織は平織、綾織及び五枚朱子等あり。朱子組織の小倉は岡山縣の特産にて、朱子日露降小倉といふ。腹地小倉の地合は夏著の他は綿にて比較的厚し。使用絲に瓦斯絲を用ひしものを「瓦斯小倉」といふ。なほ絹織物にて同様に織りしものを「絹小倉」といひ、絹織とも紡績絹織を用ひ、これ等の小倉の幅は廣幅にして大體二幅(三〇吋)前後あり。帯地小倉は平織組織の琥珀地で男帯多し。その中央に縞または細長き長さの方向に二方連続縞を織り出せしものを「御結入り」といふ。御結には絹絲・絹紡絲・人造絹絲等を用ひ、商人及び職人等の角帯にす。なほ昔は女帯地もありたり。小倉持地は地合の綿け

し織物にて主として織物多し。學生向の
實用的なる持地なるも、近年は洋服にお
され需要減少の傾向あり。主に福岡・埼
玉縣に産す。尙ほ上記の服地・帯地・袴
地等の小倉の他に、袋地・鼻緒地小倉・袴
生地の布地に用ひられ、鼻緒地小倉には
時にメッキヤス層を用ひ、横紋のたつ如
くに織りしものにて、横上幅は一尺二
寸方五一尺六寸、一反の長さ六・三米は
かりにて服物の鼻緒地に用ひらる。

〔小倉城〕小倉の地は西海の關門を扼した
れば古來重要な地として夙に築城のこと
あり。文永の頃緒方惟重初めて城をこの
地に築き、延慶年間水原氏の居城たり。
その後、原田・菊池・白杵・小野田・長野
の諸氏居城せりと傳ふるも、その位置詳
ならず。天正十五年毛利尙書守備信二に
居城す。慶長五年關ヶ原役に勝信西軍
に與せしを以て、その不在に乘じ黒田孝
高、小倉・香春を占領し勝信討せらる。
同年黒田氏また筑前に移り、細川忠興丹
後宮津より轉封せらるるや、翌年蒲生川
〔今の常用〕の左岸の地(現城地)をトして
新に築城の工を起し、七ヶ年にして完成
す。勝山城又は勝野城と稱し、領西の一
名城たり。寛永九年細川忠興肥後に轉封
し、小笠原忠直播磨明石より入城し、子
孫相傳へて維新に至る。慶應二年長州奇
兵隊の攻撃に遭ひ、自ら火を放つて田川
郡香春に退きたれば、さしもの名城も今

は僅に城壁と濠渠を止むるのみにて一の
建物を見ず。明治八年歩兵第十四聯隊を、
十八年には第十二旅團司令部を、更に三
十一年には第十二旅團司令部を相次いで
置かれて軍府の中心となりし、大正十
四年師團司令部久留米移轉と同時に歩兵
營も南郊北方に移され、今は細川忠興の
創建にかかれ八坂神社(縣社)あり。
〔思水館〕小倉藩の藩邸。寶曆八年五月
創立。思水齋と稱し、天明九年思水館と
改む。明治二年正月、豊津に改築し有徳
館と改稱す。

〔衛生八幡神社〕南方に鎮座。縣社。祭
神、多紀津彥命・品陀和氣命・息長帯姫
命・大山祇命・細川神孝・同忠興。社傳
に據れば、往昔は二神(虹山)に於波姑
比賣神・南香祭命二神を鎮祀せしが、
貞觀年中、豐前守佐八幡宮を勧請し相殿
に祭れるに創むと云ふ。元弘年中、虹山
城主規矩時秋・同高政の崇敬篤く社領若
干を寄せ、應永年中に同親忠、社領を造
營したるも大永二年兵災に罹り鳥有に歸
す。時に岩松某これを愛へ、一祠を高濱
に建て規矩八幡宮・高濱八幡宮と稱す。
天正十五年毛利成儀、新に祭田を加へ、
慶長年中には細川忠興小倉城再興の勳、
社領を今の中島山に移す、土地二町社
領二十石を寄せ、現社に改稱せしむ。
由來、到津・門司(甲宗八幡)・篠崎・小
倉の祇園祠と共に近世五社の一に列し、
領主小笠原氏累代の祈願所たりき。細川

勝孝・同忠興は明治十三年合祀す。社地は
山岳に倚り、清潭その閣下を經ひて風致
殊に勝る。例祭、九月五日。(舊時八幡神
社) 篠崎に鎮座。縣社。祭神、帶中津
日子命・品陀和氣命・息長帯比賣命・市
寸鳥比賣命・多紀理思賣命・多紀比賣
命・玉依比賣命。敏達天皇十二年の創建
と云ふ。社傳に據れば、仲哀天皇九年に
神功皇后三尊より御凱陣ありて、偶々波
前國糟屋郡に於て皇子磐田別命(應神天
皇)を産み給ふ。糟屋郡宇淵之郷と稱す
るに即ち皇子御降誕の遺址にして、のち
皇子は當國金部郡尾山に駐蹕せられ、
因りてその山麓に一祠を營みて葛城丸
の苗裔なる小藤丸をして祭祀せしめ給へ
るを、その創建なりとす。天平十二年太
宰少貳廣嗣叛逆の時、官軍は板橋川の東
に陣して當社に戰捷を祈願し、その報賽
として幣帛を奉り且つ神饗・神馬を寄進
す。嘉祥三年十月社殿を宮尾山に遷し、
のち天慶五年藤原純友・小野好古の兵亂
に禍ひされて社領鳥有に歸せしかば、こ
れを今の高丘に移す。後白河天皇御
宇、判官平康盛の國司となるや、祈願の
趣ありて本殿以下を造營し、文治二年に
再び舊地宮尾山に遷座す。貞和三年三月
足利登氏社殿を建立し、永正八年再建せ
らる。のち大友宗麟のため本殿以下悉く
失ひしが、慶長年間に細川忠興これを再
建し、その祈願所と定め社領二十石を寄
進す。寛永九年小笠原忠直の入國するや、

に御坊といふ。明應四年蓮如の弟子道詮
の開創なり。初め京都室町にありしを、
慶長十二年、城主の命により現地に再建
す。寺僧西吟は本願寺學發第一代の能化
にして城主小笠原忠信厚く之に歸依し寺
祿を附せんとせしめ受けし、乃ち山林一
區を寄せて淨用に給すとす。(大興善
寺) 蒲生にあり。曹洞宗。靈尾山と號す。
寛元年中創建。開基は北條時頼にして、
その臣佐野源左衛門當世に命じて造營せ
しめ、西大寺觀音を請じて開山とす。爾
來西大寺の末寺にして十八大刹の一たり
き。曆應年中駿河權頭物部武村の菩提所
となり、應永年中大内義弘寺田五十石を
附し、永享六年足利義弘寺田八百石を寄
進す。のち大友宗麟の兵火に罹り、境内焦
土と化す。承應年中再建せらる。元祿三
年領主小笠原忠雄寺田若干を附しやや舊
觀に復せしむ。慶應二年長州奇兵隊の兵
火に燒かれ、明治初年再建す。(福聚寺)
足原にあり。黃檗宗。廣壽山と號し、寛文
五年領主小笠原忠貞の建立に依り即非を
開山とす。初め即非明國福州より來朝す
るや、忠貞小倉開善寺内に一庵を創し金
栗園と號しこれに住せしむ。留鳥數日に
して山城宇治黃栗山に入り隱元の化を興
く。寛文四年九月再び當地に歸り金栗園
に入る。翌年小笠原氏即非のため足立山
西麓に一字を創す。延寶六年十月小笠原
忠雄寺領四百石及び山林三十餘町を附
す。爾來寺名一時に顯揚し、大本山萬福

先規に從ひ祈願の寄附、神設の造營等あ
りて領家累代の祈願所と定む。寶曆十四
年小笠原忠雄は神設・幣置を造營す。明治
六年七月終社に列し、のち縣社に昇格す。
例祭、十月二十四日。(八坂神社) 辨物師
町に鎮座。縣社。祭神、稻稻田命・須
佐之男命・天之香日子命・天忍穗耳命・天
津日子祖命・活津日子祖命・熊野久須比
命・市寸鳥命・多紀理彥命・多紀津彥
命(以上北殿)。大名平運命・少彦名命・
須佐之男命・奇稻田命(以上南殿)。元
和三年細川越中守忠興の居城を小倉に定
むるや、南北の兩殿を營み、南殿には當
郡不列山(今の愛宕山)の祇園社を、北殿
には當郡片野村(今の平松)の祇園社を移
し、以て城中鎮護の神と定めたるに創む
と云ひ、その創建ともにも社領百餘石を
寄進す。爾來、領主の崇敬厚く修營年費
等すべて藩費を以て辨せりと云ふ。一説
に、豐前誌は社傳をあげて貞觀十二年四
月の創建とも云ふ、記して後考を俟つ。
明治六年五月縣社に列す。社領は本殿・
幣殿・能舞臺等にして、境内地一千五百
四十餘坪を有し、豊野の地を占め眺望佳
し。例祭、六月二日。(御祖神社) 足原
に鎮座。縣社。祭神、天之御中主神・高
皇產靈神・神皇產靈神・磐石別命・和氣
清彥。稱徳天皇神護景雲三年の創建と云
ひ、同年九月和氣清彥は弓削道鏡一派に
讒せられて大隅國に流謫せられ、その遺
次、宇佐の海邊に漂著す。偶々宇佐八幡

神の靈顯を蒙りて竹和山々頂に造化三神
を勧請して一祠を營み、寶曆の無窮を祈
れるを以て、今の御祖神社上宮の創始な
りと傳ふ。其後、弘仁八年八月に至り清
應の五男參議眞嗣勅使となりて宇佐宮に
下向の時、下宮を創す。これ即ち今の當
社にして清應及びその祖なる磐石別命を
分祀す。寶龜元年、清應の四男眞保は兼
曇して妙運と號し、宮坊を葛原村磐石坂
に建立して平庭寺(一に妙見寺・足立寺と
も云ふ)と稱し、永く當社の祠宮として
奉仕す。天曆四年勅願所となる。應永二
年大内義弘は上宮並びに諸堂宇を増築し
且つ三千石の社領を寄進す。天文の頃、
兵變に罹り堂塔悉く鳥有に歸せし、慶
長六年細川忠興は上宮を再興し、下宮(當
社)を葛原より現社地に再建し社領三十
石を寄進す。寛永九年小笠原氏入國以來、
累代領主の崇敬厚く、のちその祈願所と
定めらる。明治元年に妙見社の舊稱を改
めて御祖神社と稱し、同十二年村社に列
し同十三年下宮社殿を造營す。同四十三
年建造物全部の増改築を行ひ、大正五年
終社に、同十五年縣社に昇格す。境内三千
百六十七坪。社實に清應關係のもの及び
古鏡を有す。例祭、四月十五日。(到津八
幡神社) 板橋に鎮座。縣社。祭神、息長
帯比賣命・和魂・息長帯命・品陀和氣命
和氣命外五柱。創建年代は詳ならずされ
ど、社傳に據れば、神功皇后三尊より御
凱陣ありて此地に著津し給ふ、故に地を

到津と呼び、その著津の遺址をトして皇
后以下の諸靈を鎮祀せしに創むと云ふ。
のち文治四年、神託に依り更に宇佐八幡
の分靈を勧請して合祀するに至る。宇佐
宮大鏡に依れば、曾て到津莊に於て神田
百三十町を有し、その四五、東は古藤岳
並びに大町、南は高杉山、西は筑前造賀
郡界に限り、北は海に阻るる由見ゆ。古
來四時の祭祀等すべて宇佐神領を以て充
てられ、神主また宇佐大宮司の支族代々
これに當り宇佐神宮と格別の關係を有
せり。天正年間に九州擾亂の際に社領一
時廢版に歸せしが、慶長年間に細川忠興
は造營の工を竣へ、以て豐城の宗祠とせ
り。のち小笠原氏の代りて領主となる
や、郡内五社の一に列し、崇敬殊に厚く
神領等すべて先規に從ふ。明治初年終社
に列す。例祭、九月十五日。(白雲神社)
大字端田に鎮座。縣社。祭神、天兒原根
命・天字豆賣命・猿田彦命、外數神。創
立年代不詳。往昔領主の崇敬を受け多數
の社領を有せしが、天正の兵亂に沒收せ
られ社領還轉せりといふ。近村の産土神。
例祭、十一月二十日。(神理教本院) 舊
金救町大字徳力にあり、日豊本線城野驛
から南三・五軒。神理教は神道の一派に
して、明治二十七年教祖佐野經彦布教を
開始し、救世安民を教旨の眞義とす。信
徒は五十萬を超え、支院分院合せて五百
を有すと云ふ。
〔水照寺〕 米町にあり。眞宗本願寺派。俗

寺に次ぎ、他の中本寺に超格するの位置
を占め、其支末五箇國に亘り、寺門隆盛
を極めしが、慶應二年小笠原氏と長州毛
利氏との戦火に罹りて伽藍灰燼に歸す。
のち復興せられしが明治維新に當り、寺
領山林悉く土地となる。現今往時の盛衰
なしと雖も、尙ほ當宗別格寺にして地方
の名刹たり。寺實に雪舟筆山出釋迦像一
幅・小笠原公室永貞院殿蘇鐵の佛像三
幅等を有す。寺地附近に小笠原氏累代の
墳墓あり。
〔延命寺遺園〕 關門海峡より六連島を見
晴し其風光絶佳にして、陽春櫻子の候に
は花香多く北九州隨一の名所たり。往時
江戸東叡山寛永寺の末寺たりし西宮の延
命寺及び東照宮の御社ありし、両宮の變
跡後荒廢に歸し、今は明細の公園地とな
れり。(企救の濱) 萬葉以來の歌枕とし
て名高く、往時海に沿ひて打鼓し松並
木今僅に其名残り延命寺附近に止むる
に過ぎざるも、多くの紀行文・詩歌等に詠
まれし風光・歴史は流石にゆかり深きも
のあり、昭和御大典に主基地方歌として
坂正臣氏により「君が代はよきことのみ
なきの濱ながきがたのしかりけり」と
と歌はる。(小倉遊馬場) 企救町の北方
にあり。設立費二百萬圓、面積約四三ヘタ
リ、馬場の一周一軒六馬場内の庭園式
本馬場、8字型障馬場等を利用して、
大ゴキリョウターの設あり。(市營林間公
園) 黃栗山一雙の寺たる福聚禪寺を前に

抱き、風光明媚なる足立山を背負ふ松林... 傳説あり。今も遺側に須川神社あり。...

傳説あり。今も遺側に須川神社あり。... 天保元年五月六日病歿す。大正五年...

【小倉海】 福岡縣小倉市の北方の海。北... 【極楽】 飯田市の南西方約一七軒に當...

通過せし、海水浸食のため、通行不能... 【コクリヤマ】 小栗山 新潟縣南魚...

は多紀郡大山村に、西に箱原町に隣る。... 【國領川】 愛媛縣新居郡にある川。...

とあり、川東門濱は今の島根縣八東郡加... 【コクロー】 小黒部川 黒部川の一...

のやや下流にて黒部川に合す。... 【コクロー】 山形縣山形市...

神社は養蚕期の参詣者頗る多し。山口の... 【コクン】 古郡 朝鮮全羅南道珍島...

【コクン】 古郡 朝鮮全羅南道珍島... 【コクン】 古郡 朝鮮全羅南道珍島...

コクリー——コクン

三三三

コケナ——コケツ

の南に仙遊島・串芝島・風女島・新侍島等集團をなす。仙遊島の東岸大長島・壮子島との間に好漁地ありて、漁船の娯集盛なり。

コケイ 虎溪

【虎溪山】 岐阜縣土岐郡多治見町長瀬にあり一丘阜。中央線多治見驛の北西方約一軒半。土岐川この丘の南東麓を流れ、深淵をなしその中に奇岩怪石相錯び、絶景をなす。名古屋方面より行樂の人多し。南麓附近は陶器・磁器の製造を以て著し。永保寺と稱する寺あり。虎溪山と號す。正和二年夢窓國師、足利尊氏の命に依り草創せしとぞ。夢窓國師家集に「雲州虎溪」と云山中に栖待りける頃、一筋の道だにもつたへぬ山の奥なれど、參學の志あるたぐひ訪來けるをいとひ侍て、世のうさにかへたる山の淋さを訪はぬぞ人の情なりける」と見ゆ。また中國軍記に「安藝の國御許の山のなかりせば美濃の虎溪は日本一也」とあり。

【虎溪面】 朝鮮慶尙北道開陽郡のほぼ中部。東より北は山陽面・山北面に、南より西は戸西面・麻城面に夫々隣接す。西境を七七八百米の高山南北に走り其山脚東南に走り、面内概ね山地を成すも、南境を嶺江東流して其沿岸に耕地拓く。主生業は農にして米・麥・豆類・粟・大麻・綿等を産す。西境を一等道路僅に據むるのみにして、主要道路ほとんど面内を通ぜず、交通は未だ便ならず。

コケイ 梧溪

【梧溪】 東海北部線の一驛（昭和四年設置）。朝鮮咸鏡南道安邊郡安邊面にあり。

コケイツ 古美津

【古美津】 往昔朝鮮新羅國にありし地名。書記神功皇后の四十九年堂田別・鹿我別等の將を遣はし、この地に至りて南羅代國多羅を降しこれを百濟に賜ふ。境は今の全羅北道赤邑郡の邊といはる。

コケツ 五結庄

【五結庄】 臺灣臺北州臺東郡三庄中の一。本郡の東端即ち宜蘭濁水溪最下流域の南岸に沿ふ地帯に位し、東は海に臨む。西は北より三尾庄・羅東街・冬山庄に夫々隣接し、南は蘇澳郡澳庄と界を交へ、北は宜蘭濁水溪を隔てて宜蘭郡壯圍庄に相對す。即ち北境には宜蘭濁水溪の流れるあり、尙東部には同溪の小支流あるため、地勢平坦にして、四圍に山を見ず、渺茫たる平野を展開す。宜蘭濁水溪にはその南岸に沿ひて、東西に治水堤防（五結堤防と稱す）を構築し、海岸線には扇曲なくして、殆ど南北に一直線をなし、大字頂清水には海水浴場を設置す。總面積約二方里半。最長東西一里二十九町餘、南北三十三町餘。管内を頂五結・下五結・頂三結・下三結・二結・四結・大結・總社・松子脚・四百名・一百甲・中一結・中二結・茅仔寮・五十二甲・利澤簡・成興・頂清水・下清水の十九大字に區分す。人口約一萬八千、人口密度、一方里平均六千四百人。耕地廣

大字利澤簡字利澤簡の者に、其の地にイイテエカカンと稱する平埔蕃族の部落ありしに基づけり。明治二十八年五月本島が帝國の版圖に入り、六月には宜蘭城に臺北縣宜蘭支廳設置せられ、本庄はその管下に屬し、治安維持の爲め利澤簡に幹部以下巡查若干名を駐在せしめたり。三十年宜蘭廳新設せられ、その下に利澤簡事務署を置かるや本庄その所轄となり、三十四年該事務署を廢せられて、羅東支廳を置かれ、本庄その下に屬せり。大正九年に及び、臺灣市街庄制發布せられてより、僅は撤廢せられ、本庄は二結堡（頂五結・下五結・頂三結・下三結・二結・四結の六庄）、茅仔寮堡（大埔・總社・松子脚・四百名・一百甲・中一結・中二結・茅仔寮の八庄）の全部及び利澤簡堡の一部（五十二甲・利澤簡・成興・頂清水・下清水の五庄）計十九庄を十九大字に改め（松仔脚の仔を子に、茅仔寮を茅子寮に改む）、これを一括して五結庄と稱し、臺北州臺東郡の管轄にして、庄役場を大字頂五結に置く。尙ほ地名中「結」は開拓當時、その拓植團體の結首分段的に基きて名づけたるものにして、「甲」は開拓完成の廣袤に基きて名づけたるものなり。（昭和製糖株式會社）大字二結にあり。昭和二年九月設立。資本金七百萬元にして元臺灣製糖株式會社の臺灣に於ける事業全部を繼承して設立せるものなり。當地工場の外、臺南・臺中・高雄の

コケナ——コケン

三州下に三工場を有す。原料甘蔗の改良、工場設備の完備、技術の練磨、生産節減等に依り、近年著しく業績の進展を來し當工場の昭和十一年期に於ける原料蔗搾斤量、實に一二四・六六八・一四〇斤、製糖高一五三・四八七噸、商品歩留一割二分三厘の好成績を示せり。（臺灣製糖株式會社）昭和製糖株式會社と稱接す。同社は甘蔗の搾收（蔗汁を搾り取りたるかす、パカスと云ふ）を以て、パルプを製造しは調ゆるパルプ製紙並に建築材料「マイキス」を製造して内外に名譽を高む。本會社は元昭和製糖株式會社の傍系會社たりしパカス工業試験所を、昭和八年九月四十五萬圓にて買収し、事業を繼承せるものにして、製品「マイキス」は日産八百坪、製紙高三五・〇〇〇磅を下らず、殊に野生の鬼茅を原料とし、パルプ及び其製紙化につき苦心研鑽の結果、獨特の亞硫酸マグネシヤ法に成功し、優秀紙を製出するに至る。昭和十年更に二百萬圓を増資し資本金三百萬圓なり。就中製紙の特徴として、紙面滑らかにして純白なるのみならず、紙質強靱なるため、用途極めて廣く、また建築材料「マイキス」には、厚さ三分・四分・六分・八分の四種あり、防音・防塵用とした他に比類なく掘出旺盛なり。（臺灣製糖株式會社）大字四結にあり。臺灣製糖株式會社の姉妹會社として設立せられたるものにして、其の事業目的を同じくし、資本金五百萬

コケナ——コケン

く水利灌溉面積二千四百三十三甲餘に及び、畑を合すれば、耕地面積合計二千七百甲を超ゆ。總人口の過半数は農業人口なり。農産物は米を第一位とし、その年生産高五萬六千餘石、價格百二十萬圓に達す。他に蔬菜類（年産約十四萬圓）・甘蔗（約五萬圓）・甘藷（約四萬圓）・豆類（約一萬圓）・黃麻・苧麻等を産出す。工業又盛にして昭和製糖株式會社の製糖工場その他、臺灣製糖株式會社の製糖工場ありて、製糖・砂糖の年生産高一千八百六十三萬斤、價格約百七十九萬圓、製紙その他、建築材料「マイキス」の製造をもなす。海岸地方にては水産業行はれ漁獲物に鰻・太刀魚・鯛その他あり、その年生産總額約三萬圓に達す。此等の外農家の副業として養豚盛に行はれ、種類に本島豚・雜種豚・洋豚ありて、その年生産額十萬圓を超ゆ。衛生状態良好にして、傳染病の流行殆どなし。教育状況は公學校四、本島人兒童の就學歩合約五〇％にして、漸次向上の傾向にあり。金融機關としては利澤簡信用購買販賣利用組合（出資金五五、二八〇圓）及び二結郵便局あり。産業組合には平圃農事組合・太平漁業組合・昭和漁業組合・利澤簡蔬菜栽培共同出荷組合あり。財政状態を見るに庄有財産約十四萬圓、庄の昭和十一年度豫算額五九、五一〇圓なり。官設鐵道宜蘭線は本庄の西部、大字二結・四結を南北に貫き二結驛を設置す。他に昭和製糖

コケナ——コケン

四、着々工事進捗中なり。（鎮安宮）大字二結にあり、古公三王を祀る。昔支部に柳・葉・英三姓の人あり、義兄弟の交りな結び、義師を起して宋帝の難を救はんとせしも事成らず、漳浦某山の麓に没せり。この三人即ち古公三王なり。後來靈驗顯著なりとて、人民廟を建てて之を祀る。往時生番出草（首狩りに出ること）の際、神像顯はれて生番を驚かし、其の出草を阻止せり。庄民その靈驗あらたかなるに感じ、今より約百年前廟を建設して之を奉祀するに至れりといふ。神農大帝・福德正神を祀りしと、正月十六日・七月初旬・十月十日・同二十一日・十一月二十三日（何れも舊曆）を例祭日とす。（正魁堂）大字頂五結字持勢社に在り、王天君を祀る。舊曆三月八日を祭日とす。王天君に姓を王、名を變と稱し、周を輔け封を討ちしを以て封禪榜内に列せらる。のち仙に歸し夫君と號す。後世に至り其忠勇を敬慕し之を奉祀せりといふ。本神の神靈は嘗て土匪討伐の際、甘蔗畑の中に戦鬪中なる土匪の目前に現れしに土匪恐れて遂に神に歸順し、従來の罪惡を詫びて其後深く慎しむに至れりと云ふ。故に庄民神の靈驗に感じ、明治三十四年本廟を建てて祀れり。（王公廟）大字利澤簡にあり、廣惠尊王を主神とし、五頭大帝・福德正神を配祀とす。廣惠尊王は支那福建省烏石山の林姓が崇拝する神なりといふも、亦一説には、本神は廣信省

コケナ——コケン

の人にして姓は謝、名は詳かならず、嘗つて楊姓の祖先彼より恩恵を受けしことあるとて、楊姓の人感謝に祀る者もありといふ。舊曆十一月二十六日を祭日とす。他庄にも之を祀れる所あり。本庄のものに福建省烏石山の者、臺灣に移住の際奉持し來り、現在地に廟を建立奉祀せしものなりと傳へらる。其の創立年代不明にして、咸豐年間庄民の福利安寧を祈るため庄民捐金して改築し、其後明治十七年破損せしため修繕を加へたり。 【コケナワ 苔繩 註】 ↓赤松村（兵庫縣） 【コケン 古縣面】 朝鮮慶尙南道南海郡の西北部。北は雪川面に、南は南海面・西面に夫々隣接し、東及び西は海に面す。南境に望雲山（七八八米）峙ちて其山脚北に緩斜し、また北境邊にも四一五〇〇米程度の丘陵東西に連貫するも、中部は僅に開けて耕地拓く。生業は農業及び水産業にして、米・麥・豆類等を産す。三等道路の東南より西北に走り、また等外道路西南より東北に走る。大字大谷里望雲山麓に花芳寺あり、望雲山と號す。海印寺の末。高麗康宗壬戌の年僧眞覺國師講講なる者、望雲山に靈藏寺を建立せしが、仁祖十五年僧戒元實智なる者現在の位置に再建し花芳寺と改稱せり。英宗十六年回祿の災に罹り翌年現伽藍を再建せり。現在當寺には李舜臣の碑文を彫刻せる木

コケンセキ 五間厩庄

臺灣臺南 州虎尾郡虎尾街の一大字たる虎尾(街役場所所在地)の舊名。大正九年地方制度改正に伴ひ改稱せらる。

コケンムラ 五軒村

備前國上道郡高島村をいふ。昔この村は大坂にて一軒に農家族も合住せしが、戸数は五軒以上には増さぬ擬なりし故の稱。

コケンヤガタケ 五剣谷岳

五間厩とも書く。越後山脈守門火山群に属する一峯。新潟縣中蒲原郡川内村に峙つ。標高一八八米。東麓は早出川(阿賀野川支流)の割岩潭に限られ、西麓は早出川支流杉川に洗はれる。この地は山又山の中であり、交通も不便なれば登山する者甚だ稀なり。

ココ 古古之邑

常陸國(茨城縣)久慈郡河内里の本名。ココは儀の聲によつて名づくとも云ふ。風土記によれば、地は久慈川の源流の如ければ、河内里は久慈郡の余砂村の邊ならん。同村の大字にいま宮河内ありて上下二大字に分る。常陸風土記「自那西北六里、河内里本名。古古之邑(俗説謂猿聲爲古古)」

ココ 今己

豊後國球磨郡の郷。和名抄は調を岡とも、地理志科に當りココと讀むべしといふ。弘安岡田嶺に球磨郡古後郡田八十町、安喜門院嶺、地頭古後左衛門尉通重、古後本郷七十町三段、地頭長野十郎言堂とあり。古後は即ち今古の

轉じたるものならん。隆徳太平記に古後正は政球家之一なりとあり、豊後國志にも古後郡在(郡北)・曹四日市・小迫・十之約・古後・下河内・河原・杉山・梶原・綾垣・杉塚・木平田・太田・川底・志津原・小清原・山下・内匠・鳥屋十九邑とあり、今の大分縣球磨郡八幡村の大字に古後あるに其遺稱の轉訛か。然れば今己郷は八幡村及び其附近の森町・北山田村も含むか。

ココ 五股庄

臺灣臺北州新莊郡三庄中の一。本庄は觀音山麓南半及び其山麓附近の地を占め、東は覺州庄に、西は林口庄に、南は新莊街に、北は觀音山の麓を以て淡水郡八里庄に夫々界を接す。廣袤東西約六軒九八、南北約七軒九六、地面積約三四・九六平方軒。管内は大部分山地(觀音山)にして、平地は僅かに大字新塢・更寮の全部及び成子寮・水碓の一部に展開するのみ。従つて人口少く、尙ほ一萬人に満たず。耕地も平地以外は、僅に山間・谷間に点在し、寧ろたる有様なり。住民の大部分は農業者にして、主要農産物は、米を第一位とし、年産約二萬六千石、價格約四十八萬圓なり。之に次で柑橘類の果物類を多く産出す。廣範圍に亘る山腹地帯は、果樹類に柑橘類の栽培に適し、今後蜜柑園及びその他の果樹園として、開拓すべき餘地多し。現在柑橘の年産額百五十萬斤を超え價格約七萬圓に達す。其他の農産物は、

甘藷(年産約二萬圓)・蔬菜類・粗製茶等なり。林産物としては、木炭・薪・竹材・筒あり、此等の年産額合計約二萬圓。教育状況は、農民學校(郡立)一、公學校一、同分教場二、本島人兒童の就學歩合約六〇%にして、逐年向上しつつあり。國語普及機關として國語講習所を四箇所設置し、社會教化機關として、男女青年團各一あり。衛生状態は一般に良好にして、諸主要部落に合計十四箇の公共井戸を設置す。主要道路には、東隣の覺州庄和尙洲より觀音山の凌雲禪寺を経て、頂上に達するもの及び山麓に沿ひて、北は八里庄に、南は新莊街山脚に通ずるものありて、いづれも新設自動車會社經營の乗合自動車を通轉し、大字成子寮を中心として、臺北・新莊・八里庄を結ぶ。其他諸部落間には、保甲道路ありて、平地の交通比較的便利なるも、山地は僅かに狭小なる山路あるのみにて、交通不便なるを免れず。地方唯一の金融機關として、五股信用購買販賣利用組合(出資金約一萬六千圓)を設置し、よくその機能を發揮しつつあり。昭和九年度の往來算額は二四・五四〇圓なり。本庄は往昔一面の老樹林にして、武潭潭・八里盆等平地蕃族の蕃社割據し、蕃人逐鹿の地に過ぎざりしが、今を距る二百餘年前即ち清の雍正年間及び對岸より漳・泉二州の人民移住し來り、淡水河の流域に沿ひて開拓し、蕃人は海岸方面より、漸次中央山腹方面

に驅逐せられたり。時の政府は雍正九年初めて八里盆(今の八里庄)に巡檢を置きたり。これ即ち政治機關の創始にして、三十二年(明治四年)八里盆巡檢を新莊街(今の新莊)に移轉し、やがて陞せて縣丞となし、地方行政を司らしむ。當初本庄の行政區劃は、更寮・新塢の二庄は(現在各々大字となり、更寮を更寮に改む)興直堡に屬し、留餘の六庄即ち成仔寮・觀音坑・五股坑・洲仔・石土地公・水碓(現在各々大字となり、成仔寮は成子寮に、洲仔は洲子に改む)は八里盆堡に屬せり。帝國領臺後も堡は依然として存續し、明治二十八年六月假地方官々制を定められ、更寮・新塢の二庄は臺北縣に直屬し、留餘の六庄は淡水支廳に屬せしが、三十年五月官制改正に依り、支廳を廢して縣の下に辨務署及び撫慰署を設かれ、更寮・新塢二庄は新莊辨務署(新莊)に屬せり。三十四年十一月廢縣置廳施行せられたり。本庄は臺北縣新莊支廳(新莊)の管轄とともに、更寮・新塢の二庄は二重地區に屬し、殘餘の六庄は一括して五股坑區となり、大正九年十月地方官制改正に依り、條區ともに廢せられ、本庄は五股坑區全部及び二重地區のうち更寮・新塢の二庄を合併して、五股庄と稱し、臺北州新莊郡の所轄に屬す。庄役場を大字五股坑に置き、同時に以前の庄に總て大字

ココ 後湖

紅毛庄(臺灣新竹州新竹郡) 臺灣臺南州牛

ココ 古坑庄

本郡の東南隅に位し、東に臺中州竹山郡竹山庄に、西に斗六街・牛車水及び嘉義郡大林庄に、南に嘉義郡小梅庄にそれぞれ隣接す。新高山系の山岳及びその餘派は、遠く延びて管内の大部分を占め、爲めに西方の一部を除いては、山地重疊として起伏し、湖澤樹林・竹林叢蒼として繁茂す。河川には東部山地に清水溪(濁水溪上流の一支流)ありて、南隣小梅山地より本庄に入り、東部の山間を北に向ひて流れ、やがて竹山庄に入る。西流するものには虎尾溪・石龜溪を始め、北港溪の大小の支流ありて、石龜溪以外は何れも本庄の山地に源を發し、西部流域に平野を展開す。廣袤東西二三・五六軒、南北一三・九六軒、面積一六六・六平方軒。人口一萬九千餘。管内は大部

分山地の占むる所となり、平野は僅かに西方に開け、南北に細長く延びて耕地をなす。その面積凡そ五千二百餘甲あるも概ね畑にして田少く、雨も灌溉の便悪しき爲め、兩期作田僅少にして多くは所謂看天田(天木による灌漑田)なり。農業人口は總人口の過半数を占め、主要農産物は米(年約約三萬石)・甘藷(年産約一億二千四百四十萬斤)にして、其他、甘藷・蔬菜類・果物類(バナナ、パイナップル、その他、藥草等を産す。林業は地勢上豊かなる天恵に浴し、廣大なる森林地帯には木材・木炭・竹材・竹筒等の林産物豐富にして、竹紙・竹細工に古くより特産品として名高く、殊に樟湖・大湖底・苦苓脚の三大字方面に於て盛んなり。楠を干して乾箱に製造することも古くより行はれ、今なほ相當の産額に上り、島内各地へ搬出さる外、遠く北支方面へ輸出さる。庄經營の造林面積一千二百三十三甲ありて、相思樹・ショウソウ・鐵刀木・蘆竹の植樹をなす。教育状況は公學校二、同分教場二ありて、本島人兒童の就學歩合約三五%なり。國語普及機關たる國語講習所十五、社會教化團體としての青年團六あり。地勢上山地に於ける交通に不便を免れざるも、西部平地に古坑・炭頭厝の二大字を中心として、隣接諸街庄の各主要地及び管内の諸部落との間に、大小の道路四通八達し、中には乗合自動車の通ずるものもありて、交通比較的便利な

り。地方唯一の金融機關として炭頭厝信用購買販賣利用組合(出資金二二二〇圓)あり。昭和十年年度往來算額三八五五九圓なり。本庄中最も早く開拓せられたる地方は炭頭厝(後に炭頭厝庄となり、現大字炭頭厝)および炭頭厝庄(現大字炭頭厝)の一帯にして、康熙初年福建漳州の移民陳石龍ほか數名の魁首に依り開かれしなり。次で同二十九年には同籍民、吳・陳・劉の各姓に依り觀音山(現大字觀音山)・鹿古坑庄(現大字古坑)を、同年末には吳英なる者に依り水碓庄(現大字水碓)・高林仔頭庄(現大字高林仔頭)等も開かれたり。管内は行政區劃上清領時代よりわが領臺後大正九年の地方制度改正に至るまで、打猫東頂堡(大湖底・炭頭厝・苦苓脚・炭頭厝・樟湖・草嶺の六庄)・他里霧堡(觀音山・鹿古坑の二庄)・斗六堡(水碓・高林仔頭・炭頭厝・新庄・棋盤厝の五庄)の三堡に分屬し、帝國の領臺前までは臺南府嘉義縣の所轄なりき。わが領臺後初め斗六・他里霧二堡に屬せる部分は臺中縣雲林支廳に屬し、打猫東頂堡に屬せる部分は臺南縣嘉義支廳の管轄となれり。明治三十年嘉義縣の新設と共に同縣下の斗六・梅仔坑(小梅)兩辨務署に分屬し、翌三十一年嘉義縣の廢止と共に臺中・臺南二縣に分割せられ、すなはち梅仔坑辨務署廢せられて臺南縣嘉義辨務署に合し、斗六辨務署は臺中縣の管下に移れり。三十四年十一月廢縣置廳の結果斗六廳の

新設と同時に、その下の炭頭厝支廳の管轄となり(但し草嶺のみは林地埔支廳管轄)、四十二年地方制度改正に依つて廳の廢合行はれ、斗六廳廢せられて嘉義縣斗六支廳となり、本庄は該支廳の管轄に歸したり。大正九年地方制度改正に依り堡を撤廢せられ、本庄は前記三堡に分屬せし十三庄を十三大字とし(高林仔頭庄を高林仔頭に、觀音山を觀音山に、鹿古坑庄を古坑に夫々改む)、之を一括して古坑庄と稱し、臺南州斗六郡の管轄にして、庄役場を大字古坑に置く。

ココ 湖口庄

臺灣新竹州新竹郡七庄中の一。本郡の西北部に位し、略々三角形の地形をなす。北より東にかけて中壠郡の新屋・楊梅の二庄に接し、南は新塢庄に、西は紅毛庄に連る。管内には河川なく、東南部一帯は低き山地及び丘陵に依りて占められ、西南部は廣闊なる平野を展開す。面積五八・五三平方軒。人口一萬五千餘。住民は殆んど全部廣東系なり。耕地面積は田約二千四百二十四甲、畑約一千九百九十五甲、合計三千六百九十九甲。純然たる農村にして、米産地なると共にまた米穀集散地として知られ、粟・黍も盛にして年産約二十萬圓に達す。米は年産約二萬九千石、價格約四十五萬圓にして、他に甘藷(年産約九十三萬斤、價格六萬五千餘圓)・蔬菜類・柑橘類を産し、山地・丘陵地帯は茶樹の栽培盛にして、茶も亦重要物産の一たるを失

はす。農業に依る年生産額合計約五十五萬圓に及ぶ。畜産業に於ては養豚のほか養鶏亦盛にて畜産に依る年生産額合計三十萬圓を越す。林産物は薪材・木炭・用材・竹材・楠にして、その年生産額合計一萬餘圓なり。大字北高には、近年石油賦あるを發見せられ、即ち湖口油田と稱するものこれにして、臺灣礦業株式會社の經營に係り、なほ試掘の域を設せざるも鑿井深度三千米、その装置及機構に於て遺憾なきを期するとともに、最新式深掘用のロータリーマンを米國より輸入し、米人を招聘して専ら掘鑿の術に當らしめ、目的の貫徹に努めつつあり。大字湖口には陸軍演習廠舎を設置し、附近一帯の丘陵地帯は、陸軍の演習に使用せらる。教育状況は普通にして、農業専修學校一、公學校二あり、本島兒童の就學歩合は四〇%に達す。農業専修學校は農業教育を主眼とし、農民道の注入、勤勞精神の陶冶を圖り、眞の實行階級を養成するを目的として設立せられ、相當の成績を擧げつつあり。社會教化施設としては、家長會・主婦會各一四、國語講習會六、國語講習所二、公民講習所一、青年團二等あり。本島人にして國語を解するもの百分比は約二三%なり。地方唯一の金融機關たる湖口信用購買販賣利用組合(持込済出資金一五三〇〇圓)は、大正七年設立以來、極めて堅實なる經營を以て發達し、地方金融に貢獻すると共に、

昭和九年湖口駅前敷地六百坪を買収し總經費三萬餘圓を投じて農業倉庫(收容力八千石)を建設し、米穀取引の圓滑と農家の福利増進を計り、一面米穀統制の使命を果しつつあり。昭和十二年度に於ける庄の豫算額は、四五五〇六圓なり。臺灣鐵道及び縱貫鐵路は、庄の略中央部を並行して東西に貫き、鐵道には湖口・山崎の二驛を設置して旅客貨物を吞吐し、縱貫鐵路には交通局經營のバスを運轉し旅客の運送に貢獻する所大なり。指定道路は湖口停車場道の一線にして、湖口・下北勢二大字を結ぶ。其他、湖口驛を中心と産業道路縱横に設けられ、近隣の諸主要地を連絡して、地方産業開發に裨益する所夥からず。本庄は東隣揚梅庄(中津郡)の内、本庄との隣接地一帯と共に、往時到的處湖水をなせしこと、地勢上より之を察知すべく、大字湖口はもと大湖庄(續修臺灣府志)、現行制度實施以前に於ては「大湖口庄」と稱し、その位置大湖の口邊に在りしより、地名となりしなり。(其他、本庄中には番子湖、揚梅庄には頭湖・三湖・四湖等の地名現存す)而して大湖口附近の湖水が涸渇して陸をなせしは清の道光年代以前に在りしと云ふ。なほ本庄管内の初めに開拓せられしは、西隣紅毛庄に比して遙に遅れ、乾隆五十八年に至り、廣東の陸豐の人によりて、漸く大湖口庄(大字湖口)を開かれ、爾後漸次他地方に及べり。行政上改置前には

臺北新竹縣に屬し、竹北二堡に包含せられたり。帝國領臺後も係は依然存續し初め臺北縣新竹支廳に屬し、明治三十年新竹縣の新設と共に、同縣新竹支廳の管轄となり、三十一年新竹縣廢せらるるや、臺北縣新竹支廳の管下に屬し、翌年該支廳の管下に更に新竹支廳を設けられ、本庄之に屬せり。三十四年廢縣置廳の結果、新竹縣新設せられ、その下に新竹支廳を置くに及び、本庄は同支廳の管轄する所となれり。大正九年地方制度の大變革に依り、堡を廢せられ、本庄は竹北二堡に含まれたる扇坡下・北高・長崗・嶺崗を併に改む。大湖口(湖口と改稱)、黃真高・羊喜高・上北勢・下北勢・和興・波羅紋・德盛・番仔湖(仔を子に改む)・風山崎・坪埔の十四庄を十四大字とし、之を一括して湖口庄と稱し、新竹州新竹郡の管轄となり、庄役場を大字湖口に置く。

【五郷村】 青森縣陸奥國津輕郡の北部。東部は山形縣伏見郡、北部は浪岡村に接し、その境に坊主山あり、南部も同様山岳連なり六郷村に接し其境に法峰あり。西方は界隈廣く平野にて水田となり女鹿澤・中郷兩村に接す。水田三七八ヘクタール、畑二六〇ヘクタール、原野八六〇ヘクタールにて山林の如きは實に二二三八ヘクタールに及ぶ。地質は第三紀層を主とし凝灰岩及び頁岩發達す。主産業は農林業にて米・林産・木炭の産出多し。總生産額六萬四千圓に及ぶ。副業として蠶工品・養蠶等盛に行はる。黒石・浪岡を結ぶ鐵道は本村の西部を通り大字本郷、北中野を結ぶバスの便あり。東部丘陵地の村落は交通一般に不便なり。古くは行

高嶺に屬す村なりしが、天正六年浪岡城の没落と共に其の一末村となり中野以南は淺瀬石城主千徳氏のため領有せられ、千徳滅亡後再び津輕氏の領有に歸し、廢藩置縣後第一大區第一小區となり、十六年第六組に屬し、二十二年町村制施行に當り中野・吉内・本郷・相澤・細野の第六組を五郷村と改め、中野を北中野と改む。蓋し大字本郷は貞享四年新檢地の際、北高・本江の二村を併合して本郷と改稱し、北高氏の重臣、本宮源内氏居館を設け、本宮館と稱し、よつて當時は本宮村とも稱せり。のち本行とも稱す。本宮は本宮の下村にして昔時本宮某の住せし所なりしと。大字北中野は北高時代に浪岡城の城下町をなせりと。

【五郷村】 千葉縣上總國長生郡の中部。茂原町の西南隣にあり、北は二宮本郷村、西は豊榮村、南は藤原町・鶴枝村と隣す。西南半は房總丘陵の一部をなし約百米位にて北方に傾斜し森林あり。東北半はその麓にて九十九里濱沿岸平野の西南隅を占め、水田多く米・麥・蕎麥を産し、また臥起製造を副業とす。茂原町に縣道を通じ、同町に省線房總線茂原驛を設く。この地は和名抄、墳生郡坂本郷の地なるべく中古は長南領に屬せり。明治二十二年町村制施行の際に舊石神村・中善寺村・八幡原村・桐島村・早野村を以て五郷村を設く。大字石神は舊にれば石神神社の地にあり、石凝雄命を祀る、石神の名こ

れより起ると。藤原新田の御手洗、水野二氏の采地たり。大字中善寺は中善寺と稱する古刹あり、これより中善寺村名起ると。藤原新田は旗下の下川井・廣戸・三雲氏の采地たり。行徳寺は石久・龜山・大字八幡原は藤原新田に旗下の石久・龜山、牧野諸氏の采地たり。江戸時代の碩儒、東條一堂は此地の出身者なり。大字桐島は藤原新田に旗下の三雲・芳原二氏の采地たり。文學者、道徳天年は此地に生る。大字早野は、もと長柄郡の早野新田(今は茂原町の大字たり)を屬せしが、藤原の時に分けて二村となる。藤原新田は旗下渡邊氏の采地たり。(行徳寺)中善寺にあり。天台宗。大東明山と號す。大寶年中上總太郎行徳なるもの信濃善光寺より本尊を奉持し、初め八幡原村に置き、のち天平十八年法相宗に歸せしが、弘仁五年に至り僧徒を以て本宗に改めしむ。保元平治の亂に兵火に罹りて現地に移る。徳川氏の時、寺領十石を寄せられし當國瓦割の一たり。本尊阿彌陀如來を安置す。(東條一堂)大字八幡原の人。江戸の儒者。名は弘、字は子毅、通稱は文藏、幼字を和七郎といふ。家世々豪農にて父の自得醫術に長ず。一堂はその二男。年十六にして京都に往き皆川清園の門に入りしがのち江戸に歸り朝川善庵・羽原簡堂・佐藤一齊・龜田駿嶺・尾藤二洲等と來往す。文化の初め聘せられて弘前藩の醫學となりしが、幾許もなくして江戸に歸り、駒

込に居り、のち湯島に移りしが、その居昌平製に隣り製の教官・生徒等の贊を執る者多かりき。後またお玉が池に塾を移す。旗下の士杉浦出雲守正義博覽にて濠洲に精通せるを以て聞えしが、一日一堂を訪ひ問答一晝夜の後遂に一堂に服し改めて東條の禮を行ふ。人となり温厚深重温厚高邁にて道徳を明かにするを以て自ら任す。安政四年七月十三日、年八十。著書頗る多し、今文字經部氏解補註・米經兩造簡字・助字新譯・學範・繁辭答問・王相孤虛說・道徳辨・性命辨・天人辨・有無辨・虛靜辨・待問錄・論語知言等の四十餘冊に及ぶ。(道徳天年)寛政十二年本村に生る。初め杉野文藏と稱せしが、のち道徳重承と改む。また天年と號す。幼より學を好み、長じて江戸に到り朝川善庵の門に入る。文學を以て武相二國に遊び、のち郷に歸る。明治十年三月九日死す。

【五郷】 愛知縣中島郡にありし村。明治三十五年本村は大塚村及び梅代村の大字梅須賀を合併し、大江村を設く。大江村は明治三十九年その大字平野・小寺・横地・重本・池部・大塚と稻澤町・下津村・一治村・國府宮村・山形村及び稻保村の大字稻島と中島村大字右橋・木本とを以て新に稻澤町を設く。

【五郷村】 香川縣讚岐國三豊郡の最南部、阿讃山脈中に在り。雲邊寺山・金見山(四五米)・高尾山(四九六米)の形成する谷

管因とせし蝦夷を諸島等五箇國に配置せりとあるは五郷村なりと云ふ(西遊府志・三豊郡史)等より推すも早く住民のありしを知る。されど開發は新しきものの如く村社諸宮社は起源不明なれど、村社三部神社は平家の落人有感に因るものもた、村社鎌倉社は景政の靈を祀るもの。寺院の如きも徳島縣に屬する雲邊寺を除けば、眞宗の法泉寺あるのみにて、比較的新しきを覺ゆ。

御幸町

京都市の南北に通ずる街路の一。御苑内の南にあり、丸太町より五條通まで通じ、寺町通と鉄屋町通との中間に並行す。天正年間開通する所。好色二代男・一ひきふれ売まじりの丸寝、わけもなき妻とも、持佛堂の前へ押よせ、まだ是でもせまいといふ、少は勘忍せよ、御幸町三條に、表一間口の家に、七八人も住さへ有りと云つて申云々。

小部

古比森・子懸森。靜岡縣熱海市外伊豆山にある伊豆山神社の森の古稱。時鳥の名所。拾遺・二〇「ここにだにつれづれと啼く郭公ましてここの森はいかにぞ 右大臣顯光」同「思ひやるここの杜の翠にはよそなる人の袖もわれけり 元輔」後拾遺・一七「さつき間ここの森の時鳥人知れずのみ啼きわたるかな 藤原室房朝臣」

木頃山

尾道市の北西方約九軒、廣島縣御調郡木ノ庄村の西端部にあり。西方に山路通じ、御調坂と云ふ。北方に廣田川の一支出東流し、東方に尾道電氣鐵道、北西より南東に走る。

小五郎山

中国山脈南西部の一峯。山口縣玖珂郡高根村に峙つ。標高一六二米。山體石英粗面岩より形成せらる。西麓は南流する今津川の上流に限られ、川に沿ひ島根縣鹿足郡藏木村との境界線定る。東方に冠山(一三三九米)、鬼ヶ城山(一〇三二米)、羅漢山(一一〇九米)等、北より南に續く連嶺を望む。

心見瀬・試瀬

近江國(滋賀縣)の歌枕。一に供御瀬・如何崎ともいふ。大津市石山の下なる瀬田川の急瀬をいひしものなるべし。往時、この瀬を渡るに急流にして恐しきより、心見瀬或は試瀬・如何崎といふ名生じり。供御瀬と稱する故に、此處に瀬代をかけて魚を取り、官へ調進したるによりて生じりといふ。心見瀬は今昔物語中にその名見え、如何崎の名は續日記にその名見

興居島村

愛媛縣伊豫國温泉郡の西方海上にある興居島、及び西方小瀬戸を隔てたる釣島とより成る。興居島は高麗半島西岸の瀟灘にあり、東南の由良灣及びその南方の四十島瀬戸を隔てて三津濱町に、西北は釣島海峡を隔てて陸月島・中島と對す。島の長さ南北凡そ六軒、東西は三軒、由良灣中央部附近に於ては急に兩岸が海におされて狭くなり、幅も僅に三〇〇米にすぎず。海岸は出入多く好投釣地も少からず。島の北部に大吹山あり、南に火山性の小富士登え地勢は一盤に山地に富む。從つて島内耕地は殆どなく、山地には樹木繁茂し由良灣を圍む丘陵には果樹園多く伊豫蜜柑を産す。また橘の産地として知られ桃花咲く頃は來遊するもの多し。なほ近海は魚族に富み水産業も盛に行はれ、由良灣の北の由良港南の本浦港は良漁港をなす。興居島は島の東岸に散在す。釣島には燈臺あり。明治六年の設置にして、紅白互光

宮城縣陸前國造

郡の北部。鑓津江の右岸に沿ふ。東に古達面・求道面に、南は竹谷面に、西は三岐面に、西より北は各城面に相隣接す。北部は稍々低地に於て鑓津江の瀧を隔て耕地よく拓くも、南するに従ひ徐々に高く南境邊は六・七百米の高山絶つ。主生業は農にして、米・麥・大豆・小豆・粟等を産す。郡邑谷城に近く、二等道路東境を南北に走るも交通に未だ便ならず。栢枝里に面事務所を設く。

小牛田町

宮城縣陸前國造田部の南西部。東は浦谷町、南は不動堂村に接し、北は北上川の支流江合川を隔てて沼部村に向ふ。土地平坦にして水田よく拓け、聚落は江合川の南岸に沿ひて發達し、高さ約五米の堤防により川の氾濫を防ぐ。石巻別街道東西に走り、交通の要點にして、東は石巻市、西は古川町方面へバスの往來あり。省線東北本線の小牛田驛(明治二十三年設置)は隣村不動堂村内に位し小牛田の聚落を隔る南方約二軒、石巻線・陸前東線の交點をなす。産業は農を主とし米・麥・蕎麦の産あり、畜産・工業これに次ぐ。縣立小牛田農林學校あり。また町内にある養蠶報恩農業館には、農業の學理及び實際に關する各種の陳列品あり。明治四十年町制を布く。(山神社) 神社。祭神、木花開耶姫。安産の神として參詣者多く、舊曆四月十二日、十一月十二日の縁日は賑はふ。

九日市場

愛知縣丹羽郡にありし村。明治三十九年本村は三重島村・二川村と共に廢せられ、その區域と、多加森村の大字濱海道村・多加木村・森本村・吾登村の區域を以て丹羽村を設く。

古沙山

朝鮮全羅北道にありて、いま古阜の地に當る。神功攝政四十九年、莞田別等新羅を攻めて地を百濟に與ふ。百濟王敏智惜く所を知らず。我が使千熊長彦と此山に登り、千秋萬歳、無極無窮、西蕃と稱し、春秋二期に朝貢せんと期せり。

古座

和歌山縣紀伊國東牟婁郡の南部。古座川河口の東岸にて熊野灘に臨む。西は古座川を挟んで西向町なり。西北に高池町あり、東北は田原村に接す。北境に三〇〇米程度の山地ありて南に緩く傾き、東境の二〇〇米程度の山地は西に緩斜してその間中央東偏にほゞ南北に開けたる小谷を作り、西南部に古座川の河口を占む。南部海岸は岩石海岸をなす。西南方海上に九龍島・箱島の小島あり。全村山地にして東より新宮町を経て熊野街道が海岸に沿ひて連り古座川河口に出でて東岸を河に沿ひ隔町高池町に入る。紀勢中線は海岸に沿ひて走り古座川を渡り西向町に古座驛(昭和十一年設置)を設く。聚落これに沿ひて河筋に設け、街村狀をなし、高池町の聚落と連なる。右の熊野街道の外、古座街道は古座川に沿うて本町に達し、また串本に達する串本街道を集め、交通の要衝に當り、串本町・高池町及び下黒村各方面へバスの便あり。河口には小瀬戸あり、風波を凌ぐ遊藝港にしてまた漁港を兼ね。本町は古座中漁中農の町なれども、近時大島の樫野部落と

九重

【九重村】茨城縣常陸國新治郡の西南隅。土浦町の西隣にあり。南は東村、北は栗村・栗原村、西は筑波郡葛城村と隣す。筑波山南方の低き丘陵地の一部を占め、傾地多く所々林を交へ、米・麥・蕎麦の産多く、また農産品を出し蔬菜の産あり。土浦町に街道を通ず。この地は和名抄、河内郡大村郷の地なるべく、本村の大字大角豆は和名抄信太郎高來郷の地なりといふ。東國戰記によれば小田天庵の旗下に上室の城主、吉原盛前云々とあるは、大字上室の地なるべし。また永祿十二年小田氏治は兵一千餘騎を出し本郡の栢岡邊を略す、よつて栢岡城主佐竹義重は鹿島・玉造の邊諸侯をして本村邊を守らしむ。

古座

宮城を滅ぼし記事の註に「總一任那、別加羅國、安羅國、新二敵國、多羅國、乞余國、登禮國、合十國」とあり。古座國の地明らかならざれど慶尙南道固城の邊ならんか。

古座

古今島及助島及び諸多の小島より成る。古今島及助島より、島内の所々に一二〇〇米程度の丘陵起伏するも、沿岸には概して平地多く耕地拓け、米・麥・豆類等の農産あり、また漁業盛んにして水産物多し。沿岸は出入多きも良港なく、小漁港を擁するに過ぎず。古今島の徳洞里に面事務所を設く。

古今島

朝鮮全羅南道莞島郡にある島。古今面に屬す。東は助島島と一狭水道を隔てて相對し、南側は新智島との間には長直路の東港を、西側は莞島との間に西港を挟み、北西側は本陸との間に淡水なる馬島海あり。此島には山嶺多く東端には高さ約一三〇米の圓錐峰ありて顯著の圓錐峰を成き、その東麓の海岸に徳洞里の聚落あり。島の南西端なる狭長角は樹木繁茂し他都と其趣を異にす。本島は慶長三年二月韓將李舜臣ここに陣し糧食を募り、大砲を鑄造し船隻を建造して我軍に備へしことあり。明治二十七八年の役

古座

朝鮮全羅北道にありて、いま古阜の地に當る。神功攝政四十九年、莞田別等新羅を攻めて地を百濟に與ふ。百濟王敏智惜く所を知らず。我が使千熊長彦と此山に登り、千秋萬歳、無極無窮、西蕃と稱し、春秋二期に朝貢せんと期せり。

古座

和歌山縣紀伊國東牟婁郡の南部。古座川河口の東岸にて熊野灘に臨む。西は古座川を挟んで西向町なり。西北に高池町あり、東北は田原村に接す。北境に三〇〇米程度の山地ありて南に緩く傾き、東境の二〇〇米程度の山地は西に緩斜してその間中央東偏にほゞ南北に開けたる小谷を作り、西南部に古座川の河口を占む。南部海岸は岩石海岸をなす。西南方海上に九龍島・箱島の小島あり。全村山地にして東より新宮町を経て熊野街道が海岸に沿ひて連り古座川河口に出でて東岸を河に沿ひ隔町高池町に入る。紀勢中線は海岸に沿ひて走り古座川を渡り西向町に古座驛(昭和十一年設置)を設く。聚落これに沿ひて河筋に設け、街村狀をなし、高池町の聚落と連なる。右の熊野街道の外、古座街道は古座川に沿うて本町に達し、また串本に達する串本街道を集め、交通の要衝に當り、串本町・高池町及び下黒村各方面へバスの便あり。河口には小瀬戸あり、風波を凌ぐ遊藝港にしてまた漁港を兼ね。本町は古座中漁中農の町なれども、近時大島の樫野部落と

古座

和歌山縣紀伊國東牟婁郡の南部。古座川河口の東岸にて熊野灘に臨む。西は古座川を挟んで西向町なり。西北に高池町あり、東北は田原村に接す。北境に三〇〇米程度の山地ありて南に緩く傾き、東境の二〇〇米程度の山地は西に緩斜してその間中央東偏にほゞ南北に開けたる小谷を作り、西南部に古座川の河口を占む。南部海岸は岩石海岸をなす。西南方海上に九龍島・箱島の小島あり。全村山地にして東より新宮町を経て熊野街道が海岸に沿ひて連り古座川河口に出でて東岸を河に沿ひ隔町高池町に入る。紀勢中線は海岸に沿ひて走り古座川を渡り西向町に古座驛(昭和十一年設置)を設く。聚落これに沿ひて河筋に設け、街村狀をなし、高池町の聚落と連なる。右の熊野街道の外、古座街道は古座川に沿うて本町に達し、また串本に達する串本街道を集め、交通の要衝に當り、串本町・高池町及び下黒村各方面へバスの便あり。河口には小瀬戸あり、風波を凌ぐ遊藝港にしてまた漁港を兼ね。本町は古座中漁中農の町なれども、近時大島の樫野部落と

古座

和歌山縣紀伊國東牟婁郡の南部。古座川河口の東岸にて熊野灘に臨む。西は古座川を挟んで西向町なり。西北に高池町あり、東北は田原村に接す。北境に三〇〇米程度の山地ありて南に緩く傾き、東境の二〇〇米程度の山地は西に緩斜してその間中央東偏にほゞ南北に開けたる小谷を作り、西南部に古座川の河口を占む。南部海岸は岩石海岸をなす。西南方海上に九龍島・箱島の小島あり。全村山地にして東より新宮町を経て熊野街道が海岸に沿ひて連り古座川河口に出でて東岸を河に沿ひ隔町高池町に入る。紀勢中線は海岸に沿ひて走り古座川を渡り西向町に古座驛(昭和十一年設置)を設く。聚落これに沿ひて河筋に設け、街村狀をなし、高池町の聚落と連なる。右の熊野街道の外、古座街道は古座川に沿うて本町に達し、また串本に達する串本街道を集め、交通の要衝に當り、串本町・高池町及び下黒村各方面へバスの便あり。河口には小瀬戸あり、風波を凌ぐ遊藝港にしてまた漁港を兼ね。本町は古座中漁中農の町なれども、近時大島の樫野部落と

共同して大蔵網漁業を經營し水産額頗る多く、ほかに工業・畜産者は、また古座川の谷を商園として郡内商業の盛なること新宮市に亞ぐ。町は明治三十四年町制を施行せるものにして、古座・中津・津荷の三大字より成り、古座に町役場を置く。警察署・新宮區裁判所出張所及び高等女學校・商業學校等あり。本町のうち、古座並に津荷の地は吉野野野國立公園の境域に屬し、古座に舊幕府時代當地方海防の租税を徴収したる二歩口役所址、平徳盛の高高川原津守代々の居城たる虎城山城址の史蹟あり。〔善照寺〕古座にあり。眞宗本願寺派。本願寺石山籠城の節の難賀兼山本善内之介弘忠、戦後創築して善照と稱し本寺を創建。當初善内寺と呼びしが、のち現稱に改む。寺寶中額本齋色阿彌陀三尊像一幅は鎌倉末期の作に係り國寶たり。

【古座川】和歌山縣東本妻郡西南部の川。七川村の北境なる大塔山(一二二米)の東側に發して南流し、三尾川村にて東南に向ひ笠置山の南麓を横斷し、明神村に於て北より来る小川を奪れ、古座町に至りて熊野灘に注ぐ。流程約四五軒、下流西岸はや、小平地をなすも、中流は峡谷をなし、水利少し。

コサ 五又港 ↓橋樑港

【御座村】三重縣志摩郡志摩郡の南部。志摩中島南部に英虞灣を挟んで西に突出

コサイコ 御最期川

浦都子町を流るる田越川の別名。文治元年平徳盛の嫡男六代御前、この川の邊に斬られたりとてこの名ありと傳ふ。

コサイシヨ 御齊所峠・御在所峠

阿武隈山地を横斷する峠。最高點は福島縣石城郡石住村より東白河郡宮本村に於る。標高二〇〇米餘。峠上一祠あり御妻所神社と云ふ。片庭岩・花崗岩の懸壁峙ちて高し。この峠路は國道御齊所街道に當り、鯨川(南東流して太平洋に注ぐ)に沿うて通す。

コサイシヨ 五在所

【五在所山】四國山脈西南部の一峯。高知縣吾川郡小川村と明治村との境界に峙つ。標高九七三米。山體秩父古生層より成る。西南麓は黒森山(一〇一八米)に續き、北東麓は低夷して仁淀川支流に隔らる。南方部に仁淀川曲折しつゝ東流す。【五在所森】五在所ノ峯とも云ふ。土佐國の西南部に於る山。北側は高知縣高岡郡窪川町、南側は幡多郡佐賀村に屬す。標高六五八米。山體白亜層より成る。東麓は低夷して興津峠となりて海に没し、北東方に六川山(五〇八米)を経て冠嶺となる。山尖鋭にして山體森林を以て掩はれ、附近航海者の好目標たり。南西方鞍部に窪川町より佐賀村に至る縣道南北に通す。最高點は二四七米を算し附近の坂路を片坂と云ひ南方路は伊賀喜川に沿ふ。この片坂の西方に四万十川の

する御座中島の西端。面積約二・七五方軒。越賀村の西に隣りて北・西・南の三方は海に面し西方に御座岬突出し、南に岩井岬あり。東境に九九米の金比羅山ありて周囲に傾斜す。風光明媚、眺望絶佳なる山なり。曉には遠く富岳も望み得らる。生業は漁業六分、農業三分、商業一分の割なり。漁業は大數額もあれど漁業者の多くは近海漁業をなし、いわし・あじ・たひ・いか・たこ・えび及び海女の漁するおほび・さやえ・天草等多し。農産物は麥・芋多く特に南瓜は美味なり。交通多くは水運により、鶴方・波切・賢島へ船渡船の便あり。この地古の和具郷に屬す。節川集伊勢國に御座島郡の名見ゆるは、御座村を以て時志摩一帯の地を汎稱せしめし私稱ならんとす。而して村名の起原は日神に往時伊勢太神宮御遷幸の御、暫らく當村に御座ありしによる等傳ふるも定かならず。〔白浪〕村の西北にあり。東西約一軒半。古く白浪嶺と稱し白砂相連り風光絶佳なり。山家集「はなれたる白浪の濱の沖の石くたけて結ぶ月の白浪」

コサイ——コサカ

【御座村】三重縣志摩郡御座村西端にある。嶺に金比羅山(九九米)聳えその山脚に岬岬に迫る。北方の濱島町との間に大勢入御座灣を抱き、灣内には貝珠貝の養殖行はる。【御座灣】→英虞灣(三重縣)

【御座村】小倉村 宮城縣磐城國伊具

コサイシヨ 御在所

上流仁井田川、南西流す。【御在所山】冠山とも云ふ。鈴鹿山脈に屬する一峯。三重縣三重郡野町・千種村・滋賀縣甲賀郡熱河村・蒲生郡市原村との四村境界に峙つ。標高一二一〇米。北麓は釋迦ヶ岳(一〇九二米)・龍ヶ岳(一〇〇〇米)に連り、南麓は鎌ヶ岳(一一五七米)に續く。この山、東麓に附近唯一の温泉たる湯ノ山温泉あるを以てよく知らる。温泉方面より見ればヒラミツド型の岩山の如くなるも、山上は廣格たる高原にて、草及び灌木を以て掩はれ、鷲頭は山中至る所あり。東斜面より清流三瀧川流出し、美しき溪谷をなし、大石・長石の巨岩横ばる。また數多く小瀑布かかり、香濃は其名を知らる。登山には四日市市より四日市鐵道湯ノ山驛にて下車、それより乗合自動車にて温泉附近まで行き、三瀧川溪谷に沿ひ登高約一時間半にして達す。山頂よりは釋迦ヶ岳・鎌ヶ岳等の鈴鹿山脈の諸峯を一眸に收む。名古屋・四日市方面より登山・登山する者多し。但し山中に瘦相當多く居れば注意を要す。

【御在所山】愛媛縣喜多郡大川村・大谷村・と東宇和郡中筋村の三村境界に跨り聳ゆ。標高六六九米。山體秩父古生層より成る。主稜線はほぼ東西に走る。北方に鮫川北流し、南方には鮫川上流なる宇和川北東流す。

郡中部の東端。阿武隈川の下流に沿ひ、西は金山町・館矢間村に、北東は枝野村に、東南は大内村に接し、東方瓦理郡坂元村に近し。阿武隈山地北端部の丘陵地は阿武隈川の洪積原にて土地平坦、墳墓墳土より成る畑地、墳土より成れる水田多し。米・麥・豆類及び繭等を主産物とす。古くは古佐井・小原等にも作り、柴小屋あり、永祿・天正の交、伊達・相馬兩氏の相争ひし地なり。封内記に「小倉邑古島、稱柴小屋館、佐藤氏居之」とあり。村内に鹿島神社あり、清和貞觀八年の條に伊具鹿島前齋神と云ふは是か。清水鹿島山に鎮座す。勧請の年月は不詳なるも再建立は天文元年にて小倉城主小倉長門、其家老齋藤軍左衛門家中に監督役を命じ木材一切寄進せしめて社殿を造營し當城守護の神と崇敬せしこと、齋藤家系譜に明なり。祭神は武甕槌神。「狼の穴」本村に石なきを以て有名なるも此處は村内第一の岩石嶺たる奇岩の洞穴にして舊藩が入國有林中にあり。日神によれば往昔此の洞穴には狼が多く棲息し、出でては人畜を害せしため怖れてかか命名せりと。「白樂天王」造藤山頂にあり。天正中政宗公、冥護山在陣にて金山城を攻めしときその愛馬の斃れたるを惜しみ祀れるものなりと云ふ。「蝦夷穴」宇岩の入にあり、洞窟大小四あり、土俗、往古蝦夷人の居住せしものなりと。二個土中に

コサカ 小坂

【御在所山】五三所山とも云ふ。劍山山脈西南部の一峯。高知縣香美郡在所村に峙つ。標高一〇八〇米。山體白亜層より成る。久保川に東・南麓を流ひて西南流し、物部川となりて太平洋に注ぐ。北東に神賀山(一〇七一米)、北西方に鉢ヶ森(一二七一米)聳ゆ。【御在所山】霧島山脈に屬する一峯。鹿児島縣霧島郡志布志町に峙つ。山頂より南方に有明灣の波光を望む。南麓より安樂川發源し、南西流して有明灣に注ぐ。

コサカ 小坂

【御在所山】秋田縣陸奥國鹿角郡の北部。北は青森縣津軽郡に接し、飯梨峠(四五五米)を以て通す。西方は有名なる長木澤國有林地帯に接す。中央部を米代川支流小坂川北より南流し、また小坂川支流荒川東北方より流れて来り、二川合して南方毛馬内盆地に入る。地質は山地は主として第三紀層にして、山麓及び前記二川沿岸一帯は第四紀古層(洪積層)及び第四紀新層(沖積層)に屬す。火山灰に覆はるゝ處も多く、表土は城土より成る。本町には有名なる小坂鐵山あるを以て知られ社鐵小坂鐵道は大倉驛と連絡し、旅客貨物の運搬に便す。南方毛馬内へ八軒、省線花輪線毛馬内驛に連絡す。十和田湖へ三二軒、共に自動車の便を有す。國道は南方毛馬内町に通す。産業には見るべきものなく、すべて鐵山中心の生業を見らる。木炭の産出稍々著しきものあり。本

コサイ 小佐井村

町は遠く弘仁年間既に一村落を形成し後幾多の變遷を経て、明治四年三月に屬せしもの江刺縣に移り同年秋田縣の管轄となり、同十一年七月小坂村及小坂鐵山聯合して小坂村外一ヶ村戸長役場を置き、同廿二年二月町村制實施と共に小坂村とし戸長役場を小坂村役場とし、大正三年五月小坂町となる。天然記念物として噴泉塔あり。大正十一年夏地質學者佐藤謙蔵氏により發見せらる。翌年理學博士井上清之助氏の踏査あり、大正十三年内務大臣より天然記念物の指定を受く。驛より二里の地に位し、塔と温泉とが別別に一群をなし、塔は高さ三尺乃至七尺、塔頂に噴口あり。口径最大一尺七寸深さ約四十尺のものあり。何れも高き山と丘との境に見らる。「小坂鐵山」小坂町にあり、毛馬内盆地の北端に近く、十和田火山の西南麓基盤を形成する丘陵性山地と、その縁をめぐる段丘地帯とに跨つて存す。鐵床は謂はゆる黒鐵または黒物と、それに伴ふ黄鐵及び砒鐵にして、事務所の北東約二軒の山上にあり、その西側に位する菅澤森・石倉森の隆起群と、東側に位する赤森・鉛山の隆起群との間を隔てて南北に連なる鞍部に存せしが、今は大部分掘り盡され、南北約五〇〇米、東西三〇〇米の一大窪地を留む。この鞍部を成したるものは、東に傾斜せる角礫凝灰岩にして、その西側より菅澤森一帯の石英粗面岩に貫かる。鐵床はこの石英粗

はるるを以て、高志國は越後平野の地を以てその地とすべく、さすれば今、古志郡は高志國の遺名の轉ならん。

コシ 虎仔街

臺灣高雄州潮州郡潮州庄の舊稱。乾隆二十五年前後に於ける潮州の街肆の稱呼なるも、當時多くは潮州庄街と稱せられしと云ふ。

越

【越】北陸道地方の古稱。上代には今の北陸道一帯より、羽前・羽後・津輕(陸奥の中)・北海道までを含めて日本海方面の地方を一般に越と呼びしが如し。大化改新以後に至りても、この地方は蝦夷の住所として依然と越の國名を以て呼ばれ、齊明天皇の御代に越國司阿部比羅夫、舟師を率ゐて遠征しその成秋田・能代・津輕より、渡島即ち今の北海道まで及びしことも、畢竟自己管内の經營に外ならざりき。これが越前・越中・越後の三國に分れしは天武・持統兩朝の間なるべく、この時、越前は今の加賀・能登を含み、越中は今の越中より越後の西中に至り、越後は今の越後の東中より濃然と北方海岸地方一帯にまで及びり。大寶二年越中の四郡を割きて越後に屬し、今の國境をなせしは、蝦夷經營の必要上越後の國力充實の爲めなりしならん。和銅五年越後の東北郡及び陸奥の一部を割きて出羽國を置き、のちこれを東山道に屬し、越後は今の境域をなせり。養老二年越前より能登を分ち、天平十三年一旦これを越中に

併せしが、のち天平寶字元年これを分立し、弘仁十四年越前より加賀を分ち、別に前より存する若狹と佐波を合せ、北陸道七國とす。コシの名義は越人の住處の義より起りしものならん。而して越後に古志郡の名あるは、他地方の越族の漸次日本化せし後までも、なほこゝに昔ながらの越人の存したる爲め、斯く呼ばれしものならん。

【越前】書紀・神代紀にあげられたる大八洲の一。佐渡洲の次に生成せる洲。現在の何處に當るが不明なるも、持統天皇の十年に越ノ度島蝦夷云々と見え蝦夷人の居地たり。書紀通説も越洲を以ていま毛人島ならんといふ。故に越洲は或は今の北海道本島を稱せしものならんか。神代紀・上「次生・越洲」同「書」次佐渡洲次越洲。

【越中】大らかに北陸地方をいふも特に越後地方を稱せるが如し。記・上「八千矛」の神の命に「八洲國 妻まぎかてて 遠遠し 越國に 賢し女を ありと聞かして云々」景行紀・四十年「日本武尊曰、蝦夷由首、威伏其率、唯信國、越國、頗未從化」欽明紀・五年「越國言、於佐渡島北御名部之碕岸有「遺恨人」乘一船船而海濱」天智紀・七年「越國獻熱土與國」

このうみ浪をわけてもかへる原がね 頼政 【越山】一般に高志路の山を指せしものなるべし。夫木・冬三「この山たておく筆のかひぞなき日をふる雪にしるし見えれば 大炊御門右大臣家佑」 【越中山】越前國(福井縣)今立郡の歌枕。その地和名抄、今立郡中山郷の地、すなはち今立郡南中山村の邊に當るが。山家集「かりがねはかへる道にや迷ふらむこの中山がすみへたてて」 【越乃大山】越の國の高い山。或は加賀國の白山を指すか。越に於ける大山の名稱は神名帳下、越前國丹生郡に大山御板神社あり、和名抄に、越前國大野郡・越中國歸農郡に大山郷あり。萬葉・二「み雪降る越乃大山ゆきすぎていづれの日に我が里を見む」 【越ノ白嶺】白山(岐阜・石川縣境)の別稱。 【越ノ腰岳・越岳】阿蘇火山脈の一。佐賀縣西松浦郡伊萬里町・大川内村・二里村・大山村に跨る。標高四八八米。山體火山岩より成る。南東麓は越ノ峠最高點を経て牧ノ山(五五五米)・黒雲山(五一八米)に續く。西麓を有田川北流し、伊萬里灣に注ぎ、川に沿ひ伊萬里線通す。川を隔てて西方には島帽子山・國見山對峙す。北麓は伊萬里町中心街をなす。 【古耳島】朝鮮全羅南道務安郡押海面に屬する一島。東は雲雲半島に、北

は輝島、南は梅花島、押海島に狭き水道を距ててそれぞれ相對す。

コシイ 護持院ケ原

江戶 神田橋外(今の東京市神田區錦町の一部)の舊護持院境内の稱。享保二年寺院炎上後火除地となる。一名新駒ヶ原。御府内備考「明地原三ヶ所、神田橋外より御堀備往來に添て、稚子橋外まで三ヶ所續けり。此原は元禄二年、常陸山知足院元祿寺を御建立ありし蹟なり。知足院後に護持院と改めし故、郡下の人こゝを護持院原と稱す。享保二年正月廿二日、護持院回廊に火りし後、大塚へ移轉ありて、寺蹟みな火除明地に定められ、其中三條の往來を開かれしゆへ、一番二番四番と別ち唱へり」

コシオエ 小鹽江村

福島縣磐城郡石川郡の西北隅。須賀川町(岩瀬郡)の東に隣り、南は川東村に、東南は蓬田村に、東北は田村郡二洞村・谷田川村・守山町に各隣接す。東南麓に蓬田嶽(九五二米)、北麓に雲水峰(六七七米)、東部に東山(七六六米)等聳ゆるも、小野新町附近の如き準平原平坦面あり、西南麓を阿武隈川北流し、沿岸に僅に低地あり。米・蕎麥を主産し外に蕎麥あり。街道は中部を東西に通ずるも交通便ならず。此地は和名抄、磐瀨郡山田郷の地なるべく、いま鹽田・小倉・江持・堤と合し、小倉の小と鹽田の鹽と、江持の江を取りて小鹽江村と名づけ、役場を鹽田に置く。(字津崎

城址(雲水峰)指定史蹟

谷田川郡の東南約五軒、谷田川を渡り西南に向ひ小徑を約二軒進みて島居に至り、それより急坂を攀ち頂上に達す。頂上には周圍約五〇米に及び方形の土壘を存し、内に石祠三社あり。こゝを千人窟と呼ぶ。その附近に城址の一部遺存す。それらが即ち城址の址なり。興國元年北畠顯信の城に據り、常陸より逃れ給ひし宇津峰宮を奉じ屢々賊軍の攻略に堪へたるが、正平二年城遂に陥り、顯信は宮を奉じて出羽に逃れたり。その後同七年再びこの城を回復したるも、翌年賊軍の攻むる所となりまた東羽に去れり。この間前後十四年に亘る吉野朝の史蹟なり。

コシオレ 腰折山

松山市の北方十五軒前後に當り、瀬戸内海灣の東岸に臨み、愛媛縣温泉郡津波村に屬す。山形、腰の折れたる人の如し。「伊豫の湯の甲斐こそなけれ風早の腰折山を見るにつけても」の古歌あり。

コシオレタ 腰折田

五位 堂村(奈良縣)

コシカ 越賀村

三重縣志摩國志摩郡の南部。志摩半島南部に、西方へ突出する御座半島にあり、半島西端の御座村の東に隣り南は熊野灘に、北は英虞灣に面す。西境御座村との間に金比羅山(九九米)ある外は、全村五〇米程度の臺地を成し北岸に深き灣入りあり。南岸概して屈曲少く岩石海岸にして小島散在す。農

業を主業とし全戸数三九四戸中農は一六二戸、水産七二戸、工業六〇戸、商業四一戸、其他五九戸の割合なり。主産物は米・蕎麥・甘藷にて生茶・枇杷等の特産もあり養蠶また行はる。海岸水産盛にして鱈・鮎・鰯・鰯・エビ等あり、鮎の養殖も行はる。古くは和名抄、志摩郡和具郷に屬せるもの如し。もと志摩四港の一に數へらる。中世この地に越賀氏あり、近郷を併せ、伊勢國司北畠氏に屬す。文祿の役九鬼嘉隆の海軍に從ひ熊川の海戦に功ありし越賀半人陸政は即ちこの氏の人なり。

コシカ 小値賀島

↓小値賀村

南境玉郡の南部。元、粟川の下流に跨る。北は大澤町、西は出羽村、南は蒲生村、東は増林村と隣す。面積二四二平方軒。關東平野内にあり殆ど畑地をなす。陸羽街道貫し街はこれに沿ふ。また東武鐵道伊勢崎線通じ越ヶ谷驛(大正九年設置)を置く。警察署・區裁判所・高等女學校あり。この地は近世埼玉郡越ヶ谷領に屬す。日光及び奥州街道の宿驛たり。往古は騎西庄に屬し越ヶ谷町と呼びしが、延享四年より越ヶ谷宿と稱す。その後何時頃よりか今の大澤町を合せて越ヶ谷宿と稱せしことあり。次立の人馬は五十八、五十疋の定数を以て互に十日を限り、草加・粕壁の二宿及び古川町・鳩ヶ谷・大門・岩槻の宿々にも次立をなせり。文祿

コシガヤ 越ヶ谷町

埼玉縣武蔵國

の頃より毎月二・七日の日を以て市を立つ。徳川氏關東入國の後より幕領にて、新田に享保十七年・寶曆十一年の二回檢地あり。町内に大林の桃・青梅園久伊豆神社の桃等の名所あり。

コシキ 古志岐島

長崎縣北松浦郡にある島。五島列島の北端、宇久島の東北に浮ぶ。島上に古志岐島燈臺(明治二十七年設置)あり、燈質は閃白光、光達距離二一・五浬。

コシキ 飯

【飯】奥羽火山脈に屬する一峯。山形縣北村山郡大倉村・東根町の境界に跨る。標高一〇一六米。山體火山岩より成る。東方には丹生川を距てて愛神山(一二七〇米)・船形山(一五〇〇米)等南北に連發す。西方に當り橋岡町あり。南西麓は最上川本支流の流域地たる山形盆地の北端をなす。

【飯山】島海火山脈に屬する一峯。南側は山形縣最上郡及位村、北側は秋田縣山形郡笹子村に屬す。標高約八〇〇米。二峯より成り、東峯を女小子鬼(女鬼)、西峯を男小子鬼と稱す。山體火山岩より成る。北東麓に大仙山(九二〇米)、西麓に大森山(一〇七八米)連發。この山の西方に山道通じ、その最高點を飯峠と呼び、標高七五一米を算す。南東降すれば前森山(七八五米)東斜面を経て奥羽本線及位村に至る。線に沿ひ羽州街道通じ、また鹽根川流る。北降すれば笹子川の畔、笹

子村西久米に達す。最高點の南西斜面に名勝沼あり。

【飯岳】霧島火山脈霧島山に屬し、その北方部の一峯。霧島岳の北麓なり。宮崎縣西諸郡飯野村に跨つ。標高一三〇一米。山體輝石安山岩より形成せらる。近く南西方に白鳥山(一三六三米)聳え、その東麓に白鳥池あり。池の北岸に觀音堂あり。南麓附近は白鳥官林の一部をなし更に南方には霧島岳(一七〇〇米)・獅子戸岳(一四二八米)・新燃(一四二二米)等の霧島山主脈連發す。

【飯列島】鹿兒島縣薩摩郡に屬し、天草諸島の西南に位し薩摩半島の西岸より西方約三〇軒。上飯島・中飯島・下飯島及びその他の小島より成り、その延長約四〇軒、面積凡そ一〇五平方軒。主として白聖紀の砂岩・頁岩より構成され、山は概して高からざれど數多の丘棚起伏し低平の地少なし。海岸は一般に懸崖をなし殊に冬季の北西風を受くる西面に於て一層甚しく、東面に小平地點綴す。田二二〇町歩、畑五〇三町歩を有し、甘藷及び輸出百合根の産少からず。漁撈に於て一層知られ、下飯島の手打港、上飯島の里港はその中心地なり。近海は暖流に洗はれ鯉・鰻等の産多く、海鼠もまた知られ、東方近海の珊瑚は現在採はず。往時は流刺地なりしも、今は串木野町との間に海底電線を通じ、下飯島の釣掛崎に燈臺(明治二十九年設置)あり。燈質、連

四白光、光連距離二九・五里。

コシキ

五色

【五色岳】 藏王山(宮城・山形縣境)の中...

【五色ヶ原】 黒部上流左岸に當る高原。

【五色沼】 福島縣耶麻郡にある沼。楡原...

【五色沼】 山上村(山形縣南陽郡)...

【五色沼】 福島縣耶麻郡にある沼。楡原...

際止めしが、三湖の間に一〇〇米より...

【五色沼】 福島縣耶麻郡にある沼。水保...

【五色沼】 福島縣耶麻郡にある沼。水保...

【五色沼】 福島縣耶麻郡にある沼。水保...

【五色沼】 福島縣耶麻郡にある沼。水保...

【五色沼】 福島縣耶麻郡にある沼。水保...

隣なり。西は片瀬町と隣す。町内全部丘...

【越路】 越路は高志に往昔大らか...

【越路】 越路は高志に往昔大らか...

【越路】 越路は高志に往昔大らか...

【越路】 越路は高志に往昔大らか...

【越路】 越路は高志に往昔大らか...

して朝野の敬重を受けし、専断の行あり...

成り孤獨と想。母之懐中。赴大和國宇多郡...

【コシキ】 越路・高志道 越路は高志に往昔大らか...

【越路】 越路は高志に往昔大らか...

るを見る。本村内を貫流する山田川の兩岸は堤防低く、河灘の繁茂甚しく排水悪しきため、雨期には河岸一帯に洪水して年々被害を受けること数回町歩に及び、其損害甚大なり。丘陵地は洪積層所々に現はれ平野は沖積層なり。地質豊沃にして耕作の成育に適す。その生産額、米三、四十萬圓、畑作十四萬圓、林野産物約十萬圓なり。十三道及び陸路に連絡する夫々の道路に沿ふ。往昔開墾以前にアイヌ種族の住居したるは、其遺蹟と遺物とにより明かなり。信政公の當郡木造地方開墾に従事せし以前には、僅に助郷部落の存在に止まりし、其後、寛文年間田光沼を穿ち、山田川を掘鑿し、屏風山を貫流し、漸次開墾の行はるるに伴ひ住民を増し、町村制實施と共に五大字を以て村制を布き今日に至れり。

コシマス

小清水村 北海通郡 支庁管内の二級村。北見國斜里郡の西部にて東は斜里村、西は網走郡網走町に隣り、東南は根室國標津郡(標津村)、西は網走郡川上郡弟子屈村に界し、北はオホーツク海に面す。面積五七一平方軒餘。東南端に斜里岳(五四五米)・標津岳(一〇六一米)、西南端には藻琴山(一〇〇〇米)等の千島火山帯に属する火山時つし、その北斜面は極めて緩傾斜をなしてオホーツク海岸に低下し、中部には洪積層の臺地、北部には沖積層の平地あり。斜里川は斜里岳の南谷に發し初め西

コシモ

越百 木曾山脈駒ヶ岳山塊南西部の一峰。飯田市の西北約一五軒に當り、東側は長野縣上伊那郡飯島村、西側は西筑摩郡大桑村に属す。標高二六一三米。【越百川】 木曾川の支流。長野縣西筑摩郡大桑村東部の川。木曾山脈に属する越百山・念文ヶ岳の西方斜面より源流し、西流して伊那川に合流し、更に西流して木曾川に合流す。

コシヤ

五社 【五社山】 阿武隈山脈に属する一峰。福島縣雙葉郡川内村に峙立す。標高六一二米。木戸川は西・北・東麓を絶流し、東流して太平洋に注ぐ。川を隔てて西方に萬太郎山(九六〇米)對峙す。【五社山】 一名檢葉岳とも云ふ。阿武隈山脈南西部に属する一峰。太平洋海岸を走る福島縣雙葉郡廣野村に峙つ。標高六八五米。淺見川北麓を東流し、太平洋に注ぐ。【五社山】 長崎市西坂町にある丘。耶穌教徒の斬罪・磔刑の行はれし所なり。外人間にはセイント・ヘルと呼ばる。天草一揆の盟主益田四郎以下三千三百人の埋められし有馬塚及び南蠻人を磔刑に處せし南蠻塚あり。又ここは一般人の處刑場たりき。

コジューニン

五十人山 阿武隈山脈に属する一峰。福島縣田代郡路村に雙葉郡葛尾村との境界に峙つ。標高八八三米。山體は片麻岩より形成せらる。【コジューノメ】 五十目 秋田縣南秋田郡にありし村。明治二十九年五城目町と改稱。

コシヨ

古所山・古處山 別稱白山 宿・白雲山。福岡縣朝倉郡秋月町・上秋月村に葛懸千手村とに跨る。標高八六二米。山體古生層より成り、山頂には石灰岩の露出ありて、特異の景観を呈す。

秋月町より千歳川の支流なる淡河に沿ひて、險路を約四軒登高して達頂す。途中新四國の靈場を造り、佛像安置せらる。山頂奥の院の岩窟は大菩薩と稱さるる風穴なり。又山頂には白山神社あり、神社近くに國見岩と稱する巨岩ありて、北方に響瀧を望み、南方に筑後の清流を俯瞰し得らる。山腹に秋月氏の古城跡あり、山腹に指定天然記念物たるツゲの原始林あり。大炬つげを主とし淺間つげ・丸葉つげをも産す。天然原生林は面積約八六三アールに達す。福岡より日歸りにて登山可能にして近時登山者多し。

コシヨ

五所 【五所山】 御所山とも書く。奥羽火山脈に属する連峰。東側は宮城縣加美郡小野田村、黒川郡吉田村・宮城郡大深村に属し、西側は、山形縣北村山郡常盤村に属す。船形山(一五〇〇米)・克神山(一一七〇米)・日天森・月天森・黒伏山の五峰を、この地方にて五山と稱して崇め、五聖山と云ひしを五所山と書き改めしなり。昔は修験者の登山ありし、今は殆んどなく、船形山頂上なる御所山神社も荒廢せり。これ等五山中には瀑布あり、絶壁あり、岩窟あり、變化に富む。山頂部は風強く、また松嶺の海にして高山的地貌をなす。【五所村】 茨城縣常陸國眞壁郡の西北隅。鬼怒川中流の東岸にして下館町の西北に位し同町との間に伊賀村を挟む。東は中

村、北は栃木縣芳賀郡長沼村、西は同下郡買部村に隣す。關東平野内の一帯にて村内大部分は畑地をなし、北部及び東部に水田あり。全村殆ど農業をなし、そのうち養蠶をなすもの約三分の一あり。下館町に縣道を通じ(約四軒)同町に省線水戸線・武岡線及び常陸鐵道の接續點たる下館驛を置く。此地或は和名抄、新治郡伊豫郡内に屬せしものか。天保年間當時の旗本小宮山小左衛門、其領地たりし本村の五所宮・灰塚・椿ヶ島に二宮登徳の仕法を受けしことあり。もと五ヶ宮・灰塚・小嶋・椿ヶ島・山崎・森添島・西山田・下江連・大谷・上平塚・子思謙の十一箇村の聯合村なりし、を明治二十二年町村制實施の際に併合して五所村と名づく。蓋し五所とは常陸國伊佐庄三十三郷の鎮守、五所神社を中心とするによる名たり。【五所神社】 郷社。祭神、武甕槌命・經津主命・天兒屋根命・比賣命。舊八十八箇村の總鎮守。

コシヨ

御所 【御所村】 徳島縣阿波國板野郡の西端。東は松島村に、南は一條町及び阿波郡の柿島村に、西は同じく土成町・大俣村に界し、北は香川縣大川郡福榮村に隣す。村内大部は東西に走る讃岐山脈の南斜面の一部にあり、約七〇〇米以上の高峻な山地にて被ばれ、その南麓に著しき段丘をつくる。吉野川の沖積地徳島平野はそ

コシヨ

の段丘下に覆がる。又北部山地より南下する溪流は段丘下に扇狀沖積地を突出せしめ、ここに急に水無川となり壑谷をつくる。その谷地に僅に水田耕作地をみゆるも、他は概ね畑地にて桑畑をつくる。従来は藍畑をつくりしも藍の需要減少し來たりしため、次第に蜜柑畑・桐林・桑畑にかへつたり。主なる部落は南部に多く高尾吉田を首とし、南境に沿うて東西に連葉街道が一部を掠めて通す。此地古くは和名抄、板野郡田上郷の内に屬せしものか。日碑の傳ふるところに據ればこの地に嘗て土御門上皇の行在所となりし地なりといひ、大馬吉田に御所屋敷なるもの存す。吉田・宮内内・高尾の三大字より成り、吉田に役場を置く。【御所屋敷】 大字吉田にあり。屋敷内に御所神社鎮座す。日碑の傳ふるところによれば、御所屋敷は土御門上皇行在所の遺址にして、當時上皇土佐より阿波國に還幸あり、新御所に入らせられし風聞、北條氏の耳に入り討手を差向けられたれば、上皇は一旦宮内内谷に逃入り給ひしと云ひ、到る處御生害あらせられしなりと云ひ、到る處古跡存し又古文書を蔵する者少からず。されど宮内内谷に自害せし土御門上皇子、紀成良の逐ふ所となり、宮内内谷に於て自殺したるを、後世誤り傳へて天皇となすに至りしなりとの説あり。【十樂寺】 大字高尾にあり。眞言宗高野派。光

コシヨ

明山と號し四國八十八ヶ所第七番靈場たり。往昔は舊十樂寺谷にあり、其規模安壯なりきといふ。其遺址として今なほ法教田・大門原・堂ヶ原の稱あり。本尊阿彌陀如來坐像を安置す。田村和泉守本尊に歸依して再建せり。詠歌に「人間の八苦を早くばなれなばいたらん方ば九品十樂」とあり。【葛懸石】 宮内内葛懸谷にあり。葛懸の葛藤そのまゝにて頗る奇麗なり。此地折野・榑木・板東の諸村に於ても發見す。これ太古海草の化石せしものなりといふ。【古城村】 岩手縣陸中國津郡の東南部。北上川の右岸に近く、南は前澤町に相接し、北は水澤町との間に瀧城村を挟み、西は小山村に隣す。地勢上、東西の二部に分れ、西部は豊澤川南部洪積層地帯の一部にて、高度七〇米内外の臺地をなし、東部は北上川沿岸の沖積地の一部にして高度四〇米内外の低地にして水田よく拓く。米の産多く外に蕎麥・馬・林産等あり。國道(陸羽街道)と省線東北本線中部を南北に貫き、前者にはバスの往來ありて水澤町・前澤町への交通便利なり。この地は和名抄、豊澤郡下野郷の地に當るか。蓋し古城とは字中畑の西、小山村に互り、方八町會と呼ばれる廢墟あり、近年之は豊澤鎮守府址なりと稱せられ、之によりて古城村と名づく。村内は明治九年七月、明治天皇が奥羽御巡幸の際、御

コシヨ

小休あらせられ、のち同十四年八月にも山形・秋田及び北海道行幸の際、御小休あらせられしことあり。【古城村】 千葉縣下總國香取郡の南部。東は中和村、北は府馬町・山倉村、西は豊和村、南は勝郷郡共和村・榑海村に隣す。北半は房総丘陵の一部をなして森林あり、南半は九十九里濱沿岸平地の北端の一部を占め、大部分分水にて東南の一部のみ畑地をなし米・麥・蕎麥の産多し。南方約三軒の所を省線總武本線東走し、千湯驛(海上郡旭日町の西端)あり。當村より縣道を通ず。この地は和名抄、匝瑛郡珠浦郷の地なるべしといふ。【榑木城】 大字榑木字古城に在り。現今は跡無たり。榑木城定及び風祭等世々に居住す。小田原役後廢城に歸せしものと思はる。或は榑木志摩なるもの亦本村に住せりといふ。【光明寺】 大字榑木字谷ノ下町にあり。淨土宗西派。榑木山風定院と號す。本尊は阿彌陀如來。寺傳に依れば、延應元年二月記主良忠の開創するところにして、榑木風定、爲に堂宇を建つと。【願勝寺】 大字榑木字場臺にあり。眞言宗。榑木山と號す。本尊釋迦如來。寺傳に、僧空海護摩法を遺跡なりといふ。應永年間護摩法師これを開創す。天正五年炎上、明治三年再度炎上、同十年再建せらる。【正賢寺】 大字榑木字場臺にあり。天台宗。榑木山と號し不動を本尊とす。寺傳に云ふ、往昔は一の庵室たりしが、

承平年中、平野門の地に寓居三月に及ぶ。因つて兜上置くとこの不動佛一寸八分なるもの及び唐墨一・筋一を留めて去る。以て寺を平野門と名づけ、不動佛を本尊とせしが、永正十七年、備木城主頼木氏、鬼門除の祈願を爲し、更に今の寺に改むと云ふ。(長泉寺) 大字備木字河岸湖に在り。曹洞宗。松尾山と號す。寺傳に曰ふ、享祿二年、備木城主頼木氏定之を創し、僧茂山を以て開基となし、天保十二年五月、崩崖のために覆壓せられ、更に之を再建す。

【古城村】 熊本縣肥後國阿蘇郡の東北隅。阿蘇火山外輪山の東北端より、その西南方に續く阿蘇谷の東北隅の一部に互る地帯を占め、宮地町の東北に隣る。中央に阿蘇外輪山が西北より東南へ、更に南へ傾斜し七七八〇米の高さに達して西方へ急傾斜をなし、火口原阿蘇谷の東北隅を占むる西南部の低地に續く。東部は外輪山の外斜面にて緩傾斜をなし隣村産山村に下る。山地多く荒地をなし、牛・馬の放牧の行はるるところあり。西部の火口原の低地には耕地拓けて米・麥の産地をなす。交通路は西方内ノ牧より北部にて外輪山を越えて東方山麓久住村方面に至るものあり。南境近くには東西に縣道通す。南方に省線豊肥線、外輪山のトンネルを過ぎて東西に通じ西南約四軒に宮地驛あり。此地は古く健康龍命・地蔵玉命相傳いで阿蘇國造として住し、地方を經營し給ふ所と傳へらる。藩政以後は坂梨郷の一部となり、坂梨に總庄屋を、村内の三野・手野の二ヶ所に庄屋を置きて庶政を掌らしめ、明治六年北坂梨・三野・手野三ヶ村に里正を置き、同十三年官選戸長を置くに至るや、また坂梨村と合し、同二十二年町村制實施せらるるや、坂梨村と分離し、北坂梨・三野・手野の三部落を併せて古城村と改稱し村治を圖るに至る。いま本村の地は阿蘇國立公園の内に屬す。(國造神社) 大字手野に鎮座。蘇社。祭神、國造、速坂玉命。兩宮殿命。高橋神・火宮神(相殿)。社傳によれば、登行天皇十八年勅して社殿を造營し、速坂玉命を創祀せりと云ふ。承和十四年七月社殿造營の事あり、次で官社に列し、延喜の制に式内小社に列せらる。當社は宮地村なる官幣大社阿蘇神社の北方に當るを以て、土俗は一に北宮と呼ぶ。明治十年阿蘇神社の攝社に定めらる。今なほ速坂玉命の石隠れ給ひ處と傳ふる御藏穴あり。例祭、七月二十六日。(手野の大杉) 指定天然記念物。大字手野にあり。蘇社國造神社境内、社殿前庭の廣場の東隅に存す。根幹約一四米、日通り約一米、高さ約四七米ありて、樹勢壯大。古來手野の神杉と稱し、陸奥二株の大杉ありしが、一は文政年間火災の爲に枯死す。本樹より二米餘隔てし北方にその若株の根を存し、その附近に日通約二米半の杉あり、その傍に天保二年に建立せし

植杉碑あり。碑面に、神杉と題し、裏には「御郡大目付中村流石衛門植之」とあり。若株より生じし葉を植ふしものと云ふ。【古城村】 朝鮮平安北道寧邊郡の中部。東北は南嶺に、南は梧里面・寧邊面に、西は清川江を隔てて八院面に夫々接し、北は同じく清川江を隔てて雲山郡に接す。中部及び東南部に百米前後の丘陵地あり、其間に概ね低地にして、且つ清川江及び其支流の灌溉よろしきを得て耕地よく拓く。主生業は農にして米・麥・豆類・棉・大麻等を主産す。三等道路面の西部を西南より東北に過ぐるのみならず、清川江による舟楫の便あり。また市内に砂金を出す三營砂金嶺山あり。

【古城村】 朝鮮平安北道義州郡の西部。新義州府の東に隣り、東は古館面に、南は咸鏡面・古津面に、北は松長面・内面に、西北は鴨綠江の分流を隔てて成化面に夫々相接す。東南境に四〇九米の峯ありて、その山脚北西に延ぶにして、西部鴨綠江分流沿岸の低平にして耕地よく拓く。主生業は農にして米・麥・豆類・棉・大麻等を主産し、また蔬菜を出す。新義州府より来る二等道路面の西部を過ぎりて北方義州方面に走り、また鴨綠江による舟楫の便あり。

コシヨ 固城

【固城郡】 朝鮮慶尙南道の西南部。泗川郡及び統營郡の各一部と共に一個の半島を形成し、南岸の大部は海に臨みその中

り邑を統營に移し、府使を置きしも同十一年に復邑し、三十二年(明治二十八年)府を郡に改め郡守を置き今日に及ぶ。【固城郡】 朝鮮慶尙南道固城郡の南部。即ち地峽部の中央に位し、半島の主邑統營へ約二〇軒あり。西より北は三山面・大可面・馬嶺面に、東南は瓦流面に夫々及ぶ西南は海に面す。東南部に三十四百米の丘陵あり、他は殆ど地味肥沃なる平野開け耕地よく拓く。市内には魚類仲買に従事する者多く、また本道屈指の米産地として知られ、また麻布・苧布の産地として著名なり。當面は郡の主邑にて郡廳・警察署の所在地にして地方物産の集散地たり。

コシヨ 御所村

【御所村】 岩手縣陸中郡岩手郡の東南端。盛岡の西南に聳ゆる南品トロイア火山群の西麓地帯にて秋田縣との境をなす山村。矢野川・南畑川・岩宿川の狭小河谷に部落点在す。藩政時代には盛岡・秋田間の公道あり、山伏峠・長橋峠有名なりき。主なる生産物は薪炭・木材等。宇石菅林署の山林軌道通じ、長橋峠にはトンネル・インクライン等完備す。この地は平貞盛の商住し戸澤氏を稱す。子孫徳川氏に仕へ、出羽新庄の城主となる。明治に華族に列し、子爵を授けらる。(熱温泉) 小岩井驛より南四軒。盛岡より定期バス通す。箱ヶ森山の西麓石雪川の溪谷に湧出す。泉質硫酸泉。傳

【五城村】 岡山縣備前國赤磐郡の西部。旭川中流の左岸。東は輕部村・鳥取上村に、南は葛城村に、北は布都美村・竹枝村に界し、西は旭川を隔て、御津郡金川町に隣す。著しく開析をうけし二一三〇〇米の臺地性山地南北兩端に設け、また中央部には一〇〇米前後の丘陵が箇々に切れて設ぶ。その間、東西にわたる低地は割に廣く耕地に利用され、又低地を縫うて旭川の上支流が流れ灌溉に便なるため米作行はれ、米・麥・藁の産多し。緩起伏にとむ中央山地は、好牧場となり牛を飼ふ。部落は北方に集まり新庄は西の矢原と共に首邑をなす。南部の伊田嶺山に銅・銀の産あり。此地は和名抄、赤坂郡宅美郡の内に屬せしもの如し。中世は平岡庄に屬す。この邊一帯は旭川の溪流に

コシヨ 五城

【五城村】 岡山縣備前國赤磐郡の西部。旭川中流の左岸。東は輕部村・鳥取上村に、南は葛城村に、北は布都美村・竹枝村に界し、西は旭川を隔て、御津郡金川町に隣す。著しく開析をうけし二一三〇〇米の臺地性山地南北兩端に設け、また中央部には一〇〇米前後の丘陵が箇々に切れて設ぶ。その間、東西にわたる低地は割に廣く耕地に利用され、又低地を縫うて旭川の上支流が流れ灌溉に便なるため米作行はれ、米・麥・藁の産多し。緩起伏にとむ中央山地は、好牧場となり牛を飼ふ。部落は北方に集まり新庄は西の矢原と共に首邑をなす。南部の伊田嶺山に銅・銀の産あり。此地は和名抄、赤坂郡宅美郡の内に屬せしもの如し。中世は平岡庄に屬す。この邊一帯は旭川の溪流に

臨む要害の地にして岡山の前庭たりし所といふ。いま新庄平岡西矢知伊田・矢原の五大字よりなり新庄に役場を置く。(櫻谷藩) 大字伊田の嶺谷山といふ國有林中にあり。直下五丈(約一五米)、幅六尺(約一八米)、飛泉降下するの狀、恰も白布を空際より垂るるが如き奇觀をなす。此地旭川の東岸にて中國鐵道の金川驛に近く、旭川の流に臨み、松樹葱鬱たる幽邃の地。盛夏の候避暑客多し。

【五城村】 愛媛縣伊豫國喜多郡の東北端。大洲町の東北約一二軒。東は大洲村に、東南は御城村に、南は天神村・内子町に、西北は滿穂村に、北は立川村に界す。村

内始と山地にて北及び東北端に海抜五〇〇米餘の峯が連なり、又東南部に五六五米の山あり、それを中心として東・南境にも四〇〇米前後の連嶺あり、何れも緩斜面を中心部にむけ、その場合に東西に走る小田川の谷を造る。谷は淺く兩岸には段丘發達せり。又西部を南北に流る中山川は緩谷をなし、西南隅にて小田川と合して内子町の東側を流る。城内は低平地少なきも、緩傾斜の山地を利用して耕地拓かれ、農を主生業とし米・麥・藁等を産す。また栗・葡萄等の果樹、三椏・楮等の産も豊富にて、大洲牛紙の名ある日本紙の製造も盛に行はる。松山市と大洲町を結ぶ交通路の一部にあり、又隣縣高知市へ通ふ縣道も通過し交通便利なり。内子町より高知市へ行くものは大體小田

中央島頭部に於て統營郡に接し、東北は昌原、北は曹州、西は泗川の各郡に夫々隣接す。山脈東西に連走し、なほ幾多の支脈あるも概ね峻峻ならず。河川は郡の中央を分水界として四方に向つて流れ、東南部には豊沃の平野横はる。海岸は周圍に富み、固城灣をばじめ大小の入海各所に散在するも、海岸遠淺にして、良泊なく、干潮の際は大なる干潟地を露出し漁業・交通ともに盛ならず。産業は農を主とし、農業戸数は總戸数の八五%に當り、耕地面積水田九四一五町歩、畑三七七四町歩に達す。米を主産し、大豆・大豆之に次ぎ、棉作よく行はれて年産一七八萬斤あり。牧畜は牛・豚多く、養蠶また盛なり。漁業は河津鰯大なる割合に盛ならざれど、鯛・鱈・ちのめ・あなご等の産あり。鹽産は會華面・三山面内には金を産す。鐵道未だ通じざるも、固城を中心として東北馬山及び南方統營に二等道路を、また三等道路は泗川その他に通じ、何れもパスの便ありて交通稍便なり。行政上固城面は十三面に分ち、郡廳を固城面城内側に置く。本部の地はもと伽耶國にして、のち新羅之を取り古百部を置き、景德王の時固城と改む。高麗成宗王の時、固城刺史とせしが、のち縣となし、百濟に屬し、其後縣令を置く。元宗王州となし、忠烈王の時南海に併せしが、次で復舊し、恭愍王の時縣令となし、李朝もこれに因る。李太王七年(明治三年)に至

川の谷に沿ひて東に、松山市へ行くものは同じく内子町より分れて北に中山川の西側を通る。棄落は道路に沿ひて發達し城廻り五日市は首邑なり。村名の起原は明治二十二年城廻りと五百木村の二村合併し五百木の五と、城廻りの城とを取りて五城村と名づく。蓋し城廻りとは天文七年六月防州より曾根左衛門源高昌、いままの曾根城にありこの地方を治めたるより、この城の廻り部落を城廻りと稱せり。昭和四年、村前村の一部、上成・下成・深谷・北浦・長雨・中土の六部落を本村に合併す。

コシヨ 五常

【五常村】 臺灣臺中州新高郡の管轄區の舊堡名。即ち日月潭の周圍に存在せし一區にして、もと水沙連堡に屬せしが、光緒元年獨立して一堡となれり。遺光の本年、この地方に於ける漢族の移住益々多く、銃・水社・獵場・司馬後・新城の五庄(現在五大字となる)は殊に集中の區となり、乃ち庄外に竹圍を設けて防衛と爲せしより、俗に五城と稱せしに因り堡名と爲せり。而して五城の稱呼は同治年代の頃より、この地方の總稱として慣用せられたり。大正九年地方制度改正に依り堡は撤廢せられ、區域内の拔社埔庄(現大字拔社埔)を、集々庄(臺中州新高郡)に編入し、爾餘は一括して魚池庄(臺中州新高郡)となれり。

世二十三年本村を國分村と改め、昭和九年、市川町・八幡町・中山町と共に廢せられ市川市を設く。

【五條村】長野縣信濃國東筑摩郡の西北部。松本市の北方十四軒、犀川の支流會田川に沿ふ。北部及び南部に標高三四百米の山地ありて、村の略々中央を東西に貫通せる會田川の谷へ次第に傾斜し、川谷に僅かの平地あり。山地は殆んど森林なり。米・麥・蕎麥の産あり。會田川の右岸に沿ふ縣道は東隣會田村より西隣中川手村に通ずるものにて、省線井線明科驛に近し。この地は和名抄、筑摩郡御座郷の内にて、延喜兵部省式に信濃國、御座郷馬十五疋とあるは、この地なりといふ。いま秋田光・井刈・落水・西の宮・北山の舊五箇村を併合し五條村となし、役場を落水に置く。秋田光の地味深は往昔より行人の足を留む。

【シヨ】 五條

【五條】 愛知縣西春日井郡にありし村。明治三十九年本村に尾張村・多氣村・小水村の三村とともに廢せられ、北里村を設く。

ろ、即ち舊時の六條坊門通に架せ、もとの名により五條橋といひ、遂に街路の名も改められて、五條通と呼ぶに至り。この橋は由來頗る古く、嵯峨天皇の勅定によりて、一百間の橋梁を架せしに始まると言はる。その後、清水寺成就院より諸國諸人に勧進して、この橋を再建せしにより、勧進橋または清水橋と呼ばる。天正の移築後また朽損せるため正保年中に改造、石橋となせしが、寛文二年後また木橋となる。今の擬寶珠に「橋陽五條石橋正保二年乙酉十一月吉日、奉行盧浦觀音寺興典、小川兼光衛門督正長」の銘記あるにより明かりなり。この擬寶珠は明治二十六年、賣物を捜出し採用せるもの。現今の橋は明治四十四年十一月の改造にて、形状は舊に依るも、橋面は近代式に築造せらる。長さ六八・四米、幅七・八米。義経記(謡曲「拾葉抄」十二下所引)「武藏坊辨慶事安元六月十二日の夜五條の天神にて初めて見参したるとぞ義経時は十八歳辨慶は二十六歳の事也辨慶色々義経を懸しゆみ後には日論になり打物の勝負に及しゆ共辨慶叶はずして歸るといへり同十七日の夜五條の橋にて往還たり此度は勝負に依つて負たん者家人とならんと約諾して戦ふに此時も辨慶勝事あたはず是より主君と仰ぎ云々」鬼一法眼三略・卷五「西塔の武藏坊辨慶は、その頃都に在りけるが、五條の橋には人を傾てす者ありと聞きしかば、それを

從へ召仕はんと、心も空も晴るる夜の、月も吾羽の山の端に、出で立つ鐘に黒革

【五條橋筋】 京都の町名、現今下京區五條通。五條大橋より西へ、東西に通ずる町、好色一代女・五折から五條橋筋にかくれもなき大扇屋有ける。此亭主子細者にて、數銀付女房もよばず。

【五條通】 京都市の東西に通ずる大路の一。下京區の手本通より起り、賀茂川を越えて東山区の東大路に至る。大體平安京の六條坊門大路の位置に當る。豊臣秀吉の時、五條大橋を二町下流のこの通の賀茂川に架替へてより、轉じて五條通りと稱す。

【五條坂】 京都市東山区にあり、五條通五條大橋の東、大和路を經て東大路通を横斷し東北に清水坂に出づる坂路。附近には清水焼の名工の窯元あり、また陶器店軒を連ね。

【五條新地】 江戸時代、京都遊里の一、五條橋西の橋筋南に在りき。樂業毛・七下・彌次五條のばしに來り、はし向うにわたり、そこそこまごつくうち、わうらいのにぎやかなるにうかれて、おもしろい、はしのためとをひだりのかたへうかれゆく、なにかばしらす、りやうがばにかけ行燈のきこに、てうし三味線のおと賑はしく、ぞめきうたにほほかぶりせし男どもの、ちらつくにまぎれてのぞきあるく。この所は五條新地とて、す

このながれをくむ遊所なり、家ごとに戸をたてたるが、くぐりばかりを開きてかどくらにたちたる女の、ささやかなる聲して、モシナノと彌次郎が袖をひく

【五條(縣)】 明治三年二月大和五條に置きて高野山を管せし縣。翌四年十一月これを廢して奈良縣に入る。

【五條町】 奈良縣大和國宇智郡の中部に位し、奈良市の南方四五軒にあり。北は南宇智村に、東から南にかけて野原町・阪合部村に、西は牧野村に夫々接せり。金剛地臺の主峰金剛山(一一・二米)の南麓に位し、吉野川の右岸たり。吉野川は曲流をなし、此地にては盆地状をなす。町附近盆地内には水田が多く、河岸には桑畑見らる。町には杉割製の特産あり、下市に次ぐ産額を示す。また吉野川の清流を利用して古來清酒の醸造行はる。町は西吉野の咽喉を扼し、和歌山地方との交通の要地にして、伊勢街道西より入り、此地を通過し、省線御山線はこれに平行して走る。町の北端に五條驛(明治三十九年設置)を、南西部には大和二見驛(明治三十五年設置)あり。又貨物線もありて川端驛(明治二十九年設置)を置く。此町附近は和名抄の宇智郡資母郷の地にして、往時松倉氏ここに築城したるも、徳川時代は幕府より代官を派して治めしむ、これ五條代官と云ふ。文久三年八月京都に於ては大和行幸の謁起り、諸國の

浪人中山信俊忠先を擁し行幸の先驅たらんとし、大和・河内に入り、松本奎堂等五條陣屋を襲ひ代官を殺し吉野十津川に玉り幕府軍と戦ひ終に敗死せり。天誅組の亂是なり。西南の二見城址は吉野川に臨み慶長年中松倉備七郎重政の築城にかかると。重政は越中國新川郡松倉村の人にして、大和に來り信井氏に仕官し、關ヶ原の戦には東軍に従ひ戦功あり、家康之を抜擢して二萬石を賜へたり。大阪の役にも軍功ありて肥前の島原城に封ぜらる。なほ此地には幕末の勤王家乾十郎(彌正五位)・伊澤宜庵(彌正五位)・森田節齋(彌從四位)等を輩出す。本町はもと宇智郡の郡衙のありし所にて、いま警察署・區裁判所・中學校・女學校あり、南和の地方的中心をなす。「大和義舉」幕末に於ける倒幕軍兵の先驅。文久三年八月十三日、朝廷大和行幸の謁勅を發するや、土佐藩士吉村實太郎、刈谷藩士松本謙三郎等、前侍從中山忠先を奉じ、兵を率ゐて大和に入り、五條なる幕府の代官所を襲ひ、爾後近衛藩諸將に十津川郷民等を従へて義旗を南和の山中に翻し、追討諸藩の兵と戦ひて倒幕實行の先驅となる。これ世に大和軍兵または天誅(誅ま)たば忠の字をも用ふ)和事件と稱するものなり。これより先、吉村實太郎・藤本鐵石・松本謙三郎等の同志は、將軍上洛後に於ける時勢の推移に注目し、男山行幸後、天下の形勢益々切迫せしより、東西

に奔走し有事の日の準備に忙しかりき。淡路津井村の豪農古東左衛門が、前年來の盟約を守り、家財の全部を大阪の骨董商に託し、數百金を調達して鐵石に送り、彦根の重臣岡本半助、實太郎の要求を容れ甲冑・刀劍並びに銃器を提供せしが如きは、その一端なり。六月初旬、中山忠先中央に於ける形勢の激變を聞き、下關より京に歸る。爾後忠先を中心とし志士の來往頻繁を極む。越えて八月十四日、大和行幸の謁勅發せられたる翌日、忠先はまづ同盟の士に檄を發し、「忠節を心懸候我等同、御先鋒として大和へ罷下り、賢勇を迎へ奉らんが爲め本日發向」の旨急送し、松本・吉村の二士を従へて方廣寺の大佛殿に土居佐之介・上田宗兒・池内藏太・那須信吾その他の同志三十八名と會合、即夜淀河を舟行し大阪に下り、當安橋より早船二艘に分乘し長州へ急行の使船なりと稱し天保山に出で海上を迂回し堺港に上陸、十六日河内狭山を經て甲田村に達し、同地の豪農本郡善之祐邸に投宿す。善之祐は南河義徒の首領にして、八月下旬義舉の策謀するや、馳せて郷に歸り、旗幟・武器その他戦陣の用意を整へ、義徒十餘輩を率ゐて一行を率ふ。翌十七日早曉、忠先は隊伍を整へ軍旗を翻して宿所を出發、三日市を經て觀心寺に到り、この地に來會せし藤本鐵石等を加へ、後村上天皇の山陵を拜し、楠公首塚の前に勢揃し軍兵の式を挙げ、

一路金剛山下、千早越の險路を踏破し、五條町に殺到、直ちに代官所を襲うて代官鈴木源内、元編長谷川俊助、用人黒澤儀助等五人を斬り、陣屋に火を放ちてこれを焼き、同地櫻井寺を本營と定め、ここに滞陣す。この夜伴林平・乾十郎・平岡勘平(のち北高治男)等、河内・大和の烈士來會し義軍益々振へり。翌日、須惠の刑場に源内等を梟首し誅戮を加へし理由を榜示し、また市中に高札を建て爾今、氣血を離れ朝廷の直轄とし、從來の苛政を解きて仁政を施す旨を諭示し、なほ近郷吏員の正邪を明かにし、賞罰を行ひ、以て朝政の每き一端を知らしめ、また一方軍の部署を定め愈々形勢奉迎の策地を築きたり。その部署の大體を示せば、總裁は藤本津之助資金(備前)・松本謙三郎(三河)・同吉村實太郎重將(土佐)・側用人は池内藏太(土佐)、監祭は吉田重藏(筑前)・那須信吾(土佐)・酒井傳次郎(筑後)。銀奉行、磯島實(因幡)。小荷駄奉行、水郡善之祐(河内)。武器方、安岡嘉助(土佐)。合同隊、赤戸彌四郎(三河)・兵隊方、林約吉郎(大和)。勘定方、平岡勘平(大和)。記録方、伴林光平(河内)。執筆方、辻義之助(河内)、小姓頭、藤谷伊與作(常陸)。(其他略)以上の如く定めらる。然るに十八日、京都に於て政變俄に起り、忠先等の同志は悉く退けられ、剩へ大和行幸中止の勅命發せらる。この日平野次郎、三條公の内命を奉じて走

りて五條に至り、急變を告げて義舉の中止を傳へしが、時既に代官所襲撃の後なり。ここに於て忠先等一行の行動は起ち踈蹙し、中央よりの後援の望全く絶えしのみならず、幕府は神歌山・津・彦根・郡山・高取・狭山・岸和田等の諸藩に下命し義軍追討の兵を發す。忠先等は軍議の結果本營を十津川の天險に移すこととし、池内藏太等五十餘人を停めて五條を守らしめ、忠先は全軍を率ゐ、二十一日大塔村を經て天の辻に達し、微を四方に飛ばして同志を募り、不逞の士を梟首し郷中を徇へしにより、十津川郷兵來り投ずるもの千餘人に及び、兵勢再び大に振へり。よりに追討軍の先鋒を制して士氣を激勵せんため、吉村實太郎等郷兵數百を率ゐ、高取城を夜襲し大に戦ひたり。これより後、追討諸兵漸次四方より迫り下市・白銀嶽・大日川・北曾木等の險要によりて屢々敵軍を悩ませしが、義軍また勢漸く屈したるのみならず、京都守護職は十津川全郷に、中山忠先は勅勅の身、その軍、義兵と稱するは虚言なり、郷民は宜しく向背を誤つて朝敵となる勿れとの令を布き、また郷中の先輩前田雅樂が中川宮の令旨を奉じ京都より歸郷し、忠先の從と絶たざれば、一郷叛賊の名を蒙るべしと説きしをもつて、郷士の離散するもの日に多く、白銀・天の辻等を漸次撤し本營を上野地に移せしが、九月十五日に至り、忠先義軍の支ふべからざる

を情り、衆を諭して退退の自由を許し、水蓋を傾けて水別を致し、敗北の士百餘人を従へ、風塵を纏て、紀州本宮に救出せんとせしが、途中急に方向を變じ、大塚・白川・伯母ヶ峯等の險難を跋渉、吉村寅太郎・松本謙三郎等の傷病者を勞りつつ、千辛萬苦し、武木・和田を経て、野家口に着きしは二十四日の夜中なり。然るに彦根・和歌山の兩藩兵、篝火を焚きて警戒の網を敷にせるにより、思光は上田宗兒・伊吹周吉・島浪間・中田門吉等六士を従へ山中叢棘の間を潜行し、三輪に出で、二十七日大阪に達し、江戸藩の長藩邸に投じ、後、長州におくらは、之より先義軍の一行野家口に達せし時、最後の軍議を開き、那須信吾・山下佐吉・植村定七・大戸彌四郎・林豹吉郎・鍋島米之助等の勇士進みて決死隊となりしが、那須以下猛闘力戦の後、悉く野家口に戦死し、高取の役に負傷せし吉村と兩眼失明せし松本とは、山中奥丁に逃げられ、困憊苦痛の際、賊の刺撃に逢うて惨死し、藤本鐵石は從士福浦元吉と共に野家口の和歌山藩の陣營に突入し敵の亂刀の下に憤死せり。伴林六郎・安岡嘉助・古東領左衛門・土居佐之介・橋本若狭等約三十人は捕へられ元治元年二月死罪に處せらる。〔善田謙蔵〕本町の人、名は益、節齋と號す。學を格闘歌所・額山陽に受け史學文章に長ず。常に尊攘を首唱し、南朝王忠臣の遺稿に力む。安政の頃

備中倉敷にあり、帷を下し子弟を教授せり。國家多事の際、文學を以て報效を期す。爲に門下に多くの俊傑を出し、久坂玄瑞・乾十郎の如きあり。慶應の始め、幕府征長の師を起すの時、福原身に及ぼさんと、驍に選れて紀伊那賀郡見村に住し、久しく世傳を遊ばせり。明治元年七月十六日病歿す、年五十八。贈從四位。〔伊澤宜庵〕名は卓、字は子立、宜庵は其號、大和五條の醫師たり。夙に幕政の世説を憤り、同志と語りて事を舉げんと欲す。文久三年の七月、京都に徵行し、中山忠光に謁し、意見を陳述す。八月、忠光義旗を翻すにおよび、郷民有志を募りて之に加はる。各所轉戦の末、津藩の兵に捕はれ、一時放逐せしむ。翌年の冬、復た四に就き、慶應元年就命に於て毒害す、年四十三。贈正五位。〔乾十郎〕名は嗣能、姓庵と號す。醫を以て業とす。少時梅田雲浦・森田節齋を師とす。安政の初、外職攝海に迫るを聞き、慨然國を愛ひ、家資を擧げて、京都に赴き、中川宮に仕ふ。諸方の志士に交り、國事籌策を期す。文久三年八月に至り、藤本鐵石の勸誘に同意し、その郷兵を糾合し、中山忠光に從ひ、義舉を大和に起す。數日部下を督し、各地に奮闘の末、幕軍に捕へられ六角の獄に呻吟中、元治元年獄中に歿する、年三十七。贈正五位。〔生蓮寺〕二見にあり。古義眞言宗。寄足山と號し本堂高野末たり。總崎天皇御

宇の創建なりといふ。爾後の沿革詳ならず。本堂安置の地蔵坐像は小野篁作と傳へ、總高一丈、左右に家善・家忠の二童子侍す。世に寄足の地蔵といふ。〔櫻井寺〕須恵にあり。淨土宗。もと本統社の神宮寺なり。天曆年間武所所康成の創建と傳へ、阿彌陀佛を本尊となす。寺造に櫻井あるを以て寺名に因む。境内に存する三七堂は三尊半七の供養塔にして近年有志にて建立せしものなり。

コシヨ—コシヨ

【御所浦】 熊本縣肥後國天草郡の御所浦島、牧島及び附近の小島を占む。天草上島の南方海上にあり、東西九軒、南北八軒程の中に散在する大小幾多の島々を含む。面積二・九八方軒。最大はその東南なる御所浦島とし、東北隅に風日崎ありて南北に稍々長く南部は周圍岩石海岸をなす細長き陸地、尾狀に西方に延び先端にノサバ崎あり。全島山地をなし中央に低地ありて聚落は海岸にあり。此島の西北に中瀬戸を隔て、牧島あり。海岸屈曲多く幾多の灣入あり。南方に串崎の突出あり。西方にミノキ崎・マネキ崎、東部にはヤキ崎あり。全島山地をなす爲

め海岸に聚落あり。なほ東北に横浦島、西南に竹島・飄草島等あり。其他小島數多散在す。水産行はれ交通は水運による。傳ふるところによれば人皇十二代景行天皇には十八年五月熊襲を平げ、日向路より球磨を経て東北より船に召され、御所浦の途に上らせ給ひしが、八代水島の近海御航行中に起り東北風のため、怒濤滔巻き御船は流れ本村の風日港に御漂着、夫より良港を求め給うて本郷港に御遊離の上、船出の日を待たせたまひし御時、近侍の士の中に、不幸にも病に冒され療養に盡せし甲斐もなく遂に一命を落す者あり。仍て遺骸を港後に葬る飛龍山に埋葬し、天皇には八代に向はせられたり。天皇の御假泊中、村人等は晝夜魚介を採集してこれを食膳に上せ奉らせ、御用米は今の宮田村より獻じ奉れりといふ。村名に蓋しこれより起るといふ。近侍の士の遺骸を埋葬せりといふ飛龍山には、近衛棟とて其人の靈を祀りし古色蒼然たる石の祠ありて、毎年九月九日に祭典を行ふ。

【御所浦島】 熊本縣肥後國天草郡御所浦村に屬する一島。天草群島の一。天草上島の南方海上にあり。南北約七軒、東西約三軒の南北に細長き島にて周圍約二七軒。中央にウケ崎(四四二米)ありて南北に峯を連ね、山地東西に傾斜し東北に風口崎あり、西海岸中央に唐木崎突出し、南部に陸地西方に三軒突出しその周圍

は岩石海岸をなして西端をノサバ崎と呼ぶ。東海岸に狭長なる低地あり。聚落は海岸低地に建る。

は岩石海岸をなして西端をノサバ崎と呼ぶ。東海岸に狭長なる低地あり。聚落は海岸低地に建る。

コシヨ—コシヨ

【御所見村】 熊本縣高野郡の御所見村、熊本縣高野郡の南部。藤澤町の西北にありと同町との間に小出村を挟む。東は六合村、北は穂瀬村、西は有馬村・赤川村と隣す。村の中央部は相模川以東の丘陵地の一部にて西部は相模川沿岸平地の一部を成す。東部にも丘陵に挟まれたる平地あり。中部より東部にかけては桑畑多く、西部の平地は田地及び畑地をなし米・麥・甘藷・粟・大豆・里芋を産し、また養蠶行はる。西隣赤川村に相模鐵道(茅ヶ崎・八王子間)赤川驛、東隣六合村には小田原急行江ノ島線(新宿・江ノ島間)新長後驛あり孰れも當村より鐵道を通ず。この地は和名抄高野郡消地地の地なるべく、近世、大庭庄(今の大字葛原・打尻・御郷これに屬す)・一宮庄(今の大字宮原これに屬す)・湯香庄(いまの大字用田・眞浦澤これに屬す)に分屬し、明治十七年いまでの六大字を以て聯合村役場を置き、同二十二年町制實施に當り、更に聯合村を合併して一村となし、眞浦澤部落にある御所見塚の名稱に因み御所見村と名づく。初め大字打寄に役場を置きしが、同四十四年之を大字用田に移す。〔宇都母知神社〕大字打尻に鎮座。郷社。祭神、天照大神・稻産靈神・若日下部王。延喜の制に式内小社に列す。境内に延暦の度の陸地

は岩石海岸をなして西端をノサバ崎と呼ぶ。東海岸に狭長なる低地あり。聚落は海岸低地に建る。

コシヨ—コシヨ

物品取引業者は約五割を占む。省線五能線の五所川原驛(大正七年設置)あり、社線津輕鐵道はこれに接続す。設立五所川原農學校・五所川原高等女學校あり。藩主津輕信政時代に開墾せられて村落を形成し、明治九年五所川原ほか三村併合して五所川原村となり、町村制實施を経て同三十一年町制施行せられ、もと津輕郡々役所の所在地たり。五能線及び津輕鐵道の開通、岩木川改修工事の實施、水道の敷設等により最近頗る町勢發展し西北兩郡の中核地として知らる。

は岩石海岸をなして西端をノサバ崎と呼ぶ。東海岸に狭長なる低地あり。聚落は海岸低地に建る。

コシヨ—コシヨ

【御所浦】 熊本縣肥後國天草郡の御所浦島、牧島及び附近の小島を占む。天草上島の南方海上にあり、東西九軒、南北八軒程の中に散在する大小幾多の島々を含む。面積二・九八方軒。最大はその東南なる御所浦島とし、東北隅に風日崎ありて南北に稍々長く南部は周圍岩石海岸をなす細長き陸地、尾狀に西方に延び先端にノサバ崎あり。全島山地をなし中央に低地ありて聚落は海岸にあり。此島の西北に中瀬戸を隔て、牧島あり。海岸屈曲多く幾多の灣入あり。南方に串崎の突出あり。西方にミノキ崎・マネキ崎、東部にはヤキ崎あり。全島山地をなす爲

は岩石海岸をなして西端をノサバ崎と呼ぶ。東海岸に狭長なる低地あり。聚落は海岸低地に建る。

夫地勢大窪地あり、風登よく體育向上の爲め利用せらるること多し。【五城目軌道】 私設軌道。秋田縣南秋田郡にあり。八郎海東岸に近し。一日市町にある奥羽本線一日市驛より東方の五城目町の五城目驛に通ず。全長三・八軒。【コシヨ—ハマ】 虎杖濱(こしよはま) 省線室蘭本線の一驛(昭和三年設置)。北海道釧路國白老郡白老村にあり。【コシヨカナスギ】 五所金杉 八幡町(千葉縣)【コシヨガワラ】 五所川原(ごしよがはら)【五所川原町】 青森縣陸奥國津輕郡の西部。岩木川の東岸に臨み、津輕平野の中央に位す。弘前市を去ること約二十五軒、青森市を距ること約三十三軒にして津輕北部の要地をなし、五能線に沿ひて奥羽本線に連る。北流する岩木川の沖積層に之と平行して發達せるものにて、岩木川を隔て、西津輕郡と接し、町の周圍に幾かなる農村を有す。また五所川原町は西に岩木川、東に岩木川支流の十川に狹まるゝ爲め屢々氾濫を起し、水害に襲はるゝことあり。仍つて兩河川には堤防が設けられ、内務省岩木川改修事務所を當地に設立せられたり。町は農産・工業の産額多く、殊に津輕平野の中央に位置する爲め、四圍の農村相手の純然たる商工業地をなすとともに、津輕米の一大集散地にして、五所川原町農業倉庫(産米九十萬石)の設備もあり、農村を相手とする

備中倉敷にあり、帷を下し子弟を教授せり。國家多事の際、文學を以て報效を期す。爲に門下に多くの俊傑を出し、久坂玄瑞・乾十郎の如きあり。慶應の始め、幕府征長の師を起すの時、福原身に及ぼさんと、驍に選れて紀伊那賀郡見村に住し、久しく世傳を遊ばせり。明治元年七月十六日病歿す、年五十八。贈從四位。〔伊澤宜庵〕名は卓、字は子立、宜庵は其號、大和五條の醫師たり。夙に幕政の世説を憤り、同志と語りて事を舉げんと欲す。文久三年の七月、京都に徵行し、中山忠光に謁し、意見を陳述す。八月、忠光義旗を翻すにおよび、郷民有志を募りて之に加はる。各所轉戦の末、津藩の兵に捕はれ、一時放逐せしむ。翌年の冬、復た四に就き、慶應元年就命に於て毒害す、年四十三。贈正五位。〔乾十郎〕名は嗣能、姓庵と號す。醫を以て業とす。少時梅田雲浦・森田節齋を師とす。安政の初、外職攝海に迫るを聞き、慨然國を愛ひ、家資を擧げて、京都に赴き、中川宮に仕ふ。諸方の志士に交り、國事籌策を期す。文久三年八月に至り、藤本鐵石の勸誘に同意し、その郷兵を糾合し、中山忠光に從ひ、義舉を大和に起す。數日部下を督し、各地に奮闘の末、幕軍に捕へられ六角の獄に呻吟中、元治元年獄中に歿する、年三十七。贈正五位。〔生蓮寺〕二見にあり。古義眞言宗。寄足山と號し本堂高野末たり。總崎天皇御

め海岸に聚落あり。なほ東北に横浦島、西南に竹島・飄草島等あり。其他小島數多散在す。水産行はれ交通は水運による。傳ふるところによれば人皇十二代景行天皇には十八年五月熊襲を平げ、日向路より球磨を経て東北より船に召され、御所浦の途に上らせ給ひしが、八代水島の近海御航行中に起り東北風のため、怒濤滔巻き御船は流れ本村の風日港に御漂着、夫より良港を求め給うて本郷港に御遊離の上、船出の日を待たせたまひし御時、近侍の士の中に、不幸にも病に冒され療養に盡せし甲斐もなく遂に一命を落す者あり。仍て遺骸を港後に葬る飛龍山に埋葬し、天皇には八代に向はせられたり。天皇の御假泊中、村人等は晝夜魚介を採集してこれを食膳に上せ奉らせ、御用米は今の宮田村より獻じ奉れりといふ。村名に蓋しこれより起るといふ。近侍の士の遺骸を埋葬せりといふ飛龍山には、近衛棟とて其人の靈を祀りし古色蒼然たる石の祠ありて、毎年九月九日に祭典を行ふ。

は岩石海岸をなして西端をノサバ崎と呼ぶ。東海岸に狭長なる低地あり。聚落は海岸低地に建る。

コシラー—コスカ

なりと。天慶二年九月、大和國泊瀬より... 義州府に通ず。

コシラフ

山形市の南

コシロモリ

那須火山脈に

コソ

五頭山

コズ

許豆濱

コスイ

古水面

朝鮮平安北道義州府の東約五軒。東は... 義州府に通ず。

コスカ—コスケ

義州府に通ず。朝鮮平安南道龍岡郡の東部。大同江の右岸に沿ひ龍南浦府の東に接す。北は江西郡に接し、西南は大同江に面す。中部に百米前後の丘陵起伏するも、他は概ね低平にして耕地よく拓け米・粟・大豆・大麥・粟・棉等を産す。三等道路龍南浦府に通じ、また大同江による舟楫の便よく交通に便なり。

コスカ

小鈴谷村

コスキ

小杉町

コスケ

小机

此の西海岸には名古原道常治郡通ず。明治十一年には三谷村と稲早村と云はれし地なりしが、二十二年に分裂し大谷・小鈴谷・坂井・上野間の四ヶ村となり、三十九年七月、四ヶ村を廢し小鈴谷村を置く。大字廣目は廣目寺の名より生じたるもの。此寺に安置する毘沙門は世人の信仰する所なり。大字坂井は富具郷と替代郷の境界の地に發達し境界の需をそのまゝ傳へたるものと思はる。鶴山の鶴は捕獲されて古くより美濃の鶴飼に用ひられしといふ。〔鶴の山鶴審判地〕指定天然記念物。古來鶴の審判地として著名。毎年四五月の交、松樹上に巢を營みて番殖す。その採集せられる鳥は多額に上る。

コスケ

開きたる平野ありて耕地拓け、米・粟・粟・豆類等を産す。三等道路は西南より東北に、等外道路は中部を南北に走る。市荒川區南千住町五丁目と同向院の附近一帯の舊稱。近世豊島郡荒川に屬し、古原・菅ヶ原・小原等に作り、正保の改圖に小原原村とあり、元禄の改圖に小原原町と見ゆ。荒木田庄に屬し、徳川氏關東入國の時に今村彦兵衛將長この地を賜はり、正保年間より幕領となりし地にして元和・元禄の二回の檢地あり。小原原別荘址は同向院とは常磐線の軌道を挟んで向ひ合へり。江戸に於ける幕府の別荘は、初め今の日本橋本町邊にありしもの、のち淺草島越橋に移り、更に聖天町に移し、また此の地に移されたり。いま花崗岩より成る、高さ一丈六尺の大地蔵を安置す。これ寛保元年八月判死者の菩提を慰弔する爲めに建立されしものにして俗に首切地蔵と稱せられ、南側には八字の題目塔と馬頭觀世菩薩の石像とを設立す。別荘は小原原郷手の西脇にあり、間口六十餘間、奥行三十餘間、本所同向院の持地にして、元禄十一年建つ所なり。初め萬治年中奉行より命を傳へ、牢死若しくは道路にて倒れし屍を同向院境内に埋せしむ。然るに年々遂ひて快慶となりければ、寛文七年この別荘を持地に賜り傍に庵を造らし、阿彌陀像を置く。また非人の香屋を建て、かの無縁の屍を葬れり。仍て年毎に町奉行所及寄場役所より同向院を本院に寄するを例とせりと。樂場の開創せられてより約二百二十餘年の間に城内に埋葬せられし死者の数は二十餘萬と註せらる。場内隙地なく、埋葬には名のみにて土中に淺く穴を穿ち、其上に薄く土をかけ蓋くのみなりし故、雨水に洗はれし血筋の土中より現はれ出づるなども珍らしからず、また多人數一時に處刑せられたる時などは一々埋むに遺なく、罪人穴と稱する大穴を穿ち一所に投げ入れしことありと云はる。また此の地に江戸時代より千住遊廓と相並びて同場所ありき。好色二代男・四「日本堤より手分して、追かけけるに、こつが原の野本に、うれしやといふ人聲するは、いさぎしうちに見うしな原、契國策「すつと先きには小つが原、千住のしゆくうのわかいものけもふけためたるはなを、此所にちらすなり」〔同向院〕寛文二年兩國同向院の別荘として建設せられしものにて、小原原別荘にて處刑せられしもの及び江戸の大地蔵にて處刑せしものを供養す。院内に橋本左内・吉田寅次郎・梅田雲濱・佐野竹之助・小田彦三郎・相馬大伴・關貞助等の志士・烈士の墓多し。元來は慘忍毒惡なる重罪者の屍を埋せしものにて高橋お傳・腕の喜三郎・鼠小僧等の墓あり。然るに文政五年八月南部氏の臣相馬大伴・關貞助の屍をここに埋めてより國事犯の判死者の死體も亦

省編横濱線(電車)の小机驛(明治四十一年設置)あり。小机の地、近世は神奈川領に屬し、大木・草津の頃、小田原北條家の侍、笠原越前守信爲及び其子孫が代々領し小机城に居る。天正十八年小田原没落の後には幕領となり、のち葉山久彌に賜り、次で伊奈半十郎忠治支配せしが、また酒井河内守忠舉に賜へり。後再び幕領となり、後に志村多宮・辻源五郎・池田喜八郎・久保田十左衛門・飯塚伊兵衛・江川太郎左衛門・伊奈友之助等が藩士郎・中村八太夫・伊奈友之助等が藩士の支配し、のち小野田三郎右衛門の代官所と、諏訪神助の知行所、及び泉谷寺・雲松院・本法寺等の寺領入り交れり。檢地は延寶七年酒井河内守なり。

コスケ 小筑紫村 高知縣土佐國幡多郡の西部。宿毛灣に面し北は宿毛町・和田村に、東北は平田村に、東は三原村に、東南は下川日村に、南は月瀝村に、西南は奥内村に界し豊後海峽に臨む。村は崎多地域の西北部を占め、表面は開析をうけて緩かなる起伏をなす山地の一部を占むるも、高さは四〇〇米前後に過ぎず。西部は出入烈しきリヤス式海岸をなし、東南より西北方に斷層谷に沿うて流るる編良川は、河口に於て三角江をなして海に入り小筑紫港を造る。また中部を東北より西南へ伊與野川流し宿毛灣に注ぐ。平地は伊與野川下流の地及び沿岸にあるのみにて米・甘藷の栽培をな

コスカ—コスケ

事らるること漸く多く、安政・高延より文久・元治を経て尊王攘夷の説を唱し墓法に觸れ刑死に歸れし志士・烈士の屍骸大方ここに埋葬さる。これら志士の墓は幕命により毀たれたるも、文久五年五月島津久光、勅使大原重徳を率じ東下せしより朝權回復の兆現はれ幕府も亦朝旨を禮し殉難烈士の罪を赦し改葬を許可し、同十月山内豊範・三條實美・姉小路公知正副使を護し江戸に入るに及び、幕政大に革まり、同十一月烈士の墳墓を郷里若くは便宜の地に葬葬の事を許可す。依りて翌三年正月長藩の志士等相謀り、松陰及び頼三樹三郎・小林民部權大輔の墓を府下荏原郡若林村(今の世田ヶ谷)なる長藩の別荘地大夫山に移せるを始め、同年十一月十七日横田烈士の墳墓をも各郷里に歸葬し、その他の墳墓も亦遺族若くは故實によりて移葬されしものもありしが、同向院は依然殉難志士の骨血を瘞りし聖地として各石碑を存す。

コスケ 小机 神奈川縣橋本郡の村なりしも明治二十五年城郷村と改め、昭和二年横濱市の神奈川區の町名となる。中世の武藏國小机郷の遺稱。

コスケ 小机 神奈川縣橋本郡の村なりしも明治二十五年城郷村と改め、昭和二年横濱市の神奈川區の町名となる。中世の武藏國小机郷の遺稱。

コスケ 小筑紫村 高知縣土佐國幡多郡の西部。宿毛灣に面し北は宿毛町・和田村に、東北は平田村に、東は三原村に、東南は下川日村に、南は月瀝村に、西南は奥内村に界し豊後海峽に臨む。村は崎多地域の西北部を占め、表面は開析をうけて緩かなる起伏をなす山地の一部を占むるも、高さは四〇〇米前後に過ぎず。西部は出入烈しきリヤス式海岸をなし、東南より西北方に斷層谷に沿うて流るる編良川は、河口に於て三角江をなして海に入り小筑紫港を造る。また中部を東北より西南へ伊與野川流し宿毛灣に注ぐ。平地は伊與野川下流の地及び沿岸にあるのみにて米・甘藷の栽培をな

コスケー——コスケチ

し又築あり。山地は湖沼繁茂し木炭を産す。小筑港は天然の良港をなし漁港として用ひらる。近海・遠洋の漁業盛んなり。交通は各谷を利用して東南方下川口より来るもの、南の弘見より来るもの共に小筑港にて一となり、伊與野川に沿うて東北より西南へゆく道も伊與野にて合して一となり北方前毛町へゆく。此地古くは和名抄帳多郡牧田郷の内に属せしもの、如し。傳ふるところに據れば往古菅原道義筑紫西遷の碑、此地に暫時漂着せしことありしにより、村名を小筑崇といふと。村内に天満宮の村社あり、また港内には七日島・赤相連等の古跡あり。七日島は菅公七日間船の所なりしといひ、赤相連は一時御船の時難に觸れて損ぜし所なりしといふ。大字伊與野に公孫樹の老木あり。地上一・三米の周囲七米、樹高二四米、推定樹齢は三百年及ぶ。こぼその部落の開祖の植みしものと傳へらる。

コスケ 小菅

【小菅】 東京市葛飾区の町名。もと葛飾郡西葛西領に属し小菅村と稱せしが、のち南葛飾郡南葛西村の大字となる。江戸時代將軍野郎の宿泊所あり、小菅御殿と呼ぶ。寛政四年より幕府の直轄地となり、文化四年以後關東郡の役所を置き附近の天領を管理せしむ。明治二年小菅御殿を置きしも四年十一月廢して東京府に屬せしめ、十一年舊御殿地に集治寮

コスケー——コスケチ

を設く。これが今日の小菅刑務所の前身なり。(御殿跡)小菅御園地とも稱し、橋内凡そ十萬坪餘(約三〇ヘクタール)ありきと。この地は寛永年中、伊奈半十郎忠治の屋敷に賜はり、徳川家光しばしばこの地に來り狩獵あり、その後久しく廢絶せしが、享保年間に有徳院(徳川吉宗)來り、新に御殿を造營あり、元文元年十一月停信院(徳川家重)初めて此處に止宿せり。のち間もなく焼失し再び假の御殿を造營あり、その後は止宿せざりしも此の邊に遊獵の時の御膳所となる。寛政四年伊奈左近將監跡家となりしより幕領となり、御殿は同六年取り壊はれて新聞の地となりしが、文化四年幕領の貯蔵倉庫建設せられ郡代付の代官の領となれり。この地の内に寛永頃より阿用川平左衛門居住して之を守る。平左衛門は始め伊奈半十郎の家人なりしが、伊奈氏断絶の時より郡代付の手代となり、その後子孫繼いで此の地の事を司れり。

コスケ 小菅村

【小菅村】 山梨縣甲斐國北都留郡の西北部。丹波山村の南、西原村・七保村の北にあり。西は大菩薩峠(八九七米)によりて東山梨郡神倉村に、東は關東山脈によりて東京府西多摩郡小河内村・檜原村に界す。地は東西に長く、南北兩界は大菩薩峠の支脈連貫し、全村殆ど山地にして土地高し。中部の各地に聚落ありて、山の産を主とし漆・米を出す。村道四隣に通ずるも交通は不便なり。この村はも

コスケー——コスケチ

と丹波山村と共に一村なりしといふ。文祿檢地に際し分村し、而して小菅遠江守信登居城を本村の川久保に置きしより小菅村と稱するに至れりといふ。信登死後その子孫代々名主となりしが、偶々安政四年、當時の名主小菅忠兵衛の死去により名主の職は他に移り、爾後は一ヶ年交替にて明治に及ぶ。いま橋立・川久保・池尻・田元・山澤・井野・小水田・白澤・金澤・大成・長作等の小地名あり。小菅城址は宇川久保の筒形明神の後山にあり、小菅遠江守信登の城址にして高さ約五〇米、城上やや平地にして老松茂り西隅に天神・地神・八幡を合祀せる小祠あり。後山より峰嶺の所に堀切あり、いま御屋敷と呼ぶ。小菅氏は藤原氏の裔と稱す。字井野の附近より近年石斧を發掘せり。(觀音堂) 字長作に在り。本尊如意輪觀世音菩薩。第六代孝安天皇の皇女、長作に來臨して難産のために薨ぜらる。聖德太子これを降みたまひ如意輪觀世音菩薩の像を刻み、字神樂入に安置す。堂宇は大岡二年の建立にして、中頃に至り現地に移せり。その年代不詳。柱古は諸人、樂を奏しつゝ參詣す。神樂入の呼稱も或はこゝに起りしにあらざるやと傳へらる。爾來世人尊崇して安産を祈り靈應を得。遠近これを傳へて殊に近來參詣祈願をなすもの夥し。現今神樂入の附近には稚子棲ます。これ觀音の思ひ給ふ故なりと稱し、長作部落にては今な

コスケ 小菅

【小菅】 上里太藏宅御小休・中山(中島孫藏宅御小休)及び明治十四年八月二十二日山形・秋田及び北海道行幸の際に輕井澤(御野立)・中山(中島孫藏宅御小休)・日影松(御野立)・小島谷(上里太藏宅御小休)・小繁(長樂寺御遺蹟)等に御小休あらせらる。

コスケ 小須戸町

新潟縣越後國中蒲原郡の中部。信濃川右岸の一要津。北は小倉村、東は金津・橋田兩村、西は信濃川を境に庄瀬・白井兩村に、南は南蒲原郡田上村に隣す。東南の一部は二三百米の丘陵なるも他は低濕地にて水田多く花卉の栽培も盛なり。また小須戸橋の産地なり。省線信越本線に沿ひ、矢代田驛を置く。新津・五泉・白根・加茂(南蒲原郡)各町及び新潟・長岡兩市へ至る驛道通じ。交通便なり。此地は近世の開拓になりしもの、如く、古書には見えず。大字矢代田に新田義宗朝臣の墓所と傳ふる一墳あり。義宗は武州男衆郡高山の弓矢明神社の社傳に越後國村松(いま中蒲原郡村松町)の邊にて討死せりと傳ふ。義宗は義貞の三男にして正中中越後に居り、坂東諸州に轉戦して上杉氏と相闘きたること諸書に見ゆ。明治天皇、明治十一年北陸東海御巡幸の際大字矢代田の地に御小休遊ばさる。また村内曹洞宗茂林寺の木造地藏菩薩半伽藍一軀は國寶なり。

コスケ 小島谷村

【小島谷村】 岩手縣陸奥國二戸郡の東南部。一戸町の南方にて、東は浪打村・楯帯村・田部村に、西北は島海村に隣り、南は陸奥國九戸郡葛巻村・

コスケ 小菅

【小菅】 東京市葛飾区の町名。もと葛飾郡西葛西領に属し小菅村と稱せしが、のち南葛飾郡南葛西村の大字となる。江戸時代將軍野郎の宿泊所あり、小菅御殿と呼ぶ。寛政四年より幕府の直轄地となり、文化四年以後關東郡の役所を置き附近の天領を管理せしむ。明治二年小菅御殿を置きしも四年十一月廢して東京府に屬せしめ、十一年舊御殿地に集治寮

コスケ 小菅

【小菅】 上里太藏宅御小休・中山(中島孫藏宅御小休)及び明治十四年八月二十二日山形・秋田及び北海道行幸の際に輕井澤(御野立)・中山(中島孫藏宅御小休)・日影松(御野立)・小島谷(上里太藏宅御小休)・小繁(長樂寺御遺蹟)等に御小休あらせらる。

コスケー——コスケチ

コスケー——コスケチ

【越後村】 宮城縣磐城國刈田郡の東南部。白石町の南方にて、これと大平・鹿川二村を隔てて、南は福島縣伊達郡の大木戸・大枝・五十澤の三村と界す。東隣伊具郡野村との境には三百米臺の山地、西接小原村との間には南塚山(七〇九米)の山地ありていづれも南北に延び、中部には低地ありて白石川の支流松澤川これを北流し、沿岸に田畑拓く。農産に米・藁・麥あり、その他、林産・工業少からず。國道(陸羽街道)・省線東北本線等中部の低地を縱貫し、後者は越後村(明治二十四年設置)を置く。古くは和名抄、陸奥國刈田郡磐城郡の内なり。藩政の頃は福島領にして、仙臺領との境をなし、いま土地にて石の大佛と呼ぶ石は即ち封疆の標なりと。大字越河は江戸時代奥州街道の一驛にして、貝田驛(伊達郡大木戸村)に十八町、才川驛(齋川村)へ一里十五町。

コスケ 小槌瀬戸

【小槌瀬戸】 瀬戸内海の中の一瀬戸。香川縣香川郡下笠原村龜水灣の西北に突出する大崎鼻と、岡山縣兒島郡日比村の半島との最近接所を備置海峡と云ひ、こゝに大槌・小槌の二島相並ぶ。共に圓錐形をなし、内海中の一異觀を呈す。此二島の間を瀬ノ戸瀬戸と云ひ、島の間二軒餘、深さ七〇米、瀬戸内海の主航

コスケ 小須戸町

岩手郡御堂村に界す。略々三角形の地域を占め面積一三三方軒餘。東の北上山地と西の奥羽山脈を繋ぎ、馬淵川と北上川の斜面を分つ奥中山山嶺以北の高原地帯を占む。即ち西南隅にはコニエテ型の火山西岳(一〇一八米)聳え、東部は北上山地西端の山地にて、その南部に高森山(六六一米)あり、その中間に高度約四〇〇米を有する一帯の高原地帯をなす。安比川(馬淵川の一支出)の上流をなす小繁川と平糠川は、この高原を穿ち峡谷をつくりて北流し、北部に於て合し、その洪満平地に小島谷の聚落發達す。山林原野廣く畑地これに次ぎ、田は僅に七〇町歩内外に過ぎず。米・麥・大豆・稗・馬鈴薯・蕎麥等の豊産の外、山地よりは木材・薪炭を出し、西岳東麓の傾斜地には放牧行はれて良馬を出す。この傾斜地は冬季は奥中山スキー場として、また五・六月の交には鈴蘭の名所として著る。陸羽街道と省線東北本線南北に通じ、後者には奥中山・小繁・小島谷の三驛(明治二十四年設置)あり。本村の上里に五月館址あり、往昔五月と稱する蝦夷居住せりといふ。また人類學雜誌によれば、村内に石器時代の遺物を出土。これ新民が、或は馬淵川の鮮魚を漁し、或は中山の鳥獸を獵し以てその口腹を飽かして生活せしものなるべしと。また此地に明治天皇が明治九年七月九日、奥羽御巡幸の際、小姓堂(日蔭坂上御野立)・小繁(長樂寺御遺蹟)・小

コスケ 小須戸町

【小須戸町】 新潟縣越後國中蒲原郡の中部。信濃川右岸の一要津。北は小倉村、東は金津・橋田兩村、西は信濃川を境に庄瀬・白井兩村に、南は南蒲原郡田上村に隣す。東南の一部は二三百米の丘陵なるも他は低濕地にて水田多く花卉の栽培も盛なり。また小須戸橋の産地なり。省線信越本線に沿ひ、矢代田驛を置く。新津・五泉・白根・加茂(南蒲原郡)各町及び新潟・長岡兩市へ至る驛道通じ。交通便なり。此地は近世の開拓になりしもの、如く、古書には見えず。大字矢代田に新田義宗朝臣の墓所と傳ふる一墳あり。義宗は武州男衆郡高山の弓矢明神社の社傳に越後國村松(いま中蒲原郡村松町)の邊にて討死せりと傳ふ。義宗は義貞の三男にして正中中越後に居り、坂東諸州に轉戦して上杉氏と相闘きたること諸書に見ゆ。明治天皇、明治十一年北陸東海御巡幸の際大字矢代田の地に御小休遊ばさる。また村内曹洞宗茂林寺の木造地藏菩薩半伽藍一軀は國寶なり。

コスケ 小島谷村

【小島谷村】 岩手縣陸奥國二戸郡の東南部。一戸町の南方にて、東は浪打村・楯帯村・田部村に、西北は島海村に隣り、南は陸奥國九戸郡葛巻村・

コスケ 小菅

【小菅】 上里太藏宅御小休・中山(中島孫藏宅御小休)及び明治十四年八月二十二日山形・秋田及び北海道行幸の際に輕井澤(御野立)・中山(中島孫藏宅御小休)・日影松(御野立)・小島谷(上里太藏宅御小休)・小繁(長樂寺御遺蹟)等に御小休あらせらる。

コスケー——コスケチ

コスケー——コスケチ

【巨勢】 大和國(奈良縣)高市郡の古地名。また巨勢にもつくり、武内宿禰の子許勢小柄宿禰の居地。書紀・體裁紀の巨勢臣男入、孝徳紀に見ゆる巨勢連院古等もみな此地名を負へるもの。和名抄に巨勢郷見え、其地いま越前國村より新津村に亘る。此地は歌枕として知られ、萬葉・二に「さされなみそ巨勢道なる他登瀛何香のさやけさたきつせこと」に、波多朝臣少足」とあり。

コスケ 巨勢

【巨勢】 大和國(奈良縣)高市郡の古地名。また巨勢にもつくり、武内宿禰の子許勢小柄宿禰の居地。書紀・體裁紀の巨勢臣男入、孝徳紀に見ゆる巨勢連院古等もみな此地名を負へるもの。和名抄に巨勢郷見え、其地いま越前國村より新津村に亘る。此地は歌枕として知られ、萬葉・二に「さされなみそ巨勢道なる他登瀛何香のさやけさたきつせこと」に、波多朝臣少足」とあり。

コスケ 小須戸町

【小須戸町】 新潟縣越後國中蒲原郡の中部。信濃川右岸の一要津。北は小倉村、東は金津・橋田兩村、西は信濃川を境に庄瀬・白井兩村に、南は南蒲原郡田上村に隣す。東南の一部は二三百米の丘陵なるも他は低濕地にて水田多く花卉の栽培も盛なり。また小須戸橋の産地なり。省線信越本線に沿ひ、矢代田驛を置く。新津・五泉・白根・加茂(南蒲原郡)各町及び新潟・長岡兩市へ至る驛道通じ。交通便なり。此地は近世の開拓になりしもの、如く、古書には見えず。大字矢代田に新田義宗朝臣の墓所と傳ふる一墳あり。義宗は武州男衆郡高山の弓矢明神社の社傳に越後國村松(いま中蒲原郡村松町)の邊にて討死せりと傳ふ。義宗は義貞の三男にして正中中越後に居り、坂東諸州に轉戦して上杉氏と相闘きたること諸書に見ゆ。明治天皇、明治十一年北陸東海御巡幸の際大字矢代田の地に御小休遊ばさる。また村内曹洞宗茂林寺の木造地藏菩薩半伽藍一軀は國寶なり。

コスケ 小島谷村

【小島谷村】 岩手縣陸奥國二戸郡の東南部。一戸町の南方にて、東は浪打村・楯帯村・田部村に、西北は島海村に隣り、南は陸奥國九戸郡葛巻村・

コスケ 小菅

【小菅】 上里太藏宅御小休・中山(中島孫藏宅御小休)及び明治十四年八月二十二日山形・秋田及び北海道行幸の際に輕井澤(御野立)・中山(中島孫藏宅御小休)・日影松(御野立)・小島谷(上里太藏宅御小休)・小繁(長樂寺御遺蹟)等に御小休あらせらる。

コスケ 巨勢

【巨勢】 大和國(奈良縣)高市郡の古地名。また巨勢にもつくり、武内宿禰の子許勢小柄宿禰の居地。書紀・體裁紀の巨勢臣男入、孝徳紀に見ゆる巨勢連院古等もみな此地名を負へるもの。和名抄に巨勢郷見え、其地いま越前國村より新津村に亘る。此地は歌枕として知られ、萬葉・二に「さされなみそ巨勢道なる他登瀛何香のさやけさたきつせこと」に、波多朝臣少足」とあり。

コスケー——コスケチ

コスケー——コスケチ

【巨勢】 大和國(奈良縣)高市郡の古地名。また巨勢にもつくり、武内宿禰の子許勢小柄宿禰の居地。書紀・體裁紀の巨勢臣男入、孝徳紀に見ゆる巨勢連院古等もみな此地名を負へるもの。和名抄に巨勢郷見え、其地いま越前國村より新津村に亘る。此地は歌枕として知られ、萬葉・二に「さされなみそ巨勢道なる他登瀛何香のさやけさたきつせこと」に、波多朝臣少足」とあり。

コスケ 巨勢

【巨勢】 大和國(奈良縣)高市郡の古地名。また巨勢にもつくり、武内宿禰の子許勢小柄宿禰の居地。書紀・體裁紀の巨勢臣男入、孝徳紀に見ゆる巨勢連院古等もみな此地名を負へるもの。和名抄に巨勢郷見え、其地いま越前國村より新津村に亘る。此地は歌枕として知られ、萬葉・二に「さされなみそ巨勢道なる他登瀛何香のさやけさたきつせこと」に、波多朝臣少足」とあり。

コスケ 巨勢

【巨勢】 大和國(奈良縣)高市郡の古地名。また巨勢にもつくり、武内宿禰の子許勢小柄宿禰の居地。書紀・體裁紀の巨勢臣男入、孝徳紀に見ゆる巨勢連院古等もみな此地名を負へるもの。和名抄に巨勢郷見え、其地いま越前國村より新津村に亘る。此地は歌枕として知られ、萬葉・二に「さされなみそ巨勢道なる他登瀛何香のさやけさたきつせこと」に、波多朝臣少足」とあり。

コスケ 巨勢

【巨勢】 大和國(奈良縣)高市郡の古地名。また巨勢にもつくり、武内宿禰の子許勢小柄宿禰の居地。書紀・體裁紀の巨勢臣男入、孝徳紀に見ゆる巨勢連院古等もみな此地名を負へるもの。和名抄に巨勢郷見え、其地いま越前國村より新津村に亘る。此地は歌枕として知られ、萬葉・二に「さされなみそ巨勢道なる他登瀛何香のさやけさたきつせこと」に、波多朝臣少足」とあり。

コスケ 巨勢

【巨勢】 大和國(奈良縣)高市郡の古地名。また巨勢にもつくり、武内宿禰の子許勢小柄宿禰の居地。書紀・體裁紀の巨勢臣男入、孝徳紀に見ゆる巨勢連院古等もみな此地名を負へるもの。和名抄に巨勢郷見え、其地いま越前國村より新津村に亘る。此地は歌枕として知られ、萬葉・二に「さされなみそ巨勢道なる他登瀛何香のさやけさたきつせこと」に、波多朝臣少足」とあり。

コスケ 巨勢

【巨勢】 大和國(奈良縣)高市郡の古地名。また巨勢にもつくり、武内宿禰の子許勢小柄宿禰の居地。書紀・體裁紀の巨勢臣男入、孝徳紀に見ゆる巨勢連院古等もみな此地名を負へるもの。和名抄に巨勢郷見え、其地いま越前國村より新津村に亘る。此地は歌枕として知られ、萬葉・二に「さされなみそ巨勢道なる他登瀛何香のさやけさたきつせこと」に、波多朝臣少足」とあり。

コスケー——コスケチ

宇板中(のち板長となる)に紀氏・巨勢氏の遺墟と思はるもの存す。大和・美作・備中・肥前に巨勢郷あり、みな巨勢領の所領し所たり。伯耆志によれば巨勢氏往昔坂中村の長者原に居り、州の豪族たりとあり、本姓紀氏にして、姓氏録によれば其の系圖は武内宿禰より出で、星川朝臣と同族なり。郡に星川郷あり、即ち上世は二氏の采邑たり。

【巨勢村】岡山縣美作國英田郡の西南部。吉井川中流の左岸を占め、倉敷市の南に隣り、東は豊田村・福山村に接し、南は福本村に界し、西は吉井川を隔てて勝田郡公文村・湯郷村に連る。全村三一四〇〇米の低山性の山地起伏し、西部吉井川流域に僅に沖積低地あり。中央に東北より西に貫る狭き谷を造る。低地には耕地拓くも山地多く薪炭を産す。中央の谷の斜面には桑を栽培し養蠶行はる。吉井川の谷に沿ひ縣道南北に通じ、西北方八軒勝間田町にて出雲街道に合す。勝間田町には省線姫津線東西に走りて勝間田驛(西北七軒)あり。此地は和名抄、美多郡巨勢郷の地。姓氏録に巨勢領は武内宿禰の後裔なりと見ゆ。また天乎神護二年紀に巨勢勝成、美作守となるとあるは此地に由あるか。いま下倉敷・海田・尾谷の三大字より成り下倉敷に役場を置く。【巨勢村】佐賀縣肥前國佐賀郡の東部。筑紫平野の一部を占め佐賀市の東隣に位置す。全村平坦なる沖積平野をなし、南は

に筑後川支流東流し、東方約七軒にして本流に合す。全村耕地拓け米の産多し。東北神崎町(神崎郷)方面より佐賀市へ通ずる縣道は、東北より西南の方向に西北部をかすめ、また佐賀市より東隣坂野村(神崎郷)方面に至る道路中央を東西に横斷す。西北約三軒に省線長崎線の佐賀驛あり。古くは巨勢郷と云ひ、巨勢氏の居りし處。和名抄に郷名見え、中世、巨勢荘と號し院領たり(正應五年田所注文)。而して郷城は兵庫村にも其れるもの如し。肥前軍記に據れば、元龜元年四月大友勢萬の兵を以て佐賀を攻めし際、時の佐賀城主龜澤隆信三千餘騎を以て城より出で、大字高尾の地にて激戦すといふ。また大日本農史に據れば、佐賀藩士成宮兵衛安なるもの深く力を治水に竭し、大坂の亂平定の後、藩主に勳地内の水害を救ふの法を考へ、諸處に新地を拓き水流を分派し、堤を築き、水を湛へて灌漑に供す。當時巨勢郷の野高峯より尾崎に至る一里半は藪茅生茂す。茂安即ち百姓を集め望に任せて二町歩三町歩を割渡し、上佐藩の一の江木筋に石の大堰を作り灌漑に便す。依て巨勢郷の野は都に於て肥沃なる田畑と化す。もと古瀬村と稱せしが、明治三十二年巨勢村と改稱す。いま高尾・修理田・牛島の三大字より成り高尾に役場を置く。

【巨瀬村】岡山縣備中國上房郡の西北部。東北は有漢村に、東は豊野村に、東南は上竹荘村に、南は津川村に、西南は川面村に、西は中井村に、北は中津井村に界す。ほぼ矩形をなして西北—東南の方向を保ち西境に秋葉山(五九一米)、北に五〇〇米餘の山嶺連互し、東に向つて緩斜面を呈す。東部にも三—四〇〇米の山地あり、緩かなる起伏をなして西に下り、兩山地の間に南北の方向に斷層谷通り、有漢川流れて高梁川に注ぎ、流域に耕地開け米・麥・蕎麥の産あり。街道はその谷を利用して設けられ、一は西北方の下磐部に、一は東北方の落合・久世町に連絡し、南は高梁町に通ず。梅・陸地・鹽坪・宮瀬・畑・本村の部落あり、鹽坪の土色をなし交通の要衝に當る。此地は和名抄、賀夜郡巨勢郷の地とす。古事記に許勢小賀宿禰は許勢郡、輕部郡の祖なりと見え、姓氏録は巨勢に作る。蓋し其族の居りし地にや。東鑑寛喜三年には内府實氏領、備中國巨勢庄、また備中巡檢記には古瀬庄に作る。何れも此地とす。

【御所町】奈良縣大和國南葛城郡の北東部。奈良市の南方二五軒。東は被上村に、南は秋津村に、西より北にかけては大正村に接す。本町は奈良盆地の西南隅に位し、金剛地壘と龍門山塊の間にあたる。葛城川は町の中部を北流し盆地中部にて大和川に合す。平野部は米作行はれ、町の産業として大和餅を特産す。寶曆年間淺田氏が製紙法を完成して以來此附近一帯に行はるるも、他府縣の絹に

七日。(後田新七)本町の人、當時富藏寺竹堂良石、吉祥草寺梅堂一普と併せ、書道三達人と稱せられ、聲名遠近に聞ゆ。夙に殖産興業の志厚く、越後上布松坂木綿を見て、百方意匠を凝らすことあり、寶曆年中、一種の織物を案出す。乃ち大和餅といふ。地方工業に力を致し現今年額五百餘萬反の生産を見るに至れり、安永六年八月十九日歿、年六十七。贈從五位。

て、概して平坦地多く、隨つて本庄下にも濠川と稱するものなく僅に一窪の水の低産地を選びて流るゝを見るのみ。其地質は第四期洪積層に屬し、玄武岩を以て被覆せらるる砂層にして粗面岩・石英粗面岩・輝石閃綠岩等の存在により礫すもの如し。土壌は砂質壤土なるも樹草少き爲乾燥甚しく且牛糞を吹糞ばされ礫の地多し。されど近年鐵道當局の本島敷化運動の結果は漸く其の効果を著し處處に植樹を見るに到り遠からずして本庄一帯の地は緑色に覆はるゝに到るべし。本庄の地は大正九年の地方制度改正前迄は、林投湯・南家湯・關河湯の三區に分たれ其下に二十六の郷を管轄せしり、改正後上記三區は一括して湖西庄の管轄する所となり、高梁州湖西郡の一庄として、隘門・林投・大武・大城北・良文港・尖山・西溪・南寮・葉葉・北寮・湖西・湖東・白猿坑・青嶺・紅蓮潭・港底・東石・港子尾・中寮・關河・潭邊・西寮・沙港・土地公前の二十四大字に分轄されたり。其後大正十五年七月再び湖西郡は湖西郡となりたり。面積は三四・五四八平方軒にして、人口は一二四六三を有し、人口密度高き事全國に於ても有数なり。管外への出稼者多きは湖西郡の特色にて本庄よりも約六千餘人の管外出稼者あり。從つて是等出稼者の資金も年百七十餘萬圓に

達す。本庄下に於ける産業は農業、畜産業、水産業、工業等にして、農業は土地に適せず隨つて、生産も僅少にして、麥、甘藷、落花生、粟、玉蜀黍、蔬菜等を主なる農産とす。又農に附隨して牛、豚、羊等の飼育行はれ年約十萬圓の畜産あり。其三面を海に面する本庄に於ては水産業は第一の産業なるも、湖西郡下水産業の中心たる馬公街と隣接する關係上其繁榮は同街に等ばれ、僅かに同街商業の補助をなす程度なり。隨つて其漁獲高も少なく、漁業に従事する漁船も發動機船一、支那型漁船一六六隻をもつてするに過ぎず。主なる漁獲物は、鮫、イワシ、口美鯛、イカ、マナカサ、フカ、珊瑚等なり。水産原料の豊富なる本庄に於ては又、鯛田・鯛、鯛の花・鯛味噌・蒲鉾等の特産を有し、其他菓子・麵類・煉瓦等の製造も行はる。又本庄下虎頭山麓には亞岩脈を有するも現在採掘せず。宇良文港、白猿坑等は本庄下物資の集散地なるも馬公街のそれに比すれば問題の外なり。庄役場は湖西に位置し、公學校の設備あり。庄下の交通は自動車により。(上陸記念碑)宇良文港正角に在り。馬公を去る東方三里十六町にして、明治二十八年三月二十三日比志島混成隊が伊東司令長官の率ゆる聯合艦隊の掩護の下に上陸せし地點なり。神は谷口馬公要港部司令官、竹下元湖西郡守、等の有志相圖り寄附金を以て、大正十三年三

月二十三日建設せしところにして、其後此地は昭和十年十二月五日を以て、史蹟名勝天然記念物保存法第一條第一項により史蹟に指定されたり。

【古西面】朝鮮全羅南道潭陽郡の中部。西は昌平面に、南は南面に、北は九岩面に夫々隣接し、西は光山郡に接す。東南部の一部はや丘陵地を成すも、他は概ね低平にして耕地よく拓く。主産業は農にして米・麥・大豆・綿等を主産す。光州線及び二等道路は、平野行して面の西部を南北に走り、前者に長山驛(大正十一年設置)を置く。

【虎井嶼】臺灣澎湖廳馬公街管下の一島。馬公の南方の門戸を扼し、面積二・一三方軒。住民は本島人のみ九百七十八名。同島の西側崖下に淡水湧出するより虎井の名を生ぜりと云ふ。

【湖西庄】臺灣澎湖廳馬公支廳の庄名。澎湖本島の東中を占むる地域に在り、西部は馬公街と接し東南北東部は海に面し、東は澎湖水道を隔て、臺灣本島に對す。庄の東に浮ぶ查母嶼、查坡嶼は本庄に附屬し、庄附近に北回歸線通過す。澎湖諸島は各島大同小異にし

【梧棲街】臺灣臺中州大甲郡の街。大甲・大肚兩溪間の海岸地區にして北東は清水街・沙鹿庄に南は龍井庄に接し西は海に臨み面積一六・五九五平方軒、人口一萬三千四百八十八。管内は梧棲・鴨母寮・大庄・南簡の四大字に分たる。街内人民の大半は農業及び漁業と日稼入夫たる者多くその他の産業極めて振はず。農産は米百三十三萬八百二十一圓を最大として以下は甘藷の一萬七千五百五十圓、蔬菜一萬七百八十四圓を有するに過ぎず。本庄は海岸漁獲と養蠶を以て四萬五千九百九十九圓にて工業としては概摺工場二十二萬圓と帽子製造・指物等合計三十八萬七千餘圓。交通は清水・沙鹿間の自動車及軌道等により前記各驛に於て縱貫鐵道の海岸線に連絡す。公學校二、就學率は五〇%。梧棲街役場は梧棲に在り。本街は大肚中堡の一部に屬し、清の乾隆中に彰化の中線堡より分離し大肚堡を立て、更に光緒元年上中下三堡に分ちたるものなり。梧棲街の形成せられたるは乾隆三十五年福建省福州府の商船此

地に至り對岸福島の貿易行れたるに始り、五十年代には街勢漸く盛んになれり。大庄、鴨母寮も同時に開かる。大正九年地方制度改正を以て併は廢止せられ、街制が施行されたり。〔橋樑港〕臺中州大甲郡橋樑街の港。本港の始めて對岸福島と貿易を行ひたるは清の乾隆三十五年福島省福寧より商船此地に至りたるに始り、五十年代には橋樑港を港口として橋樑街發達の基礎を爲したるが、此地方一帯は大甲・大肚兩溪の海に注ぐ砂地にして、河川・州州及び、冬期に於ける海岸季節風により土砂の移動及び海岸の堆積甚しく、船舶の碇泊地點は次第に遠去り港灣たるの位置を失ふに至り。成豐頃に至つて南に差る大肚溪口の窪島窟港にその勢を奪れるに至り、我國領臺以後明治三十年一月橋樑港を特別輸出入港に指定し支那形船に限り出入を許し、税關支署を設置せられたるも、昭和七年十二月橋樑港に支那形船の出入も極めて僅少にして特別輸出入港たるの實勢を失ひたる爲めその指定を取消し、改めて税關監視所を置くに至る。

【コセーナン】 戸西南面 朝鮮慶尙北道開慶郡の南部。東は水順・山陽面に、北は虎溪面に、西は麻城面・加恩面に接し、南は尙州郡に接す。西境に五、一六百米の峯ありて其山脚東に傾斜し、面内は概ね山地を成すも、東部はやや低く、涇江北流を東流してこの低地を灌溉す。

【安勝寺】 淨土宗。常光院と稱し、新田義興の臣世良田重兵衛先君追福の爲めに開基せる所なり。明應の頃、會津青木村領主生江右近入道茂州當寺を中興再建す。〔顯成寺〕 字川瀬にあり。曹洞宗。持地山と號す。文龜二年の創建。開山は堅室宗玉和尚。現今の堂宇は元祿十六年の建立。本尊の延命地藏は行基菩薩の作と傳ふ。當寺は南浦原四十八院中の一なり。〔興泉寺〕 曹洞宗。龍雲山と號す。文龜元年上杉謙信舟越村に草創し、燈陰氣禪師が請じて開山となす。永祿五年五世謙壽和尚の代に現在の地に移る。本尊藥師如来を安置す。

コセン 御前

【御前山】 茨城縣東茨城郡澤山村にある山。古生層より形成せらる。山中、樺・赤松など繁茂し、雜木林もあり。北麓には那珂川深淵を作り、東麓を廻り、南東流して太平洋に注ぐ。新緑・紅葉の季節には美し、特に那珂川に舟を浮ぶるか對岸那賀郡野口村よりすれば眺望良く、行樂するもの多し。那珂川には橋梁ばかり、風景あたたか京都の嵐山の如し。故に常陸嵐山とも云ふ。【御前峯】 加賀の白山の最高峯。石川縣能美郡白峰村に屬す。白山本宮あり、修驗者の白山三行場の一。標高二七〇二米。【御前崎】 愛知縣寶飯郡にある崎。郡の西南端西浦村にあり瀨美灣に突出す。崎

し耕地拓く、主産業は農にして米・麥・豆類・棉等を産す。また大字佛井里に無煙炭を産する炭礦あり、炭質は平塚炭に類似し鐵量一億噸と稱せらる。東北線通じて店村驛(大正十三年設置)を置き、また一等道路及び二等道路走りて交通便なり。麻城河堤に近く城址あり三韓時代築造の遺址にして周圍約二七〇米なるも今殆んどその原形を止めず。【小關】 岐阜縣不破郡關ヶ原町の地名。關ヶ原線の西北。往昔不破關の屬あり、北國街道を扼せし所。關ヶ原役に石田三成ここに本陣を置く。【小關越】 滋賀縣大津市より京都市東山区山科四ノ宮に出づる山越をいふ。標高二〇二米。山路は北方の造飯山と南方の音羽山(五九三米)の中間高地を乘越す。【コセキ】 古關村 福島縣岩代郡西白河郡の南部。白河町の東南に隣り、東は金山村に、東北は社村に、西は白坂村及び栃木縣那須郡野町に各隣接す。北部に關山(六一九米)聳え概ね六〇〇米餘の山地をなし、阿武隈川の一支社川、西部山地に發して東に流れ、流域はこの沖積地に於て水田拓く。社線白根鐵道東北線を貫通し大字香澤に古關驛(大正五年設置)・香澤驛(昭和四年設置)及び大字關邊に關山口驛(大正十五年設置)を置き、街道また之に沿つて白河町に達し、西部を南北に走る街道は那須郡に達す。この地は和

は岩石露出し砂礫に乏しきも、西方に南島・沖島、東に大島・小島・佛島等の小島を眺め、南方遙に瀧美半島を望む景勝地たり。【御前岳】 一に田代山。阿蘇火山脈に屬す。大分縣側にては權現岳と云ふ。久留米市の南東方三十六軒前後、福岡縣八女郡次郡村と大分縣日田郡前津江村の境界に峙つ。標高一二二一米。山體輝石安山岩より成る。南麓は舞臺ヶ岳(一二三一米)に連り、北方に熊波山(九六〇米)起る。山頂に約十坪ほどの平地あり。安山岩地積し、東面には木造の小祠あり。頂上より東方に萬年山(一一四〇米)を指呼し、南方に御前山の南麓峯たる三國山(九九四米)・國見山(一〇一八米)等の連峯を望み、西方は矢部川の溪谷を見降し、北方に筑後川の銀流を眺む。西麓矢部川上御前に良成親王の御陵墓あり、建武の昔、良成親王は征西將軍良親王の御後を承けられ、大楠御所にて菊池・五條などの勤王の兵を御指揮遊ばされしが、終にこの地に薨じ給ひけり。この附近大楠公園と稱され、櫻樹多し植物園あり。西方矢部川の溪谷は奇岩怪石多く、神功鬼擊さまんの岩石、溪谷に浮び勝景をなす。山上は西麓黒木町より矢部川に沿ひて頂す。

【五千石】 新潟縣三島郡にありし村。明治三十四年大河津村に入り、その大字名となる。【五千石】 長野縣東筑摩郡東南部の地名。鹽尻・松本の間、桔梗原の東。もと高島藩の分地五千石ありしより出でし名といふ。【五千石村】 鳥取縣伯耆國西伯郡の中郡、北に東尾村に、東は春日村に、東南は幡郷村に、南は尙徳村に、西北は成賞村に界し、米子市の東南約三軒。日野川左岸に沿ふ。東方には大山火山麓え其の緩かな西斜面の裾を日野川が東南より西北の方向に流れて米子平野をつくる。村は其の中央、日野川に沿ふ沖積地をなし全村耕作盛んに行はれ米、馬鈴薯等を産し又養蠶業も行はる。村の東南隅より西北隅に出雲街道走り米子市に通ず。これに沿つて南に新庄、北に福市等の街村あり。新庄の北、日野川に面する所に八幡あり、何れも村の主邑をなし福市には建武元年創建の安養寺あり。此地は和名抄、會見郡互勢郷の内に屬せしものならん。元弘二年三月後醍醐天皇隠岐遷幸にあたり、皇女瓊子内親王は父帝に別る事を歎き給ひ、妻をかへて隨身し、鎌倉よりの沙汰により富國にとどまり、節をわらして安養比丘尼と號し、曆應二年終に薨去あらせらる。其御墓いま村内安養寺内にあり。(八幡神社) 大字八幡に鎮座。郷社。祭神、氣長足姫尊・譽田別尊・足仲彦尊。養老四年の創建と云ひ、後鳥羽天皇の御宇に右大臣源賴朝これを再建すと

コセンコク 五千石

その小支流と信濃川の支流なる能代川と相接せんとする處、從つて灌漑便にして水田多く、又東部には桑園ありて蠶絲業盛なり。五泉平といふ平地を産す。省線磐城西線の五泉驛(明治四十三年設置)を置き、社線蒲原電氣鐵道線の起點。交通は便なり。この地中世は音名庄に屬す。古書に據れば、永徳二年上杉氏の家臣五泉數馬なる者、この地に城壘を築きて據守すとあるより見れば、蓋し町名はこれより起りしものならん。のち甘糟備後守清長の食邑となりこゝに治す。即ち五泉城(期仙城ともいふ)にして其城跡は今の八幡社の境内なりといふ。天保中よりは磐州沼津藩一萬石の治所にして其陣屋を置かる。大字能代に能代城址あり。即ち鎌倉の家人能代左衛門尉の居せしところにして、地名能代はこれより起りしもの。この能代なる者は順徳天皇の皇子顯成王が、當郡小日村間入道開善方に忍び給ひしを殺害し奉りしといふ。また大字三本木は天正年中長興次の居せし三本木城のありし地なり。(五泉平) 當町にて作る一種の神地。從來同地に葛藤なる一種の神地を製出し居りたりしが、寛保間に會津人來り仙臺及び米澤の神地織法を本村の美濃屋宮田平左衛門に傳ふ。これ五泉平織出の源流たり。經緯に生絲を使用せし夏袴地、練練絲・生練絲を使用せし精好、及び練練絲の總練地等の種類あり、地合に平織の他に綾・裾織等もあり。

【御前岳】 一に田代山。阿蘇火山脈に屬す。大分縣側にては權現岳と云ふ。久留米市の南東方三十六軒前後、福岡縣八女郡次郡村と大分縣日田郡前津江村の境界に峙つ。標高一二二一米。山體輝石安山岩より成る。南麓は舞臺ヶ岳(一二三一米)に連り、北方に熊波山(九六〇米)起る。山頂に約十坪ほどの平地あり。安山岩地積し、東面には木造の小祠あり。頂上より東方に萬年山(一一四〇米)を指呼し、南方に御前山の南麓峯たる三國山(九九四米)・國見山(一〇一八米)等の連峯を望み、西方は矢部川の溪谷を見降し、北方に筑後川の銀流を眺む。西麓矢部川上御前に良成親王の御陵墓あり、建武の昔、良成親王は征西將軍良親王の御後を承けられ、大楠御所にて菊池・五條などの勤王の兵を御指揮遊ばされしが、終にこの地に薨じ給ひけり。この附近大楠公園と稱され、櫻樹多し植物園あり。西方矢部川の溪谷は奇岩怪石多く、神功鬼擊さまんの岩石、溪谷に浮び勝景をなす。山上は西麓黒木町より矢部川に沿ひて頂す。

コセン 五泉町

【五千石】 長野縣東筑摩郡東南部の地名。鹽尻・松本の間、桔梗原の東。もと高島藩の分地五千石ありしより出でし名といふ。【五千石村】 鳥取縣伯耆國西伯郡の中郡、北に東尾村に、東は春日村に、東南は幡郷村に、南は尙徳村に、西北は成賞村に界し、米子市の東南約三軒。日野川左岸に沿ふ。東方には大山火山麓え其の緩かな西斜面の裾を日野川が東南より西北の方向に流れて米子平野をつくる。村は其の中央、日野川に沿ふ沖積地をなし全村耕作盛んに行はれ米、馬鈴薯等を産し又養蠶業も行はる。村の東南隅より西北隅に出雲街道走り米子市に通ず。これに沿つて南に新庄、北に福市等の街村あり。新庄の北、日野川に面する所に八幡あり、何れも村の主邑をなし福市には建武元年創建の安養寺あり。此地は和名抄、會見郡互勢郷の内に屬せしものならん。元弘二年三月後醍醐天皇隠岐遷幸にあたり、皇女瓊子内親王は父帝に別る事を歎き給ひ、妻をかへて隨身し、鎌倉よりの沙汰により富國にとどまり、節をわらして安養比丘尼と號し、曆應二年終に薨去あらせらる。其御墓いま村内安養寺内にあり。(八幡神社) 大字八幡に鎮座。郷社。祭神、氣長足姫尊・譽田別尊・足仲彦尊。養老四年の創建と云ひ、後鳥羽天皇の御宇に右大臣源賴朝これを再建すと

その小支流と信濃川の支流なる能代川と相接せんとする處、從つて灌漑便にして水田多く、又東部には桑園ありて蠶絲業盛なり。五泉平といふ平地を産す。省線磐城西線の五泉驛(明治四十三年設置)を置き、社線蒲原電氣鐵道線の起點。交通は便なり。この地中世は音名庄に屬す。古書に據れば、永徳二年上杉氏の家臣五泉數馬なる者、この地に城壘を築きて據守すとあるより見れば、蓋し町名はこれより起りしものならん。のち甘糟備後守清長の食邑となりこゝに治す。即ち五泉城(期仙城ともいふ)にして其城跡は今の八幡社の境内なりといふ。天保中よりは磐州沼津藩一萬石の治所にして其陣屋を置かる。大字能代に能代城址あり。即ち鎌倉の家人能代左衛門尉の居せしところにして、地名能代はこれより起りしもの。この能代なる者は順徳天皇の皇子顯成王が、當郡小日村間入道開善方に忍び給ひしを殺害し奉りしといふ。また大字三本木は天正年中長興次の居せし三本木城のありし地なり。(五泉平) 當町にて作る一種の神地。從來同地に葛藤なる一種の神地を製出し居りたりしが、寛保間に會津人來り仙臺及び米澤の神地織法を本村の美濃屋宮田平左衛門に傳ふ。これ五泉平織出の源流たり。經緯に生絲を使用せし夏袴地、練練絲・生練絲を使用せし精好、及び練練絲の總練地等の種類あり、地合に平織の他に綾・裾織等もあり。

コセン——コソン

寺内に増築す。享保二年災ありて書記寶物等悉く焼失す。

ゴゼンジョー 吳全城

花連港廳花連郡蘇庄大字寶田の舊地名。...

ゴソシ 古曾志

鳥根縣八東郡にありし村。明治四十一年本村及び長江村...

ゴソリベ 古曾部

高槻町(大阪府)肥後國宇土郡の郷。和名抄は調を調くも古曾米と調むべきならん...

ゴソリ 五僧越

滋賀縣犬上郡勝ヶ畑村大字五僧越より、岐阜縣養老郡時村を経て、同郡多良村に至る間道を稱す。

ゴソリ 五總

鳥取縣八頭郡にありし村。大正四年本村及び明治村を廢し其地域を以て西郷村を置く。

ゴソリ 梧倉面

朝鮮忠清北道清州郡の西北部にあり。東は北二面、北一面に、南は五面山、江西面に、北は文白面にそれぞれ隣接し、西は忠清南道天安郡に接す。西部及び東部は一、二百米前後の丘陵あり、美湖川の支流の中部を南北に流れ、その沿岸は一部に低平にして耕地拓け、米・麥・粟・豆類等の豊産あり。三等道路面の東北部を東南より西北に走るのみにて、交通未だ便ならず。

五百年の歴史を有する名邑は依然として繁榮を持続す。生氣嶺・清津及び朱乙温泉に乘合自動車あり、邑附近山岳に富み平野少きに比し田畑比較的多く近年之を水田に漸次改善しつつあり。主なる産物は大豆・粟・麥・馬鈴薯等にて附近は果樹栽培にも適し果實の年産約二萬圓に達す。成鏡本線面の東部を南北に走り鏡城驛(大正九年設置)を置く。(獨津港)鏡城の咽喉をなす海港にして清津へ八津、沿海航路の寄港地なり。近海は明太魚・鱈・鰯の好漁地にして年約五萬八千餘圓の水揚げを示す。此外此港の主要移出品に生氣嶺産の石炭、粘土等あり。(城廓)街を圍む城壁は李朝世宗の時、金景瑞及李守一の二節度使が五年の歳月を費し築城せしものにて四大門・七砲臺あり。畫影を施したる南門樓は今になほ城頭にて四百五十餘年の歴史あり。文祿役の際三王子を誘ひ加藤清正に降りし會率の府使柳登仁、官奴柳世阿、鄭文字のために殺され其首を此門に吊されしと傳ふ。(勝岩山)邑の西北に屹立せる岩山にて松樹茂り、頂上より鏡城市街、獨津の海等を一望に収め風光勝る。麓の傾斜地に記念公園となり尹運を祀る靖社あり。(元帥臺)驛の東南三軒半、柳亭川の河口小丘をいふ。高麗の勇將尹運戰勝の將軍を稱ひし古蹟にして「元帥臺」の三字を刻せし碑石立てり。丘上より日本海の帆影望まる。

コソリ 古曾部

高槻町(大阪府)肥後國宇土郡の郷。和名抄は調を調くも古曾米と調むべきならん。今の熊本縣宇土郡不知火村の大字小曾部は即ちその遺稱にして、姓氏録に見ゆる許曾部朝臣の裔の居せる地なりといふも詳かならず。

コソリ 梧村面

朝鮮成鏡北道鏡城郡の東北部。東北は羅南邑・龍城面に、西南は朱乙邑に夫々隣接し、西北は富寧郡に接し、東は海に面す。地は南に梧村川流れ北に勝岩山を負ひ、東方に平野少しく開け獨津の海に臨む古來要害の地として知らる。古名を木郎古、雄城、柳城など云ひ、高麗の尹運、女眞を逐ひ此地を領せしが、又元爲めに没せられ李太祖これを回復して萬戸を置き兵馬使となし今の名に改む。爾來城廓北二百餘を統帥する重鎮として繁華なること關の南北に冠し、市街は城廓を圍らし城内と南門外・西門外の三區に分れ其内南門外の街衢は商店密集して最も賑賑の場所なり。先年成鏡北道廳、隣邑羅南に移轉せし爲め一時水邑の凋落を憂へられしが

コソリ 社

臺灣花蓮港廳玉里郡の舊社。高砂族の蕃社、アモン族中の丹番に屬す。戸數一四、人口一五四。

コソリ 梧村面

朝鮮成鏡北道鏡城郡の東北部。東北は羅南邑・龍城面に、西南は朱乙邑に夫々隣接し、西北は富寧郡に接し、東は海に面す。地は南に梧村川流れ北に勝岩山を負ひ、東方に平野少しく開け獨津の海に臨む古來要害の地として知らる。古名を木郎古、雄城、柳城など云ひ、高麗の尹運、女眞を逐ひ此地を領せしが、又元爲めに没せられ李太祖これを回復して萬戸を置き兵馬使となし今の名に改む。爾來城廓北二百餘を統帥する重鎮として繁華なること關の南北に冠し、市街は城廓を圍らし城内と南門外・西門外の三區に分れ其内南門外の街衢は商店密集して最も賑賑の場所なり。先年成鏡北道廳、隣邑羅南に移轉せし爲め一時水邑の凋落を憂へられしが

コタ 小田

福岡縣糸島郡にありし村。明治二十九年北郷村と改稱す。

コタ 居多濱・居田濱

また小田濱にも作る。新潟縣中頸城郡春日村大字居多附近の海濱を稱すといふ。

コタ 籠田

伊豫國(愛媛縣)の古地名。和名抄。桑村郡に籠田郷あり、諸本は調を調くも高山寺本に古多と調べり。その地今の周桑郡徳田村に當り、大字古田は郷の遺稱なるべし。

コタ 五駄沼

千葉縣東葛飾郡川間村にある沼。面積〇・二平方軒。深度一五米。

コタイ 梧岱面

朝鮮江原道高城郡の東南部。北は縣内面に、西は水洞面に、南は杆城面に夫々隣接し、東は日本海に面す。面内は概ね二、三百米の丘陵帯を成し、たゞ中部に東西に狭長なる平野ありのみ。北部に南北は三軒程の湖あり海岸線は中部に彎入ある外出入に乏しきも中部の彎入は良港にして船船の出入多し。生業は半農半漁にして米・麥・豆類・麻等を産す。二等道路海岸線に沿ひて南北に走る。(乾風寺)三十一本山の一にして、新羅法興王七年(繼體天皇十四年)、阿道、金剛山南麓の地に開創す。景徳王十七年(天平寶字二年)發願、本寺を再建し念佛萬日會を創設す。近世戦禍の災に罹りて寺庵衰せしも、幾許ならずして重建せらる。境内面積七千三百四十坪を有す。寺寶として金製願佛・鳥刺香

コタ——コタイ

コタイ 五臺

茨城縣常陸國那珂郡の東南部。水戸市の北方。同市との間に柳河村を挟む。東は川田村・佐野村、北は菅谷村・芳野村、西は國田村と隣す。南部は那珂川流域の低地に田地あり米麥を産す。中部以北は約三〇米の臺地をなし全部畑地にて所々林を交ふ。省線水郡線は水戸市より來りて村の東部を北走し北境に後臺驛(昭和十年設置)を置く。縣道もこれに沿ふ。此地は和名抄、那珂河内郡の内とす。村名はもと後臺にも作る。此地は佐竹義宣の水戸城を攻むる時、江戸重通と接戦せし地なり。いま後臺・中臺・豊崎田・西木倉・東木倉の五大字より成り後臺に役場を置く。

コタイ 五臺山

大白山脈の一峯。朝鮮江原道麟蹄郡内面、襄陽郡西面、平昌郡珍富面の境界に跨る。標高一五三三米。北麓に鷹伏山(二、三六〇米)、南西麓に桂芳山(一、五七七米)連り、南東方に寶桐山峙つ。西斜面より内麟川の一水源發源す。又南斜面より五臺川源流し、源流地に近く珍富面に月精寺あり。

コタイ 五臺川

朝鮮江原道南部の川。漢江の上流。大白山脈の峻峰五臺山(一、五三三米)の東南麓に發源し、諸溪を合せて南流すること四〇餘軒、旌善郡北面羅田

コタイ 小大根島

鳥根縣八東郡にある島。二子村に屬す。夜見ヶ濱の内側中海にあり大根島の東北に浮ぶ。島内は土地低平にて農耕に適し、西南海岸江島に聚落發達す。

コタイ 五臺山村

高知縣土佐國長岡郡の西南部、北は高須村に、東は分良村に、南は三里村に界し、西は坂江灣を隔て、高知市を望む。村の南境には一五四米を最高とする丘陵東西に連なり、西北隅坂江灣に面する所に一四三米の五臺山丘陵あり、兩山地の間は沈降して下田川東西に流れ湖に注ぐ。五臺山の北麓に狭長なる入江あり、東北は高知平野の一部を占め土地低平にて農耕盛んに行はれ水稻の二毛作を営む。坂江灣は瀬谷に沈水せしものにして南の浦戸灣との間に懸れて環形をなす。街道は五臺山の

コタイ 後臺

省線水郡線の一驛(昭和十年設置)。茨城縣那珂郡五臺村にある。

南麓を経て東方赤岡町(香美郡)へゆくも、途中より分岐して下田川を渡つて南方にゆくもの、その他数條の道路ありて往来盛なり。主なる村落は五臺山南麓の街道にならぶ。高知市に近きため人口は二五〇〇人餘の多きを算し商業盛んに行はる。此地古くは和名抄長岡郡氣多郡の内面に屬す。村名は蓋し竹林寺の山麓より出でしもの。明治四年五臺山・屋頭・興江の三村を合併して五臺山村と稱し、古來幾多の變遷を経て現在に至る。いま五臺山・興江・屋頭の三大字より成り五臺山に役場を置く。(春野神社)大字坂江に鎮座。縣社。祭神野中権守門良繼。もと吾川郡森山村大字大師堂の西に鎮座せしが、明治四十四年十二月現社地に移齋せらる。野中良繼、名は止、登山または高山と號す。嘉生聰明、威儀甚淑、入りて藩主山内家の大夫となり大いに水利土木の工を起す、殊に慶安元年より承應元年まで五箇年の日子を費して完成せし大堰に依りてその堰下の弘岡上・中・下・三村、森山・秋山・西分・西諸木・東諸木・甲殿の諸村の潤ふこと多大なり。その就工以來上税の増加は實に五萬石に及びりといふ。寛文三年卒す。年四十九。大師堂にありし時は野中神靈とのみ稱せしが、明和年間に春野神社の公稱を得たり。明治四十五年齋正四位。例祭不詳。(竹林寺)新義真言宗智山派。五臺山金色教院と號し俗に土佐の文殊といふ。四國

八十八所第三十一番札所なり。寺傳に聖武天皇行基に勅して建立せしめ給ふといふ。のち類聚せしを弘仁年間空海法師の途次當寺に來りて之を再興す。寛文二十年災上せしが、同年藩主山内忠義之を再建。堂宇中本堂は國寶建造物なり。寺寶中國寶に指定せられたる本堂木造文殊菩薩及び侍者像五軀・木造多聞天・增長天立像二軀・木造千手觀音立像一軀を始め他十數を所藏す。御詠歌「南無文殊のみ佛の母ときく我も子なればこそほしけれ」〔竹林寺庭園〕指定史蹟。築造年代不詳なるも江戸中期の作なるが如し。山腹に設けられ客殿北方の庭園と、客殿西方の庭園とに大別さる。前者は客殿及書院の庭園にて池を穿ち之に石橋を架く。池の周囲及池の西北傾斜面に景石を組み自然に露出せる岩石に配す、多數の歩石は客殿と書院とを繋ぐ。マツ・サクラ・ツツシ・アセビ等を主要なる庭木となし又庭前にパセチを植み雅致を添ふ。後者は客殿のみの庭園にして、建築物に面せる部分を直線となし他の部分を曲線となせる池を作り、之に自然石の橋を架け一個の浮石を置く。池の西方傾斜面にはヒノキ・カク・シロモチ・ヤマモモ・タブキ等ありて景景をなす。山腹に築造せられたる寺院庭園として佳なるものなり。〔吸江寺〕臨濟宗妙心寺派。五臺山と號す。往昔民國にまで知られし古刹なり。文保二年夢窓疎石、北條高時母覺海夫人

の勝を設けて當地に庵を結び、吸江庵を海亭と稱せしに創まる。のち覺海夫人の再度の時疎石已むなく鎌倉に入る。留後當庵は法弟相繼で嗣法し、足利氏之を遷すること厚かりき。後小松天皇應永四年諸役免除の輪旨を賜ふ。承應元年山内一豊入國するに及び湖南を請じて之を中興し寺領三十石を寄す。寺寶中木造地藏菩薩坐像一軀は寺傳に遷作とあれども鎌倉中期の作と推せられ現に國寶なり。〔吸江〕高知市の東に隣り、鏡川・大津川・下田川の諸川に合し、遶繞して一大入江をなし更に南して浦戸に注ぐ。前面に東西兩門の雄壁を控へ、背後に五臺山の葱鬱青嵐を負ひ、群島碧波に浮かび、長汀曲浦の布景、風帆沙島の點綴、海に絶勝の地たり。文保年中、夢窓國師來遊して江時風の致を受し、こゝに庵を結ぶ。碧巖集に曰く、「巖居士夢馬祖問、不與萬法爲侶、は何處人、祖云、待師一日吸江西江水、即向汝道、士豁然大悟。」而して此句意を取りて吸江と名づく。夢窓國師の歌に、「いまだ見ぬ高麗唐土はいざ知らず津島には並ぶ方なし」とあり。國師吸江庵に住むや、この江の景色を愛でて稱へる名を命ず。謂はゆる吸江十景と稱へる人口に膾炙するものにて、即ち下記に如し。〔泊船所〕坂本にありて今大島岬招魂社前なり。其命名の出處は無關門に出づ、曰く、「趙州到一庵主處問、有麼、主答、起爭頭、州云、水浸不足泊船

處、」夢窓庵十景詩並序、泊船岸は十壘中特に孤絶なる所に或は虎の踞る如き石もあり、或は龍の蟠るに似たる松もあり、遊人舟を擡て多く來る所なればなり。〔大高坂芝山江北記〕號名泊船岸上之老松樹枝斜出海面、數尋若青龍臥、波之勢、遊艇船其株に二百年前の風光今も猶昔の如し。〔白雲洲〕吸江沖の渚渚なり。然れども此江の渚渚古今に變りありて昔は吸江の波頭でありしもの、如し。桂井藩實文五年四月廿三日日記に、「白雲洲の邊りを行て香海亭に至る」とあるを以て思ひ合すべし。其出所は經に、建曆、見、愛武帝、答問、如機不契、兩華、塵業、飛過白雲州、(玄女島) 江心にある岩礁、今の黑磯ならん。玄女は魚の事なり。此島渚渚に浮かび出づる時は魚の日に曬せるに似たる故かく名づく。其の出處は蘇東坡の詩に「獨見玄女島、日時」とあるに基く。黑岩懸崖十景詩玄女島、小島波心懸浮、玄女曾展霞春秋、釋法曇吸江寺十景記、又有二物於水中、釋其色如點、其形似浮者なり。(見國嶺) 五臺山西峰の奇巖なり。此巖高く聳え四方の眺望ひろきより名づく。のち三百年を経て山内氏入國し高智山に治城を開きしより、此名一入其實に叶ふに至れり。谷春山の詩に「讀得先賢國名」といふは此心を讀みしなり。釋法曇吸江十景記、巖石峭峻、勢極穹窿、登臨其上、城郭雄麗、邑里殷富、邇在日臨之間者、見國嶺也。

〔獨鉢水〕見國嶺南腹にある清泉なり。俗に僧空海獨鉢を擲ち湧出でたるものといふも、まことに泉海が此清水を汲みて眞言咒を修めしより起りし名なり。獨鉢を掌に握りて咒する事を獨鉢を擲擲すといひしは思かなるもの、言傳へしことならん。此泉今猶渾々として湧れず、味清涼にして冷たく國中名水の冠たり。〔雨華巖〕獨鉢水の downstream あり。其水落ちか、り岩角に碎けて飛散るを天花の雨降れるに譬へて名付けたるなり。出處は建曆經に「佛在世説法、天女隨喜、散天花、」今に木立生ひ茂り巖も見えず。また獨鉢水の水も竹桶にて導きたれば雨花飄散の歌も見えずなりたり。〔黑岩懸崖十景詩〕雨華巖、一遺岩泉一遺巖、如花如雪洗。香岩、大高坂芝山江北記、左有噴水、號雨華巖、水氣滴瀟下石底、波如噴水、玉鼓、素馨。世に雨華巖は吸江波頭の岩壁にて、これに打浪の碎けて天花を降らす様なるによりかく名付けたるなりといふは誤りなり。右の一遺岩泉といふ巖水といふは誤りにして、海濱の事にあらずして山下の清泉なりし事知るべきなり。〔潮音洞〕吸江北端今青柳橋元小宮社邊にありし岩間の洞なり。潮水の行通ひて響ありしにより名づく。出處は法華經普門品に「梵音海潮音、なる句あり、之れに基きしものならん。〔香海亭〕吸江磯側より石垣につき、橋をかけ海中に突出したる小亭。幾望開霽に氣象海を呑むとい

ふ心にて名付けたるものならん。絶景なりしと見え古人題咏多し。〔轉運處〕山中にあり。扁額は夢窓國師の筆。出處は荀子儒效篇に「能小而事大、是猶力之少而任重也、舍折旋無適也」夢窓參禪の跡なりしと傳へらる。〔磨鏡堂〕轉運處の南にあり。扁額は絶海和尚の筆。出處は南嶽馬祖の問答に「磨鏡成鏡」といふ語に基きたるものならん。以上十景の中七景は天然に象れるものなるにより時代の變遷に何ら關係なく今猶勞瘁として往時の面影を止むと雖も、香海亭・轉運處・磨鏡堂等は全く人工に依れるものとして今其の形跡を止めざるは惜しむべきことなり。〔五臺山公園〕高知市の東端より、虹霓の如き三丁餘に亘る青柳橋を渡れば五臺山公園の登り口となる。往昔僧行基、この山を開きて伽藍を建て文殊菩薩を安置せし時、山容唐土の五臺山に似たるに依り新く命名せしと傳へらる。山内規重墓・加賀爪直機墓・小倉三省墓・伊達宗勝墓等あり。〔タウセンゲン〕大字吸江青柳橋畔にあり。本植物は一千八百四十三年、初めてジーゴルト及ワイカリアニに依り、其著日本植物誌に記述せられたるものにて、その後ミタケ・ド・カンデル等が亦之を記載せり。其の基く所の標本は多く九州地方より得たるものなるも、その原産地は寧ろ支那なるもの、如く、内地に於ては未だ本縣以外の他地方に見えられず。本縣にてはこゝに最初

其の老いたる一株を見出したるも、大正三年九月、暴風雨の爲めに折損され、今其の株より萌生せる芽生、既に相當の大きさとなりて年々結實す。〔ピロウドムラサキ〕大字五臺山竹林寺仁王門東南方林にあり。牧野博士、本樹にカイカーイ、カウチアーナと學名を附す。この地の外に高岡郡宇佐町青龍寺の森林、その他嶺多郡沿海地方にあり。

コタイド 五大堂山・御大堂山 奥羽山脈に屬する一峰。岩手縣岩手郡淺岸村・蘆川村と下閉伊郡大川村の境界に跨る。標高二一九六米。古生層より成る。南麓に阿部館山(二二八米)、北東麓に七兵衛頭(二六二米)連る。北斜面より輕松澤發源し、北流して小本川の上一支水時川に合し、西斜面より米内川流出し西流して北上川に落ち、東麓は北東流する大川小本川一上支に流れる。

コタイラ 小平 福島縣磐城國石川郡の東部。〔小平村〕石川町の東北約六軒。北は蓬田村に、東は石城郡三坂村に、南は東白河郡宮本村と界す。阿武隈山系の高度五〇〇米内外の平夷面に當りやや高く聳ゆるはモナドノツクにして、阿武隈川の一支配頭川この平夷面を開折するも低地に乏しくソレス上に僅に耕地拓げ煙草・蕎麥を産した長石・石英を出す。石川町よりの御養所街道は中央を東西に走りバスを通ずるも交通の便よろしからず、葉落は高度約

四〇〇米内外の北頂川の第一テラス面に發達す。此地徳川時代は棚倉藩に屬し一時藩領となり淺川代官の下に置かれし、とあり、いま小平・北方・駒形・中倉・西山・東山の六大字より成り小平に投場を設く。

〔小平村〕 東府武蔵國北多摩郡の中部。東は田無町、南は小金井町・國分寺村、西は砂川村、北は大和村・東村山村・久留米村と隣す。武蔵野臺地の一部を占め、村内全部畑地にて西部に茶畑あり。米・麥・蕎麥の産あり。南部を玉川上水東流す。西武鐵道線田無町より來りて村の東北部を通り、花小金井驛・小平驛、共に昭和二年設置)を設く。又同鐵道東村山國分寺間の線は、村の西部を縱貫して小川驛(明治二十七年設置)を置き、多摩湖鐵道は村内を走り櫻葉驛・小平驛圓驛・青柳街驛(共に昭和三年設置)・南大隈科前驛(昭和八年設置)を設く。この地は明暦年中、村山郷村の人、小川九郎兵衛なるものの開きし土地なるにより小川村と名づけしといふ。

コタカ 小高 茨城縣常陸國行方郡の中部。霞ヶ浦の東岸。南は麻生町、東は大和村北は要村・行方村と隣す。村内大部分約三〇米余の丘陵地をなし森林あり、南部の丘陵の間及び霞ヶ浦沿岸に低地ありて田地をなし米産主なり。村の西部丘陵地の麓を縣道南北に走り、南端麻生町及び

北方玉造町(約一〇軒)に通ず。バスの便あり。和名抄に行方郡小高郷とあるは蓋し此地とす。常陸風土記、行方郡の條に「郡南七里男高里、古有佐伯小高、爲其居處、因名」と見ゆる男高里も此地なり。大塚系圖に行方郡の橋子を小高太郎爲幹といひ子孫相繼ぎて天正中まで邑主たりとあり。新志に村内の鯉川は鯉といふ人を葬れる塚ならんといふ。常陸風土記行方郡の條に「郡南七里男高里、國宰當麻大夫時所築池、今存」路東、自池西山、舊麻大夫、轉木多密、南有鯉川、上古之時、海鯉相觸、而東所、鯉、即有乘家池、爲其果大、以爲池名、此有香取神子之社也」と見ゆ。郡考に、いま村内に大小の池三所あり、其大なるをえびすが池といふ。池中怪物ありとて人皆おそる。即ち當麻大夫が築きたるものならんと。また小池の邊にも今は大栗樹なく共に往還の路よりは東にあり。鯉川はいま鯉塚といひ形狀大魚の如しと見ゆ。いま小高・橋門・井貝・南・島並の五大字より成り小高に役場を設く。

〔小高〕 武蔵國の古譯名、延喜式に武蔵國小高驛馬十疋と見ゆ。橋門郡傳馬五疋と云ふも同じ地に置かれしものなるべし。郡考郡屋驛と荏原郡大井驛との中間なり。地はもとの神奈川縣橋本郡中原郡小高中、即ち今の川崎市上小田中・小田中の地なるも、譯址今傳ふるなし。

己高見山 己高見山・己

高見山とも書く。また巴高山とも云ふ。...

コタカリ 小鷹利村

岐阜縣飛騨郡古川町の南部。東に宮川を以て古川町と、南は國府村と、西は河合村と境す。...

コタガワ 小田川村

岐阜縣岩手郡白河町の中部。白河町の北に隣り、東南は大沼村に、東北は川崎村に、...

コタキ 小瀧村

新潟縣越後國西頸城郡の西南隅。飛騨山脈の雪倉嶺(二六一)...

コタケ 小竹町

福岡縣筑前國鞍手郡の南部。遠賀川の上支嘉麻川流域に當り、直方市の南隣にて、南は飯塚市との間に嘉穂郡幸袋町を隔つ。...

山町として發達せしものにして、いまも河目尾の各炭礦の夫々の鐵區の一部を占む。...

コタツ 古達面

朝鮮全羅南道谷城郡の東北部。西は達津江を隔てて谷城面・梧谷面に隣り、東より南は求禮郡に境し、北は全羅北道南原郡に界す。...

コタニ 小谷村

廣島縣安藝國豊田郡の西部。北及び東は入野村に、南は田万里村に、西は賀茂郡の東高屋村に界す。...

コタニ 小谷村

廣島縣安藝國豊田郡の西部。北及び東は入野村に、南は田万里村に、西は賀茂郡の東高屋村に界す。...

コタマ 兒玉

【兒玉郡】 埼玉縣四市九郡の一。武蔵國に屬し、中部の北邊を占む。東は大里郡、南は秩父郡に接し、西は烏川に注ぐ神流川によりて群馬縣多野郡と界し、北は略し利根川とその支流烏川を境として群馬縣佐波郡と分たす。...

コタマ 兒玉

【兒玉町】 埼玉縣武蔵國兒玉郡の中部。東は東兒玉村・松久村、北は共和村・丹莊村、西は金屋村、南は秋平村と隣す。...

高見山とも書く。また巴高山とも云ふ。...

コタチ——コタマ

高見山とも書く。また巴高山とも云ふ。...

コタチ——コタマ

高見山とも書く。また巴高山とも云ふ。...

コタチ——コタマ

高見山とも書く。また巴高山とも云ふ。...

守家行と稱す。此時始めて當國へ来たリ
しなるべし。その子を見玉庄大夫家弘と
云ふ。家弘當所に住して在名を名乗りし
ならん。その支流五十餘族に分かれ、す
べて是を見玉と稱し當國に繁榮せり。
そのうち本莊・四方田・蛭川・今居・阿
佐美・豊谷・富田・鹿田・新里・眞下等
は、みな當郡の在名を名乗りしものにし
て、今に往々その村名に残り。また東
鑑承久の條に、兒玉利部四郎なるもの
見ゆ。降りて文永の頃に至りては、兒玉
六郎時國なるものあり、日蓮歸依の人な
り。本朝高祖年譜に、文永八年十月十三
日、至兒玉宿兒玉時國之家とあり。この
時國の子孫今に連絡してここに住し、六
右衛門と稱す。當郡は天正の頃は驛場た
りしと見え、村民徳右衛門所藏天正十八
年の文書に、兒玉新宿云々と載せたり。
その後一時衰微して宿驛も廢せ、宿驛の
沙汰に及ばず、其後また驛場となりて町
と稱し、八幡山町と隔月にその役を司ど
れり。當郡古の領主は八幡山町に同じ。
慶長六年玄蕃頭清宗、三州へ改封の後
當郡を山口但馬守に賜はり、是も江州水
口へ所替ありて一旦幕領地となり、元和
元年柳生但馬守・松前民部少輔・花房又七
郎・平井久右衛門・戸田半平等に賜はり、
その後柳生氏の分は上りて正保の頃は設
樂權兵衛知行し、これも何時の頃か上り
て幕領に屬し、享保十八年黒田大和守に

賜はれり。戸田の知行も寛保の頃上りて
幕領となりしより、續いて幕領の外、松
前幸之進・花房長左衛門・平井重物・黒
田豊前守の知行せし所。大字八幡山は唯
岡郷若泉庄と稱す。八幡山の名は隣村兒
玉に八幡宮鎮座ありしより起りしものな
らん。住古は兒玉町内の地に於て、中古
彼村の北に唯岡城と云へるを築き、城主
も居住し城下町を築き、八幡社造の
村民彼の地へ居を移せし故、二村に分か
れ兒玉の名は却つて八幡宮に残り、城蹟
のかたが今の名となりしならん。彼城廢
せし後、江戸より川越通り西上州へ至
る路往還の驛家にして、八ヶ所所宿々へ
人馬の繼立をなし、民房も繁榮し家居た
りたり。文明の頃は夏目豊後守定基領
の所領にして、天正十八年御打入ありて
松平玄蕃頭清宗に賜はり、慶長六年三州
へ所替せられて同七年戸田五郎に賜は
り、天明六年子孫中務の時、幕領となれ
り。(八幡神社) (上ノ宮) 兒玉に鎮座。
鎮座。祭神、譽田別尊・額大神・神功皇
后。永永六年源義家は父祖義に従ひて征
夷の途上、當所に泊して遙かに石清水八
幡宮を拜す。康平六年に前九年の役終り
て凱旋するや、此地に社殿を建て神領を
寄進して東石清水白鳥峯と稱せり。神體
は一才八分の立像と云ふ。延徳三年城主
夏目定基、天正十一年城主横地吉晴、同

十九年城主松平清宗、寛永二十一年地頭
柳生宗重および戸田・松前・花房・平井
の各地頭は何れも神田を寄進す、其等の
寄進狀は今に存すと云ふ。例祭、九月十
五日。(唯岡城蹟) 八幡山町の西裏にあ
り。この地を唯岡と云ふをもて城名とな
せり。當城のこと憶かなる記録を見ず。
口碑に存する所及び上野國志等に據りて
考察するに、當城は山内上杉氏居城に築
きしに、地形狭きを以て上州平井城に移
らしむ。定基は赤松入道國心の裔孫にて
上州藤岡に在城せしが、當城へ移住して
より有田を以て夏日と稱し、上杉氏の旗
下に屬せしに、永永中、北條氏のために
落去し、鉢形城主北條安房守氏邦の持城
となり、その區の横地左近忠春を置きし
に、天正十八年八月、八幡山にて築地一
萬石、松平玄蕃頭清宗に賜ひし由載せ
り。然るに慶長五年清宗卒し、その子玄
蕃頭家清、封を襲ぎてここに居住せし
に、翌六年三河國吉田に所替せられしよ
り、當城は破却せられぬ。(八幡山陣屋
跡) 町の中程、西側にあり。今は林とな
る。元の地頭戸田五郎、關原の役の軍
功により、慶長七年の邊に於いて五千
石の地を賜はりて、この陣屋を構へて在
住せしに、頼朝後守の時、寛永四年江戸
へ移りてよりこの陣屋廢せり。

方、白根北岳(三一九二米)の北方に連り、
山梨縣中野郡吉野村に屬す。標高二七
二五米。
コタン 古丹山 鶴城火山群に屬す
る一峯。標太婆泊居支離、鶴城湖の南東
方に峙つ。標高約九二〇米、北東方は鶴
城山に、北西方は伊豆山に連る。南斜面
より一山河源流し、南流して間宮海峡に
注ぐ。
コタン 古站 朝鮮總督府鐵道局成
鏡本線の一驛(昭和二年設置)。朝鮮成鏡
北道明川郡阿問面にあり。
コタンダ 五反田 東京市品川區の
町名。品川區の西北部に位し目黒川の左
岸に沿ふ。省線、山手線の五反田驛(明
治四十四年設置)あり、目黒蒲田電鐵に
接続す。
コタンベツ 古丹別 省線羽輕線
の一驛(昭和六年設置)。北海道天鹽國苫
前郡苫前村にあり。
コチ 巨智 播磨國(兵東縣)の古地名。
和名抄、播磨郡に巨智郷あり、古知と訓
す。その地、今の飾磨郡置徳村・鹿谷村
等の邊に當り、置徳村大字古智之庄はそ
の遺稱なるべし。風土記の巨智里は和名
抄、巨智・草上二郷の地に當る。播磨風
土記・播磨郡「巨智里(土上下)草上村、
大立丘右衛門巨智者、巨智等始作屋居。
此村故因爲名」
コチ 五智 春日村(新潟縣中頸城
郡)

コチカ 小値賀村

長崎縣肥前國北
松浦郡の一村。五島列島北部の小値賀島
を主島とし其東方の野崎島を初め周圍に
近く散在する六島・納島・斑島・赤島・
倉島・美良島・平島・葦路木島・大島・
宇字島・黒島等多数の小島より成り、面
積二六・一九平方軒あり。小値賀島は中
央部に位して最も大きく、東西六軒、南
北四軒(最も廣き部分にて)、中部に山地
ありてその山腹四方に延び、東北に唐見
崎、東南に設崎鼻・モカヤマ鼻、南部に
は樽崎、北部には小長崎・大長崎等の神
角をなし、東面に前方、南面に笛吹、北
面に柳の部落あり。甘藷・麥・米等の農
産あるも、漁業を主要とす。此地は和名
抄、松浦郡直喜郷の内に屬す。大正十五
年笛吹・前方・柳の三村を合併して本村
を建つ。(神島神社) 惣社。祭神、鴨一
進王。十城別王・七郎氏廣。神位、貞觀
十八年從五位下。別稱、かうしと神社。
例祭、四月六日。

コチノ 古知野町

愛知縣豊岡町
羽郡の北端。名古屋市の北方一二軒。東
に扶桑村・大口村に、南に布袋町・西成
村に、西に兼業郡淺井町・宮田村・草井
村に接す。尾北扇狀地の扇尖に位し、北
部には水曾川西流す。扇面は砂地なれば
その水の滲透性大なる爲め桑畑多く養蠶
最も盛んにして、また大根の産地として
有名なり。水田は僅かに二〇米の等高線
の深く入り込みたる溝の附近に、細長く

コチカ—コチン

コチヤク 御着

兵庫縣飾磨郡御國
野村の大字。省線山陽本線の御着驛(明
治三十三年設置)を設く。
コチョー 五町 熊本縣他託郡に
ありし村。明治三十一年本村及び祝川村、

コチョーダ 五町田村

佐賀
縣肥前國藤津郡の北部。藤田川の南岸に
て、藤田町の一部川の南岸に積々長く延
び、それを挟んで東・西二區域に分る。
東方有明海との間に鹿島町を隔つ。東方
區域は東半が低平なる藤田川の沖積低地

コチョーカイ 小島海山

山形市の北西方一〇
軒前後にあたり、山形縣東村山郡中村に
屬す。標高五三一米。山腹火山岩より形
成せらる。山委鳥海山(一五〇二米)に似
る故にこの名出づ。山形市より東村上郡
山邊町を経て此山の南腹を越え、最上川
の流域西村山郡宮宿町に至る山路あり、
五百川路と云ふ。

コチョーセン 古朝鮮

朝鮮
は古代、南部と北部と沿革を異にし、古
朝鮮とはその北部を指す。紀元前第二世
紀より四百數十年間支那の郡縣に依り直
接統治せられし以前の朝鮮を云ふ。即ち
檀君・箕子・衛滿の朝鮮なり。檀君朝鮮
は、高麗朝中期以後の僧一然の撰にかか
る三國遺事に記載さるるものにして開國
傳説と觀るべき點多く、箕子朝鮮は史記
に、衛滿以後のことは史記及び其他の支
那史書に見ゆ。地理上位置の關係により
支那的の分子多きものなり。箕子・衛氏
の都は平壤なりしと云ふも、箕子及び其
子孫は遼東地方に居住せしことありと思
はる。

コチンダ 東風平村

沖繩縣琉球國
島尻郡の中央部。地方にてはカチンダと
發音す。那覇市の東南方約八軒、東北は
大里、東南は具志頭、西は高嶺・兼城、
北は豊見城・南風原の諸村に隣接し、面
積一五平方軒あり。丘陵地多きも版根
平坦にて畑地多く甘藷・甘藷の産多し、
多少の米を産す。また黒糖の産多し。那
覇市より具志頭村に至る鐵道に當り交通
不便ならず。大字友寄に純立二百尺以上
の隆起珊瑚礁積り。これを八重岳とい
ひ、昔は山南王國の一部なるも三山合一

後中山配下の豪族これに據りしもの如し。琉球史に汪英宗と稱するは即ち八重瀬の名を充てしものにはあらざるか。當時其勢力は遂に南山を凌ぎ明國に進貢して全く獨立の觀を呈せり。いま東風平・宮盛・世名城・宜壽次・外間・友寄・高良・志多伯・富銘・小城・伊波の十一大字より成り東風平に役場を置く。

コツ 木津・古津

【木津】 大山町(愛知縣丹羽郡)

【木津】 近江國(滋賀縣)の古地名。和名抄に高島郡木津郷あり、木津と訓す。のち木津庄といひ、延暦寺領たり。康和三年五穀豐穰即ち齋庭の初穂を氏神波留布神社に饗應し奉る。之より饗庭庄といふ。いまの饗庭村は即ち夫れなり。

【木津川・古津川】 山城國(京都府)の歌枕。一に桃川とも云ひ、また山背川、輪轉川の別名あり、いま木津川と通稱す。伊賀國より出て南山城を北流、淀川に入る。夫木・二四、君來すばたれにみせましこつ河のせせのうづくまのしら糸

【木津渡】 山城國(京都府)相樂郡の歌枕。南山城を流る木津川(舊名泉川)の渡津にして大和より山城に至る街道に當る。いま木津町と上柏町との間の邊。天平五年、僧行基橋を營みしが中世は廢して専ら舟を用ひたり。夫木・五、桃の花さくや三月のみかのはらこつわたりもいまさかりなり 光俊

コツ 古都村 岡山縣備前國上道郡の

北部。村の一部は岡山平野の東北を占む。北に玉井に、東に浮田・角山兩村に、南に雄神・芳野・可知・財田の諸村に、西に西大寺町及び旭川を隔てて高島町と界す。岡山市より北東方約六軒。村は十字型をなし、南北及び東西の方向に折る。東半は北・東・南境に一〇〇米前後の丘陵及びその中央を東西に低地がけ、西は廣き平地をなし、南方に村落あり。西半は北に一〇〇米前後の丘陵及び南に平地を作る。東西兩地域の合する部分は低平耕地をなし、米・蕎麥を産す。それを過ぎ東北より西南にかけて省線山陽本線及び山陽街道が通過して西大寺町にゆく。鉄・藤井・穴井は街村をなす。この地は和名抄に上道郡郡郷とある地とす。姓氏錄に木津忌すは漢の阿智使主の高なりと見ゆ、蓋しこの地に住して氏を賜ひしものか。備前國志に富原庄とあるも此地の中ならんといふ。妙壽寺合戦記に浮田直家沼城を陥れて、古津縣の南なる穴井鼻に陣すと見ゆ。即ち大字穴井の地とす。いま藤井・南方・鐵・宿・穴井の五大字よりなり、藤井に役場を置く。明治四十二年陸軍特別大演習の際、十一月十五日明治天皇大字穴井の地に於て親しく御杖遊ばさる。いま明治天皇穴井御立所として指定史蹟たり。

コツアボガン 社 臺灣高嶺州屏東郡の舊社。舊稱 Kocahangan。屏東山の西方隆安溪の奥地の舊界山嶽地帯にあり、ヤカタ族に屬する高砂族の部落なり。戸數一三〇、人口六九一(昭和十一年末)。

コツカ 小塚

廣島縣甲斐郡にありし村。明治二十八年本村及び二森村・小塚村・有福村を廢し、其區域を以て吉野村を置く。

コツキ 古月村

福岡縣筑前國鞍手郡の北端。東西に紡錘状をなし、南に朝村・西川村に接し、北は遠賀郡中間町・遠賀村と界し、直方市の西北約八軒。西半部に三郡山塊北部の丘陵性山地あるも東半部は遠賀川流域平野の一部をなし耕地よく拓く。農業よく行はれて米・麥・菜種等を産し、また筑豊炭田の一部にて古門・木月等の炭坑ありて石炭の産多し。省線鹿兒島本線遠賀川驛より分岐する室木線中部を縱貫し、その新延(南隣西川村内)に近く交通不便ならず。新入・新日尼・鞍手各炭礦のそれぞれ礦區の一部を成す。此地或は和名抄、鞍手郡新分郷に屬せしものか。いま木月・上木月・古門の三大字よりなり木月に役場を置く。村名古月は三村合併の際夫々一字を取りて名付けしもの。太守菅内志の著者伊藤常足は本村に生れし人。〔古月横穴〕指定史蹟。大字古門の兵丹と呼ぶ丘陵の中腹に今尚横穴在し、露出せるもの十七個あり。俗に百穴と稱し奥壁と兩壁とに接したる床を設け石枕を割り出し、また壁面に裝飾

を施したるものあり。第九號と名づけられたるもの最も大形にて、床の一方に二個の並列せる石枕が割り出され、奥壁に朱色の顔料を以て網目を畫きてあり。横穴内より刀剣・金銀環・玉類・土器等出づ。〔伊藤常足〕本村に生る。魚神と稱す。家世々大字古門古物社の祠官なり。龜井南溪に儒道を受く。長じて國學を青柳種信に修む、嘗つて地誌編述に志し三十一歳の時九州地誌の編纂に着手し六十八歳始めて稿を脱す、巻數八十巻名づけて太守菅内志と云ひ世に傳ふる所多し。其他著書亦數種あり、安政五年十一月九日八十五にして歿す。大正四年從五位を贈らる。

コツクミ 小築海島 三重縣志摩郡にある島。鳥羽町の東北方約一〇軒にあり、皆志島の東北一直線上に大築海島を挟みて浮ぶ。嘗て志摩半島の船役に關し殘されしもの。

コツジャク 骨若面

朝鮮全羅南道光陽郡の南部。北は玉谷面・光陽面に夫夫隣接し、西南は海を以て順天郡・麗水郡に接す。西北部に舊烽火山(四七三米)を成す。生業は中農牛漁の状態なるも、耕地面積供きたため、専ら漁業盛なり。二等道路北部を僅に穿れ、等外道路南部沿岸を東西に走るのみにて交通便ならず。

コツトイ 特牛

山口縣長門國豊浦郡神田村に

ある港。豊浦沿岸の小港なれど、肥前・肥中の二港と共に該附近三港の一に算せらる。特牛港にはその入口に岩崖あるを以て船船の出入に戒慎を要すれど、港内の水深は三尋に達し、その水底も質地たるに過し、加ふるに港形頗る風浪を避くるに便なるを以て、漁船並に他の船舶の來往多く、殊に鹽網漁船の根據地たる爲め、漁季に際すれば海岸一帯に鹽の小山を築き、異觀を呈するを例とす。特牛市街は海岸に沿ひ、商家・漁戶少からず。交通機關は、船船のほか山陰本線あれど、その特牛驛は當港の東方約四軒のところに設けらる。

【特牛】 省線山陰本線の一驛(昭和三年設置)。山口縣豊浦郡神田村にあり。【特牛島】 山口縣玖珂郡にある島。長島ともいふ。廣島灣の南方、大島の北約四軒、北に磯島、南に福良島あり、東岸は岩石露出し海岸をなす。

コツナギ 小繁 岩手縣二戸郡小島各村の大字。省線東北本線の小繁驛(明治四十二年設置)を置く。

コツナギ 小綱木村 福島縣岩代國伊達郡の東南隅。川俣町・飯坂村の南に隣り、西は大綱木村に、東は相馬郡飯坂村に、南は安達郡山木屋村・戸澤村・針道村に各隣接す。西南境に日本山(八四三米)、東北境に花塚山(九一九米)聳立し山脚は西北に傾くも村内山地多く平地に乏し。阿武隈川の一支出廣瀬川は日本山・

花塚山の山地に發し西北部に於て合流し西北に流出す。米・蕎麥を主産する外、木材・木炭・煙草等あり。縣道富岡街道は中部を貫通し川俣町にバスの便あり。本村は往古岡村の大綱木村と共に合して聖村と稱せりとす。明治九年一部を割りて川俣町となす。大綱木村・飯坂村と組合町村をなせしも明治四十四年九月組合を解除、改めて同年同月大綱木村と組合町村をなし役場は川俣町に置く。

コツボ 小坪坂 神奈川三浦郡夏子町の海濱新宿の北方にありて一七曲ともいふ。治承四年八月二十四日、三浦・島山の戦ひはこの小坪坂なり。三浦介義明、源頼朝の軍兵を授けんとして、其子二郎義澄・佐原十郎義連・孫和田小次郎義盛等を赴かせしも、途にて敗北を聞きて兵を返す。島山重忠之を遣うて、兩軍此に戦ひしは著明なる事實なり。源平盛衰記・二二、衣笠合戦事・義澄・義盛小坪軍に打勝て、三浦に歸り、軍の次第こまこまと語りければ、大介義明よく聞き、莞爾と笑ひ領許入て、左右なし左右なし、若殿原弓矢の速は彌増々々繁昌せり、中にも小次郎が振舞神妙々々として感涙を流し、孫引手物とて太刀一振をぞ賜たりける。さて大介云けるは、敵は一定明日寄すべし、佐殿も討れ給はし、急ぎ衣笠に引籠りて軍せよ、敵こぼく共散々に蒐戦て、今一度佐殿尋奉るべし、遙かたく討死をせよといへば、三浦

コツナ——コテサ

の者共は小坪の軍に打勝て、絶て衣笠に引籠り、散々に戦て討死しけりといへば云々

コツボリ 細奥・穴奥 京都八坂神社西門附近の町名。元祿前後、私塾の一種なる茶屋女ありし所。唐所裏、男色大藏、祇園町石垣上八軒家穴奥八坂清水の茶屋、娯遊笑賞・巻九、このこと。ほりといふ處は翁そのかみはやりたる處なり

コツボリチヨ

こつぱり町 江戸時代、大阪の遊里。淀川の東方にありし下級のもの。浪花色八卦こつぱり町は淀川の東についで、はるか高くだりたる所也。店つきをなして局めきたるも見へたり、多くちかき在郷の人の樂しみ所

コツル 小鶴池

陸奥國(宮城縣)の歌枕。今の宮城郡岩切村にあり。重之集「二月ばかりに陸奥の國に臨時の祭に、雪にぬれこぼるうげなるのこに、つるの池をすぐるほどに、こぼるいづこぞととへば、こつるの池の奥といへば心やりによめといへば、ちとせふるこつるの池もかばらねばおやのよびをわらひこそやね 宗親、千年をはひなにてのみやすくすらすわこつるの池とききて久しき重之

コテ 小手島 香川縣仲多度郡廣島村に屬す。豊前諸島中の一なる廣島の北西に位置せる手島の西南傍に横ばる小岩

遊。花崗岩質より成り、最高九五・五米。丸龜市へ海上約二〇軒。

コテ 庫底

朝鮮總督府鐵道局東海北部線の一驛(昭和六年設置)。朝鮮江原道通川郡順徳面にあり。

コテ 吾丁面

朝鮮京畿道富川郡の東北部。京城府の西約一五軒。西は桂陽面・富内面に、南は桂内面に隣接し、北より東は金浦郡に接す。東南部は百米前後の丘陵起伏するも西北部は一帶に土地低平にして地味肥沃、且つ漢江の小支西部を北流して灌漑に便し耕地ひろく拓け米・麥・大豆・小豆・粟・蕪菜等を産す。交通は等外道路通するのみなるも、京城府に近く、且つ京仁線の梧桐洞・善砂兩驛に近く交通は比較的便ならず。

コテコー 古亭坑 山陰縣(臺灣高雄州岡山郡)

コテガミモリ 小手神森

阿武隈山脈の一峯。福島縣伊達郡青木村に峙ち標高四六三米。山體片麻岩より形成せらる。南麓を福島市より川俣町に至る縣道通す。山中に松林あり。天文申、青木氏知行千貫を領してこの地に居たり、因りて千貫森とも云ふ。

コテサシ 小手指

埼玉縣武蔵國入間郡の西南部。所澤町の西隣。北に富岡村、西は三ヶ島村、南は山口村と隣す。村の南半は狭山丘陵の北端を占め、北半は往時の小

手指原の一部にて平地をなし桑畑多く北... 郡は細地の間に林を交ふ。米・麦・蕎...

旗家・辰屋盛・立野・椿等々の陣地と稱... せらるる地あり、椿等は義興が椿の枝を...

田・社賣を寄進する等崇敬甚だ深し。の... 一時寛政せしが、慶長十八年前田利家...

は同志津村・千代田村と隣す。房徳丘陵... の一部を占め、村内は丘陵地にて森林あ...

は北海道留萌支庁増毛郡増毛町と石狩支... 廳濱益都濱益村との境界に跨る。標高一...

海を發したる粘洋川は東南流して御殿場... 郡附近に至り小分水嶺の委をなし、これ...

氏没落後再び北條氏の領となる。のち小... 田原頼業美濃守の有となり、貞享三年三...

左衛門尉朝長に預けられ、朝長に伴はれ... 東下の途中駿河國東澤の原即ち當所に於...

【御殿山】 水戸市の東方一軒前後、茨... 城縣那珂郡那珂の北西部の丘陵。殿山と...

置かれて御厨座と稱せしを取り、町名... となせるものなり。大正三年八月更に御...

多し。宗行は左大辨藤原行隆の第五子に... て中納言藤原宗頼に養はる。承久三年後...

を致せり。其碑なほ存す。(「深澤城」大... 字深澤字城に其址あり。箱根外輪山金時...

之を守れり。駿河記の駿東郡六に、今川家取立の城なり、今川没落の後小田原北條家にわたり云々とあり。永祿十二年、武田信玄甲陽より兵を發し駿河諸城の北條方の處を突き、元龜二年に至り北條氏忠・氏勝・芳賀正綱・松田新次郎等の諸城攻撃と共に當城を圍み攻む。諸將城營を避け小田原に歸りし中に、當城主北條綱成は前年河越城にて北條氏康と相呼應し上杉の八萬騎を一舉に擊破し資八幡の驍名を馳せたる勇將なれば城を拒守して屈せず、依て信玄矢交を城中に放ち時勢の得失を論じ軍を全うするの利を以てこれを誘ひ、また北條氏康を罵り綱成を激せしめ戦を挑まんとす。綱成固よりその意を察したれども深澤城綱成の死場所に非ずとなし固く守りて應ぜず、信玄遂に圍を解きて歸る。世にこれを深澤矢交として傳ふ。のち綱成城を棄てて逃れ武田氏の有となるも天正十一年武田氏没落の時守將駒井右京城を焼きて去る。いま土中に燧米・燧豆等の遺存するを見る。昭和四年三月碑を建て深澤城址の四字を刻す。〔水原古戰場〕大字新橋・萩原一帯の地。後醍醐天皇建武二年八月、足利氏勢に京を出で、北條時行を討ち鎌倉に據り鎌倉四方に發して兵を募り、書を京に上り義貞を討たん事を請ふ。義貞は京の御殿跡に、事多かりしかば茲に於て朝議始めて義貞討討の事を決し、尊良親王を上將軍とし義貞を副將として東

海道を下る。三河の矢作川に至り高師康の軍を討ち、更に駿河手越川に之を大破し、進みて伊豆の國府三島に入る。時に尊良親王より官軍の背後を衝かんと計る尊良親王、足柄竹の下に於て藤原義助の軍と合戦し大友・藤原の叛進に遇ひ官軍潰走し更に當地に於て最後の奮戦をなせしも利あらず、遂に箱根にありし義貞の軍と合し兵を収めて西に還る。〔富士牧野の遺跡〕大字東田中・新橋の邊に多く遺存す。源頼朝牧野の遺跡なり。頼朝の狩屋を置きしといふ。深澤狩屋跡あり里人狩屋と稱す。その南百米の所の和田といへるは和田義盛の館跡なるべく、東南方の御所と云へるは御所五郎丸の館跡なり。狩野の遺跡なりといふ狩野渡、また篝火を焚き夜中行進の合同をなせし善火塚、仁田四郎忠常の大猪を射止めし時猪を蹴倒したりといふ猪窟、頼朝の東田中神明宮に參詣せし時猪のなしたるの場あり。〔文覺塚〕大字東田中塚本にあり。文覺初め遠藤盛道と稱し、上西門院の武者所となり、十八歳の時左衛門源渡の妻袈裟を殺し發心刺殺して僧となる。のち罪を得て伊豆に流されしより當地に來りしものなるか、當時この地に青龍山文人寺と云へる寺を建立せしと傳ふるも今は何等遺跡を止めず。また文覺上人墓といへるものあり山城高尾山より分骨にてもあるか詳ならず。〔五輪堂〕大字深澤にあり。當地より足柄村

桑木に互る一帯の地は建武年間新田・足利の古戰場にして官軍の公卿將卒多く此處に討死せり。昔五輪塔數多ありしも實永の噴火に際し砂に埋る。〔頼光屋敷〕大字東田中にあり。源頼光武藏國より京都に歸らんとしこの地に差しかかり病を得たれば假殿を結び病を養ひしと傳ふ。現今地となり其の傳を存せず。〔御殿場遺跡〕大字東田中二の岡附近。御殿場遺跡の東南約二軒、神奈川縣に通ずる箱根道の沿線。箱根外輪山足柄山の西麓に位し、富士の秀麗を指呼に收め、満日露降四季の眺望頗る佳なり。殊に土地高燥溪谷清く流れ夏季冷涼にて蚊帳の必要なく自然の避暑地として絶好の地たり。附近の一帯氣流の關係極めて良く、夏季の衛生地として俗に東海道輕井澤の稱あり、内外の貴紳別荘を構ふるもの頗る多く各個人の家落をなせる萬國村〔文化村〕等あり。〔二ノ岡神社〕大字東田中宇二ノ岡に御座。神社、祭神、大雷神ほか六神。第十二代堂行天皇の四十年十月、皇子日本武尊東夷征伐御還の後の國司に課し諸殿を建造せしめ七社殿を祀る。往古は二所大神と號せしも明治維新の四七社神社と改稱。〔寶持院〕大字東田中にあり。禪宗曹洞派にして藏春山と號す。安等法橋小本寺僧。文明十七年、東田中宇寺人に眞言宗青龍山梵鐘院と稱せり古刹ありしを明應三年現地に移し、大森信濃守氏頼の女寶持院殿玄童子大姉の

開基にかり止種和尙を開山とす。什寶に北條氏寄附證・制札武田家寄附證等あり。〔大樂寺〕大字仁杉にあり。淨土宗眞西派。芝増上寺末にして本尊を阿彌陀如來とす。文明元年僧光譽開基、初め京都智恩院末たるも中世東西本山分立の際増上寺末となる。曾て火災に罹りて一切灰燼となり詳細なる由緒事歴分明ならず。〔大雲院〕大字深澤宇寺内にあり。深澤山と號す。曹洞宗武州寶泉寺末。遷師如來を本尊とす。古に密宗の一精舎にて天龍山天龍寺と稱せしも寺門久しく衰頹す。文治中僧月光之を中興、のち永正年間兵火に罹り烏有に歸せしも天文元年僧我洲、深澤六郎と共に再興す。後天正十二年深澤城落城の際、當院も亦兵燹に罹る。〔庚申寺〕大字御殿場宇上町にあり。禪宗曹洞派。玉蓮山と號す。人皇第六十八代後一條天皇の御宇寛仁四庚申年、佛師の祖定朝法印富士山に於て彫刻せる結跏趺座庚申大青面金剛王を本尊とす。古來大阪四天王寺の青面金剛三頭大菩薩と共に日本三體と稱せらる。古富士山に安置せしを中世當地に勧請、眞言宗に屬し八葉山光眞庵といへるもの元祿五年玉蓮山庚申寺と稱し曹洞宗に改宗す。安政三年祝融の災に罹り悉く灰燼、只來舊觀に復せず。〔寶藏寺〕大字御殿場にあり。眞宗大谷派。月光山と號す。天正十五年武田信玄の臣小山田備中守を開基と

す。中世火災に罹りしも、什寶はその厄を免れ補正成の守本尊なりと云はるる聖德太子の靈像・弘法大師の眞筆雲龍畫・親覺上人の眞書等を所藏す。〔御殿場〕省線東海道線の一部。伊豆牛島頭部の箱根山北邊を通ず。東海道本線國府津驛(神奈川縣足柄下郡國府津町)より分れ山北町・御殿場町等を経て沼津市の東海道本線沼津驛に至る。全長六〇・二軒。この線はもと東海道本線の一部なりしが、丹那隧道の貫通とともに本線は熱海線となり御殿場驛と改稱す。松田驛(神奈川縣足柄上郡松田町)にて社線小田原急行鐵道に、御殿場驛(静岡郡駿東郡御殿場町にて)省管富士山麓電氣自動車・富士箱根自動車に接続す。〔御殿場口〕富士登山口の一。一に東表口とも云ひ、御殿場驛より中畑を経て富士山頂銀明水に至る約二軒の山道を通す。明治十五・六年頃開通し、須山口に比し汽車との連絡甚だよきため現今頗る繁昌するも富士の眞價を窺ふべく、登る路としては、諸道中最も不適當、下山路としてはスナハリありて七合目より寶永山の山腹を奔走し、殆ど二十分にして山麓太郎坊に達する特徴あり、又途中寶永山を訪ふことを得て便利と稱せらる。驛を出でて西北に向ひ御殿場の街路を過ぎ、淺間神社を経て裾野の平原約四軒の地點、淺河原には陸軍の廣舎あり、陸軍各部隊の實彈射擊及各種學校の演習をな

す。路は之までは主として村落の間を通じ來たれるが、淺河原廣舎を後にして鏡原に掛るや、廣漠たる裾野の草野となり、一里塚(海拔七八四米)を過ぎ馬返に至れば密林の中に入る。この道は寶永山の掃蕩によつて中腹に細砂の積るもの厚く、木漏れ葉なるため少數の草木を見るに過ぎず、ただ馬返附近より、太郎坊附近にかけて森林の存在するのみ。馬返は海拔一〇〇〇米餘。調査喬木帯この邊より初めて見られ、ミヤマザクラ・ヤマウリ・ホツカヘの一種類にして富士・丹澤地方に多きものを見る。林中にある一三〇〇米の太郎坊に至る間、登るに従ひてヤマツガ・マツヒの如き針葉樹混生し來たるを見、調査喬木帯上部となる。太郎坊を出づるや、登路は砂礫の間に通じ、二合目(一五七八米)より左に近く二ツ塚(一八三〇米及び一九二六米)を望み、ミヤマヤナギの闊葉及びイタドリ(の縦横に繁茂する中に入る。二合・三合の附近には所々にイタドリを生ずるの外、少數のイタドリ・フシアザミ散見するも、以上が觸目する植物の總てにして、それ以上は燒砂の裸地となり、烈日を背に受け、砂礫を浴ぶるの極となる。三合目(二一五五米)に於いて、須山より二ツ塚・寶永山の間を徑て登る道に出會ふ。これより燒砂は大となり、四合目(二四一〇米)よりは沿岸流の上を行く。左方には寶永山(二七〇二米)美しく見え、六合目(二

八三〇米)に於て中道廻り道を通ざる。七合目(三〇〇〇米)よりは夏季も谷間に殘る積雪を見る。八合目(三二四〇米)より大なるみを通り、衝突八丁の峠を過ぎ、頂上銀明水に通ず。〔御殿林〕山形縣東田川郡清川村の清川部落の東方に位する。顯著たる林を御殿林と云ふ。立谷深川は林を繞つて流れ、川を隔てて腹巻岩に對す。腹巻山・陣ヶ峯と連り、北方は最上川を挟んで黒岩嶽と對し、庄内平野の咽喉を占む。明治元年四月二十三日陸軍の軍新庄に治し即夜參謀大山格之助二小隊を率ひ、本合海より乗船し土着に上陸腹巻岩に降し、立谷深川を隔てて發砲す。庄内兵御殿林に降し之に應ず。二十四日陸軍清川南方の丘陵に現はれ、苦戰數時にして退く。山形縣令三島通磨明治十年立谷深川に東雲橋を築し、腹巻岩の北麓を削りて最上川の南岸に沿ひ清川新道を開く。

動王の志士は多く此處に據はれ、辛苦をなめ、悲憤慷慨せるは昔人の知る所なり。明治維新に至り南北市政裁判所に屬せしも轉じて東京府の所管となり、同八年五月因徒を市谷監獄に移し、この牢屋を撤廢せり。また此處は江戸時代よりベツマラ市にて名あり。〔御殿山〕東京市品川區北品川東海寺の北方の丘陵。長祿の頃、太田道灌この地に品川館を營みて居住す。その江戸城に移り住みたる後は、宇多川氏代々ここに居す。徳川氏の江戸に入るに及び、此處に別業を設く。依つて御殿山の號あり。御殿は寛文の頃火災に罹る。次いで吉野の櫻を植ふ、江戸に於ける海の眺望と櫻見をかれし隨一の名所となる。米使ヘル・浦賀に渡來の頃、品川の臺場を設くるや、主としてこの山の土を切り取りて運ぶ。爾來全く舊形を損ず。婦美車營鹿子「すへの契り」と若松や、山城じるともれいづる額の月は福山か、おぼるけならぬ御殿山」南寄先生文集序「此書を書いたし御げんの報、日夜にとかく神信心してかよふ神の力をたのみ御殿山の花の朝、二十六夜の月の夕」通人の寢言「よつやよれば品川はまたかくべつとい、まあむすこがば、幾日驪山にかこつけて行、西に折御殿山に走、たかなわ溶々として流て大海に入、五歩に一樓、十歩に一閣、廊下三階をめぐつて見通しにいたる」和

合人・四上・アセツ山御殿山、御
てんやまから鬼が出る、鬼が出る、鬼じ
やないもの人じやものし。

【御殿山】 ↓柏崎町(新潟縣刈羽郡)

出雲國人息。於此坂。有一老父與一女子。
俱作坂本之田。於是出雲人欲使感。其
女。乃彈琴令聞。故號琴坂。

【琴浦】 八郎湯、羽後國の別稱。

【琴丘】 播磨風土記勝勝郡の條に見ゆる
丘。今の姫路市の附近にありしもの。昔
大友命の船が難破したる時、琴落ちたる
を以て琴神丘と號せしに因るといふ。播
磨風土記・備前郡「於是父神(大友命)之
船不能進行、遂被打破……琴落處者
即號琴神丘。」

【琴浦】 紀伊國(和歌山縣)名草郡の歌枕。
今の海草郡の海岸ならん評かならず。
夫木・二五「紀國に下りて、このころや
名をかなる春のしらへさへまたあらたまる
ことこの浦波 雅水」

【琴ヶ濱】 鳥根縣勝勝郡馬路村の海濱。
謂はゆる白砂青松、相映じ風光盡くが如
く、その跡は縣下の石見津田の海岸、繪
の浦、波根海岸等と共に號せ稱さる。ま
た何れも海木浴に適す。附近の天河内に
石見第一の真刹流行寺あり。

【琴坂】 播磨風土記排保郡の條に見ゆる
坂。和名抄排保郡桑原郡の地即ち今の排
西村・牛田村の邊の坂なるべし。景行天
皇の御代出雲國人が、田を作る女を賞で
琴を弾きて聞かしたることより名を得
たりといはる。播磨風土記・排保郡「琴
坂。所々只號琴坂。昔大帯比古天皇の世

成平野、南は栗太郡より野洲・蒲生・神時・
愛知・犬上の諸郡に亘り北は坂田郡にも
及ぶ地域の、近江盆地の山地丘陵地を除
きたる湖岸の平坦部の總稱なるも、其主
要部に中央の野洲・蒲生・神時・愛知・犬上
の五郡に跨る凡そ一〇〇米以下の平地と
湖畔の低濕地を含むもの、盆地周囲の山
地は伊吹・養老・鈴鹿の各地帯にて、古
生層・石灰岩・花崗岩・石英斑岩等より
成り、之に接して古琵琶湖に比類したる
舊洪積世の砂礫層より成る約二二三〇〇
米に及ぶ丘陵性臺地あり、平野部は其下
の段階に當る。此平野中處々に突出する
長命寺山・安土山・觀音寺山・箕作山・
笠神山・彦根城山等は湖上の沖島・多景
島・竹生島と共に湖没の名蹟にして古生
層・石英斑岩又は花崗岩より成る。河川
には草津川・野洲川・日野川・愛知川・
犬上川・丹川・天野川・浦川等あり、夫々
河川附近に三角洲を發達せしめ、就中野
洲川・愛知川に於て著しく、之と共に湖岸
に砂嘴を作り之によりて内湖を形成す。
平野は地味肥沃にして、灌漑の便もよく
近江盆地中農耕に最も適し、良質の近江
米を始め麥・粟・粟・粟の産多し。湖岸
の温度と水の豊富と交通の便等とは各種
機械工業を誘引せしめ、各地に紡績・麻
織・絹織・人絹・被服・縮緬・天竺絨等
の工場設立せらる。又湖畔の低濕地より
は盛に海外移民を出し、北米・南米等に
在留するもの多し。人口は縣内に於て最

【古東面】 朝鮮黄海道金
川郡の西南部。鐵成江の右岸に當る。西
は金川面に、北は金岩面に、西は西北面
に夫々隣接し、南は京畿道固城郡に境す。
面内に百米前後の丘陵起伏するも、鐵成
江沿岸及び中部はやや低平にして耕地あ
り。農産物を見るべきものなきも石粉・
木炭の産を以て知らる。京義本線及び一
等道路共に東部を南北に走り前者に鴨井
驛(明治四十一年設置)を設く。

【虎島面】 朝鮮咸鏡南道
水興郡の東南部。北の一部古寧面に接す
る他全部海に面す。即ち松田灣の東側に
ありて南に突出せる頗る狭長なる半島全
部を占む。中央は狹窄なるも先端はやや
大にして部落はここに發達す。其先端の
中央に二・三米の突起あるも沿岸は低平
にて農耕行はる。而して地勢上住民の多
くは漁業に従事し漁獲多し。農産物は
主として麥・豆類・粟等の畑作物なり。
等外道路面の中央を南北に貫く。

【厚東】 厚東郡
【湖東】 湖東郡(長野縣諏訪郡)
【湖東平野】 近江國琵琶湖東岸に當る湖

は豊平面・道村面に、北は風北面に、西
は延安面・湖南面に夫々隣接し、南は海
に面す。東端及び西端に小丘陵地ある他
は殆んど内低地にして、中部を小流南
流し地味肥沃地よく拓く。生業は半農
半漁にして麥・粟・大豆・小豆・粟・稲・
大麻等の農産の外に漁獲も多し。南北
海上に屬島群島存ぶ。二等道路北部を
東西に走り三等道路西北方に走る。

【五島村】 靜岡縣遠江國濱名郡の東南端。
天龍川口の右岸に位し、北西は濱松市と
の間に白根村を隔て南は遠州灘に面す。
海岸に沿ひて砂丘東西に連り、その内面
は天龍川の沖積地の南部にて土地平坦、
田畑よく拓く。米・蕎麥を主として農産多
く、水産も少なからず。往昔の事は以て
微すべきものなし。いま西島・江之島・
福島・平左右衛門新田・松島・鷗島の六
大字より成り西島に役場を設く。

【五島列島】 長崎縣に屬し平戸列島西方
の宇久島より起りて西南に延び、福江島
に至る大小百餘の島嶼の總稱にして、最
北の宇久・小値賀・野崎等の諸島は北松
浦郡に入り、東方の江ノ島、平島は西彼
岸郡に屬し、残餘は南松浦郡を構成せる
福井・久賀・奈留・若松・中通の五島を始め
多数の小島を包含し、謂はゆる五島の稱
に最も妥當なるを以て、ここにこの部分
につきて述ぶ。面積六四四平方軒に過ぎ
ざるも、海岸線の延長は實に二二〇〇軒

に及び、九州の約六分の一を占む。列
島は東北より西南に連なるも、山脈に凡
て北北西より南南東にほぼ並行して走り
これと走向を同じくせる斷層によりて生
ぜし田ノ浦・奈留・龍河原・若松及び小
値賀等の瀬戸によりて、前記諸島が分離
し、しかも一般に沈降性の海岸にして出
入に富めることが海岸線の延長を大にせ
しものなり、地質構造も複雑にして、列
島の基盤をなすは花崗岩・玄武岩・安山
岩等の噴出なり。就中、南端の福江島は、
複雑を極む。概して高峻なる山岳を缺く
も、各島悉く丘陵性にして、平地は皆無
に近く、田二・三・五町歩、畑八・六・五町
歩、僅に福江島の東半に於ける米・粟等の
耕作がやや注目されるに過ぎず。島民の
主なる生業は漁撈にして年産五〇〇萬圓
内外に達す。主要漁港としては、上五島
にては奈良尾・岩瀬之浦・有用・北魚目、
魚目、下五島にては富江・玉之浦・岐宿
等が挙げられ、水産業者の數に於ては富
江が過半を占め、玉之浦・奈良尾・北魚
目がこれに次ぎ、漁獲高よりすれば玉之
浦を首位とし、富江が第二位なり。玉之
浦・富江は遠洋漁業が盛んにして、特に
前者はその中心地なり。漁獲は皆海産物
にては鰯・鰯・文鰯・烏鰯・海鼠を主
とし、遠洋漁業にては鰯・鰯・鰯を主
なるものとす。大正の初年頃、頗る活況を
呈せる中通島有用の東洋捕鯨會社の跡揚
場は過去の物語となりて、富江及び玉之

も密集し一方軒に對する密度は五・六〇
〇に達し、古くより發達せし市場・莊園・
城下町等の變移による小都市多し、各地
方農村の小中心となり、これ等の都邑を
連絡する陸上及湖上の交通至便なり。古
來近江商人を輩出せしめ天下の商權を掌
握し、今尚その餘勢を繼續し京阪地方の
財閥となる。近江商人はまた江州商人と
も呼ばれ、徳川時代に於て、近江より出
て來る行商人をいひ、延いて三郡に唐館
を有する近江出身の商賈を指稱せり。か
く近江商人といふ名稱、特に生じたる所
只は諸國の商業界に彼等の活動が、人の
耳目を聳たしむるものあり、ひたすら著
財にいそしむれば、まさにその反感を挑
發するに十分にして「近江泥坊」といふ惡
口さへ生る。榮謙太郎氏は「經濟大辭書」
中に於て、近江商人の起原を、ははは
戰國の末と推定し、その原因を織田・徳川
の歸商及び重税重課に苦しむ百姓の捨農
の歸商にありとなし、横井時冬氏も「日本
商業史」に於て同様の説をとらる。喜田
博士は「近江は太湖をひかへ古くまた海
人の住所にて、淺井郡の安曇郡、高島郡
の安曇川は、安曇郡即ち海人の居住を
の安曇川は、安曇郡の遺れるもの、近江商人
の活躍はまた伊勢商人に譲らず、吾中世
以降は、彼等は伊勢商人を凌ぎ、遂く北海
道・南洋まで至る」と論じ、その起因を
海人に求む。その他諸説あれど、要する
に近江商人の特徴は、みな儉約、男子に

大體十五六歳にて出郷、商業從事の習慣
あり、他國にて得たる利益は、本國に送
り他日大成の資本とす。彼等のうち著名
なる者は、寛永年中奥州南部領八戸港に
行商し、松前に渡り漁場を開き、北陸地
方に運搬を始めたる岡田八十次あり、そ
の分家岡田小八郎は鹿兒島に行商し、の
ち老古屋に支店を開き松前屋といへり。
また西川傳右衛門は、北陸奥羽に行商し、
遂に渡島嶺山に支店を開き、一代に四十
度も往復せし。八幡の伴傳兵衛の如き
も、寛永年間江戸に支店を開き、これ
と同時に、八幡の西川理右衛門は江戸・
大阪に支店を出せり。これ等江戸に於け
る近江屋の始祖といふべし。元來近江商
人はそれぞれ其の根據地に本宅を構へ、
毎年或期間は家に居り静養したが家事
をみるも、本宅にては營業せず、その他
の時期は家事を内助者に托し置き、三都
を始め縣外各地に設けし營業所に出でて
活動す。此風は現在も行はれ、近江商人
の商店は男のみにて、商用は勿論、炊事
掃除に至るまで一切男子による。今日湖
東方面が「近江の黄金郷」といはるるは、
斯くの如く主人も店員も店を商戦の陣屋
と心得て奮闘を續けたる結果なり。なほ
日野の商人は多く酒の醸造、販賣に従事
し、八幡の商人は蚊帳、襪表の販賣を主
とし、五箇荘の商人は多く呉服類を取扱
ふ。

【湖東面】 朝鮮黄海道延白郡の南部。東

られ、その名殊に著聞なり。新撰東京名所圖會に「隅田堤に沿うて流場五箇所に在り云々、其の名の著しきは橋場及び竹屋の流しなるべし、竹屋は淺草三谷より向島三洲社頭へ橋を繋ぐの便あれば花の頃は極めて賑はし」と見ゆ。蓋し昔聞とは「名におほばいざこととはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと 葉平」の歌に因むといふ。

コトニ 琴似村

北海道石狩支庁管下の一般村。石狩國札幌郡の西北部に位置し、地南北に長く、東の中部に札幌市に東北に札幌村・穂路村に、東南は藻岩村に、西に手稲村に、西北は豊栄川を境に石狩郡石狩町に界し、面積七二・五平方町餘。南端には東に藻石山(八二七米)・西に百松澤山(一〇三三米)ありて山地をなし、中部には三角山(三二二米)の丘陵地あるも、之より以北は石狩平野の一部にて土地甚だ低平、耕地多く拓く。米・大豆・大根・茄子等を主として産出多し、製紙工場ありて麻綑の工場あり、畜産もた少からず。札幌・小樽を繋ぐ國道中部を略東西に貫きてパスの便あり、省線函館本線又その北方を走り、琴似驛(明治十三年設置)を置き、村の東北部に札幌市より石狩町に至る石狩街道に近く交通便利なり。三角山の東南麓に洞山温泉あり。北海道志によれば安政四年に葛原山回某足輕數名を同伴して、今の大字發原村に居住せられたとす。明治二年七月開拓使

を設置せられたる時は住民八戸、土人五戸なりしと、三十九年二級に、四十三年札幌區の一部學田を編入し、大正十二年四月一級町村制を施行せり。

コトノオ 琴ノ緒山

琴尾山とも書く。阿蘇火山脈に屬する一峯。長崎市の北方約一二軒、長崎縣西彼杵郡伊木力村と長興村の境界に時つ。標高四五一米。北麓は堂崎鼻及び二見温泉となり大村灣に注す。長崎本線トンネルを穿ち南麓を通過す。山頂よりの展望は明眉清麗にて、北方には大村灣の静かなる景致を望見す。

コトヒキ 琴引山

俗に彌仙山と云ふ。中國山脈に屬する一峯。鳥根縣飯石郡飯原村と來島村とに跨る。標高一〇一四米。山麓花崗岩質崖より形成せらる。風土記に「琴引山、郡東正南三十五里、高三百丈、周一十一里、古老傳曰、此山峰有窟、所造天下大神之御琴、長七尺、廣三尺、厚一尺五寸、又有石神、高二丈四尺、故云琴引山」とあり。

コトヒキ 琴原

↓秋津村(奈良縣南葛城郡)。「琴原山」歌枕。兵衛藤原國妻父郡の八木川と大原川との間にありといふ。夫木・二〇といつよりかしらるべの原のたゞにけんことひき山の音のきこえぬ。「琴原山」四國、七寶山の境の一峯。香川縣三豊郡觀音寺町北部の丘陵。財田川の右岸に時つ。標高約六〇米。西方に讃灘に濱し、伊吹島・圓上島等岬下に展開す。

山頂に琴原神社鎮座す。大寶三年日澄上人字佐八幡を勧請して創祀し、のち大同二年聖海この地に遷徙せし時、山腹に觀音寺を建立、この社の別當とせりと傳ふ。

コトヒラ 琴平

【琴平町】香川縣讃岐國仲多度郡の中央。海岸より南一二軒の處、丸龜平野の西に連貫する丘陵(象頭山)の麓に位す。東は根井村、東南は神野村大字五條に、南は十郷村大字佐文に、西は香通寺町大字大藏に、北は善通寺町大字大藏に接す。琴平山(象頭山五二一米)町の西部に聳立、脈南に延び大藏山に連り琴平山の東南に谷を隔てて愛宕山(三三二米)あり。本地域の大部分を占む。之と並行し金倉川(瀬川)町の中央を貫流し、町を川西川東の二部に分つ。町は海拔六七・四米、地勢は南より北に向ひ低下す。地盤は一部に花崗岩質より成り、琴平山は讃岐式安山岩(讃岐岩)・愛宕山は石英斑岩より成る。山地部表層は有機質壤土にて各種樹木の生育に適し、太古の林相を維持するを以て知られ、平地部は砂質壤土にて、地味肥沃、農耕に適す。町に其位置上讃岐交通の中心に位し、四通八達、丸龜市より来る國道が多数より来る讃岐多度津線と能川村大字金藏寺にて合し、本町を通過し、徳島縣田町を経て高知市に通じ(明治十九年起工、廿四年竣工)、國道高松琴平線・琴平琴原線・琴平貞光線も本町より發す。省線土讃線は本町を通過して、琴平驛を設けし、南は猪鼻峠を経て、阿波池田より高知市方面に通じ、北は多度津にて讃岐線に連絡、伊豫方面並に高松に通じ、近時電車も發達し、琴平急行電線・琴高電線・琴平急行電線の起點をなし、高松・坂出・善通寺に通じ、定期自動車線に省管自動車西讃線が最近施設され、西方豊後・觀音寺間を往來し、國鐵讃岐線に連絡し、交通甚だ便利にして、客客常に絶えず。町内には有名なる旅館多く、土産物・節を始め清酒・竹細工・オキ・彫刻品・餅・饅頭・菓子(柿餅子)等の産出多し、仲多度郡南部に於ける商工業の中心をなす。然し本町はもと子松の(一部)和名抄にて、建長二年道家圓白處分記に「家領讃岐國子松庄」同先大徳行狀記に「子松庄は月輪殿の御領云々」と見え、九姓家所領たりし事ありしが、古來家領所領たる神として、徳川幕府が金刀比羅宮の鎮座地として、徳川幕府に本町及其附近にて金刀比羅宮社領地を三百三十石となし(慶安元年)、家光より朱印狀を交付、爾來朱印地として租稅免除、金刀比羅宮の社領地として行政權亦同宮に歸し、同宮の別當金光院の命により町奉行を司り、斯る關係により本町は特別的發展を遂げ農耕地より琴平門前町として發達し、敗風風に小浪瀬と稱せられ、幕本日御所石巻に繁華不談勢南春と吟詠、繁華増加一ヶ年約二百萬人と稱

り發す。省線土讃線は本町を通過して、琴平驛を設けし、南は猪鼻峠を経て、阿波池田より高知市方面に通じ、北は多度津にて讃岐線に連絡、伊豫方面並に高松に通じ、近時電車も發達し、琴平急行電線・琴高電線・琴平急行電線の起點をなし、高松・坂出・善通寺に通じ、定期自動車線に省管自動車西讃線が最近施設され、西方豊後・觀音寺間を往來し、國鐵讃岐線に連絡し、交通甚だ便利にして、客客常に絶えず。町内には有名なる旅館多く、土産物・節を始め清酒・竹細工・オキ・彫刻品・餅・饅頭・菓子(柿餅子)等の産出多し、仲多度郡南部に於ける商工業の中心をなす。然し本町はもと子松の(一部)和名抄にて、建長二年道家圓白處分記に「家領讃岐國子松庄」同先大徳行狀記に「子松庄は月輪殿の御領云々」と見え、九姓家所領たりし事ありしが、古來家領所領たる神として、徳川幕府が金刀比羅宮の鎮座地として、徳川幕府に本町及其附近にて金刀比羅宮社領地を三百三十石となし(慶安元年)、家光より朱印狀を交付、爾來朱印地として租稅免除、金刀比羅宮の社領地として行政權亦同宮に歸し、同宮の別當金光院の命により町奉行を司り、斯る關係により本町は特別的發展を遂げ農耕地より琴平門前町として發達し、敗風風に小浪瀬と稱せられ、幕本日御所石巻に繁華不談勢南春と吟詠、繁華増加一ヶ年約二百萬人と稱

コトフキ 寺

【寺村】長野縣信濃國東筑摩郡の東南。松本市の南約三軒、南北に細長く、東半は松本市の東邊をなせる山裾にして、なだらかなる傾斜地、西半は平地とす、全村殆ど桑園にして、養蠶盛なり。北部に幾分の田地を見るのみ。三州街道は村の西部を縦貫し、省線中央本線の村井驛は村の西方一軒にあり。村名は豊匠・小赤・白瀬の部落を合併して、村制施行の際難名を取つて寺村と命名せられたるもの。【寺庄】香河花邊港(花邊港)の最南の一庄。海岸山脈(愛宕山脈)と中央山脈とに挟まれる謂はゆる香河山脈に位置す。東は海岸山脈を越えて太平洋に面し、西は花邊港の舊地に接し、南は本庄の中央を南より北に流るる東海岸第一の大阿花邊港の一支流たるチヤカン溪によりて風林郡風林庄及び新庄と境せられ、北に同じく花邊港の支流たる木風溪によりて花邊郡吉野庄と相接す。地勢は東に珍奇なる動植物に富む海岸山脈を以て南に走り、西には中央山脈(阿波山脈)として聳え、其間を花邊溪が南より北に流る。即ち東西高くして南北低平なり。本庄の地は、清の道光年間(開拓)せられたりして、以前は阿波郡の里嶺なりき。大字買田の地は、もと失全城と稱し清の道光年間(開拓)の豪戸四人(金谷・松本・多田・山本)を引具して開墾せしむ、失全の死によりて其の志を繼ぐ者な

コトヒ

せらる。維新後は高松藩の管下に屬し、明治四年香川縣設置、廢藩後は第六大區(那珂郡)・第四小區(琴平)・高田・根井・五條・十軒(佐文)に屬せしが、同十一年郡役所九龍管下に入り、同三十二年郡名を仲多度と改稱し、郡役所善通寺に置かれ、之に所屬し、維新前より町名を金毘羅と稱せしを、維新後琴平村と改稱、同廿三年市町村制實施の際琴平町と改稱せり。金刀比羅宮は琴平山の中段に鎮座、祭神大己貴命、相殿に崇徳天皇を配祀、扶時に象頭山金毘羅大權現と稱し、金光院の對之が別當なりしが、明治元年神社とし、事比羅神社と改稱、同四年國幣小社に列し、同十八年五月國幣中社に昇格せられ、廿二年七月金刀比羅宮の文字を用ふるに至る、近時神社には寶物館・圖書館・博物館・運動場など各種の設備を施し、千古不伐、翠色滴らん許なる觀々たる老樹と相映して一層の神威を添へ、山下には琴平公園・潮川神社・高松藩高等の老跡あり。我が國に於ける一神都たるの實を備へつつあり。(金刀比羅宮)國幣中社。祭神、大物主命・崇徳天皇。創祀年代を詳かにせず、全譜史に云く、金毘羅大權現は天皇國王令城鎮守神にして、大寶元年十一月一筆の旗となり琴平の舊鎮なる象頭山に跡を重る。時人祠を建てて旗宮と稱す。長保三年(長原實秋は勅を奉じてこの祠に詣りて本邦の神廟に擬す。これ當社の權輿なりと云ふ。祭神大物主

く遂に放棄されて我領に及びたるも、領事後備々此地方に遊びし賀田金三郎氏により着目され、明治三十二年以來開墾事業着々として進捗し、現に鹽水港製糖株式會社直營の移民開墾地として純然たる内地人部落を形成し、戸數百餘、人口六百餘、小・公學校の設けあり。之に引續き壽・豊田等の兩内地人移民村、當局の努力により開設されたり。殊に大字壽の地は本庄の中心地をなし西方の山地にては遂に探掘行はれ、東方の平野は地味骨骸にして、甘蔗の栽培に適し、鹽水港製糖株式會社・同工場・製糖會社出張所・郵便局・小公學校の設備あり、砂糖・樟腦・薪炭・桐油・糖蜜等を産出す。本庄は大正九年地方制度改正前までは、花港港廳運轉下の賀田村・壽村・豊田村・月眉庄を合したる地にして、地方制度改正後、壽郷は壽郷と改稱され同じく其下に三村一庄を置かれしも、昭和十二年十月一日付を以て、壽郷は壽郷と改正され前記三村及び新設地に屬せし水碓尾の北半を合する地區を管轄し、壽・賀田・豊田・水碓の四大字に分れたり。本庄下には又、臺灣鐵道臺東線の南北に通過するあり、其中北より賀田・壽・豊田・溪口の四郷を有す。

今上陛下皇太子に在します頃、本島に鶴駕を枉げさせられ、高雄御視察の御り御登山、其の風光を賞でさせ給ひ、壽山と御命名あらせ給ふ。頂上に三角點あり、此の處を壽の峯と呼ぶ。臺灣八景の一に算へられ、三面は斷崖絶壁にして、其の展望の廣闊なる、殆んど高雄州下の大部分即ち高雄・旗山・屏東・潮州・東港・鳳山・岡山の各郡下を眼下に見下し、山脚には高雄市街並に青波綠蕪を湛へ、大船巨舶の輻輳する高雄港を俯視し、遠くは臺南州下の一部及び大武の靈峰・小琉球を雲霧の間に望み、西南は碧翠水天に連る大海を一眸の裡に收め、眺望の雄大にして絶佳なる、一度此の峰に遊ぶ者を、羽化登仙の想ひあらしむ。山腹に壽山館(もと貴賓館と稱す)・高雄神社・行啓記念碑(皇太子殿下御登山記念碑)・宮の臺(宮の臺)等あり。今上陛下御登山記念事業として、壽山記念公園建設中にして今や工程大に進み、自動車は高雄神社・行啓記念碑・宮の臺より壽の峯に通じ、それより更に山頂部落・桃子園又は西子灣に至る公園道路の完成を見るに至り、南部唯一の遊覽地として其名聲全島に高し。尙ほ壽山ゴルフ・リンクスは總經費八萬六千圓にて昭和九年五月竣工せり。頂上の西方崖下數十丈の豁谷を隔てて海岸に沿へる真山あり。奇巖所々に屹立し、雄獅全山を蔽ひ、蔓草纏はり、苔蒸して奇跡を施す。此處に白雲臺と稱する

あり。常に白雲の遊ぶ所となるを以て此の名あり。壽山の西岸に西子灣海水浴場あり、風景の絶佳なると施設の完備とに依り、夏季節の繁昌を呈し、實に南部唯一の海水浴場なり。

結せるといふ間鬼ヶ濱(日本書紀)に此地なりと。のち十三福島城築築時より港として知られしが、維新後地の利を得ず輩類の途にあり、町村制實施と共に今日に至りしも、漁港修築により漸次村勢向上しつつあり、將來第三期築港完成と共に津輕貫通線開通の曉は、小泊村も水陸交通の要地として相當の繁榮を來すものと思はる。(小泊港)小泊村の頭部をなす小泊港は、往古、蝦夷通(福山・江差等)の船は東風に吹きつけられ、海峡の通過困難なる場合は、ここを唯一の避難地とし、漁船、商船の碇泊をみたりしが、後昔地に恵まれず、附近の物産乏しく、且交通不便なる爲め、近來斯くの如き往時の面影なきも、産業上、又は軍事上の位置に重點がみられ、將來はこの小泊村も軍事上重要な地位に置かること期待さるものなり。

【小泊港】青森縣北津輕郡小泊村の西方に突起する岬。頭部に小泊港を控ふ。一に概現時といふ。突出すること四軒、此附近には奇岩怪石屹立し、時には削るが如き斷崖をなし洞窟または石門を作り、海蝕作用の行はれしことを示す。小泊より西進すれば、始めは凝灰岩を、次に礫岩を見、また石英粗面岩を見る。岬頭に近き神天祠の邊に石英粗面岩の絶壁、または島嶼にて、阿蘇内ノ澤よりは岩石一變し黒色緻密の玄武岩となり、多少分解せし處には玉髓・碧玉または鑽石を生

じ、また板状節理も發達す。概現時は石英岩及び粘板岩が角岩の上に重り、とど穴と稱する石門は石灰岩の上を被ふ安山岩の海蝕作用を受けしものにして、幅一米、長さ二米に及ぶ。

コトヤマガツヒノサキ 言八

十禍津日前 廿樹岡に同じ。

コトリ 小島崎 岐阜縣大野郡清見村にある岬。最高點は標高一〇〇二米、北嶺は漆洞山(一三二二米)、南西嶺は瀧々洞山(二四九米)にして峠路は白川街道に當り、小島川に沿うて通す。東降すれば同郡三日町を経て高山市に、南西降すれば松ノ木峠最高點(一〇八七米)・輕岡峠(一四九米)を経て同郡白川村に至る。

コナ 古奈 ↓伊豆長岡町(静岡縣)

コナイ 湖内庄 臺灣高雄州岡山郡八庄中の一。郡の西北隅海岸地帯に位置し、東は路竹庄、南は龜陀庄にそれぞれ隣接し、北は二層行溪を隔てて臺南州新豊郡仁徳・永寧の二庄と相對す。西は海に面し、海岸地帯は僅かに砂丘を以て波瀾を防ぎ、船舶は勿論、漁舟さへ假泊すべし港灣なし。廣袤東西一里十一町、南北二里一町。面積二方里九分。人口約二萬八千(人口密度本郡中第一位)。本庄はもと海埔地を開墾せしものに係り、東部は總て平坦にして田園展開し、大字大湖より湖内に互れる一帯は、往時湖水を爲せりといふ。西部は土地低濕にして池沼

多く、その面積は總面積の約二分の一に相當す。この一帯は魚塩の經營に適し、新業の開発上天恵に當る所ゆからず。沿岸は平坦且つ遠淺なる砂地を爲すも鹽も各種の魚族に富み、就中サワラ・ボラ・イトワ・エビ・魚苗・イソナ・マダロ等有名なるため、古くより漁業盛んにして到る處に漁村點在し、水産業者は總人口の過半数を占め、水産業は本庄の主産業たるのみならず、本郡新業中の首位にあり。特に大字頂菜菜・崎瀨は海に臨める關係上、殊に盛にして純然たる漁村を形成す。發動機付漁船二十餘隻、竹筏七百餘隻あり、水産業に依る年生産實に六十三萬圓を越す。水産業に次ぐものを農業とす。然れども土地低濕して低きため排水困難にして、雨期には河川氾濫し、田圃の浸水を見ること少からず、水利の便亦極めて悪く、田面積一千七百五十一甲の内、雨期作田は僅かに四百三十七甲餘にして、爾餘は總て所謂看天田(天水に依る早期作田)なり。主要農産物は、米・甘蔗・甘藷・落花生等にして、農業に依る年生産額約三十萬圓程度なり。其他見るべき産業なし。氣候は南部地方通者の乾燥期と雨期とに分れ、五月十月は雨期に屬し、十一月翌年四月は所謂乾燥期なり。年中雨量の大部分は雨期に降下し、乾燥期にありては、晴天打續き季節風強く気温低下し、水源概ね涸渇して飲料水にも缺乏する状態なり。住民は概し

て教育程度低く、父兄の教育に對する理解不充分にして、公學校三・同分教場一あるも、児童の就學歩合甚だ低く、未だ二〇%にも達せざる現状なり。然れども時勢の進展に伴ひ、且つ國語普及運動の熾烈なる刺激を受けて、教育振興の氣運起り、就學歩合も逐年向上しつつあり。國語普及機關としては、國語講習所四・簡易國語講習所九あり、社會教化施設としては、青年團四・部落振興會十一・習俗改良會一・處女會一の設置を見たり。金融機關は、大湖信用購買利用組合(出資金一九六五〇圓)・頂菜菜信用購買組合(出資金一八二〇〇圓)の二箇にして、ともに設立以來よくその機能を發揮し、地方金融に貢獻する所ゆからず。昭和九年度の庄豫算總額が三三五〇五圓なり。地勢平坦にして、道路四通八達し交通至便なり。鐵道線は本庄の東端、大字大湖を通過し大湖驛を設く(但し驛所在地は路竹庄の區域内に在り)臺灣製糖株式會社經營の大釜線は、庄の中央部を南北に貫通し、地方交通上に重要な役割を勤む。縱貫道路は東北部海埔・大湖の二大字を貫き、局管パス南北に走りて交通路の幹線を爲す。其他、指定道路・保甲道路等縱横に設置せられて諸部落を結び、中には定時に乗合自動車運轉するものあり、産業開發上裨益する所多し。本庄開拓の歴史は古く部氏時代に始まり、海埔・園子内・頂菜菜・崎瀨の四大字はも

と文賢里に、大湖・湖内・竹瀨の三大字はもと長治二圓里(部氏の時、長治里を置き、壽領後康熙六十年代に、一圓里・二圓里に二分せり)に屬したり。就中竹瀨最も古く、明の永曆十六年(清の康熙元年)寧靖王術桂の渡臺して開墾を創始せし地方とし、當時竹瀨莊と稱せしは、今の東北方なる大湖・湖内の二大字に互れる一帯にして、大湖・湖内の地名は、往時湖水をなせしより出づといふ。文賢里に屬せし地方は、康熙年間時の政府盛に開拓の事業を獎勵するに當り、福建泉州の移民職々渡來し、自由に墾區を選定して埔地の開墾に從事し、遂に成墾せしものなり。乾隆の初年には大湖街(今の大字大湖)の街肆形成せられたり。此處に在る長壽宮(保生大帝を祀る)は、同四十年葉春興なる者の募建に係る。行政上の沿革を見るに、領臺前にありては、臺灣府(光緒年代に臺南府となる)鳳山縣の管轄に屬せり。領臺後は初め臺南鳳山支廳に管轄せられ、明治三十年六月鳳山縣の新設せらるるや、同縣大湖鎮事務の所轄となりしが、三十一年六月鳳山縣の廢止せらるると共に、該鎮事務は臺南縣に編入せられ、三十三年十一月には更に鳳山鎮事務大湖支署となり、本庄之に屬せり。三十四年地方制度改正に依り廢縣置鎮の結果、鳳山鎮を新設せられ、その下に阿公店支廳(阿山)を置かれて、本庄は該支廳の所轄たり。四十二年鳳山廳廢

【コトヤ——コナイ】

コナカ——コナシ

せられて、舊管轄地を臺南廳に合併せられたるため、阿公店支廳は臺南廳の所轄に移り、大正九年地方制度の大改正に依りて高雄州の管下となり、阿公店を岡山と改稱して岡山郡役所を置かれ、本庄はその管轄する所となりて、湖内庄と稱し、管内を前記の七大字(各大字は改正前において各々庄と稱せり)に區分し、庄役場を大字園子内に置く。同時に里は撤廢せられたり。(零崎王の墓) 大字湖内(鐵貫鐵道大湖驛西方二十町)にあり。王は名を衝柱、字を天球と稱し、一王子と號す。明の太祖朱元璋九世の裔にて、零崎なる地の王に封ぜられたるを以て其の名あり。清隆武元年清兵との戦に敗れ、逃れて廈門に至るや、鄭成功の臺灣に占據せしを聞き、王も亦近臣三十餘名を隨へて本島に渡り、長治里竹港のうらち、今の大字竹港に居を定め、原野數十甲を開墾し、静かに英氣を養ひ、回天の機を待ちし、康熙二十二年六月鄭軍の澎湖島に戦ひ敗れて歸るや、王は天運の既に明室を去れるを覺り、自若として帛を縊に結びて縊死せり、時に齡六十六。大正十二年同庄の富豪林清泉なる者、王の墳墓の廢滅に歸するを憂ひ、自費を投じて「零崎王の墓」と刻みたる墓碑を建立せり。碑の後方約三尺の所、土狀隆起して土鏡頭の形を成せるは、即ち王の墳墓なりと稱せられ、附近は榎仔樹・樟樹等交りて森をなし、幽寂清楚、訪ふ者なし

て轉た懷舊の感に堪へざらしむ。されど當時清軍の爲に墓の發掘せらるるを怖れし事情あり。地方民の傳説に依れば、王の墳墓附近の廣き地域に、數百基の舊墓を造りて、探出すること能はざらしめ、且つ王の埋葬に使用せし人夫は、皆毒藥にて盲目又は啞とし、以て眞の場所の洩れんことを防ぎたりといふ。故に眞の墓の所在は昔より不明にして、現在「零崎王の墓」と稱せらるるものも、實は眞偽未だ確定せず、なほ今後の研究に俟つべきなり。近時發掘せられて器物其他數々の出土品を見たり。(零崎王廟(華山殿)) 大字竹港にあり(墓地の西方約半里)。王の没後庄民相謀り、王の舊邸址に一廟を建てて之を祀り、華山殿と稱し、正面に「明零崎王神位」と記せる位牌、及び傍に「家丁許福奉祀」とある位牌を安置し、なほ王に殉ぜし五妃の像をも併祀す。のち雍正四年・光緒十四年の二度に互り改築せし、其後廢廢甚しかりしため、昭和五年附近の有志相謀り、約一萬圓を投じて大改築を加へ、丹雘燦然として輪奐の美を呈するに至れり。毎年舊曆七月二十七日(舊去の日)及び九月二十五日(生誕の日)に祭典を行ひ、参詣者頗る多し。**コナカ** 小中 神奈川縣中郡にありし村。明治四十二年山背村と合し旭村を建つ。

コナガイ 小長井村 長崎縣長門郡前北高來郡の東北端。西北隅の帆柱岳を頂點とし、東南海岸線を成邊として二等邊三角形をなす村にして、多良岳の東南斜面を占め諫早灣口に位す。西南は湯江村に隣り、北は藤津郡大浦村と界す。多良岳の一峯西北隅に聳え之より東方に緩斜して諫早灣に臨る。海岸には低地乏しく僅に扇田あり、耕地少く森林廣し。村民の生計は漁業による。海岸に沿ひて縣道通じ、省線長崎本線亦海岸を走りて小長井驛(昭和九年設置)あり。往古のことは知る由なし。明治廿二年町村制施行の際、小川原浦・長里・井崎の三村を合し、各其一字を取りて小長井村と稱す。いま小川原浦に役場を置く。**コナカガワ** 小中川村 新潟縣越後國西蒲原郡の東南部。中ノ川川の北岸にあり。東は小吉村、北は松長村、西南は燕町、南は小中川を境に中蒲原郡新飯田村に隣る。肥沃なる信濃川沖積平野にあり、全村水田にして米作盛なり。燕町より新湯に通ずる社線新潟電氣鐵道線及縣道は村を東西に横斷し、前者は小中川・灰方の二驛(共に昭和八年設置)を置き、交通不便ならむ。往古は以て微すべきものなし。いま小古津新・又新・二階堂・勸新・小中川・大船渡・中川・小牧・四ツ屋・上見木・下見木・大新・灰方・三王瀨・關崎の十五大字より、成り小古津新に役場を置く。

コナカノ 小中野 青森縣八戸市の町名。もと三戸郡の町なりしが、昭和四年八戸町・湯野・飯村と共に八戸市となれるもの。町内に省線八戸線の小中野驛(昭和九年設置)を置く。**コナサミ** 小那沙美島 廣島縣佐伯郡にある島。廣島港の入口、嚴島の東北に浮び、南は大部沙美島に對す。島上には小那沙美島燈臺(明治三十七年設置)を置く。燈質は四紅光、光達距離七・五哩。**コナシ** 小梨村 岩手縣陸中國東磐井郡の東部。北は奥玉村、南は八澤村、大津保村、西は八澤村、東は矢越村とそれぞれ界す。面積二八・九八方町。大村とは昔ひ難きも地勢複雑にして、小丘陵を以て三箇部落に分たれ、相互の通行自ら絶たれ、村内統一上不便のこと多し。丘陵は北上山系に屬してその餘波を受くれども老年期の末端にあるがために高峯を有せず、ただ南端に黄金山(四八二・四米)、北端に愛宕山(二七三・四米)、京ノ嶺(二五二・七米)、東端に四〇〇米内外の觀音山・砥石山等あり。山塊の間を南小梨川・小梨川・金田村の三川何れも西流す。地質は北日本に於ける古期の山脈にて外力の侵蝕により高度を減じ、深成岩としての花崗岩露出す。ただ一部東端に結晶片岩露出あり。河川は古成層中に横谷をなしつつ三小平野を作り人家集落す。沿岸は主として第四紀の沖積層なれど、他は洪積層又は第三紀層より成る。この平野は木村河川の蛇行により成生せ

られたるやの感あるも、河川の源知きため沖積平野は沿岸の小區域に限らるのみ。産業の主要なるものは農業にて、米(一三五五七三圓)・粟(四一九六二圓)・麥(一九一七四圓)・蕎麥(五四一四〇圓)を産し、其他畜産として自家用なる馬・豚・林産に薪炭・材木、また工業として僅少なる木製品・竹製品・漆製品等あり。道路は縣道延長五軒、村道延長六〇軒あり。縣道は一箇町より宮城縣氣仙沼町に通ずる主要線にて、大船渡線は概ねこれと並行し本村の北部を横ざり、ここに小梨驛(昭和三年設置)を置く。村は明治廿二年町制實施に際し、南小梨・北小梨・清水馬場・熊田倉・金田の五箇村を合して小梨村と稱せしもの。往昔平泉藤原氏の有に屬し其後幾多の變遷あり、天正以前は葛西の臣小梨右馬允・千葉左近・榎時多河・千葉相模守の采邑に屬し、葛西氏亡ぶと共に伊達氏の封地に歸し、のち田村下總守の采邑となり以て明治維新に至る。

コナテ 子撫村 富山縣越中國西礪波郡の北部。石動町の北、寶達山脈の東麓にあり、小矢部川の左岸に沿ふ。西部山地は三〇〇米内外にして、東南に次第に傾斜し、小矢部川の一支流の開析による扇狀の平地となる。山地は概ね森林にて、平地には水田拓げ農耕行はる。西南部山麓に沿ひ、石川縣七尾街道に通ずる縣道あり。往古の事は以て微すべきものなし。いま西中野・芹川・櫻町・横谷・宮須・法樂寺・田川・六郎谷・島中・宇治新・坂又・原牧・清原・岩崎・法樂寺入會地などより成る。村内に須川温泉あり。無色透明の食鹽泉にして、子撫川の清流を前に稻葉山を負ふ。附近に鼓ノ瀧あり。この瀧は毎年九月頃となれば瀑聲宛も鼓の如く鳴るを以てその名あり。また觀音瀧・親愛上人の普賢佛穴・後寛保・龍宮瀧などあり。**コナミ** 湖南村 長野縣信濃國諏訪郡の西部。諏訪湖の南方。北は諏訪湖との間に豊田村を挟み、東は中西村・宮川村、南より西は上伊那郡藤澤村・東其輪村・朝日村と隣る。村の大部分は赤石山脈の一支脈の北端を占め、北方に向ひて傾斜し、東南隅には守屋山(六五〇米)あり。東北部は諏訪平の一部を占め、山地は階段階層をなしてこれに臨む。この低地は、東境を宮川西北に流れて水田多し。米・蕎麥を主産物としその他に生糸・蜜天の特産物あり。縣道は東北部の山麓を通り北境附近にて二分し、一方は上諏訪町に通じ(約四軒)、他方は諏訪湖の西岸を経て岡谷市に通ず(約六軒)。上諏訪町に省線中央本線上諏訪驛あり。他に山間に村道一條あるのみにして交通不便なり。この地は和名抄、諏訪郡佐補郷の地なるべく、もと眞志野村と稱せしが、いま湖南村と改む。村内に古墳あり、石標露出し、郭内高さ一米餘、奥行約四米、

南面せり。**コナルト** 小嶋門 徳島縣板野郡鳴門村大毛島の東端端端と淡路行者ヶ嶽の門崎との間なる水道を嶋門海峡と稱し、徳島側を大嶋門、淡路側なるを小嶋門といひ、中瀬によりて兩分せらる。西鶴諸國はなし。三つもろもろの小壺をふり捨て、阿波の大嶋門小嶋門と名付て、湯まく酒をよるこぶし。**コナン** 湖南 近江國の内、琵琶湖の南方地域の汎稱。**【湖南南】** 朝鮮黃海道延白郡の南部。北は湖南東、延安、松遼南、南は海城面に隣接し、東及び西は海に面す。北境には東西に互る一〇〇米程度の丘陵地あり、其他は一帶に低平にして耕地よく拓け、米・麥・粟・大豆・小豆・棉・大麻等の農産あり。また漁業に従事する者多く、漁獲高多し。交通は等外道路西部を南北に走るのみにて未だ便ならず。**【湖南東】** 朝鮮總督府鐵道局轄の一。朝鮮の西南部にあり。湖南本線・群山線を含む。**【湖南本線】** 朝鮮總督府鐵道局湖南線の一。朝鮮の西南部にあり。忠清南道の大田府にある京釜本線大田驛より大徳・面山、全羅北道の益山・金堤・井邑、全羅南道の長城・光州・羅州・咸平・務安等の諸郡を経て木浦府にある木浦驛にいたる。全長二六一・一軒。裡里驛(全北益

山郡裡里面)にて郡山線及び全羅線に、松江里驛(全南光州郡松江河)にて慶全西部線に接續す。**コナンコンゴ** 湖南金剛 朝鮮全羅北道扶安郡の西南一帯の海邊に面せる山岳の稱。邊山八景ともいふ。山紫水明の境地にて内地の須磨明石に髣髴たる海濱の眺、奇岩怪石亂立する峰巒、水石相撃つ淡流、附近に傳説に富む古刹等あり。山容は宛も金剛に似、探勝の地として世に知らる。**コナンフ** 小南浦 陸奥國八戸の別稱。盛岡を大南浦と稱するに對してこの地をかくいふ。**コニシ** 小西 **【小西】** ↓大和村(千葉縣山武郡) **【小西村】** 愛媛縣伊豫國越智郡の西北部。安藝灘に臨み、西は龜岡村、南は九和村東は大井村と境界す。西南隅の四五一米の山を中心として村内には廣く山地わだかまり、僅かに北部の海岸に沿へる地と東北隅とに不地城の低地あり、耕地拓げて米・麥・甘藷等の栽培をなすも生計は多く漁業による。交通は東方今治市より來る縣道、海岸に沿うて西に走り、省線兼讃線、その南側をこれと並行に走る。村内に停留場なきも、東隣の伊豫大井驛及び西隣の伊豫龜岡驛に近し。往古の事は以て微すべきものなし。いま臨・山之内・星浦・別府の四大字より成り、廳に役場を置く。

コナテ——コニシ

コニヤ 古仁屋町

鹿島島嶼大島郡大島の西南端。東北は住用村、西北は西方村に隣り、東西南北は海に面す。面積約九〇平方軒。概ね山地にして、山嶺所々に海に迫りて峭角をなし、其間に侵入多し。東南岸にある伊須浦最も大なり。西岸の前方には加計呂麻島横はりてその間に大島海峡を挟み、中部に古仁屋の良港あり。農産に米・蕎麥あり、大島嶼の産物多し。町は附近諸村の地域と共に要港地帯内に属す。住古の事は以て後述すべきものなし。もと東方村と稱せしが、昭和十一年古仁屋町と改稱す。明治初年此地より石井十餘箇を發見したる由史學雜誌に見ゆ。

コヌマ 小沼

樺太豊原郡豊北村の大字。東海岸線・川上線小沼驛(明治四十四年設置)を置く。

コヌミ 許奴美濱・不來見濱

蝦夷國(樺太)の歌枕。鹿原郡豊津町の海岸をいふなるべしとあり、萬葉名所考は常陸國の大洗磯前濱なるべしといふ。萬葉・一「磐城山ただ越え來ませ磯崎の許奴美の濱に吾立ち待たむ」續後撰・一五「跡たえて今はこぬみの濱ひさき幾よの浪の下に朽ちなむ 家隆」

コネー 古寧面

朝鮮咸鏡南道永興郡の東部。西は仁興面・鎮坪面、南は虎島面に隣接し、北は定平郡に接し、東は海に面す。西境を三〇〇—四〇〇米

の諸峯延互し、其等の山脚何れも東に緩斜するも、沿岸附近は一部に低平にして耕地拓く。海岸線は出入比較的多きも良港なし。生業は牛・馬・牛・馬にして米・蕎麥・大豆・小豆・粟等を出す。等外道路、面の東部海岸線に沿ひて南北に走り、またこれより分岐せる等外道路西走するも、交通は未だ便ならず。

コネーサク 古寧朝面

平安北道義州郡の東部。北は玉尙面、西は古館面、西南は月華面にそれぞれ隣接し、東より南は龜城郡と界す。東北境に天摩山(一六九米)、東南部に大車嶺嶺(三七九米)等あり、その山脚何れも西南に走りて諸處に支脈を起し、面内概ね山地を成す。三橋川は南部を東より西流しその沿岸にやや低地ありて耕地拓く。主生業は農にして米・蕎麥・粟・豆類等を産す。二等道路中部を東西に走り、これより等外道路分岐して南走し、此等の道路には何れもパスの便あり。

コネジメ 小根占村

鹿島島嶼大島郡國府郡の西南部。大根占町の南隣にて東は田代村、南は佐多村なり。西は鹿島島嶼に面し、海を隔てて丹波郡指宿町・山川町を望む。面積約九二平方軒。南中部は花崗岩より成る肝屬山脈の西部に當り、南境に木場山(八〇〇米)聳え、中部南北に辻後(七六三米)・御岳の支脈走りて東西の兩斜面に分ち、何れも山地をなし、北中部の中央には田代川より来る雄

川西流してその下流兩岸に小平地を作り耕地よく拓く。農産は米を第一に、蕎麥等を主産物とし、林産・畜産これに次ぎ、工業また少からず。縣道(佐多街道)西岸を南北に通ずるも、村の北端より北方省嶺古江西線の古江驛(花園村木谷)まで約二四軒を隔て交通は便利ならず。此地は大根占村と共に、和名抄大島郡編(假ば察の誤ならん)郷の地たり。中世は編院と稱す。古文書に大編院・小編院(編院の古領主小松家眞貞元元年八月の文書に小編院、同慶永十八年十二月の文書に大編院と見ゆ)の名見ゆるより見れば、古くより既に大小二區に分れしもの如し。また古文書に南俣院・北俣院と見ゆ。其境域は今詳かにするを得ざるも、諸書を合考するに恐らく小根占は南俣に屬せし如し。本村の地は「自然に繁殖し、いま「こ自生北限地帯」として指定天然記念物なり。(瀨城)大字川南にあり。瀨城又は妹尾城ともいふ。郭九段大小二つあり。西北は海に臨み、東は大川を帯び、餘は原野に接し小浜間に通ず。編院氏の臣院所屬長の居城たり。天正二年一月十九日肝付氏は攻む。編院長來援せしも、兼家敵せず城遂に陥る。寛長及び重長の兵若干戦死す。(富田城)大字川南にあり。一名南谷城といふ。編院氏累代の治城たり。往古編院南俣院は國府鹿島島嶼社の神領にて要領重地頭たりき。建仁三年

七月鎌倉征夷將軍頼朝平清重を以て大隅國編院南俣の地頭職とす。爾來子孫承襲し、後代に至りては編院院一圓を有し所領漸く廣し。當城高さ三十間許、天然の斷壁なり。本丸・二丸の名を分けて城數大小丸多く城の間に懸踏存す。東北は淡谷驛より西北に小根占川を通し、また國見野の二城近く、西方遙かに瀨城を望む。(國見城)大字川北にあり。東の一面平野に接し、三面は懸崖絶壁にて高さ二十間(約三六米)、宛も屏風を立てたるが如し。周圍約三十五町(約三五〇〇米)、東西は長く十二町十間(約一二二〇米)、南北は狭く五町三十二間(約五六〇米)、東方を大手口とし、山日より數盤の石路通す。搦手口は西にありて野首に連る。故に濠二つを鑿りて内堀外堀といふ。南の富間に小堀ありて僅に一人を通過す。古へ野間坂への間道なりし。又北方の富間に二つの間道ありて大根占に通ふ。城内に本丸・西丸の址あり。城山のうち東北に清泉三箇所あり。西丸にも井戸ありて用水乏しからず。山上より望めば小根占は眼下に見ゆ。此外、海山を隔てて多くの郡邑を望望するにより國見の名を得たり。編院氏元祖清重より第七代清成までは富田城に在りしが清成に至りて富田に移る。文和元年十二月檢非御仲富田を攻むる事數日、或は大平の城戸口にて或は搦手の野首に襲ふと雖も城堅固にて拔く能はず。其後、清成治城を富田

に移し麾下の將をして富田を守らしむ。文祿の初め編院重盛、富田城の狭く且つ要害ならざるに依り富田に移らんと欲せしが吉利に移されて遂げざりしと。此城稀有の名城と稱す。慶長十五年島津義久富田に登り名城たるに感ず。寶曆元年島津重豪諸郡邑巡見の時登りしといふ。今に城東の野首に樓臺の跡存す。大手の道狭くして乘輿通はず、左右の岩を削り道を開く。(山田城)大字山本にあり。當城西南は淡水繞り、東は原野に連りて壑あり。北は深溪にて本丸・二丸・三之丸の址なほ存す。編院氏の支族山本某の居城なりしといふ。

コノ 小沼

赤城山の寄生火山長七郎山の火口湖。大沼に對して新く稱す。東西約二〇〇米、南北約三〇〇米、周圍約九〇〇米にして稍々四角形を成せる圓湖なり。東に長七郎山、西に小地蔵山ありて何れも火口壁をなす。而も其火口は一の寄生火山の爆裂火口にして一箇の圓風の如き底なり。周圍は急傾斜をなしてその麓は極めて緩やかに、其中に少し許りの水を湛ふ。其水、南方を突破して粕川の火口湖となる。下流は深く浸蝕され赤城山中第一の奇景、鏡子伽藍の絵を作る。大正五年の鍾湖に據れば、中央部は南北に通じて少しく淺く、前側に半圓形の湖底平原を作りたり。東平原及び西平原も略ぼ同一の深度にて最深點は僅に一五一六米なり。湖底は多く砂礫を敷き、

コノ—コノウ

コノ 木野村

廣島縣安藝國佐伯郡の南隅。北は小方村に、東は大竹町に、南及び西は木野川を隔てて山口縣玖珂郡の小瀬村に隣る。同郡三十五中三十四位にして、人口一方軒の稠度は七五二人、實に第四位の稠密さに位す。村内は丘陵性の山地にて平地なく、従つて農業に見るべきものなし。最近隣町大竹町及びその埋立地より南方岩國町にかけて人絹工業、その他の工業興りし爲、頗る人口の集中行はれ、この稠密を來したるものと思はる。産物の主なるものに紙・漆・清酒あり。また西海境を流れて瀬戸内海に注ぐ木野川よりは鮎をとる。

コノ 巨濃

〔巨濃(郡)〕因幡國(鳥取縣)の古郡名。

コノ 五能線

省線奥羽線の一部。奥羽本線横濱驛(秋田縣山本郡横村)より分れて能代・深浦・五所川原等秋田・青森兩縣日本海岸の諸驛を経て青森縣南津輕郡光田寺村の川部驛に至る。全長一四七・二軒。五所川原驛(青森縣北津輕郡五所川原町)に於て私線津輕電鐵に接續す。

コノウラ 木浦村

新潟縣越後國西頸城郡の東南部。能生町の西。北は日本海に臨み、西は木浦村、南は上早川村、東は能生谷村に接す。妙高火山群の餘脈

コノウラ 金浦町

秋田縣羽後國由利郡の西海岸。東は小出・院内兩村、南は上野村・象潟町、北は平深町に隣接し、西は日本海に面す。海岸一帯は砂丘多き一灣奥に金浦町の發達を見る。海岸の岩石を圍みて發達せる故、北の平深町、南の象潟町とは壑落構造に大なる相違を見る。町の東方地域には田野の中に岩石累累として重り、その間道多し。國道は本町を東北に通ず、即ち省線津輕本線當町の東端を通りし金浦驛(大正十一年設置)を置き、金浦港と相寄り物資の運搬に多大の便宜を興へつつあり。米産多しその質の優良なるを以て著はれ、遠く東京・大阪・神戸等に販路を擴げつつあり。魚産多く、特に秋の鱒・冬の鮎の漁獲大にして、秋田市・東京方面への出荷多し。近年竹輪の製造行はれつつあり。なほ池

コノエーコノト

沼を利用しての養殖盛に行はれ秋田市への出荷多し。石村の産亦多く縣内に販路を求めつあり。金浦町は元和九年より仁賀氏の封土にて、寛永八年より土地となり酒井氏の領となる。同十七年生駒氏の領し、六郷氏之に代る。廢藩置縣に及びて本莊縣に編入せられ明治四年十一月秋田縣の管轄となる。古昔は木浦村と稱し慶長七年金浦村に改む。明治九年改組の際赤石村を合し、同廿二年町村制實施に際し金浦・大竹・前川・黒川・飛の五箇村を合して金浦村となり、同廿五年金浦町と改稱す。名所に勢五公園あり。櫻樹多く、近く鳥海の雲峰を仰ぎ、遠く飛鳥を眺む形勝の地を占む。花時訪客多く榮園と化す。また白瀬南極探検隊長の碑ありて同隊長の大抱負を永遠に後代に示すを見る。本町一帯は気温比較的高きため無花果を多産し縣内外にその需要多く、今後注意を要する産業の一なり。飛鳥遊覧の便を有す。本町より前記白瀬南極探検隊長を出す。同氏は南方經營の大抱負の念に燃え南極探検に向ひし、種々困難に遭遇し十二分の成果を収め得ざりしは遺憾なり。當町の發展には前町長北能喜市郎氏の獻身的努力に負ふ處大なり。町民銅像を建設してその徳を敬慕しつつあり。(金浦港)昔は北日本に於ける良港にて港口に山王嶋・狐島等あり。海内水深く、從つて船舶の出入甚だ便なりき。爲に船舶輻輳、股賑を極めたりし

コノエ

も文化年中の象潟大地震以後、地盤隆起し今に僅に當時の備を存する程度なり。文化五年藩藩主の助成を得て護岸石堤を築き、北岸に船曳場を設け又船柱を建てて漁船商船の出入に便す。明治十二年以來修築の出願をなせるも測量のみに止り實行に至らず。依りて地元負擔を出し用を圓りつつあり。然るに富港の北に平澤港、南に象潟港ありて三者競争となり解決の見込殆どなきため、町有力者の指導により、自力修築及び地方振興土木事業補助を受け、數次の修築をなしその完成を見ることとなり。その經費は昭和四年度一五二〇六、昭和六年度一八、九五、昭和七年度三三三四四二八、昭和八年度三五〇六三三五、昭和九年三六六〇〇〇、合計一三九〇〇〇〇に上り、之を船渠工事・運河工事・防波堤工事・運河架橋工事等に支出せり。本港は主として漁港としてその重要性を有せり。殊に近時發動船隻の使用増大せしため燃料供給の便となり又その漁獲物の取扱地・市場として利用せらる。殊に平澤・象潟二港は砂濱の漁港なるため本港の如き岩石海岸の漁港に比すれば一段の遜色あるを免れず。斯の如き事情が本港の特に重要視せらるる理由なり。漁期には漁船網船し港内爲に賑ひ、その發達運搬のため鐵道運送業者意外の多忙を極めつつある状態にて、秋田市は勿論東京市・前橋

コノエ 近衛大路

方面に移出せらるるもの甚だ多し。米穀及び農工業品の海上運送もやや盛大に行はれつつあり。港に近く之等物資輸送の取扱店及び倉庫多し。コノエ 近衛大路 平安京の東西に通ずる大路の一。廣さ十丈、鷹司小路と勘解由小路(共に廣さ四丈)との間にあり。大内裏によりて中斷され、東は大内裏の陽明門に面するを以て陽明門大路ともいふ。西は同じく大内裏の股宮門に面す。凡そ今の京都市上京區の出水通の邊に當る。近衛家の邸はもと近衛大路の陽明門大路に面せしを以て家號とす。同家の御苑内の地に移れるは天正年中の事とす。

コノクニ 許乃國

山城國宇治の本名といふ。こは本にして、大字に木橋のふるより考ふれば、許乃と樹木の繁茂せる故の名ならむ。山城風土記「謂宇治者輕島豐明宮御宇天皇之子宇治若郎子、應仁朝原日新宮以爲宮家、因御名、號宇治、二本名曰許乃國、矣」。コノシヨ 五莊村 兵部縣但馬國城崎郡の中部にあり。城崎温泉の南方一〇軒。北は中竹野村・内川村、東は田島野村・豐岡町、南は國府村・八代村、奈佐村、東は奥野村に隣接す。大體、中國山地に續く山地に臨み、白山火山脈走る。東部には矢次山(五六八米)あり。關山川の左岸に位し、その支流奈佐川は西南より東北に向つて流れ、北境に於て

コノト 小能登呂

八戸市の西方二〇軒。東方は川内村、西は倉石村、南方は淺田村、豊崎村に接し、北は上北郡四和村及び、六戸村と界す。奥羽山脈の東斜面の臺地にして、五戸川の流域は東西に狭長なる平地をなし、川の南部は丘陵發達して天満・愛宕館等の險阻多く、北端部を除けば全市街略ど坂路をなせり。五戸川流域は水田として利用され、米の産額多し。火いで馬・牛、豚の畜産並に林産・工業等あり。大正十一年、農事試験場分場を八戸より移轉して以來、農家の利便せられしこと少からず。國道は町の西部を東南より西北に向ひて斜に走り、北部八幡の丘陵を貫き、上北郡三本木町に達す。五戸町・上長苗代村大字尻内間には五戸電鐵の利便ありて、町内に地蔵宮・五戸(何れも昭和五年設置)の二驛を設く。建武二年九月の文書に三浦介平高繼勳功を以て鎌部内五戸を賜はりたること見え、又慶長年中木村氏この地に居りしと傳ふ。藩政時代には盛岡藩の管下に屬し、代官所を置かれしが、維新後に藩支廳により戸外十二箇村の統合行はれ、五戸はこの行政的中心をなせり。町村制實施後獨立して村制布かれ、大正四年十一月現在の町制施行せらる。〔明治天皇五戸行在所〕指定史蹟。字野月の三浦傳七宅にあり。明治九年七月十一日、行在所として御一泊、明治十八年四月二十五日行在所として御駐蹕あらせられし處。

コノハ 木葉

る大なる三角洲平野にして半圓形を構きて海中に突出す。表面には多くの潰堤列の地形發達し、また湿地の列狀配列を認む。この沖積地は最も重要な農耕地にして、排水路を縱横に構築し、蕎麥・馬鈴薯等の産多し。海岸一帯の砂丘は風光よく、夏季は高山植物開花して四方方面よりヒョウニツク等を試みる者多し。【小能登呂島】 樺太眞岡支廳にある島。もとノトロ岬といふ。眞岡の北約三〇軒にあり。小能登呂村に屬す。能登呂川、こにて海に注ぐ。【木葉里】 越中國(富山縣)の歌枕。東端波部にありといふも今その所在詳かならず。萬代和歌集「源頼家越中守になりて下りける時かの國の名所を題にて歌合しけるに木葉都を、ふきくなる風の香こそさびしけれこのはのさとの秋の夕ぐれ」【木葉道】 近江國(滋賀縣)の古地名。今の野洲郡遠野村大字木濱に當る。この地は眞國の頃、六角家の重臣進藤氏の邑にして、永祿年中、進藤山城守實盛とあるは六角家の大将なり。中世遠野庄と稱せり。また歌枕としても知らる。爲尹千首「山がせば及ばぬ方のささら波に木の葉の浦の名を散らすらむ」【木葉村】 熊本縣肥後國玉名郡の東部。菊池川の流域を占め、熊本市の西北約一六軒。高瀬町の東約四軒。西北は梅林村に隣り、西南は八喜村、南は山北村に接

コノハナ 此花

し、東は鹿本郡山内村・原村と界す。北境に三八九米の國見山、西部に二八六米の木葉山ありて南部及び東部に傾斜し、東境に一五〇米乃至二五〇米程度の丘陵ありて、其間、中央東偏に南方へ開く谷を造り、南部には沖積低地あり、南境近く菊池川支流西流して西方約四軒にて南方へ流るる本流と合す。低地には耕地拓け肥後米を産す。縣道は西方高瀬町より富村南部低地を東に抜け東方植木町にて鹿見島街道に連絡す。省廳鹿見島線この南部を東西に走り、木葉里(明治廿四年設置)あり。木葉山に古城址あり。天正十六年加藤清正入國して後、小森田將監これに據る。清正自ら進みてこれを攻略し將監を斬る。明治十年西南の役に乃木少佐、植木に戦ひしが利あらず、二月廿二日退きて此地に至る。然るに薩軍追撃頗る急にして少佐奮戦せしがまた利あらずして退く。爾來薩軍の占領するところとなりしが、三月三日官軍第一・第二の兩旅團を以て進み、木葉を撃つや薩軍支ふる能はずして退く。官軍本營を變に追め、尋で田原の隘塞を抜けり。また此地に郷土玩具木葉猿の名産あり。形態粗笨、色調原始的にして雅致あるを以て好事家に愛玩せらる。また木葉猿を蔵すれば盜賊にかかる惧なしと言ひ傳ふ。コノハナ 此花 大阪市十五區の一。安治川北岸の地域。東より南にかけて北區・西區・港區、北を西淀川區と界

コノハナカジマ 小信中島

し、西方は大阪灣に面す。面積一〇・九八軒、海拔二五米以下の低平なる沖積地にて、特に海岸の部分に人口の干拓地なり。この地域は明治三十年西成郡より市域に編入されし部分にて、初めは西成に屬せしが、大正十四年市域擴大され十三區となるに及び、これより分離して新たに此花區となる。小部分は住宅區と未指定地あるのみにて、大部分は工業地に指定さる。區内には大阪驛より来る西成線海岸まで走り、福島・野田・西九條・安治川口及び櫻島の五驛あり。安治川・正蓮寺川並に多數の細割と共に運輸の便極めてよく、職工一萬以上を有する日本紡績・東洋紡績・汽車製造所・住友伸銅所・住友電線・住友鋸鋼所・大阪鐵工所等の大工場の外、特に野田・福島方面には小規模なれど極めて多數の工場備比し墨煙寮を覆ふ。區名は古今集序「藤波津に咲くやこの花をこもり今を春べと咲くやこの花 王仁」の歌に因むといふ。されどこの歌の「この花」は何の木の花なるか未詳。一に梅と櫻とも云ひ、一般に諸木の花とする説あり。コノハナカジマ 小信中島 愛知縣中島郡にありし村。明治三十九年に三條村と共に廢せられ、その區域と大徳村の内、東五條・西五條・北今・富田の四大字を以て起町を置く。コノハ 五戸 青森縣陸奥國三戸郡の北部。

コノト

コノト 小能登呂 樺太眞岡支廳野田郡の南

コノトーコノハ

【五戸川】 青森縣三戸郡にある川。郡の西北部戸来村に發する戸来嶽(一一五九米)の東斜面に發し、諸水を集めて東北に流れ、五戸町を過ぎ市川村の中部にて海に注ぐ。後程約四五軒。

【五戸鐵道】 私設鐵道。青森縣東部三戸郡にあり。上長苗村にある東北本線尻内驛より西方の五戸町に通ず。全長一・二四軒。昭和五年全通。軌間一・〇六七米。省線と連帯運輸。

【コノミヤ】 五ノ宮岳 奥羽山脈の一峯。十和田湖の南方約三四軒。秋田縣鹿角郡宮川村に時ち、標高一一五米。東方近く岩手縣二戸郡田山村との境界線南に走る。山體石英質面岩より成る。

【コバ】 古婆 武蔵國(神奈川縣)の歌枕。その地種樹郡橋村(今は川崎市に編入さる)の字なるべし。萬葉・一四「たちばなの古婆のはなりがおもふなむ心うつくし」であらばいかな。

【コバ】 古場 愛知縣知多郡にありし村。明治三十九年、樽水村・西阿野村・海屋村とともに廢せられ、新に枳豆志村を置き、同四十四年枳豆志村は西浦村と改稱せり。

【コハク】 五泊 播磨の攝津(今の室津)・津泊(加古川口)の地か。・魚住泊(明石郡西島村の地)・攝津の大輪田泊(神戸府近郊の地)・河尻泊(淡河尻の地)の五港の稱。各泊は一日航程の距離にあり。源武天皇の時、曾行基が畿内より山陽・南

海・西海三道に通ずる航海の便を計りて開きしもの。

【コバケイン】 古幕院 朝鮮總督鐵道局湖南本線の一驛(大正二年設置)。朝鮮全羅南道羅州郡多侍面にあり。

【コハタ】 小幡 近江國(滋賀縣)の古地名。和名抄に神崎郡小幡郷あり。その地は今の神崎郡北五箇荘村・南五箇荘村の邊に當ると云ふも詳かならず。

【コハタ】 木幡 【木幡山】 阿武隈山脈に屬する一峯。福島縣伊達郡富田村・大綱木村と安達郡木幡村の境界に跨る。標高六六六米。山體片麻岩より構成せらる。

【木幡村】 福島縣岩代國安達郡の北部。二本松町の東北約六・五軒。東南は針道村、西南は太田村、東北は伊達郡富田村、北は大久保村・飯野村にそれぞれ接す。東南端に木幡山(六六六米)聳え、山脚西方に延びて村内山地をなし、阿武隈川の一小支、木幡山の西南斜面に發して西北に流る。未雨を産する外木材・薪草あり。街道は中部大字内小幡より南北及び西に通ずるも、船路ありて交通便ならず。本村の大字外木幡の栗山館は、大内備前定綱の居城にて天正十六年伊達政宗によりて攻め落さる。また大字内木幡の熊館も大内備前定綱の居城にして、天正十三年伊達政宗のために落城せり。村内に縣社隠津島神社・治陸寺あり。(隠津島神社)大字内木幡に鎮座。縣社。祭神、瀧津鳥

命・田心祭命・瀧津祭命。神護景雲三年、安積大國造大友直繼足助の勸誘と傳へ、その三男安部直家をして奉仕せしむと云ふ。延喜式の安積郡三座の一。永承六年源頼義は勅を受けて安部父子を河野の嶺に攻むるや、時に風雪甚だしく糧食また盡き人馬殆んど凍死せんとす。頼義父子僅に七騎にて此地に逃れ來り、一夕靈夢に感じ戦徒を斬り、幾許もなく賊を追ひて山上に至り戦はずして勝つ。蓋し神靈の加護に依り瀧山の樹木皆白幡に化せし故なり。亂平ぎて義家この地に社殿を造營し更に建拜し以て報賽す。のち京師に還り具さに之を奏聞せしかば、勅して山を木幡山と稱せらる。文明十四年領主大内宗政は社殿を改築せしが、天正十三年の兵亂に勸額のみを残して灰燼に歸す。諸生奉行の合津を領するとき移杉數千株を獻植し、寛永十四年加藤嘉明就封のとき山守を設け、同十九年丹羽光重の二本松の城主となるに及び當社を祈願所と定め、東安達に總領守とす。明暦元年九月社殿・堂塔を改築し、社額五十石の寄進あり。寛政十二年七月、十一箇年を経て本殿・拜殿の工成りて二十八日遷座す。即ち現在の社殿にして悉く城主丹羽氏の經營に係る。大同年間以來兩郡の社たりしし、維新の際に神財天の號を分離し、隠津島神社の舊稱に復す。例祭、四月二十五日。(治陸寺)天台宗。創建年次不詳。元慶五年天台別院となる。永承六年安倍

頼良謀叛し、伊豫守頼義追伐のため東征の陣り當寺に祈誓せしに、瀧山の樹木と現せしに依り頼良謀を潰して降降す。依りて治陸の號を稱ふ。寶治年中上野國世良田長樂寺、葉上僧正榮西に此寺の靈帶を命ぜらるるに依りて今に長樂寺の末寺なりといふ。昔は寺内に辨財天社あり、寺家・社家共に之に奉仕す。近世は國主の祈願所にして寺領百石を有せり。三層塔は延喜元年の修補に係る。

【木幡村】 福島縣岩代國那賀郡の西南部。喜多方町の西方約七軒。東北は相川村・早稻谷村・一ノ木村、東は小川村、西南は山郷村・山郷村、西は奥川村にそれぞれ隣接す。北境に三國岳山塊の峰鳥屋山(九六五米)・大平山(七五三米)・南境に鳥屋山(五六三米)聳え、村内概ね山地をなし、阿賀野川の一小支宮古川は鳥屋山の南斜面に發して中部を東南に流れ、東境を南流する小川を合して阿賀野川に入る。水田は河川沿岸の狭き低地にあり。山地よりは木材・薪炭を出す。街道は宮古川に沿うて通ずるも交通便ならず。この村は宮古・上林・堂山・舟引・中反と合して成れるものにて、近世は山三郷の一なる水竹組に屬し戊辰の役に戦風の地となりし所。いま山郷村・小川村・山郷村と共に組合町村をなし、役場を山郷村に置く。

【木幡山】 京都伏見區、嵯山の南東邊の高地を云ふ。京都府宇治郡宇治村木幡に

はた川にたがひしことばそなき名すがむつせしなし。夫木・二四「五月雨にいかにかもせむこはた川からより人のわたるせもなし。行家」

【コバタケ】 小島村 廣島縣備後國鞆郡の南部。北は鞆町に、東は來見村に、南は龜石・常光二村に、西北は阿下村に界す。中山山地の開析をうけし海抜五〇〇米前後の臺地面上にあるが、山地は緩傾斜をなし森林にて覆はる。西南より東北にかけて谷より小田川の水源地をなす。谷は淺く廣く開けて耕地となり未作・麥作を行ふ。南方福山市と北方油木町を連ねる街道は村の中央を西南方より東北方に過ぎる。此地は古く和名抄神石郡神石郷の内に屬す。もと小畑村に作りしが、明治三十三年小島村と改む。いま阿下村・上村・常光村・龜石村と共に組合村を成す。

【コバナ】 小幡 栃木縣那須郡荒川村の大字。省線鳥山線の小幡驛(昭和九年設置)を置く。

【コハマ】 小濱 【小濱町】 京都府竹野郡 【小濱村】 兵庫縣攝津國川邊郡の西南部。西宮市の北方一〇軒。北は西谷村に、東は長尾村に、南は武庫郡貝元村に、西は有馬郡龍瀨村に接す。丹波高原の南部長尾山の南斜面にあたり、この山麓には六甲山塊の北側を走る斷層線が通過す。武庫川は西北より流れ武庫平野を作り南流

する。此處にも池多く澗池灌漑が行はる。又山麓には桃・梨・葡萄等の果樹栽培が見らる。川面は寶塚の地名に變り、寶塚と云へば少女歌劇を思ひ出す代名詞となれり。いま大・中・小の三劇場や寶塚音楽歌劇學校あり、附近には寶塚新温泉・動物園・植物園・運動場等あり。又ホテル・ゴルフリンクス・ダンスホール等の社交設備も整ひ阪神地方の休養地帯をなす。山麓には有馬街道が通じ、交通機關には阪神急行電鐵今津線の終點寶塚驛があり、又東よりは福知山線が通じ寶塚驛(明治三十年設置)あり。阪神工業地帯に接し、交通機關が發達し益々寶塚の發展を促す。本村は和名抄の河邊郡山本郷の中にありて、大字米谷には延喜式河邊寶布神社ありて、大字米谷には延喜式河邊寶布神社ありて、いま寶布禰明神となし、米谷は寶布谷の轉訛なり、加茂別雷神神社の文書には「壽永三年攝津國米谷莊」とあり、又同社社記にも米谷莊の文字見ゆ。小濱町の南を安倉莊と云ひいまはその大字となり、日本書紀白雉元年の條に「難波吉士胡床」とあるは此地ならん。(寶塚新温泉)寶塚驛の東方近くにあり。大浴場の外に大中小の三劇場、食堂・納涼臺・動物園・兒童遊園・圖書館・植物園等を包括する一大遊園地にて阪急電鐵會社の經營。浴場は大理石造の共同大浴槽の外、家族風呂・土耳其風呂等を設備し、本館内には美粧室・理髮室・玉突屋・麻雀室・ピンポン室あり。有名な少女歌劇を上演する

頼良謀叛し、伊豫守頼義追伐のため東征の陣り當寺に祈誓せしに、瀧山の樹木と現せしに依り頼良謀を潰して降降す。依りて治陸の號を稱ふ。寶治年中上野國世良田長樂寺、葉上僧正榮西に此寺の靈帶を命ぜらるるに依りて今に長樂寺の末寺なりといふ。昔は寺内に辨財天社あり、寺家・社家共に之に奉仕す。近世は國主の祈願所にして寺領百石を有せり。三層塔は延喜元年の修補に係る。

大劇場は、建坪二七〇アール、高さ二七米の鐵筋コンクリート大建築にて、舞臺間口二七米、廻り舞臺の直徑二五米、観覧席三階には四千人の觀客収容され、ニューヨークのメトロポリタンに次ぐ世界有数の大劇場なり、此の大劇場にて毎日少女歌劇を公演す。この外木造二階造、舞臺間口二〇米、廻り舞臺直徑一六米、収容人員千五百人の中劇場、子供劇を公演する小劇場あり。動物園には象・獅子・虎・豹・羆等の猛獸飼養、カンガルー・孔雀・火喰鳥等各種の動物飼育され、植物園には熱帯植物の繁茂する大觀賞温室のほか四箇の栽培温室があり、草木の品種豊富なり。植物園の西南隅には文藝圖書館あり、各種の圖書を蔵し無料閱覽に供す。(清澄寺(清澄社))寶塚驛の東北二軒、大字米谷にあり。古義眞言宗。厄除開運の信仰により參詣者多し。寛平年間宇多天皇の勅建にて境内は四面山に圍まれたる幽邃閑寂の仙境なり。本堂には本尊木造大日坐像を安置し國寶たり。金剛界の大日如来にて鎌倉時代の撰古作ならん。清澄神の祠殿は本堂の西南にあたり東面して建ち、入母屋造の拜殿及本殿備はり、本尊大勝金剛兜摩王を祀る。毎月二十八日は縁日にて、中にも正月二十七・八日の初冠神祭、十二月二十七・八日の納冠神祭、二月の星祭、四月の饗饗祭には參詣者雲集し鎌倉を飾り、同寺の寶物とせる一千手觀音像一幅は絹本着色、構圖の

【コハタ】 京都府宇治郡宇治村木幡に

【木幡川】 山城國(京都府)の歌枕。今の京都市山科に發源し木幡池に至り宇治川に注ぐ川なるべし。一に宇治川の宇治村の邊を稱すともいへり。拾遺・一二「こ

頼良謀叛し、伊豫守頼義追伐のため東征の陣り當寺に祈誓せしに、瀧山の樹木と現せしに依り頼良謀を潰して降降す。依りて治陸の號を稱ふ。寶治年中上野國世良田長樂寺、葉上僧正榮西に此寺の靈帶を命ぜらるるに依りて今に長樂寺の末寺なりといふ。昔は寺内に辨財天社あり、寺家・社家共に之に奉仕す。近世は國主の祈願所にして寺領百石を有せり。三層塔は延喜元年の修補に係る。

【木幡村】 福島縣岩代國那賀郡の西南部。喜多方町の西方約七軒。東北は相川村・早稻谷村・一ノ木村、東は小川村、西南は山郷村・山郷村、西は奥川村にそれぞれ隣接す。北境に三國岳山塊の峰鳥屋山(九六五米)・大平山(七五三米)・南境に鳥屋山(五六三米)聳え、村内概ね山地をなし、阿賀野川の一小支宮古川は鳥屋山の南斜面に發して中部を東南に流れ、東境を南流する小川を合して阿賀野川に入る。水田は河川沿岸の狭き低地にあり。山地よりは木材・薪炭を出す。街道は宮古川に沿うて通ずるも交通便ならず。この村は宮古・上林・堂山・舟引・中反と合して成れるものにて、近世は山三郷の一なる水竹組に屬し戊辰の役に戦風の地となりし所。いま山郷村・小川村・山郷村と共に組合町村をなし、役場を山郷村に置く。

【木幡山】 京都伏見區、嵯山の南東邊の高地を云ふ。京都府宇治郡宇治村木幡に

はた川にたがひしことばそなき名すがむつせしなし。夫木・二四「五月雨にいかにかもせむこはた川からより人のわたるせもなし。行家」

【コバタケ】 小島村 廣島縣備後國鞆郡の南部。北は鞆町に、東は來見村に、南は龜石・常光二村に、西北は阿下村に界す。中山山地の開析をうけし海抜五〇〇米前後の臺地面上にあるが、山地は緩傾斜をなし森林にて覆はる。西南より東北にかけて谷より小田川の水源地をなす。谷は淺く廣く開けて耕地となり未作・麥作を行ふ。南方福山市と北方油木町を連ねる街道は村の中央を西南方より東北方に過ぎる。此地は古く和名抄神石郡神石郷の内に屬す。もと小畑村に作りしが、明治三十三年小島村と改む。いま阿下村・上村・常光村・龜石村と共に組合村を成す。

【コバナ】 小幡 栃木縣那須郡荒川村の大字。省線鳥山線の小幡驛(昭和九年設置)を置く。

【コハマ】 小濱 【小濱町】 京都府竹野郡 【小濱村】 兵庫縣攝津國川邊郡の西南部。西宮市の北方一〇軒。北は西谷村に、東は長尾村に、南は武庫郡貝元村に、西は有馬郡龍瀨村に接す。丹波高原の南部長尾山の南斜面にあたり、この山麓には六甲山塊の北側を走る斷層線が通過す。武庫川は西北より流れ武庫平野を作り南流

する。此處にも池多く澗池灌漑が行はる。又山麓には桃・梨・葡萄等の果樹栽培が見らる。川面は寶塚の地名に變り、寶塚と云へば少女歌劇を思ひ出す代名詞となれり。いま大・中・小の三劇場や寶塚音楽歌劇學校あり、附近には寶塚新温泉・動物園・植物園・運動場等あり。又ホテル・ゴルフリンクス・ダンスホール等の社交設備も整ひ阪神地方の休養地帯をなす。山麓には有馬街道が通じ、交通機關には阪神急行電鐵今津線の終點寶塚驛があり、又東よりは福知山線が通じ寶塚驛(明治三十年設置)あり。阪神工業地帯に接し、交通機關が發達し益々寶塚の發展を促す。本村は和名抄の河邊郡山本郷の中にありて、大字米谷には延喜式河邊寶布神社ありて、大字米谷には延喜式河邊寶布神社ありて、いま寶布禰明神となし、米谷は寶布谷の轉訛なり、加茂別雷神神社の文書には「壽永三年攝津國米谷莊」とあり、又同社社記にも米谷莊の文字見ゆ。小濱町の南を安倉莊と云ひいまはその大字となり、日本書紀白雉元年の條に「難波吉士胡床」とあるは此地ならん。(寶塚新温泉)寶塚驛の東方近くにあり。大浴場の外に大中小の三劇場、食堂・納涼臺・動物園・兒童遊園・圖書館・植物園等を包括する一大遊園地にて阪急電鐵會社の經營。浴場は大理石造の共同大浴槽の外、家族風呂・土耳其風呂等を設備し、本館内には美粧室・理髮室・玉突屋・麻雀室・ピンポン室あり。有名な少女歌劇を上演する

頼良謀叛し、伊豫守頼義追伐のため東征の陣り當寺に祈誓せしに、瀧山の樹木と現せしに依り頼良謀を潰して降降す。依りて治陸の號を稱ふ。寶治年中上野國世良田長樂寺、葉上僧正榮西に此寺の靈帶を命ぜらるるに依りて今に長樂寺の末寺なりといふ。昔は寺内に辨財天社あり、寺家・社家共に之に奉仕す。近世は國主の祈願所にして寺領百石を有せり。三層塔は延喜元年の修補に係る。

大劇場は、建坪二七〇アール、高さ二七米の鐵筋コンクリート大建築にて、舞臺間口二七米、廻り舞臺の直徑二五米、観覧席三階には四千人の觀客収容され、ニューヨークのメトロポリタンに次ぐ世界有数の大劇場なり、此の大劇場にて毎日少女歌劇を公演す。この外木造二階造、舞臺間口二〇米、廻り舞臺直徑一六米、収容人員千五百人の中劇場、子供劇を公演する小劇場あり。動物園には象・獅子・虎・豹・羆等の猛獸飼養、カンガルー・孔雀・火喰鳥等各種の動物飼育され、植物園には熱帯植物の繁茂する大觀賞温室のほか四箇の栽培温室があり、草木の品種豊富なり。植物園の西南隅には文藝圖書館あり、各種の圖書を蔵し無料閱覽に供す。(清澄寺(清澄社))寶塚驛の東北二軒、大字米谷にあり。古義眞言宗。厄除開運の信仰により參詣者多し。寛平年間宇多天皇の勅建にて境内は四面山に圍まれたる幽邃閑寂の仙境なり。本堂には本尊木造大日坐像を安置し國寶たり。金剛界の大日如来にて鎌倉時代の撰古作ならん。清澄神の祠殿は本堂の西南にあたり東面して建ち、入母屋造の拜殿及本殿備はり、本尊大勝金剛兜摩王を祀る。毎月二十八日は縁日にて、中にも正月二十七・八日の初冠神祭、十二月二十七・八日の納冠神祭、二月の星祭、四月の饗饗祭には參詣者雲集し鎌倉を飾り、同寺の寶物とせる一千手觀音像一幅は絹本着色、構圖の

【コハタ】 京都府宇治郡宇治村木幡に

はた川にたがひしことばそなき名すがむつせしなし。夫木・二四「五月雨にいかにかもせむこはた川からより人のわたるせもなし。行家」

【コバタケ】 小島村 廣島縣備後國鞆郡の南部。北は鞆町に、東は來見村に、南は龜石・常光二村に、西北は阿下村に界す。中山山地の開析をうけし海抜五〇〇米前後の臺地面上にあるが、山地は緩傾斜をなし森林にて覆はる。西南より東北にかけて谷より小田川の水源地をなす。谷は淺く廣く開けて耕地となり未作・麥作を行ふ。南方福山市と北方油木町を連ねる街道は村の中央を西南方より東北方に過ぎる。此地は古く和名抄神石郡神石郷の内に屬す。もと小畑村に作りしが、明治三十三年小島村と改む。いま阿下村・上村・常光村・龜石村と共に組合村を成す。

【コバナ】 小幡 栃木縣那須郡荒川村の大字。省線鳥山線の小幡驛(昭和九年設置)を置く。

【コハマ】 小濱 【小濱町】 京都府竹野郡 【小濱村】 兵庫縣攝津國川邊郡の西南部。西宮市の北方一〇軒。北は西谷村に、東は長尾村に、南は武庫郡貝元村に、西は有馬郡龍瀨村に接す。丹波高原の南部長尾山の南斜面にあたり、この山麓には六甲山塊の北側を走る斷層線が通過す。武庫川は西北より流れ武庫平野を作り南流

する。此處にも池多く澗池灌漑が行はる。又山麓には桃・梨・葡萄等の果樹栽培が見らる。川面は寶塚の地名に變り、寶塚と云へば少女歌劇を思ひ出す代名詞となれり。いま大・中・小の三劇場や寶塚音楽歌劇學校あり、附近には寶塚新温泉・動物園・植物園・運動場等あり。又ホテル・ゴルフリンクス・ダンスホール等の社交設備も整ひ阪神地方の休養地帯をなす。山麓には有馬街道が通じ、交通機關には阪神急行電鐵今津線の終點寶塚驛があり、又東よりは福知山線が通じ寶塚驛(明治三十年設置)あり。阪神工業地帯に接し、交通機關が發達し益々寶塚の發展を促す。本村は和名抄の河邊郡山本郷の中にありて、大字米谷には延喜式河邊寶布神社ありて、大字米谷には延喜式河邊寶布神社ありて、いま寶布禰明神となし、米谷は寶布谷の轉訛なり、加茂別雷神神社の文書には「壽永三年攝津國米谷莊」とあり、又同社社記にも米谷莊の文字見ゆ。小濱町の南を安倉莊と云ひいまはその大字となり、日本書紀白雉元年の條に「難波吉士胡床」とあるは此地ならん。(寶塚新温泉)寶塚驛の東方近くにあり。大浴場の外に大中小の三劇場、食堂・納涼臺・動物園・兒童遊園・圖書館・植物園等を包括する一大遊園地にて阪急電鐵會社の經營。浴場は大理石造の共同大浴槽の外、家族風呂・土耳其風呂等を設備し、本館内には美粧室・理髮室・玉突屋・麻雀室・ピンポン室あり。有名な少女歌劇を上演する

秀らしき間相内二十六面千手の觀音の坐像にて下方左右にそれぞれ吉祥天及び愛欲仙人を畫き、岩石の間に飛瀑を添ふ。鎌倉中期の作ならん。(金持寺) 眞宗本願寺派の出雲山と號し當派別格別院なり。

越前眞宗出雲派本山金持寺第五世善華の長子善秀の開創なり。明治十一年、越前金持寺出雲派を公稱して別派獨立せしが、本寺は依然として本願寺派に屬し、同四十二年別格別院となる。

コハマ 粉濱

大阪府西成郡にありし村。大正十四年大阪市西成區に入る。古くは粉洲といふ。和歌の名所。萬葉・六・住吉の粉濱の四時華開く見す陸りにのみや戀わたりなむ

コバヤシ 小林

【小林】 郡馬縣多野郡(郡馬縣) 千葉縣印旛郡木下町の大字。省線成田線の一驛(明治三十四年設置)あり。【小林村】 新潟縣越後國中蒲原郡の西部。白根町の南に接す。西は中ノ川を境に西蒲原郡大原村、南は天宮根・庄瀬兩村、東は庄瀬及白井村に界す。信濃川と中ノ川とに挟まれたる沖積地にあり、水田多く、村民の生業は農耕なり。村の北部を小須戸町より白根町に至る縣道、西部川沿に新潟市より長岡市に通ずる縣道通す。往古のことは以て微すべきものなし。いま下木山・上木山・鍋湯・和泉・浦梨・田中・平湯新田・万年・藏王・穂

箱・戸頭の十一大字よりなり下木山に役場を置く。

【小林】 奈良縣南葛城郡にありし村。大正四年本村外七ヶ村と合併して大正村を建つ。

コバヤシ 小林

【小林町】 宮崎縣日向國西諸縣郡の中部。霧島火山の東北麓を占め、面積二〇六・〇一方軒の大町なり。西南部は霧島火山東北斜面を占め、西南隅の韓國嶽(一七〇〇米)を始め獅子戸嶽(一四二〇米)、新嶽(一四二二米)、高千穂嶽(一五七四米)、矢岳(一一三二米)等國境に踞居し、少し北に夷守嶽(一三四四米)ありて火山地帯をなし、東北嶺は九州山地の南部山麓を占めて北隅に小白髮岳(一八三三米)、其南にマゴゴ岳(九八〇米)ありて六七七〇〇米の山地をなし中央部は海拔約二〇〇〇米の高原盆地をなす。この盆地は地味肥沃にて豊饒なる水田拓け小林米の名高く、又山地多ければ木材に富み製材も行はれ椎茸の特産もあり。霧島山麓には高麗牧場ありて霧島山麓軍馬補充隊出部と宮崎縣馬場所あり軍馬の育成地なり。町には又吉野櫻の名所もあり。縣道は中央盆地を西北より東南に通じ首邑にて沿ひて街村型をなし、又有韓吉郡線同じく盆地を西北より東南に走り小林町驛(大正元年設置)・西小林驛(昭和四年設置)の二驛あり。此地或は和名抄諸縣郡奉野郷の内に屬せしものか。而して古の夷守の地なり。夷守は延喜式にも見えたる縣名

とす。また文政年中までの前記に三山と

いへり、のち三山郷を改めて小林となすと。大正元年町制を布き郡役所の所在地たり。いま細野・十日町・五日町・堤・水鏡・東方・北方・西方・南方の九大

コハラ

山城なりしならん。創業の年月詳らかならざるも、北原氏・伊東氏これを領せし時三ツ山城と互に相拒して橋角の勢を張りし所と傳へらるるにより、その以前に既に成りしものと思惟せらる。地理纂考に三ツ山城を宇賀城とするは誤れり。【三ツ山城】 大字眞方にあり。二區に分かれ、西南なるを本丸と呼ぶ。東西八一米、南北五五米。東北なるを二ノ丸と呼ぶ。縱一六五米、横三二・四米にて謂ゆる大手口に當る。岩瀬川その三面を繞る。日向市に當る。岩瀬川その三面を繞る。くは北原氏の領地たりしか。永祿四年北原又太郎兼守の城に卒し、伊東義祐取りて之を領し、永長後守をして守らしむ。永祿十年十二月、島津勢この城に攻め來たる。城中力を盡して防戦し、筑後守及び弟美濃守は諸ノ丸に於て宗徒の兵と力を盡せ、登り來る薩兵を鎗鋒にかけ落す。島津勢は、大手口を島津右金五、水ノ手口を島津義弘・中務大輔うけたまはり、新すを加へ新すを加へ手痛く攻めしかども、此家勇に堪へ埋るる計りの殺傷を被り、攻めあぐみ遂に引退く。のち筑後守飯野川に戦死し、弟美濃守代りて此城に居住せしが、天正四年島津義弘に降りしにより、以後島津氏の有となれり。(大船岩) 大字東方にあり。大濠川の上流岩瀬川を隔て南北に位し、南にある陽石は浸蝕を免れたる一種の泥岩にて、高さ約七・三米、周圍一六米餘、北にある陰石

此時も神像遺なしと雖も用水の涸れしにより瀬戸尾より乾方十八町餘、山下霧島王子と唱ふる末社の邊りに遷座あり、享保元年九月二十六日山上また火を發して數日熄まず、神社寺院すべて焼亡す、然れども此度も神像遺なく坐しを守護して小林郷の舊なる同原と云ふ處の後宮に遷し奉りて同十四年に現在地に社殿を造營し、同年八月二十七日遷座す」と見ゆ。明治五年縣社に列し同七年に郷社夷守神社を當社に合祀し、同年八月當社を夷守神社の舊址に遷す。同十年三月二十一日、官幣大社霧島神社の攝社と定めらる。霧島神社は當社より八里二十町の西方にあり。境内地六千六百四十五坪にして東霧島の主峰なる矛峰の大部を占む。例祭、十一月十八日。(鶴餅田古戰場) 字西方にあり。古への眞幸街道のほとりに位す。元龜三年五月十日、島津勢と戦ひ飯野川の役、伊東氏の驍將にして日向第一の槍のつかひ手と聞えし楠木時丹後守が、島津義弘とわたり合ひ戦死せし地。この日丹後守は義弘を己が槍先に懸げんものと、髪を亂し袖印を捨てて薩軍に紛れ入り、鶴餅田にて之と出會ひ、只一槍と斬懸りしに、義弘の馬驚きて前膝を折りしため、惜しくも長蛇を逸し、已れば義弘方の土の手に墜れたり。義弘の兜には、丹後守の衝中てし槍の痕、その眞向にきばやかに残り、今に島津家に絶傳せらる。(野頸城) 大字東方に

は一の歐穴にて、周圍五四米なり。(御

コハラ 小原村

【コハラ 小原村】 滋賀縣近江國甲賀郡の南西部。信樂町の南に接し、南東は多羅尾村、西は朝宮村、南は京都府相樂郡に隣る。信樂高原の南縁をなし四〇〇米乃至五〇〇米の山岳連なり古生層より成り、中央部を南より北東へ大戸川の上流が貫流し其本支流の沿岸に聚落發達す。生業は農林業を主とし米・茶・薪炭を出し陶器・陶土・瓦の産亦尠ならず。古くより信樂郷の一部をなし近衛家領に次いで、地方の豪族多羅尾氏の所領となり江戸時代に於ても多羅尾氏幕府の代官たり。古蹟に大字小川宇西出なる大光寺、近衛家基公の墓、大字小川宇和田の山頂にある小川城址(鶴見氏築き後多羅尾氏の有となる)等あり。村名は村の大部落たる小川のほとり原を取りて小原村と命名せるもの。

コハラ 小原村

【コハラ 小原村】 福島縣安積郡にありし村。大正十三年郡山町と共に郡山市を建つ。

コハラ 小針村

【コハラ 小針村】 埼玉縣武蔵國北足立郡の北部。南は小室村、西は加納村、

コハラ 小原田

【コハラ 小原田】 福島縣安積郡にありし村。大正十三年郡山町と共に郡山市を建つ。

コハラ 小針村

【コハラ 小針村】 埼玉縣武蔵國北足立郡の北部。南は小室村、西は加納村、

コハラ 小原田

【コハラ 小原田】 福島縣安積郡にありし村。大正十三年郡山町と共に郡山市を建つ。

あり。西は同原に接し、瀨ノ瀬川その東南麓を繞る。城内二區に分かれ、東なるは本丸にて、縱四六・八米、横四三・二米、其西なるを西丸と云ふ。縱三〇・六米、横これに半ばす。日向記に依れば、永祿十一年頃はこの城伊東家の將米良筑後守の有たりと。元龜三年筑後守飯野川に戦死し、のち新納伊豆守城主となりしが、天正四年八月、島津氏の兵勢に壓迫せられ、支へ得ずして野尻戸崎に退きたりと傳ふ。(伊東墓) 大字眞方の上馬場の西隅にあり、一に伊東塚とも云ふ。元龜三年五月の木崎原に於ける伊東・島津の合戦に戦死せる伊東家の諸大將伊東加賀守・伊東又二郎・伊東新次郎・稻津又三郎・上別府宮内少輔・米良筑後守・米良喜右助・米良式部少輔・野村四郎左衛門の墳墓なり。文化年間に至るに及び、薩人市田義宣、この島津氏戦捷の地の割棘に埋もるるを惜しみ、同十四年、塚地の中央に石碑を建て、碑文に往時の戦のさまを記せるもの、今に現存す。(星合杉址) 大字眞方にあり。伊東塚を距る南六・六軒の田の中にある古き杉を云ふ。元龜三年五月伊東氏兵を飯野に出せし時、その下に於いて兵士を點檢せしと相傳ふるも、當時の杉は今既に枯れて、現存するは植栽せしもの。(宇賀城址) 大字眞方にあり。大手口西に向ひ、南西及び左右を山溪圍繞し、南一面のみ野に接する地形より按ずるに、そのかみは要害堅固の

山城なりしならん。創業の年月詳らかならざるも、北原氏・伊東氏これを領せし時三ツ山城と互に相拒して橋角の勢を張りし所と傳へらるるにより、その以前に既に成りしものと思惟せらる。地理纂考に三ツ山城を宇賀城とするは誤れり。【三ツ山城】 大字眞方にあり。二區に分かれ、西南なるを本丸と呼ぶ。東西八一米、南北五五米。東北なるを二ノ丸と呼ぶ。縱一六五米、横三二・四米にて謂ゆる大手口に當る。岩瀬川その三面を繞る。日向市に當る。岩瀬川その三面を繞る。くは北原氏の領地たりしか。永祿四年北原又太郎兼守の城に卒し、伊東義祐取りて之を領し、永長後守をして守らしむ。永祿十年十二月、島津勢この城に攻め來たる。城中力を盡して防戦し、筑後守及び弟美濃守は諸ノ丸に於て宗徒の兵と力を盡せ、登り來る薩兵を鎗鋒にかけ落す。島津勢は、大手口を島津右金五、水ノ手口を島津義弘・中務大輔うけたまはり、新すを加へ新すを加へ手痛く攻めしかども、此家勇に堪へ埋るる計りの殺傷を被り、攻めあぐみ遂に引退く。のち筑後守飯野川に戦死し、弟美濃守代りて此城に居住せしが、天正四年島津義弘に降りしにより、以後島津氏の有となれり。(大船岩) 大字東方にあり。大濠川の上流岩瀬川を隔て南北に位し、南にある陽石は浸蝕を免れたる一種の泥岩にて、高さ約七・三米、周圍一六米餘、北にある陰石

コハラ

【コハラ】 滋賀縣近江國甲賀郡の南西部。信樂町の南に接し、南東は多羅尾村、西は朝宮村、南は京都府相樂郡に隣る。信樂高原の南縁をなし四〇〇米乃至五〇〇米の山岳連なり古生層より成り、中央部を南より北東へ大戸川の上流が貫流し其本支流の沿岸に聚落發達す。生業は農林業を主とし米・茶・薪炭を出し陶器・陶土・瓦の産亦尠ならず。古くより信樂郷の一部をなし近衛家領に次いで、地方の豪族多羅尾氏の所領となり江戸時代に於ても多羅尾氏幕府の代官たり。古蹟に大字小川宇西出なる大光寺、近衛家基公の墓、大字小川宇和田の山頂にある小川城址(鶴見氏築き後多羅尾氏の有となる)等あり。村名は村の大部落たる小川のほとり原を取りて小原村と命名せるもの。

【コハラ 小原村】 滋賀縣近江國甲賀郡の南西部。信樂町の南に接し、南東は多羅尾村、西は朝宮村、南は京都府相樂郡に隣る。信樂高原の南縁をなし四〇〇米乃至五〇〇米の山岳連なり古生層より成り、中央部を南より北東へ大戸川の上流が貫流し其本支流の沿岸に聚落發達す。生業は農林業を主とし米・茶・薪炭を出し陶器・陶土・瓦の産亦尠ならず。古くより信樂郷の一部をなし近衛家領に次いで、地方の豪族多羅尾氏の所領となり江戸時代に於ても多羅尾氏幕府の代官たり。古蹟に大字小川宇西出なる大光寺、近衛家基公の墓、大字小川宇和田の山頂にある小川城址(鶴見氏築き後多羅尾氏の有となる)等あり。村名は村の大部落たる小川のほとり原を取りて小原村と命名せるもの。

【コハラ 小原村】 滋賀縣近江國甲賀郡の南西部。信樂町の南に接し、南東は多羅尾村、西は朝宮村、南は京都府相樂郡に隣る。信樂高原の南縁をなし四〇〇米乃至五〇〇米の山岳連なり古生層より成り、中央部を南より北東へ大戸川の上流が貫流し其本支流の沿岸に聚落發達す。生業は農林業を主とし米・茶・薪炭を出し陶器・陶土・瓦の産亦尠ならず。古くより信樂郷の一部をなし近衛家領に次いで、地方の豪族多羅尾氏の所領となり江戸時代に於ても多羅尾氏幕府の代官たり。古蹟に大字小川宇西出なる大光寺、近衛家基公の墓、大字小川宇和田の山頂にある小川城址(鶴見氏築き後多羅尾氏の有となる)等あり。村名は村の大部落たる小川のほとり原を取りて小原村と命名せるもの。

コハラ 小原村

【コハラ 小原村】 滋賀縣近江國甲賀郡の南西部。信樂町の南に接し、南東は多羅尾村、西は朝宮村、南は京都府相樂郡に隣る。信樂高原の南縁をなし四〇〇米乃至五〇〇米の山岳連なり古生層より成り、中央部を南より北東へ大戸川の上流が貫流し其本支流の沿岸に聚落發達す。生業は農林業を主とし米・茶・薪炭を出し陶器・陶土・瓦の産亦尠ならず。古くより信樂郷の一部をなし近衛家領に次いで、地方の豪族多羅尾氏の所領となり江戸時代に於ても多羅尾氏幕府の代官たり。古蹟に大字小川宇西出なる大光寺、近衛家基公の墓、大字小川宇和田の山頂にある小川城址(鶴見氏築き後多羅尾氏の有となる)等あり。村名は村の大部落たる小川のほとり原を取りて小原村と命名せるもの。

津留村と津久見町の境界にある山。標高約六〇〇米。山嶺狭く古生層より成る。

コバンチャヤ

木場茶屋 省線鹿島本線の一驛(大正三年設置)。鹿島島縣陸奥郡川内町にあり。

コヒ

己斐 廣島縣佐伯郡にありし町。明治四十年己斐村を己斐町と改む。昭和四年當町及び古田村・草津町を廢し其區域を廣島市に編入す。

コビ

古井町 岐阜縣美濃國加茂郡の南部。西は太田町に、南は木曾川を以て可見。今改町と爲す。東部には益田川(兼藤川)南流し、木曾川は東方より來り大字川合にて合流し南流を西走し、これより日本ラインの住居に入る。凡そ太田盆地の北部に位し昔には東嶺山地の低丘陵を以て南には木曾川の河成段丘の發達が見られ、段丘面には用水池による水田耕作行はれ桑園も多く米・麥・野菜を産し、また養蠶業も行はれ町には製絲場あり。地は飛騨に至る益田街道の入口にて交通上の要地にして高山線古井驛(大正十年設置)あり。町の南方神明堂附近には往昔の中山道通じ西太田宿に接し、この地より木曾川を渡り今改町に出づ。これ有名なる「太田の渡」なり。中山道中継所の一にして「木曾の棧橋、太田の渡、森水峠」がなくばよいと稱せられし程なり。今町には縣立加茂農林學校あり。和名抄賀茂郡日理郷はこの地にての上古井・下古井の兩村に分れ、下古井には青

コビ

巨備 上總國(千葉縣)の古地名。和名抄、武射郡に巨備郷あり、その地今詳かならず。山武郡大平村大字折戸の大徳宮の社傳にこの地なりといふも明かならず。上總町誌もこれに従ふ。

コヒ

虎尾 臺灣臺南州二市十郡の一。臺南州の北端に位し、北は海水溪を以て臺中州と境し、東南は虎尾溪・新虎尾溪を以て斗六・北港の二郡に接し、西は海に臨む。東西三一・四軒、南北二〇・七軒にして面積三五・〇四方里、人口十二萬九千六百四十。行政區劃は虎尾・西螺の二街と二崙・崙背・海口・土庫の四庄に分れる。東半は肥沃なる水田・畑地を有するも海岸に近き海口・崙背の二庄は砂丘點點として續き海岸は極めて淺淺にて、且つ土砂の埋積甚しき爲め、往時の港口として物貨の集散、漢人開拓の據地たりし故港・海口・五條港の各地も往昔の僻なし。河川は北流に流れる濁水溪及び郡の中央を貫流する新虎尾溪は、東端を迂回する虎尾溪と共に管内農産振興の水源と爲り

虎尾溪及新虎尾溪に開れ、東は斗南庄、西は土庫庄、北は西螺街に接す。面積凡そ六五・一一軒にして人口二萬一千八百八十五。行政區域は虎尾・崙背・埤內・過溪子・竹圍子・北港庄・牛埔子・蕭子・平和厝・應使・惠來厝・三合・大屯子の十三大字に分たる。土地概ね肥沃にして平垣なるも虎尾溪に沿ふ平和厝・崙背・新虎尾溪に臨む惠來厝・過溪子等に沙丘を有す。農産地五千四百九十甲は管内總面積の九割〇二に當り、米百萬一千八百四十四圓、甘蔗三十萬三千三百三十七圓、甘蔗十八萬五千五百圓、落花生二十萬三千五百七十三圓を始め果實を産す。工業は大日本製糖會社臺灣工場第一・第二工場は虎尾にあり百十八萬六千三百三十一擔、一千九百九千五百五十三圓その他磚瓦類・製糖類等の六萬圓より三萬圓程度を有す。商業は舊來土庫・斗南・西螺等の商人多く此地の農民を顧客とする關係上、その商販の程度は土庫に及ばざるが、虎尾の新街地たる弱點も次第に改良されんとす。交通は街内道路二里と大日本製糖社線による虎尾起點北港・西螺・斗南・海口・沙崙間の鐵道と、自動車便による土庫・北港・斗六・斗南・西螺等に建する途が有り發達せり。尙ほ西部臺灣灌漑の根幹たる嘉南大圳の虎尾街管内に於ける灌漑甲數三千三百三十二甲〇四に達す。小學校一、公學校二、分教場一にし

龍山靈泉寺ありて蜂屋村瑞林寺の末寺たり。上古井には泰山・川合の二枝郷あり。牛頭天社に上古井・下古井の産土神と稱す。牛鼻城址は加治田城主番藤新五郎の營の跡と里民傳ふ。龍潭川岸には傳説の地「花立崖」あり。大正十三年町制施行。町内より太古時代の石器を出土せしことあり。

コヒ

て本島人子弟の就學率は二八・二%なり。他に一般本島人教化設備として國語講習所四を有し、街設立の圖書館があり、地方教化に資するところ大なり。本街開發の端は清乾隆の初年福建省泉州府の晉江なる者の渡來に始り、咸豐に至つて一街を成したるが、同治元年の戴萬生の亂と光緒初年に於ける曾萬興の匪亂の爲め良民悉く此地を去り棄置して全く匪賊の巢窟と化し、明治二十五年頃の戸口二十と傳ふ。明治三十一年李天亮なる者匪首と爲りしが、明治三十四年の土匪討討により一掃され、同四十四年十一月大日本製糖工場が虎尾字五間厝に設置されるに及び再び虎尾街建設の基を開くに至れり。虎尾の名は東邊を流るる虎尾溪に因りたるものなり。虎尾郡役所・虎尾街役場は虎尾街虎尾にあり。

コヒ

臺灣臺南州北斗・斗六兩郡の境界をなす西螺溪と斗六郡湖寮庄東方に於て分流し、斗六街の北方を迂回して此に於て虎尾溪は新舊二溪に分たる。即ち清領の乾隆初年まで虎尾溪は現在の舊虎尾溪の水路と凡そ相同じく斗六街の北方より虎尾郡界に入り虎尾街・土庫庄を経て虎尾郡と北港郡の境界を爲しつづつ西流して海口庄の海口厝附近にて海に注ぐ。然るに乾隆の末年洪水の爲め更に別流を生じ斗六郡湖寮庄下厝子附近より發して同庄を貫流して虎尾郡二崙・崙背兩庄の南界を越えて虎尾郡の中央を流れ、崙背庄後

西に至つて海に注ぐ。新虎尾溪・嘉南大圳の灌漑面積は二萬八千四百四十四甲、耕水面積二萬一千九百九十五甲にして土庫庄を筆頭に虎尾街・崙背・海口庄の順にして各街庄共に農産地にして西螺街・二崙庄はその中に過ぎず。郡下の田二萬一千六百五十九甲四三五、畑一萬二千四百五十八甲二六六、管内總面積五萬五千七百三十三甲の六割一分に達し、米四百三十七萬九千六百九十二圓、甘蔗は百七十七萬三千五百圓にて次位にあり、甘蔗の百五十五萬二千圓、落花生四十三萬四千七百八十二圓以下黃麻・大麥・小麥・豌豆・大豆・玉蜀黍等の各二萬圓と胡麻・菜種等を有し、果實は橙柑・文旦・斗柚等は本郡名産の一にして、橙仔・桃・李等合して四萬九千五百圓とす。畜産は豚の五十七萬一千二百七十七圓、山羊の一萬三千五百六十二圓を始め黄牛・水牛・山羊等の屠殺數は相當額に達す。水産は崙背・海口の二庄は沿海漁業は鱈・鱈・西刀・大太魚等一萬二千三百六十七圓、その他庄に於て同様に淡水・鹹水の養殖を行ひ虱目魚・鰱魚・草魚・鯉・牡蠣等二萬九千六百七十七圓あり。林産は僅に麻竹・雜竹の生産を林産物とするのみにして、三萬四千四百圓に過ぎず。崙背・海口兩庄には砂丘地の飛砂防止林二千四百七十二甲三六に木麻黃造林を行ひつづあり。工業は大日本製糖會社の工場を除けば、煉瓦・製糖工場等にして大日本製糖

西に至つて海に注ぐ。新虎尾溪・嘉南大圳の灌漑面積は二萬八千四百四十四甲、耕水面積二萬一千九百九十五甲にして土庫庄を筆頭に虎尾街・崙背・海口庄の順にして各街庄共に農産地にして西螺街・二崙庄はその中に過ぎず。郡下の田二萬一千六百五十九甲四三五、畑一萬二千四百五十八甲二六六、管内總面積五萬五千七百三十三甲の六割一分に達し、米四百三十七萬九千六百九十二圓、甘蔗は百七十七萬三千五百圓にて次位にあり、甘蔗の百五十五萬二千圓、落花生四十三萬四千七百八十二圓以下黃麻・大麥・小麥・豌豆・大豆・玉蜀黍等の各二萬圓と胡麻・菜種等を有し、果實は橙柑・文旦・斗柚等は本郡名産の一にして、橙仔・桃・李等合して四萬九千五百圓とす。畜産は豚の五十七萬一千二百七十七圓、山羊の一萬三千五百六十二圓を始め黄牛・水牛・山羊等の屠殺數は相當額に達す。水産は崙背・海口の二庄は沿海漁業は鱈・鱈・西刀・大太魚等一萬二千三百六十七圓、その他庄に於て同様に淡水・鹹水の養殖を行ひ虱目魚・鰱魚・草魚・鯉・牡蠣等二萬九千六百七十七圓あり。林産は僅に麻竹・雜竹の生産を林産物とするのみにして、三萬四千四百圓に過ぎず。崙背・海口兩庄には砂丘地の飛砂防止林二千四百七十二甲三六に木麻黃造林を行ひつづあり。工業は大日本製糖會社の工場を除けば、煉瓦・製糖工場等にして大日本製糖

コヒ

安寮及び海口庄故港附近に於て兩河を爲して海に注ぐ。これ即ち新虎尾溪なり。新虎尾溪の流域は砂丘地帯にして清道光初年よりその被害甚しき程に、光緒七年に災害救助の必要起りし程にて、新虎尾溪の河口に近き安寮街在り爲に新虎尾溪を安寮とも稱せるが、新水路成れる時その地點の十一部落を流失せる他に安寮街の北方に高さ七丈、俗に觀音山と呼ぶ大丘沙を生じ、街民植樹して流砂の埋没を免れんとせるが、光緒初年に數個村莊に埋没の悲運を見たり。此に於て彰化縣知縣朱幹陸は光緒七年米一千餘石を以て災民を救恤し壯丁を募りて防砂林植樹を行はしむ。現に虎尾郡下に於ける防砂工作は二崙・崙背・海口庄附近に重く、以て管内産業の振興を講じつづあり。

コヒ

淡水港の別稱。臺灣臺南州北斗淡水郡淡水街淡水の舊名。一に虎尾とも書す。もと此の地にありし平埔蕃族ホーメ社(近音譯字なり)の淡水街。

コヒ

小比叡 比叡連嶺の横川嶺の南斗尾の附近にあり、一に波母山と稱す。比叡山を俗稱大比叡と云ふに對し此名あり。又比叡山麓坂本村の日吉神社の大宮に對し其北に鎮座する二宮を小比叡宮と呼び大山之神を祀る。風俗・一九は山や小比叡の砂のみやま井ばあらしもさむし間人しなし。曾丹集・大比叡や小

比叡の山も秋くればとは日も見えすきりのまがきに。

コヒ

湖東村 長野縣信濃國諏訪郡の中部。上諏訪町の東方。北は北山村、西北は米澤村、東より南は豊平村と隣す。八ヶ嶺の西の山裾の一部を占め、北端を諏訪湖に入る上川の支流西流す。全村西に向ひて緩傾斜し田地多く所産類を交ふ。米作主にて多少移出と産を副とす。特産物として凍豆腐あり。大門街道、村の中央を南走して西南方永明村に通じ(約六軒)、同村内に省線中央線茅野驛を置く。古くは中村・笠原・須葉・平・堀・金山・新井・山口・上菅澤・白井手の十ヶ村たりしが、明治八年二月合併して湖東村の稱に改む。村名は此村の位置の諏訪湖の東方端(諏訪湖を距る約十四米)に位するに起原す。須葉・平・堀はもと南大鹽村(現豊平村)より、金山・新井はもと芥ヶ澤村(現北山村の内)より、山口・上菅澤は中村より寛文年中分村せしもの。笠原は南大鹽村の人、小平佐五右衛門の見立新田なり。(笠原鐵泉)八ヶ嶺の西麓海拔一三〇〇米の高原に位し眺望に富む。泉質含鐵炭酸泉。加熱浴用。

コヒ

木挽町 東京の町名。京橋區にあり、川を隔てて三十三間堀町・築地と相對す。江戸時代五丁目に森田座あり、堺町・築屋町と共に芝居町として有名、現今も三丁目に歌舞伎座あり。隨つて木挽町の名稱が森田座・歌舞

夜座の別稱に用ひられしことあり。日本水代藏・三「芝若もそれ」に噴登へ筑地の門跡に日参して、下向には木引町の芝居を見物夜は其友連をあつめ云々

コヒヤツコク 五百石町

山縣越中國中新川郡の西部。富山市の東南約十軒にあり。面積五二九方軒。常願寺川扇狀地にあり南方に稍も高きも殆ど平地にして水田開け米の産多く、板紙・清酒の産あり。富山電氣鐵道線の五百石驛(昭和六年設置)を置く。富山市・東水橋町・上市町等へ縣道通す。往古の事は以て傳すべきものなきも、中世は高野郡の内屬す。いま前澤・西原・大窪・東郷島・野口・手塚・松本・宮成・米澤新・日渡・利田・利田上野・立泉寺・上野木・貫田・牛屋・横田・泉の十八大字よりなり前澤に役場を置く。

コフ 子負原・子養原

筑前國(福岡縣)の歌枕。いまの糸島郡深江村より西方五町、大道の南の高き所に子負原と傳ふる所あり、この地に寛永年間の本まで傾懐石なるもの存在せりといふ。貞享二年に其所に八幡宮を創立し深江の民が一石を持ち來り之を祭る。此石のこと古事記にも既に見ゆ。萬葉・五、筑前國怡土郡深江村子負原、海に臨める丘の上に二つの石あり。…往昔息長足日女命、新羅國を征討けましし時、鼓の兩つの石を用ちて、御袖の中に挿み著けて、以て傾懐と爲す。實はこれ御裳の中なり。所以

行人此の石を敬拜すと。乃ち歌を作りて曰く、懸けまくば あやに畏し 帯比賣神の命 鞆國を 向け平らげて 御心を 鎮め給ふと い取らして 齋ひ給ひし 眞珠なす 二つの石を 世の人に 示し給ひて 萬代に 言ひ繼ぐがれと 海の底 奥つ深江の 海上の 子負の原に み手づから 置かし給ひて 神國 神さび 奇蹟 今の現に 尊きるかもし

コフ 古布

〔古布〕 伊賀國(三重縣)の歌枕。今その所在詳かならず。夫木・二五、人なのみこふのみなどによる波は袖をのみこそうちめらしけれ

コフ 古阜

〔古阜〕 伯耆國(鳥取縣)の古地名。和名抄、八橋郡に古布郷あり。其地今の東伯耆郡古布庄村の邊に當り、延喜長部省式に伯耆國古布馬牧とあるも此地なり。

は古泉水利組合の粟刈地域に當るを以て灌漑の便極めてよく、米を主産し、麥・大豆・棉花の産少からず。また苧布・綿布等の産も多し。牛升山は一名都願山といひ、百濟時代の山城址あり、頂上よりは全北平野を一眸に収め展望よし。

コフ 國府

〔國府村〕 千葉縣安房國安房郡の西部。館山北條町の東北隅にあり、平久里川の東岸を占む。西より北にかけ郡古町・瀧田村、東は稻都村・九重村、南は館野村と隣す。東北部は房總丘陵の一部にて金比羅山あり。西部は平久里川流域の平地をなし、水田多し。全村農業をなし米を主産物とす。館山北條町・郡古町に縣道を通す。この地は和名抄平群郡河内郡の内なるべく、和名抄に、安房國、國府在平群郡行程上三十四日、下十七日、養老二年、割、上總國四郡置、此國、皆郡四とあり、往時この地に國府を置きしなるべし。然れども國府縣令址は詳らかならず。(延喜寺) 大字本載にあり。曹洞宗。長谷山と號す。永正十七年里見實資、吉州梵貞を請じて開創し、往昔安房國五大寺の一たりし盛衰を思ふに由なし。(寶珠院) 府中にあり。眞言宗。金剛山寶珠院。寺傳に、應永の初め開山省傳の父、深く佛法に歸依し、莊田數百頃を納れ、

家を以て堂坊となし、號して寶珠院といひ、省海僧都を請じて開基とし、其子を以て弟子たらしむ。一子西邊業成りて歸る。時に水を浴て本尊に供せんとするや、水中忽然寶珠の二字を現はす。因りて改めて寶珠院と號すと。舊幕府の頃寺領二百三十石餘を有したる巨刹たりき。

コフ 御服

〔御服〕 越中國(富山縣)の古地名。今の婦負郡西吳羽村及び之に接する富山市の一部の地に當り、いま富山市に五福の町名あるはその遺稱なり。康正二年造内引付に四貫文、三條八幡宮領、越中國御服之莊吉川之段錢とあり、吉川は今の富川村の大字にその名遺れば此地か。醍醐三寶院文書に、醍醐寺方管領諸門跡等日録、一、三條坊門八幡宮別當職、社領越中國御服莊吉川とあり。

コフ クロ

〔コフクロ〕 小袋坂・巨福路坂 相模國鎌倉の雪の下より山の内へ行く坂道。元弘三年五月新田義貞、鎌倉攻撃の時、

コフ 栢釜面

朝鮮慶尙南道山淸郡の西北部。西は生草面に、南は今西面・

コフ—コフシ

コフ 御墓

御墓に假すれど探り難し、蓋し古の用俣縣造のものなるべし、王と云ふも大墓の説のみ。國府と平野との間に座頭塚と稱するものあり、元和四年、陸奥國より京都へ官途に上洛する者四人、參宮を志して此地に懸り、蓋の爲に官金を奪はれ終に殺害さる。京都檢校これを奉行人に訴ふ。故に此地に高札を建て、黄金三十枚をかけて犯人を求めしむ。かの院本に懸女房染分手綱といふ文段は、この座頭塚を摸して作れるもの如し。(府南寺) 古義眞言宗。奉平山と號し御室末たり。聖德太子御創立に係る奉平山無量壽寺及び補陀落山府南寺を合併せしものなり。聖武天皇無量壽寺を始願寺となし給ひ、行基掛錫して該寺を修營し、惣海亦大供養會を修すといふ。當寺の本尊となりし阿彌陀如來は、南郡西大寺聖乘大神宮參籠の御り感得したる靈像にて、古來その衆生利益の勝縁を朝野に喧傳せらる。補陀落山府南寺の本尊千手觀音は治病・除厄・開運・安産・養蠶等に靈驗の聞え高かりしが、天正年間の兵火に焼失したれど、本尊は其厄を免れしにより、兵火の災を脱せし無量壽寺に奉遷し兩者合併するに至る。のち良通當寺を大いに興隆せしにより良通を以て中興開山第一世となす。當山は龜山藩に屬し、歴代の城主深く本尊を敬す。

コフ 五峯

〔五峯〕 兵庫縣加東郡の西北部、瀧野町にあり。標高二五八米。北麓に光明寺を以て一人の光明寺山とも云ふ。光明寺は法道上人の開基と稱し、地方にての名刹なり。觀應二年足利尊氏、直義と不和なりし時、この地にて戦へり。

コフ イチ

〔コフイチ〕 五分市 味真野村(福井縣今立郡)

コフ カサク

〔コフカサク〕 小深作 埼玉縣北足立郡にありし村。明治二十五年本村は春岡村に合併さる。

コフ ク

〔コフク〕 吳服 江戸の町名。今の日本橋區吳服橋の東南、即ち吳服橋一丁目の邊。幕府の吳服師後藤藤隆助の屋敷ありしに依る名稱。明治二年吳服町新道・櫻新道を合併、のち町名を失ひ、日本水代藏・二、吳服町の看廻かりて、上上吉諸白の軒ならびには出しけれ共、鴻の池伊丹池田南郡根づよき大木の杉のかほりに及びがたく酒元手を皆水になして云々

コフ 橋

〔吳服橋〕 東京市の一橋名。麹町區丸の内一丁目と日本橋區吳服橋一・二丁目とを

コフ 御服

つなぐ橋。江戸時代、附近に吳服橋見附ありき。(吳服橋見附) 江戸城外漆城門の一なる吳服橋門の見張番所。江戸五口の一。大名小路より吳服町に出づる所にあり。文化三年頃よりこの城門内に北町奉行所を置きたり。寛永圖には後藤橋とあり、この門外橋の袂に幕府御用の吳服所後藤氏の邸がありし故この名が起りしものなるべし。

コフ 山

〔吳服山〕 また五福山・御服山に作りしが、いま吳羽山といふ。富山縣婦負郡の北部、富山市の西北方にある丘。海拔約八十米に過ぎざるも眺望に富み、北陸街道の要衝に當る。壽永二年三月木曾義仲の要衝に當る。壽永二年三月木曾義仲の將今井兼平、平盛俊を撃たんとして此地に陣しまた天正七三年豊臣秀吉、佐々成政を攻むる時前田利家の陣所となりし地といふ。

コフ ク

〔コフク〕 御服 越中國(富山縣)の古地名。今の婦負郡西吳羽村及び之に接する富山市の一部の地に當り、いま富山市に五福の町名あるはその遺稱なり。康正二年造内引付に四貫文、三條八幡宮領、越中國御服之莊吉川之段錢とあり、吉川は今の富川村の大字にその名遺れば此地か。醍醐三寶院文書に、醍醐寺方管領諸門跡等日録、一、三條坊門八幡宮別當職、社領越中國御服莊吉川とあり。

コフ クロ

〔コフクロ〕 小袋坂・巨福路坂 相模國鎌倉の雪の下より山の内へ行く坂道。元弘三年五月新田義貞、鎌倉攻撃の時、

コフ シ

〔コフシ〕 小富士 富士宮宿(石川縣)の別稱。〔小富士〕 富士山の側火山の一。〔小富士〕 尾張富士(愛知縣)の別稱。〔小富士村〕 愛媛縣伊豫國宇摩郡の西北部。慶應に面し東は津根村に、南と西は土居村に、西北は懸崎村に界す。讃岐山脈に屬する赤星山(一四五四米)の北麓に關川其の他の神祕作用によりて作られたる海岸平野の一部を占める。南部に一〇〇—二〇〇米の山地を背負ふ外は村内殆んど低平にして耕作行はれ米・麥・蕎麥等の産あり。南方山麓に沿うて四國街道東西に通じ、之に平行して北側には省線豫備線走る。村内に停留場なきも西隣土居村の飯武驛を利用す。往古の事は以て傳すべきものなし。村名は小林・藤原・中村の三部落を合併し村制施行の際、小藤村とせしが雅名を取りて小富士村と名付く。

コフ 山

〔小富士山〕 福岡縣肥前國糸島郡の西海岸。小富士山(可也山)の西南麓を占め船越灣に臨む。東部は前原町に隣り、北部は小富士山を境に可也村に接し、西部は玄海灘に突出して北・西・南の三面海に圍まるる芥屋村に界す。西北隅に二〇〇米程度の丘陵あり、北境には小富士山(三六五米)聳え、美しきコニニア型の山嶺をなして四圍に裾野をひき其周囲の東・南・

西の部分に沖積低地をつくり、その南部は海に迫り東境に小流あり低地の西南部に丘陵性の陸地突出して牛島嶽をなし、牛島の北は引津浦に面し南は弓状に北へ灣入して船越灣をなす。湾の西南端の岬を豊ノ首と言ひ、東南の岬を立石崎と言ふ。主産業は漁業なるも低地には耕地拓けて米の産あり。東隣南原町に社稷北九州鐵道走り東約四軒に前原驛あり。朝野群載、刀伊入寇の條に船越灣のこと見ゆれば此地の起原また遠しといふべし。和名抄に志摩郡久米郷とあるは蓋し本村の地にや。もと船越と稱せしを小富士村と改めしもの。船越の名義は昔、南北湖水の相通せざる際、南風烈しきときは舟を引きて可也海に出で北風烈しきときは舟を引きて船越灣に入れしゆみに此名起るといふ。山の多和より舟を引越すこと古事記の内に見えたり。具原翁曰く志摩郡なる久我船越の兩村は、賊志より南一里にありて海中の洲なり。その西は山なり。洲の横二十間ばかりにありて、洲の南北兩方は海なり。北は可也の海、南は引津なり。古へ久我の浦と船越の間を漕ぎ廻れば道遠きゆみに、洲を南北たがひに引越けるによりて引津といひ、船越といふ。この地いまや純然たる漁村なるも百餘年前までは村民みな農を主とし船越牛島のごときは總て畑地なりといふ。その頃たまたま伊萬里嶽を讃みて北海に航し、巨利を博したるものありし

より何れもこれに倣ひて航海貿易に従事し、但馬・隠岐或は遠く松前などに航して一時甚だ隆盛を極む。これより農を専じ牛島次第に荒れて山林と化した漁業者を鉢巻組と稱して豫組等をなすものなかりしが、日進の文明は帆船貿易に一頓挫を來し榮華の夢僅かに十年を出でずして覺めしに、田畑は既に荒れ果て加ふるに土地狭く人口多きを以て勢ひ漁業に熱心ならざるを得ず今日の漁業をなすに至りしものなり。(四林寺) 大字御床にあり。淨土宗。創建年代不詳。明應八年(一四二九)に改む。寺寶中木造阿彌陀如來坐像一軀は應永本願の作に係り現に國寶なり。【小富士村】 大分縣豊後國大野郡の西部、大野川支流緒方川の北岸。東は直入郡竹田町に隣り、西方玉来町との間に入田村を隔つ。南方は上緒方村、東方は緒方村、北方は上井田村に接す。西境入田村との境に小富士山(四五七米)あり。緩く東に傾斜して全村山地の小起伏あり。北境に大野川東流し南境に支流緒方川東に流れて東方約九軒にて本流と合す。縣道北部を西隣竹田町より東に走り、省線九大線北方を迂回して西方約三軒に豊後竹田驛、北方約四軒に朝地驛、東方約五軒に緒方驛あり。この地は和名抄、大野郡緒方郷の内とす。もと片筒瀬村といひしが小富士山に因みて小富士村と改稱す。いま小宛・片ヶ瀬・草深野・寺原・

辻の五大字より成り小宛に役場を置く。【小富士山】 大分縣大野郡小富士村に直入郡入田村の境界に跨る。標高四五七米。山中に竹田の城主中川氏の祠あり。コフシ 甲武信岳 關東山脈秩父山塊の一名峯。山名の示す如く、甲斐・武蔵・信州の境界、即ち山梨縣東山梨郡三富村、埼玉縣秩父郡大瀧村、長野縣南佐久郡上村の境界に跨つ。一名三國山とも呼ばる。標高二四六八・六米。北稜は三寶山・大山(二九〇米)、南西稜は木賊山を経て國師ヶ岳(二五九・一米)・金峰山(二五九・五米)、南東稜は破不山(二二一・八米)に達り、南嶺に馬冠山(二二一・二米)たり。北方の三寶山、南東方の木賊山との中間に位し、二山に較べては山體小く北方嶺本部落より眺むれば強手に似る。因りて拳岳と云ふ説もあり。山中樺と檜の樹林繁茂し、大原生林をなす。山頂に甲武信の三國境界を示す標石、積石の中央に埋設しあり。この山は荒川の支流荒川の澤、千曲川上流梓川、子西川(當吹川上流)東流の源流なる釜澤なる三流を三方へ派出する故、太平洋の東京灣・駿河灣及び日本海に流入する水脈の分水嶺として重要な位置をなす。登山は東方破不山より約四軒、又は西方國師ヶ岳より約六軒、縱走して行ふ。又信越本線小諸驛より小海線に乗換へ松原湖にて下車、千曲川を遡行して登顶す。

此の城壁に置きし事あり、現在内堀・外堀・大手・搦手・本丸・二ノ丸等の跡あり、本丸跡に足澤家四世の孫足澤義昌氏の住宅及び八幡・稻荷・成安殿の三小祠を存するのみ。(山田長者屋敷) 大字福田字田山にあり。總反別六反七畝、長者の由来は總々として由なきも、地形及び地中より發掘の土器等に依り推し量るに、此の地は元龜夷の小部落にて、長者は其の部落の長とし屋敷附近の現在島海・淨法寺・御返地の三村に互る地を耕し、長者の名を得るに至しならん。田日日向後道に至り藩士に取上げられ、福田村・月富田村・似島村・吉田村の地行五十石を拜領す。宗十郎好澄に至り姓を三上と改め、代々山田村に住せしが、三上好一の代に至り文久年間百姓太八に長者屋敷跡を譲りてより子孫代々似島に移住するに至る。現在該屋敷跡は東西五十九間、南北四十間・周圍百九十八間ありて、部落内に有志折戸善吉の住宅其中央にあり。コホ 五浦面 朝鮮京畿道廣川郡の南部。東は草月面に、西は樂生面・突馬面に、北は慶安面に夫々隣接し、南は龍戸郡に接す。東部及び西部は三十四百米の丘陵起伏して概ね山地を成すも、中部は低平にして漢江の小支流の灌溉よろしきを得、耕地よく拓げ、米・麥・大豆・小豆・粟等を産す。交通は三等道路東部を南北に通ずるのみにて未だ便ならず。コホ 戸法面 朝鮮京畿道利

コベ

古部 長崎縣南高来郡にありし村。大正十五年伊福村と合して大正村を置く。

コヘー

古平面 朝鮮平安南道大同郡の中部。平壤府の西に隣り、大同江の右岸に沿ふ。西境に三七二米の山あり外は一帶に低平にして、大同江及び其支流による灌溉の便よろしきを得て耕地廣く拓げ、米・白菜等の農産物を多産す。平南線及び一等道路平壤府より來り、面の西部をほぼ並行して南走し、前者に太平驛(明治四十三年設置)を置き、後者にバス通す。

コヘー

湖平湖 關東州西營關東管内にある小島。管城子會の北岸を距る約一〇軒、西南方約四軒に猪島を望む。東西約一軒、南北約〇・五軒。島の中部は山地あり、東北岸は海岸をなし、定住民なし。

コヘン

御返地村 岩手縣陸奥國二戸郡の中部。東經百四十一度十四分、北緯四十度十四分の地點を占め、廣袤東西約二里、南北一・一五里、面積二・九七七方里あり。東は石切所・浪打の兩村に、西は淨法寺村、南は島海、北は斗米の各村に接す。周圍は殆ど山陵にして中南部を南西より北東へ流るる安比川の流域に平地あり、此の中に似島・大業・福田等の集合部落あり。地質は安比川流域の大部は第三紀層にして、周圍の山陵地帯の幾分は火山灰層なるが如し。村の

中央部を安比川流域に沿ひ、福田驛より秋田花輪町に至る縣道花輪街道直通す。これ縣北に於て秋田縣に通ずる唯一の重要路にて、又當村交通運搬の根幹をなし、福田驛・淨法寺間の定期自動車往復す。役場所在地より各々自動車所要時間約二十五分に、村内延長七八五米の通過線定地たり、村内延長七五五米の通過線横斷して村内小部落間に通ずる村道數條あり。延長七二三八四米なり、役場所在地より北福田驛まで七九六四米淨法寺まで九六六〇米なり(縣道)。生業は農業と林業にて、産物の主なるものに、米(六四二石)・麥(二二八〇石)・大豆(一〇〇七石)・用材・薪炭材・木炭が挙げられ、副業に養蠶行はる。當地方は往時南部氏の直轄地たりしが、第卅代南部行信の代、主税(勝信)・主計(政信)二人の弟に知行として與へられしことあり(元祿七年八月)。のち年々不作に付、信忠の御時(寶永三年八月)返上に及び再び、南部家直轄の地とせられ、以來此地一體を下御返地と呼びならせり。これ村名の起因なるが如し。往昔、久しく蝦夷の暴竄たりし事は、村内數箇所より發掘せらるる土器・石器、其の他アイヌ語より出でたりと思はるる安比・似島等の地名によりて想像する事を得。文治五年南部三郎光行隸部五郎を賜はりし時、其の封内に屬し、元和元年福田代官所の設置せらるるに及び其の治下に入る。明治元年南部藩の領

コホー——コホク

川部の中部、東南は大月面・暮加面、北は邑内面に、西北は麻長面に各隣接し、西南は龍仁郡に接す。南部より西北部に互りて一、二〇〇米前後の丘陵連立するも、東部及び東北部は一部に低平にて地味肥沃、且つ漢江の支流東境を北流してこれ等平野を灌漑し、耕地廣く拓く。主生業は農にして、米・麥・豆・粟等を産す。一等道路邑内面より東りて西の北都を過ぎりて西走し、また朝鮮京東鐵道通じて西山驛(昭和五年設置)を設く。

コホー 五峰

【五峰村】 滋賀縣近江國神崎郡の西部。北と東は栗見村と八幡村、南は南五箇荘村・能登川村・伊庭村に接し、西の一部は琵琶湖の伊庭内湖に臨む。村の南境に觀音山連嶺の北端に當る二六九米の山地あるのみにて、他は湖東平野に屬し、西は内湖に沿へる低濕地なり。産業は農業の外、副業として麻織行はれ、麻の染織研究獎勵のため、この地に縣立能登川工業試験場設立せらる。紡績、製布、製油(菜種油)の工場あり。東海道本線に沿ひ、本村宇村林と八幡村宇垣見との境界に能登川驛(明治二十二年設置)を設く。村は林・山路・佐野・佐生の大字よりなり、林に役場を置く。大字佐生はまた佐野に作る。館址あり、六角氏の將後藤但馬守賢登の居りし所。賢登勇名を以て稱せられしが、六角義賢これを忌み誘殺すといふ。

コホー 御坊

【御坊町】 和歌山縣紀伊國日高郡の西南。日高川河口の右岸。東北より西南の方向を取る日高川筋を一邊とし、河口の地點を一角として西北へ開く略三角形をなせる町なり。西及北は湯川村に隣り、東北は龜田村に隣り、東は日高川を隔てて野口村・鹿屋村なり。全町低平にて日高川河口の沖積地の東部を占む。爲に木田よく拓け米を産す。日高川上流地方は美材の日高材の産地なるため、御坊町は日高製材・昭和製材等の工業町にて又日高材・日高材の工場あり、人口も年々増

加の傾向をたどり大正九年には九〇〇〇人なりしが、大正十四年には一〇〇〇〇人となり、昭和五年には一三〇〇〇人となり、更に昭和十年には一四六〇〇となす。人口密度も一方軒四・八一二人をかぞへる稠密なり。併し御坊の港は典型的の悪港ゆゑ、原料の不足のため、北洋村を入るにせよ、泥砂に封じられたる河口港に妨げられて、勢ひ北方の山良港を經由せざるを得ず。省幹紀勢西線は山良村より南方へ走り、御坊町の西北隅、湯川村にて東に迂回し、東方約五軒に至りて更に南方へ通ず。町より北方約一・五軒に御坊驛(湯川村)あり、昭和四年設置。東北約二・五軒に造成寺驛あり。道路四通八達し、熊野街道に沿ひその他四週より縣道集り、桑野街村型をなす。町に縣立日高中學校・同日高高等女學校あり。町名は本願寺別院あり、日高御坊と稱せしより起る。明治三十年町制施行。(日高別院)眞宗本願寺。天文元年本郡丸山城主湯川民部少輔直光の開基にして、その子治部少輔直治入道直光を住持たらしむ。初め湯川直光、攝津江口にて三好長慶と戦ひ敗れし時、本願寺證如上入兵を助けて騎馬三十人を副へ、小松原城へ歸らしむ。直光其恩を謝せん爲めに吉原村に一字を建立し、眞宗を唱へて本願寺に隨順せしかば、上人自畫像を贈りて賞すといふ。天正十三年豊臣氏に攻められ、龍存法るや、當寺亦兵火に罹りしかば、龍存法

師、父直光に隨ひて熊野に走る。翌年假堂を岡浦原に設け、居ること十歲。文祿四年領主淺野幸長に現地を受けて堂宇を替へて修る。のち漸次改修せられ、六世賢徳法師に至り留守居職を置きて別院となる。

コホク 湖北

【湖北村】 千葉縣下總國東葛飾郡の東部。手賀沼の北にあり。利根川との間に挟まる。東は布佐町、西は我孫子町と隣り、南は手賀沼を隔て、手賀村と相對し、北は利根川を隔てて茨城縣北相馬郡取手町・井野村・小文間村と相對す。中部より南部にかけて丘陵地をなし、手賀沼の少許、低地ありて水田あり。北部は利根川流域の低地をなし、堤防の内側に水田拓げ、米・麥・粟の産多し。道路渡舟の不便に加ふるに驛附近に金融の機關なきため、我孫子町に取扱せらるる状態あり。省幹成田線南部を東走し、湖北驛(明治三十四年設置)を設く。驛道これに沿ふ。この地は和名抄、相馬郡布佐郷の地なるべく、手賀沼の東北に位するを以て此名あり。北に大利根を控へ、地形東西に長し。此地將門の遺跡を止むるもの多く、城山は當時の址なりといひ、土臺荒

原・河村氏等この廢墟を修築し、中幹城と命名し之に據れりと傳ふ。のち徳川氏の領有に歸し大政奉還に及ぶ。

コホク 吾北面

【湖北】 近江國の内、琵琶湖の北方地域の汎稱。

コホリ 小細島

【コホリ】 小細島 廣島縣御調郡にあり。島。三原市の東南約六軒にあり、四ノ島の西北にありて北は細島に對す。

コボトケ 小佛峠・小佛嶺

【コボトケ】 小佛峠・小佛嶺 東京府と神奈川縣との境界にある峠。中央線淺川驛の西方約六軒、歩程七軒八に當り、南方の東京府南多摩郡淺川町と北西方の神奈川縣津久井郡千木良村との境界に當り、最高點(五九〇米)。甲州街道に當り、笹子峠に次ぐ難所にして險峻として知られたり。上下約八軒なり。昔は頂上に關所あり、小佛關または富士見關と呼び、人馬の往來激しかりしも、維新後南方に大ダラム新道完成せられ、中央本線山麓

コホク——コマ

をトシキを穿ちて(小佛トシキ)と云ひ全長二五四五米を通ずるに至りしかば、峠路は荒廢し、只山歩きの人のみの訪ふ所となれり。關址はいま指定史蹟にして淺川町に屬す。武藏街道に「小佛嶺、嶺に茶屋あり、武甲界とす、上下三十町小佛より小原迄一里十七町、小原より與瀬まで十七町」とあり。小佛部落は南東に、小原部落は北西にあり。明治四十年頃までは茶屋等ありしが、今は全くなし。峠上よりは南西方面に秀麗なる富岳を望むを以て、ここにありし名高き小佛關は富士見關とも稱せられたり。この關は天正年間西蓋なる駒木野に移され、いまその地を我す。また峠上より晴天の日には西方より西南方にかけて、笹子峠より赤石山脈の連峰を指し得られ、笹子峠より附近を基點として、東は五日市附近、西は甲府盆地に及び、秩父層に屬し、主として硬砂岩・細粒砂岩・礫岩・粘板岩の互層より成る。秩父層と似たれども、石灰岩を含まざる所に相異あり。地質時代より云へば、中生代のジュラ紀に屬する地層なりと考へらるるも、これに就きては諸種の説あり。また峠名に關しては多摩村誌に「小佛嶺と稱する蓋船は往古僧行赤の地に錫をとめ、大日佛の小像を安置し、小佛山寶珠と號せしにより地名をかく稱す」とあり。その後野火寺中に入りて堂宇灰燼に歸せりと。塵木

コマ 巨麻

【巨麻】 河内國(大阪府)の古地名。和名抄、若江郡に巨麻郷あり、その地今の中河内郡久寶寺村の邊に當る。延喜式神名帳の滋川郡許麻神社は久寶寺村にあり、和名抄が巨麻郷を若江郡に屬せしめしは誤なるべし。

コマ 巨摩(郡)

【巨摩】 河内國(大阪府)の古地名。和名抄大縣郡に巨摩郷あり、その地今の中河内郡上村の邊に當る。延喜式神名帳の河内國大縣郡大縣神社に上村大字本堂にあり。蓋し甲斐の巨麻、武藏の高麗は皆歸化人の居りし地なりといふ。

年間華翁和尙之を再興す。いま小佛部落の字時に大日堂あり。小佛口十々里原は永祿年間武田信玄の古戰場なり。徳川氏はその初期に武田氏の遺臣原・萩原・石坂等を武州八王子口に住せしめて小佛口の防備に當らしめたり。世に云ふ千人同志はこれなり。今はこの地は、奥高尾鐵道線に當り、南東方なる高尾山(六〇二米)よりこの峠を越え、北東方なる景信山(七二八米)・陣場山(陣馬峰、八五七米)に至る尾根傳ひの山道通じ、東京附近よりの登山者多し。西麓に美女谷温泉湧き、南斜面はスキー場をなす。

コマ 胡麻

【胡麻】 丹波國(京都府)の古地名。今の船井郡胡麻郷の地に置かれたるもの。延喜式左馬寮式に「攝津國鳥養牧、右寮、豐島牧、右寮、成奈野牧、右寮、近江國甲賀牧、左寮、丹波國胡麻牧、左寮、播磨國垂米牧、左寮、右諸國所貢牛、各牧一件牧、隨事要用」

コマ 狛

【狛山】 一に狛野山・高麗山ともいふ。山城國(京都府)の歌枕。今の相樂郡上狛町の東の山なるべし。萬葉・六・狛山に「鳴くほととぎす泉河津を遠みここに通はす」夫木・四、春ふかくなりゆくまにこ

【箱山】 奈良市の北方約十軒、木津川の右岸に峙つ一峰。京都府相楽郡高麗村に属す。北東方に三上山(四七三米)連る。山中に神堂あり、因りてこの山一名神堂寺山と云ふ。西麓に神堂寺部あり。

【箱山】 奈良市の北方約十軒、木津川の右岸に峙つ一峰。京都府相楽郡高麗村に属す。北東方に三上山(四七三米)連る。山中に神堂寺あり、因りてこの山一名神堂寺山と云ふ。西麓に神堂寺部あり。

【駒ヶ岳】 北海近畿島牛島の南東部、大沼公園大沼の北岸に峙ち、波島支離島田部七飯村と茅部郡砂原村・森町・鹿部村の一町三村境界に跨り、北麓は内浦灣(噴火灣)に濱す。壯年期コニテ型火山にして、最高峰駒ヶ岳は標高一四〇米。駒ヶ岳とは駒ヶ岳・砂原岳及び隔田盛等の諸峰の總稱にして、初めは正しき圓錐峰なりしも度々の爆發により破損し、或は新しき噴出により中腹に熔岩流又は泥流の堆積を生じ、突起或は寄生火山等出現して外観複雑となれり。北方より順を追ひ羅列すれば砂原山(一一五米)、それより南西に馬の背と稱する鞍部を経て駒ヶ岳の尖峰(即ち駒ヶ岳にして、標高一

一四〇米)となり、その南部は馬の背と稱する長嶺を経て隔田盛の隆起となり、北・西・南の三方を圍む。山頂部には東に開ける馬蹄形の大火口あり、その内なる新舊三個の大なる火口を繞り、多くの小火口並びに無數の地割あり、これ等より盛んに噴煙す。大火口の一角は山頂の中部に大楕圓形をなし、南西麓の最高所に駒ヶ岳、北麓は砂原岳をなす。その二は前記火口の東壁を爆破し、東方に開ける馬蹄形のものにして、南壁の高所は隔田盛をなし、この火口より溢流せる泥流は南及び東南に下り、折戸川を埋め、大沼・小沼・塚原沼を造れり。第三のものは第一の火口の北西に接して馬蹄形をなし、西方に崩壊せる押出の潭と呼ばれるもの即ちこれなり。この山を南麓の大沼よりみれば天馬の驕れるが如し、故に駒ヶ岳の名稱出づ。西麓の駒ヶ岳頂より見れば雙頭の巨龍の如し。又北麓の内浦灣方面よりは富士型に見ゆ、因りて波島富士とも云ふ。この山を地質植物帯は大體三つの變化あり、山麓より三〇〇米迄の間は落葉松林・闊葉林等が浮石質火山灰の地に繁茂し、特に松最も多く楓・山樺・ななみなど、やちだもあかだも白樺等もあり。中腹三〇〇米より六〇〇米迄の間はななみなど、樺・みやまばんのき・樺等なり。それ以上は熔岩環帶の赤褐色の山肌を表す草木帯となり、その間いそつつと、いはしば、しらたまのき・ひめ

しやくなげ・ひめききやう・ひめおんこ、はくさんちどり等の高山植物を見る。この山度々の爆發の歴史を有す。寛永十七年の噴火の際には砂煙天を掩ひ、降灰は遠く越後に達し、津波を誘發し、三寸の降灰を見たり。震動は津波を誘發し、百餘隻の昆布採取船覆没し、七百餘人溺死せり。大いで天明四年の噴火あり。安政三年の爆發の際には降灰多く、焼灰は政部・本別に降り、南東麓の留ノ湯は砂石で埋れ、多数の住民死傷し、家を焼失し、降灰遠く細路・根室方面に及べり。明治二十二年・三十八年・大正八年にも噴火せしが、被害は殆どなかりき。更に昭和四年六月十七日に大爆發を行ひ、熔岩流は激流流れ、噴出物は麓の鹿部・日尻・尾札部・般法華の諸村落を襲ひ、小川・留ノ湯等の人家を焼き、折戸・鹿部等を埋め、降灰は室蘭・日高方面に達せり。現在にても前記本嶽の車窓より當時の熔岩流の一部を指摘し得らる。登山路は南方よりの大沼口と南西方よりの駒ヶ岳口と二路あり。大沼口は前記本嶽大沼驛下車、湖上の登を探り、水路四軒五にして千島ヶ岡に達し、それより頂上まで四軒半、約三時間行程なり。道幅は約一、二米、悉く火山灰に被はるも、標石ありて登山は容易なり。駒ヶ岳驛口は前記本嶽同名驛より頂上まで約六軒、三時間乃至三時間半にて登顶す。駒ヶ岳驛より遊川を経て焼山まで徒歩三・二軒、そこに

【駒ヶ岳】 越後駒ヶ岳とも云ふ。上越國境連嶺の北端部に位置する一峰にして、新潟縣北魚沼郡湯之谷村と南魚沼郡東村の境界に跨る。標高二〇〇三米。南麓は中ノ岳(二〇八五米・見附(一九二六米)を経て、群馬縣利根郡水上村との境界に達す。北東方に小倉山(二三八八米)續く。小倉山の北方斜面は北西流する佐梨川の水源池たり。南西斜面より水無川發源して北西流し、川を隔てて八海山(一七七五米)對峙す。佐梨川と水無川は共に信濃川支流魚野川に合ふ。この山は豪壯なる山容を有し、夏日尙殘雪を戴き、又男性的なる岩壁を有す。山頂には雙圓窟命を祀り、銅製の御神體を安置す。山頂よりは見渡す限り會津越後の山々にて、東方附近には只見川支流北ノ俣川の上流を距てて芝澤岳(九六九米)の雄偉なる山容と對し、遠く會津駒ヶ岳(二二三二米)・尾瀬の壁岳(二三四六米)等を望み、南方は大根根水源の山海を眺め、西方は八海山(一七五七米)の峻峰に越後平野の展望よし。古來八海山・中ノ岳と共に三岳越りとして信仰登山者ありしも、交通不便なるため地方的に知らるるのみにて一般には著れざりき。されど近年上越線開通後は登山者次第に多くなれり。登山

明治天皇御駐蹕の碑立てり。それより山頂馬ノ背まで約八軒なり。兩路とも途中不便なるため、獲め準備を要す。尙頂上最高點に登るには峻き岩を登る危険を伴ふ。山頂よりは南方脚下に大沼の明鏡を俯視し、これを隔てて横津岳(一一五二米)と相對し、南東麓に前記の臥牛山及び津輕海峽を望み、北方は内浦灣を距てて、有珠岳・蝦夷富士の雄姿を見る。冬季は一米以上の積雪あり、山麓到る處スキー可能なり。冬季は山頂近くは風の爲雪面硬化せる故登山にはピッケル等を要す。

【駒ヶ岳】 奥羽火山脈に屬する一峰。田澤湖の東方約一〇軒、秋田縣仙北郡生保内村に峙ち、東麓は岩手縣岩手郡御前村に延ぶ。山麓磐石安山岩より成る。ほぼ完全なるコニテ型火山にして、山頂に馬蹄形の大なるカルデラあり、その長徑一四〇〇米、短徑九〇〇米なり。更に其内に二個の中央火口丘を有す。カテラは西部に開き西麓に輪木内澤の火口湖あり、その水は西南に流れ玉川に注ぐ。外輪山は西北部最も高く、その最高點を男岳(一六三三米)と稱し、火口壁は懸崖となりて内部の成層構造を示す。外輪山の東部及び南部は崩裂崩壊して樹木にて掩はる。外輪山外面は概ね二〇度の緩傾斜にして西面に美しき裾野を曳く。

【駒ヶ岳】 新潟縣西頸城郡西海村と根知村との境界に跨る山。標高一四八七米。北方は船浦山(七七八米)に連り、南東方は鬼ヶ面山に續く。東方海川の上流地を隔てて鳥帽子山(一四五二米)・阿彌陀山・鉢山(一五七五米)對峙す。南麓に楓山元湯・楓山新湯あり。西麓は飯川の一支流に限らる。

【駒ヶ岳】 甲斐駒ヶ岳・甲斐駒等とも云ふ。赤石山脈(南アルプス)の最北端に位置す。山梨縣北巨摩郡駒ヶ岳村外二ヶ村入會地と長野縣上伊那郡美和村との境界に峙つ。標高二九六六米。南西麓は北澤峠最高點(二〇三二米)を経て仙丈岳(三〇三二七米)に、南東麓は仙丈峠最高點を経てアサノ峰(二七九九・一米)・鳳凰山に續き、北西麓は銀岳に連る。北方に大岩山(二三八八米)聳ゆ。山麓花崗岩より成り、鳳凰山と共に日本に於ける花崗岩峰として最も高く、その突兀たる山容の豪壯さは越中劍岳と並び稱され、山腹の雄偉と岩石の怪奇とを以ては南アルプス中第一と稱せらる。山頂部の東南直下に名

北面は往時噴氣孔のありし所なるが今は崩壊せり。東北面に寄生火山あり、女目岳(一六三七米)と稱し、駒ヶ岳の最高峰にして、又秋田縣第一の高峰なり。この山の北面に爆發火口ありて片倉澤の上流に開き、一時は此處にて硫黄採掘せられたり。それより東北には湯ノ森山(一四七二米)・鳥帽子岳(一四七八米)等の火山連る。この山麓は針葉樹の混生林帯にして、七合目には鹿笹、八合目には白樺、山頂近くには楓松それぞれ成長す。又高山植物も繁茂し、特にこまき・むしとりすみれの大群落は天然記念物に指定せらる。山頂よりは展望は東方に葛根田川の谷を隔てて岩手山の秀麗なる姿を望み、その南東に宇石平野展開し、西方は眼下に田澤湖の明鏡の如く輝くを見、又遙か彼方に秋田の大平山及び庄内平野を望み、鳥海山をも眺む。この山最近四十四年間全く活動を休止せしが、昭和七年七月二十七日爆發し、九箇所の噴氣孔より噴煙を出す。附近山麓には温泉多く湧出す。登山路は奥羽本線大曲驛より分岐する生保内線の終點生保内より、田澤湖畔中生保内まで五軒、中生保内より森林帯を進み、女嶽を経て男岳の頂上に達す。女目岳へはそれより北東行す。又東方橋樑橋樑驛より岡見峠・岡見温泉を経て至る登山路もあり。

【駒ヶ岳】 會津駒ヶ岳とも云ふ。尾瀬沼の北方約一四軒に位置し、福島縣南會津郡崎枝村に峙つ山。標高二一三二米。この山勢北方に延びて、中門嶽を起し、南方に延びては、大津峠最高點(一九四五米)の峻峰に大杉嶽(一九二二米)を起す。西南斜面は北西流する只見川支流大津川源流地たり。東麓は北東流する槍枝川に限らる。山頂附近東南面は積雪の關係にて草地をなし、チンゲルマの群落を見る。他面はオホシラビソの林にて掩はる。尙頂上には四時雪を見る。山腹以下黒檜・榧松・榎木等茂る。山名は殘雪駒の形をなすより出づ。

【駒ヶ岳】 駒ヶ岳とも云ふ。箱根山の中央火口丘を形成する一峰。神奈川縣足柄下郡元箱根村にあり。標高約一三六〇米。北方の神山(一四三八・八米)、南方の上二子山(二〇九〇米)・下二子山(一〇六四米)と共に箱根山の中央火口丘を形成し、これ等の中最後に噴出せるものなり。山頂には二個の噴火口を見出す。西側に支武岩露出せり。又頂上には駒形権現の祠あり、因りて山名出づ。昔は般若ヶ峰とも稱せり。東麓に「仁治二年七月、曾都陸奥、爲三將軍家御使、參籠箱根山般若峰」とあり。山頂は北方に神山に連られ、眺望廣からずと雖も、西方に蘆ノ湖及び富士山・甲斐白峰等の高山巨峰を望見す。特に駒ヶ岳頂上より富士は駿河灣よりする表富士、甲州側よりする裏富士の如く單調に見ゆるに非ずして、左右前後に侍坐する眷屬の山々を接へ、

高き摩利支天の斷崖屹立し、その西方に六方石及び駒津岳の隆起あり。駒津岳は駒ヶ岳と北澤峠の最高點を結ぶ山稜線に當る。又北方尾白川本谷に望み、花崗岩の大障壁あり、南坊主山・北坊主山と稱せらる。坊主山の西方に烏帽子子岳(二五九三米)三ツ頭の隆起あり。三ツ頭は駒ヶ岳と御岳を結ぶ山稜上に位置す。山頂には巨岩聳立し、花崗岩の露出したる白砂は雪のごとき、僅松その間を點綴し、特にその南面は遠望すれば雪と誤るより、信州方面にては白崩山とも云ふ。また信州伊那谷にてはその西方なる木曾駒ヶ岳を西駒ヶ岳と稱するに對し、この山を東駒ヶ岳とも呼ぶ。山頂には駒ヶ岳神社の小祠及び文政年間登山路を開拓せる弘橋を祀る佛像立てり。高山植物も多く繁茂し、シヤクナゲの群落特に美し。この山古來信仰の山として知られ、登山は既に四五百年前より盛に行はれし爲、山體の輪廓なるにも關らず登山道拓け、登山設備も備はりて、近時登山の流行とともに益々完備せらるるに至る。登山路は甲州側と信州側より通ず。甲州側登山路は臺ヶ原口にて、中央本線日野春又は長坂驛下車、釜無川を渡り、日野春よりは六軒、長坂よりは四軒にして臺ヶ原に達す。臺ヶ原より西方へ約五軒にして駒ヶ岳神社前宮に着す。夫より尾白川を流れれば道は漸く急峻となり、二方に分る。一は右へ尾白川を渡り、溪谷美を探訪しつつ黒戸

山南方鞍部にある屏風小屋に出づるものと、その二は左へ急坂を登り、笠の平を経て黒戸山に至るものとあり。此附近白槍・唐槍の針葉樹美しく光輝も生育す。屏風小屋より急峻なる勾配を登れば約三軒にして七丈小屋に至り、それより頂上まで約二軒なり。伊那口は信州方面より登山路にして、中央線辰野驛より伊那電氣鐵道にて伊那町下車、夫より高遠町を経て黒河内まで一九軒、自動車便あり。黒河内より七軒にして戸臺に達し、戸臺川に沿ひ赤河原を経て北澤小屋まで一二軒、北澤峠・仙丈峠を経て横津峠の尾根を登り、一二軒にて山頂に達す。別に風凰山・仙丈岳方面より登山も可能なり。山頂よりの展望は雄大にして北は釜無川を取って八ヶ岳を望み、西方は伊那谷を隔てて木曾駒ヶ岳・北アルプスの連山・御城山等を指し、東北に秩父連山及び甲斐盆地を眺め、東方に風凰山の巨峯に接し、南方に富士山、南西に仙丈岳と相對し、南方に白雲三山より遠く南アルプスの連山を一時に収め景観甚だ雄大なり。【駒ヶ岳】 甲斐駒ヶ岳等に對し、木曾駒ヶ岳とも云ふ。又甲斐駒ヶ岳を東駒ヶ岳と云ふに對し西駒ヶ岳とも呼ぶ。この山は、東方に天龍川の流域伊那谷、西方に木曾川の流域木曾谷に限られ、南北一列に連なり、日本南アルプス(木曾山脈)の中央部に位置す。而してこの連嶺を駒ヶ岳山塊とも稱す。地域的に云へば、東側は

長野縣上伊那郡伊那町・宮田村・赤穂村・飯島村・七久保村に、西側は西筑摩郡穂川村・日義村・新開村・上松町・大桑村に互る。東斜面より源流する天龍川支流の大田切川・小黒川、西斜面より源流する伊那川・滑川等の木曾川支流の分水嶺にして、高度二〇〇〇米内外の諸峯連なり。駒ヶ岳山塊の北部は、標高最高點(一五二二米)・標高(二二九六米)を経て次第に丘陵状となりて松本平原端に達し、南方は遂に大平峠(一三五八米)を経て恵那山(一九〇米)に續く。駒ヶ岳山塊の山勢は東北東に向けたるH字型をなしてほぼ南北に走り、その北翼は茶臼山(二六五三米)・善峯頭・馬の背・本岳(二九五六米)を経て、木曾岳(二七二二米)に至り、その南翼は烏帽子山(二二二二米)より南岳(二八八三米)・寶劍岳(二九三三米)を経て、三澤岳(二八四六米)に及び、長さ六軒に及び、更に本岳より寶劍岳に至る一五軒の中軸あり。之を地質的に見れば、北方部が華頂山の北茶臼山以北は古生層より成り、それ以南は黒雲母花崗岩を主とし、往々巨晶花崗岩混在し、又寶劍岳附近は角閃岩を見る。花崗岩石は一般に粗粒質にて風化分解し易く、西麓木曾上松にある治部坂峠の山側に露出するもの等は砂状をなす。又風化浸蝕激しきため幾多の尖峯を作り、急峻なる溪谷によりて開割せられ、俗に三十六峯八千溪と稱せらる。又山麓には廣大なる扇状

地を形成す。氣候的に此山塊をみれば、この山地は北アルプスに比すれば積雪量著しく少けれど、本岳の東面及び寶劍岳の東側には七月にも尙殘雪を見る。降水量も二五〇mm以上に達し、森林を形成する要素十分なれば山麓山腹迄は大森林をなせど、中腹以上は傾斜急にして高山性氣象の故に森林成長せず。兩斜面の森林は皆御料林にて、東面のものは北部より黒川山御料林・赤穂御料林・駒ヶ岳御料林をなし、西面は東駒ヶ岳御料林・小川駒ヶ岳御料林・須原伊奈川御料林をなす。而して西斜面の森林は特に廣大にしてケヤキ・ナラ・トチ・ホノキの混交樹を主として、上部には針葉樹なるヒノキ・サハラ・アサナロ・ネズコ・コウヤマキ等の混交する木曾五木を初めとし、モミ・ツゲ・カラマツ等の寒帯針葉樹を生ず。高山植物には多くの珍品あり、ハハコヨモギ・ミヤマウスユキサワ・ハダセシナヅナ・オホサクラサウ、又種々なる石南花の群落を見る。前述の如くほぼ等高度の山峯林立するを以て山頂部は廣大にして平坦地多く、品々たる花崗砂は山頂を被ひ、濃緑の假松其間に點在し、高山植物咲き亂れ美觀を呈す。主峯本岳は長野縣西筑摩郡新開村・上松村と上伊那郡宮田村に跨りて峙ち、標高二九五六米にして南麓は寶劍岳、南東麓は前岳、北東麓は善峯頭に連る。頂上に駒ヶ岳神社の小祠

を祀る。山頂よりの展望は中部日本十州に互り、實に雄大にして、南北アルプスの雄峯は指呼の中にあり、又富士の麗峯を望む。又山頂の雲海は見事にして、晴天の朝これを見る。本岳の東方懸崖の下には雪溶けの清澄なる水を湛へし澗ヶ池あり、池の附近は高山植物美し。本岳の東南に續く寶劍岳は針の如く尖れる峯にて、その東面には千疊敷のカールあり前駒ヶ岳は空木岳とも稱せらる。その南方の南駒ヶ岳には大岩の聳立するあり。空木岳と南駒ヶ岳の東側にはカールに似る窪地あり。南方の越白山、北方の茶臼山は共に南北の前哨峯たり。駒ヶ岳の名稱の由来に就き種々の説あれど、東面に馬の形をなせる大岩あるを以てかく名付くとも云ひ、又雪の消えんとする際駒の形の殘雪あるに因むとも云ふ。登山史に就きては此山は山勢偉麗なるに關らず、昔は僅に山麓の農民雨乞のため登りしのみなりき。正徳元年の頃登山行はれしこと史實に見ゆれど、一般登山は天明以後と考へらる。東方高遠藩より差遣されし見廻り役の紀行文、藤原拾遺四十四巻及四十五巻に此山のこと見ゆ。現今は良き登山路作らるるに至り、西麓中央本線上松駒よりする上松口、北東麓伊那電氣鐵道伊那町よりする伊那町口の二途あり。上松口―中央本線上松駒下車、夫より駒ヶ岳頂上まで一八軒、早朝上松を出發すれば日歸りも可能にて、登山期中に四ヶ

所に小屋ありて宿泊その他の用を便す。伊那町―中央本線辰野驛より伊那電氣に乘換へ伊那町下車、それより西南八軒に當る内の登まで自動車便あり。内の登より山頂まで一二軒、伊那山岳會の建立による指導標ありて登山は比較的安易なり。本岳より前駒・南駒への登山は途中敷泊を要し、野營その他の準備を要す。【高麗】 武蔵國の舊郡名。明治二十九年入間郡に併合し、其の郡名を失ひしも元正天皇皇龜二年の建置なる故、實に千八百八十餘年武蔵の一郡なりき。和名抄は古末と訓じ、高麗・上總の二郡を置く。駿河・甲斐・相模・上總・下總・常陸・下野七ヶ國に互り散在せし歸化の高麗人千七百九十九人を武蔵へ遷し、入間郡の西南部を割きて高麗郡と名付く(續日本紀)。初め移住の本據は高麗村の本郷・新堀・精明村の青木の邊なりしもの如く、新堀に高麗大宮、俗に自能明神なる舊祠ありて高麗王を祀るといひ、聖天院の境内に王の首塚と稱するものあり。また郡中の諸村に大抵自能明神・大宮明神を祀る。南北朝時代にも高麗の某なるもの史上にその名見ゆ。然るに後世、飯能の郡の首邑になりしは、或は古の高麗の郡家なりしものならんともいふ。列乃(飯野)氏も高麗氏も共に武蔵七黨の中にその間に盛衰ありしもの如く思はる。郡界は時代によりて多少の異動ありたる

も、西南は多摩郡、西北は秩父郡に接しその他は入間郡より割きしものにして同郡へ編入せり。【高麗村】 埼玉縣武蔵國入間郡の中部。飯能町の北隣にあり、荒川の支流高麗川の上流に跨る。東は精明村・高麗川村・北は山根村、西は東野村と隣す。關東山脈の一支の東端を占め、北端に物見山(三七五米)、南端に多峰山(二七一米)(三七五米)、南端に多峰山(二七一米)あり、何れも村内に向ひて傾斜し、森林多し。高麗川東流す。川に沿ひて狭き窪地あり、桑畑をなし、米・麥、蕎麥を産す。武蔵野鐵道村の西南部に西北に走り、高麗驛・武蔵橋手驛(共に昭和四年設置)あり。この地は高麗川村・高萩村と共に和名抄、高麗郡高麗郷の地なるべし。靈龜二年高麗人この地に入りて新堀を中心として附近に散在し、高麗郡成り、高麗郷成り、高麗王と稱する家より高倉福信出でて頗る朝廷に用ひられ、武蔵國司とも成る。其高麗氏の家は代々續きて今に至れども、中古武蔵七黨圓の黨に高麗氏を稱するものあり、新堀村町田氏文書に見えたる高麗彦四郎經澄の如き是なり。高麗王系の高麗氏の外に丹黨の高麗氏あり。王系高麗氏の系圖乃至系統にも聊か説議すべきものあり。且つ高麗郷の本郷が高麗の居にあらずして、紀州熊野より來れりといふ。新堀氏に依て生じたる新堀が實に高麗人の守護神大宮神社の御座せる處にして、今も高麗氏の居なる如き

は注意すべき所なり。高麗氏の居地と大宮神社の社地と、更に高麗寺聖天院の寺地とが丘側の狹窄なる處に位置するが如きは、上古住居の一斑を示すものといふべし。小田原の頃、三田彈正少朝十五貫文給木の地及貫高不明橋手の地を知行し、松田左馬助二十貫文横手を知行せしと役帳に見えゆ。江戸時代には采地あり、支配地あり。中頃以後村の大部分一橋領となりしが、明治元年采地支配地は知縣事、同二年品川縣、並山縣となり、一橋領は同二年並山縣となり、同四年全村入間縣に入り、同六年熊谷縣、同九年埼玉縣、同十二年入間高麗郡投所轄(高麗郡)、同十七年十村聯合、同二十二年高麗村を成し、同二十九年入間郡に入る。大字新堀は村の東北部に位し、人家百餘。傳へいふ、古へ紀州熊野より新堀氏この地に來りて此所を開きし故、即ち村名となれり。いまも村民に其氏を稱するもの殘れり。有名な高麗彦四郎等に關する十四通の文書は宮田村松五郎氏の家に藏せり。大字高麗は新堀の西南に達し、東西八丁、南北又之に過ふ。新堀大宮の邊より地形頗る高きを以て高岡と稱すと。大字清流は高岡の西に達し、東西四町、南北二十餘町、村の南小名井戸神といふ處より古へ清泉湧出せし故新く名付けしと。大字高麗本郷は清流の西に連る。正保の國圖に高麗町と見え、元禄改定の圖に高麗本郷となれり。のち何れの頃よりか村

内を四組に分け、日向・市原・駒岳・高麗本郷とせり。大字榎木は村の東南部に...

を置く。若光居を此地に卜し、屬成郡臣多し群居す。のち漸く各地に散在して地...

水津川右岸にあり南方の水津町との間に上粕町を隔て、西は川を隔てて川西村に...

一間、單層、屋根切妻造、檜皮葺(今は棧瓦葺)、四方を開放せる簡素なる様式な...

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

コマイ コマカ

コマイ コマカ

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

【高麗】 ↓高麗

占めて要害の地たりしもの確なる文獻少し。明治二十九年八月東成瀬村と共に地

【駒形山】 福島縣耶麻郡駒形村に屬す。山の南面なる砂地馬に似るゆゑに山名あり。天正年間伊達政宗、磨上原の戦の後この山を降り、三橋の壘に據れり。三橋はいま駒形村の字なり。

【駒形村】 福島縣岩代郡耶麻郡の南部。鹽川町の東に隣り、西北は姥堂村に、東南は勢梯村に、西南は河沼郡堂島村・堂川村に隣る。勢梯山の西斜面に當り寄生火山扇ヶ峰(八三三米)東南端に聳ゆ。西部は土地低平にて會津盆地の東北縁に位す。

【駒形】 省線兩毛線の驛(明治二十二

年設置)。群馬縣勢多郡水瀬村小屋原にあり。

【駒形】 江戸淺草寺の雷門前の南方にありし駒形堂附近の稱。いま淺草區の廣小路と既橋通との間に、駒形町・駒形河岸の名稱残る。またこの地より隅田川に架せし新橋を駒形橋といふ。好色二代男・四「歸りに駒形の茶屋へよりて、打置の温

【駒形山】 越後山脈守門火山群に屬する一峯。新潟縣東蒲原郡西川村と南蒲原郡森町村との境界に跨り、南方近く福島縣南會津郡との境界東西に通ず。標高一〇七二米。南西斜面より阿賀野川支流厚谷川發源して北東流し、西方斜面は信濃川支流五十嵐川一上支の水源地たり。初夏

【駒形】 省線兩毛線の驛(明治二十二

此堂宇も建立ありしを記せり(新編ある者裏には、必ず駒の形を作り物にし

【駒形山】 駒ヶ岳(神奈川縣)の別稱。【駒形山】 越後山脈守門火山群に屬する一峯。新潟縣東蒲原郡西川村と南蒲原郡森町村との境界に跨り、南方近く福島縣南會津郡との境界東西に通ず。標高一〇七二米。南西斜面より阿賀野川支流厚谷川發源して北東流し、西方斜面は信濃川

【駒形】 省線兩毛線の驛(明治二十二

【駒形】 省線兩毛線の驛(明治二十二

の靈巖の山口に當り飛鳥戸(安宿郡)に屬し飛鳥と汎稱せしもの如く、今大字に飛鳥の名遺る。此地の東方の山を汎稱して飛鳥山といひしもの如く、其竹内越を越え大和國長尾に到る山路を古くは當伎摩羅といひ、北を経て大和に出づる近路の穴龜越を大坂道といひたり。書紀・履中記に仁德天皇崩じて履中天皇未だ即位せられざるに先ち皇弟吉仲皇子報して皇居を燒く。天皇難波を脱し將に飛鳥山を越え大和に至らんとす。山の入口に於て小女に遇ひ山中に兵あるを聞召され、大坂越を避け當伎摩羅を経て大和に入らせ給ふ。仲皇子討伐の命を受けし皇弟瑞首別命(のち反正天皇)は仲皇子の近臣半人刺額布(古事記には曾婆河理)に重賞を與へて仲皇子を殺さしめ、これを大坂の山口に埋へて酒宴を張り、大坂より刺額布の隊に乘じてこれを斬り給ふと見ゆ。また古事記には大和の飛鳥に對し此地を近飛鳥と呼びしとあり。古くに飛鳥戸の居住せる處か。いま飛鳥神社あり、貞觀二年十月官社に列せられし古社にして飛鳥戸造百寶宿禰の祖魂夜主を祀る。駒ヶ谷一帯の地は、古へ源氏の領地にて、館合累代この地にあり。源賴義として深中に觀音像を得、精舎を作りて之を祀り寺を通法寺と號し、後源氏と共に衰頹せし徳川綱吉の祖廟の故を以て再興したりしも、今復た荒涼を極む。頼信・頼義・義家の墓と傳ふるもの寺の周圍盛にて、その間屋たりし關戸氏の如きは「命が成るとまで形容せられたりといふ、もつて繁昌の狀を知るべし。大字中鹿山は上鹿山の東北に連る。大字下鹿山は中鹿山の東北に位す。大字旗田は上鹿山の西に位す。大字野々宮は旗田の西北、村の西隅に位す。大字平澤は上下鹿山は村の北部を占む。もと一村にて、元祿二年新開地田波目を併せ、のち元文三年代官田中休藏支配の時より、上中下三組として、且つ田波目を分離せし、三組常に領主を同じくし、密接の關係を保てり。大字田波目は平澤の東、村の東北端にあり。元平澤に屬せし原野にして、寛文八年坪井次右衛門檢地せり。元文三年平澤村より割かれ、當時上田波目と稱し、大村多和目(下多和目)と區別せしが何時の頃よりか上の字を割れり。大字原宿は平澤の南、鹿山の北にあり。大字新堀新田は原宿の東に接す。享保十一年の檢地にして、文化の頃戸數一、山田村小久保教實院配下の修驗實藏院居住し、此地を支配したりき。

【コマカ】 小真木 ↓毛馬内町(秋田縣鹿角郡) 【コマキ】 小牧 ↓愛知縣尾張國東春日井郡の西北隅。一宮市の東方一二軒、名古屋市の北方一五軒の地。北は丹羽郡布袋町・大口村に、東は味岡村に、南は豊津村・勝川町及び西春日井郡豊山村に、西は西春日

【コマカ】 小真木 ↓毛馬内町(秋田縣鹿角郡) 【コマキ】 小牧 ↓愛知縣尾張國東春日井郡の西北隅。一宮市の東方一二軒、名古屋市の北方一五軒の地。北は丹羽郡布袋町・大口村に、東は味岡村に、南は豊津村・勝川町及び西春日井郡豊山村に、西は西春日

【コマカ】 小真木 ↓毛馬内町(秋田縣鹿角郡) 【コマキ】 小牧 ↓愛知縣尾張國東春日井郡の西北隅。一宮市の東方一二軒、名古屋市の北方一五軒の地。北は丹羽郡布袋町・大口村に、東は味岡村に、南は豊津村・勝川町及び西春日井郡豊山村に、西は西春日

コマガミネ 駒ヶ嶺村

福島縣磐城郡馬郡の東北端。中村町の北方約三軒、北は新地村に、南は大野村に、西は伊具郡大内村に各隣接し、東南の一部は太平洋に臨む。西境に鹿山(四三〇米)の山嶺南北に連り山脚東に延びて北部は山地をなすも東南部は低地をなす。西部山地に發する小川は東南に流れ低地を潤し東南部にある新沼浦に注ぐ。低地に灌溉の利多く水田よく拓け、米・蕎麥を主産す。省線常磐線東部を南北に通じ中村驛(中村町)に近く、國道陸前濱街道これに沿うて走り、西部には之より分岐し西北

【コマカ】 小真木 ↓毛馬内町(秋田縣鹿角郡) 【コマキ】 小牧 ↓愛知縣尾張國東春日井郡の西北隅。一宮市の東方一二軒、名古屋市の北方一五軒の地。北は丹羽郡布袋町・大口村に、東は味岡村に、南は豊津村・勝川町及び西春日井郡豊山村に、西は西春日

コマカワ 高麗川村

福島縣武蔵郡入間郡の中部。飯能町の東北方。同町との間に高麗村を挟む。南は精明村、東は高萩村、北は大家村・山根村と隣す。關東山脈の一支脈の東麓を占め、村の西端には物見山(三七五米)ありて村内に傾斜し、又南部にも一〇〇米餘の山地あり。中央部は平地にして桑畑多く、南の飯能町より縣道來り、之に沿ひて八高線村の中央を北走し、高麗川驛(昭和八年

【コマカ】 小真木 ↓毛馬内町(秋田縣鹿角郡) 【コマキ】 小牧 ↓愛知縣尾張國東春日井郡の西北隅。一宮市の東方一二軒、名古屋市の北方一五軒の地。北は丹羽郡布袋町・大口村に、東は味岡村に、南は豊津村・勝川町及び西春日井郡豊山村に、西は西春日